

独立行政法人
国立精神・神経医療研究センター
精神保健研究所

精神保健研究所年報

第24号（通巻57号）

平成22年度

National Institute of Mental Health
National Center of Neurology
and Psychiatry

— 2011 —

独立行政法人
国立精神・神経医療研究センター
精神保健研究所年報
第 24 号（通巻 57 号）

平成 22 年度

National Institute of Mental Health
National Center of Neurology
and Psychiatry
—2011—



「国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所 平成23年5月23日」

巻 頭 言

精神保健研究所、通称「精研」の平成 22 年度年報をお届けいたします。平成 22 年度は「精研」が国立精神・神経センターの研究機関から、独立行政法人国立精神・神経医療研究センターの研究機関へと組織形態が変更された年でした。精研は 1950 年に制定された精神衛生法に基づいて 1952 年に市川市国府台の地に国立精神衛生研究所として設立され、1986 年には国立精神・神経センターの一翼をなす研究所として精神保健研究所の名称で生まれ変わり、2005 年の小平市への移転を経て、三たびの生まれ変わりを果たしました。制度が変わっても設立の当初から掲げられた、国民の精神保健福祉向上のための研究を旨とし、精神保健の専門家の研修を行うという当研究所のミッションは引き続き、研究の柱となっています。このため変更されたシステムのなかで患者さんやご家族、そして国民のための研究の成果を上げるべく所員が邁進する日々が続いています。そしてこれまで以上に新しい領域への挑戦や要望も加わり、新しい研究手法の導入も積極的に行って、精研の研究への活力は増しており、小平キャンパスから加わった若い研究者の中には優れた業績を世の中に示し、それぞれの領域での重要な賞を受賞する者も現れています。これは若い研究者の意欲をはぐくみ、激励している指導者の **mentor** 力なしにはありえないことで、精研の研究活動のさらなる発展を予感させるものとなっています。

平成 22 年度末になりますが、3 月 11 日の金曜日 14 時 46 分に、三陸沖を震源とするマグニチュード 9.0 の巨大地震が発生し、ここ小平の地でもかつて感じたことのない揺れがありました。地震や大津波による物理的・人的被害と福島原子力発電所の損壊状況はいまだ全貌が明らかにされないほどです。5 月末の段階で、東日本大震災による死者行方不明者は合計 27,000 人を超え、避難者も 165,000 人を超えています。わたしたち精研では長年にわたって、自然災害や犯罪など人災に際して、被害者や支援者のメンタルヘルスを維持し、支援するための研究が行われてきたこともあり、大震災発生直後からその専門性を生かした長期的支援に向けて、活動を継続してきました。最初の対応は被災者、支援者に向けたホームページの作成でした。国立精神・神経医療研究センターのトップページへの掲載準備は成人精神保健研究部を中心に全研究部が持てる力を結集して行い、長期的な追加改訂を行っております。このほか被災県におけるメンタルヘルス支援計画への支援を含めて目に見えるところ、見えないところをともに気遣いながら支援の継続を考えていくつもりです。

今年度精研職員の親睦会である青申会では、3 匹の青い申ならぬ、青い三賢猿をマスコットとして採用しました。よく見、よく聞き、よく話す青くてかわいいお猿さんたちの姿勢にならって、新しい時代、新しい制度においても、病気を持つ人々や様々なストレスに遭遇されている方、そのご家族を支え、国民に貢献する研究を所員一同が頑張るって行って参ります。

各部の昨年度の学術活動や国民への貢献につきまして本誌をご参照いただけますように、また今後の精研の研究、活動につきみなさまのご指導ご鞭撻を賜りますようよろしくお願い致します。

平成 23 年 8 月 吉日

国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所
所長 加我牧子

目 次

I . 精神保健研究所の概要	1
1. 創立の趣旨及び沿革	1
2. 内部組織改正の経緯	7
3. 国立精神・神経センター組織図	9
4. 職員配置	10
5. 精神保健研究所構成員	11
II . 研究活動状況	15
1. 精神保健研究所所長室	15
2. 精神保健計画研究部	22
3. 薬物依存研究部	38
4. 心身医学研究部	60
5. 児童・思春期精神保健研究部	70
6. 成人精神保健研究部	81
7. 精神薬理研究部	98
8. 社会精神保健研究部	105
9. 精神生理研究部	113
10. 知的障害研究部	127
11. 社会復帰研究部	139
12. 司法精神医学研究部	150
13. 自殺予防総合対策センター	162
III . 研修実績	191
IV . 平成 22 年度精神保健研究所研究報告会抄録	217
V . 平成 22 年度委託および受託研究課題	241
VI . 平成 22 年度精神保健研究所取材一覧	257
VII . 平成 22 年度公的機関を中心とした 常勤研究者の社会貢献より抜粋	260

I 精神保健研究所の概要

1. 創立の趣旨及び沿革

I. 創立の趣旨

本研究所は、精神衛生に関する諸問題について、精神医学、心理学、社会学、社会福祉学、保健学等各分野の専門家による学際的立場からの総合的、包括的な研究を行うとともに、国、地方公共団体、病院等において精神衛生業務に従事する者に対する精神衛生全般にわたる知識、技術に関する研修を行い、その資質の向上を図ることを目的として、昭和27年1月、アメリカのNIMHをモデルに厚生省の付属機関として設立された。

II. 精神衛生研究所の沿革

昭和25年に精神衛生法が制定された際、国立精神衛生研究所を設立すべき旨の国会の附帯決議が採択された。これを踏まえ、厚生省設置法及び厚生省組織規程の一部が改正され、昭和27年1月、千葉縣市川市に国立精神衛生研究所が設置された。

研究所の規模について、当初、厚生省は、1課8部60名程度の組織を構想していたが、財政事情等により、総務課、心理学部、生理学形態学部、優生学部、児童精神衛生部及び社会学部の1課5部30名の体制で発足した。また、附属病院をもつことの重要性は、当時から認識されていたが、病院の新設は困難な情勢であったため、隣接する国立国府台病院と連携、協力することとされた。

その後、知的障害に対する対策の確立が社会的に求められるようになったことを受け、昭和35年10月1日、新たに精神薄弱部を設置するとともに既存の各部の再編と名称変更が行われた。この結果、研究所の組織は、総務課、精神衛生部、児童精神衛生部、社会精神衛生部、精神身体病理部、精神薄弱部及び優生部の1課6部となった。

昭和36年には、国立精神衛生研究所組織細則が制定され、部課長のもとに心理研究室、生理研究室、精神衛生相談室及び精神衛生研修室の4室が置かれた。それとともに、昭和35年1月から事実上行われていた精神衛生技術者に対する研修業務が厚生省設置法上の業務として加えられて医学科、心理学科、社会福祉学科及び精神衛生指導科の研修が開始されることとなり、研修業務が調査研究と並ぶ研究所の重要な柱として正式に位置づけられることとなった。

昭和40年には、地域精神医療、社会復帰対策の充実等を内容とする精神衛生法の大改正に伴い、社会復帰部が新設されるとともに、新たに精神発達研究室及び主任研究官（3名）が置かれた。また、昭和46年6月には、社会精神衛生部にソーシャルワーク研究室が設置された。さらに、昭和48年には、人口の高齢化に伴って、痴呆性老人等いわゆる「恍惚の人」が社会問題化したのを背景に、老人精神衛生部が、翌昭和49年には、同部に老化度研究室が新設された。

昭和50年には、精神衛生に関する相談が精神障害者の社会復帰と深く関連することから、社会復帰部を社会復帰相談部に改組、精神衛生相談室を同部に移管した。また、昭和53年12月には、社会復帰相談庁舎が完

成し、精神衛生相談をはじめとする精神障害者の社会復帰に関する研究体制が強化された。昭和54年には、研修各科の名称が医学課程、心理学課程、社会福祉学課程及び精神衛生指導課程に改称されるとともに、新たに精神科デイ・ケア課程が新設された。翌昭和55年には、研修庁舎が完成し研修業務の一層の充実が図られた。

Ⅲ. 国立精神・神経センター精神保健研究所の設立

国立精神衛生研究所は、このような着実な歩みをたどった後、昭和61年10月、国立武蔵療養所及び同神経センターとともに国立高度専門医療センターとして発足した国立精神・神経センターに発展的に統合された。ここに、国立精神・神経センター精神保健研究所は、国立高度専門医療センターの一研究部門として、精神保健に関する研究及び研修を担うこととなった。その際組織改正により、総務課が庶務課とされ、精神身体病理部と優生部が統合されて精神生理部とされたほか、精神保健計画部及び薬物依存研究部が新設された。その結果、統合前の1課8部8室は、1課9部19室となり、研究・研修機能の強化が図られた。

半年後の昭和62年4月には、国立精神・神経センターに国立国府台病院が統合され、二病院二研究所を擁する国立高度専門医療センターが本格的に活動を開始した。これに伴い、庶務課は廃止され、精神・神経センター運営部（国府台地区）に研究所の事務部門（主幹、研究所事務係）が置かれた。また、同年10月には、心身医学研究部の新設と精神保健計画部システム開発研究室の増設が認められ、平成元年10月には、社会復帰相談部に援助技術研究室が設置された。

さらに、平成11年4月には、精神薄弱部が知的障害部に名称変更されるとともに、薬物依存研究部が組織改正により、心理社会研究室、依存性薬物研究室、診断治療開発研究室の3室編成となった。

平成14年1月に精神保健研究所が創立50周年を迎え、創立50周年パーティの開催、記念誌の発行、公開市民シンポジウムを行った。

平成15年10月には司法精神医学研究部が新設され、3室体制で、研究員の増員も認められ、研究所の組織は、11部27室体制（精神保健研修室を含む）となった。

平成17年4月には精神保健研究所は小平（武蔵）地区に移転し研究活動を開始した。

平成18年10月には自殺予防総合対策センターの新設により、自殺実態分析室・適応障害研究室・自殺予防対策支援研究室の3室と、成人精神保健部に犯罪被害者等支援研究室・災害時等支援研究室の2室の増設が認められた。

平成21年6月に精神保健に関する技術研修の事務担当が政策医療企画課から研究所事務係へと移管され、また10月に成人精神保健部に臨床病態生理研究室が設置され3室編成となり、研究所の組織は11部33室（精神保健研修室含）となった。

Ⅳ. 独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所へ改組

国民の健康に重大な影響のある特定の疾患等に係る医療に関し、調査、研究及び技術の開発並びにこれらの業務に密接に関連する医療の提供、技術者の研修等を行う独立行政法人の名称、目的、業務の範囲等に関する事項を定めることを目的とした、「高度専門医療に関する研究等を行う独立行政法人に関する法律」の施行により、それまでのナショナルセンター6組織が平成22年4月1日に独立行政法人化された。

我が国立精神・神経センターは「精神疾患，神経疾患，筋疾患及び知的障害その他の発達の障害に係る医療並びに精神保健」を担当する「独立行政法人国立精神・神経医療研究センター」となり，精神保健研究所も内部の組織が改正された。

自殺予防総合対策センターは，自殺実態分析室，適応障害研究室，自殺予防対策支援研究室の3室編成。
精神保健計画部は，精神保健計画研究部へ名称変更され，統計解析研究室，システム開発研究室の2室編成。
薬物依存研究部は，心理社会研究室，依存性薬物研究室，診断治療開発研究室の3室編成。
心身医学研究部は，ストレス研究室，心身症研究室の2室編成。

児童・思春期精神保健部は児童・思春期精神保健研究部へ名称変更され，精神発達研究室，児童期精神保健研究室，思春期精神保健研究室の3室編成。

成人精神保健部は，成人精神保健研究部へ名称変更され，精神機能研究室，診断技術研究室，認知機能研究室，犯罪被害者等支援研究室，災害等支援研究室の5室編成。

老人精神保健部は，精神薬理研究部へ名称変更され，精神薬理研究室，気分障害研究室の2室編成。

社会精神保健部は，社会精神保健研究部へ名称変更され，社会福祉研究室，社会文化研究室，家族・地域研究室の3室編成。

精神生理部は，精神生理研究部へ名称変更され，精神生理機能研究室，臨床病態生理研究室の2室編成。

知的障害部は，知的障害研究部へ名称変更され，診断研究室，治療研究室，発達障害支援研究室の3室編成。

社会復帰相談部は，社会復帰研究部へ名称変更され，精神保健相談研究室，援助技術研究室の2室編成。

司法精神医学研究部は，制度運用研究室，専門医療・社会復帰研究室，精神鑑定研究室の3室編成。

以上自殺予防総合対策センター及び11部，計33室となった。

また，研究所の事務部門は，主幹が研究所事務室長となり，研究所事務係とともに，研究所の所属となった。

沿 革

年次	事項	所 長	組 織 等 経 過
昭和25年5月			精神衛生法国会通過（精神衛生研究所設置の附帯決議採択）
26年3月			厚生省公衆衛生局庶務課が設置の衝にあたる
27年1月		黒沢良臣 (国立国府台病院長兼任)	厚生省設置法並びに組織規程の一部改正により精神衛生に関する調査研究を行う附属機関として，千葉県市川市に国立精神衛生研究所設置総務課，心理学部，生理学形態学部，優生学部，児童精神衛生部及び社会学部の1課5部により業務開始

35年10月		心理学部を精神衛生部に，社会学部を社会精神衛生部に，生理学形態学部を精神身体病理部に，優生学部を優生部に名称変更し，精神薄弱部を新設
36年4月 6月	内村 祐之	精神衛生研修室，心理研究室，精神衛生相談室及び生理研究室を新設 厚生省設置法の一部改正により精神衛生技術者の研修業務が追加され，医学科，心理学科，社会福祉学科及び精神衛生指導科の研修開始
37年4月	尾村 偉久 (公衆衛生局長が 所長事務取扱)	
38年7月	若松 栄一 (公衆衛生局長が 所長事務取扱)	
39年4月 40年7月	村松 常雄	主任研究官を置く 社会復帰部及び精神発達研究室を新設
41年7月		本館改築完成（5カ年計画）
44年4月		総務課長補佐を置く
46年6月	笠松 章	ソーシャルワーク研究室を新設
48年7月		老人精神衛生部を新設
49年7月		老化度研究室を新設
50年7月		社会復帰部を社会復帰相談部に名称変更 精神衛生相談室を精神衛生部から社会復帰相談部の所属に改正
52年3月	加藤 正明	
53年12月		社会復帰相談庁舎完成（2カ年計画）
54年4月		研修課程の名称を医学課程，心理学課程，社会福祉学過程及び精神衛生指導課程に名称変更し，精神科デイ・ケア課程を新設

55年4月		研修庁舎完成（講義室・図書室・研修生宿舎）
58年1月 58年10月	土居健郎	老人保健研究室を新設
60年4月	高臣武史	
61年5月		厚生省設置法の一部改正により，国立高度専門医療センターの設置を決定 厚生省組織令の一部改正により，国立高度専門医療センターの名称と所掌事務が決定 国立高度専門医療センターの一つとして，国立武蔵療養所，同神経センターと国立精神衛生研究所を統合し，国立精神・神経センター設置 ナショナルセンターの1研究所として精神保健研究所に改組，精神身体病理部と優生部を統合し精神生理部としたほか，精神保健計画部及び薬物依存研究部を新設，1課9部19室となる
62年4月	島 蘭 安 雄 (総長が所長事務取扱)	厚生省組織規程の一部改正により，国立精神・神経センターに国立国府台病院が統合し，2病院，2研究所となる 庶務課廃止，研究所に主幹を置く
6月 62年10月	藤 縄 昭	心身医学研究部（2室）と精神保健計画部システム開発研究室を新設
平成元年10月		社会復帰相談部に援助技術研究室を新設
6年4月	大 塚 俊 男	
9年4月	吉 川 武 彦	
11年4月		薬物依存研究部で研究室の改組があり，心理社会研究室と依存性薬物研究室となり，診断治療開発研究室を新設 精神薄弱部を知的障害部に名称変更
13年1月 14年1月	堺 宣 道	精神保健研究所創立50周年
14年6月 14年8月	高 橋 清 久 (総長が所長事務取扱) 今 田 寛 睦	

15年10月		司法精神医学研究部を新設（制度運用研究室，専門医療・社会復帰研究室，精神鑑定研究室）
16年4月	金澤一郎 （総長が所長事務取扱）	
16年7月	上田茂	
17年4月		市川市（国府台）から小平市（武蔵地区）に移転
17年8月	北井 暁子	
18年10月		自殺予防総合対策センターの新設（自殺実態分析室，適応障害研究室，自殺予防対策支援研究室），成人精神保健部の増設（犯罪被害者等支援研究室，災害時等支援研究室）
19年6月	加我 牧子	
21年10月		精神生理部に臨床病態生理研究室を新設
22年7月		所長補佐の新設（和田 清）

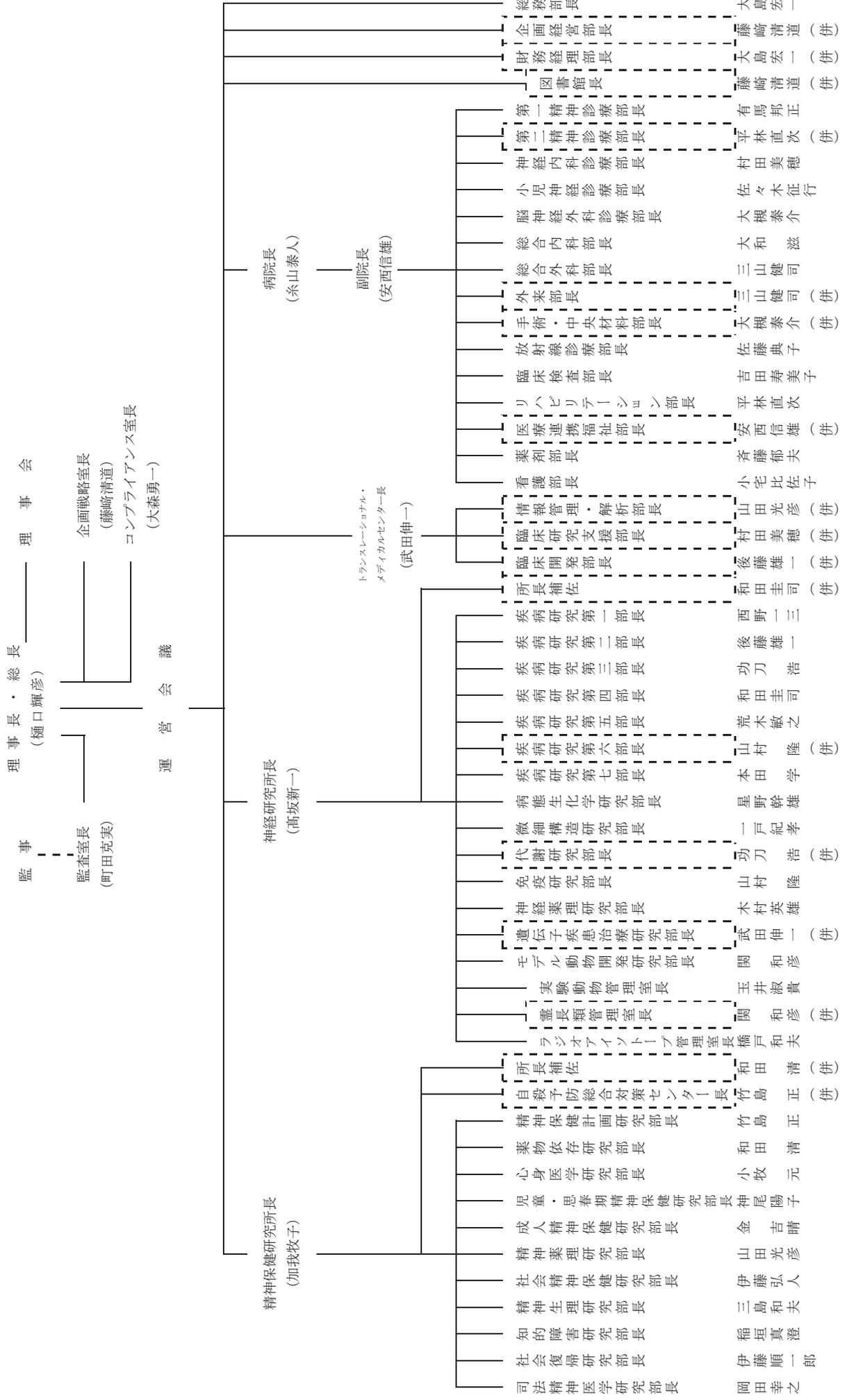
2. 内部組織改正の経緯

国立精神衛生研究所											国立精神・神経センター精神保健研究所										独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所	
創立昭和27年1月	35年10月	36年6月	40年7月	46年6月	48年7月	49年7月	50年7月	54年4月	58年10月	61年4月	61年10月	62年4月	62年10月	元年10月	11年4月	13年4月	15年10月	18年10月	20年6月	21年10月	平成22年4月	
総務課	→	総務課 精神衛生研修室 (6月)								総務課 精神衛生研修室	庶務課 精神衛生研修室	運営部庶務第二課 精神保健研修室	運営部庶務第二課 運営部企画室 精神保健研修室			運営部政策医療 企画課 精神保健研修室		運営局 政策医療企画課 精神保健研修室	運営局 政策医療企画課 精神保健研修室 庶務課 研究所事務係		研究所事務室 研究所事務係	
											精神保健計画部 統計解析研究室		精神保健計画部 統計解析研究室 SFA開発研究室					精神保健計画部 統計解析研究室 SFA開発研究室 (自殺予防総合対策センター) 自殺実態分析室 適応障害研究室 自殺予防対策支援研究室			精神保健計画研究部 統計解析研究室 SFA開発研究室 (自殺予防総合対策センター) 自殺実態分析室 適応障害研究室 自殺予防対策支援研究室	
											薬物依存研究部 薬物依存研究室 向精神薬研究室		薬物依存研究部 薬物依存研究室 向精神薬研究室			薬物依存研究部 心理社会研究室 依存性薬物研究室 診断治療開発研究室		薬物依存研究部 心理社会研究室 依存性薬物研究室 診断治療開発研究室			薬物依存研究部 心理社会研究室 依存性薬物研究室 診断治療開発研究室	
心理学部	精神衛生部	精神衛生部 心理研究室 精神衛生相談室 (4月)					精神衛生部 心理研究室			精神衛生部 心理研究室			心身医学研究部 ストレス研究室 心身症研究室					心身医学研究部 ストレス研究室 心身症研究室			心身医学研究部 ストレス研究室 心身症研究室	
児童精神衛生部	→	児童精神衛生部 精神発達研究室								児童精神衛生部 精神発達研究室	児童・思春期精神保健部 精神発達研究室 児童期精神保健研究室 思春期精神保健研究室		児童・思春期精神保健部 精神発達研究室 児童期精神保健研究室 思春期精神保健研究室					児童・思春期精神保健部 精神発達研究室 児童期精神保健研究室 思春期精神保健研究室			児童・思春期精神保健研究部 精神発達研究室 児童期精神保健研究室 思春期精神保健研究室	
					老人精神衛生部	老人精神衛生部 老化研究室			老人精神衛生部 老化研究室 老人保健研究室	老人精神衛生部 成人精神保健部 成人精神保健研究室 診断技術研究室 心理研究室			成人精神保健部 成人精神保健研究室 診断技術研究室 心理研究室					成人精神保健部 成人精神保健研究室 診断技術研究室 心理研究室 犯罪被害者等支援研究室 災害等支援研究室			成人精神保健研究部 精神機能研究室 診断技術研究室 認知機能研究室 犯罪被害者等支援研究室 災害等支援研究室	
										老人精神保健部 老化研究室 老人保健研究室			老人精神保健部 老化研究室 老人精神保健研究室					老人精神保健部 老化研究室 老人精神保健研究室			精神薬理研究部 精神薬理研究室 気分障害研究室	
社会学部	社会精神衛生部			社会精神衛生部 ソーシャルワーク研究室						社会精神衛生部 ソーシャルワーク研究室	社会精神保健部 社会福祉研究室 社会文化研究室 家族・地域研究室		社会精神保健部 社会福祉研究室 社会文化研究室 家族・地域研究室					社会精神保健部 社会福祉研究室 社会文化研究室 家族・地域研究室			社会精神保健研究部 社会福祉研究室 社会文化研究室 家族・地域研究室	
生理学形態学部	精神身体病理部	精神身体病理部 生理研究室 (4月)								精神身体病理部 生理研究室	精神生理部 精神機能研究室		精神生理部 精神機能研究室					精神生理部 精神機能研究室		精神生理部 精神機能研究室 臨床病態生理研究室		精神生理研究部 精神生理機能研究室 臨床病態生理研究室
薬生学部	薬生学部									薬生部												
	精神薄弱部									精神薄弱部 診断研究室 治療研究室	精神薄弱部 診断研究室 治療研究室		精神薄弱部 診断研究室 治療研究室			知的障害部 診断研究室 治療研究室		知的障害部 診断研究室 治療研究室			知的障害研究部 診断研究室 治療研究室 発達障害支援研究室	
			社会復帰部				社会復帰相談部 精神衛生相談室			社会復帰相談部 精神衛生相談室	社会復帰相談部 精神保健相談研究室		社会復帰相談部 精神保健相談研究室	社会復帰相談部 精神保健相談研究室 援助技術研究室				社会復帰相談部 精神保健相談研究室 援助技術研究室			社会復帰研究部 精神保健相談研究室 援助技術研究室	
																	司法精神医学研究部 制度運用研究室 専門医療・社会復帰研究室 精神鑑定研究室	司法精神医学研究部 制度運用研究室 専門医療・社会復帰研究室 精神鑑定研究室			司法精神医学研究部 制度運用研究室 専門医療・社会復帰研究室 精神鑑定研究室	

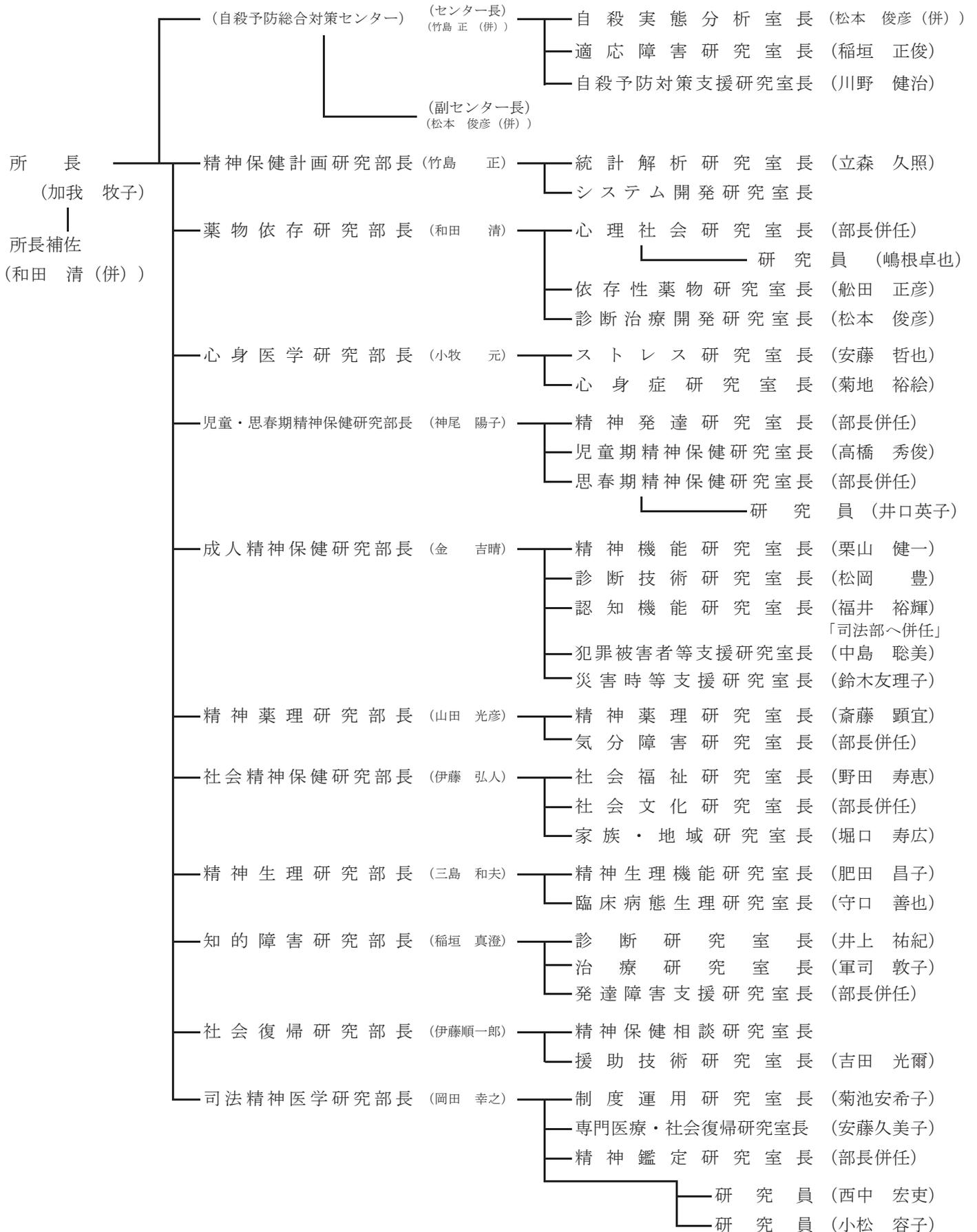
3. 独立行政法人国立精神・神経医療研究センター組織図

(平成23年3月31日現在)

は併任



4. 職員配置 (平成22年 3月31日現在)



5. 精神保健研究所構成員(平成22年度)

所長	秘書長 笹 和紀・副秘書長 藤子・太田 玲子(～22.7.1)															
	加我 俊子	部長	部長	部長	研究員	活動研究員	非常勤研究員 科研究員	外来研究員	客員研究員	協力研究員	科研究員	センター研究助手	併任研究員	研究生	実習生	研究員上
自殺予防総合対策センター	*センター長 (併任) 竹島 正	川野 健治 稲垣 正俊 松本 俊彦 副センター長 (併任) (22.5.16～) 松本 俊彦	立森 久照	藤子 玲子 (22.4.1～) 赤澤 正人 趙 香花	大槻 露華 山内 典史 勝又陽太郎 川島 大輔	莊島 幸子 (～23.3.31) 小山明日香 (22.4.1～) 河野 聡明	清田 晃生 桑原 寛 助川 征雄 高橋 祥友 橋本 康男 松本 晃明 渡邊 直樹 (～23.3.31) 藤田 利治	亀山 晶子 (～22.5.31) 川島 大輔 (22.4.1～～23.3.31) 木谷 雅彦 (～23.3.31) 横山由香里	佐藤 徹子 (22.7.1～) 橋 聡子	八重樫 弘子 (22.4.23～) 瀧澤 さなえ					増田 久重 (22.4.1～) 長島 弥生	
精神保健計画研究部	竹島 正			藤川 聖子 (22.4.1～) 赤澤 正人 趙 香花												西口 直樹 ソウ 原 治子 (～22.5.31) 山内 貴史 (～22.6.30) 橋 聡子
薬物依存研究部	和田 清	松田 正彦 (～22.5.15) 松本 俊彦(併任) (22.5.16～) 松本 俊彦	嶋根 卓也	富山 健一 (22.4.1～) 小堀 栄子												佐藤 美緒 青尾 直也 高野 歩
心身医学研究部	小牧 元	安藤 哲也 (22.4.1～) 菊地 裕絵		兒玉 直樹 (22.4.1～) 長谷部 智子												倉 五月 倉 尚樹 小出 将即 梅松 文子 高橋 晶 辻 裕美子 山田久美子 藤川 哲也 (22.8.1～) 足立 洋希 (22.10.1～) 小原 千郷
児童・思春期精神保健研究部	神尾 陽子	(～22.9.30) 小山 智典 (23.2.1～) 高橋 秀俊	井口 英子	森脇 愛子 (22.4.1～) 片桐 正敏												(22.10.1～) 橋本 邦子

部名	部長	委員長	研究員	流動研究員	非常勤研究員		外來研究員	客員研究員	協力研究員	科研究員	科研究員	センター研究員	兼任研究員	研究員	実習生	研究員上
					非常勤研究員	科研究員										
成人精神保健研究部	金 吉晴	中島 聡美 松岡 豊 鈴木友理子 栗山 健一 福井 裕輝 (印旛精神医学研究部併任)	松村 健太 (22.4.1～) 本間 元康 (22.4.1～) 岡島 純子	伊藤 正哉 袴田 優子	松田 博史 宇野 正威 加茂登志子 小西 聖子 宮地 光恵 下山 晴彦 Charles Marmar 鈴木 伸一 Sarbjit Singh Johal	北山 德行 堤 敬明 白井 明美 原 恵利子 石丸登一郎 井筒 節 西 大輔 松岡 恵子 柳田 多美 寺島 瞳 深澤 舞子 曾嶋 崇弘 正木 智子 西多 昌規 (22.7.1～) 成澤 知美 (22.10.1～) 藤井 猛	柏井 美穂 (22.5.1～) 小山 さより (22.7.1～) 大関 千春 佐野 恵子 茂木 香子 (22.12.1～) 鈴木 春香	丸山 京子 水野 恵子 (22.4.23～) 三ツ 紀子 (22.11.15～) 石田 牧子 加藤 典子 (22.12.2～) 千葉 菜生		渡谷美穂子 島崎みゆき 江口佐和子 小林 由季 茂木 香子 高岡 昂太 野口 華子 中澤佳奈子 佐野 恵子 伊藤 大輔 松崎 陽子 永井めぐみ 臼杵 理人 (22.8.1～) 堀江美智子 加藤 知子 栗田 真里 (22.10.1～) 工藤 紗弓 中島 俊 (22.11.1～) 荒川和歌子 奥山 紗由 (22.11.15～) 石田 牧子 加藤 典子 (22.12.1～) 伊藤まどか 伊東 史エ (22.12.15～) 小暮 由美	(22.10.1～) 足立真穂子 木村真貴子	深澤 舞子 内海 知子				
精神薬理研究部	山田 光彦	高藤 顕宣	若井 孝志 (22.4.1～) (22.5.31) 大槻 露華 (22.9.1～) 高橋 弘	(22.7.31) 小高 真美	白川修一郎 長田 賢一 亀井 淳三 林 直樹 岡 淳一郎	宮田 茂雄 (22.7.7) 山田 美佐 (22.8.31) 高橋 弘	松谷真由美 村松 浩美 (22.7.1～) 櫻井 恭子 越阪部勝江 関根 陽子	渡邊 恭江 杉山 梓 中井 亜弓 遠藤 香 田島 美幸 高原 田 西岡玄太郎 廣瀬 倫孝 本屋敷美奈	米本 直裕	牧野 祐哉						
社会精神保健研究部	伊藤 弘人	堀口 寿広 野田 寿恵	池野 敬 (22.4.1～)	奥村 泰之	平田 豊明 川畑 俊貴 杉山 直也 末安 民生 佐藤 洋 (22.12.1～)	桑原 和江 (22.4.1～6.30) 清水沙友里	村田江里子 原 わかひな 江頭 綾佳 熊谷 珠樹	山縣真美子 稲井由紀子					三澤 史香 藤田 純一 兼山 智佳 (23.3.31) 小山 達也 西田 淳志 市倉加奈子 松岡 志帆 (22.4.1～23.3.31) 安齋 達彦 本田 真紀 (22.5.17～22.6.30) 内山 直樹 (22.9.1～23.3.31) 福内 友子 (22.9.13～) 五十嵐涼子			

部名	部長	室長	研究員	流動研究員	非常勤研究員		外來研究員	客員研究員	協力研究員	科研究員	科研究員	センター研究助手	併任研究員	研究員	実習生	研究員上
					非常勤研究員	科研究員										
精神生理研究部	三島 和夫	肥田 晶子 守口 肇也		北村 真吾 榎本みのり	(22.5.1～) 野崎健太郎 (22.6.1～22.11.30) 渡邊真紀子 (22.7.1～22.10.31) 村上 裕樹 (23.2.1～) 片寄 泰子	(23.1.1～23.3.31) 村上 裕樹	内山 真 大川 匡子 兼坂 佳孝 山寺 博一 井上 雄一 白川美也子 上田 泰己 松浦 雅人 筒井 孝子 海老澤 尚 遠藤 拓郎 樋口 重和 田ヶ谷浩邦 本多 真	阿部又一郎 古田 光 関口夏奈子 草薙 宏明 田村美由紀 三益 亜美 根 達彦 宗澤 岳史 波井 佳代 (～22.5.31) 渡邊真紀子 (22.4.1～22.4.30) 野崎健太郎 (22.7.1～23.1.31) 片寄 泰子	加藤 美重 (22.6.1～) 大嶋美奈子 (22.8.1～) 松本有希子 (22.10.1～23.3.31) 渡邊かおり	斉藤 徳徳 (22.4.13～22.7.31) 中澤 君枝 (22.4.13～) 加藤 美恵 (22.7.1～) 大嶋美奈子 (22.8.1～) 松本有希子	亀井 雄一 早川 達彦 塚田恵穂子	(22.8.1～23.3.31) 福田 知美 (23.1.1～) 金山 裕介	(～23.3.31) 加嶋 誠			
知的障害研究部	梶垣 真澄	井上 祐紀 軍司 敬子		後藤 隆寛 (～22.8.31) 松田 芳樹 (～22.9.30) 加地 雄一 (23.3.1～) 崎原ことえ	(22.4.1～23.2.28) 崎原ことえ (22.9.1～) 松田 芳樹 (23.1.17～) 佐久間隆介 小久保奈緒美 鈴木 浩太		秋山千枝子 宇野 彰 木実谷哲史 小池 敏英 小枝 達也 昆 かおり 杉田 克生 鈴木 義之 田中 敦士 中村 俊 難波 栄二 林 徹 細川 徹 三砂まづる (22.7.1～) 山崎 広子 竹市 博臣	中村 雅子 矢田部清美 中村 裕子	(22.7.1～) 須藤菜衣子 真嶋 麻子	大橋 啓子 刑部 仁美 中村 紀子 吉川 朋子	中川 栄二 (～22.6.30) 山崎 広子	北 洋輔 小浜酒美子 古島わか 小林 明佳 (23.1.1～) 山本寿子 (～23.1.16) 小久保奈緒美 佐久間隆介 鈴木 浩太	(～22.6.30) 須藤菜衣子 真嶋 麻子			
社会復帰研究部	伊藤順一郎	吉田 光穂 (～23.1.24) 瀬戸屋雄太郎		英一也 高原優美子		前田 恵子 (22.4.1～) 佐藤さやか	大島 巖 福垣 中 西尾 雅明 (23.1.25～) 瀬戸屋雄太郎	堀内健太郎 香田真希子 久永 文恵 齋川 信幸 高橋 誠 (22.7.1～) 小川 雅代	(22.4.1～) 藤田 真純 田中 純子 (22.7.1～) 小川 雅代	樽垣 早苗	安西 信雄 坂田 増弘 (22.4.1～) 佐竹 直子 樽谷博一郎	渡久 悠 (23.1.1～) 小泉 智恵				
司法精神医学研究部	(～22.7.31) 吉川 和男 (23.1.1～) 岡田 幸之	菊池安希子 安藤久美子 (～22.12.31) 岡田 幸之 (23.1.1～) 岡田 幸之 (兼任)	西中 宏吏 小松 容子 福井 裕輝 (成人精神科研究部併任) (～22.11.30) 高橋 洋子				牧野 貴樹 美濃由紀子	川田 良作		三輪 靖子 堀 喜美	野田 隆政 今村 扶美 朝波 千尋 岩崎さやか	大塚 敬子 浅野 敬子 王 剣峰 石塚 聖基 (22.5.12～) 大島 郁葉 (22.12.1～) 増井 啓大				

II 研究活動状況

1. 精神保健研究所所長室

I. 概要

1) 人事

平成 22 年度の精神保健研究所所長は前年度に引き続き加我牧子が務めた。加我は、所長着任より内閣府本府審議官（自殺対策推進室次長）として自殺対策に関わる政策立案と情報発信に関与してきたが、国立精神・神経センターの独立行政法人化に伴い、内閣府本府政策参与と身分が変更になった。実際の活動は従前同様であった。

精神保健研究所人事は下記の通りであった。7 月に司法精神医学研究部長 吉川和男が退職した後、平成 22 年 1 月 1 日付で岡田幸之室長が部長に昇任した。菊地裕絵が 4 月に心身医学研究部心身症研究室長として採用された。2 月には児童・思春期精神保健研究部 児童期精神保健研究室長に高橋秀俊が着任した。平成 23 年 3 月 31 日現在の常勤研究者は、部長 11 名、室長 23 名（1 名併任）、研究員 4 名の体制であった。なお所長室秘書は笹和紀、南雲郁子が担当し、太田玲子、大橋啓子が補佐した。

2) 概況

平成 22 年 4 月 1 日、国立精神・神経センターの独法化にともない、独立行政法人国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所が発足した。11 の研究部という体制は変わらないものの、8 研究部の名称が変更され（「職員配置」参照）、昨年に引き続き活発な研究活動を進めた。研究の詳細については各部の研究活動記録を参照されたい。

平成 22 年 5 月 25 日に行われた国立精神・神経医療研究センター三施設合同研究発表会では、肥田昌子室長、松本俊彦室長（発表順）が精神保健研究所を代表して報告を行った。精神保健研究所では、患者さんやご家族、国民に役立つ研究を実践し、国の精神保健福祉政策策定に貢献するシンクタンクとしての機能を果たしながら、平成 22 年度には英文原著 89 編、邦文原著 71 編、英文総説 5 編、和文総説 185 編の報告をはじめ、国内外の学会発表を行うなど研究成果を積極的に公表するという機運が育ってきている。

このほか、安藤哲也室長の摂食障害の臨床像の変化に対する **Grelin** 遺伝子に関する論文は医学生物学分野の優秀論文として **Faculty of 1000** に選出された。また、軍司敦子室長（日本小児神経学会）、後藤直子研究生（日本心身医学会）、松岡豊室長（日本脂質栄養学会、日本サイコオンコロジー学会）、後藤隆章流動研究員（日本特殊教育学会）、本間元康流動研究員（日本時間生物学会）が、それぞれの領域における主要学会で優秀論文賞、優秀報告賞を受賞するなど、若手研究者の活躍には目覚ましいものがあった。

平成 23 年 3 月 11 日、マグニチュード 9 という規模の東日本大震災が発生した。精研では当初 3 月 14 日に予定されていた平成 22 年度第 22 回研究報告会を延期し、被災した方々と支援者を支援するため緊急集会を開催した。この会議では、専門のホームページの立ち上げほか、精研研究者のもてる力を結集して災害支援に貢献することを決議した。その後の精研の研究者は、大災害の 10 年 20 年後を見据えたメンタルヘルス支援と研究を意識した着実な活動を継続している。

震災の影響で延期された研究報告会は、年度を越えて 5 月 14 日に開催され、優秀発表賞である青申賞には栗山健一室長、船田正彦室長が、若手研究者優秀ポスター賞である寒露賞には高橋弘流動研究員（当時、現オハイオ大学ポスドク研究員）と富山健一流動研究員が選ばれた。

研究所の広報活動の一環としては、前年に引き続き、広報誌「精研だより」を 4 号から 6 号まで 3 号を刊行し、各部部長による研究活動の紹介をはじめ、研究所内外とのコミュニケーションを向上するための記事を掲載した。

今年度から精神保健研究所主催の研修から、自殺予防総合対策センターならびに認知行動療法セン

ター準備室主催の研修が独立したが、精神保健福祉、薬物依存、心身医学、自殺対策、司法精神医学、発達障害、精神医療均霑化などの専門領域の研修を専門家を対象として15課程を実施し、合計1,015名が受講した。詳細は後述した。

3) 精神保健研究所へのゲスト

平成22年7月26日 Dr. Dana Babuskova ほか、オランダ大使館スタッフ2名

平成22年8月23日 hyun myoungho 教授（韓国中央大学）

平成22年8月23日公明党国会議員団 ほか

II. 研究活動

1) 自殺の原因分析に基づく効果的な自殺防止対策の確立に関する研究

平成13年以来、精神保健研究所としてとりくんできた自殺予防に関わる研究をさらに発展させることをめざした新規研究班を発足させた。障害児・者の家族における自殺に関わるメンタルヘルスについても検討をはじめた。（共同研究者：竹島正、松本俊彦、井上祐紀、稲垣真澄）

2) 自閉症、学習障害、AD/HD、精神遅滞（知的障害）の病態・診断・治療開発に関する研究

脳機能評価と早期診断法・治療法の確立をはかるため、臨床的・生理学的、神経心理学的研究を継続した。広汎性発達障害児の指導効果について二次元行動解析による他覚的評価も行った。（共同研究者：稲垣真澄、軍司敦子、井上祐紀、矢田部清美、山崎広子、後藤隆章、小笠原恵、小池敏英）

3) 発達障害で期待されるコホートスタディの検討（共同研究者：稲垣真澄、鈴木浩太、井上祐紀）

4) 小児大脳型ALD児の高次脳機能評価による診断ならびに治療効果判定に関する研究

造血幹細胞移植が唯一の治療法である難治性中枢神経疾患ALDの治療時期決定と治療後評価のため、全国からの紹介症例の評価を実施し、ALDにみられる高次脳機能障害を詳細に検討した。（共同研究者：稲垣真澄、軍司敦子、崎原ことえ、中村雅子、後藤隆章、佐久間隆介）

5) Landau-Kleffner症候群の臨床研究

後天性失語症、言語性聴覚失認と高度の脳波異常を呈するまれな小児症候群の疫学調査と診断治療後遺症に関する実態調査をもとに研究を継続した。（共同研究者：稲垣真澄、太田玲子）

6) 発達障害児の行動異常モデルに関する研究

Bronx waltzer (bv) マウスはヒトの発達障害の各側面を反映する動物モデルとして適当であり、自閉性障害などの病態研究、治療研究のための研究を継続した。（共同研究者：稲垣真澄、井上祐紀、松田芳樹）

III. 社会的活動

所長個人は内閣府自殺対策推進室の定例業務に加え、自殺予防対策視察のためオーストラリアを訪れ（平成22年2月）、広報ならびに情報収集のための活動を通じて、社会に貢献した。また、厚生労働省発達障害者施策検討会委員、独立行政法人国立特別支援教育総合研究所運営委員、障害年金の認定（知的障害等）に関する専門家会合委員、厚生労働省自殺対策のための戦略研究運営委員などを務めた。また国立精神・神経医療研究センター病院併任医師として小児神経科外来で知的障害、自閉症、注意欠如・多動性障害、学習障害などの発達障害児の診療とご家族へのサポートを行った。日本障害者スポーツ協会専門委員会医学委員として知的障害者のスポーツを通じての社会参加に貢献した。

精神保健研究所では研究成果を社会に還元するための情報発信を常時行っている。新聞、雑誌、テレビなどのマスメディアからの取材、発表については概要を一覧にして示した(p257)。

若手研究者への教育活動は研究所職員として当然の業務であり、研究者育成のみならず、病院レジデントの指導にも時間とエネルギーを割いている。研究所全体として、学生教育については東京大学や防衛医科大学校医学部学生に対する実習を、各研究部が交代で担当している。その他に研究所主催

の研修や各種講演を通じて医師，保健師，心理士，社会保健福祉士，言語聴覚士など専門職に対する教育を行い，本年度も研究成果を社会に還元した．大学医学部その他の客員教授，非常勤講師などの依頼を受け，直接学生教育に携わる機会も多い．これら研究者の対外的活動による社会貢献に関する一覧表も参照されたい(p260)．

IV. 研究業績

A. 刊行物

(1) 原著論文

- 1) Inoue Y, Inagaki M, Gunji A, Furushima W, Okada H, Sasaki H, Omori T, Takeichi H, Kaga M: Altered effect of preceding response execution on inhibitory processing in children with AD/HD: An ERP study. *Int J Psychophysiol* 77: 118-125, 2010.
- 2) Kita Y, Gunji A, Sakihara K, Inagaki M, Kaga M, Nakagawa E, Hosokawa T: Scanning strategies do not modulate face identification: Eye-tracking and near-infrared spectroscopy study. *PLoS ONE* <http://dx.plos.org/10.1371/journal.pone.0011050>.
- 3) Sakuma H, Shimizu Y, Saito Y, Sugai K, Inagaki M, Kaga M, Sasaki M : Electrophysiological evidence of cerebral dysfunction in childhood opsoclonus-myoclonus syndrome. *Mov Disord* 25: 940-945, 2010.
- 4) Kita Y, Gunji A, Inoue Y, Goto T, Sakihara K, Kaga M, Inagaki M, Hosokawa T: Self-face recognition in children with autism spectrum disorders: A near-infrared spectroscopy study. *Brain Dev* Dec. 17, 2010. [Epub ahead of print]
- 5) Matsuda Y, Inoue Y, Izumi H, Kaga M, Inagaki M, Goto Y : Fewer GABAergic interneurons, heightened anxiety and decreased high-frequency electroencephalogram components in Bronx waltzer mice, a model of hereditary deafness. *Brain Res* 1373: 202-210, 2011.
- 6) 北 洋輔, 軍司敦子, 佐久間隆介, 後藤隆章, 稲垣真澄, 加我牧子, 小池敏英, 細川 徹 : 自閉症スペクトラム障害のある児に対する **Social Skill Training** の客観的評価. *精神保健研究* 56 : 1-87, 2010.
- 7) 北 洋輔, 小林朋佳, 小池敏英, 小枝達也, 若宮英司, 細川 徹, 加我牧子, 板垣真澄 : 読み書きにつまづきを示す小児の臨床症状とひらがな音読能力の関連—発達性読み書き障害診断における症状チェックリストの有用性—. *脳と発達* 42 : 437-442, 2010.
- 8) 竹下絵里, 中川栄二, 新井麻子, 斎藤義朗, 小牧宏文, 須貝研司, 佐々木征行, 高橋章夫, 大槻研司, 井上祐紀, 稲垣真澄, 加我牧子 : 小児の難治性てんかんの外科治療による行動障害の改善 : 子どもの行動チェックリストによる検討. *てんかん研究* 28: 401-408, 2011.

(2) 総説

- 1) 稲垣真澄, 加我牧子 : 知的障害児の医学的診断検査ガイドライン. *精神保健研究* 50 : 43-46, 2009.
- 2) 加我牧子 : 副腎白質ジストロフィー症の話題. *東京小児科医会報* 100 : 47-53, 2011.

(3) 著書

- 1) Gunji A, Takeichi H, Inoue Y, Okada H, Omori T, Inagaki M, Kaga M: Single one-minute trial assessment of speech processing in school age children. *Proceedings of the Auditory Research Meeting, the Acoustical Society of Japan*, 40: 857-861, 2010.
- 2) 加我牧子 : 特異的発達障害 診断・治療のための実践ガイドライン—わかりやすい診断手順と支援の実際—. 稲垣真澄, 小枝達也, 小池敏英, 若宮英司, 加我牧子編. *診断と治療社*, 東京, 2010.
- 3) 加我牧子 : 知的障害. *社会福祉学習双書編集委員会編 : 医学一般—人体の構造と機能および疾病 保健医療サービス—. 全国社会福祉協議会*, 東京, pp122-124, 2011.

(4) 研究報告書

- 1) 加我牧子：自殺の原因分析に基づく効果的な自殺防止対策の確立に関する研究。厚生労働科学研究補助金障害者対策総合研究事業「自殺の原因分析に基づく効果的な自殺防止対策の確立に関する研究（研究代表者：加我牧子）」平成22年度総括・分担研究報告書。pp1-7, 2011.
- 2) 加我牧子, 井上祐紀, 太田玲子, 稲垣真澄：障害児・者と家族における自殺の実態と自殺予防に関する研究。厚生労働科学研究補助金障害者対策総合研究事業「自殺の原因分析に基づく効果的な自殺防止対策の確立に関する研究（研究代表者：加我牧子）」平成22年度総括・分担研究報告書。pp 9-12, 2011.
- 3) 加我牧子, 稲垣真澄, 軍司敦子, 崎原ことえ, 中村雅子：小児大脳型ALD児の高次脳機能評価による診断ならびに治療効果判定に関する研究。小児副腎白質トロフィー（ALD）兄弟受診例の臨床特徴の解析。厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患克服研究事業「運動失調症の病態解明と治療法開発に関する研究（研究代表者：西澤正豊）」平成22年度年度 総括・分担研究報告書。pp88-90, 2011.
- 4) 加我牧子, 稲垣真澄, 古島わかな, 軍司敦子, 後藤隆章, 崎原ことえ, 佐久間隆介, 中村雅子：小児大脳型ALD児の高次脳機能評価による診断ならびに治療効果判定に関する研究。厚生労働科学研究費補助金難治性疾患克服研究事業「運動失調症の病態解明と治療法開発に関する研究（研究代表者：西澤正豊）」平成20年度～22年度総合 総括・分担研究報告書。pp20-22, 2011.
- 5) 加我牧子：広汎性発達障害児の行動支援開発と応用行動分析の有効性評価。厚生労働科学研究補助金障害者対策総合研究事業「小児行動の二次元尺度化に基づく発達支援策の有効性定量評価に関する研究（研究代表者：稲垣真澄）」平成22年度総括・分担研究報告書。pp57-66, 2011.
- 6) 加我牧子：広汎性発達障害児の行動支援開発と応用行動分析の有効性評価。厚生労働科学研究補助金障害者対策総合研究事業「小児行動の二次元尺度化に基づく発達支援策の有効性定量評価に関する研究（研究代表者：稲垣真澄）」平成22年度総合研究報告書。pp 63-83, 2011.
- 7) 稲垣真澄, 小林朋佳, 軍司敦子, 矢田部清美, 加我牧子, 後藤隆章：学童におけるひらがな音読の発達的变化：ひらがな単音, 単語, 短文速読課題を用いて。厚生労働科学研究補助金 研究基盤B 「読み書き障害児の認知神経科学的特性に基づいた支援法開発に関する研究（研究代表者：稲垣真澄）」平成20年度～22年度研究成果報告書。pp 13-24, 2011.
- 8) 矢田部清美, 板垣真澄, 後藤隆章, 加我牧子：認知神経心理学的モデルに基づいた小学生用漢字単語課題の開発。厚生労働科学研究補助金 研究基盤B 「読み書き障害児の認知神経科学的特性に基づいた支援法開発に関する研究（研究代表者：稲垣真澄）」平成20年度～22年度研究成果報告書。pp 25-31, 2011.
- 9) 稲垣真澄, 鈴木浩太, 井上由紀, 加我牧子, 三砂ちづる：発達障害で期待されるコホートスタディの検討。国立精神・神経医療研究センター精神・神経疾患研究開発費「精神・神経疾患に関わる大規模コホートスタディの構築に関する研究（研究代表者：竹島正）」平成22年度 総括・分担研究報告書。pp 11-12, 2011.

(5) 翻訳

- 1) 上林靖子, 加我牧子監修：発達障害辞典。明石書店, 東京, 2011. (Pasquale J. Accardo, Barbra Y. Whitman: Dictionary of Developmental Disabilities Terminology. Paul H. Brookes Publishing Co., Inc, USA, 2002.)

(6) その他

- 1) Inagaki M, Yamazaki H, Kobayashi T, Kita Y, Yatabe K, Gunji A, Kaga M: Magnocellular VEP in dyslexics. Clinical Neurophysiology 121: S27, 2010.
- 2) Gunji A, Kita Y, Sakihara K, Inoue Y, Kaga M, Inagaki M: Facial cognition in autistic children. Clinical Neurophysiology 121: S57, 2010.
- 3) Yatabe K, Inagaki M, Suzuki K, Kaga M, Watanabe K: Hand-actions implied in hand-written

- Chinese radicals in the human motor system. *Clinical Neurophysiology* 121: S196, 2010.
- 4) Sakihara K, Gunji A, Kita Y, Furushima W, Inoue Y, Inagaki M, Kaga M: Event-related oscillations to structural encoding of face in children with pervasive developmental disorders. *Clinical Neurophysiology* 121: S266, 2010.
 - 5) Kita Y, Gunji A, Inoue Y, Goto T, Inagaki M, Kaga M, Hosokawa T: A hemodynamic study of self-face recognition in autism spectrum disorder (ASD): Relation with ASD severities and self-consciousness. *Clinical Neurophysiology* 121: S266, 2010.
 - 6) Kaga M, Inagaki M, Gunji A, Nakamura M: Auditory perception in Landau-Kleffner syndrome. *Clinical Neurophysiology* 121: S35, 2010.
 - 7) Inagaki M, Kobayashi T, Kaga M, Kamio Y: Problems of reading and writing in elementary school children: Part I. Nationwide study in Japan. Abstracts from the second Excellence in Paediatrics Conference, 2010; 108.
 - 8) Kobayashi T, Inagaki M, Kaga M, Tanaka Y, Kamio Y: Problems of reading and writing in elementary school children: Part II. Relationship with ADHD rating scale. Abstracts from the second Excellence in Paediatrics Conference, 2010; 108.
 - 9) Kaga M, Inagaki M, Ohta R: Incidence of Landau-Kleffner syndrome(LKS) in Japan. Abstracts from the second Excellence in Paediatrics Conference, 2010; 70.
 - 10) Kaga M: New year's greetings. *Brain Dev* 33: 1, 2011.
 - 11) 加地雄一, 後藤隆章, 矢田部清美, 加我牧子, 稲垣真澄: 発達性 Dyslexia 児と ADHD 児における漢字の書字障害特性に関する研究—書字エラー分析による検討—. *認知神経科学* 12: 118, 2010.
 - 12) 加我牧子: 土居先生への想い. 土居健郎先生追悼文集—心だけは永遠—, 土居健郎先生追悼文集編集委員会, pp.45-46, 2010.
 - 13) 加我牧子: 巻頭言. 平成 21 年度国立精神・神経センター精神保健研究所年報 23 (通巻 56 号): 1, 2010.
 - 14) 加我牧子: 巻頭言. 精神保健研究 23 号 (通巻 56 号): 1, 2010.
 - 15) 崎原ことえ, 軍司敦子, 井上祐紀, 北 洋輔, 加我牧子, 稲垣真澄: 広汎性発達障害児における顔識別時の事象関連オシレーション. *臨床神経生理学* 38: 345, 2010.
 - 16) 加我牧子: 中村孝先生を偲んで「中村孝先生の笑顔」. 東大分院小児科同窓会会報, 第 23 号, 2010.
 - 17) 加我牧子, 稲垣真澄, 軍司敦子, 崎原ことえ, 中村雅子: 小児副腎白質ジストロフィー (ALD) 兄弟受診例の臨床特徴の解析. 平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患克服研究事業「運動失調症の病態解明と治療法開発に関する研究班」(主任研究者: 西澤正豊) 班会議プログラム抄録集, pp.57, 2011.

B. 学会・研究会における発表

(1) 学会特別講演, 教育講演, シンポジウム, ワークショップ, パネルディスカッション等

- 1) Inagaki M, Yamazaki H, Kobayashi T, Kita Y, Yatabe K, Gunji A, Kaga M: Magnocellular VEP in dyslexics. 29th International Congress of Clinical Neurophysiology, Kobe, 2010.10.28-11.1.
- 2) Gunji A, Kita Y, Sakihara K, Inoue Y, Kaga M, Inagaki M: Facial cognition in autistic children (Symposium 38: Face perception). The 29th International Congress of Clinical Neurophysiology (ICCN), Kobe, 2010.10.28-11.1.
- 3) Kaga M, Inagaki M, Gunji A, Nakamura M: Auditory perception in Landau-Kleffner syndrome. 29th International Congress of Clinical Neurophysiology, Kobe, 2010.10.28-11.1.
- 4) 加我牧子: 発達障害と医学的支援の考え方. 第 2 回鳥取県発達障害治療研究会, 鳥取, 2010.7.3.
- 5) 加我牧子, 稲垣真澄, 軍司敦子: 発達障害の認知機能評価. 教育講演IV, 第 15 回認知神経科学学会学術集会, 鳥根, 2010.7. 18.

- 6) 加我牧子：小児聴覚失認の治療—Landau-Kleffner 症候群を中心に—。第 55 回音声言語医学会総会・学術講演会，東京，2010.10.14.
- 7) 加我牧子：発達障害診断の課題。第 118 回日本心身医学会関東地方会，東京，2011.2.19.
- (2) 一般演題
- 1) Gunji A, Inoue Y, Kita Y, Sakihara K, Kaga M, Inagaki M: Discrimination of one's own face and familiar face in children with Pervasive Developmental Disorders (PDD): an event related potential (ERP) study. The 11th International Child Neurology Congress, Cairo, 2010.5.1-7.
 - 2) Kita Y, Gunji A, Goto T, Sakuma R, Koike T, Hosokawa T, Inagaki M, Kaga M: Intervention Effects of Social-Skill Training for Children with Autism Spectrum Disorders: Quantitative Behavioral Assessments with Two-Dimensional Motion Capture System. The 11th International Child Neurology Congress, Cairo, 2010.5.1-7.
 - 3) Yatabe K, Inagaki M, Suzuki K, Watanabe K, Kaga M: Motion Perception of Explicit and Implicit Hand Action Associated with Writing Letters. The 50th annual meeting of the Society for Psychophysiological Research, Marriott Downtown Waterfront, Portland, Oregon, 2010.9.29-10.3.
 - 4) Yatabe K, Inagaki M, Suzuki K, Kaga M, Watanabe K: Hand-actions implied in hand-written Chinese radicals in the human motor system. 29th International Congress of Clinical Neurophysiology, Kobe, 2010.10.28-11.1.
 - 5) Sakihara K, Gunji A, Kita Y, Furushima W, Inoue Y, Inagaki M, Kaga M: Event-related oscillations to structural encoding of face in children with pervasive developmental disorders. 29th International Congress of Clinical Neurophysiology, Kobe, 2010.10.28-11.1.
 - 6) Kita Y, Gunji A, Inoue Y, Goto T, Inagaki M, Kaga M, Hosokawa T: A hemodynamic study of self-face recognition in autism spectrum disorder (ASD): Relation with ASD severities and self-consciousness. 29th International Congress of Clinical Neurophysiology, Kobe, 2010.10.28-11.1.
 - 7) Inagaki M, Kobayashi T, Kaga M, Kamio Y: Problems of reading and writing in elementary school children: Part I .Nationwide study in Japan. Excellence in Paediatrics , London, 2010.12.2-4.
 - 8) Kobayashi T, Inagaki M, Kaga M, Tanaka Y, Kamio Y: Problems of reading and writing in elementary school children: Part II .Relationship with ADHD rating scale. Excellence in Paediatrics , London, 2010.12.2-4.
 - 9) Kaga M, Inagaki M, Ohta R:Incidence of Landau-Kleffner syndrome(LKS)in Japan. Excellence in Paediatrics , London, 2010.12.2-4.
 - 10) Gunji A, Takeichi H, Inoue Y, Okada H, Omori T, Inagaki M, Kaga M: Single one-minute trial assessment of speech processing in school age children. 日本音響学会聴覚研究会，福岡，2010.12.10-11.
 - 11) 山崎広子，北 洋輔，矢田部清美，小林朋佳，加我牧子，稲垣真澄：発達性読み書き障害児の大細胞系機能評価と読字書字症状との関連：低空間周波数サイン様縦縞刺激 VEP による検討。第 52 回日本小児神経学会総会，福岡，2010.5.21.
 - 12) 小林朋佳，稲垣真澄，井上祐紀，崎原ことえ，後藤隆章，矢田部清美，小沢浩，木実谷哲史，加我牧子：発達障害児にみられる学習障害の特徴：臨床症状と音読課題の検討。第 52 回日本小児神経学会総会，福岡，2010.5.20.
 - 13) 加地雄一，後藤隆章，矢田部清美，加我牧子，稲垣真澄：発達性 Dyslexia 児と ADHD 児における漢字の書字障害特性に関する研究—書字エラー分析による検討—。第 15 回認知神経科学会学術集会，島根，2010.7. 17.
 - 14) 軍司敦子，崎原ことえ，北 洋輔，井上祐紀，加我牧子，稲垣真澄：広汎性発達障害児における顔識別と既知性の関連：ERP を用いて。平成 22 年度「包括型脳科学研究推進支援ネットワーク」夏のワークショップ

ップ, 北海道, 2010.7.27-30.

- 15) 松田芳樹, 泉仁美, 井上祐紀, 加我牧子, 稲垣真澄, 後藤雄一: マウス不安状態に関連する皮質高周波活動の電気生理学的解析. 第33回日本神経科学学会, 兵庫, 2010.9.2-4.
- 16) 松田芳樹, 泉仁美, 井上祐紀, 加我牧子, 稲垣真澄, 後藤雄一: マウスは不安亢進と大脳皮質抑制系異常を呈する. 第40回日本神経精神薬理学会, 宮城, 2010.9.17.
- 17) 米川貴博, 中川栄二, 竹下絵里, 佐久間啓, 斎藤義朗, 小牧宏文, 須貝研司, 佐々木征行, 開道貴信, 金子裕, 高橋章夫, 大槻泰介, 井上祐紀, 稲垣真澄, 加我牧子: 難治性てんかんに対する脳梁離断術が小児の注意機能, 行動障害に及ぼす効果. 第44回日本てんかん学会, 岡山, 2010.10.14-15.
- 18) 崎原ことえ, 軍司敦子, 井上祐紀, 北洋輔, 加我牧子, 稲垣真澄: 広汎性発達障害児における顔識別時の事象関連オシレーション. 第40回日本臨床神経生理学会, 兵庫, 2010.11.2.

(3) 研究報告会

- 1) 加我牧子, 小笠原恵, 軍司敦子, 佐久間隆介, 後藤隆章, 北洋輔: 広汎性発達障害児行動支援開発と応用行動分析の有効性評価—個別指導場面における行動の二次元尺度化を有効性定量評価に関する研究—. 平成22年度厚生労働科学研究費補助金 障害者対策総合研究事業(身体・知的等障害分野) 「小児行動の二次元尺度化に基づく発達支援策の有効性定量評価に関する研究班」(主任研究者: 稲垣真澄) 班会議, 山口, 2011.10.16.
- 2) 加我牧子, 稲垣真澄, 軍司敦子, 崎原ことえ, 中村雅子: 小児副腎白質ジストロフィー(ALD)兄弟受診例の臨床特徴の解析. 平成22年度厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患克服研究事業「運動失調症の病態解明と治療法開発に関する研究班」(主任研究者: 西澤正豊) 班会議, 東京, 2011.1.13-14.

D. 学会活動(学会主催, 学会役員, 座長, 編集委員)

(1) 学会役員

- 1) 日本小児神経学会理事
- 2) 日本小児神経学会評議員
- 3) 日本臨床神経生理学会理事
- 4) 小児脳機能研究会世話人
- 5) 日本小児神経学会関東地方会運営委員
- 6) 認知神経科学会評議員
- 7) 日本発達障害学会理事

(2) 座長

- 1) 加我牧子: Bun-nyun Kim 氏ランチョンセミナー座長. Korean ADHD Treatment Experiences Using OROS-MPH and Atomoxetine, 第52回日本小児神経学会総会, 福岡, 2010.5.20.
- 2) 加我牧子: Bun-nyun Kim 氏招待講演座長. The Neurobiological Studies of ADHD—Focus on Brain Imaging and Genetic Studies, 第52回日本小児神経学会総会, 福岡, 2010.5.21.

(3) 学会誌編集委員等

- 1) 日本小児神経学会機関誌 Brain & Development 編集委員長
- 2) 発達障害学会誌 編集委員
- 3) Journal of Child Neurology 編集委員

2. 精神保健計画研究部

I. 研究部の概要

精神保健計画研究部は精神保健に関する計画の調査及び研究を行うため昭和61年に設置された。精神保健計画研究部の研究は、①精神保健福祉の現況と施策効果のモニタリングのための技術の開発と実施（モニタリング研究）、②精神科医療の現場における治療やリハビリテーション技術に関する科学的根拠（evidence）を充実させるための現場との共同実証研究や研究方法論の提供（臨床疫学研究）、③精神保健福祉施策の重要課題の解決方策を得るための情報収集と分析（政策情報研究）に区分できる。

①に関しては、「精神保健福祉資料（630調査）」の実施と分析、精神科デイ・ケア調査、医療保護入院の保護者に関する調査、精神保健福祉法第26条による通報となった者の実態把握等の研究を行った。

②に関しては、コホート研究の構築、レット症候群の実態に関する疫学調査、思春期摂食障害に関する疫学調査、高校生の精神障害の知識についての調査等の共同研究を行った。

③に関しては、高校生の精神障害の知識についての調査、精神医療の場で経験している自殺ならびに自殺予防に役立っていると考えられる取り組みについての調査、精神障害者の自立支援のための住居確保研究会の開催と評価、医療機能重視型精神科デイ・ケアのヒアリング調査等の研究を行った。

部長：竹島正，統計解析研究室長：立森久照，システム開発研究室長：（公募），流動研究員（3名）：赤澤正人，趙香花，廣川聖子，外来研究員（3名）：河野稔明，小山明日香，荘島幸子，科研費研究員（2名）：勝又陽太郎（5/31まで），長沼洋一，客員研究員（10名）：清田晃生，桑原寛，須賀万智（11/8より），助川征雄，高橋祥友，野口正行（7/12より），橋本康男，藤田利治（2/15まで），松本晃明，渡邊直樹，協力研究員（4名）：亀山晶子，川島大輔（5/31まで），木谷雅彦，横山由香里，研究生（6名）：安藤俊太郎，大類真嗣（10/4より），本屋敷美奈（10/4より），的場由木（2/14から），森川すいめい，吉野比呂子，センター研究助手（1名）：吉田勺美（4/23より），科研費研究助手（1名）：構聡子，研究費雇上（4名）：ソウ由香，西口直樹，原治子，山内貴史（5/31まで）。

II. 研究活動

1) 精神保健医療福祉体系の改革に関する研究

「精神保健福祉資料（630調査）」による「精神保健医療福祉の改革ビジョン」等に示された達成目標の進捗状況のモニタリング調査を実施した。具体的には、(1)最新の630調査データ（2009年速報値）による統合失調症、認知症による在院患者の数的状況の把握、(2)2008年より導入した電子調査票の利用状況と回答時期の変化の検討、(3)「かえるかわる 精神保健医療福祉の改革ビジョン研究ページ」の継続的な運営、等を行った。（立森，小山，河野，長沼，竹島）

2) 精神療養病棟の役割の検討

「精神保健福祉資料（630調査）」をもとに、専門病棟間での在院患者特性および設置時期の比較や設置と職員配置との関連から、精神科病院の機能分化における精神療養病棟の役割を検討した。精神療養病棟の在院患者の年齢および在院期間は、ほかの専門病棟に比べて広く分布し、実態として同病棟の機能が多様であることが示唆された。また、複数種別の専門病棟を設置している多くの病院では、精神療養病棟・認知症病棟の設置→職員（特にコメディカル）の増員→精神科救急病棟・急性期治療病棟の設置と展開する傾向を認め、精神療養病棟は機能分化の足掛かりとなっていることが示唆された。（河野，竹島，立森）

3) 医療保護入院の保護者に関する調査

医療保護入院患者と保護者の実態、保護者義務の履行状況、保護者制度が抱えている課題などを明らかにすることを目的に、岡山県の精神科病院20箇所に入院している医療保護入院患者全員、およびその3分の1に該当する保護者の状況について郵送によるアンケート調査を実施した。結果、入院患者の53.3%が

医療保護入院で、医療保護入院患者の41%が未婚であること、保護者の83%が近親族(親、配偶者、子、兄弟姉妹)で、平均年齢は63歳と高齢化していること等が明らかになった。来年度は、保護者票との付き合いを行い、保護者制度が抱えている課題を詳細に分析する予定である。(趙, 長沼, 河野, 立森, 竹島)

4) 精神保健福祉法第26条による通報となった者の実態把握

精神保健福祉法第26条通報となった精神障害者の実態を把握し、精神保健医療の観点からの支援の必要性の有無および必要な支援のあり方を検討することを目的として、第26条通報が増加した2か所の都道府県・政令指定都市において聞き取り調査を行った。その結果、26条通報となる事例には、保護観察のつかない満期釈放となる精神障害者や、精神科病院への入院以外に福祉との接点を得ることのできない精神障害者が含まれており、深刻な問題を抱えながら精神保健医療福祉サービスにアクセスしがたい人たちであると考えられた。(竹島, 小山, 河野)

5) 精神保健システムの国際比較

わが国の精神保健医療福祉の改革に参照可能な基礎資料を提供することを目的に、2000年以降、日本、中国、韓国で実施されている精神保健医療福祉関連政策の比較を行い、欧米先進国の影響と独自性について検討した。その結果、精神障害者の地域ケア(中国は例外)、自殺予防対策等、政策の導入においては欧米先進国の影響を受けたものの、地域ケアの実施においては家族の役割が重視される等の独自性が見られた。また、高齢・少子化、核家族化、国際化などの急激な社会変動の中で自殺者数が急増する等、3国の特徴的な共通点も見られた。(趙, 竹島)

6) コホート研究の構築

精神保健医療、神経疾患の領域において、今後コホートスタディで明らかにすべき課題を検討するとともに、研究を実施する際の課題点を抽出することを目的とした。対象集団を長期間にわたって追跡調査を行うコホートスタディでは、脱落例をできるだけ少なくすることが重要になる。一方でインフォームド・コンセント、調査協力者への倫理的な配慮から、調査への協力の任意性及び協力撤回の自由、調査への不同意に伴う不利益がないことの保証等は担保される必要がある。これらの課題に対して専門家による検討に加えて試行調査を行い課題対処の方策を検討した。(長沼, 立森, 竹島)

7) レット症候群の実態に関する疫学調査

本邦におけるレット症候群の患者数とその分布を明らかにすることを目的とした疫学調査を協同で実施した。主に方法論的な面の支援、調査対象施設の抽出、および解析を担当した。全国の小児科を有する全病院に大学医学部付属病院とレット症候群の患者が集中すると考える施設を加えた母集団から、層化無作為抽出された施設を対象に一次調査としてレット症候群の患者数についての質問紙調査を郵送にて実施し、全国のレット症候群の推計患者数とその分布を得た。さらに一次調査においてレット症候群の患者がいると回答した施設を対象に、各症例の詳細を尋ねる二次調査を郵送法にて実施した。(立森)

8) 思春期摂食障害に関する疫学調査

思春期年代の摂食障害の有病率、その日常生活への影響などを明らかにするための疫学調査を協同で実施する。複数の調査地域において中学生を対象にアンケート調査を実施し、さらにアンケート調査結果に基づいて抽出された生徒・保護者に対して構造化面接を実施する。構造化面接に用いるコンピュータ支援面接システムおよび調査票の作成、研究計画の立案などを担当し、調査体制の準備を完了し、訪問面接調査を実施した。(立森)

9) 中高生の精神障害の知識についての調査

中高生における精神障害に対する知識・意識の現状を明らかにし、それに基づいて生徒および学校関係者向

けの効果的な精神保健教育の方法を検討することを目的に、中高生を対象に精神障害についての知識および意識を問う質問紙調査を実施した。(立森)

10) 精神医療の場で経験している自殺ならびに自殺予防に役立っていると考えられる取り組みについての調査

全国の精神科医療機関を対象とし、精神科医療機関における自殺発生率の推計、受診者の自殺の背景などの実態把握、精神科医療機関で取り組まれている自殺予防対策の把握に関する質問紙調査を実施した。その結果、それらに係る基礎資料を得ると共に、今後の調査への協力機関に関する情報を得た。(廣川、大類、立森、竹島)

11) 医療機能重視型精神科デイ・ケアのヒアリング調査

対象や利用期間を区切り、認知行動療法等のプログラムに取り組み、医療としての機能を明確化しているデイ・ケアに対するヒアリング調査を実施し、共通する要件を抽出した。個別的なアセスメントと治療計画、個人受け持ち制を基礎として、医療から地域生活継続や就労・就学といった次のステップへの移行と再発予防を目標として、エビデンスに基づく治療が展開されていることが共通していた。今後、これらを実施するためのスタッフの人数や質、対象者に対するケースロード、ケースマネジメントのあり方、地域機関とのネットワーク形成、家庭訪問等のアウトリーチ・サービス、求められるアウトカム指標等の検討を進める予定である。(長沼、竹島)

12) 精神病初回発症例の早期支援・早期治療のための精神保健システムの検討

児童青年期のメンタルヘルスの問題がそれぞれの場でどのように経験されているかを把握するため、都道府県・政令指定都市2か所で行き取り調査を行った。精神病初回発症例は、ひきこもり、不登校、非行、自傷行為、児童虐待、摂食障害、発達障害等の事例に埋もれるように存在している可能性がある。精神病初回発症例の早期支援・早期治療を効果的に行うには、学校だけでなく、地域を巻き込んだメンタルヘルスプロモーションを併せて取り組む必要があると考えられた。(竹島、立森)

Ⅲ. 社会的活動

1) 市民社会に対する一般的な貢献

竹島正、立森久照、河野稔明、小山明日香、長沼洋一は、精神保健計画研究部共通の取り組みとして、ウェブサイト「かえるかわる 精神保健医療福祉の改革ビジョン研究ページ」を運営し、わが国の精神保健医療福祉の実態等に関する情報を提供した。

竹島正は、全国精神保健福祉連絡協議会の副会長としてその活動を支援した。また、「支援付き住宅推進会議」発起人、「こころの健康政策構想会議」提言起草委員会副座長、NPO 法人「自立支援センターふるさとの会」の苦情解決第三者委員会委員、「こころのバリアフリー研究会」の委員を務めた。

統計解析研究室長(立森久照)は、東京大学大学院医学系研究科精神保健学分野と共同研究を行なった。

竹島正、立森久照はメディアカンファレンスを通して、メディア関係者への精神保健啓発を行った。

2) 専門教育面における貢献

立森久照は、東京大学大学院医学系研究科健康科学・看護学専攻精神保健学分野の客員研究員として、その機関に所属する研究者、院生と共同研究を実施した。東京大学および防衛医科大学の医学部学生実習に協力し、人材養成に貢献した。

長沼洋一は、桜美林大学において精神医学講義を行い、臨床心理士や精神保健福祉士を目指す人材の育成に貢献した。

3) 精研の研修の主催と協力

竹島正は、精神保健計画研究部長として、第47回精神保健指導課程(2010.6.30-7.2)の主任を務めた。また、自殺予防総合対策センター長として、第4回自殺総合対策企画研修(2010.8.25-27)の主任、第1回心理職自殺予防研修(2010.7.5-6)、第1回自殺予防のための自傷行為とパーソナリティ障害の理解と対応研修の副主任(2010.11.8-9)、第2回精神科医療従事者自殺予防研修(2010.11.30-12.1)の副主任を務めた。

立森久照は、第47回精神保健指導課程(2010.6.30-7.2)の副主任を務めた。

4) 保健医療行政・政策に関連する研究・調査、委員会等への貢献

竹島正は、内閣府本府政策参与(非常勤)、内閣府自殺対策推進会議オブザーバー、厚生労働省平成22年度自殺防止対策事業評価委員長、「メンタルヘルス総合情報サイト」の運営委員、厚生労働省平成22年度地域自殺対策推進事業評価委員会委員、精神保健福祉士試験委員、富山県自殺対策推進協議会アドバイザー、墨田区保健衛生協議会こころの健康・自殺予防対策分科会委員、新潟県自殺予防対策検討会委員、船橋市自殺対策連絡会議委員を務めた。また、アジア・パシフィック・コミュニティ・メンタルヘルス・プロジェクトに参加して、アジア地域に適した地域精神保健の推進の共同研究を行った。さらに、2002年からの日豪保健福祉協力に基づく共同研究を進展させて、2010年9月から5年間の「メンタルヘルスプログラムにおける協力関係に関する覚書」(MEMORANDUM OF UNDERSTANDING 2010 COOPERATION IN MENTAL HEALTH PROGRAMS AS BETWEEN NCNP and THE UNIVERSITY OF MELBOURNE)の締結に導くなど、メルボルン大学との共同研究を行った。

立森久照は、厚生労働省平成22年度精神障害の正しい理解のための普及啓発事業の「メンタルヘルス総合情報サイト」の運営委員を務めた。日本医療政策機構市民医療協議会のがん政策情報センタープロジェクト外部評価委員を務めた。

IV. 研究業績

A. 刊行物

(1) 原著論文

- 1) Chee Ng, Setoya Y, Koyama A, Takeshima T: The ongoing development of community mental health services in Japan: utilizing strength and opportunities. *Australasian Psychiatry*: 18(1): 57-61, 2010.
- 2) Miyamoto Y, Tachimori H, Ito H. Formal caregiver burden in dementia: impact of behavioral and psychological symptoms of dementia and activities of daily living. *Geriatr Nurs*.31(4):246-53.2010.
- 3) Saito M, Iwata N, Kawakami N, Matsuyama Y; World Mental Health Japan 2002-2003 Collaborators, Ono Y, Nakane Y, Nakamura Y, Tachimori H, Uda H, Nakane H, Watanabe M, Naganuma Y, Furukawa TA, Hata Y, Kobayashi M, Miyake Y, Takeshima T, Kikkawa T. Evaluation of the DSM-IV and ICD-10 criteria for depressive disorders in a community population in Japan using item response theory. *Int J Methods Psychiatr Res*. 19(4):211-22. 2010.
- 4) de Graaf R, Radovanovic M, van Laar M, Fairman B, Degenhardt L, Aguilar-Gaxiola S, Bruffaerts R, de Girolamo G, Fayyad J, Gureje O, Haro JM, Huang Y, Kostychenko S, Lépine JP, Matschinger H, Mora ME, Neumark Y, Ormel J, Posada-Villa J, Stein DJ, Tachimori H, Wells JE, Anthony JC. *Am J Epidemiol*. 172(2):149-59. 2010.
- 5) Yoshimasu K, Kawakami N, Ono Y, Nakane Y, Nakamura Y, Kobayashi M, Fukao A, Oorui M, Horiguchi I, Yamamoto Y, Tachimori H, Takeshima T, Naganuma Y, Iwata N, Uda H, Nakane H, Watanabe M, Funayama K, Furukawa TA, Hata Y, Ahiko T, Kikkawa T. Epidemiological aspects of intermittent explosive disorder in Japan: prevalence and psychosocial comorbidity: findings from the World Mental Health Japan Survey 2002-2006." *Psychiatry Research* 186(2-3): 384-389, 2011.
- 6) Sawamura K, Ito H, Koyama A, Tajima M, Higuchi T: The effect of an educational leaflet on depressive patients' attitudes toward treatment. *Psychiatry Res* 177: 184-187, 2010.

- 7) Sudo A, Yamauchi T: Risk cognition and risk behaviors concerning sexual victimization in female undergraduates. *Pers Individ Dif* 49: 13-18, 2010.
- 8) 瀬戸屋 希, 萱間真美, 角田 秋, 立森久照, 船越明子, 伊藤順一郎: 精神科訪問看護における家族ケアの実施状況と, 家族ケアに関連する利用者の特徴. *日本社会精神医学会雑誌(0919-1372)20 巻 1 号*: 17-25.2011.
- 9) 河野稔明, 白石弘巳, 立森久照, 竹島 正: 「精神保健医療福祉の改革ビジョン」における「退院率」の定義に関する注意点. *精神医学* 52(6): 583-589, 2010.
- 10) 河野稔明, 竹島 正, 小山明日香, 立森久照, 長沼洋一: 「精神保健福祉資料」に係る電子調査票の開発. *日本精神科病院協会雑誌* 29(9): 874-878, 2010.
- 11) 赤澤正人, 松本俊彦, 勝又陽太郎, 木谷雅彦, 廣川聖子, 高橋祥友, 平山正実, 亀山晶子, 竹島 正: アルコール関連問題を抱えた自殺既遂者の心理社会的特徴—心理学的剖検を用いた検討—. *日本アルコール・薬物医学会雑誌* 45(2): 104-118, 2010.
- 12) 赤澤正人, 松本俊彦, 勝又陽太郎, 木谷雅彦, 廣川聖子, 高橋祥友, 川上憲人, 渡辺直樹, 平山正実, 竹島 正: 死亡 1 年前にアルコール関連問題を呈した自殺既遂者の心理社会的特徴. *精神医学* 52(6): 561-572. 2010.
- 13) 赤澤正人, 松本俊彦, 勝又陽太郎, 木谷雅彦, 廣川聖子, 高橋祥友, 川上憲人, 渡部直樹, 平山正実, 亀山晶子, 横山由香里, 竹島 正: 死亡時の就労状況からみた自殺既遂者の心理社会的類型について—心理学的剖検を用いた検討—. *日本公衆衛生雑誌* 57(7): 550-560, 2010.
- 14) 赤澤正人, 松本俊彦, 立森久照, 竹島 正: アルコール関連問題を抱えた人の自殺関連事象の実態と精神的健康への関連要因. *精神神経学雑誌* 112(8): 720-733, 2010.
- 15) 小山明日香, 立森久照, 河野稔明, 竹島 正: 精神病床長期在院患者の転院・死亡を考慮した退院状況の指標の検討. *日本公衆衛生雑誌* 58(1): 40-46, 2011.
- 16) 亀山晶子, 松本俊彦, 赤澤正人, 勝又陽太郎, 木谷雅彦, 廣川聖子, 竹島 正: 負債を抱えた中高年自殺既遂者の心理社会的特徴. *精神医学* 52 (9): 903-907, 2010.

(2) 総説

- 1) 竹島 正: 精神保健医療福祉と自殺対策. *日本精神科病院協会雑誌* 29(3): 10-15, 2010.
- 2) 竹島 正: 啓発とは何か. *精神医学* 52(6): 530-531, 2010.
- 3) 竹島 正, 立森久照, 河野稔明, 小山明日香, 長沼洋一: 「精神保健医療福祉の改革ビジョン」の成果に関する研究. こころの健康と病気—こころの健康増進方策, 病気の原因解明とその対策がここまで発展しています—, 財団法人 精神・神経科学振興財団, pp3-13, 2010.
- 4) 竹島 正: 家族会とともに取り組む. *精神科* 17(3): 281-286, 2010.
- 5) 竹島 正: 精神保健と地域づくりのつながり 自殺予防を糸口に. *公衆衛生* 74(11): 950-954, 2010.
- 6) 竹島 正, 的場由木: 公衆衛生の精神保健活動の課題—地域づくりにむけて. *公衆衛生* 74(12): 1034-1037, 2010.
- 7) 竹島 正: 活動の始まりの頃—サバイバーの系譜. *こころの健康* 25(2): 29-34, 2010.
- 8) 竹島 正: 自殺予防と精神保健医療の役割. *精神神経学雑誌* 113(1): 68-69, 2011.
- 9) 竹島 正: 自殺対策における自殺とは何か. *精神神経学雑誌* 113(1): 70-73, 2011.
- 10) 竹島 正, 宇田英典, 眞崎直子: 地域のメンタルヘルスの問題はどのように変わっているのですか?. *公衆衛生* 75(4): 321-325, 2011.
- 11) 竹島 正, 立森久照, 河野稔明, 佐々木 一: 今の精神科医の人数で, 統合失調症患者のケアができるのか—今後の精神科医療に向けて—. *こころのりんしょう à la carte* 29(2): 263-267, 2010.
- 12) 石倉文信, 禧久孝一, 桑原 寛, 竹島 正, 吉野比呂子, 岩井英典, 斉藤幸光: (パネルディスカッション) 「異業種間でのハイリスク者を包括的に支援するためのネットワークを構築する意義と各業種の役割」. *日本司法書士会連合会*, 2010.

- 13) 立森久照：一般住民中の精神疾患および精神保健的問題. 公衆衛生 74(7): 603-606, 2010.
- 14) 立森久照：精神疾患についての国民意識. 公衆衛生 74(8): 701-704, 2010.
- 15) 長沼洋一, 立森久照, 竹島 正：精神保健の疫学研究の現状と課題. 公衆衛生 74(10): 870-873, 2010.
- 16) 河野稔明, 竹島 正：精神科病院における行動制限の状況とその背景. 心と社会 42(1): 68-76, 2011.
- 17) 勝又陽太郎：若年自殺既遂者の心理社会的特徴と予防対策. 日本社会精神医学会雑誌, 19(1): 58-62, 2010.
- 18) 勝又陽太郎, 竹島 正：心理学的剖検. 臨床精神医学 39(11): 1425-1429, 2010.
- 19) 勝又陽太郎：学校で出会ううそ ころの科学 156: 85-88, 2011.
- 20) 赤澤正人, 竹島 正：自殺と自殺予防対策の現状一働き盛りの人の自殺を中心に. 地方公務員 安全と健康フォーラム 75: 9-12, 2010.
- 21) 赤澤正人, 竹島 正, 松本俊彦, 江口のぞみ：自殺の心理学的剖検からみたこれからの自殺対策. 保健の科学:52(7): 441-446, 2010.
- 22) 赤澤正人：調査で浮かび上がった飲酒問題群に必要な対策は. Be 26(2): 26-30, 2010.
- 23) 廣川聖子, 竹島 正：ころの健康問題に栄養士ができること. 食生活 104(6): 36-42, 2010.
- 24) 川島大輔, 川野健治：自殺の危機介入スキル尺度〔日本語版SIRI〕. 臨床精神医学 39 巻増刊号: 851-858, 2010.
- 25) 浅井智久, 山内貴史, 杉森絵里子, 坂東奈緒子, 丹野義彦：統合失調型パーソナリティと統合失調症の連続性. 心理学評論 53(2): 240-261, 2010.

(3) 著書

- 1) 竹島 正：ストレスところの病気. 六訂版 家庭医学大全科, 法研, pp772-773, 2010.
- 2) 立森久照, 竹島 正：平成21年度自殺対策強化のための基礎資料. 精神保健福祉白書2011年版 岐路に立つ精神保健医療福祉—新たな構築を目指して. 精神保健福祉白書編集委員会＝編集：中央法規出版, 東京, pp33, 2010.
- 3) 立森久照：解説（精神科医療施設, 患者数）. 精神保健福祉白書2011年版 岐路に立つ精神保健医療福祉—新たな構築を目指して. 精神保健福祉白書編集委員会＝編集：中央法規出版, 東京, pp215-216, 2010.
- 4) 立森久照：(SST) 医療・病院管理用語事典（新版）. 日本医療・病院管理学会学術情報委員会編：市ヶ谷出版社, 東京, pp24, 2010.
- 5) 長沼洋一：解説（都道府県別, 医療費）. 精神保健福祉白書2011年版 岐路に立つ精神保健医療福祉—新たな構築を目指して. 精神保健福祉白書編集委員会＝編集：中央法規出版, 東京, pp216-217, 2010.
- 6) 小山明日香：解説（医療観察法, 自殺, 地域生活支援, 雇用・職業）. 精神保健福祉白書2011年版 岐路に立つ精神保健医療福祉—新たな構築を目指して. 精神保健福祉白書編集委員会＝編集：中央法規出版, 東京, pp217, 2010.
- 7) 廣川聖子：1 章. 精神科薬物療法の基礎知識 3. アドヒアランスとは何か. 吉浜文洋編：精神科ナースが行う服薬指導. 中山書店, 東京, pp20-24, 2010.
- 8) 川島大輔, 川野健治：遺族ケア. 張賢徳編：精神科臨床リュミエール 29 「自殺予防の基本戦略」. 中山書店, 東京, pp219-225, 2011.

(4) 研究報告書

- 1) 竹島 正：精神・神経疾患に係る大規模コホートスタディの構築に関する研究. 平成 21 年度厚生労働省精神・神経疾患研究委託費報告集, pp565-567, 2009.
- 2) 竹島 正：精神・神経疾患に係る大規模コホートスタディの構築に関する研究. 平成 22 年度国立精神・神経医療研究センター精神・神経疾患研究開発費「精神・神経疾患に係る大規模コホートスタディの構築に関する研究（主任研究者：竹島 正）」総括・分担研究報告書(平成 21 年度～22 年度), pp7-6, 2011.
- 3) 竹島 正：精神保健医療福祉体系の改革に関する研究. 平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「精神保健医療福祉体系の改革に関する研究（研究代表者：竹島 正）」総括・分担研

- 究報告書, pp1-8, 2011.
- 4) 竹島 正, 趙 香花, 河野稔明, 小山明日香, 立森久照, 長沼洋一, 廣川聖子:「改革ビジョン」の進捗状況のモニタリングと評価に関する研究－「精神保健医療福祉の改革ビジョン」前期におけるマクロ実態の変化－. 平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業)「精神保健医療福祉体系の改革に関する研究 (研究代表者: 竹島 正)」総括・分担研究報告書, pp9-27, 2011.
 - 5) 竹島 正, 河野稔明, 長沼洋一, 小山明日香, 趙 香花, 廣川聖子, 立森久照:「改革ビジョン」の進捗状況のモニタリングと評価に関する研究－「精神保健福祉資料」に係る電子調査票の利用状況と回答時期の変化－. 平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業)「精神保健医療福祉体系の改革に関する研究 (研究代表者: 竹島 正)」総括・分担研究報告書, pp29-34, 2011.
 - 6) 竹島 正, 小山明日香, 河野稔明, 立森久照, 長沼洋一:「改革ビジョン」の進捗状況のモニタリングと評価に関する研究－「かえる・かわる 精神保健医療福祉の改革ビジョン研究ページ」の運用について－. 平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業)「精神保健医療福祉体系の改革に関する研究 (研究代表者: 竹島 正)」総括・分担研究報告書, pp35-39, 2011.
 - 7) 竹島 正, 立森久照, 松本俊彦, 川野健治, 稲垣正俊, 樋口輝彦:「改革ビジョン」の進捗状況のモニタリングと評価に関する研究－メディアカンファレンスの実施報告－. 平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業)「精神保健医療福祉体系の改革に関する研究 (研究代表者: 竹島 正)」総括・分担研究報告書, pp41-45, 2011.
 - 8) 竹島 正, 大類真嗣, 廣川聖子, 立森久照, 森 隆夫, 秋田宏弥, 川野健治:自殺の心理学的剖検の実施に関する研究－精神医療の場で経験している自殺ならびに自殺予防に役立っていると考えられる取組みについての調査－. 平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業)「自殺の原因分析に基づく効果的な自殺防止対策の確立に関する研究 (研究代表者: 加我牧子)」総括・分担研究報告書, pp13-20, 2011.
 - 9) 竹島 正, 河野稔明, 立森久照:既存の統計資料を用いた機能分化の現状分析と将来予測. 平成 21 年度厚生労働科学研究費補助金 (こころの健康科学研究事業)「精神科病院の機能分化に関する実態の分析と方法論の開発に関する研究 (研究代表者: 山内慶太)」総括・分担研究報告書, pp89-108, 2010.
 - 10) 竹島 正, 島田達洋, 尾島俊之, 野田龍也, 山本智一, 入野 康, 山下俊幸, 小高 晃, 小泉典章, 稲垣 中, 小口芳世, 椎名明大, 小山明日香, 猪飼紗恵子, 瀬戸秀文, 吉住 昭:医療観察法導入後における触法精神障害者への精神保健福祉法による対応に関する研究 その 2 医療観察法導入後における精神保健福祉法第 25 条に基づく検察官通報の現状に関する研究. 平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業)「重大な他害行為をおこした精神障害者の適切な処遇及び社会復帰の推進に関する研究 (研究代表者: 平林直次)」総括・分担報告書, pp93-99, 2011.
 - 11) 竹島 正, 三井敏子, 金田一正史, 小泉典章, 高岡道雄, 小山明日香, 吉住 昭:医療観察法導入後における触法精神障害者への精神保健福祉法による対応に関する研究 その 3 精神保健福祉法第 26 条による通報となった者の実態把握. 平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業)「重大な他害行為をおこした精神障害者の適切な処遇および社会復帰の推進に関する研究 (研究代表者: 平林直次)」総括・分担報告書, pp93-99, 2011.
 - 12) 白石弘巳, 竹島 正, 趙 香花, 長沼洋一, 堀井茂男, 野口正行, 河野稔明, 立森久照:精神障害者等のニーズ把握及び権利擁護にあたる民間団体の育成に関する研究－医療保護入院患者の保護者に関する研究－. 平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業)「精神保健医療福祉体系の改革に関する研究 (研究代表者: 竹島 正)」総括・分担研究報告書, pp115-127, 2011.
 - 13) 山中朋子, 反町吉秀, 勝山和明, 和田陽市, 宇田英典, 竹島 正:平成 21 年度地域保健総合推進事業 (全国保健所長会協力事業)「保健所における自殺対策の推進に関する研究」報告書, 日本公衆衛生協会, 2010.
 - 14) 宇田英典, 高岡道雄, 東海林文男, 加納紅代, 岸本益実, 竹島 正:平成 21 年度厚生労働科学研究費補助金 (健康安全・危機管理対策総合研究事業)「健康危機発生時における行政機関相互の適切な連携体制及び活動内容に関する研究 (研究代表者: 多田羅浩三) 精神保健分野」報告書, pp341-400, 2010.

- 15) 伊藤弘人, 西田淳志, 水野雅文, 鈴木友理子, 杉浦寛奈, 野田寿恵, 藤本美智, 竹島 正, 趙 香花: 海外における精神科入院医療制度について. 平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業) 「精神障害者への対応への国際比較に関する研究 (主任研究者: 中根允文)」総括・分担研究報告書, pp11-21, 2011.
- 16) 宇田英典, 高岡道雄, 石丸泰隆, 加納紅代, 本屋敷美奈, 竹島 正, 工藤一恵: 健康危機発生時における行政機関相互の適切な連携体制及び活動内容に関する研究 (精神保健分野). 平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金 (健康安全・危機管理対策総合研究事業) 「健康危機発生時における行政機関相互の適切な連携体制及び活動内容に関する研究 (研究代表者: 多田羅浩三)」報告書, pp731-734, 2011.
- 17) 宇田英典, 高岡道雄, 石丸泰隆, 加納紅代, 本屋敷美奈, 竹島 正, 工藤一恵: 精神保健分野における保健所の危機管理体制に関するガイドライン. 平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金 (健康安全・危機管理対策総合研究事業) 「健康危機発生時における行政機関相互の適切な連携体制及び活動内容に関する研究 (研究代表者: 多田羅浩三)」報告書 別冊 (マニュアル, ガイドライン, 手引き), pp209-292, 2011.
- 18) 立森久照: 精神・神経疾患に係る大規模コホートスタディの実施計画の検討 (平成 21 年度). 平成 22 年度国立精神・神経医療研究センター精神・神経疾患研究開発費 「精神・神経疾患に係る大規模コホートスタディの構築に関する研究 (主任研究者: 竹島 正)」総括・分担研究報告書(平成 21 年度~22 年度), pp17-20, 2011.
- 19) 立森久照, 長沼洋一, 伊藤順一郎, 川野健治, 鈴木友里子, 三島和夫, 和田 清, 小川雅代, 嶋根卓也, 亀井雄一: 精神・神経疾患に係る大規模コホートスタディの実施計画の検討. 平成 22 年度国立精神・神経医療研究センター精神・神経疾患研究開発費 「精神・神経疾患に係る大規模コホートスタディの構築に関する研究 (主任研究者: 竹島 正)」総括・分担研究報告書(平成 21 年度~22 年度), pp43-45, 2011.
- 20) 立森久照, 河野稔明, 長沼洋一, 小山明日香, 趙 香花, 廣川聖子, 竹島 正: 精神保健医療福祉体系の改革のモニタリングの詳細分析. 平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業) 「精神保健医療福祉体系の改革に関する研究 (研究代表者: 竹島 正)」総括・分担研究報告書, pp47-61, 2011.
- 21) 伊藤雅之, 野村芳子, 松石豊次郎, 立森久照: レット症候群全国疫学調査. 平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金 (難治性疾患克服研究事業) 「レット症候群の診断と予防・治療法確立のための臨床および生物化学の集学的研究 (研究代表者: 伊藤雅之)」平成 22 年度総括・分担研究報告書, pp13-14, 2011.
- 22) 安西信雄, 長沼洋一, 長沼葉月, 平林直次, 坂田増弘, 池淵恵美: 精神科デイ・ケアの有効活用に関する研究. 平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業) 「精神保健医療福祉体系の改革に関する研究 (研究代表者: 竹島 正)」総括・分担研究報告書, pp87-98, 2011.
- 23) 松本俊彦, 勝又陽太郎, 赤澤正人, 廣川聖子, 亀山晶子, 横山由香里, 白川教人, 竹島 正: 自殺既遂者の心理社会的特徴に関する研究 (4)自殺関連行動の経験の有無による自殺既遂者の特徴の分析. 平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業) 「自殺の原因分析に基づく効果的な自殺防止対策の確立に関する研究 (研究代表者: 加我牧子)」総括・分担研究報告書, pp47-53, 2011.
- 24) 松本俊彦, 赤澤正人, 竹島 正, 白川教人, 藤田利治, 勝又陽太郎, 廣川聖子, 亀山晶子, 横山由香里: 自殺既遂者の心理社会的特徴に関する研究 (1)対象の属性に関する全国自殺既遂者・パイロット研究対象者との比較. 平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業) 「自殺の原因分析に基づく効果的な自殺防止対策の確立に関する研究 (研究代表者: 加我牧子)」総括・分担研究報告書, pp21-28, 2011.
- 25) 松本俊彦, 赤澤正人, 勝又陽太郎, 廣川聖子, 亀山晶子, 横山由香里, 白川教人, 竹島 正: 自殺既遂者の心理社会的特徴に関する研究 (3)労働者の主たる役割別からみた検討. 平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業) 「自殺の原因分析に基づく効果的な自殺防止対策の確立に関する研究 (研究代表者: 加我牧子)」総括・分担研究報告書, pp37-45, 2011.
- 26) 松本俊彦, 廣川聖子, 勝又陽太郎, 赤澤正人, 亀山晶子, 横山由香里, 白川教人, 竹島 正: 自殺既遂者

- の心理社会的特徴に関する研究 (5)精神科治療の有無から見た検討. 平成22年度厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業)「自殺の原因分析に基づく効果的な自殺防止対策の確立に関する研究(研究代表者:加我牧子)」総括・分担研究報告書, pp55-68, 2011.
- 27) 萱間真美, 瀬戸屋 希, 大熊恵子, 角田 秋, 林 亜希子, 廣川聖子: 精神科訪問看護有効活用に関する研究. 平成22年度厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業)「精神保健医療福祉体系の改革に関する研究(研究代表者:竹島 正)」総括・分担研究報告書, pp99-105, 2011.
- 28) 趙 香花, 竹島 正: 欧米を主とした諸外国の精神保健医療福祉政策の調査, 評価—東アジア諸国の精神保健対策における欧米の影響と独自性—. 平成22年度厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業)「精神障害者への対応への国際比較に関する研究(主任研究者:中根允文)」総括・分担研究報告書, pp28-41, 2011.
- 29) 松本俊彦, 亀山晶子, 勝又陽太郎, 赤澤正人, 廣川聖子, 横山由香里, 白川教人, 竹島 正: 自殺既遂者の心理社会的特徴に関する研究 (2)性差からみた検討. 平成22年度厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業)「自殺の原因分析に基づく効果的な自殺防止対策の確立に関する研究(研究代表者:加我牧子)」総括・分担研究報告書, pp29-35, 2011.

(5) 翻訳

- 1) 勝又陽太郎, 福原俊太郎, 川西智也: 日常の援助場面における精神分析的アプローチ—地域精神保健の現場で働く援助者のための入門書. 自殺予防総合対策センターブックレット No.7, 東京, 2010. (Victorian Association of Psychoanalytic Psychotherapists: Psychoanalytic approaches to common clinical situations: an introduction for clinicians and managers in public mental health settings. Richmond, 2008)
- 2) 松本俊彦(監訳), 今村扶美, 勝又陽太郎, 木谷雅彦, 赤澤正人, 廣川聖子, 菅原靖子(訳): ダグラス・ジェイコブズ, バレント・ウォルシュ, モイラ・マックデイト, シャロン・ピジョン著「学校における自傷予防〜『自傷のサイン』プログラム実施マニュアル」. 金剛出版, 東京, 2010. (Jacobs D, Walsh B, McDade M, Pigeon S: Signs of self-injury: ACT to prevent self-injury high school implementation guide and resources, Screening for Mental Health, Inc. and The Bridge of Central MA, 2007.)
- 3) 津田彰, 山崎久美子(監訳) 丹野義彦, 山内貴史(共訳): 心理療法の諸システム [第6版] 多理論統合的分析 第10章認知療法. 金子書房, 東京, 2010. (Prochaska JO, Norcross JC: Systems of psychotherapy: a transtheoretical analysis. pp311-350, 2007.)

(6) その他

- 1) 竹島 正: (書評) プライマリ・ケア医による自殺予防と危機管理—あなたの患者を守るために—. 日本社会精神医学会雑誌 19(1): 127, 2010.
- 2) 竹島 正: 精神衛生と精神保健. 土居健郎先生追悼文集—心だけは永遠—, 東京, pp56-57, 2010.
- 3) 竹島 正: 日本社会精神医学会. 精神医学 52(6): 607-608, 2010.
- 4) 竹島 正, 脇 節子, 勝又浜子, 梅原和恵, 梶本まどか, 新塘久美子: (座談会) 自殺予防と保健師活動. 公衆衛生情報 40(7): 6-18. 東京, 2010.
- 5) 高橋祥友, 竹島 正: 特集 1 過労自殺 法律家と精神科医の対話—特集企画にあたって—. Depression Frontier 12: 7, 2010.
- 6) 赤澤正人: 自殺予防とアルコール. 全国精神保健福祉連絡協議会会報 55号: 7, 2010.
- 7) 廣川聖子, 竹島 正: 統合失調症 Q&A. こころのりんしょう à-la-carte 29(2): 190, 2010.
- 8) 勝又陽太郎: 自殺予防対策の発展に向けて—心理学的剖検の実践. 週刊医学界新聞 2906: 6, 2010.
- 9) 小山明日香: 「かえるかわる」の 630 調査データの活用. 全国精神保健福祉連絡協議会会報 55号: 8-9, 2010.

B. 学会・研究会における発表

(1) 学会特別講演, 教育講演, シンポジウム, ワークショップ, パネルディスカッション等

- 1) Takeshima T: The Challenge of Suicide Prevention: How Can we Improve Our Efforts?. 4th Asia Pacific Regional Conference of the International Association for Suicide Prevention 2010, Brisbane, 2010.11.19.
- 2) 竹島 正, 高橋洋友, 松本俊彦, 川野健治, 稲垣正俊: (シンポジウム) 「自殺予防と精神保健医療の役割」自殺対策における自殺とは何か. 第106回日本精神神経学会学術総会, 広島, 2010.5.21.
- 3) 竹島 正: (指定発言者) 自殺予防! 精神科看護師の果たす役割は. 日本精神科病院協会主催 学術教育研修会「看護部門」, 山形, 2010.6.24.
- 4) 竹島 正: (企画及び座長) シンポジウム「うつと生きる」. 「うつ病を知る日」東京会場. 東京, 2010.10.2.
- 5) 竹島 正, 松下武志, 世良守行: (パネルディスカッション) アルコール依存症への偏見解消のために. 第32回関東ブロック断酒研修会, 東京, 2011.2.11.
- 6) 山田和浩, 久田 恵, 松本俊彦, 桑原 寛, 柳田邦男, 竹島 正 (企画及び座長): いきるを支える鎌倉・逗子・葉山. 普及啓発講演会シンポジウム, 神奈川, 2010.9.23.
- 7) 久保真一, 松下幸生, 樋口 進, 森田展彰, 松本俊彦, 竹島 正(座長): 3学会合同シンポジウム4「自傷・自殺とアルコール・薬物問題—精神科と法医学の立場から—». 平成22年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会, 福岡, 2010.10.7.
- 8) 立森久照: 人口動態統計に基づいた自殺の特徴. 根拠ある自殺予防対策推進のために—若手研究書の提言—, 第34回日本自殺予防学会総会シンポジウムI, 東京, 2010.9.9.
- 9) 小山明日香: 精神保健福祉資料を用いた精神保健改革のモニタリング. 自殺対策研究会, 熊本, 2011.1.17.
- 10) 赤澤正人: 断酒会調査からみえる自殺の実態. 第32回日本アルコール関連問題学会 分科会1 アルコール・薬物関連問題と自殺. 神戸, 2010.7.17.
- 11) 赤澤正人: 生によるパネルディスカッション 私たちが語る「自殺防止」コーディネーター. 人間福祉学会第11回大会, 岐阜, 2010.11.20.

(2) 一般演題

- 1) 山内貴史, 竹島 正: 死亡診断書(検死検案書)の改訂が人口動態の自殺死亡統計に及ぼした影響. 第34回日本自殺予防学会総会 一般演題V 統計調査, 東京, 2010.9.11.
- 2) 小山明日香, 立森久照, 長沼洋一, 河野稔明, 竹島 正: 精神科新規入院患者の動態—「精神保健福祉資料(630調査)」データを用いた解析. 第106回日本精神神経学会学術総会, 広島, 2010.5.21.
- 3) 赤澤正人, 松本俊彦: 若年者の自殺関連行動と自尊感情. 日本心理学会第74回大会, 大阪, 2010.9.21.
- 4) 赤澤正人: 青少年の自殺関連行動と死生観の関連. 第34回日本死の臨床研究会年次大会, 岩手, 2010.11.6.

(3) 研究報告会

- 1) 竹島 正: 平成22年度精神・神経疾患研究開発費「精神・神経疾患に係る大規模コホートスタディの構築に関する研究(主任研究者 竹島 正)」第1回班会議. 東京, 2010.5.31.
- 2) 竹島 正: 「改革ビジョン」の進捗状況のモニタリングと評価に関する研究. 平成22年度厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業)「精神保健医療福祉体系に関する研究(研究代表者: 竹島 正)」第1回研究班会議, 東京, 2010.6.10.
- 3) 竹島 正: 自殺の心理学的剖検の実施に関する研究. 平成22年度厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業)「自殺の原因分析に基づく効果的な自殺防止対策の確立に関する研究(研究代表者: 加我 牧子)」第1回研究班会議, 東京, 2010.6.16.
- 4) 竹島 正: 欧米を主とした諸外国の精神保健医療福祉政策の調査, 評価. 平成22年度厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業)「精神障害者への対応への国際比較に関する研究(主任研究者: 中根 允文)」第1回研究班会議, 東京, 2010.7.3.

- 5) 竹島 正: 既存の統計資料を用いた機能分化の現状分析と将来予測. 平成22年度厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業)「精神科病院の機能分化に関する実態の分析と方法論の開発に関する研究(研究代表者: 山内慶太)」第1回班会議, 東京, 2010.9.10.
- 6) 竹島 正: 早期介入の精神保健システムにおける位置づけの検討. 平成22年度厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業) 精神病初回発症例の疫学研究および早期支援・早期治療法の開発と効果検証に関する臨床研究(主任研究者: 岡崎佑士) 第1回班会議, 東京, 2010.10.11.
- 7) 竹島 正: 平成22年度精神・神経疾患研究開発費「精神・神経疾患に係る大規模コホートスタディの構築に関する研究(主任研究者 竹島 正)」研究報告会, 東京, 2010.12.2.
- 8) 竹島 正: 平成22年度精神・神経疾患研究開発費「精神・神経疾患に係る大規模コホートスタディの構築に関する研究(主任研究者 竹島 正)」第2回班会議, 東京, 2010.12.2.
- 9) 竹島 正: 自殺の心理学的剖検の実施に関する研究. 平成22年度厚生労働科学研究費補助金 障害者対策総合研究事業「自殺の原因分析に基づく効果的な自殺防止対策の確立に関する研究(代表研究者: 加我牧子)」第2回班会議, 東京, 2011.1.6.
- 10) 竹島 正: 「改革ビジョン」の進捗状況のモニタリングと評価に関する研究. 平成22年度厚生労働科学研究費補助金 障害者対策総合研究事業「精神保健医療福祉体系の改革に関する研究(代表研究者: 竹島 正)」第2回班会議, 東京, 2011.1.13.
- 11) 竹島 正: 精神保健医療福祉体系の改革に関する研究. 厚生労働科学研究費研究成果等普及啓発事業 障害者対策総合(精神分野) 研究成果発表会, 東京, 2011.1.27.
- 12) 山内貴史, 竹島 正: 明治11年から明治31年のわが国における自殺死亡の推移. 平成22年度国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所研究報告会, 東京, 2011.5.23.
- 13) 稲垣正俊, 大槻露華, 小高真美, 石蔵文信, 渡辺洋一郎, 酒井ルミ, 山田光彦, 竹島 正: 一般身体科医のうつ病に対する態度. 平成22年度国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所研究報告会, 東京, 2011.5.23.
- 14) 立森久照, 長沼洋一: 精神・神経疾患に係る大規模コホート研究の実実施計画の検討. 平成22年度精神・神経疾患研究開発費「精神・神経疾患に係る大規模コホートスタディの構築に関する研究(主任研究者 竹島 正)」第1回班会議, 東京, 2010.5.31.
- 15) 立森久照: 精神保健医療福祉体系の改革のモニタリングと評価に関する研究. 平成22年度厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業)「精神保健医療福祉体系に関する研究(研究代表者: 竹島 正)」第1回研究班会議, 東京, 2010.6.10.
- 16) 立森久照, 長沼洋一: 精神・神経疾患に係る大規模コホート研究の実実施計画の検討. 「精神・神経疾患に係る大規模コホートスタディの構築に関する研究」. 平成22年度精神・神経疾患研究開発費 精神疾患関連研究班 研究報告会, 東京, 2010.12.2.
- 17) 立森久照, 長沼洋一: 精神・神経疾患に係る大規模コホート研究の実実施計画の検討. 平成22年度精神・神経疾患研究開発費「精神・神経疾患に係る大規模コホートスタディの構築に関する研究(主任研究者 竹島 正)」第2回班会議, 東京, 2010.12.2.
- 18) 立森久照: 精神保健医療福祉体系の改革のモニタリングの詳細分析. 平成22年度厚生労働科学研究費補助金 障害者対策総合研究事業「精神保健医療福祉体系の改革に関する研究(代表研究者: 竹島 正)」第2回班会議, 東京, 2011.1.13.
- 19) 立森久照, 河野稔明, 長沼洋一, 小山明日香, 趙 香花, 廣川聖子, 竹島 正: 統合失調症および認知症の在院患者数の概況. 平成22年度国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所研究報告会, 東京, 2011.5.23.
- 20) 赤澤正人, 立森久照, 松本俊彦, 竹島 正: 断酒会と共同したアルコール依存症患者のメンタルヘルス支援についての検討 - 自殺予防の観点に着目して -. 平成22年度国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所研究報告会, 東京, 2011.5.23.
- 21) 趙 香花, 長沼洋一, 堀井茂男, 野口正行, 河野稔明, 立森久照, 白石弘巳, 竹島 正: 医療保護入院患者

の保護者に関する研究. 平成22年度国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所研究報告会, 東京, 2011.5.23.

(4) その他

- 1) Takeshima T : Asia Pacific Community Mental Health Development Project ; Building Partnerships In Community Mental Health. International Conference-CUM-Workshop, New Delhi, 2011.2.17-19.
- 2) 竹島 正 : 第1回こころの健康政策構想会議. 東京, 2010.4.3.
- 3) 竹島 正 : 第2回こころの健康政策構想会議. 東京, 2010.4.10.
- 4) 竹島 正 : 第3回こころの健康政策構想会議. 東京, 2010.4.17.
- 5) 竹島 正 : 第4回こころの健康政策構想会議. 東京, 2010.4.24.
- 6) 竹島 正 : 第5回こころの健康政策構想会議. 東京, 2010.5.1-2.
- 7) 竹島 正 : 「支援付き住宅」推進会議. 東京, 2010.5.7.
- 8) 竹島 正 : 第6回こころの健康政策構想会議. 東京, 2010.5.8.
- 9) 竹島 正 : ふるさとの会事例検討会. 東京, 2010.5.12.
- 10) 竹島 正 : 第7回こころの健康政策構想会議. 東京, 2010.5.15.
- 11) 竹島 正 : 第8回こころの健康政策構想会議. 東京, 2010.5.23.
- 12) 竹島 正 : 金融庁多重債務者対応のマニュアル改訂会議. 東京, 2010.5.26.
- 13) 竹島 正 : ふるさとの会事例検討会. 東京, 2010.5.27.
- 14) 竹島 正 : 第25回「ふるさとの会」三晃荘第三者委員会. 東京, 2010.6.12.
- 15) 竹島 正 : 第2回総合的精神保健福祉政策検討委員会. 東京, 2010.6.17.
- 16) 竹島 正 : 第13回精神保健福祉士試験委員会. 東京, 2010.6.18.
- 17) 竹島 正 : 第10回自殺対策推進会議. 東京, 2010.6.22.
- 18) 竹島 正 : 練馬区精神障害者家族交流会. 東京, 2010.6.25.
- 19) 竹島 正 : 日本自殺予防学会大会運営委員会. 東京, 2010.6.26.
- 20) 竹島 正 : 「こころに平和を实行委員会」第7回総会. 東京, 2010.6.27.
- 21) 竹島 正, 立森久照, 松本俊彦, 赤澤正人, 廣川聖子, 勝又陽太郎, 川島大輔, 山内貴史 : 第1回メディアカンファレンス. 東京, 2010.6.28.
- 22) 竹島 正 : 平成 22 年度墨田区保健衛生協議会「こころの健康・自殺予防対策分科会(第 1 回)». 東京, 2010.6.29.
- 23) 竹島 正 : メンタルヘルス総合サイト運営委員会. 東京, 2010.6.29.
- 24) 竹島 正 : 日本精神神経学会「精神保健に関する委員会」. 東京, 2010.7.3.
- 25) 竹島 正 : 支援付き住宅意見交換会. 東京, 2010.7.5.
- 26) 竹島 正 : 心の健康政策構想会議拡大起草委員会. 東京, 2010.7.11.
- 27) 竹島 正 : 健康危機発生時における行政機関相互の適切な連携体制及び活動内容に関する研究(精神分野). 平成 22 年度厚生労働科学研究費補助事業「健康安全・危機管理対策総合研究事業」1 回分担事業班会議, 東京, 2010.7.14.
- 28) 竹島 正 : 精神保健福祉士試験委員会. 東京, 2010.7.16.
- 29) 竹島 正 : 立川麦の会定例会. 東京, 2010.7.17.
- 30) 竹島 正 : 自殺対策ネットワーク協議会, 東京, 2010.7.27.
- 31) 竹島 正 : 平成 22 年度墨田区保健衛生協議会「こころの健康・自殺予防対策分科会(第 2 回)». 東京, 2010.7.28.
- 32) 竹島 正, 立森久照 : 平成 22 年度(第 47 回) 全国精神保健福祉センター長会意見交換会, 東京, 2010.7.29.
- 33) 竹島 正 : 安全で健康に生きるためのプログラム, 東京, 2010.7.31.
- 34) 竹島 正 : 第 34 回日本自殺予防学会総会運営委員会, 東京, 2010.7.31.
- 35) 竹島 正 : 第 34 回日本自殺予防学会運営委員会, 東京, 2010.8.23.

- 36) 竹島 正：全国精神保健福祉連絡協議会常務理事会，東京，2010.8.24.
- 37) 竹島 正：大人も子どもも共に安全で健康に生きるためのプログラム2010. 埼玉，2010.8.21-22.
- 38) 竹島 正，松本俊彦，川野健治，稲垣正俊：自殺対策研究協議会，東京，2010.8.25-26.
- 39) 竹島 正：平成 22 年度墨田区保健衛生協議会「こころの健康・自殺予防対策分科会(第 3 回)」。東京，2010.8.31.
- 40) 竹島 正：自殺予防対策検討会. 新潟，2010.9.6.
- 41) 竹島 正：日本自殺予防学会第 2010 年度 1 回理事・評議員会. 東京，2010.9.10.
- 42) 竹島 正：自殺対策国民会議. 東京，2010.9.10.
- 43) 竹島 正，酒井明夫：(対談)「生きる～障がい当事者の絵画活動について」自殺防止セミナー—生きる—，岩手，2010.9.16.
- 44) 竹島 正：日本社会精神医学会常任理事会. 東京，2010.9.25.
- 45) 竹島 正，川野健治，稲垣正俊，立森久照，勝又陽太郎，赤澤正人，廣川聖子，山内貴史：第 2 回メディアカンファレンス—薬物療法をめぐって—。東京，2010.9.27.
- 46) 竹島 正：平成 22 年度墨田区保健衛生協議会「こころの健康・自殺予防対策分科会(第 4 回)」。東京，2010.9.29.
- 47) 竹島 正：ふるさとの会事例検討会. 東京，2010.9.30.
- 48) 竹島 正，小山明日香：平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「医療観察法導入後における触法精神障害者への精神保健福祉法による対応に関する研究（分担研究者：吉住 昭）」第 1 回班会議，東京，2010.10.1.
- 49) 竹島 正：精神保健と社会的取組の相談窓口の連携のための調査企画委員会. 東京，2010.10.14.
- 50) 竹島 正，赤澤正人，山内貴史：メディアカンファレンス，愛知，2010.10.22.
- 51) 竹島 正：平成 22 年度全国精神保健福祉連絡協議会理事会・総会. 沖縄，2010.10.28.
- 52) 竹島 正：第 58 回精神保健福祉全国大会. 沖縄，2010.10.29.
- 53) 竹島 正：第 2 回自殺予防対策検討会. 新潟，2010.11.4.
- 54) 竹島 正，松本俊彦，川野健治，赤澤正人，勝又陽太郎，川島大輔，大槻露華：第 3 回メディアカンファレンス. 東京，2010.12.14.
- 55) 竹島 正：企画戦略室勉強会「ヤフー株式会社における法務部の役割について」。東京，2010.12.15.
- 56) 竹島 正，松本俊彦，川野健治，稲垣正俊：平成 22 年度国立精神・神経医療研究センター自殺予防研修会. 東京，2010.12.17.
- 57) 竹島 正：日本社会精神医学会常任理事会. 東京，2010.12.18.
- 58) 竹島 正：第 3 回自殺予防対策検討会. 新潟，2010.12.20.
- 59) 竹島 正：平成 22 年度厚生労働科学研究費補助事業「健康安全・危機管理対策総合研究事業」3 回分担事業班会議，東京，2011.1.6.
- 60) 竹島 正：船橋市役所自殺対策庁内連絡会議. 千葉，2011.1.7.
- 61) 竹島 正：安心ネットづくり促進協議会 調査検証作業部会. 東京，2011.1.31.
- 62) 竹島 正，松本俊彦，川野健治，大槻露華，勝又陽太郎，川島大輔，赤澤正人，吉野比呂子：第 4 回メディアカンファレンス. 東京，2011.2.15.
- 63) 勝又陽太郎，廣川聖子：自殺対策の取り組み. 自治労衛生医療評議会 地域保健・精神保健セミナー分科会，東京，2010.12.12.
- 64) 竹島 正：精神保健に関する委員会. 日本精神神経学会，東京，2011.3.6.
- 65) 竹島 正，立森久照：メンタルヘルス総合情報サイト調査・研究事業企画委員会. 東京，2011.3.9.
- 66) 竹島 正：自殺防止対策事業評価委員会. 東京，2011.3.23.
- 67) 竹島 正，川野健治：被災者支援のための情報収集. 青森・岩手，2011.3.30-4.2.

C. 講演

- 1) 竹島 正：自殺対策から自殺予防へー地域における対策のあり方を考える。第4回熊本精神医学会セミナー，熊本，2010.7.9.
- 2) 竹島 正：自殺予防対策 わたしたちができる「生きるための支援」。ゲートキーパー養成講座，東京，2010.8.31.
- 3) 竹島 正：自殺予防と地域づくり。自殺対策シンポジウムひろしま，広島，2010.9.4.
- 4) 竹島 正：自殺予防と地域づくり。自殺対策シンポジウムinとくしま，徳島，2010.9.5.
- 5) 竹島 正：地域づくりと自殺予防。自殺防止セミナーー生きるー，岩手，2010.9.16.
- 6) 竹島 正：自殺予防と地域づくり。平成22年度自殺対策フォーラム，鳥取，2010.11.7.
- 7) 竹島 正：自殺とこころの健康問題の理解ーメディアカンファレンスの試み。平成22年度自殺対策メディアカンファレンス，北海道，2010.11.12.
- 8) 竹島 正：地域における自殺予防対策。自殺対策連絡会議，千葉，2010.12.7.
- 9) 竹島 正：精神保健福祉論ー変遷と今後ー。平成22年度大阪市精神保健福祉相談員資格取得講習会，大阪，2010.12.9.
- 10) 竹島 正：わが国の自殺防止活動について。ネットワーク大学コンソーシアム岐阜共同授業平成22年度後学期科目「人間福祉学」，岐阜，2011.1.12.
- 11) 竹島 正：これからのこころの医療。第1回地域からこころの医療を考える会，大阪，2011.1.22.
- 12) 竹島 正：自殺の現状と自殺予防のための地域づくり。自殺予防講演会，三重，2011.1.30.
- 13) 竹島 正：自殺とは何かー社会構造的視点から見た自殺についてー/地域における自殺予防。ゲートキーパー養成講座，東京，2011.3.11.
- 14) 赤澤正人：子どもの死生観について。狭山市富士見集会所人権セミナー，埼玉，2010.6.4.
- 15) 赤澤正人：お酒を飲むとよく眠れる？ ~不眠とうつ，お酒と上手に付き合うコツを知りましょう~。豊島区平成22年度第3回精神保健福祉セミナー講演会，東京，2011.3.10.
- 16) 廣川聖子：生きることを支援するためにー自殺対策におけるゲートキーパーの存在。練馬区ゲートキーパー養成講座，東京，2010.10.12,20.

D. 学会活動

(1) 学会役員

- 1) 竹島 正：日本社会精神医学会常任理事（総務企画委員長）
- 2) 竹島 正：日本精神衛生学会理事
- 3) 竹島 正：日本自殺予防学会理事
- 4) 竹島 正：日本精神保健福祉政策学会理事
- 5) 竹島 正：日本公衆衛生学会査読委員
- 6) 竹島 正：日本精神神経学会「精神科医療政策委員会」委員
- 7) 竹島 正：日本精神神経学会「精神保健に関する委員会」委員
- 8) 竹島 正：第34回日本自殺予防学会運営委員会委員
- 9) 竹島 正：International Advisory Council, Asia Australia Mental Health
- 10) 立森久照：日本社会精神医学会総務企画委員
- 11) 立森久照：日本社会精神医学会学術委員
- 12) 立森久照：日本社会精神医学会編集委員

(2) 座長

- 1) 立森久照，勝又陽太郎，井上 颯，森川すいめい，末木 新，高橋祥友，竹島 正(企画および座長)：根拠ある自殺予防対策推進のためにー若手研究書の提言ー。第34回日本自殺予防学会総会シンポジウムI，東京，2010.9.9.

- 2) 竹島 正(座長), 大塚耕太郎, 穎原浩司, 杉浦加代子, 森 祐美子, 角田玉青, 増井恒夫, 宮川治美, 小島秀幹, 中村 順: 第34回日本自殺予防学会総会一般演題Ⅷ. 東京, 2010.9.11.
- 3) 吉田銀一郎, 上岡陽江, 木下 浩, 大野 裕, 竹島 正(座長), 松本俊彦(座長): (シンポジウム)今後の自殺対策に向けて. 自殺対策推進のための関連学会等の意見交換会, 東京, 2011.3.1.
- 4) 岸本年史, 竹島 正(座長): 統合失調症—過去・現在・未来—. 日本社会精神医学会, 奈良, 2011.3.4.

E. 研修

(1) 研修企画

- 1) 竹島 正, 立森久照, 松本俊彦, 川野健治: 精神保健研究所主催第47回精神保健指導課程研修, 東京, 2010.6.30-7.2.
- 2) 竹島 正, 松本俊彦, 川野健治, 稲垣正俊: 第4回自殺総合対策企画研修, 東京, 2010.8.25-27.
- 3) 竹島 正, 松本俊彦, 川野健治, 稲垣正俊: 第2回精神科医療従事者自殺予防研修. 岡山, 2010.11.30-12.1.
- 4) 川野健治, 松本俊彦, 稲垣正俊, 竹島 正: 心理職自殺予防研修, 東京, 2010.7.5-6.
- 5) 稲垣正俊, 竹島 正, 松本俊彦, 川野健治: 第1回精神科医療従事者自殺予防研修, 東京, 2010.9.14-15.
- 6) 松本俊彦, 竹島 正, 川野健治, 稲垣正俊: 自殺予防のための自傷行為とパーソナリティ障害の理解と対応研修. 東京, 2010.11.8-9.

(2) 研修会講師

- 1) 竹島 正: 自殺対策から自殺予防へ. 愛知県精神保健福祉センター主催 平成22年度第1回自殺対策企画研修会, 愛知, 2010.5.13.
- 2) 竹島 正: 自殺予防対策. 日本精神科看護技術協会京都研修センター主催 うつ病看護 I研修会, 京都, 2010.6.4.
- 3) 竹島 正: 自殺予防—精神医療への期待—. 日本精神科病院協会主催 学術教育研修会「看護部門」, 山形, 2010.6.24.
- 4) 竹島 正: 全庁で自殺に取り組むために. 平成22年度自殺総合対策事業「庁内推進体制強化事業」庁内研修会, 新潟, 2010.7.8.
- 5) 竹島 正: 地域づくりとこころの健康対策. 平成22年度島根県市町村保健師等研修会, 島根, 2010.7.23.
- 6) 竹島 正: 「わが国の自殺者の現状と課題からみた行政視点」. 自殺予防対策緊急強化事業 岡崎市職員トップ研修, 愛知, 2010.8.12.
- 7) 竹島 正: 「自殺対策の考え方」. 平成22年度地域自殺対策研修会, 宮城, 2010.8.20.
- 8) 竹島 正: グループワーク「地域活動の中で, どのように自殺対策をすすめていくか」. 平成22年度地域自殺対策研修会第3回, 宮城, 2010.9.17.
- 9) 竹島 正: 「自殺対策と市町村保健活動」. 平成22年度地域自殺対策研修会第3回, 宮城, 2010.9.17.
- 10) 竹島 正: 「自殺の現状と対策の意義」～何故, 今自殺対策か!～. 蟹江町職員研修会, 愛知, 2010.10.22.
- 11) 竹島 正: 自殺対策を地域で考える. 「自殺防止対策地域連絡会」及び「自殺防止対策研修会」, 石川, 2010.11.5.
- 12) 竹島 正: 自殺の現状を知る. 平成22年度試行研修「自殺対策～大切な人を守るためにできること～」, 東京, 2010.12.3.
- 13) 竹島 正: 自殺対策の視点. 平成22年度地域自殺対策研修会, 山形, 2010.12.16.
- 14) 竹島 正: 精神保健福祉法第24条, 第25条, 26条通報の運用実態について. 第35回全国精神保健福祉業務研修会 in 品川宿, 東京, 2011.2.11.
- 15) 竹島 正: 自殺対策のこれから—大綱改正に向けて—. 自殺対策官民合同研修会 in 但馬, 兵庫, 2011.3.19.
- 16) 廣川聖子: 「心理学的剖検データベースを活用した自殺の原因分析に関する研究」から得られたこと. 自殺対策相談支援者研修会, 千葉, 2010.12.8.

- 17) 廣川聖子：自殺予防対策～地域で取り組む。練馬区精神保健関係者連絡会，東京，2011.1.20.
- 18) 廣川聖子：精神障害者の円滑な地域移行を図るために―地域連携クリニカルパスが果たすべきもの―。地域移行支援特別対策事業研修会，香川，2011.3.2.

F. その他

- 1) 新潟県自殺予防対策検討会：新潟県自殺予防対策検討会報告書―新潟県の自殺者数減少に向けた取組みについて―。2010.
- 2) 「あいち自殺対策地域白書」作成委員会：あいち自殺対策地域白書～地域力強化を目指して～。2010.

3. 薬物依存研究部

I. 研究部の概要

薬物依存研究部は、「麻薬・覚せい剤等に関する実態調査結果に基づく勧告」（総務庁，平成10年5月）により，機能強化が要請され，平成11年度より研究室の改組及び1研究室の新設がなされ，下記のように3研究室体制となっている。

心理社会研究室

- (1) 薬物乱用・依存及び中毒性精神障害の実態調査研究に関すること。
- (2) 薬物依存の発生要因に係わる心理学的及び社会学的調査研究に関すること。
- (3) 薬物依存の予防及びその指導，研修の方法の研究に関すること。

依存性薬物研究室

- (1) 薬物依存の発生要因に係わる精神薬理学的調査研究に関すること。
- (2) 依存性薬物の薬効に係わる精神薬理学的及び心理学的調査研究に関すること。
- (3) 中毒性精神障害に係わる精神薬理学的及び心理学的調査研究に関すること。

診断治療開発研究室

- (1) 薬物依存及び中毒性精神障害の診断技術及び治療法の開発の研究に関すること。
- (2) 薬物依存及び中毒性精神障害の治療システムの開発の研究に関すること。
- (3) 薬物依存及び中毒性精神障害の診断技術及び治療法の研修に関すること。

しかし，診断治療開発研究室には人員がつかず，2研究室体制のままであったが，平成20年10月から人員が付き，3研究室体制となった。従来同様，平成22年度も，官民を問わない各種問い合わせ，講師派遣，調査・研修等各種協力依頼が殺到し，それらは人員的限界を超えるものであったが，最大限の協力を惜しまなかったつもりである。

人員構成は，次のとおりである。部長：和田 清，心理社会研究室研究員：嶋根卓也，依存性薬物研究室長：船田正彦，診断治療開発研究室長：松本俊彦，流動研究員：富山健一，小堀栄子。

II. 研究活動

A. 疫学的研究

1) 飲酒・喫煙・薬物乱用に関する全国中学生意識・実態調査

1996年以降隔年実施している有機溶剤乱用開始の最頻年齢にあたる中学生を対象とした，わが国唯一最大規模の調査である。層別一段集落抽出法により選ばれた全国192校，91,350人から，121校（対象校の63.0%），47,607人（対象数の52.6%）の回答を得た。生涯経験率は有機溶剤で0.7%（男子：0.8%，女子：0.6%）であり，大麻では0.3%（男子：0.5%，女子：0.2%），覚せい剤では0.3%（男子：0.4%，女子：0.2%）であった。2008年調査と比較して，すべてにおいて減少していた。（平成22年度厚生労働科学研究費補助金：医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業。和田清，小堀栄子，嶋根卓也）

2) 全国病院調査

1987年以降隔年実施している薬物関連障害患者に関するわが国唯一の悉皆調査（有床精神科病院（1,612施設））である。63.3%の施設から723症例（有効症例671）の回答を得た。主乱用薬物としては『覚せい剤』53.1%，『睡眠薬・抗不安薬』17.7%，『多剤』8.5%，有機溶剤8.3%，『鎮咳薬』3.0%で，『睡眠薬・抗不安薬』が本調査上初めて2位となった。医薬品，ことに睡眠薬・抗不安薬の乱用，ならびに過量服薬の防止が喫緊の課題と考えられた（平成22年度厚生労働科学研究費補助金：医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業。松本俊彦，尾崎 茂，小林桜児，和田 清）。

3) 薬物乱用・依存者におけるHIV感染の実態とハイリスク行動についての研究

薬物依存症者におけるHIV/HCV/HBV感染の実態とハイリスク行動に関するわが国唯一の大規模定点調

査である。全国4カ所の医療施設調査（全国の精神科病院に入院中の覚せい剤関連精神障害患者の約13%を捕捉できる）及び6カ所での非医療施設調査を実施した。HIV抗体陽性者は認められなかった。しかし、覚せい剤関連精神障害患者でのHCV抗体陽性率は44.6%と相変わらず高かった。使用方法としては、「あぶり」が定着していた。「あぶり」はHIV感染の危険はないものの、薬物乱用自体にとっては気軽な手法であり、薬物乱用を拡大させる危険性があり、薬物乱用とHIV感染との難しい一面を浮き彫りにしている結果であった。（平成22年度厚生労働科学研究費補助金：エイズ対策研究事業、和田 清）

4) クラブユーザーにおける MDMA 等のクラブドラッグ乱用実態に関する研究

クラブ利用者におけるクラブドラッグ（MDMA 等）の乱用実態把握を目指したわが国初の調査である。3 店舗のクラブで開催された計 4 回のイベントで、673 名を勧誘し、324 名より調査協力を得た（回収率 48.1%、有効回答者 305 名）。1)対象者の 33.8%は何らかの薬物使用経験を有し、大麻が 32.1%と最も高く、MDMA7.9%、覚せい剤 6.2%、コカイン 6.2%、有機溶剤 4.6%、ケタミン 3.3%と続いた。2)MDMA 使用者の特徴として、①30 代男性が中心、②クラブカルチャーとの親和性が高い、③多剤乱用者が多い、④薬物使用に伴うエピソードが豊富、⑤攻撃的行動との合併例が多いという 5 点が挙げられた。（平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金：医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業、嶋根卓也、和田清）

5) 様々な依存症における医療・福祉の回復プログラムの策定に関する研究-向精神薬乱用と依存-

処方された向精神薬の乱用・依存の実態の一端を把握することを目的に、719 ヶ所の薬局（埼玉県薬剤師会会員保険薬局の 38.3%）の薬剤師を対象に重複処方・過量服薬に関する調査研究を実施した。①重複薬剤はエチゾラム（31.3%）が最も多く、酒石酸ゾルピデム（15.6%）、プロチゾラム（14.3%）と続いた。②重複した診療科としては、「内科+整形外科」という組み合わせが最も多く、エチゾラムの重複が高い頻度で発生していた。本研究は、薬剤師を情報源とした向精神薬重複処方調査としてはわが国初の試みである。（平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金：障害者対策総合研究事業、松本俊彦、嶋根卓也、和田清）

6) 大学新生における薬物乱用実態に関する研究（2010 年）

大学新生 346 名に対して無記名自記式の質問紙調査を実施した。①薬物乱用経験は対象者の 2.3%にみられ、内訳は向精神薬が 1.8%と最も多かった。②薬物をすすめられた経験は対象者の 2.9%にみられ、内訳は大麻が 1.8%と最も多かった。③約 15%の対象者が、大麻の栽培情報や乱用を促す情報を目にしたことがあり、その半数以上がインターネットを情報源としていた。（平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金：医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業、嶋根卓也、和田清）

7) 薬物依存者・アルコール依存者の自殺の実態解明と自殺予防に関する研究

複数の依存症専門医療機関に受診した SUD 患者と、複数の一般精神科医療機関に受診した DD 患者を対象に、自記式調査票による調査を行った。SUD 患者は全体としては DD 患者よりもうつおよび自殺傾向が軽症であったが、薬物乱用を伴う者、あるいは女性の場合には、DD 患者よりもはるかに深刻な自殺傾向が認められた。また、SUD 患者においては、若年者と女性、薬物乱用を伴うこと、うつ傾向が著明であることが自殺ハイリスク群の特徴であり、自殺企図時にアルコールや薬物を摂取した状態の者が多く、幻聴などの精神病症状を呈していた者も少なくないことも明らかにされた。（平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金：障害者総合対策研究事業、松本俊彦）

B. 臨床研究

1) 薬物依存症に対する認知行動療法プログラムの開発と効果に関する研究

独自に開発した認知行動療法による薬物依存症治療プログラム（SMARPP）、ならびに、SMARPP と同種の治療プログラムを、性質の異なる複数の医療施設、精神保健福祉センター、ダルク及びPFI 刑務所で実施し、介入前後の評価尺度の変化、治療継続状況等の評価を行った。その結果、いずれの施設でも薬物・

アルコール問題に関する問題意識や治療動機、自己効力感、精神的健康などに関する評価尺度上の好ましい変化が認められ、治療継続率、参加者・実施スタッフからも概ね高い評価を得ることができた。（平成22年度厚生労働科学研究費補助金：障害者総合対策研究事業、松本俊彦、平成22年度精神・神経疾患研究会開発費）

2) 医療観察法指定入院医療機関における物質使用障害治療プログラムの開発とその効果に関する研究

NCNP 病院医療観察法病棟における物質使用障害治療プログラムの介入効果判定研究を行った。物質使用障害治療プログラムによる介入後には、アルコール問題に関しては、SOCRATES の下位尺度「病識」および総得点において有意な上昇傾向が認められ、薬物問題に関しては自己効力感スケールの下位尺度「全般的な自己効力感変化」において有意な得点上昇が認められた。また、介入後には「抗酒剤」の服用率および自助グループへの参加同意率の顕著な上昇が認められた。（平成22年度精神・神経疾患研究会開発費、松本俊彦）

3) 司法関連施設における少年用薬物乱用防止教育ツールによる介入効果とその普及に関する研究

少年鑑別所に入所する薬物乱用者に対し、再乱用防止のための自習ワークブック「SMARPP-Jr.」を実施し、介入前後の評価尺度上の変化を検討した。その結果、自習ワークブックを用いた矯正施設での介入は、薬物乱用に対する問題意識を深め治療動機を向上させるのには有効であるが、薬物依存に対する自己効力感を高めるには、出所後の地域における継続した支援体制が必要であることが示唆された。（平成22年度厚生労働科学研究費補助金：医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業、松本俊彦）

4) 若年者向け薬物再乱用防止プログラムの開発に関する研究

若年者向け薬物再乱用防止プログラム OPEN を開発し、東京都立中部総合精神保健福祉センターにて実施し、プログラムの効果判定を開始した。対象者数が未だ少ないため、評価はできないが、効果的印象を得ている。（平成22年度厚生労働科学研究費補助金：医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業、嶋根卓也）

C. 基礎研究

1) 合成カンナビノイドの身体依存性に関する基盤的研究

大麻の精神活性成分である Δ^9 -THC と薬理作用が類似した合成カンナビノイド(脱法ドラッグ)の流通、乱用が問題になっているため、合成カンナビノイドである CP-55,940 の身体依存性について検討した。その結果、1)合成カンナビノイドの慢性使用は身体依存を形成すること、2)カンナビノイド退薬症候発現に、脳内ノルアドレナリン神経が関与していること、3)カンナビノイド受容体拮抗薬による退薬症候誘発試験は、合成カンナビノイドの身体依存形成能を予測するために有用な評価方法であることが示唆された。（平成22年度厚生労働科学研究費補助金：医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業、船田正彦、富山健一）

2) 合成カンナビノイドの細胞毒性評価に関する研究

CP-55,940, CP-47,497 および CP-47,497-C8 (合成カンナビノイド) について、NG108-15 (細胞樹立細胞株) を使用して、細胞毒性に関する検討を行った。NG108-15 細胞において、CP-55,940, CP-47,497 および CP-47,497-C8 は強力な細胞毒性を示し、この細胞毒性の発現には、カンナビノイド CB1 受容体が重要な役割を果たしていることが明らかになった。合成カンナビノイドは数多くの類縁誘導体が存在するため、培養細胞を利用した細胞毒性の評価は、迅速かつ正確な毒性評価法として有用であると考えられる。

(平成22年度精神・神経疾患研究会開発費：アルコールを含めた物質依存に対する病態解明及び心理社会的治療法の開発に関する研究、船田正彦、富山健一)

III. 社会的活動

当研究部は、研究部創設以来、厚生労働省に限らず、薬物乱用・依存対策に関係する各省庁・自治体・市民団体等と連携を取り続けてきており、独自に研修会を主催するのみならず、各種研修会への講師派遣、啓発用資料および教材作成、調査等への協力などを行っている（細目は研究業績参照）。

1) 保健医療行政・政策に関連する研究・調査、委員会等への貢献

・政府委員会

厚生労働省薬事・食品衛生審議会臨時委員（和田 清）、厚生労働省医薬食品安全局依存性薬物検討会委員（和田 清）、厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部精神・障害保健課「地域依存症対策推進モデル事業の評価に関する検討会」委員（和田 清）、法務省保護局「薬物事犯者に対する保護観察に関する検討会」メンバー（和田 清、松本俊彦）、薬物乱用防止戦略加速化プランワーキングチーム・内閣府大臣有識者ヒアリング参考人（松本俊彦）、第6回自殺・うつ病等対策プロジェクトチーム 向精神薬の処方に関する有識者からのヒアリング参考人（松本俊彦）、厚生労働省過量服薬対策ワーキングチーム検討委員（松本俊彦）、内閣府共生社会政策「スペインにおける青少年の薬物乱用対策に関する企画分析」企画分析委員（松本俊彦）、文部科学省スポーツ・青少年局「薬物乱用防止広報啓発活動推進協力者会議」委員（松本俊彦）

・その他公的委員会

東京都薬物情報評価委員会（和田 清）、東京都脱法ドラッグ専門調査委員会専門委員（船田正彦）、独立行政法人医薬品医療機器総合機構専門委員（和田 清）、東京地方裁判所登録精神保健判定医（松本俊彦）、世田谷区自殺対策連絡協議会会長（松本俊彦）、社団法人全国高等学校PTA連合会薬物乱用防止啓発パンフレット編集委員（嶋根卓也）、（社団法人）埼玉県薬剤師会職能委員会（嶋根卓也）

・研究成果の行政貢献

「薬物依存者・アルコール依存者の自殺の実態解明と自殺予防に関する研究」の成果が「向精神薬等の過量服薬への取組について」（障精発 0910 第1号）に寄与した。

2) 市民社会に対する一般的な貢献

- ・市民向け講演会：(IV. 研究業績 C.講演 参照)
- ・報道：(IV. 研究業績 G. その他(1)取材 参照)

3) 専門教育面における貢献

・研修会・研究会

- ・第24回薬物依存臨床医師研修会（主催）、第12回薬物依存臨床看護研修会（主催）
- ・各種研修会等への講師派遣（IV. 研究業績 C.講演 参照）

・大学教育

津田塾大学非常勤講師（嶋根卓也）、国立障害者リハビリテーションセンター学院非常勤講師（嶋根卓也）。

・その他

"Addiction" Editorial advisory board（和田 清）、Psychiatry and Clinical Neurosciences Reviewer（和田 清、松本俊彦）、星和書店『精神科治療学』編集委員（松本俊彦）

IV. 研究業績

A. 刊行物

(1) 原著論文

- 1) Tomiyama K, Kuriyama T, Nakashima H, Funada M, Ogawa Y, Arakawa Y: Analysis of relation between an increase in intracellular calcium and cell death mechanism in RCR-1 cells exposed to tributyltin chloride. Trace Nutrients Research 27 : 28-34, 2010.
- 2) Katsumata Y, Matsumoto T, Kitani M, Akazawa M, Hirokawa S, Takeshima T: School problems and suicide in Japanese young people. Psychiatry and clinical neurosciences 64:214-2

- 15, 2010.
- 3) Surasing Visrutaratna, Siriporn Wongchai, Manoon Jaikueankaew, Kobori Eiko, Kihara Masako, Kihara Masahiro: Sexual behavior of Japanese tourists visiting Thailand a key informant approach. *Journal of Public Health and Development* 8(1):33-44, January-April 2010.
 - 4) 近藤あゆみ, 和田 清: 薬物依存症民間リハビリテーション施設入所者の退所1年予後とその関連要因. *日本アルコール・薬物医学会雑誌* 45(3):175-181, 2010.
 - 5) 松本俊彦, 松下幸生, 奥平謙一, 成瀬暢也, 長 徹二, 武藤岳夫, 芦沢 健, 小沼杏坪, 森田展彰, 猪野亜朗: 物質使用障害患者における乱用物質による自殺リスクの比較—アルコール, アンフェタミン類, 鎮静剤・催眠剤・抗不安薬使用障害患者の検討から—. *日本アルコール・薬物医学会誌* 45 (6): 530-542, 2010.
 - 6) 松本俊彦, 千葉泰彦, 今村扶美, 小林桜児, 和田 清: 少年鑑別所における自習ワークブックを用いた薬物再乱用防止プログラムの試み. *精神医学* 52(12): 1161-1171, 2010.
 - 7) 赤澤正人, 松本俊彦, 勝又陽太郎, 木谷雅彦, 廣川聖子, 高橋祥友, 川上憲人, 渡辺直樹, 平山正実, 竹島 正: 死亡1年前にアルコール関連問題を呈した自殺既遂者の心理社会的特徴. *精神医学* 52(6): 561-572, 2010.
 - 8) 赤澤正人, 松本俊彦, 勝又陽太郎, 木谷雅彦, 廣川聖子, 高橋祥友, 川上憲人, 渡辺直樹, 平山正実, 亀山晶子, 横山由香里, 竹島 正: 死亡時の就労状況からみた自殺既遂者の心理社会的類型について～心理学的剖検を用いた検討～. *日本公衆衛生雑誌* 57 (7): 550-559, 2010.
 - 9) 亀山晶子, 松本俊彦, 赤澤正人, 勝又陽太郎, 木谷雅彦, 廣川聖子, 竹島 正: 負債を抱えた中高年自殺既遂者の心理社会的特徴. *精神医学* 52 (9): 903-907, 2010.
 - 10) 赤澤正人, 松本俊彦, 立森久照, 竹島 正: アルコール関連問題を抱えた人の自殺関連事象の実態と精神的健康への関連要因. *精神神経学雑誌* 112 (8): 720-733, 2010.
 - 11) 小林桜児, 松本俊彦, 千葉泰彦, 今村扶美, 森田展彰, 和田 清: 少年鑑別所入所者を対象とした日本語版 SOCRATES (Stages of Change Readiness and Treatment Eagerness Scale) の因子構造と妥当性の検討. *日本アルコール・薬物医学会誌* 45 (5): 437-451, 2010.
 - 12) 今村扶美, 松本俊彦, 小林桜児, 平林直次, 和田 清: 国立精神・神経医療研究センター病院における物質使用障害治療プログラムの開発と効果測定. *日本アルコール・薬物医学会誌* 45 (5): 452-463, 2010.
 - 13) 砂谷有里, 松本俊彦: ウェブサイト開設による自傷行為への影響—「自傷サイト」を開設した自傷者の語りにもとづく検討—. *精神科治療学* 26 (2): 241-250, 2011.
 - 14) 船田正彦: 合成カンナビノイド誘導体の薬理学的特性とその乱用について. *日本アルコール薬物医学会雑誌*. 45: 167-174, 2010.

(2) 総説

- 1) Kiyoshi Wada: The history and current state of drug abuse in Japan. *Annals of the New York Academy of Sciences (Addiction Reviews)* 1216: 62-72, 2011.
- 2) 和田 清: 特集 薬物乱用とその防止策. 1. 薬物乱用の動向. *医薬ジャーナル* 46 (7): 1781-1786, 2010.
- 3) 和田 清: 特集 薬物依存症 薬物乱用・依存の疫学. *日本臨床* 68(8): 1437-1442, 2010.
- 4) 和田 清: 薬物乱用・依存 最近の特徴. *ファルマシア* 46(9):876-880, 2010.
- 5) 和田 清: 精神作用物質使用障害の今日の実態. *精神神経学雑誌* 112(7): 651-660, 2010.
- 6) 和田 清: 特集 薬物乱用とその防止策. 1. 薬物乱用の動向. *医薬ジャーナル* 46 (7): 1781-1786, 2010.
- 7) 和田 清: 特集 薬物依存症 薬物乱用・依存の疫学. *日本臨床* 68(8): 1437-1442, 2010.
- 8) 和田 清: 薬物乱用・依存 最近の特徴. *ファルマシア* 46(9):876-880, 2010.
- 9) 和田 清: 精神作用物質使用障害の今日の実態. *精神神経学雑誌* 112(7): 651-660, 2010.

- 10) 和田 清,小堀栄子: 薬物依存と HIV/HCV 感染—現状と対策—. 日本エイズ学会誌 13(1): 1-7, 2011.
- 11) 松本俊彦: いじめと自傷行為. こころの科学 151: 70-76, 2010.
- 12) 松本俊彦: 地域保健従事者のための精神保健の基礎知識: 自殺問題から明らかになる地域保健の課題 1. 公衆衛生 74 (5): 419-422, 2010.
- 13) 松本俊彦: 自傷と自殺～「死にたいくらい」のつらさを生き延びる子どもたちの隠された傷. 月刊少年育成 650 (5): 16-21, 2010.
- 14) 松本俊彦: アディクション—精神科医が「否認」する「否認の病」. 精神科治療学 25 (5): 565-571, 2010.
- 15) 松本俊彦: 青年期の自殺とその予防—自傷行為に注目して—. ストレス科学 24 (4): 229-238, 2010.
- 16) 松本俊彦: アルコール・薬物使用障害の心理社会的治療. 医学のあゆみ 233 (12): 1143-1147, 2010.
- 17) 赤澤正人, 竹島 正, 松本俊彦, 江口のぞみ: 自殺の心理学的剖検からみたこれからの自殺対策. 保健の科学 52 (7): 441-446, 2010.
- 18) 松本俊彦: DSM-5 における摂食障害. 精神科治療学 25: 1071-1075, 2010.
- 19) 松本俊彦: DSM-5 における物質関連障害. 精神科治療学 25: 1077-1081, 2010.
- 20) 松本俊彦: 子どもの自傷行為への対応. 心とからだの健康 14 (9): 14-19, 2010.
- 21) 松本俊彦, 小林桜児: 精神作用物質使用障害の心理社会的治療: 再乱用防止のための認知行動療法を中心に. 精神神経学雑誌 112 (7): 672-676, 2010.
- 22) 松本俊彦: 薬物依存症～精神科医療関係者の「否認」する「否認の病」, 財団法人麻薬・覚せい剤乱用防止センター-NEWS LETTER 2010.8・第 83 号: 2-5, 2010.
- 23) 松本俊彦: アルコール・薬物依存症と摂食障害との併存例をめぐって. 精神神経学雑誌 112 (8): 766-773, 2010.
- 24) 松本俊彦: 第 2 章 精神作用物質使用による精神および行動の障害 4. 覚せい剤依存の心理社会的治療. 精神科治療学 25 増刊号「今日の精神科治療ガイドライン」, 68-71, 2010.
- 25) 松本俊彦: 第 7 章 成人のパーソナリティおよび行動の障害 コラム「自傷行為のパーソナリティ障害の兆候か」. 精神科治療学 25 増刊号「今日の精神科治療ガイドライン」, 246, 2010.
- 26) 松本俊彦: 物質依存症—治療戦略に役立つ生活歴,現病歴,家族関係. 精神科治療学 25 (11): 1489-1496, 2010.
- 27) 松本俊彦: 薬物臨床の最前線 SMARPP が丸ごとわかる! 第 1 回 スマーブ誕生前夜—マトリックス・モデルとの出会い. 季刊 Be! 101 号 2010.12: 74-78, 2010.
- 28) 松本俊彦: リストカットを超えて～「故意に自分の健康を害する行為」をどう捉えるか～. 青年期精神療法 7 (1): 4-14, 2010.
- 29) 松本俊彦: 覚せい剤依存症の精神療法—患者と家族に対する初回面接の工夫—. 臨床精神医学 39 (12): 1583-1587, 2010.
- 30) 松本俊彦: 職場における自殺予防～アルコール問題と自殺. 産業精神保健 18 (4): 296-300, 2010
- 31) 松本俊彦: 自殺総合対策における精神科医療の課題—総合的な精神保健的対策を目指して—. 精神神経学雑誌 113 (1): 81-85, 2011.
- 32) 松本俊彦: 薬物臨床の最前線 SMARPP が丸ごとわかる! 第 2 回 スマーブ始動! —せりがや病院での試み. 季刊 Be! 102 号 2011. 3: 68-73, 2011.
- 33) 松本俊彦: 覚せい剤依存症の精神療法—患者と家族に対する初回面接の工夫—. 財団法人麻薬・覚せい剤乱用防止センター-NEWS LETTER 2011.2・第 84 号: 2-5, 2011.
- 34) 松本俊彦: 7. アルコールとうつ病,自殺. 日本アルコール関連問題学会雑誌特別号: S12-S13, 2011.
- 35) 松本俊彦: 物質依存の強迫性・衝動性—渴望に対する薬物療法—. 臨床精神薬理 14: 607-614, 2011.
- 36) 船田正彦: 違法ドラッグ (いわゆる脱法ドラッグ) の乱用とその対策. こころの臨床アラカルト. 29: 127-131, 2010.
- 37) 船田正彦: 薬物依存評価のための動物モデル. -特集 薬物依存症のトレンド- 日本臨床. 68: 1459-146

4, 2010.

- 38) 舩田正彦：大麻の薬理作用と薬物依存性. 医薬ジャーナル. 46: 85-89, 2010.
- 39) 嶋根卓也：思春期における薬物乱用の実態と予防, 思春期学 29(1):13-18,2011.
- 40) 嶋根卓也：思春期の薬物乱用の現状と課題, 思春期学 28(3):267-272,2010.
- 41) 嶋根卓也：【ヘルシー・シティ,ヘルシー・コミュニティ】アディクション 薬物乱用・依存. Journal of Integrated Medicine.20 (5):356-359, 2010.
- 42) 嶋根卓也：薬物依存症—薬物依存症のトレンド—薬物依存症の予防・防止の社会的取り組み, 日本臨床 68(8):1531-1535,2010.
- 43) 森田展彰,嶋根卓也：薬物依存症—薬物依存症のトレンド—幻覚剤, 日本臨床 68(8):1486-1493,2010.

(3) 著書

- 1) 和田 清：II こころの病気の理解とその治療 13 依存症 薬物依存症. こころの科学 こころの医学事典 (樋口輝彦,野村総一郎 編). 日本評論社. 東京. pp.281-284, 2010.9.15.
- 2) 和田 清, 尾崎 茂, 近藤あゆみ：II章 物質依存の疫学と法律 物質乱用の疫学. 脳とこころのプライマリケア 8 依存 (編集: 福居顕二). シナジー. 東京. pp20-32,2011.3.15.
- 3) 松本俊彦：自傷行為と自殺企図～リストカット・OD などへの対応～. 杉山直也・河西千秋・井出広幸・宮崎 仁 編集 プライマリ・ケア医による自殺予防と危機管理～あなたの患者を守るために. pp96-105,南山堂, 東京, 2009.
- 4) 木村勝智, 井村 洋, 松本俊彦：IX ケースカンファランス 私が止めるしかない? 私でも止められる? セッション2 自殺念慮が完全に否定できない自傷患者にどう対応するか? 杉山直也・河西千秋・井出広幸・宮崎 仁 編集 プライマリ・ケア医による自殺予防と危機管理～あなたの患者を守るために. pp175-182, 南山堂, 東京, 2009.
- 5) 松本俊彦：第2章 第2節 5. 摂食障害, 自傷行為, 自殺行動, 内閣府政策統括官(共生社会政策担当)編 ユースアドバイザー養成プログラム (改訂版) ～関係機関の連携による個別的・継続的な若者支援体制の確立に向けて～. pp73-80, 内閣府政策統括官(共生社会政策担当)付青少年育成第1担当, 2010.
- 6) 松本俊彦：自傷と自殺. 齋藤万比古 (総編集) 松本英夫・傳田健三 (責任編集) 子どもの心の診療シリーズ 4. 子どもの不安障害と抑うつ. pp206-224, 中山書店, 東京, 2010.
- 7) 松本俊彦：VII章 思春期における心の問題—薬物乱用. 日野原重明・宮岡 等監修 飯田順三編集 脳とこころのプライマリケア 4, pp448-458, 株式会社シナジー, 東京, 2010.
- 8) 松本俊彦：精神科医療 薬物依存. 精神保健福祉白書編集委員会精神保健福祉白書 2011 年版 岐路に立つ精神保健福祉医療—新たな構築をめざして. pp153,中央法規出版, 東京, 2010.
- 9) 松本俊彦：3. Q: リスカーが来院したとき,自殺企図をほのめかしたとき. 清水将之監修 高宮静男・渡邊直樹編集 内科医,小児科医,若手精神科医のための青春期精神医学, pp249-253, 診断と治療社, 東京, 2010.
- 10) 松本俊彦：マトリックスモデルとは何か? 治療プログラムの可能性と限界. 龍谷大学矯正・保護研究センター編龍谷大学矯正・保護研究センター研究年報 No. 7. pp63-75, 龍谷大学矯正・保護研究センター, 京都, 2010.
- 11) 松本俊彦：V. 自殺プロセスの各段階での自殺予防 [自殺予防を念頭に置いた精神科治療] 6. 薬物乱用・依存. 張 賢徳編集 専門医のための精神科臨床リュミエール 29 自殺予防の基本戦略, pp89-95, 中山書店, 東京, 2011.
- 12) 松本俊彦：薬物依存対策と行政・保健機関. 福居顕二編 脳とこころのプライマリケア. 株式会社シナジー, 東京, pp573-583, 2011
- 13) 松本俊彦：アディクションとしての自傷行為～「故意に自分の健康を害する」行動の精神病理. 星和書店, 東京, 2011.
- 14) 松本俊彦, 小林桜児, 今村扶美: 薬物・アルコール依存症からの回復支援ワークブック. 金剛出版

(4) 監修

- 1) 和田 清(指導)：「一度だけでもダメ！薬物のこわさを知ろう」。小学保健ニュース No.922, (株) 少年写真新聞社, 2010年9月28日号。
- 2) 和田 清(監修)：薬物依存の脳内メカニズム。こころライブラリーイラスト版。講談社, 東京, 2010.11.30.
- 3) 松本俊彦 (監修)・社団法人日本音楽事業者協会違法薬物対策本部作成「It's BAD 違法薬物を許すな!」。社団法人日本音楽事業者協会違法薬物対策本部, 2010.
- 4) 松本俊彦 (責任変編集)：こころの科学 156 (2011年3月号) 特別企画「うその心理学」, 日本評論社, 東京, 2011
- 5) 渋井哲也著・松本俊彦 (監修)：薬物依存 第1巻 乱用と依存。汐文社, 東京, 2011
- 6) 渋井哲也著・松本俊彦 (監修)：薬物依存 第2巻 身近にひそむ危険。汐文社, 東京, 2011
- 7) 渋井哲也著・松本俊彦 (監修)：薬物依存 第3巻 対処と取り組み。汐文社, 東京, 2011
- 9) 嶋根卓也：薬物乱用防止パンフレット, お父さん, お母さん「うちの子に限って・・・」は危険です!! (社) 全国高等学校PTA連合会, 2011.

(5) 研究報告書

- 1) 和田 清：総合研究報告書 (平成 21～22 年度)。平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金 (医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業) 「薬物乱用・依存の実態把握と再乱用防止のための社会資源等の現状と課題に関する研究(H21-医薬一般-028)」。2011.3.31.
- 2) 和田 清：総括研究報告書。平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金 (医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業) 「薬物乱用・依存の実態把握と再乱用防止のための社会資源等の現状と課題に関する研究」(H21-医薬一般-028) 研究報告書。pp.1-pp.15, 2011.3.31.
- 3) 和田 清, 小堀栄子, 嶋根卓也, 立森久照, 勝野眞吾：飲酒・喫煙・薬物乱用についての全国中学生意識・実態調査(2010年)。平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金 (医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業) 「薬物乱用・依存の実態把握と再乱用防止のための社会資源等の現状と課題に関する研究(H21-医薬一般-028)」。研究報告書。pp.17-pp.87. 2011.3.31.
- 4) 松本俊彦, 尾崎 茂, 小林桜児, 和田 清：全国の精神科医療施設における薬物関連精神疾患の実態調査。平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金 (医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業) 「薬物乱用・依存の実態把握と再乱用防止のための社会資源等の現状と課題に関する研究(H21-医薬一般-028)」。研究報告書。pp.89-pp.115. 2011.3.31.
- 5) 嶋根卓也, 和田 清, 三島健一, 藤原道弘：大学新生における薬物乱用実態に関する研究(2010年)。平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金 (医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業) 「薬物乱用・依存の実態把握と再乱用防止のための社会資源等の現状と課題に関する研究(H21-医薬一般-028)」。研究報告書。pp.153-pp.175. 2011.3.31.
- 6) 和田 清, 嶋根卓也, 今村扶美, 近藤あゆみ, 丸山泰弘：21 委-8 精神・神経疾患に関わる大規模コホートの構築に関する研究「精神作用物質使用による精神および行動の障害」。平成 21 年度厚生労働省精神・神経疾患研究委託費による研究報告書 (2 年度班・初年度班)。pp.582-583, 2010.8.
- 7) 和田 清, 嶋根卓也, 今村扶美, 近藤あゆみ, 丸山泰弘：「精神作用物質使用による精神および行動の障害」。平成 22 年度国立精神・神経医療研究センター精神・神経疾患研究開発費 (21 委-8) 精神・神経疾患に関わる大規模コホートの構築に関する研究。平成 22 年度 総括・分担研究報告書 (平成 21 年度～平成 22 年度)。Pp.23-pp.24, 2011.3.
- 8) 松本俊彦：求められる薬物乱用防止教育とは? ～「ダメ,ゼッタイ」だけではダメ～。内閣府 平成 21 年度インターネットによる「青少年の薬物乱用に関する調査」報告書, pp.59-67, 内閣府, 東京, 2010.
- 9) 松本俊彦：薬物依存症に対する認知行動療法プログラムの開発と効果に関する研究。平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金障害者対策総合研究事業 (精神障害分野) 「薬物依存症に対する認知行動療法プログラムの開発と効果に関する研究 (研究代表者: 松本俊彦)」総括・分担研究報告書, pp1-6, 2011.

- 10) 松本俊彦, 今村扶美, 小林桜児, 和田 清, 尾崎士朗, 今村洋子: 司法関連施設における認知行動療法プログラムの開発と効果に関する研究. 平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金障害者対策総合研究事業 (精神障害分野) 「薬物依存症に対する認知行動療法プログラムの開発と効果に関する研究 (研究代表者: 松本俊彦)」総括・分担研究報告書, pp85-99, 2011.
- 11) 松本俊彦, 近藤あゆみ, 高橋郁絵, 栗坪千明, 白川裕一郎, 矢澤祐史: 民間回復施設における認知行動療法治療プログラムの開発と効果に関する研究. 平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金障害者対策総合研究事業 (精神障害分野) 「薬物依存症に対する認知行動療法プログラムの開発と効果に関する研究 (研究代表者: 松本俊彦)」総括・分担研究報告書, pp101-115, 2011.
- 12) 小林桜児, 松本俊彦, 今村扶美, 根岸典子, 若林朝子, 和田 清: 専門外来における認知行動療法プログラムの開発と効果に関する研究. 平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金障害者対策総合研究事業 (精神障害分野) 「薬物依存症に対する認知行動療法プログラムの開発と効果に関する研究 (研究代表者: 松本俊彦)」総括・分担研究報告書, pp7-19, 2011.
- 13) 今村扶美, 松本俊彦, 小林桜児, 平林直次, 和田 清: 医療観察法における物質使用障害治療プログラムの開発と効果に関する研究. 平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金障害者対策総合研究事業 (精神障害分野) 「薬物依存症に対する認知行動療法プログラムの開発と効果に関する研究 (研究代表者: 松本俊彦)」総括・分担研究報告書, pp73-84, 2011.
- 14) 松本俊彦, 千葉泰彦, 今村扶美, 小林桜児, 高野 歩: 少年施設入所者における被虐待体験と精神医学的問題に関する研究, 平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金障害者対策総合研究事業 (精神障害分野) 「大規模災害や犯罪被害等による精神科疾患の実態と介入方法の開発に関する研究 (研究代表者: 金吉晴)」総合研究報告書, pp79-93, 2010.
- 15) 松本俊彦, 千葉泰彦, 今村扶美, 小林桜児, 高野 歩: 少年施設入所者における被虐待体験と精神医学的問題に関する研究, 平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金障害者対策総合研究事業 (精神障害分野) 「大規模災害や犯罪被害等による精神科疾患の実態と介入方法の開発に関する研究 (研究代表者: 金吉晴)」総括・分担研究報告書, pp55-69, 2010.
- 16) 船田正彦: 違法ドラッグの精神依存並びに精神障害の発症機序と乱用実態把握に関する研究 (研究代表者: 船田正彦) (H21-一般-031). 平成 22 年度厚生労働科学研究補助金 (医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業) 平成 22 年度総括研究報告書. pp1-12, 2011.
- 17) 船田正彦: 合成カンナビノイドの身体依存性および細胞毒性の評価. 平成 22 年度厚生労働科学研究補助金 (医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業) 「違法ドラッグの精神依存並びに精神障害の発症機序と乱用実態把握に関する研究 (H21-一般-031) (研究代表者: 船田正彦)」. 平成 22 年度分担研究報告書. pp13-29, 2011.
- 18) 富山健一: 合成カンナビノイドの薬物弁別刺激特性: カンナビノイド受容体の役割. 平成 22 年度厚生労働科学研究補助金 (医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業) 「違法ドラッグの精神依存並びに精神障害の発症機序と乱用実態把握に関する研究 (研究代表者: 船田正彦) (H21-一般-031)」. 平成 22 年度総括研究報告書. pp30-41, 2011.
- 19) 嶋根卓也, 菅原誠, 田中さゆり, 平重忠, 染谷和子, 岡崎重人: 若年者向け薬物再乱用防止プログラムの開発に関する研究. 平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金 (医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業) 「薬物乱用・依存等の実態把握と再乱用防止のための社会資源等の現状と課題に関する研究 (研究代表者: 和田 清) (H21-医薬一般-028)」. pp.201-pp.214, 2011.
- 20) 嶋根卓也, 和田清, 三島健一, 藤原道弘: 大学新生における薬物乱用実態に関する研究 (2010 年). 平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金 (医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業) 「薬物乱用・依存等の実態把握と再乱用防止のための社会資源等の現状と課題に関する研究 (研究代表者: 和田 清) (H21-医薬一般-028)」. pp.153-pp.175, 2011.
- 21) 嶋根卓也, 日高庸晴, 和田 清: クラブユーザーにおける MDMA 等のクラブドラッグ乱用実態に関する研究. 平成 22 年度厚生労働科学研究補助金 (医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究

- 事業)「違法ドラッグの精神依存並びに精神障害の発症機序と乱用実態把握に関する研究 (H21-一般-031) (研究代表者: 船田正彦)」。平成 22 年度総括研究報告書. pp.58-pp.78, 2011.
- 22) 松本俊彦, 嶋根卓也, 和田 清: 向精神薬乱用と依存. 平成 22 年度厚生労働科学研究補助金 (障害者対策総合研究事業)「様々な依存症における医療・福祉の回復プログラムの策定に関する研究 (H22-精神-一般-017) (研究代表者: 宮岡 等)」。平成 22 年度総括研究報告書. Pp??, 2011.

(6) 翻訳

- 1) 松本俊彦 (監訳) 今村扶美, 勝又陽太郎, 木谷雅彦, 赤澤正人, 廣川聖子, 菅原靖子 (訳): ダグラス・ジェイコブズ, バレント・ウォルシュ, モイラ・マックデイト, シャロン・ピジョン著「学校における自傷予防〜『自傷のサイン』プログラム実施マニュアル」。金剛出版, 東京, 2010 (Jacobs D, Walsh B, McDade M, Pigeon S: Signs of self-injury: ACT to prevent self-injury high school implementation guide and resources, Screening for Mental Health, Inc. and The Bridge of Central MA, 2007)
- 2) 小林桜児, 松本俊彦 (共訳): S・ウインター著「解離性使用外とアルコール・薬物依存症を理解するためのセルフ・ワークブック」。金剛出版, 東京, 2011 (Winter S: Understanding dissociative disorders and addiction, Second edition. Hazelden Publishing, 2003)

(7) その他

- 1) 和田 清: 【特集 1: 精神保健研究所のガイドライン研究】アルコール・薬物関連障害の診断・治療ガイドライン. 精神保健研究 55: 17-18, 2010.
- 2) 和田 清: 超理解! 最近の薬物乱用・依存 わが国の薬物乱用・依存の現状. Ricetta Vol.14 No.2. ノバルティスファーマ株式会社. 10-11, 2010.4.
- 3) 和田 清: 薬物依存症を理解するー乱用・依存・中毒の違いと予防・回復の考え方ー. 星音 (蒲田医師会雑誌) 第 87 号: 16-18.2010.3.
- 4) 船田正彦, 和田 清: デザイナードラッグ. ファルマシア 46(9): 844-844, 2010.
- 5) 和田 清: 薬物依存症について. あまびき. 全国薬物依存症者家族連合会. 2010 年夏号: 2-21, 2010.
- 6) 和田 清: 薬物乱用防止教育の前に知っておくべきこと. 小学保健ニュース No.922 号 付録, (株) 少年写真新聞社. pp.1-pp.1, 2010.9.28.
- 7) 和田 清: 薬物依存症. 「みんなのメンタルヘルス総合サイト」。平成 21 年度厚生労働省「精神障害の正しい理解のための普及啓発にかかる調査・研究事業」。http://www.mhlw.go.jp/kokoro/index.html
- 8) 和田 清: 今日の薬物乱用の特徴と学生への対応について. 大学と学生 85(9): 15-21. 2010.
- 9) 和田 清: 第 2 章 精神作用物質使用による精神および行動の障害 7. 有機溶剤: 依存と精神障害性障害. 精神科治療学 25 (増刊号): 76-77, 2010.
- 10) 和田 清: 超理解! 最近の薬物乱用・依存 薬物の乱用・依存・中毒の違い. Ricetta Vol.14 No.3. ノバルティスファーマ株式会社. 10-11, 2010.10.
- 11) 和田 清: 第 2 章 薬物依存症を理解しましょう. DRUG 薬物からの離脱を目指せ!! . 警察庁. 06-17, 2010.11.
- 12) 和田 清: 超理解! 最近の薬物乱用・依存 第 3 回 薬物の脳への作用と依存性薬物の特徴. Ricetta Vol. 15 No.1. ノバルティスファーマ株式会社. 10-11, 2011.3.
- 13) 和田 清: 講演② 「薬物乱用が心身に及ぼす影響とその害」。学生等の薬物乱用防止のための教職員研修会. 独立行政法人日本学生支援機構. pp.29-pp.45, 2011.3.
- 14) 松本俊彦: てらべいあ〜精神療法のコスト. 精神療法 36 (2): 198, 2010.
- 15) 松本俊彦: 薬物依存症の理解と援助. 全国薬物依存症者家族連合会「あまびき」。2010 年春号 30: 2-18, 2010.
- 16) 加藤久喜, 松本俊彦, 伊藤知章, 上山達也, 織田信生, 竹島 正: 座談会 自殺対策とメディアー自殺対

- 策の充実が成熟社会の醸成につながる. 公衆衛生情報 39 (10); 2010年1月号: 2-10, 2010.
- 17) 船橋幹男, 松本俊彦, 白川教人, 木村弥生, 野宮富子, 村中峯子: 座談会 市町村における自殺対策 前編. Monthly 保健センター 2010年4月号: 8-11, 2010.
 - 18) 赤澤正人, 松本俊彦, 立森久照, 竹島正: ~断酒会員対象のアンケート~自殺予防の支援と介入を. メディカルトリビューン 43(12): 31, 2010.
 - 19) 木村弥生, 白川教人, 野宮富子, 船橋幹男, 松本俊彦, 村中峯子: 座談会 市町村における自殺対策 後編. Monthly 保健センター 2010年5月号:4-5, 2010.
 - 20) 松本俊彦: インタビュー 薬物乱用・自殺の防止に薬剤師ができること. 調剤と情報 16 (10): 3-5, 2010
 - 21) 松本俊彦: 自傷の背景とプロセス. 4-18, 東京大学大学院教育学研究科附属心理教育相談室年報 第5号, 4-28, 東京大学大学院教育学研究科附属心理教育相談室, 2010.
 - 22) 松本俊彦: もっと知りたい! このテーマー向精神薬依存と過量服用自殺の背景. 暮らしと健康 2010年11月号, 44-46, 2010
 - 23) 松本俊彦: 質疑応答 自傷行為の現状と対応. 日本医事新報 No. 4511 (200年10月9日): 82-83, 2010.
 - 24) 松本俊彦: アディクションと自殺. 社団法人座編 陽だまりの庭II, 23-27, ぶどう書房, 奈良, 2011.
 - 25) 松本俊彦, 嶋根卓也: 薬局薬剤師を情報源とする向精神薬の乱用・依存の実態把握に関する研究, 埼玉県薬剤師会雑誌, 36(12), 37-38, 2010.

B. 学会・研究会における発表

(1) 学会特別講演, 教育講演, シンポジウム, ワークショップ, パネルディスカッション等

- 1) Kiyoshi Wada: The Current Situation of Drug Abuse/Dependence in Japan. National Anti-drug Conference & Anti-drug International Seminar, Ministry of Justice, Taiwan. ,2010.6.2.
- 2) 和田 清: 日本における薬物乱用・依存の歴史と最近の特徴. 第1回日中薬物依存シンポジウム(2010). 千葉大学. 千葉大学付属図書館玄鼻分館ライブラリーホール, 2010.11.12.
- 3) 和田 清: 薬物依存とは 日本の現状と求められる治療. シンポジウム2 薬物依存と HIV. 第24回日本エイズ学会学術集会. グランドプリンスホテル高輪, 2010.11.24.
- 4) 尾崎 茂, 小林桜児, 松本俊彦, 和田 清: 医療施設からみた最近の特徴. シンポジウムVI「薬物依存と現代社会-医療モデルの必要性」. 第30回日本社会精神医学会. 奈良県文化会館. 2010.3.4.
- 5) 和田 清: わが国における薬物乱用・依存の最近の特徴. シンポジウムVI「薬物依存と現代社会-医療モデルの必要性」. 第30回日本社会精神医学会. 奈良県文化会館. 2010.3.4.
- 6) 松本俊彦: 自殺総合対策における精神科医療の課題~総合的な精神保健的対策を目指して~. シンポジウム18「自殺予防と精神保健医療の役割」自殺対策における自殺とは何か. 第106回日本精神神経学会学術総会, 広島, 2010.5.21.
- 7) 松本俊彦: アルコール・薬物依存症と摂食障害との併存例をめぐって. シンポジウム26「精神障害が併存するアルコール依存症の病態と治療」. 第106回日本精神神経学会学術総会, 広島, 2010.5.21.
- 8) 松本俊彦: わが国における性被害の実態~少年施設の調査から. 第21回日本被害者学会シンポジウム「性被害対策の実効化に向けて」, 東京, 2010.6.12.
- 9) 松本俊彦: 自殺総合対策における精神科医療の課題~総合的な精神保健的対策を目指して~. 第16回日本精神神経科診療所協会総会・学術研究会 メインシンポジウム「こころの絆の再構築ー地域から自殺対策を考えるー」, パシフィコ横浜, 2010.6.20.
- 10) 松本俊彦: 専門講座II 自傷行為の理解と援助~アディクションと自殺のあいだ. 第32回日本アルコール関連問題学会, 神戸, 2010.7.16.
- 11) 松本俊彦: 教育講演III 職場における自殺予防~アルコール問題と自殺. 第17回日本産業精神保健学会, 金沢, 2010.7.17.
- 12) 松本俊彦: 若者のサブカルチャーと自殺. 第34回日本自殺予防学会総会 シンポジウムIII「減らない自殺ー社会・文化的な視点から考える」, 大妻女子大学, 東京, 2010.9.11.

- 13) 松本俊彦: 教育講演Ⅳ 摂食障害とリストカット. 第 14 回日本摂食障害学会総会, 政策大学院大学, 東京, 2010.10.3.
- 14) 宮田久嗣, 松本俊彦: 3 学会合同シンポジウム 1 「“物質” と “物質によらない” 嗜癖行動の共通点と差異: 問題提起」, 平成 22 年度アルコール・薬物関連学会合同学術総会, 小倉, 2010.10.7.
- 15) 松本俊彦: 3 学会合同シンポジウム 4 「物質使用障害と自傷・自殺～最近の研究から」, 平成 22 年度アルコール・薬物関連学会合同学術総会, 小倉, 2010.10.7.
- 16) 松本俊彦: 公開講座「自殺予防と精神科救急」. 第 18 回日本精神科救急学会, 大阪, 2010.10.15.
- 17) 松本俊彦: 基調講演「自殺予防に関する課題で見えてきたもの」. 人間福祉学会第 11 回大会, 岐阜都ホテル, 2010.11.20.
- 18) 松本俊彦: 嗜癖問題と自傷・自殺. シンポジウム「自殺予防と嗜癖」, 第 21 回日本嗜癖行動学会, 岡山衛生会館, 2010.11.21.
- 19) 松本俊彦, 小林桜児: ワークショップ 19 薬物依存症の認知行動療法～マニュアルとワークブックにもとづく統合的外来治療プログラム. 第 36 回日本行動療法学会, 愛知県産業労働センター「ウイंकあいち」, 2010.12.4.
- 20) 松本俊彦: 認知行動療法を取り入れた包括的外来治療プログラムの必要性. シンポジウムⅥ「薬物依存と現代社会—医療モデルの必要性—」, 第 30 回日本社会精神医学会, 奈良県文化会館, 2011.3.4.
- 21) 松本俊彦: 自傷行為とその背景. シンポジウム「思春期にみられる精神・行動における最近の変化」 関東子ども精神保健学会第 8 回学術集会, 東京都立小児総合医療センター, 2011.3.13.
- 22) 船田正彦: 大麻乱用の有害作用: 精神依存形成と細胞毒性の発現について. シンポジウム 5 依存と離脱のメカニズム 第 45 回日本アルコール薬物医学会, 小倉, 2010. 10.8.
- 23) 嶋根卓也: 特別講演 思春期における薬物乱用の実態と予防. 第 29 回日本思春期学会総会・学術集会, 北海道, 2010.8.28.
- 24) 嶋根卓也: 平成 22 年度文部科学省事業「薬物乱用防止教育シンポジウム」, 埼玉県教育委員会, 埼玉, 2010.9.3.

(2) 一般演題

- 1) 今村扶美, 松本俊彦, 千葉泰彦, 小林桜児, 和田 清: 少年鑑別所における自習ワークブックを用いた薬物再乱用防止プログラムの開発とその効果～重症度による介入効果の検討～. 第 6 回日本司法精神医学会大会, 東京大学・安田講堂・山上会館, 2010.6.4.
- 2) 今村扶美, 松本俊彦, 小林桜児, 平林直次, 和田 清: 医療観察法指定入院医療機関における「物質使用障害治療プログラム」の開発とその効果. 第 6 回日本司法精神医学会大会, 東京大学・安田講堂・山上会館, 2010.6.4.
- 3) 小林桜児, 今村扶美, 根岸典子, 若林朝子, 松本俊彦, 和田 清: 国立精神・神経医療研究センター病院薬物専門外来受診者の臨床的特徴. 東京精神医学会第 89 回学術集会, 北里大学薬学部コンベンションホール, 2010.7.10.
- 4) 船田正彦, 富山健一, 青尾直也, 秋武義治, 三島健一, 藤原道弘, 和田 清: 合成カンナビノイド誘導体の薬物依存性と細胞毒性の評価. 第 20 回日本臨床精神神経薬理学会. 第 40 回日本神経精神薬理学会合同年会, 仙台国際センター, 2010.9.17.
- 5) 小林桜児, 松本俊彦, 千葉泰彦, 今村扶美, 森田展彰, 和田 清: 少年鑑別所入所者を対象とした日本語版 SOCRATES の因子構造と妥当性の検討. 第 45 回日本アルコール・薬物医学会, リーガロイヤルホテル小倉, 北九州市, 2010.10.8.
- 6) 今村扶美, 松本俊彦, 小林桜児, 和田 清: 国立精神・神経医療研究センター病院医療観察法病棟における物質使用障害治療プログラムの開発と効果測定. 第 45 回日本アルコール・薬物医学会. リーガロイヤルホテル小倉, 北九州市, 2010.10.8.
- 7) 富山健一, 和田 清, 船田正彦: カンナビノイド受容体作用薬の弁別刺激特性と細胞毒性. 第 45 回日本

- アルコール・薬物医学会, リーガロイヤルホテル小倉, 北九州市, 2010.10.9.
- 8) 田中紀子, 矢澤祐史, 松本俊彦: 奈良ダルクによる新しいとりくみ: Recovery Dynamics Program 導入による効果観察. 平成 22 年度アルコール・薬物関連学会合同学術総会, 小倉, 2010.10.8.
 - 9) 深井美里, 兼城佳弘, 松本俊彦, 石川雅久, 井上英和, 大竹智英, 塚本哲司, 関口隆一, 杉山 一: 精神科救急情報センターにける自殺防止の取り組み. 第 18 回日本精神科救急学会, 大阪, 2010.10.15.
 - 10) 矢澤祐史, 岸本年史, 松本俊彦, 川口由起子: 米アミティにおける治療共同体プログラムが依存症回復におよぼす影響について. 第 30 回日本社会精神医学会, 奈良県文化会館, 2011.3.4.
 - 11) 田中紀子, 岸本年史, 松本俊彦, 川口由起子: 依存症からの回復支援における介入プログラムの導入. 第 30 回日本社会精神医学会, 奈良県文化会館, 2011.3.4.
 - 12) 船田正彦, 富山健一, 青尾直也, 三島健一, 藤原道弘, 和田 清: 合成カンナビノイド誘導体の薬物依存性と細胞毒性の評価. 第 40 回日本神経精神薬理学会, 仙台, 2010.9.15.
 - 13) 富山健一, 和田 清, 船田正彦: カンナビノイド受容体作用薬の弁別刺激特性と細胞毒性. 第 45 回日本アルコール薬物医学会, 小倉, 2010. 10.9.
 - 14) 嶋根卓也: 若年者向け薬物再乱用防止プログラム” OPEN “の開発に関する研究. 第 69 回日本公衆衛生学会総会, 東京, 2010.10.27-29.
 - 15) 小堀栄子, 前田祐子, 宮島朝子: 日本における新来外国人労働者の健康に関する文献研究. 第 69 回日本公衆衛生学会総会, 東京, 2010.10.29

(3) 研究報告会

- 1) 和田 清(開催): アルコールを含めた物質依存に対する病態解明及び心理社会的治療法の開発に関する研究(22-2). 精神・神経疾患研究開発費. 平成 22 年度研究成果報告会. アルカディア市ヶ谷, 2010.12.1
- 2) 松本俊彦: 少年施設における自習ワークブックによる再乱用防止プログラムの開発とその効果. 国立精神・神経医療研究センター主催 平成 22 年度三施設合同研究発表会, 国立精神・神経医療研究センター, 2010.5.25.
- 3) 船田正彦, 富山健一, 三島健一, 藤原道弘, 和田 清: 大麻成分の薬物依存性及び神経毒性に関する研究. 平成 22 年度精神・神経疾患研究開発費「アルコールを含めた物質依存に対する病態解明及び心理社会的治療法の開発に関する研究」(22 指-2-04) (主任研究者: 和田 清) 研究成果報告会, 東京, 2010.12.1.

C. 講演

- 1) 和田 清: 薬物依存症について. 第 6 回ドムクス・しずおかフォーラム (10 周年記念フォーラム) 静岡県もくせい会館, 2010.4.10.
- 2) 和田 清: 薬物の乱用・依存・中毒を理解する. 平成 22 年度薬物乱用防止教室講習会. 文部科学省, 熊本県教育委員会, 水前寺共済会館, 2010.4.27.
- 3) 和田 清: これからの地域における薬物依存症回復支援. 茨城依存症回復支援協会 (IARSA), 茨城県健康科学センター, 2010.6.13.
- 4) 和田 清: 学校における薬物乱用防止教室での指導のあり方について—乱用・依存・中毒を理解することの重要性と生徒の生活背景—. 平成 22 年度香川県薬物乱用防止教育研修会, 薬物乱用防止教室指導者講習会. 文部科学省, 香川県教育委員会, 高松テルサ, 2010.6.29.
- 5) 和田 清: わが国における薬物依存の現状. 北総精神科医会第 15 回総会. グラクソ・スミスクライン, 成田エクセルホテル東急, 2010.6.30.
- 6) 和田 清: 薬物乱用から見たエイズ問題. 平成 22 年度エイズ教育シンポジウム. (財) 日本学校保健会, (財) エイズ予防財団, (社) 日本医師会, 日本医師会館, 2010.8.06.
- 7) 和田 清: 薬物依存に関する考え方・理解促進に向けて—薬物乱用・依存・中毒の違いを理解することの重要性—. 平成 22 年度再乱用防止対策講習会. 厚労省医薬食品局監視指導・麻薬対策課, KKR ホテル名古屋, 2010.10.4.
- 8) 和田 清: 再乱用防止に向けての薬物依存症の理解—薬物乱用・依存・中毒の違いを理解することの重要

- 性一。平成 22 年度薬物中毒対策連絡会議。厚労省医薬食品局監視指導・麻薬対策課, KKR ホテル名古屋, 2010.10.5.
- 9) 和田 清: 薬物依存に関する考え方・理解促進に向けてー薬物乱用・依存・中毒の違いを理解することの重要性一。平成 22 年度再乱用防止対策講習会。厚労省医薬食品局監視指導・麻薬対策課, ホテル東日本盛岡, 2010.11.4.
- 10) 和田 清: 再乱用防止に向けての薬物依存症の理解ー薬物乱用・依存・中毒の違いを理解することの重要性一。平成 22 年度薬物中毒対策連絡会議。厚労省医薬食品局監視指導・麻薬対策課, ホテル東日本盛岡, 2010.11.5.
- 11) 和田 清: 覚せい剤依存症と医療。法務省矯正研修所任用研修科高等科第 42 回研修。法務省矯正研修所, 2010.11.8.
- 12) 和田 清: 薬物依存に関する考え方・理解促進に向けてー薬物乱用・依存・中毒の違いを理解することの重要性一。平成 22 年度再乱用防止対策講習会。厚労省医薬食品局監視指導・麻薬対策課, 東京都庁第二本庁舎二庁ホール, 2010.11.18.
- 13) 和田 清: 再乱用防止に向けての薬物依存症の理解ー薬物乱用・依存・中毒の違いを理解することの重要性一。平成 22 年度薬物中毒対策連絡会議。厚労省医薬食品局監視指導・麻薬対策課, 東京都庁第二本庁舎二庁ホール, 2010.11.19.
- 14) 和田 清: 薬物乱用防止教育のあり方についてー乱用・依存・中毒を理解することの重要性と生徒の生活背景を考えることの重要性一。平成 22 年度薬物乱用防止教室指導者講習会。宮城県教育委員会, 文部科学省, 宮城県行政庁舎 (県庁) 2 階講堂, 2010.11.30.
- 15) 和田 清: 薬物依存を理解するー乱用・依存・中毒の違いと家庭の重要性。宇都宮市。栃木ダルク 協働事業, 宇都宮市文化会館, 2010.12.7.
- 16) 和田 清: 薬物依存に関する考え方・理解促進に向けてー薬物乱用・依存・中毒の違いを理解することの重要性一。第 4 回麻薬取締官中等科研修。厚生労働省医薬食品局監視指導・麻薬対策課, 九段第三合同庁舎, 2010.12.10.
- 17) 和田 清: 薬物乱用・依存を理解するー乱用・依存・中毒の違いと家庭の重要性。平成 22 年度第 4 回ユースアドバイザー養成講座。札幌市民ホール, 2010.12.16.
- 18) 和田 清: 薬物乱用が心身に及ぼす影響とその害。学生等の薬物乱用防止のための教職員研修会。独立行政法人 日本学生支援機構, ルブラ王山 (名古屋), 2011.2.1.
- 19) 和田 清: 薬物の心身に与える影響。少年補導幹部専科教養。警察大学校。2011.2.16.
- 20) 和田 清: 薬物乱用が心身に及ぼす影響とその害。学生等の薬物乱用防止のための教職員研修会。独立行政法人 日本学生支援機構, チサンホテル神戸 (神戸), 2011.2.18.
- 21) 和田 清: 薬物乱用が心身に及ぼす影響とその害。学生等の薬物乱用防止のための教職員研修会。独立行政法人 日本学生支援機構, 東京国際交流館プラザ平成 (東京), 2011.2.22.
- 22) 松本俊彦: 医療観察法における物質乱用・依存の治療。財団法人精神・神経科学振興財団主催 平成 21 年度指定入院医療機関従事者病棟研修会, 独立行政法人国立病院機構鳥取医療センター, 2010.4.7.
- 23) 松本俊彦: 医療観察法における自傷・自殺のケア。財団法人精神・神経科学振興財団主催 平成 21 年度指定入院医療機関従事者病棟研修会, 独立行政法人国立病院機構鳥取医療センター, 2010.4.7.
- 24) 松本俊彦: 自殺予防のために精神科医療には何ができるか? 医療法人社団翠会 行橋記念病院主催 院内講演会, 医療法人社団翠会 行橋記念病院, 2010.4.16.
- 25) 松本俊彦: 地域で出会うメンタルヘルス問題。こころの健康政策構想会議起草委員会主催 第 3 回こころの健康政策構想会議, 東京都立松沢病院, 2010.4.17.
- 26) 松本俊彦: 自傷と自殺。横浜湘南精神科医懇話会主催 横浜湘南精神科医懇話会, 横浜ベイ・シェラトン・ホテル & タワーズ, 2010.4.17.
- 27) 松本俊彦: 自傷行為をする児童・生徒への対応について。特定非営利活動法人神奈川県スクールカウンセラー協会主催 平成 22 年度第 1 回研修会, 横浜市民活動支援センター, 2010.5.8.

- 28) 松本俊彦: 自傷行為の理解と援助. 北海道情緒障害研究会主催 研修会, ちえりあ, 2010.5.9.
- 29) 松本俊彦: 自殺の実態・地方自治体の施策について. 横浜市こころの健康相談センター主催 自殺対策「基礎研修」, 横浜市健康福祉センター, 2010.5.24.
- 30) 松本俊彦: 自傷行為のアセスメントと対応. 埼玉県養護教員会主催 埼玉県養護教員会総会, 埼玉会館, 2010.5.26.
- 31) 松本俊彦: 薬物依存の援助から考えたこと. NPO 法人全国薬物依存症者家族連合会主催 やっかれん 2010 年度総会 & 第7回フォーラム, ウィルあいち, 2010.5.29.,
- 32) 松本俊彦: 新しいアルコール・薬物依存症の治療. 医療法人資生会八事病院主催 院内職員研修, 医療法人資生会八事病院, 2010.5.31.
- 33) 松本俊彦: 子どもの自殺予防のために学校でできること. 埼玉県教育委員会主催 平成 22 年度高等学校生徒指導担当者研究協議会, さいたま市文化センター, 2010.6.2.
- 34) 松本俊彦: 教職員のメンタルヘルス～うつ,自殺予防の観点から. 厚木市教育委員会・厚木児童思春期精神保健ネットワーク推進委員会 第30回ミニワークショップ, 厚木市総合福祉会館, 2010.6.10.
- 35) 松本俊彦: 地域における自殺対策. 福島県中保健福祉事務所主催 平成22年度自殺対策関係機関職員企画・ネットワーク研修会, 須賀川市文化センター, 2010.6.11.
- 36) 松本俊彦: 自殺の実態・地方自治体の施策について. 横浜市こころの健康相談センター主催 自殺対策「基礎研修」, 横浜市健康福祉センター, 2010.6.14.
- 37) 松本俊彦: 物質使用障害の理解と援助. 国立精神・神経医療研究センター病院医療観察法病棟主催 医療観察法病棟職員研修, 国立精神・神経医療研究センター病院, 2010.6.21.
- 38) 松本俊彦: 自殺に向かうこころの理解. 東京都中部精神保健福祉センター主催 平成 22 年度精神保健福祉研修, 東京都社会保健福祉医療研修センター, 2010.6.23.
- 39) 松本俊彦: 青少年の薬物乱用について. 奈良県教育委員会主催 平成 22 年度薬物乱用防止講習会, 奈良県産業会館, 2010.6.25.
- 40) 松本俊彦: 様々なアディクション. 東京都精神保健福祉センター主催 平成 22 年度精神保健福祉研修(前期)「アディクションを識る」, 豊島区民センター, 2010.6.30.
- 41) 松本俊彦: 薬物乱用の害と周囲が注意すべきこと. 社団法人日本音楽事業者協会主催 違法薬物乱用対策研修会, 津田ホール, 2010.7.7.
- 42) 松本俊彦: アルコールとうつ,自殺. 福島県精神保健福祉センター主催 平成 22 年度精神保健福祉関係職員研修, 福島県庁, 2010.7.9.
- 43) 松本俊彦: 我が国の自殺の実態及び自殺予防対策について. 神奈川県精神保健福祉センター主催 平成 22 年度自殺対策基礎研修, 2010. 7. 12, 神奈川県総合医療会館
- 44) 松本俊彦: 自傷行為の理解と援助. 日本産業衛生学会地方会主催 第78回職場ストレス研究会, 明倫ホール, 2010.7.14.
- 45) 松本俊彦: 「松本先生への Q & A」. 東京都多摩精神保健福祉センター主催 薬物依存家族教室, 東京都多摩総合精神保健福祉センター, 2010.7.22.
- 46) 松本俊彦: 自殺をめぐる最近の動向とその対策. 東京都多摩精神保健福祉センター主催 平成 22 年度自殺対策研修, 東京都多摩総合精神保健福祉センター, 2010.7.23.
- 47) 松本俊彦: アルコールとうつ,自殺. 独立行政法人国立病院機構久里浜アルコール症センター主催 平成 22 年度アルコール問題の早期発見早期介入実際講座, 独立行政法人国立病院機構久里浜アルコール症センター, 2010.7.30
- 48) 松本俊彦: 教育現場の危機管理対応. 横須賀市教育委員会主催 教職員対象特別支援研修会, 横須賀市立横須賀総合高等学校, 2010.7.30
- 49) 松本俊彦: 自傷行為の真実～なぜ若者たちは自身を傷つけるのか. 三鷹市・憲法を祈念する三鷹市民の会主催 平成 22 年度第1回三鷹市憲法講座, 三鷹駅前コミュニティセンター, 2010.7.31.
- 50) 松本俊彦: 自殺予告事例への対応. 埼玉県・さいたま市主催 埼玉県自殺対策市町村・保健所合同職員

- 研修/さいたま市自殺予防対策研修 2, WithYou さいたま, 2010.8.2.
- 51) 松本俊彦: 自傷行為の理解と援助. 福岡市医師会主催 福岡市学校精神保健協議会講演会, 福岡市医師会館, 2010.8.3.
 - 52) 松本俊彦: 自傷行為の理解と援助. 東京都多摩総合精神保健福祉センター主催 平成 22 年度教育関係者研修, 東京自治会館, 2010.8.6.
 - 53) 松本俊彦: 司法領域におけるアルコール・薬物問題の支援のあり方. 神戸保護観察所主催 医療観察法関係者研修会, 神戸保護観察所, 2010.8.17.
 - 54) 松本俊彦: 薬物依存の理解と援助—「故意に自分の健康を害する」若者たち. 兵庫県立精神保健福祉センター主催 平成 22 年度薬物関連問題研修会, 兵庫県こころのケアセンター, 2010.8.18.
 - 55) 松本俊彦: 青少年における薬物乱用の現状と対策. 長崎県長崎こども・女性・障害者支援センター主催 平成 22 年度アルコール・薬物関連問題研修会, 長崎県長崎看護協会ながさき看護センター, 2010.8.20.
 - 56) 松本俊彦: アルコール依存症と自殺問題. 社団法人全日本断酒連盟主催 平成 22 年度全断連東京セミナー, 私学会館アルカディア市ヶ谷, 2010.8.21.
 - 57) 松本俊彦: 地域医療/地域精神医療と自殺予防. 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所主催 第 4 回自殺総合対策企画研修, 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所, 2010.8.26.
 - 58) 松本俊彦: アルコール・薬物問題と自殺. 秋田県精神保健福祉センター主催 平成 22 年度アルコール・薬物関連問題研修会, 秋田県総合保健センター, 2010.8.30.
 - 59) 松本俊彦: 中高年男性のうつ,自殺とアルコール関連問題. 熊本県精神保健福祉センター主催 平成 22 年自殺対策研修・アルコール・薬物問題研修, 熊本市男女共同参画センターはあもにい, 2010.9.3.
 - 60) 松本俊彦: 自傷行為,薬物依存の青年たち～関わり方を中心に～. 財団法人明治安田こころの健康財団主催 2010 年度児童思春期講座 2 現代の思春期を考える……～変わりゆく病態をどう理解し接近するか～, 財団法人明治安田こころの健康財団, 2010.9.5.
 - 61) 松本俊彦: 精神科医の立場から. 武蔵野主催 市民こころの健康支援事業 第 8 回テーマ講座 自殺対策講座「『生きること』を支援する～司法書士,メンタルヘルスの視点から～」, 武蔵野スイングホール, 2010.9.10.
 - 62) 松本俊彦: 職場で進める自殺防止対策の基本的な考え方～職場のメンタルヘルスケア～. 特別社団法人日本精神科看護技術協会主催 自殺予防対策セミナー, 品川キャナルビル, 2010.9.11.
 - 63) 松本俊彦: 思春期にみられる精神疾患について～自傷行為の理解と援助. 東京都教職員研修センター主催 職員研修, 東京都教育相談センター, 2010.9.17.
 - 64) 松本俊彦: シンポジウム「いきるを支える」, いきるを支える 鎌倉・逗子・葉山実行委員会・社団法人神奈川県精神保健福祉協会・鎌倉市・逗子市・葉山町・神奈川県等主催 自殺対策普及講演会 いきるを支える 鎌倉・逗子・葉山, 鎌倉芸術館, 2010.9.23
 - 65) 松本俊彦: 自殺予防のために精神科医療ができること. ファイザー株式会社主催 地域アドヒアランス講演会—ジェイゾロフト発売 4 周年記念講演会— ホテルブエナビスタ, 2010.9.24.
 - 66) 松本俊彦: 子どもの自傷行為. 社会福祉法人恩賜財団母子愛育会主催「子どもの心の診療医」研修会, 全社協 灘尾ホール, 2010.9.26.
 - 67) 松本俊彦: 薬物依存の理解と援助. 厚生労働省医薬食品局監視指導・麻薬対策課主催 平成 22 年度中国四国地区薬物中毒対策連絡会議 相談従事者講習会, ピュアリティまきび, 2010.9.28.
 - 68) 松本俊彦: アルコールとうつ,自殺. 一般社団法人うつ病の予防・治療日本委員会主催 「うつ病を知る日」東京会場, 東京コンファレンススクエア・エムプラス, 2010.10.2.
 - 69) 松本俊彦: 薬物依存と認知行動療法プログラムの有効性. 東京都中部総合精神保健福祉センター主催 シンポジウム「若年者の薬物乱用の現状と乱用防止への新しい取り組み」, 東京都中部総合精神保健福祉センター,2010.10.13.
 - 70) 松本俊彦: 自傷行為の理解と援助～若者たちの心の闇に迫る. 東京学校保健会主催 養護教諭研修会,

- 東京都教職員研修センター, 2010.10.14.
- 71) 松本俊彦: 自傷行為とパーソナリティ障害の理解と対応～自殺予防のために～. 神奈川県立青少年センター主催 平成22年度第2回NPO団体職員研修, 神奈川県立青少年センター, 2010.10.17.
 - 72) 松本俊彦: 精神保健観察における自殺予防. 法務省保護局主催 平成22年度社会復帰調整官初任者研修会, 法務省保護局, 2010.10.18.
 - 73) 松本俊彦: 薬物依存の理解と援助. 厚生労働省医薬食品局監視指導・麻薬対策課主催 平成22年度近畿地区薬物中毒対策連絡会議 相談従事者講習会, ホテル平安会館, 2010.10.19.
 - 74) 松本俊彦: 自傷と自殺. 福井メンタルヘルスフォーラム・グラクソ・スミスクライン主催 第7回福井メンタルヘルスフォーラム 特別講演, ホテルフジタ福井, 2010.10.21.
 - 75) 松本俊彦: 孤独, 孤立, 自死. 社団法人埼玉県断酒新生会主催 第10回市民公開セミナー 基調講演, 埼玉県民活動センター, 2010.10.31.
 - 76) 松本俊彦: 自傷行為の理解と援助～『故意に自分の健康を害する』若者たち. 香川県精神保健福祉センター主催 平成22年度思春期精神保健研修会, 香川県立文書館, 2010.11.5.
 - 77) 松本俊彦: 自傷行為と過量服薬に対する理解と対応. 独立行政法人国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所主催 第1回自殺予防のための自傷行為とパーソナリティ障害の理解と対応研修, 独立行政法人国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所, 2010.11.8.
 - 78) 松本俊彦: 地域における自殺予防の取り組み. 東京都多摩立川保健所主催 平成22年度ゲートキーパー指導者要請研修会, 2010. 11. 10, 東京都多摩立川保健所
 - 79) 松本俊彦: 新しい薬物依存症の治療～SMARPP～. 大塚製薬主催 ドパミンシステム勉強会. ホテルSCAPES 葉山, 2010.11.12.
 - 80) 松本俊彦: アルコール問題と自殺予防. 石川県断酒連合会主催 平成22年県民公開セミナー, 石川県地域地場産業振興センター, 2010.11.14.
 - 81) 松本俊彦: 自殺の現状と地域での対策のあり方. 国立保健医療科学院主催 平成22年度専門課程研修, 国立保健医療科学院, 2010.11.15.
 - 82) 松本俊彦: 薬物依存症の理解と援助. 独立行政法人国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所主催 第2回薬物依存症に対する認知行動療法研修, 独立行政法人国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所, 2011.11.16.
 - 83) 松本俊彦: 特別講演 自傷と自殺. 横浜不安・抑うつ研究会・明治製菓株式会社主催 第14回横浜不安・抑うつ研究会, 横浜ベイシェラトンホテル&タワーズ, 2010.11.18.
 - 84) 松本俊彦: 依存症事例検討会助言者. 東京都多摩立川保健所主催 事例検討会, 東京都多摩立川保健所, 2010.11.19.
 - 85) 松本俊彦: 薬物依存の理解と援助. NPO法人岐阜ダルク主催 薬物乱用防止フォーラム, 岐阜県県民ふれあい会館, 2010.11.23.
 - 86) 松本俊彦: 第7分科会 自死と多重債務問題 基調講演. 第30全国クレサラ・ヤミ金被害者交流集会 in 岐阜, 長良川国際会議場, 2010.11.27.
 - 87) 松本俊彦: 自傷行為の正しい理解と対応. 岐阜県教育委員会主催 平成22年度第5回教育相談実践研修会, 岐阜県総合教育センター, 2010.11.29.
 - 88) 松本俊彦: 小講義 薬物依存の現状と対策. 第48回全国学生相談研修会, 東京国際フォーラム, 2010.11.30.
 - 89) 松本俊彦: アディクションとその支援. 大阪市こころの健康センター主催 平成22年度精神保健福祉相談員資格取得講習会, 大阪市こころの健康センター, 2010.12.6.
 - 90) 松本俊彦: 地域における支援困難家族について. 横須賀市こども育成部主催 保健福祉医療従事者研修会, ウェルシティ市民プラザ, 2010.12.7.
 - 91) 松本俊彦: 自殺予防について考える～私たちにできることは?～. 東京都多摩小平保健所主催 平成22年度自殺対策「ゲートキーパー養成研修会」, ルネこだいら, 2010.12.8.

- 92) 松本俊彦: 第1分科会基調講演「アルコール問題と自殺」. 関東信越ブロック精神保健福祉センター連絡協議会主催 平成22年度関東信越ブロック精神保健福祉センター連絡協議会, パルテノン多摩, 2010.12.9.
- 93) 松本俊彦: 依存症と自殺予防～アルコール問題を中心に～. 栃木県東健康福祉センター主催 平成22年度自殺予防普及啓発研修会, 真岡市公民館, 2010.12.10.
- 94) 松本俊彦: 若者の飲酒の背景にあるもの～「故意に自分の健康を害する」症候群. 若者の飲酒を考えるフォーラム実行委員会主催 第17回若者の飲酒を考えるフォーラム, 横浜市健康福祉総合センター, 2010.12.12.
- 95) 松本俊彦: 自傷行為の理解と対応. 東京保護観察所主催 保護観察所職員研修, 東京保護観察所 2010.12.15.
- 96) 松本俊彦: ドラッグから自分を守ろう! 神奈川県立光陵高等学校主催 薬物乱用防止教室, 神奈川県立光陵高等学校, 2010.12.17.
- 97) 松本俊彦: 自傷と自殺～「故意に自分の健康を害する」症候群～. 関西大学社会学部主催 心理学特別講演会, 関西大学, 2010.12.20.
- 98) 松本俊彦: 矯正施設における自殺・自傷への対応. 法務省矯正研修所主催 任用研修課程高等科第42回研修. 法務省矯正研修所, 2010.12.22.
- 99) 松本俊彦: リストカットをする思春期の理解と支援～関わるすべての支援者のために～. 広島県小児科医会主催 第60回広島県小児科医会総会 招待講演, 広島グランドインテリジェントホテル, 2011.1.16.
- 100) 松本俊彦: わが国の自殺の実態および自殺予防対策について. 神奈川県労務安全衛生協会主催 厚生労働省委託事業「自殺予防セミナー」, ホテル横浜ガーデン, 2011.1.17.
- 101) 松本俊彦: あなたは道に迷ったとき, 人に道を尋ねることができますか?～うつと自殺予防のためのいくつかの智恵. 神奈川県三崎保健福祉事務所主催 講演会, 三浦市青少年会館, 2011.1.19.
- 102) 松本俊彦: 物質使用障害と自傷, 自殺. 平成22年度独立行政法人国立病院機構肥前精神医療センター主催 アルコール・薬物関連研修会, 独立行政法人国立病院機構肥前精神医療センター, 2011.1.21.
- 103) 松本俊彦: 自傷行為の理解と援助～若者の自殺予防のために～. 社会福祉法人栃木いのちの電話主催 公開講座, とちぎ福祉プラザ, 2011.1.22.
- 104) 松本俊彦: 地域で取り組む自殺対策～身近なところから気づきつながり支え合うために～. 平成22年度神奈川県鎌倉保健福祉事務所サービス連携調整会議 地域精神保健福祉部会, 神奈川県鎌倉保健福祉事務所, 2011.1.24.
- 105) 松本俊彦: 子どもの自殺予防のために学校にできること. 埼玉県教育委員会主催 明るく安心して学べる学校作り研修会, さいたま市民会館うらわ, 2011.1.28.
- 106) 松本俊彦: 日本の自殺の現状. 特定非営利活動法人メンタルケア協議会主催 東京都自殺防止のための電話相談技能研修, ハロー貸会議室新宿, 2011.1.30.
- 107) 松本俊彦: 薬物・アルコール依存を持った人への対応. 特定非営利活動法人メンタルケア協議会主催 東京都自殺防止のための電話相談技能研修, ハロー貸会議室新宿, 2011.1.30.
- 108) 松本俊彦: 児童・生徒の自殺予防について. 茨城県教育委員会主催 平成22年度第2回生徒指導教員連絡協議会, 茨城県教育研修センター, 2011.1.31.
- 109) 松本俊彦: 自殺の現状と対策について. 杉並区杉並保健所主催 平成22年度自殺対策研修「気付き・見守り・つなげる PartⅢ～ゲートキーパー養成研修～」, 杉並区役所, 2011.2.2.
- 110) 松本俊彦: 自殺の現状と対策について. 社団法人栃木県精神障害者援護会(やしお会)主催 平成22年度第3回メンタルヘルス研修会, 栃木県精神保健福祉センター, 2011.2.4.
- 111) 松本俊彦: なぜ自殺未遂者対策が必要か. 厚生労働省主催・日本精神科救急学会共催 平成22年度自殺未遂者ケア研修, 大阪マーチャングイズ・マート, 2011.2.5.
- 112) 松本俊彦: 医療に関わる自殺対策～自殺対策の基礎知識. NPO 法人全国自死遺族支援総合支援セン

- ター主催 ワークショップ「医療者と考える自死遺族支援」, 飯田橋レインボービル, 2011.2.6.
- 113) 松本俊彦: 自傷行為の理解と対応. 神奈川県大和保健福祉事務所主催 大和市内養護教諭研修会, 神奈川県大和保健福祉事務所, 2011.2.8.
- 114) 松本俊彦: 依存症と自殺について. 大阪司法書士会主催 自死予防研修会 基調講演, 国民會館, 2011.2.13.
- 115) 松本俊彦: うつとアルコールと自殺について. 四日市市保健所主催 平成22年度アルコール講習会, 四日市市総合会館, 2011.2.20.
- 116) 松本俊彦: 子どもの自死を察知するために養護教諭として気をつけること. 神奈川県教職員組合主催 神奈川県養護教諭研修会, 神奈川県教育会館, 2011.2.22.
- 117) 松本俊彦: アルコールとうつ. 世田谷区世田谷保健所主催 平成22年度世田谷区依存症セミナー, 三軒茶屋キャロットタワー5階, 2011.2.22.
- 118) 松本俊彦: 自殺対策のこれから～自殺多発地域の対策～. 神奈川県厚木保健福祉事務所主催 宮ヶ瀬地域自殺対策検討会, 神奈川県厚木合同庁舎, 2011.2.25.
- 119) 松本俊彦: 気づこう心のSOS～子どもの心を育てる保護者の役割とは～. 羽生市教育委員会主催 保護者対象講演会, 2011.2.27, 羽生市産業文化ホール
- 120) 松本俊彦: 自殺の現状と住みやすい社会をめざして. 荒川区主催 自殺対策ゲートキーパー研修, サンパール荒川, 2011.3.2.
- 121) 松本俊彦: 自傷行為と自殺. 尼崎市保健所主催 第3回自殺対策研修会, 尼崎市立すこやか多目的ホール, 2011.3.8.
- 122) 松本俊彦: 精神鑑定事例. 法務省矯正研修所主催 調査鑑別特別科第4回研修, 法務省矯正研修所, 2011.3.9.
- 123) 松本俊彦: 自傷行為とパーソナリティ障害への対応について. 公立大学法人横浜市立大学医学部精神医学講座主催 レジデント研修会, 公立大学法人横浜市立大学附属市民総合医療センター, 2011.3.10.
- 124) 西原理恵子, 松本俊彦: 対談「人生の歩き方～前を向いて進んで行こう～」, 熊本県健康福祉局障がい者支援総室主催平成22年度自殺予防講演会, グランメッセ熊本, 2011.3.21.
- 125) 松本俊彦: 気づき,かかわり,つないでいこう～みんなで支える心の健康. 阿蘇地域振興局保健福祉環境部保健予防課主催 平成22年度阿蘇シルバーハートネット推進フォーラム, 阿蘇いこいの村, 2011.3.22.
- 126) 松本俊彦: 働き盛りの自殺予防～うつ,アルコールとの関係～. 熊本県健康福祉局障がい者支援総室主催 玉名郡市医師会研修会, 玉名郡市医師会館, 2011.3.22.
- 127) 松本俊彦: 自殺のハイリスク者と自殺未遂者の支援. 広島県・広島県臨床心理士会主催 平成22年度広島県自殺対策相談支援関係者【臨床心理士等】研修会, 広島県国民健康保険団体連合会国保会館, 2011.3.27.
- 128) 嶋根卓也: 青少年における薬物乱用の実態とその予防について,平成22年度東京都・区市町村青少年行政事務主管課職員研究協議会, 東京都青少年・治安対策本部, 都庁第一本庁舎, 東京, 2011.3.1
- 129) 嶋根卓也: 薬物乱用から身を守る. 平成22年度薬物乱用防止教室, 横須賀市立大津中学校, 神奈川, 2010.12.17.
- 130) 嶋根卓也: 子どもたちのメンタルヘルスの現状と課題～薬物依存研究から見えてくるもの～, 平成22年度子どもたちのメンタルヘルス向上支援事業, 北海道高等学校PTA連合会, ホテルライフオート札幌, 北海道,2010.12.14
- 131) 嶋根卓也: 薬物乱用から身を守る. 平成22年度薬物乱用防止教室, 横須賀市立公郷中学校, 神奈川, 2010.12.7.
- 132) 嶋根卓也: 青少年における薬物乱用の実態とその予防について. 平成22年度家庭教育事業, 相模原市立小中学校PTA連絡協議会, ウェルネスさがみはら, 神奈川, 2010.11.28

- 133) 嶋根卓也：薬物乱用から身を守る。平成 22 年度薬物乱用防止教室，越谷市立桜井南小学校，埼玉，2010.11.26
- 134) 嶋根卓也：若年者の薬物乱用の現状。若年者の薬物乱用の現状と乱用防止への新しい取り組み，東京都立中部総合精神保健福祉センター，東京，2010.10.13
- 135) 嶋根卓也：青少年における薬物乱用の実態とその予防について。横浜市教職員組合磯子支部第 1 回教育研究大会，磯子公会堂，神奈川，2010.6.29.
- 136) 嶋根卓也：思春期における薬物乱用の特徴とその予防・治療。平成 22 年度長野県薬物乱用防止教育指導者講習会。長野県庁，長野，2010.6.25.
- 137) 嶋根卓也：薬物乱用・依存の実態およびその予防について。慶応義塾大学健康マネジメント研究科地域看護学，慶応義塾大学湘南藤沢キャンパス，神奈川，2010.6.7.
- 138) 嶋根卓也：薬物乱用から身を守る。平成 22 年度薬物乱用防止教室，神奈川県立横浜立野高等学校，神奈川，2010.5.20.

D. 学会活動

(1) 学会役員

- 1) 和田 清：日本社会精神医学会 常任理事
- 4) 和田 清：日本アルコール・薬物医学会 理事
- 6) 和田 清：ニコチン・薬物依存フォーラム 理事
- 7) 松本俊彦：日本アルコール精神医学会 理事
- 8) 松本俊彦：日本アルコール・薬物医学会 評議員
- 9) 松本俊彦：日本アルコール精神医学会 評議員
- 10) 松本俊彦：日本司法精神医学会 評議員
- 11) 松本俊彦：日本精神科救急学会評議員
- 12) 松本俊彦：日本青年期精神療法学会 理事
- 13) 船田正彦：日本アルコール・薬物医学会 評議委員
- 14) 船田正彦：日本神経精神薬理学会 評議委員
- 15) 船田正彦：日本薬理学会 評議員

(2) 座長

- 1) 和田 清, 船田正彦：3 学会合同シンポジウム 5 JS-5 「依存と離脱のメカニズム」：平成 22 年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会（第 45 回日本アルコール・薬物医学会, 第 22 回日本アルコール精神医学会, 第 13 回ニコチン・薬物依存研究フォーラム）。リーガロイヤルホテル小倉。北九州市。2010.10.7-10.9.
- 2) 和田 清, 松本俊彦：シンポジウム VI 「薬物依存と現代社会－医療モデルの必要性－」。第 30 回日本社会精神医学会。奈良県文化会館。2011.3.4.
- 3) 金 吉晴, 松本俊彦：シンポジウム 8（司会）認知行動療法と社会との接点。第 106 回日本精神神経学会学術総会，広島，2010.5.20.
- 4) 宮田久嗣, 松本俊彦：3 学会合同シンポジウム 1 「多様な嗜癖行動を物質依存の立場から考える」，平成 22 年度アルコール・薬物関連学会合同学術総会，小倉，2010.10.7.
- 5) 松本俊彦, 竹島 正：3 学会合同シンポジウム 4 「自傷, 自殺とアルコール・薬物問題～精神科と法医学の立場から」，平成 22 年度アルコール・薬物関連学会合同学術総会，小倉，2010.10.7.
- 6) 船田正彦：シンポジウム 5 依存と離脱のメカニズム 第 45 回日本アルコール薬物医学会，小倉，2010.10.8.

(3) 編集委員等

- 1) 和田 清: 日本社会精神医学会 学術委員会 委員長
- 2) 和田 清: 日本社会精神医学会学術委員, 編集委員
- 3) 和田 清: 日本アルコール・薬物医学会 庶務委員会委員
- 4) 松本俊彦: 日本社会精神医学会 学術委員
- 5) 松本俊彦: 日本精神衛生学会 編集委員

E. 研修

(1) 研修企画

- 1) 第12回薬物依存臨床看護等研修会(2010.9.7-9.10)
- 2) 第24回薬物依存臨床医師研修会(2010.9.7-9.10)

F. その他

(1) 取材等

- 1) 和田 清: 大阪ダルクの挑戦 1. 大阪日日新聞. 2010.4.6.
- 2) 国立精神・神経医療研究センター: 向精神薬「10年で2倍」. 毎日新聞. 2010.7.28.
- 3) 和田 清: 写真提供. シンナー乱用 低年齢化…密売人が暗躍. 熊本日日新聞. 2010.8.4.
- 4) 薬物依存研究部: 調査結果掲載. ニュースがわからん! 薬物依存症の恐ろしさとは? 朝日新聞. 2010.9.18.
- 5) 和田 清: 薬物使用対策で日中連携 千葉大 2 大学と協定. 読売新聞. 2010.11.13.
- 6) 和田 清: 2010 年に取り上げた 46 の病気: 薬物依存症, その実態. 医療の現場. BS 朝日テレビテキスト 2010.12. 講談社 MOOK. p.053-p.053, 2010.12.
- 7) 和田 清: 薬物から若者を守れ. 下野新聞. 2010.12.17.
- 8) 松本俊彦: 北海道新聞, 「自殺予防について」, 2010.4.30.
- 9) 松本俊彦: 毎日新聞, 「薬物と自殺問題」, 2010.6.24.
- 10) 松本俊彦: 日本音楽事業者協会, 「薬物ハンドブック」制作助言, 2010.5.26.
- 11) 松本俊彦: 朝日新聞「アルコール依存症と自殺」, 2010.6.9.
- 12) 松本俊彦: 日刊ゲンダイ, 「後悔しない治療法」2010.8.5.
- 13) 松本俊彦: 週刊朝日, 「薬物依存症・名医のセカンドオピニオン」, 2010, 7. 13
- 14) 松本俊彦: 毎日新聞, 「こころを救う」オピニオン掲載, 2010.7.24.
- 15) 松本俊彦: 調剤と情報, 「薬剤師向け・向精神薬の処方に関して」, 2010.9.1.
- 16) 松本俊彦: NHK「境界性パーソナリティ障害と自殺予防」, 2010.8.19.
- 17) 松本俊彦: 「暮しと健康」, 11月号「向精神薬」取材, 2010.8.27.
- 18) 松本俊彦: 読売新聞, 「働きざかりのうつ・自殺」, 2010.8.27.
- 19) 松本俊彦: 教育医事新聞, 秋季特別号「心理学的剖検報告書について」, 2010.9.25.
- 20) 松本俊彦: 共同通信社, 「自傷や自殺未遂行動を取る患者へのケアや医療現場に今何が求められているのか」, 2010.9.11.
- 21) 松本俊彦: 毎日新聞, 「向精神薬乱用と過量服薬」, 2010.9.15.
- 22) 松本俊彦: 北海道新聞社, 「アルコールと薬物依存からみる自殺予防について」, 2010.9.21.
- 23) 松本俊彦: 朝日新聞「飲酒と自殺リスクについて」, 2010.11.2.
- 24) 松本俊彦: 医薬経済「依存症 OTC 薬に効果なき販売規制」, 2010.12.1.
- 25) 松本俊彦: オレンジリボンネットに掲載「思春期の自傷行為について」, 2010. 2. 28
- 26) 松本俊彦: NHK ハートをつなごう「薬物依存症」出演, 2010. 4. 26-27
- 27) 松本俊彦: 東京都福祉局制作「東京都薬物乱用防止講習会用 DVD」出演, 2010.5.10.
- 28) 松本俊彦: NHK ハートをつなごう「薬物依存症」出演, 2010.6.28-29.

- 29) 松本俊彦: NHK ハートをつなごう「薬物依存症」出演, 2010.7.26-27.
- 30) 松本俊彦: NHK ETV ワイド出演 「薬物依存症」関連, 2010.8.28.
- 31) 松本俊彦: NHK ハートをつなごう「薬物依存症」出演, 2010.9.22-23.
- 32) 松本俊彦: NHK 「おはよう日本」 出演, 2010.11.8-9.
- 33) 松本俊彦: 日経ラジオ ドクターサロン「薬物依存症について」 語り手として, 2011.1.21.
- 34) 松本俊彦: NHK 「クローズアップ現代」 VTR 出演, 2011.3.4.
- 35) 嶋根卓也: なぜ? 「種子なら OK」大麻乱用「誘い水」, 毎日新聞 (東京) . 2009.4.20.

(2) 資料提供等

- 1) 和田 清: 写真提供. NO! DRUGS 2010.全国防犯協会連合会,社会安全研究財団. 2010.
- 2) 和田 清: 写真提供. DRUG 2010 薬物乱用のない社会を.警察庁薬物銃器対策課, 2010.
- 3) 和田 清: 写真提供. 薬物乱用絶対防止!! ,三郷市・三郷市教育委員会・三郷市青少年育成推進委員協議会・三郷市青少年育成市民会議・三郷市暴力排除推進協議会, 2010.
- 4) 和田 清: 写真提供. シンナー乱用 低年齢化・・・密売人が暗躍. 熊本日日新聞, 2010.8.4.
- 5) 和田 清: 写真提供. 「一度だけでもダメ!薬物のこわさを知ろう」,小学保健ニュース No.922, 2010年9月28日号 (株) 少年写真新聞社.
- 6) 和田 清: DRUG 薬物からの離脱を目指せ!! ,警察庁,02-02, 2010.11.

4. 心身医学研究部

I. 研究部の概要

本研究部の主要研究課題はいわゆるストレス関連疾患、特に心身症の発症メカニズム・病態を生物・心理・社会科学的に解明し、その診断基準を作成して、疫学調査を行うと共に、効果的な治療法・予防法を開発することである。また、同様に広くストレスの生体におよぼす影響を解明し、上記の治療および予防に役立てることである。

当研究部の常勤研究者の構成は、部長の小牧 元と、新しく本年4月に着任した心身症研究室長 菊地裕絵ならびにストレス研究室長 安藤哲也の3名で構成されている。なお、臨床研究は国府台病院心療内科、センター病院放射線診療部ならびに東京家政大学との共同研究を継続している。また全国の摂食障害遺伝子研究協力者会議を組織し、摂食障害罹患感受性遺伝子研究を引き続き進めている。先行研究で同定された神経性食欲不振症（AN）感受性候補領域のうち、2領域のMSマーカーの再現性を猪子教授（東海大学医学部）と共同して解析を進めている。摂食障害候補遺伝子研究の一つとして行ってきたGhrelin遺伝子研究に関する安藤室長の論文がFaculty of 1000に推薦され、紹介された。

海外共同研究としては、Lane教授（Univ. of Arizona）と心理質問紙日本語版LEAS-Jを完成させ、英文誌に投稿・掲載され、感情認知・表出の研究を一步前進させた。さらに精神生理研究部の守口善也室長とアレキサンミアの脳機能画像研究を引き続き行っている。これらはストレスと疾患発症メカニズムの解明に重要な研究の一つである。また本年度から摂食障害の病態解明のための脳機能画像研究も協力してもらっている。臨床面では研究部のスタッフが全員で引き続きセンター病院心療内科外来で診療・研究に携わっている。

人事面では、H22.3.31付けで流動研究員の荒川裕美が退職、文部科学省に就職した。前記の様に新たに心身症研究室長に菊地裕絵が、流動研究員に長谷部智子がそれぞれ就任した。

<研究者の構成> 部長：小牧 元、心身症研究室長：菊地裕絵、ストレス研究室長：安藤哲也、流動研究員：兒玉直樹、長谷部智子、併任研究員：濱田 孝（病院心療内科）、大和 滋（総合内科）、有賀 元（消化器科）、天野智文（消化器科）（H22.8.1～）、協力研究員：大西 隆、客員研究員：佐々木雄二（横浜薬科大学教授）、杉田峰康（福岡県立大学大学院臨床心理学心身科学名誉教授）、前田基成（女子美術大学芸術学部教授）、近喰ふじ子（東京家政大学文学部教授）、関山敦夫（榎坂病院附属治療精神医学研究所所長）、研究生11名

II. 研究活動

1) 心身症の発症機序と病態、治療に関する基礎的ならびに臨床的研究

(1) 心身症診断・治療ガイドライン開発研究

精神・神経疾患研究開発費「心身症診断・治療ガイドラインの標準化とその検証に関する研究」班（主任・分担研究者：小牧、安藤）で心身症ガイドラインの標準化とその検証に関する研究を進めるとともに、昨年度に引き続き脳機能画像を用いた心身症発症メカニズムの解明研究、アトピー性皮膚炎の心身医学的診断と治療の研究を行っている。本研究班で作製した心身症診断治療ガイドライン2006：アトピー性皮膚炎に関する評価について皮膚科医を対象にアンケート調査を実施したところ（大阪警察病院皮膚科と共同研究）、約85%の皮膚科医が、心身医学的な診方を理解するのに役立つと答えた。皮膚科医が実施しやすい心身医学的治療は傾聴を中心とした簡単なカウンセリングと向精神薬物療法であった。皮膚科医を対象にして心身医学的問題の理解、カウンセリング、向精神薬物療法、心療内科・精神科医への紹介について短時間の講習を実施したところ心身症患者への対応の自信が増加した。皮膚科医においては傾聴と薬物療法が現実的であり、心身医学的治療の普及にはより短時間でできる治療法の開発必要と考えられた。（安藤）。

心身症の病態に関与する情動認知能力の評価スケールおよび情動表現能力の評価スケール邦訳版を開発するべく標準化作業を進め、感情への気付き尺度日本語版（LEAS-J）の信頼性、妥当性の検討を行い、

国際誌に投稿，掲載された．欧米人と異なる日本人における感情の認知，表出の差が明らかとなり，情動制御に対する文化・社会的影響の存在も考慮すべきであろう．今回，トロント・アレキシサイミアスコア（TAS-20）ならびに他の心理質問紙との比較検討を行ったが，正しいアレキシサイミア概念確立の為の研究の方向性が示唆された．

(2) 非侵襲的脳機能検査法の一つである機能的MRIを用いた心身症患者における脳内認知プロセスの解明研究

海馬は慢性ストレスに対する脆弱性があると報告されている．我々の実験により不安による急性ストレスとしての痛みの増幅に海馬が重要な役割を果たしていることが分かった．実際機能的MRIを用いた実験では，日常の身体愁訴の増悪には，不安の強弱という条件を区別する際の海馬の機能不全が，その増悪に関係していることが明らかになった．これは弱い不安の際に機能不全があると，ストレスが遷延し身体的緊張の持続を招くことで身体症状の増強やさらなるストレス反応を生み，悪循環に発展する恐れがあることが示唆された．このように情動の処理，あるいは症状とそれに関連する感情の処理の個人差は，前頭前野や辺縁系のある領域の活動の差と関係している可能性があることが明らかとなった（科学研究費補助金基盤（C）：権藤，小牧）．

2) 摂食障害の臨床的病態解明研究ならびに疫学的研究

(1) 体型への不満－脳機能画像を用いた検討

自己の体型の評価のゆがみは摂食障害の中核的な病理である．一般に自己への評価は他者との比較によって決定され，自己の体型への評価にも同様のことが考えられる．今回我々は機能画像を用いて他者との体型の比較を行っている時の脳活動を予備的に検討した．その結果，理想体重が低い，つまり痩せ願望が強いほど痩せている他者との比較を行うと不安になり，なおかつ自分の体型を強く意識することが示唆された．このことが体型に対する不満を生じ，やせを美しいとする文化圏では，外見の美しさが重要視される若年女性にとって自尊感情を低下させる一因となる可能性が示唆され，被験者を増やして再現性を検討中である（精神・神経疾患研究委託費：分担研究者小牧，兒玉）．

(2) 児童・思春期摂食障害に関する基盤的調査研究

近年若年化傾向がみられる摂食障害に対して，特に中学生における実態把握と，その調査結果を基にした児童・思春期の摂食障害への総合的対策立案を確立するための疫学的調査研究である．首都圏都市・地方都市（中学生 6,000 人）を対象に摂食障害に関連したアンケート調査ならびに一部面接調査を開始した．これにより，摂食障害傾向を有する中学生の頻度ならびにその発症危険因子関連項目が明らかとなった．今後，二次調査として患者群を対象とした EDE-Q 調査，ならびに CIDI 3.0・コンピュータ（CAPI）版を用いた摂食障害診断面接調査を引き続き行う予定である（思春期摂食障害に関する基盤的調査研究 厚労科研費こころの健康科学研究事業：小牧）．

3) 摂食障害の罹患感受性遺伝子研究

(1) ゲノムワイド相関解析

全国 60 施設以上からなる摂食障害遺伝子解析協力者会議を組織し全国規模で摂食障害患者の試料収集するシステムを構築している．我々は先行研究（Nakabayashi K. et al *J Hum Genet* 54:531-537, 2009）でマイクロサテライトマーカーを用いた摂食障害では世界初のゲノムワイド相関解析を実施し 10 領域のマイクロサテライトマーカーが神経性食欲不振症と関連することを報告した．続いて SNP 関連解析による感受性領域の狭小化を行い，最終的に 1q41 領域と 11q22 領域を新規神経性食欲不振症感受性ゲノム領域として同定した．

本年度は独立検体にてこの 10 領域のマイクロサテライトマーカーのゲノタイピングを実施したところ 1q41, 11q22, 12q14.1 の三領域のマーカーで，先行研究と今回のデータを合せてケースとコントロール間で関連が認められた．このうち，先行研究と今回とで関連を示すアレルが一致し，その頻度傾向が一致

し、Hardy-Weinberg Equilibrium からの偏差がないものは 1q41 領域の D1S0562i であった。この D1S0562i 領域についてハプロタイプを推定した結果、D1S0562i 単独よりもオッズ比の高い二つのハプロタイプが推定された。

さらに多因子疾患関連遺伝子を検出する方法として現在最も有効とされているSNPマーカーを用いたGWASの実施に向けて試料収集を続け、H23年度までに940数検体の摂食障害患者血液検体を収集した。引き続き、検体収集のための組織と基盤の維持に努めている（科学研究費補助金 (B)：小牧，安藤）。

(2) 候補遺伝子法による相関解析

これまでにグレリン遺伝子の変異と神経性過食症との関連や健常女性の体型や摂食障害傾向との関連を報告してきた。さらに研究を進めた結果、グレリン遺伝子の変異が制限型神経性食欲不振症の経過における正常体重の回復率と関連していることがわかった。これは遺伝子型による摂食障害の経過の予測の可能性を示したもので成果は *Psychiatric Genetics* 誌に掲載された。本研究は摂食障害の症候の変化の基盤にある生物学的なメカニズムを探究した国際的にも初めての研究として高く評価され Faculty of 1000 に推薦された。

一方、海外を中心に複数の研究で神経性食欲不振症と関連することが報告されている脳由来神経栄養因子 (BDNF) の Val66Met 多型についても検討したが、十分な検出力にもかかわらず我々のサンプルでは神経性食欲不振症との関連は認められず、日本人においては関連していないと考えられた（科学研究費補助金 (B)：安藤）。

(3) 女性のやせと食行動異常を決定する環境・遺伝要因の研究

若年一般女性のやせ、食行動異常、摂食障害を決定する要因を心身相関および遺伝・環境の相互作用の観点から明らかにするプロジェクトで東京家政大学の市丸教授との共同研究で調査・試料収集と解析を行った。これまでの解析で女子大学生の平均 BMI は 20.5kg/m² と低いものの、平均の体脂肪率は 25.9% と低くはないこと、やせでは月経不順の頻度が高いこと、ダイエットの実施は体格指数の高さと関連すること、気晴らし食いの経験は抑うつ、不安、強迫、完璧主義の高さや自尊感情の低さと関連することがわかった。また、ストレスやコーピングが摂食行動に関連していた。肥満関連遺伝子の B3 アドレナリン受容体、脱共役タンパク質 1, B2 アドレナリン受容体の多型と体型・体組成とは関連しなかった。グレリン遺伝子の多型は高い体格指数、体脂肪量と、脳由来神経栄養因子 (BDNF) の多型は低い身長・体重・除脂肪量と関連することがわかった（科学研究費補助金 (C)：安藤）。

4) 摂食障害のバイオマーカーの研究

摂食障害のバイオマーカー研究として、自己抗体の研究と血漿アミノ酸プロファイルの研究を継続している。国立国際医療研究センター国府台病院心療内科の協力で摂食障害患者の試料収集を、神奈川県予防医学協会の協力でメタボリックシンドローム患者で試料収集を進めている。血漿アミノ酸の解析は味の素株式会社との受託・共同研究である（安藤，倉）

5) 食行動と生物心理社会的因子の経時的関連に関する包括的モデルの開発

食行動と生物心理社会的因子の経時的関連の包括的理解を生態学的妥当性および栄養学的正確性の高いデータに基づき行うことを目指し、ecological momentary assessment (EMA) 法および携帯情報端末による食事記録システムを用いて調査・解析を進めている。健常若年群を対象とした調査において、食事の場所や食直前の抑うつ気分と摂取エネルギー量の関連が BMI により異なることを明らかにし報告した(菊地)。

6) 自覚症状の記憶特性と評価の妥当性に関する検討の実施

東京大学大学院教育学研究科山本義春教授との共同研究により、自覚症状の評価法の一つである Day reconstruction method (DRM) 法を EMA 法との比較で方法論的に検討し、DRM 法ではバイアスが生

じる可能性を明らかにした。引き続き健常若年群および交代勤務者での調査解析を行っている（菊地）。

Ⅲ. 社会的活動に関する評価

1) 市民社会に対する一般的な貢献

- 1) 小牧 元：青年期の発達からみた摂食障害—強迫性、衝動性への対応—。福井県精神保健福祉センター，福井，2010.8.5.
- 2) 小牧 元：摂食障害と共に生きる 2011 「—長引く理由—」。のびの会特別事業 第13回摂食障害講演会，横浜，2011.1.30.
- 3) 小牧 元：摂食障害研究の最近の話題。埼玉心身医学研究会，埼玉，2011.2.25.
- 4) 辻裕美子：更年期への心理的アプローチ。東金市，2010.2.26

2) 専門教育面における貢献

中央労働災害防止協会（産業ストレス）非常勤講師，女子美術大学・東京大学医学部・九州大学医学部心身医学講義非常勤講師（小牧），蕨戸田医師会看護専門学校非常勤講師（小牧・安藤），二葉看護学院非常勤講師（小牧・安藤・菊地・兒玉・倉），一葉福祉学院非常勤講師（小牧・安藤・菊地・兒玉），共立女子大学家政学部栄養教育論非常勤講師（菊地）

以上，医学部学生，心理・教育学部学生，看護・介護福祉士学生，心理士などを中心に，心身医学，ストレス関連疾患，ならびに心理学などを中心とした専門教育に貢献した。

3) 精研の研修の主催と協力

平成22年度精神保健に関する技術研修

第8回摂食障害治療研修 2010.8.31～9.3 精神保健研究所セミナー室

第7回摂食障害看護研修 2010.11.10～12 精神保健研究所セミナー室

以上，摂食障害治療などについて医療関係者への知識普及及び治療の標準化に貢献した。

4) 保健医療行政・政策に関連する研究・調査，委員会等への貢献

小牧 元：（財）精神・神経科学振興財団選考委員会委員

5) センター内における臨床的活動

センター病院心療内科併任医師（小牧，安藤，菊地，兒玉），

同上 心療内科心理士（倉）

Ⅳ. 研究業績

A. 刊行物

(1) 原著論文

- 1) Ando T, Komaki G, Nishimura H, Naruo T, Okabe K, Kawai K, Takii M, Oka T, Kodama N, Nakamoto C, Ishikawa T, Suzuki-Hotta M, Minatozaki K, Yamaguchi C, Nishizono-Maher A, Kono M, Kajiwara S, Suematsu H, Tomita Y, Ebana S, Okamoto Y, Nagata K, Nakai Y, Koide M, Kobayashi N, Kurokawa N, Nagata T, Kiriike N, Takenaka Y, Nagamine K, Ookuma K, Murata S, the Japanese Genetic Research Group for Eating Disorders : A ghrelin gene variant may predict crossover rate from restricting-type anorexia nervosa to other phenotypes of eating disorders: a retrospective survival analysis. *Psychiatric Genetics* 20:153 - 159, 2010.
- 2) Ishiguro H, Onaivi ES, Horiuchi Y, Imai K, Komaki G, Ishikawa T, Suzuki M, Watanabe Y, Ando T, Higuchi S, Arinami T: Functional polymorphism in the GPR55 gene is associated with anorexia nervosa. *Symapse* 65:103–108, 2011.

- 3) Igarashi T, Komaki G, Lane RD, Moriguchi Y, Nishimura H, Arakawa H, Gondo M, Terasawa Y, Sullivan C, Maeda M : The reliability and validity of the Japanese version of the Levels of Emotional Awareness Scale (LEAS-J), *BioPsychoSocial Medicine* 2011, 5:2 , 2001.1.31.
- 4) 近喰ふじ子, 塚本尚子, 安藤哲也, 吾郷晋浩 : 「夫婦新密度尺度」の開発とその試み. *心身医学* 50(12):1171-1185, 2010
- 5) 米良貴嗣, 岡孝和, 宮田正和, 兒玉直樹, 森 秀和, 玉川葉子, 武永雅樹, 林田草太, 橋本朋子, 辻貞俊 : Body Shape Questionnaire と Body Attitudes Questionnaire 日本語版の作成と、それを用いた日本人摂食障害患者の身体イメージの評価. *心身医学* 51(2):151-161, 2011

(2) 総説

- 1) Yoshiuchi K, Inada S, Kikuchi H: Food diaries: use of new technology versus the written record. *CAB Reviews: Perspectives in Agriculture, Veterinary Science, Nutrition and Natural Resources* 5:48(1-5), 2010.
- 2) 小牧 元 : 心身医学 臨床医学の展望 2011 - 診断および治療上の進歩【7】. *日本医事新報* No4534 pp80-87, 2011.
- 3) 中林一彦, 小牧 元, 白澤専二 : 神経性食欲不振症のゲノムワイド関連研究 A SPECIAL EDITION, 最近の GWAS 研究の成果. *BIO Clinica* 25(6) 494-499, 2010.
- 4) 兒玉直樹, 小牧 元 : 高齢者診療に活かすガイドラインのポイント第 11 回『高齢者心身症』. *Geriatric Medicine 老年医学* Vol. 48 1113-1118, 2010.
- 5) 吉内一浩, 菊地裕絵, 赤林 朗 : 心身症としての緊張型頭痛. *心身医学* 50 :811-815, 2010.
- 6) 高橋 晶: 特集 一般病院における認知症ケア 1 認知症の基礎知識, 看護技術, , 56(14): 26-32, 2010.

(3) 著書

- 1) 小牧 元 : 心身相関—身体への気づき、こころへの気づき. NPO 法人脳の世紀推進会議 編 : 脳の発達と育ち・環境. クバプロ, 東京, 2010.6
- 2) 安藤哲也 : 摂食障害 : 神経性食欲不振症, 神経性過食症. 板倉弘重 監修、近藤和雄・市丸雄平・佐藤和人 編著 : 医科栄養学. pp557-571, 建帛社, 東京 2010.9.10

(4) 研究報告書

- 1) 小牧 元 : 「心身症の診断・治療ガイドラインの標準化とその検証に関する研究」総括・分担研究報告書. 平成 20~22 年度厚生労働省精神・神経疾患研究開発費 (20 委-7), 2011.3
- 2) 小牧 元 : 「摂食障害の疫学, 病態と診断, 治療法, 転帰と予後に関する総合的研究」分担研究報告書. 平成 20~22 年度厚生労働省精神・神経疾患研究開発費 (20 委-2), 2011.3
- 3) 安藤哲也 : 「心身症の診断・治療ガイドラインの標準化とその検証に関する研究」分担研究報告書. 平成 20~22 年度厚生労働省精神・神経疾患研究開発費 (20 委-7), 2011.3

(5) 翻訳

菊地裕絵 : 身体化. 内山喜久雄, 大野裕, 久保木富房, 坂野雄二, 沢宮容子 (監訳) 認知行動療法事典. 日本評論社, 東京, pp234-237, 2010. (Freeman A, Felgoise SH, Nezu AM, Nezu CM, Reinecke MA eds.: *Encyclopedia of Cognitive Behavior Therapy*. Springer, New York, 2005)

(6) その他

- 1) 小牧 元 : Q20 「昔の精神医学の教科書に、摂食障害の頁はあるのでしょうか (摂食障害の歴史)」 第1部 摂食障害 Q&A. 生野照子, 切池信夫 編:特集 摂食障害. こころのりんしょう a la carte. 29 (3): 312, 2010.
- 2) 小牧 元 : Q27 「短時間の外来で効果的な治療法を教えてください(外来治療)」 第1部 摂食障害 Q & A. 生野照子, 切池信夫 編:特集 摂食障害. こころのりんしょう a la carte. 29 (3): 319, 2010.
- 3) 兒玉直樹, 小牧 元 : Q32 「拒食と過食は、違う病態なのでしょうか。(拒食と過食の関連)」 第1部 摂食障害 Q&A. 生野照子, 切池信夫 編:特集 摂食障害. こころのりんしょう a la carte. 29 (3): 324, 2010.
- 4) 安藤哲也 : Q8 「遺伝的な影響は、考えられるのでしょうか？」 第1部 摂食障害 Q&A. 生野照子, 切池信夫 編:特集 摂食障害. こころのりんしょう a la carte. 29 (3): 300, 2010.
- 5) 小牧 元 : 摂食障害 簡略版. みんなのメンタルヘルス総合サイト～こころの病気・精神障害の方の治療・生活を応援する総合サイト～, <http://dev03.visual-l.com/portal/100625/disease/eat.html> 詳細版 http://dev03.visual-l.com/portal/100625/disease_detail/1_04_02eat.html
- 6) 菊地裕絵 : 食事がすすまない. みんなのメンタルヘルス総合サイト ～こころの病気・精神障害の方の治療・生活を応援する総合サイト～, <http://dev03.visual-l.com/portal/100625/disease/eat.html> 詳細版 http://dev03.visual-l.com/portal/100625/disease_detail/1_04_02eat.html
- 7) 菊地裕絵 : Q46 「摂食障害は身体に様々な症状が出ると聞きます。過食症であっても内科にかかる必要があるのでしょうか？」 第1部 摂食障害 Q&A. 生野照子, 切池信夫 編:特集 摂食障害. こころのりんしょう a la carte. 29 (3): 338, 2010.
- 8) 菊地裕絵 : シンポジウム 2 : 身体疾患における不安障害治療の意義. 緊張型頭痛と不安. 不安障害研究, 3(1): 57-59, 2011.
- 9) 菊地裕絵 : 書評『緩和ケアと時間 私の考える精神腫瘍学』小森康永著. 心と社会 42(1):122, 2011..

B. 学会・研究会における発表

(1) 学会特別講演, 教育講演, シンポジウム, ワークショップ, パネルディスカッション等

- 1) 小牧 元 : シンポジウム Neuroimaging の新展開. 第51回日本心身医学会総会ならびに学術講演会, 仙台, 2010.6.26-27.
- 2) 安藤哲也 : 座長 セッションIV 調査. 第118回 日本心身医学会関東地方会. 東京, 2011.2.19.
- 3) 菊地裕絵 : シンポジウム2 身体疾患における不安障害治療の意義. 緊張型頭痛と不安. 第3回日本不安障害学会学術大会, 東京, 2011.2.5-6.

(2) 一般演題

- 1) Komaki G, Nakabayashi K, Ando T, Inoko H, Shirasawa S, Japanese Genetic Research Group For Eating Disorders (JGRED) : Genetic study for Japanese anorexia nervosa patients by genome-wide association analysis with microsatellite markers. The 14th Congress of the Asian College of Psychosomatic Medicine, Beijing, 2010.9.10-12
- 2) Ando T, Hasegawa Y, Ichimaru Y, Komaki G : Associations of stress coping styles with eating disorder-tendency and body composition in young Japanese women. International Conference on Eating Disorders, Salzburg, 2010.6.10-12.
- 3) Nishimura H, Komaki G, Arakawa H, Maeda M : Screening investigation for eating disorders among female juniorhigh students; one year prospective study. International Conference on Eating Disorders, Salzburg, 2010.6.10-12.
- 4) Kikuchi H, Yoshiuchi K, Inada S, Komaki G, Yamamoto Y : What is related to food intake in real daily life?: A study using ecological momentary assessment and PDA-based food recording system.

- 11th International Congress of Behavioral Medicine, Washington, D.C., 2010. 8.4-7.
- 5) Kim J, Kikuchi H, Yamamoto Y : Examination of new methods to measure fatigue and depressive mood by using physical activity level. 11th International Congress of Behavioral Medicine, Washington, D.C., 2010.8.4-7.
 - 6) Gondo M, Moriguchi Y, Sato N, Sudo N, Komaki G : Daily physical complaints and Activity in the hippocampal formation in response to pain modulation mediated by Anxiety. American Psychosomatic Society 69th Annual Scientific Meeting, March 9-12, 2011, San Antonio, USA
 - 7) 小牧 元, 西村大樹, 荒川裕美, 前田基成 : 中学生女子の摂食障害早期発見のためのスクリーニング調査. 第51回日本心身医学会総会ならびに学術講演会, 仙台, 2010.6.26-27.
 - 8) 荒川裕美, 兒玉直樹, 安藤哲也, 小牧 元 : アレキシサイミア傾向を有する一般大学生の感情認識能力の検討. 第51回日本心身医学会総会ならびに学術講演会, 仙台, 2010.6.26-27.
 - 9) 長谷川裕美, 安藤哲也, 市丸雄平, 東風谷祐子, 小牧 元 : 若年女性のストレスコーピングと摂食障害傾向, 体型, 血清脂質との関連. 第51回日本心身医学会総会ならびに学術講演会, 仙台, 2010.6.26-27.
 - 10) 羽白 誠, 安藤哲也, 細谷律子, 小牧 元 : アトピー性皮膚炎におけるプライマリケアとしての心身医学療法の可能性の調査研究. 第51回日本心身医学会総会ならびに学術講演会, 仙台, 2010.6.26-27.
 - 11) 稲田修士, 吉内一浩, 端詰勝敬, 菊地裕絵, 坪井康次, 赤林 朗 : EMA を用いた片頭痛発作時における自覚症状と身体活動度の関連. 第51回日本心身医学会ならびに学術講演会, 仙台, 2010.6.26-27.
 - 12) 榎藤元治, 守口善也, 佐藤典子, 小牧 元 : 不安による痛み修飾時の海馬の反応と日常の身体愁訴との関係. 認知神経科学の先端 身体性の脳内メカニズム, 自然科学研究機構生理学研究所, 岡崎, 2010.10.22-23.
 - 13) 安藤哲也, 石川俊男, 鈴木(堀田) 眞理, 成尾鉄朗, 岡部憲二郎, 中原敏博, 瀧井正人, 河合啓介, 米良貴嗣, 中本智恵美, 武井美智子, 山口 力, 永田利彦, 岡本百合, 大隈和喜, 小出将則, 山中隆夫, 村田志保, 田村奈穂, 切池信夫, 市丸雄平, 小牧 元, 摂食障害遺伝子解析研究協力者会議 : 脳由来神経栄養因子 (BDNF) 遺伝子 Val66Met 多型と神経性食欲不振症との関連の検討. 第14回日本摂食障害学会学術集会, 東京, 2010.10.2-3.
 - 14) 安藤哲也, 長谷川裕美, 東風谷祐子, 市丸雄平, 小牧 元 : 若年女性の摂食障害傾向と体型・体組成に対する心理社会的ストレスとストレスコーピングの影響. 第26回日本ストレス学会学術総会, 福岡, 2010.11.5-6.
 - 15) 安藤哲也, 長谷川裕美, 東風谷祐子, 小林仁美, 市丸雄平, 小牧 元 : 若年女性の摂食障害傾向に影響する心理社会的ストレスとストレスコーピング. 第15回日本心療内科学会総会・学術大会, 岡山, 2010.11.20-21.
 - 16) 菊地裕絵, 吉内一浩, 稲田修士, 小牧 元, 本 義春 : EMA および携帯情報端末を用いた食事日記による健常者における食行動関連要因の検討. 第15回日本心療内科学会学術大会, 岡山, 2010.11.20-21.
 - 17) 長谷部智子, 西村大樹, 東條光彦, 立森久照, 菊地裕絵, 前田基成, 小牧 元 : 男子中学生の摂食障害傾向地域調査. 摂食障害学会, 東京, 2010.10.2.
 - 18) 菊地裕絵, 吉内一浩, 稲田修士, 小牧 元, 山本義春 : 健常群における食行動と心理社会的因子の関連～携帯情報端末による食事日記を用いた検討. 第17回日本行動医学会学術総会, 東京, 2011.3.11-12.
 - 19) 山田久美子, 小牧 元 : 睡眠障害への心身医学的アプローチ—Yoga と Aroma を取り入れた心理療法の症状緩和に関する予備的研究—. 第51回日本心身医学会総会ならびに学術講演会, 仙台, 2010.6.26-27.
 - 20) 山田久美子, 高橋清久, 小牧 元 : 睡眠障害患者への心理的援助—アロマセラピー、ヨーガセラピー

を応用して－. 第 14 回日本統合医療学会, 徳島, 2010.12.11-12.

- 21) 高橋 晶: トラックセッション 1 認知症の早期診断を多角的に考える. 2. 初期像の臨床的特徴から 2. レビー小体型認知症 (DLB) の前駆症状、初期症状.アルツハイマー病研究会第 11 回学術シンポジウム, 東京, 2010.4.17.
- 22) 高橋 晶: DLB の前駆像・初期像. 第 10 回お茶の水精神医学フォーラム, 東京, 2010.6.4
- 23) 高橋 晶, 水上勝義, 朝田 隆: 第 29 回日本認知症学会 学会奨励賞受賞 (臨床研究部門) 「レビー小体型認知症 (DLB) に進展するうつ病」を診断する上での高炭酸換気応答検査の有用性. 第 29 回認知症学会学術集会, 愛知, 2010.11.5.
- 24) 高橋 晶, 水上勝義, 朝田 隆: シンポジウム レビー小体型認知症の症候と脳画像 2) Early depression について (DLB の初期精神症状) と脳画像 (SPECT). 第 4 回レビー小体型認知症研究会, 神奈川, 2010.11.20.

(3) 研究報告会

- 1) 小牧 元, 榎藤元治, 兒玉直樹, 菊地裕絵, 守口善也: 脳機能画像を用いた心身症発症メカニズムの解明研究. 厚生労働省精神・神経疾患研究委託費 (20 委-7) 「心身症の診断・治療ガイドラインの標準化とその検証に関する研究」 (主任研究者: 小牧 元), 東京, 2010.7.16.
- 2) 安藤哲也, 羽白 誠, 細谷律子, 幸野 健, 上出良一, 古江増隆, 小牧 元: アトピー性皮膚炎における心身症診断・治療ガイドラインの普及とプライマリケア的実践の可能性に関する研究. 厚生労働省精神・神経疾患研究委託費 (20 委-7) 「心身症の診断・治療ガイドラインの標準化とその検証に関する研究」 (主任研究者: 小牧 元), 東京, 2010.7.16.
- 3) 小牧 元, 榎藤元治, 兒玉直樹, 菊地裕絵, 守口善也: 脳機能画像を用いた心身症発症メカニズムの解明研究. 厚生労働省精神・神経疾患研究委託費 (20 委-7) 「心身症の診断・治療ガイドラインの標準化とその検証に関する研究」 (主任研究者: 小牧 元) 合同研究報告会, 東京, 2010.12.1.
- 4) 小牧 元, 兒玉直樹, 守口善也, 安藤哲也, 菊地裕絵: 体型への不満－脳機能画像を用いた検討. 厚生労働省精神・神経疾患研究委託費 (20 委-2) 「摂食障害の疫学, 病態と診断, 治療法, 転帰と予後に関する総合的研究」 (主任研究者: 切池信夫) 合同研究報告会, 東京, 2010.12.2.
- 5) 安藤哲也, 羽白 誠, 幸野 健, 細谷律子, 古江増隆, 上出良一, 小牧 元: アトピー性皮膚炎における心身症診断・治療ガイドラインの普及とプライマリケア的実践の可能性に関する研究. 厚生労働省精神・神経疾患研究委託費 (20 委-7) 「心身症の診断・治療ガイドラインの標準化とその検証に関する研究」 (主任研究者: 小牧 元) 合同研究報告会, 東京, 2010.12.1.
- 6) 吉内一浩, 稲田修士, 菊地裕絵, 小牧 元: 緊張型頭痛(心身症)の診断・治療ガイドラインの標準化とその検証に関する研究. 厚生労働省精神・神経疾患研究委託費 (20 委-7) 「心身症の診断・治療ガイドラインの標準化とその検証に関する研究」 (主任研究者: 小牧 元) 合同研究報告会, 東京, 2010.12.1.

C. 講演

- 5) 小牧 元: 青年期の発達からみた摂食障害－強迫性、衝動性への対応－. 福井県精神保健福祉センター, 福井, 2010.8.5.
- 6) 小牧 元: 摂食障害と共に生きる 2011 「－長引く理由－」. のびの会特別事業 第 13 回摂食障害講演会, 横浜, 2011.1.30.
- 7) 小牧 元: 摂食障害研究の最近の話題. 埼玉心身医学研究会, 埼玉, 2011.2.25.
- 8) 辻裕美子: 心身のストレスとつきあうには. がん患者団体支援機構, 東京, 2010.10.24.
- 9) 辻裕美子: 心身のストレスとつきあうには. がん患者団体支援機構, 東京, 2011.2.20.
- 10) 辻裕美子: こころに潤いを. 墨田区本所保健センター, 東京, 2011.3.8.

- 11) 高橋 晶 : がんと精神症状, がん医療に携わる医療従業者のための研修会. 第 8 回がん医療セミナー, 茨城, 2010.1.14.6.
- 12) 高橋 晶 : 認知症の診断と治療. つくば認知症クリニカルカンファレンスセミナー, 茨城, 2010.3.12..

D. 学会活動 (学会主催, 学会役員, 座長, 編集委員等)

(1) 学会役員

- 1) 小牧 元 : 日本心身医学会 評議員, 幹事, 英文誌投稿推進 WG 長
日本心療内科学会 理事 (学術企画委員, 会員資格審査委員,
心身医療評価基準作成委員)
日本ストレス学会 評議員, 渉外委員会委員 (国際連携担当)
日本摂食障害学会 評議員・監事
- 2) 安藤哲也 : 日本心身医学会 評議員
日本心療内科学会 評議員
日本皮膚科心身医学会 評議員
- 3) 菊地裕絵 : 日本心身医学会 代議員
日本女性心身医学会 評議員, 幹事

(2) 座長

- 1) Komaki G : Chairman : President speech: Recent Advances in Psychosomatic Medicine by C. Kubo The 14th Congress of the Asian College of Psychosomatic Medicine, Beijing, 2010.9.10-12.
- 2) Komaki G : Special lecture II (特別講演) : TCM Types of Personality & Constitution in Prevention and Treatment of Psychosomatic Disease by Xue Chongcheng (China), Psychosomatic Medicine in Korea-Research and Clinical Reality by Byung-II Min (Korea), The 14th Congress of the Asian College of Psychosomatic Medicine, Beijing, 2010.9.10-12.
- 3) 小牧 元 : シンポジウム7 「Neuroimaging の新展開」座長. 第 51 回日本心身医学会総会ならびに学術講演会, 仙台国際センター, 2010.6.26-27.
- 4) 小牧 元 : シンポジウム1 「やせ礼賛社会への警鐘」座長, 第 14 回日本摂食障害学会総会, 東京, 2010.10.2-3
- 5) 小牧 元 : 第 118 回日本心身医学会関東地方会講習会司会. 東京, 2011.2.19.
- 6) 安藤哲也 : 座長 セッションIV 調査. 第 118 回 日本心身医学会関東地方会. 東京, 2011.2.19.

(3) 学会誌編集委員等

- 1) 小牧 元 : 日本心身医学会会誌 編集委員
日本心身医学会英文誌 “BioPsychoSocial Medicine” Deputy Editor

E. 研修

(1) 研修企画

- 1) 小牧 元, 安藤哲也 : 平成 22 年度第 8 回摂食障害治療研修, 精神保健に関する技術研修, 精神保健研究所, 東京, 2010.8.31-9.3
- 2) 小牧 元, 安藤哲也 : 平成 22 年度第 7 回摂食障害看護研修, 精神保健に関する技術研修, 精神保健研究所, 東京, 2010.11.10-12

(2) 研修会講師

- 1) 小牧 元 : 摂食障害病態・治療概論. 第 8 回摂食障害治療研修, 精神保健研究所, 小平市, 2010.8.31-9.3

- 2) 小牧 元：摂食障害の疫学・病態・治療概論. 第 7 回摂食障害看護研修, 精神保健研究所, 小平市
2010.11.10-12
- 3) 倉 五月：心理的アセスメント. 第 7 回摂食障害看護研修, 精神保健研究所, 小平市, 2010.11.10-12
- 4) 菊地裕絵：心身医学における病歴の取り方と面接技法. 第 12 回日本女性心身医学会研修会, 東京,
2011.1.16

5. 児童・思春期精神保健研究部

I. 研究部の概要

当部は、児童期に発症する種々の行動および情緒の障害について、横断的に疫学的な実態および病態を明らかにすると同時に、発達の観点から年齢に伴う症状や病態の変化の軌跡を縦断的に調べて、それらのエビデンスにもとづき、ライフステージに応じた診断評価法の確立、そして治療法や2次障害の予防法の提案に繋げていくことを、そのミッションとしている。発達最早期から発症し、思春期以降は種々の精神医学的障害を合併するなど、生涯を通じて精神発達に深刻な影響を与える発達障害、なかでも自閉症スペクトラム（ASD、広汎性発達障害（PDD）とほぼ同じ症候群）は、児童期のみならず、すべてのライフステージを通してリスクともなりうる重要な影響要因であるので、当部が現在、最も精力的に取り組んでいる研究テーマである。

わが国を代表する乳幼児から学童までの疫学的データベースの確立を目指す（わが国初の国際的に標準的な評価尺度を使用）とともに、多種の専門領域を統合する手法を用いて新しい発達認知神経科学的観点に立った縦断的および横断的研究に取り組んでいる。また、発達障害者支援法に基づく支援体制の普及推進の目的で、早期発見・早期介入システムと育児支援のための研修、そして一般精神科における成人となった発達障害者への医療に関する研修を含む、多様な情報発信活動にも精力的に取り組んでいる。

児童期における発達障害とその近縁にある種々の発達病理は、児童精神医学の領域を超えて、パーソナリティの形成や成人期における精神病理との連続性を持っており、一般精神医学の諸領域への新しい切り口となる可能性を秘めていると考えている。今後、一般精神医学において発達精神医学的な視点が貢献できるような共同研究を計画している。

人員構成は以下のとおりである。部長：神尾陽子、精神発達研究室長：小山智典（～9月）、高橋秀俊（2月～） 思春期精神保健研究室研究員：井口英子、流動研究員（2名）：片桐正敏、森脇愛子、外来研究員（1名）：則内まどか（リサーチレジデント）、客員研究員（9名）：大森隆司、奥寺 崇、辻井正次、飛松省三、中島洋子、武田俊信、菊池吉晃、黒田美保、小山智典（10月～）（協力研究員（6名）：石川文子、榎原信子、高橋英之、辻井弘美、土屋賢治、稲田尚子、研究生（3名）：武井麗子（10月～）、森田麻登（11月～）、遠藤明代（11月～）。

II. 研究活動

1) 発達障害の疫学研究（こころの健康科学研究事業「1歳からの広汎性発達障害の出現とその発達の变化：地域ベースの横断的および縦断的研究」）

地域の学校の協力のもと、小平市内の小学生を対象に精神医学的面接による疫学研究を終了し、日本での正確な自閉症スペクトラムの有病率を同定し、その成果を報告書にまとめた。全国の小中学校との連携のもと自閉症スペクトラムの合併精神医学的障害に関する質問紙調査を実施した成果も同報告書にまとめた。この研究により、日本の児童の自閉症スペクトラムとそれに合併するメンタルヘルスの実態を明らかにし、今後の保健・医療ケア、および教育と医療の連携を整備するうえでのエビデンスを提供することができた。（神尾・森脇・井口・小山・黒田・稲田・片桐・則内・土屋）

2) 精神科医療における発達精神医学的支援に関する研究（精神・神経疾患研究開発費）

成人期まで未診断であった発達障害を持つ精神科患者の診断や鑑別に有用なエビデンスを検討し、精神科医療における発達障害成人患者の問題の解決法を提案した。現在のエキスパートコンセンサスにもとづいて、研究班全体で一般精神科医向けのマニュアル、事例集を作成、印刷した（「解説と事例で理解する 自閉症スペクトラム障害のある精神科患者への対応：精神科医のための臨床実践マニュアル」）。（神尾・小山・井口）

3) 自閉症スペクトラムの診断単位の境界と異種性に関する認知神経科学研究を実施する（文部科学省科学研究費）

自閉症スペクトラムの異種性を精神医学的症状評価と認知神経科学的所見との関連性に注目して、サブタイプを抽出することを目的として、実施中である。（神尾・森脇・井口・黒田・稲田・片桐・則内）

4) 発達障害に関する行動評価尺度の標準化（厚生労働科学研究費補助金事業（障害者対策総合研究事業 精神障害分野）、文部科学省研究費、明治安田心の健康財団研究助成、財団法人ファイザーヘルスリサーチ振興財団研究助成）

医療や教育、福祉などのさまざまな臨床場面で発達障害児者の症状を評定し、ニーズを検討するために必要な、共通して使用可能な評価尺度はほとんど存在しない。また、エコチルのような大規模研究に使用可能な尺度もないのが実情である。このため、全国データをもとに日本で使える SRS, SCDC, DCDQ, MOQ-T, CCC-2, ADOS など複数の尺度の妥当性検証を行い、完了した一部についての結果は厚生労働省の科研報告書に報告した。他のものについては、来年度引き続きデータ収集を行い、検証を行う予定である。(稲田・黒田・森脇・井口・小山・神尾)

- 5) 診療から生み出される臨床情報を活用して簡便なスクリーニング尺度開発 (厚生労働科学研究費補助金事業 (障害者対策総合研究事業 精神障害分野))

自閉症スペクトラムの早期発見に有用なチェックリスト M-CHAT の尺度特性について検討し、暫定的な短縮版の提案を行った (論文発表, 他著書など)。多数の自治体での導入が始まり、スーパーバイズを行っている。

- 6) 自閉症者の注意機能の特性と社会性の認知メカニズムに関する認知神経科学的研究を実施する。(文部科学省科学研究費)

自閉症の診断基準には注意機能障害が含まれていないが、実際には深く関係しており、診断に有用な可能性がある。そこで、レベル反復手続を用いた実験系を利用して、アスペルガー症候群の人々の注意の特性を統制群と比較検討した成果、部分標的から全体標的に注意を切り替えることの困難が示された。(片桐)

- 7) 発達障害の子どもと家族への早期支援システムの社会実装 (社会技術研究開発事業「研究開発成果実装支援プログラム」)

全国のどこの地域においても、乳幼児健診の機会を活用して発達障害の早期発見・早期支援が可能となるように、保健師向け教育ツールの開発を行い、協力自治体の健診担当者の e-learning 登録と実施を開始した。(神尾, 稲田, 片桐)

Ⅲ. 社会的活動

- 1) 市民社会に対する一般的な貢献

社会全体のニーズの高まりに対応して、全国各地での自治体主催の市民向けの公開講座で講演を行った。厚生労働省の依頼に応じて、研究成果 (H21 年度終了の厚生労働科学研究費補助金事業 (障害者対策総合研究事業)) をまとめた「ライフステージに応じた自閉症スペクトラム者に対する支援のための手引き」を精研 HP 上で公開するとともに、厚生労働省成果報告会 (2010.10.23) で発表した様子は You Tube で全国に発信され、ライブでネットを介して質疑応答がなされた。井口は、検察庁の依頼による刑事司法鑑定を行い、市民社会に貢献した。

- 2) 専門教育面における貢献

神尾は、山梨大学との連携大学院の客員教授として院生 2 名の指導にあたった。また、国や大学、学会、研究会、自治体、そして各地医師会主催の専門家 (精神科医、保健師、福祉士、臨床心理士、言語療法士、教員) 向けの講演講師を可能な範囲で精力的に引き受け、人材の育成に携わっている。神尾はセンター病院への東大、防衛医大のポリクリ実習生に対する児童精神医学の講義を担当した。また日本の児童精神科医育成を検討するために、第 1 回児童精神医学若手人材育成セミナーにパネリスト (於 九州大学) として参加した。厚労省があらたに始めた、発達障害者支援センター向け発達障害アセスメント研修 (於 国立障害者リハビリテーションセンター) の企画に加わり、3 日間の連続講義を行った。独立行政法人国立特別支援教育総合研究所の発達障害教育情報センターが作成している教職員向けインターネット研修講義シリーズで「自閉症の医学」を担当した。小山は、田園調布学園大学および日本社会事業大学の非常勤講師として、発達障害に関する講義を担当した。稲田は、保健師や臨床発達心理士などの専門家を対象に研修を多数行い、田園調布学園大学の非常勤講師として、発達障害と療育についての講義を担当した。また、横浜市教育相談センターのカウンセラーアドバイザーとして、発達障害が疑われる相談ケースのスーパーバイズを行った。則内は、首都大学東京大学院において「認知神経科学特論」、「認知神経科学特論演習」で発達障害を含めた脳研究について、主に作業療法士、理学療法士、看護師他などの大学院生を対象に講義を担当した。

- 3) 精研の研修の主催と協力

発達障害者支援事業の一環として、当部主催で行う研修として、第 5 回「発達障害早期総合支援研修」(自治体の乳幼児健診に携わる医師および保健師対象) を企画・実施し、神尾, 稲田, 黒田が講義も担当した。

また、第3回「発達障害精神医療研修」(精神科医対象)を企画・実施し、神尾、井口が講義も担当した。また事後研修として、昨年度から引き続き京都府舞鶴市の、また今年度からは愛媛県新居浜市の研究開発アドバイザーとして乳幼児健診における発達障害の早期発達・早期支援に関する継続的なスーパーバイズをTV会議やカンファレンス、DVDなどを通して行い、新規事業の立ち上げに際してマニュアル作成など監修した。稲田と黒田は自治体に出向き、評価についての自治体スタッフへの技術指導を行った。

4) 保健医療行政・政策に関連する研究・調査、委員会等への貢献

政府委員会：神尾は、子どもの心の診療拠点病院の整備に関する有識者会議(厚生労働省主宰)委員として、平成20-22年度までの拠点病院事業の評価を行った。

その他公的委員会：神尾は、昨年度に引き続き子どもの虹情報研修センター(日本虐待・思春期問題情報研修センター)運営委員を委嘱され、事業評価を行った。

神尾は、第21期日本学術会議連携会員、第21期日本学術会議臨床医学委員会臨床研究分科会委員として、5回の委員会に出席して、提言「エビデンス創出を目指す検証的治療研究の推進・強化に向けて」の取りまとめに参画した。脳とこころ分科会委員として、日本学術会議広報誌「学術の動向4月号」にこどもの特集「望ましい子どものこころの育ちと環境を実現するために」を企画し、巻頭言と「発達障害の子どものさまざまな育ちを支える」の章を分担執筆した。また、平成23年度に立ちあがった環境省エコチル調査のWG委員として、アウトカム測定のプロトコル策定、米国National Children's StudyのWGとの協議、そして測定者の育成などを検討した。

研究成果の行政活用：神尾が分担協力した(井口が協力研究者として参加)平成19-21年度 厚生労働科学研究費補助金こころの健康科学研究事業「発達障害者の新しい診断・治療法の開発に関する研究」(主任研究者 奥山眞紀子)において、発達障害者がより支援を受けやすくなることを目指し、診断書の項目や基準について発達障害の専門家である研究班全員で議論を重ねて提出した改訂原案が、平成23年1月13日付で、厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部局長通知で発出された「精神障害者保健福祉手帳制度実施要領について」の一部改正について(障発0113第1号)に反映された。この診断書の様式の改正により、手帳申請にあたり、発達障害者および高次脳機能障害者各人の症状、状態像等の評価がよりニーズに即した適切なものになった。地域保健医療行政においては、地域の医療と行政とで構成する第1回小児医療推進協議会に参加し、地域自治体の母子保健事業の改善への取り組みに着手した。また地域住民の研究協力者である児童とその家族については、当部で事後フォローを引き受け、継続的な評価および育児指導を行い、自治体と定期的にカンファレンスを持ち、フィードバックと助言を行っている。また地域教育行政との関連においては、小平市特別支援教育推進プログラム専門家委員を務め、特別支援教育システム整備のための会議に参加し、義務教育期間における特別支援教育を円滑に推進するための「小平市教育委員会の特別支援教育推進の大綱」の評価に携わった。教育への貢献としては、学校ベースの研究と連動して、発達障害についての研修を学校に出張講義し、ケースカンファレンスに参加した成果をもとに、今後の教育と医療の連携のための教員実習のあり方を教育委員会に提案した。

5) センター内における臨床的活動

センター病院児童精神科と連携して、外部からの紹介患者と研究協力希望者に対する臨床活動、および地域ベースの臨床研究活動を行っている。また教育基盤の弱い当該領域における臨床研究の裾野を広げるためにセンター内外の若手医師および若手研究者への指導に積極的に取り組んでいる。

6) その他

なし

IV. 研究業績

A. 刊行物

(1) 原著論文

- 1) Yamasaki T, Fujita T, Ogata K, Goto Y, Munetsuna S, Kamio Y, Tobimatsu S: Electrophysiological evidence for selective impairment of optic flow perception in autism spectrum disorder. *Research in Autism Spectrum Disorders* 5: 400-407, 2011.
- 2) Fujita T, Yamasaki T, Kamio Y, Hirose S, Tobimatsu S: Parvocellular pathway impairment in autism spectrum disorder: Evidence from visual evoked potentials. *Research in Autism Spectrum*

- Disorders 5: 277-285, 2011.
- 3) Maekawa T, Tobimatsu S, Inada N, Oribe N, Onitsuka T, Kanba S, Kamio Y: Top-down and bottom-up visual information processing of non-social stimuli in high-functioning autism spectrum disorder. *Research in Autism Spectrum Disorders* 5: 201-209, 2011.
 - 4) Mitsudo T, Kamio Y, Goto Y, Nakashima T, Tobimatsu S: Neural responses in the occipital cortex to unrecognizable faces. *Clinical Neurophysiology* 122: 708-718, 2011.
 - 5) Koyama T, Kamio Y, Inada N, Inokuchi E: Maternal age at childbirth and social development in infancy. *Research in Autism Spectrum Disorders* 5: 450-454, 2011.
 - 6) Koyama T, Inokuchi E, Inada N, Kuroda M, Moriwaki A, Katagiri M, Noriuchi M, Kamio Y: Utility of the Japanese version of the Checklist for Autism in Toddlers (CHAT-J) for predicting pervasive developmental disorders at age 2. *Psychiatry Clin Neurosci* 64: 330-332, 2010.
 - 7) Kuroda M, Wakabayashi A, Uchiyama T, Yoshida Y, Koyama T, Kamio Y: Determining differences in social cognition between high-functioning autistic disorder and other pervasive developmental disorders using new advanced “mind-reading” tasks. *Research in Autism Spectrum Disorders* 5: 554-561, 2011.
 - 8) Canuet L, Ishii R, Iwase M, Ikezawa K, Kurimoto R, Takahashi H, Currais A, Azechi M, Aoki Y, Nakahachi T, Soriano S, Takeda M: Psychopathology and working memory-induced activation of the prefrontal cortex in schizophrenia-like psychosis of epilepsy: Evidence from magnetoencephalography. *Psychiatry Clin Neurosci* 65: 183-190, 2011.
 - 9) Katagiri M, Inada N, Kamio Y: Mirroring effect in 2- and 3-year-olds with autism spectrum disorder. *Research in Autism Spectrum Disorders* 4: 474-478, 2010.
 - 10) Moriwaki A, Ito R, Fujino H: Characteristics of empathy for friendship in children with high-functioning autism spectrum disorders. *Japanese Journal of Special Education* 49: 593-618, 2011.
 - 11) Inada N, Kamio Y, Koyama T: Developmental chronology of preverbal social behaviors in infancy using the M-CHAT: Baseline for early detection of atypical social development. *Research in Autism Spectrum Disorders* 4: 605-611, 2010.
 - 12) Inada N, Kamio Y: Short forms of the Japanese version WISC-III for assessment of children with autism spectrum disorders. *Japanese Journal of Child and Adolescent Psychiatry* 51 Supplement: 11-19, 2010.
 - 13) Inada N, Koyama T, Kamio Y: Reliability and validity of the Japanese version of the Modified Checklist for autism in toddlers (M-CHAT). *Research in Autism Spectrum Disorders* 5 : 330-336, 2011.
 - 14) Noriuchi M, Kikuchi Y, Yoshiura T, Kira R, Shigeto H, Hara T, Tobimatsu S, Kamio Y: Altered white matter fractional anisotropy and social impairment in children with autism spectrum disorder. *Brain Res* 1362: 141-149, 2010.

(2) 総説

- 1) 神尾陽子: 望ましい子どものこころの育ちと環境を実現するために. *学術の動向* 4 : 7, 2010.
- 2) 神尾陽子: 発達障害の子どものさまざまな育ちを支える. *学術の動向* 4 : 58-63, 2010.
- 3) 神尾陽子: 質疑応答: 自閉症スペクトラム障害と感覚過敏. *日本医事新報* 4486 : 83-84, 2010.
- 4) 神尾陽子: 発達障害の多様性と遺伝・環境相互作用. *Endocrine Disrupter News Letter* 12 : 2, 2010.
- 5) 神尾陽子: いま発達障害をどうとらえるか. *地域保健* 41 : 24-31, 2010.
- 6) 神尾陽子: 広汎性発達障害. *Cefiro12* : 25-28, 2010.
- 7) 神尾陽子: 広汎性発達障害 (PDD) : 学童期・アスペルガー症候群. *こどもケア* 12・1 : 6-11, 2010.
- 8) 神尾陽子: 自閉症スペクトラム障害の早期発見をめぐる. *教育と医学* 691 : 49-57, 2011.
- 9) 則内まどか, 菊池吉晃: 親性発達の神経基盤—母親の脳機能イメージング研究の視点から—. *ベビーサ*

イエンス 10 : 62-63, 2010.

- 10) 則内まどか: 脳機能イメージングでみる「母の愛~Maternal Love~」。次世代を担う女性研究者が世界を変える。化学と工業 62 : 12-16, 2011.
- 11) 菊池吉見, 則内まどか: 「幸せ」を感じる脳 脳機能イメージング研究から見える「幸せ」の神経基盤。心から見た脳, 脳から見える心—最新の脳科学でわかってきたこと 4. 化学と工業 64 : 135-137, 2011.

(3) 著書

- 1) 神尾陽子: 自閉症スペクトラムと発達認知神経科学. 脳とソシアル: 発達と脳—コミュニケーション・スキルの獲得過程. 岩田誠, 河村満 編: 医学書院, 東京, pp19-37, 2010.
- 2) 神尾陽子: 広汎性発達障害の神経心理学. 広汎性発達障害: 自閉症へのアプローチ. 市川宏伸 編, 専門家のための精神科臨床リュミエール 19. 中山書店, 東京, pp47-52, 2010.
- 3) 神尾陽子: 自閉症スペクトラムの発達認知神経科学. 東條吉邦, 大六一志, 丹野義彦 編: 発達障害の臨床心理学. 東京大学出版会, 東京, pp17-33, 2010.
- 4) 神尾陽子: 自閉症 (小児自閉症). 「精神科治療学」編集委員会 編: 今日の精神科治療ガイドライン 2010 年版, 精神科治療学 Vol.25 増刊号. 星和書店, 東京, pp260-261, 2010.
- 5) 神尾陽子: アスペルガー症候群の性差による援助の違いは?. 上島国利, 三村将, 中込和幸, 平島奈津子 編: EBM 精神疾患の治療 2010-2011. 中外医学社, 東京, pp343-347, 2011.

(4) 研究報告書

- 1) 神尾陽子: 1歳からの広汎性発達障害の出現とその発達の变化: 地域ベースの横断的および縦断的研究. 平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金 障害者対策総合研究事業 精神障害分野「1歳からの広汎性発達障害の出現とその発達の变化: 地域ベースの横断的および縦断的研究 (研究代表者: 神尾陽子)」総括・分担研究報告書, pp1-13, 2011.
- 2) 神尾陽子, 井口英子, 森脇愛子, 小山智典, 稲田尚子, 黒田美保, 土屋政雄, 小石誠二, 武田俊信, 宇野洋太, 遠藤かおる, 川上憲人: 一般児童における発達障害の有病率と関連要因に関する研究①. 平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金 障害者対策総合研究事業 精神障害分野「1歳からの広汎性発達障害の出現とその発達の变化: 地域ベースの横断的および縦断的研究 (研究代表者: 神尾陽子)」総括・分担研究報告書, pp17-21, 2011.
- 3) 神尾陽子, 森脇愛子, 小山智典, 田中康雄, 中井昭夫: 一般児童における発達障害の有病率と関連要因に関する研究②. 平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金 障害者対策総合研究事業 精神障害分野「1歳からの広汎性発達障害の出現とその発達の变化: 地域ベースの横断的および縦断的研究 (研究代表者: 神尾陽子)」総括・分担研究報告書, pp43-47, 2011.
- 4) 神尾陽子: 精神科医療における発達精神医学的支援に関する研究. 平成 21 年度厚生労働省精神・神経疾患研究委託費による研究報告集 (2 年度班・初年度班), pp153-156, 2010.
- 5) 神尾陽子: 精神科医療における発達精神医学的支援に関する研究. 厚生労働省精神・神経疾患研究開発費「精神科医療における発達精神医学的支援に関する研究 (主任研究者: 神尾陽子)」平成 20-22 年度総括研究報告書, pp1-8, 2011.
- 6) 神尾陽子, 稲田尚子, 黒田美保, 中野育子, 辻井正次, 下田芳幸, 川久保由紀, 山末英典, 近藤直司, 深津玲子, 高木晶子: ライフステージに応じた多次元的鑑別指標の同定に関する研究. 平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金 障害者対策総合研究事業「発達障害者に対する長期的な追跡調査を踏まえ, 幼児期から成人期に至る診断等の指針を開発する研究」総括・分担研究報告書, pp00-00, 2011.
- 7) 小山智典, 神尾陽子, 黒田美保, 稲田尚子, 井口英子: 社会性の発達評価に関する研究. 平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金 障害者対策総合研究事業 精神障害分野「1歳からの広汎性発達障害の出現とその発達の变化: 地域ベースの横断的および縦断的研究 (研究代表者: 神尾陽子)」総括・分担研究報告書, pp93-100, 2011.
- 8) 藤野博, 神尾陽子, 森脇愛子: 教育場面におけるアセスメント・システムの開発・研究. 平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金 障害者対策総合研究事業 精神障害分野「1歳からの広汎性発達障害の出現とその発達の变化: 地域ベースの横断的および縦断的研究 (研究代表者: 神尾陽子)」総括・分担研究

- 報告書, pp177-182, 2011.
- 9) 三島和夫, 北村真吾, 榎本みのり, 小山智典, 神尾陽子: 発達障害児における睡眠習慣・睡眠障害に関する研究. 平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金 障害者対策総合研究事業 精神障害分野「1 歳からの広汎性発達障害の出現とその発達の変化: 地域ベースの横断的および縦断的研究 (研究代表者: 神尾陽子)」総括・分担研究報告書, pp183-202, 2011.
 - 10) 高木晶子, 斎藤新一, 桑野恵介, 田中里実, 杉本拓哉, 神尾陽子: 小児科診療場面における評価バッテリーの有効性に関する研究. 平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金 障害者対策総合研究事業 精神障害分野「1 歳からの広汎性発達障害の出現とその発達の変化: 地域ベースの横断的および縦断的研究 (研究代表者: 神尾陽子)」総括・分担研究報告書, pp129-155, 2011.
 - 11) 小山智典, 辻井弘美, 稲田尚子, 神尾陽子: 高機能広汎性発達障害に関する知識の普及啓発活動の有効性に関する研究. 平成 21 年度厚生労働省精神・神経疾患研究委託費による研究報告集 (2 年度班・初年度班), pp161-162, 2010.
 - 12) 井口英子, 森脇愛子, 黒田美保, 稲田尚子, 神尾陽子: 広汎性発達障害児童にみられる合併精神障害一学校ベースでの検討—(一般児童における発達障害の有病率と関連要因に関する研究①). 平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金 障害者対策総合研究事業 精神障害分野「1 歳からの広汎性発達障害の出現とその発達の変化: 地域ベースの横断的および縦断的研究 (研究代表者: 神尾陽子)」総括・分担研究報告書, pp23-29, 2011.
 - 13) 井口英子: 公的精神科医療機関における広汎性発達障害に対する診療の実際に関する研究. 平成 21 年度厚生労働省精神・神経疾患研究委託費による研究報告集 (2 年度班・初年度班), pp157-160, 2010.
 - 14) 井口英子, 神尾陽子: 公的精神科医療機関における広汎性発達障害に対する診療の実際に関する研究. 厚生労働省精神・神経疾患研究開発費「精神科医療における発達精神医学的支援に関する研究 (主任研究者: 神尾陽子)」平成 20-22 年度総括研究報告書, pp11-19, 2011.
 - 15) 森脇愛子, 小山智典, 神尾陽子: 対人応答性尺度 (Social Responsiveness Scale : SRS) の標準化 (一般児童における発達障害の有病率と関連要因に関する研究②). 平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金 障害者対策総合研究事業 精神障害分野「1 歳からの広汎性発達障害の出現とその発達の変化: 地域ベースの横断的および縦断的研究 (研究代表者: 神尾陽子)」総括・分担研究報告書, pp49-68, 2011.
 - 16) 森脇愛子, 小山智典, 神尾陽子: 通常学級に在籍する一般児童・生徒における自閉症的行動特徴と発達精神医学的ニーズとの関連 (一般児童における発達障害の有病率と関連要因に関する研究②). 平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金 障害者対策総合研究事業 精神障害分野「1 歳からの広汎性発達障害の出現とその発達の変化: 地域ベースの横断的および縦断的研究 (研究代表者: 神尾陽子)」総括・分担研究報告書, pp69-82, 2011.
 - 17) 武井麗子, 森脇愛子, 神尾陽子: 自閉症スペクトラム障害の長期予後と気質との関連に関する研究 (一般児童における発達障害の有病率と関連要因に関する研究②). 平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金 障害者対策総合研究事業 精神障害分野「1 歳からの広汎性発達障害の出現とその発達の変化: 地域ベースの横断的および縦断的研究 (研究代表者: 神尾陽子)」総括・分担研究報告書, pp83-91, 2011.
 - 18) 義村さや香, 森脇愛子, 辻井弘美, 榎原信子, 小山智典, 神尾陽子: 広汎性発達障害を持つ子どもの気質と親の育児行動に関する予備的研究 (社会性の発達評価に関する研究). 平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金 障害者対策総合研究事業 精神障害分野「1 歳からの広汎性発達障害の出現とその発達の変化: 地域ベースの横断的および縦断的研究 (研究代表者: 神尾陽子)」総括・分担研究報告書, pp101-113, 2011.
 - 19) 稲田尚子, 黒田美保, 井口英子, 神尾陽子: 自閉症診断観察尺度(Autism Diagnostic Observation Schedule : ADOS) 日本語版の信頼性・妥当性に関する研究—モジュール 1—(一般児童における発達障害の有病率と関連要因に関する研究①). 平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金 障害者対策総合研究事業 精神障害分野「1 歳からの広汎性発達障害の出現とその発達の変化: 地域ベースの横断的および縦断的研究 (研究代表者: 神尾陽子)」総括・分担研究報告書, pp31-38, 2011.
 - 20) 小山智典, 辻井弘美, 稲田尚子, 神尾陽子: 高機能広汎性発達障害に関する知識の普及啓発活動の有効性に関する研究. 厚生労働省精神・神経疾患研究開発費「精神科医療における発達精神医学的支援に関する研究 (主任研究者: 神尾陽子)」平成 20-22 年度総括研究報告書, pp38-53, 2011.

- 21) 土屋賢治, 黒田美保, 稲田尚子, 小山智典, 井口英子, 辻井正次, 谷伊織, 宮地泰士, 松本かおり, 大嶋正浩, 酒井佐枝子, 毛利育子, 谷池雅子, 宮本健, 小林秀次, 小笠原恵, 岩永竜一郎, 井上雅彦, 萩原拓, 市川宏伸: 自閉症診断確定ツールの信頼性および妥当性の検討. 平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金 障害者対策総合研究事業 精神障害分野 「1 歳からの広汎性発達障害の出現とその発達の变化: 地域ベースの横断的および縦断的研究 (研究代表者: 神尾陽子)」総括・分担研究報告書, pp119-128, 2011.

(5) その他

- 1) 神尾陽子: 発達障害について. 厚生労働科学研究事業 障害者対策総合研究 3-4, 財団法人精神・神経科学振興財団, 2010.
- 2) 神尾陽子: カレント・トピックス 発達障害対策はどのようにすすめられているか. 精神科治療学 26: 113-116, 2011.
- 3) 神尾陽子 編著: 解説と事例で理解する自閉症スペクトラム障害のある精神科患者への対応精神科医のための臨床実践マニュアル. 平成 20-22 年度厚生労働省精神・神経疾患研究開発費「精神科医量における発達精神医学的支援に関する研究 (主任代表者: 神尾陽子)」総合研究報告書 別冊, 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所, 2011.
- 4) 高橋秀俊, 神尾陽子, 長尾圭造: 地域で子どもの支援に関わっておられる方へ 災害時の子どものこころのケア. 東北地方太平洋沖地震メンタルヘルス情報サイト, 2011.

B. 学会・研究会における発表

(1) 学会特別講演, 教育講演, シンポジウム, ワークショップ, パネルディスカッション等

- 1) Kamio Y: The Utility of the Modified Checklist for Autism in Toddlers (M-CHAT) in the community-based health check-up at 18 months of age in Japan: From 5-years prospective study. Symposium “Early detection and interventions for the children of pervasive developmental disorders” The 19th World Congress of the International Association for Child and Adolescent Psychiatry and Allied Professions/ The 6th Congress of the Asian Society for Child and Adolescent Psychiatry and Allied Professions, Beijing, 2010.6.4.
- 2) Ryouhei I, Leonides C, Yasunori A, Masao I, Hidetoshi T, Takayuki N, Masatoshi T: Clinical Application of MEG in Schizophrenia. Symposium 6: Electrophysiology. New Insight through Psychophysiological Study for Exploring Psychopathology of Schizophrenia Patients. The 2nd Asian Congress on Schizophrenia Research, Seoul, Korea, 2011.2.11-12.
- 3) Inada N: Reliability and validity of the Japanese version of the Modified Checklist for Autism in Toddlers (M-CHAT) . Development Research International Workshop, Kyoto, 2010.8.21.
- 4) 神尾陽子: 発達の観点から自閉症スペクトラムを考える. 京都大学大学院医学研究科精神医学講座, 京都, 2010.7.14.
- 5) 神尾陽子: 学会企画シンポジウム「特殊教育学」の更なる広がりと深化をめざして (I) -特殊支援教育時代の「特殊教育学」の役割と関連科学・領域からの期待と提言 - 児童精神医学の立場から: 特別支援教育へ寄せる期待と提言. 日本特殊教育学会第 48 回大会, 長崎, 2010.9.19.
- 6) 神尾陽子: (教育講演) 児童期から成人期へ: レジリエンスという視点. 日本児童青年精神医学会第 51 回総会, 前橋, 2010.10.28.
- 7) 神尾陽子: 小学校児童のメンタルヘルスにおける発達特性の観察の意義: 発達障害が疑われる児童生徒のためのアセスメント・バッテリーの開発と適用: 学校での早期の気づきと理解に向けて. 日本発達心理学会第 22 回大会, 東京, 2011.3.25.
- 8) 神尾陽子: 学会シンポジウム企画 発達障害が疑われる児童生徒のためのアセスメント・バッテリーの開発と適用: 学校での早期の気づきと理解に向けて. 日本発達心理学会第 22 回大会, 東京, 2011.3.25.
- 9) 片桐正敏: (話題提供) 社会性の機能要素の追求—知覚・注意・遂行機能—. 日本心理学会第 74 回大会, 2010.9
- 10) 森脇愛子: (話題提供) 学齢期の高機能自閉症スペクトラム障害児における CCC-2 日本語版の臨床的利

用について：子どものコミュニケーション・チェックリスト（CCC-2）日本語版の保育場面・通級指導・小集団での適用の実際と意義。日本特殊教育学会第48回大会，長崎，2010.9.18.

- 11) 森脇愛子，藤野博，神尾陽子：(話題提供) 対人応答性尺度(SRS) 日本語版の標準化：発達障害が疑われる児童生徒のためのアセスメント・バッテリーの開発と適用—学校での早期の気づきと理解に向けて—。日本発達心理学会第22回大会，東京，2011.3.25.
- 12) 稲田尚子：(話題提供) 自閉症スペクトラムの早期スクリーニングツール：M-CHAT. (自主シンポジウム)「自閉症スペクトラム障害アセスメントのグローバル・スタンダード—M-CHAT, ADOS, CARS, Vineland-II の役割—」日本発達心理学会第22回大会，東京，2011.3.28.
- 13) 則内まどか：わが子を愛する母の脳診シンポジウム I 「気楽に生理人類学」。日本生理人類学会第62回大会，大阪，2010.5.15.

(2) 一般演題

- 1) Inagaki M, Kobayashi T, Kaga M, Kamio Y: Problems of reading and writing in elementary school children: Part I. Nationwide study in Japan. Excellence in Pediatrics, London, UK, 2010.12.2-4.
- 2) Kobayashi T, Inagaki M, Kaga M, Tanaka Y, Kamio Y: Problems of reading and writing in elementary school children: Part II. Relationship with ADHD Rating scale Excellence in Pediatrics, London, UK, 2010.12.2-4.
- 3) Leonides C, Ryouhei I, Masao I, Koji I, Ryu K, Hidetoshi T, Michiyo A, Yasunori A, Takayuki N, Masatoshi T: Cognitive and psychopathological disturbance in schizophrenia-like epilepsy psychosis: a neuroimaging magnetoencephalography study. The 2nd Asian Congress on Schizophrenia Research, Seoul, 2011.2.11-12.
- 4) Katagiri M, Yamasaki T, Tobimatsu S, Kamio Y: Familiar voice processing in children with ASD. IX International Congress Autism Europe, Catania, Italy, 2010.10. 8-10.
- 5) Yamasaki T, Ogata K, Ijichi I, Katagiri M, Kamio Y, Tobimatsu S: A NIRS study on the neural mechanism of voice recognition in preschool children. Clinical Neurophysiology 121, e23. [doi:10.1016/j.clinph.2010.02.099] 29th International Congress of Clinical Neurophysiology, Kobe, Japan, 2010.
- 6) Moriwaki A, Fujino H: Friendship and empathy in children with high-functioning ASD. IX International congress Autism Europe, Catania, Italy, 2010.10. 9. Noriuchi M, Kikuchi Y, Yoshiura T, Kamio Y: White matter structure and social impairments in children and adolescents with autism spectrum disorder: A preliminary diffusion tensor imaging study. IX International congress, Autism Europe, Catania, Italy, 2010.10. 8-10.
- 7) Atomi T, Yoshizawa Y, Noriuchi M, Atomi Y, Kikuchi Y: An fMRI study of the human body's gravity center -Self-other difference in the perception of body instability-. 29th International Congress of Clinical Neurophysiology, Kobe, 2010.10.28-11.1.
- 8) Oba K, Kikuchi Y, Noriuchi M, Matsuoka A: The Neural Mechanisms of Warm Feeling Associated with Remote Autobiographical Memory Retrieval -An fMRI Study -. 29th International Congress of Clinical Neurophysiology, Kobe, 2010.10.28-11.1.
- 9) 北村真吾，榎本みのり，亀井雄一，小山智典，黒田美保，稲田尚子，神尾陽子，三島和夫：地域在住の2歳児における睡眠習慣及び睡眠障害に関する調査。日本睡眠学会第35回定期学術集会，名古屋，2010.7.1-2.
- 10) 井口英子，稲田尚子，小山智典，神尾陽子：自閉症スペクトラム障害幼児にみられる限局的反復的行動-2~4歳での変化-。日本児童青年精神医学会第51回総会，前橋，2010.10.29.
- 11) 井口英子，神尾陽子：高機能自閉症スペクトラム児童の言語機能の特異性と発達的变化—言語流暢性課題を用いた検討-。日本児童青年精神医学会第51回総会，前橋，2010.10.30.
- 12) 片桐正敏，山崎貴男，飛松省三，神尾陽子：自閉症スペクトラム障害のある子どもたちにおける familiar voice 聴取時の左側側頭領域の脳血流変化について。日本児童青年精神医学会第51回総会，前橋，2010.10.30.

- 13) 竹内あゆみ, 松井三枝, 片桐正敏: 統合失調症患者における運転能力と視覚的情報処理の関連性—運転シミュレーターを用いた研究—. 第45回北陸心理学会大会, 金沢, 2010.11.27
- 14) 森脇愛子, 神尾陽子: 学齢期に高機能自閉症スペクトラム障害児における対人応答性尺度 (SRS) 日本語版の臨床的利用について. 日本児童青年精神医学会第51回総会, 前橋, 2010.10.30.
- 15) 森脇愛子, 藤野博: 高機能 ASD 児童における仲間との相互作用行動の継時的変化. 日本発達心理学会第22回大会, 東京, 2011.3.26.
- 16) 小山智典, 森脇愛子, 神尾陽子: 対人応答性尺度 (SRS) 日本語版の標準化に向けた全国調査. 日本児童青年精神医学会第51回総会, 前橋, 2010.10.30.
- 17) 稲田尚子, 黒田美保, 小山智典, 井口英子, 神尾陽子: 日本語版反復的行動尺度修正版 (RBS-R) の信頼性・妥当性に関する予備的検討. 日本児童青年精神医学会第51回総会, 前橋, 2010.10.29.
- 18) 稲田尚子, 黒田美保: 乳幼児期の自閉症スペクトラム評価のための直接観察尺度開発—日本語版 ADOS モジュール1の信頼性・妥当性の予備的検討—. 日本発達心理学会第22回大会, 東京, 2011.3.27.
- 19) 黒田美保, 稲田尚子: 青年・成人期の自閉症スペクトラム評価のための直接観察尺度開発—日本語版 ADOS モジュール4の信頼性・妥当性の予備的検討—. 日本発達心理学会第22回大会, 東京, 2011.3.27.
- 20) 大場健太郎, 菊池吉晃, 則内まどか, 松岡愛: 自伝的記憶想起に伴う感情に関する認知神経科学的考察. 第15回認知神経科学学会学術集会, 島根, 2010.7.17-18.
- 21) 大場健太郎, 菊池吉晃, 則内まどか, 松岡愛: 自伝的記憶想起時の感情に関わる神経機構—fMRI を用いた検討—. 第12回日本ヒト脳機能マッピング学会, 東京, 2010.6.19-20.
- 22) 泉水宏臣, 妹尾淳史, 宮本礼子, 則内まどか, 菊池吉晃, 藤本敏彦, 永松俊哉: 一過性運動後の感情状態改善と脳内感情処理機構. 第65回日本体力医学会大会, 千葉, 2010.9.16-18.
- 23) 中村浩希妹, 尾淳史, 福永一星, 泉水宏臣, 菊池吉晃, 宮本礼子, 則内まどか, 永松俊哉: Functional MRI を用いた短時間の運動が情動に与える影響: 精神疾患患者を対象とした検討. 第38回日本磁気共鳴医学会大会, つくば, 2010.9.30-10.2.
- 24) 大場健太郎, 松岡愛, 菊池吉晃, 則内まどか: 自伝的記憶想起に伴う懐かしさの神経基盤: fMRI 研究. 第40回日本臨床神経生理学会学術大会, 神戸, 2010.11.1.

(3) その他

- 1) 神尾陽子: 早期発見・早期対応 (ケア) について. 発達障害施策に関する勉強会. 厚生労働省障害保健福祉部障害福祉課主催, 東京, 2010.6.17.

C. 講演

- 1) 神尾陽子: 発達障害児・者の自立に向けて今何ができるか: 幼児期から取り組めること. 和歌山県発達障害者支援センターポラリス講演会, 和歌山, 2010.8.28.
- 2) 神尾陽子: 児童理解のすすめ方. 特別支援教育全体会, 小平市市立鈴木小学校 特別支援教育校内委員会主催, 東京, 2010.10.26.
- 3) 神尾陽子: ライフステージに応じた自閉症支援のあり方をめぐって. 第24回全国自閉症者施設協議会長野大会, 長野, 2010.11.11.
- 4) 神尾陽子: 乳幼児期および児童期の発達障害. 2010年度東北集中講座, 発達障害の精神医学的理解について, 財団法人明治安田こころの健康財団主催, 仙台, 2010.11.7.
- 5) 神尾陽子: 成人期の発達障害の臨床的問題. NCNP精神科定例カンファレンス, 東京, 2010.11.16.
- 6) 神尾陽子: 自閉症スペクトラム障害の言語特性を踏まえた療育・保育支援. 第20回障害児保育セミナー, 障害児保育セミナー実行委員会主催, 栃木, 2010.11.28.
- 7) 神尾陽子: ライフステージに応じた自閉症スペクトラム者への支援のありかた. 平成22年度発達障害支援者研修会, 高知県立精神保健福祉センター, 高知県中央西福祉保健所主催, 高知, 2010.12.21.
- 8) 神尾陽子: 子どものメンタルヘルス—発達とこころの両方の観点から. 第14回リカレント教育講座「心の教育」を考える—対応に困る子どもたちへの多面的理解と関わり—, 京都大学大学院教育学研究科付属臨床教育実践研究センター主催, 京都, 2011.2.5.
- 9) 神尾陽子: 発達障害への多面的アプローチ: 発達という観点から. アミニティフォーラム15記念大会,

- アミニティフォーラム実行委員会, 全国地域生活支援ネットワーク主催, 大津, 2011.2.5.
- 10) 神尾陽子: 発達とこころの両方の観点からみた子どものメンタルヘルス: 自閉症を中心に. エコチルやまなしフォーラム2011 春, エコチル調査甲信ユニットセンター主催, 甲府, 2011.2.26.
 - 11) 神尾陽子: 精神医学における発達障害再考: 児童期から成人期へのさまざまな発達軌跡. CNS Symposium, うつ医療推進研究会・ファイザー株式会社共催, 東京, 2011.3.5.
 - 12) 井口英子: 子どもの自殺予防. 小平市教育委員会, 東京, 2010.7.21.

D. 学会活動

(学会役員等)

- 1) 神尾陽子: 日本精神神経学会 (児童精神科医の育成に関する委員会委員)
- 2) 神尾陽子: 日本自閉症スペクトル学会 (評議員)
- 3) 神尾陽子: 日本精神保健・予防学会 (評議員)
- 4) 神尾陽子: 第21期日本学術会議 (連携会員, 臨床医学委員会 脳とこころ分科会委員)
- 5) 小山智典: 日本自閉症協会 (研究部会部員)

E. 研修

(1) 研修企画

- 1) 神尾陽子, 井口英子: 平成22年度精神保健に関する技術研修, 第5回発達障害早期総合支援研修. 東京, 2010.6.23-25.
- 2) 神尾陽子, 井口英子: 平成22年度精神保健に関する技術研修, 第3回発達障害精神医療研修. 東京, 2010.9.29-10.1.

(2) 研修会講師

- 1) 神尾陽子: アセスメントの意義について: 発達障害評価尺度 (PARS). 平成22年度第1回発達障害者支援センター職員研修会, 国立秩父学園, 埼玉, 2010.5.13.
- 2) 神尾陽子: 幼児期のアセスメント: PARS 使用の留意点と演習. 平成22年度第1回発達障害者支援センター職員研修会, 国立秩父学園, 埼玉, 2010.5.14.
- 3) 神尾陽子: 発達障害における早期発見と早期介入の意義: ライフステージの観点から. 平成22年度精神保健に関する技術研修, 第5回発達障害早期総合支援研修, 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所, 東京, 2010.6.23.
- 4) 神尾陽子: 乳幼児期の発達チェックポイント. 平成22年度精神保健に関する技術研修. 第5回発達障害早期総合支援研修, 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所, 東京, 2010.6.24.
- 5) 神尾陽子: 自治体でのハイリスク児スクリーニングの実際. 平成22年度精神保健に関する技術研修, 第5回発達障害早期総合支援研修, 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所, 東京, 2010.6.25.
- 6) 神尾陽子: 成人期の発達障害の臨床的問題. 平成22年度精神保健に関する技術研修, 第3回発達障害精神医療研修, 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所, 東京, 2010.9.29.
- 7) 神尾陽子: 広汎性発達障害児・者の認知研究からわかること. 平成22年度精神保健に関する技術研修, 第3回発達障害精神医療研修, 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所, 東京, 2010.9.30.
- 8) 神尾陽子: 発達障害児・者に対するライフステージに応じた支援をめぐって. 第28回福島精神科治療懇話会. 福島, 2010.10.2.
- 9) 神尾陽子: 自閉症の診断と評価. 平成22年度第2期国立特別支援教育総合研究所特別支援教育専門研修, 独立行政法人国立特別支援教育総合研究所主催, 横須賀, 2010.10.5.
- 10) 神尾陽子: 自閉症スペクトラムの早期発見と早期介入の意義. 平成22年度発達障害支援従事者養成研修会, 徳島, 2010.10.9.
- 11) 神尾陽子: 自閉症スペクトラム児の早期診断と支援のために. 言語聴覚士研修会, 国立障害者リハビリテーションセンター, 所沢, 2010.11.24.
- 12) 神尾陽子: 社会性発達問題と M-CHAT による早期発見. 平成22年度発達障害児 (者) 支援医師研修会, 岡山県医師会, 岡山, 2011.3.18.

- 13) 井口英子: 学童期のアセスメント: PARS 使用の留意点と演習. 平成 22 年度第 1 回発達障害者支援センター職員研修会, 国立秩父学園, 埼玉, 2010.5.14.
- 14) 井口英子: 精神科医療現場での広汎性発達障害の触法例. 平成 22 年度精神保健に関する技術研修, 第 3 回発達障害精神医療研修, 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所, 東京, 2010.10.1.
- 15) 井口英子: 発達障害の早期発見の意義と課題, 福島県発達障がい児「気づきと支援」普及研修, 福島, 2010.11.25.
- 16) 稲田尚子: 乳幼児の対人コミュニケーション行動アセスメント実習 I. 平成 22 年度精神保健に関する技術研修, 第 5 回発達障害早期総合支援研修, 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所, 東京, 2010.6.24.
- 17) 稲田尚子: 自閉症スペクトラム幼児のコミュニケーション行動. 2010 年度臨床発達心理士 第 2 回資格更新研修会, 日本大学文理学部, 東京, 2010.11.14.
- 18) 稲田尚子: 発達早期の自閉症スペクトラムのコミュニケーション行動. 2010 年度諏訪管内保健研修会, 諏訪保健福祉事務所, 長野, 2010.11.19.

6. 成人精神保健研究部

I. 研究部の概要

研究部及び研究室の研究目的

自然災害、犯罪被害、虐待等における心理的外傷を緩和し、効果的な治療と支援の研究を進めるとともに、代表的な病態である PTSD の神経科学的な解明と治療研究を推進している。各種震災、事故等に際しては専門家派遣などの現地支援に当たるとともに、効果的な行政・医療対応のシステム研究にも取り組んでいる。また関係諸機関（厚生労働省、警察庁、内閣府等中央省庁、精神保健福祉センター、災害医療センター、保健医療科学院、世界保健機構、兵庫県および新潟こころのケアセンター等）とのネットワークの構築、共同研究の推進、教育研修活動も積極的に行っているところである。

また平成 22 年度末の 3 月 11 日に発生した東日本大震災に関しては、直ちに国立精神神経医療研究センターに情報支援サイトを立ち上げ、また精神神経学会において対策にあたるなどの迅速な対応を行った。

平成 22 年度の当研究部の構成は以下の通りである。部長：金 吉晴。診断技術研究室長：松岡 豊。犯罪被害者等支援研究室長：中島聡美。災害等支援研究室長：鈴木友理子。精神機能研究室長：栗山健一。認知機能研究室長（司法精神医学研究部併任）：福井裕輝。流動研究員は松村健太、本間元康、岡島純子。外来研究員として伊藤正哉、袴田優子。協力研究員は北山徳行、西 大輔、堤 敦朗、松岡恵子、白井明美、柳田多美、原恵利子、石丸径一郎、寺島 瞳、深澤舞子、井筒 節、曾雌崇弘、成澤知美、西多昌規、藤井 猛、正木智子。研究生は佐野恵子、茂木香子、野口普子、松崎陽子、永井めぐみ、伊藤大輔、澁谷美穂子、白杵理人、中澤佳奈子、島崎みゆき、江口佐和子、小林由季、高岡昂太、加藤知子、栗田真里、堀江美智子、荒川和歌子、工藤紗弓、奥山紗由、石田牧子、伊東史エ、伊藤まどか、小暮由美。実習生として足立真観子、木村美貴子。客員研究員として松田博史、宇野正威、加茂登志子、小西聖子、宮地光恵、下山晴彦、鈴木伸一、Charles Marmar、Sarbjit Singh Johal 各氏を迎えている。（順不同）

II. 研究活動

1) PTSDに対する持続エクスポージャー療法の効果に関する研究

現在各国のガイドラインでPTSDに対する治療法として最もエビデンスがあるとされている、持続エクスポージャー療法（Prolonged Exposure Therapy）の治療効果についてのRCTが終了し、出版中である。

（金、中島、伊藤）

2) 交通外傷後の精神健康に関するコホート研究

事故後PTSDの有病率は、研究方法が確立された先進諸国の間でも差がある。研究参加者300人中106人が6か月後の面接調査に参加し、事故6か月の時点で精神疾患の診断基準を満たしていたのは28人（26.4%）であった。そのうち、PTSD（6人、5.7%）、部分PTSD（12人、11.3%）、大うつ病（10人、9.4%）が主要な診断であった。PTSD有病率を明らかにしたうえで、医療技術や公衆衛生の水準および生活水準などを反映する乳児死亡率が各国間の有病率の相違と関連しているかどうかを検討した。その結果、乳児死亡率が高い国ほど事故後PTSDの有病率が高いという生態学的関連を見出した。（松岡、中島、金）

3) 新潟県中越地震および中越沖地震における地域住民の精神健康追跡調査

新潟県小千谷市および柏崎市、刈羽村、出雲崎町における住民の精神健康調査を実施した。（金、鈴木、深澤、中島）

4) 災害精神保健マニュアルの改訂に関する研究

災害精神保健のあり方について、阪神・淡路大震災、新潟中越沖地震、中越沖地震で精神保健活動に携わった被災地内外の専門家 100 名を対象にデルフィ法を行い、災害対応に関する合意形成を行った。その結果、1) 災害精神保健体制の構築、2) 心のケアのあり方、3) 外部支援のあり方、4)

支援者ケアの4つの領域について、推奨行動に関する合意を得、またその他の注意事項についてまとめた。この結果に基づいて、災害精神保健マニュアルの改訂を行った（鈴木、深澤、中島、金）

5) PTSD症状、レジリエンス、そして外傷後成長の関連についての検討

交通外傷患者におけるレジリエンスと外傷後成長との関連を検討した。外傷後成長を構成する因子のうち、「人生・生命に対する感謝」と「精神的変容」はPTSD症状と深く関連し、「人間としての強さ」「他者との関係」「新たな可能性」はレジリエンスと深く関連していることが示唆された。（松岡、金）

6) 不飽和脂肪酸によるPTSD予防法の検討

外傷患者のPTSD二次予防を目的としたプラセボ対照二重盲検ランダム化比較試験を実施中である。平成23年3月末までに目標症例140例中75例（54%）を登録した。その基礎実験として、健常者を対象に魚食習慣とストレス負荷時の心臓血管系機能の関連を検討する実験を実施した。（松岡、松村）

7) 複雑性悲嘆の認知行動療法の効果に関する研究

米国のShear博士によって開発された複雑性悲嘆の認知行動療法の有効性の検討を日本人の遺族を対象に実施している（中島、伊藤、金）

8) 犯罪被害の急性期の心理ケアプログラムの開発

犯罪被害者支援の専門家によるフォーカスグループを実施し、この結果と国内外の文献を参考に、日本の現場に即した①犯罪被害後の対応のガイドラインを作成し、精神保健の非専門家を含む支援者（84名）によってDelphi法を用いた合意形成を行なった。（中島、鈴木、深澤、成澤、金）

9) 健康危機体制における精神保健支援の在り方に関する研究

災害時の精神保健対応のマニュアルに基づいて、研修プログラムの開発を行った。マニュアルの視覚教材、また遺族対応、災害後のトラウマ反応および自殺念慮のある住民の対応に関するデモンストラーションビデオを作成した。また過去の阪神・淡路大震災および宮城・岩手地震の経験をもとに、行政対応のクリティカルパスを作成した。（鈴木、深澤、中島）

10) 精神障害に対する偏見・差別除去に関する介入研究

精神障害をもつ人びとが経験した差別に関する国際共同研究、INDIGO研究に参加した。日本の参加者データについて、親研究と別途分析して、量的および質的に分析をした。また、精神疾患に関する差別除去の目的で、臨床研修医を対象にメンタルヘルス・ファーストエイドプログラムの実証研究を行った。（鈴木）

11) 睡眠剥奪および概日特性が恐怖記憶の形成に及ぼす影響

睡眠剥奪は恐怖情動記憶の般化を選択的に消去し、さらに、条件付けによる生理反応の消去にも有効であった。これはトラウマ受傷後の睡眠剥奪はPTSD発症を予防する可能性を示唆しており、ストレス性不眠の生物学的意義を示唆する可能性もうかがえる。また、女性は恐怖記憶記録率が習慣的入眠時刻を過ぎると有意に上昇し、特に恐怖刺激に選択的に記録率が上がったのに対し、男性は習慣的入眠時刻を過ぎると有意に記録率が低下した。これは、女性のPTSDの主な発症因である性的暴行は、深夜に発生率が高いという時刻特性があり、女性のPTSD有病率が男性の2倍以上である一因となる可能性を示唆している。（栗山、曾雌、三島）

12) D-サイクロセリン, バルプロ酸による恐怖消去学習, 陳述記憶, 手続き記憶, 作働記憶の促進効果の時間生物学的検討

D-サイクロセリンおよびバルプロ酸が学習を促進することが動物実験で示唆されており, これらの薬剤がヒトの恐怖消去学習やその他の高次学習の促進効果を検討した. D-サイクロセリンおよびバルプロ酸ともに, 消去学習後の再発刺激への恐怖反応を減弱させた. また, D-サイクロセリンのみ手続き記憶, 作働記憶を促進させた. 作働記憶促進効果は睡眠依存性学習とは独立した記憶機序を賦活してもたらされることが明らかになった. 本研究成果はこれらの薬剤の臨床応用時の有効性向上及び副作用の低減化に有用な知見となる. (栗山, 曾雌, 本間, 小山, 島崎)

Ⅲ. 社会的活動に関する評価

1) 市民社会に対する一般的な貢献

- ・ 毎日新聞 (平成 22 年 8 月 24 日朝刊) 「震源近く 自殺多発」 (鈴木)
- ・ PRESIDENT FAMILY (平成 22 年 6 月) 「記憶の回路を繋ぐ 7 つの習慣」 (栗山)
- ・ 週刊ポスト (平成 22 年 9 月 24 日号) やっぱりあった「時計遺伝子」のメカニズム 「体内時計」で人生が変わる (栗山)
- ・ テストの科学 「所さんの目がテン」 (平成 23 年 1 月 15 日放送分) (栗山) 等

2) 専門教育面における貢献

- ・ 専門家向け講演会 (金, 鈴木)
全国精神保健福祉センター長会, 健康危機管理保健所長等研修, 国土交通省幹部職員研修会, 保健師等ブロック別研修会等で, 災害精神保健に関する最新知見を提供している.
- ・ 客員教授: 東京女子医科大学医学部 (金)
- ・ 大学講師: 東京大学医学部 (金), 京都大学医学部 (金), 東京医科歯科大学医学部 (金)
- ・ 多施設共同研究チーム内での専門家としての貢献: 「自殺対策のための戦略研究: 自殺企図の再発防止に対する複合的ケースマネジメントの効果: 多施設共同による無作為化比較研究」に参加する研究者 (医師・看護師・心理士・精神保健福祉士) の教育 (松岡) およびイベント判定委員会委員 (松岡) 「同研究: 自殺予防地域介入研究」の研究班運営委員 (鈴木)
- ・ 各地の医師会, 法務省, 警察庁, 精神保健福祉センター等の依頼を受け, トラウマ対応, PTSD 治療, 犯罪被害者対応, 災害精神保健に関する一連の講演を行った (金, 中島, 鈴木).
- ・ 国立国際医療研究センター, 東京精神医学会の依頼を受けて, 研究倫理ならびに臨床疫学に関する講演を行った (松岡).
- ・ 国際協力 (鈴木)
JICA による四川大地震後のこころのケアプロジェクトに参加し, 国内外における災害精神保健の最新知見について, 中国および兵庫県の研修会において一連の講演を行った.
- ・ M3.com 学会レポート
ストレス後の急性不眠, 恐怖反応消去の適応的意義
<http://www.m3.com/academy/report/article/122527/> 2010 年 7 月 7 日掲載 (栗山)

3) 精研の研修の主催と協力

- ・ 国立精神・神経医療研究センターにおいて, 第 4 回 PTSD 精神療法研修を主催した (金), また第 5 回犯罪被害者メンタルケア研修を主催した (中島)

4) 保健医療行政・施策に関する研究・調査, 委員会等への貢献

①政府委員会

- ・内閣官房「国民保護訓練」アドバイザー (金, 鈴木)
- ・原子力安全委員会, 被ばく医療分科会 専門委員 (金)
- ・宇宙開発事業団 有人サポート委員会 委員 (金)
- ・内閣府基本計画策定および推進専門委員等 (中島)
- ・内閣府「平成 22 年度交通事故被害者サポート事業検討会」委員 (中島)
- ・国土交通省「公共交通における事故発生時の被害者支援のあり方」委員 (中島)
- ・厚生労働省「HIV 遺族実態調査検討会」委員長 (金), 委員 (中島)

②その他公的委員会

- ・「新潟こころのケアセンター」アドバイザー
アドバイザーとして, 新潟中越地震および中越沖地震後の地域住民の精神健康に関する調査およびプログラム開発の専門的助言を行っている. (金, 鈴木)
- ・「兵庫県こころのケアセンター」外部アドバイザー (金)

5) センター内における臨床的活動

- ・認知行動センター設立準備室長を併任 (金)
- ・病院において PTSD, 複雑悲嘆の外来診療, CBT を行っている. (金, 中島)
- ・トランスレーショナル・メディカルセンター室長併任 (松岡)
- ・トランスレーショナル・メディカルセンターの臨床研究研修制度と若手育成カンファレンスの運営ならびに若手研究グループでレジデントとコメディカルの研究指導を行った. (松岡)
- ・トランスレーショナル・メディカルセンターが主催するセミナーで, 海外のコホート研究の動向について講演を行った. (鈴木)

6) その他

- ・成人部 HP に「自然災害に関するガイドライン」「薬物療法アルゴリズム」「犯罪被害者のメンタルヘルス情報ページ」を掲載し, 専門家, 一般に対し治療や対応についての啓発を行っている. (金, 中島)

IV. 研究業績

A. 刊行物

(1) 原著論文

- 1) Nishi D, Matsuoka Y, Yonemoto N, Noguchi H, Kim Y, Kanba S: The Peritraumatic Distress Inventory as a predictor for the subsequent posttraumatic stress disorder after a severe motor vehicle accident. *Psychiatry Clin Neurosci* 64(2): 149-156, 2010.
- 2) Nishi D, Matsuoka Y, Kim Y: Posttraumatic growth, posttraumatic stress disorder and resilience of motor vehicle accident survivors. *Biopsychosocial Medicine* 2010, 4:7.
- 3) Honma M, Soshi T, Kim Y, Kuriyama K: Right Prefrontal Activity Reflects the Ability to Overcome Sleepiness during Working Memory Tasks: A Functional Near-Infrared Spectroscopy Study. *PLoS ONE* 5 (9): e12923, 2010.
- 4) Kuriyama K, Soshi T, Kim Y: Sleep deprivation facilitates extinction of implicit fear generalization and physiological response to fear. *Biological Psychiatry* 68(11): 991-998. 2010. (雑誌より press release される.)

- 5) Fujisawa D, Miyashita M, Nakajima S, Ito M, Kato M, Kim Y: Prevalence and determinants of complicated grief in general population. *Journal of Affective Disorders* 127: 352-358, 2010.
- 6) Suzuki Y, Tsutsumi A, Fukasawa M, Honma H, Someya T and Kim Y: Prevalence of Mental Disorders and Suicidal Thoughts Among Community-Dwelling Elderly Adults 3 Years After the Niigata-Chuetsu Earthquake. *Journal of Epidemiology* 21-2: 144-150, 2011.
- 7) Umehara H, Fangerau H, Gaebel W, Kim Y, Schott H, Zielasek J: Von der “Schizophrenie” zur “Störung der Einheit des Selbst”. *Der Nervenarzt*, 2011. (online)
- 8) Kuriyama K, Honma M, Koyama S, Kim Y: D-cycloserine Facilitates Procedural Learning but not Declarative Learning in Healthy Humans: A Randomized Controlled Trial of the Effect of D-cycloserine and Valproic Acid on Overnight Properties in the Performance of Non-emotional Memory Tasks *Neurobiology Learning and Memory* 95(4):505-9, 2011.
- 9) Kuriyama K, Mishima K, Soshi T, Honma M, Kim Y: Effects of sex differences and regulation of the sleep-wake cycle on aversive memory encoding. *Neurosci Res* 70(1):104-10, 2011.
- 10) Matsuoka Y, Nishi D, Yonemoto N, Hamazaki K, Hashimoto K, Hamazaki T: Omega-3 fatty acids for the secondary prevention of posttraumatic stress disorder after an accidental injury: an open-label pilot study. *J Clin Psychopharmacology* 30(2): 217-219, 2010.
- 11) Nishi D, Uehara R, Kondo M, Matsuoka Y: Reliability and validity of the Japanese version of the Resilience Scale and its short version. *BMC Research Notes* 3:310, 2010.
- 12) Suzuki Y, Takahashi T, Nagamine M, Zou Y, Biao Han B, Park JI, Hwue HG, Chen CC, Lin CC and Shinfuku N: Comparison of psychiatrists’ views on classification of mental disorders in four East Asian countries/area. *Asian Journal of Psychiatry* 3: 20-25, 2010.
- 13) Kato TA, Suzuki Y, Sato R, Fujisawa D, Uehara K, Hashimoto N, Sawayama Y, Hayashi J, Kanba S, Otsuka K: Development of 2-hour suicide intervention program among medical residents: first pilot trial. *Psychiatry Clin Neurosci*. 64(5): 531-540. 2010 Oct. doi: 10.1111/j.1440-1819.2010.02114.x. Epub 2010 Aug 19.
- 14) Fujita E, Kato D, Kuno E, Suzuki Y, Uchiyama S, Watanabe A, Uehara K, Yoshimi A, Hirayasu Y: Implementing the illness management and recovery program in Japan. *Psychiatr Serv* 61(11):1157-1161, 2010.
- 15) Ito J, Oshima I, Nishio M, Sono T, Suzuki Y, Horiuchi K, Niekawa N, Ogawa M, Setoya Y, Hisanaga F, Kouda M, Tsukada K: The effect of Assertive Community Treatment in Japan. *Acta Psychiatr Scand*. 2010 Nov 10. doi: 10.1111/j.1600-0447.2010.01636.x. [Epub ahead of print]
- 16) Aritake-Okada S, Higuchi S, Suzuki H, Kuriyama K, Enomoto M, Soshi T, Kitamura S, Watanabe M, Hida A, Matsuura M, Uchiyama M, Mishima K: Diurnal fluctuations in subjective sleep time in humans. *Neurosci Res* 68: 225-231, 2010.
- 17) Yamakoshi T, Matsumura K, Yamakoshi Y, Hirose H, Rolfe P: Physiological measurements and analyses in motor sports: a preliminary study in racing kart athletes. *European Journal of Sport Science* 10: 397-406, 2010.
- 18) Hakamata Y, Lissek S, Ba-Haim Y, Britton, JC, Fox NA, Leibenluft E, Ernst M, Pine DS: Attention bias modification treatment: A meta-analysis toward the establishment of novel treatment for anxiety. *Biological Psychiatry* 68, 2010.
- 19) Ito M, Horikoshi M, Kodama M: Subjectivity and environmental influence in relation to sense of authenticity. *Psychol Rep*, in press.
- 20) 中島聡美, 伊藤正哉, 石丸徑一郎, 白井明美, 伊藤大輔, 小西聖子, 金吉晴: 遷延性悲嘆障害の実態と危険因子に関する研究 — 罪責感の与える影響およびソーシャルサポートの役割を中心

- にー。明治安田こころの健康財団研究助成論文集 45: 119-126, 2010.
- 21) 伊藤大輔, 金吉晴, 鈴木伸一: ト라우マ体験者の外傷後ストレス反応の形成過程に不安感受性が及ぼす影響. 認知療法研究 第3巻, 2010.9.
 - 22) 鈴木友理子, 古川壽亮, 川上憲人, 堀口逸子, 石丸徑一郎, 金吉晴: 震災前の身体健康指標を用いた中越地震後の心理的ストレスの予測因子の検討. 精神保健研究 56: 89-97, 2010.
 - 23) 野口普子, 佐久間香子, 佐野恵子, 西大輔, 松岡豊: 救急医療現場において臨床試験を円滑に行うための工夫—CRCの役割を中心に—. 総合病院精神医学 21(4):357-362, 2009.
 - 24) 松岡豊, 西大輔: 精神科臨床における前向きコホート研究のすすめ. 総合病院精神医学 21(4):376-380, 2009.
 - 25) 白井明美, 中島聡美, 真木佐知子, 辰野文理, 小西聖子: 犯罪被害者遺族における複雑性悲嘆及びPTSDに関連する要因の分析. 臨床精神医学 39(8): 1053-1062, 2010.
 - 26) 白井明美, 中島聡美, 真木佐知子, 辰野文理, 小西聖子: 犯罪被害者遺族における続柄の相違が精神健康に与える影響についての分析. 精神保健研究 56: 27-34, 2010.
 - 27) 山越健弘, 田中直登, 山越康弘, 松村健太, Rolfe P, 廣瀬元, 高橋規一: イヤホン組込型深部体温連続計測装置の開発と安全支援を目指したGTドライバーへの応用. 生体医工学, 48: 494-504, 2010.
 - 28) 山越健弘, 松村健太, 山越康弘, 廣瀬元, 高橋規一, Rolfe P: 高温熱ストレス環境下におけるレーシングドライバー深部体温の連続計測と解析. 生体医工学 48: 269-280, 2010.
 - 29) 山越健弘, 松村健太, 小林寛幸, 後藤雄二郎, 廣瀬元: 差分顔面皮膚放射温度を用いた運転ストレス評価の試み—単調運転ストレス負荷による基礎的検討—. 生体医工学 48: 163-174, 2010.
 - 30) 伊藤正哉, 川崎直樹, 小玉正博: 自尊感情の3様態—自尊源の随伴性と充足感からの整理—. 心理学研究 81:560-568,2010.
 - 31) 岡島純子, 佐藤容子, 鈴木伸一: 幼児を持つ母親の育児自動思考尺度の開発とストレス反応の関連. 行動療法研究37(1): 1-11, 2011.

(2) 総説

- 1) Matsuoka Y: Clearance of fear memory from the hippocampus through neurogenesis by omega-3 fatty acids: A novel preventive strategy for posttraumatic stress disorder? Biopsychosocial Medicine 5:3, 2011.
- 2) Shear MK, Simon N, Wall M, Zisook S, Neimeyer R, Duan N, Reynolds C, Lebowitz B, Sung S, Ghesquiere A, Gorscak B, Clayton P, Ito M, Nakajima S, Konishi T, Melhem N, Meert K, Schiff M, O'Connor MF, First M, Sareen J, Bolton J, Skritskaya N, Mancini AD, Keshaviah A.: Complicated grief and related bereavement issues for DSM-5. *Depress Anxiety*28(2): 103-17, 2011.
- 3) Ono Y, Furukawa TA, Shimizu E, Okamoto Y, Nakagawa A, Fujisawa D, Nakagawa A, Ishii T, Nakajima S: Current status of research on cognitive therapy/cognitive behavior therapy in Japan. *Psychiatry Clin Neurosci*.65(2):121-129, 2011.
- 4) Sartorius N, Gaebel W, Cleveland H-R, Stuart H, Akiyama T, Arboleda-Flórez J, Baumann AE, Gureje O, Jorge MR, Kastrup M, Suzuki Y, Tasman A: WPA guidance on how to combat stigmatization of psychiatry and psychiatrists. *World Psychiatry* 9: 131-144, 2010.
- 5) 金吉晴: PTSDと裁判. 精神科治療学 25(6): 833-837, 2010.
- 6) 金吉晴, 鈴木友理子, 中島聡美: 精神医療支援. 日本内科学会雑誌 99:3108-3111, 2010.
- 7) 西大輔, 松岡豊: PTSDの病態理解から考える予防および治療介入—身体外傷患者の場合を中心に—. 臨床精神医学 39(4):431-437, 2010.

- 8) 浜崎 景, 松岡 豊, 浜崎智仁, 稲寺秀邦: ω 3 系多価不飽和脂肪酸の精神への影響. 月刊精神科 17(5):520-527, 2010.
- 9) 西 大輔, 松岡 豊: 精神科臨床と伝統・相補・代替療法 (TCAM). 総合病院精神医学 22(2):162-169, 2010.
- 10) 伊藤正哉, 中島聡美: 複座性悲嘆に対する認知行動療法: 治療プロセスとアウトカム. 精神保健研究 55: 95-100, 2009.
- 11) 中島聡美: 犯罪被害者の help-seeking とメンタルヘルスサービス. 精神保健研究 56: 19-27, 2010.
- 12) 中島聡美: 日本のメンタルヘルス領域における犯罪被害者支援の現状と課題. ト라우マティック・ストレス 8(2): 111-120, 2010.
- 13) 中島聡美: 急性ストレス反応(急性ストレス障害)の治療. 精神科治療学 25 増刊号:166-167, 2010.
- 14) 栗山健一, 曾雌崇弘, 藤井 猛: 時間認知の心理学・生理学・時間生物学的特性と精神病理. 時間生物学 16(1): 23-30, 2010.
- 15) 栗山健一: 特集 2: 睡眠と学習・記憶. 脳 21 vol.13(4): 402-40, 2010.
- 16) 栗山健一: ストレス関連障害. Cefiro 特集 精神・神経系疾患 - その病態と治療 - Autumn 12: 20-24, 2010.
- 17) 本間元康: ラバーハンドイリュージョン: その現象と広がり. 認知科学 17(4):761-770, 2010.

(3) 著書

- 1) 金 吉晴: Pocket 精神科 21.PTSD. 金芳堂, 東京, pp140-145, 2010.
- 2) 金 吉晴: 精神科診療データブック 診療ガイドラインとアルゴリズム. D.不安障害 1.PTSD. 中山書店, 東京, pp425-431, 2010.
- 3) 金 吉晴: 危機への心理支援学 91 のキーワードでわかる緊急事態における心理社会的アプローチ 日本心理臨床学会監修 第2章 (3) 災害支援の心構え: 22-2, 遠見書房, 東京, pp22-24, 2010.
- 4) 金 吉晴, 廣幡小百合: PTSD の心理教育. 臨床精神医学 39 (6), アークメディア, 東京, p797-793, 2010.
- 5) 金 吉晴: 家庭医学大全科 (六訂版) 4.こころの病気 (PTSD, 解離性障害, 心気症). 法研, 東京, pp778-781, 2010.
- 6) 鈴木友理子: 災害時のメンタルヘルス. 精神保健福祉白書 2011 年版. 精神保健福祉白書編集委員会(編). 中央法規, 東京, 2010.
- 7) 栗山健一: 4.4 睡眠と記憶-断眠の影響-. 眠気の科学-そのメカニズムと対応- 朝倉書店, 東京, pp 51-59, 2011.1.25.
- 8) 栗山健一: Q&A 眠ると記憶力が良くなるって本当? 特集「眠れない」を解決する. 治療 2月号 (vol.93). 南山堂, 東京, pp 298-299, 2011.
- 9) 白井明美, 小西聖子: 暴力被害女性とうつ. 上島邦利監修, 平島奈津子編著. 治療者のための女性のうつ病ガイドブック. 金剛出版, 東京, pp128-136, 2010.
- 10) 白井明美: 喪失と喪の作業. 危機への心理支援学. 日本心理臨床学会監修, 日本心理臨床学会支援活動プロジェクト委員会編. 遠見書房, 東京, p31, 2010.

(4) 研究報告書

- 1) 中島聡美, 伊藤正哉, 石丸径一郎, 伊藤大輔, 寺島瞳, 大関千春, 白井明美, 小西聖子, 金吉晴: 重度ストレス障害の認知行動療法の効果に関する研究. 平成 21 年度厚生労働科学研究費補助金(こころの健康科学研究事業)「精神療法の実施方法と有効性に関する研究」総括・分担研究報告書(研究代表者大野裕). pp53-63,2009.

- 2) 中島聡美, 伊藤正哉, 石丸徑一郎, 伊藤大輔, 寺島瞳, 大関千春, 白井明美, 小西聖子, 加茂登志子, 金吉晴: 重度ストレス障害の認知行動療法の効果に関する研究. 平成 19-21 年度厚生労働科学研究費補助金 (こころの健康科学研究事業) 「精神療法の実施方法と有効性に関する研究」総合研究報告書 (研究代表者 大野裕). pp56-66, 2009.
- 3) 金吉晴: 大規模災害や犯罪被害等による精神科疾患の実態把握と介入手法の開発に関する研究. 平成 21 年度厚生労働科学研究費補助金 (こころの健康科学研究事業) 「大規模災害や犯罪被害等による精神科疾患の実態把握と介入手法の開発に関する研究」総括・分担研究報告書 (研究代表者: 金吉晴). pp1-4, 2010.
- 4) 金吉晴, 加茂登志子, 小西聖子, 中島聡美 他: 心的外傷後ストレス障害に対する持続エクスポージャー療法の無作為比較試験. 平成 21 年度厚生労働科学研究費補助金 (こころの健康科学研究事業) 「大規模災害や犯罪被害等による精神科疾患の実態把握と介入手法の開発に関する研究」総括・分担研究報告書(研究代表者: 金吉晴). pp5-16, 2010.
- 5) 加茂登志子, 丹羽まどか, 正木智子, 金吉晴 他: DV 被害を受けた母子へのフォローアップ研究. 平成 21 年度厚生労働科学研究費補助金 (こころの健康科学研究事業) 「大規模災害や犯罪被害等による精神科疾患の実態把握と介入手法の開発に関する研究」総括・分担研究報告書 (研究代表者: 金吉晴). pp27-64, 2010.
- 6) 松岡豊, 西大輔, 中島聡美, 金吉晴: 交通外傷後の精神健康に関するコホート研究. 平成 21 年度厚生労働科学研究費補助金 (こころの健康科学研究事業) 「大規模災害や犯罪被害等による精神科疾患の実態把握と介入手法の開発に関する研究」総括・分担研究報告書 (研究代表者: 金吉晴). pp81-86, 2010.
- 7) 中島聡美, 加茂登志子, 小西聖子, 中澤直子, 金吉晴: 性暴力被害者への急性期対応の現状に関する調査. 平成 21 年度厚生労働科学研究費補助金 (こころの健康科学研究事業) 「大規模災害や犯罪被害等による精神科疾患の実態把握と介入手法の開発に関する研究」総括・分担研究報告書 (研究代表者: 金吉晴). pp87-91, 2010.
- 8) 中島聡美, 小西聖子, 伊藤正哉, 白井明美, 金吉晴: 日本語版コナー・デビッドソン回復力尺度の信頼性と妥当性の検討. 平成 21 年度厚生労働科学研究費補助金 (こころの健康科学研究事業) 「大規模災害や犯罪被害等による精神科疾患の実態把握と介入手法の開発に関する研究」総括・分担研究報告書 (研究代表者: 金吉晴). pp93-97, 2010.
- 9) 鈴木友理子, 深澤舞子, 金吉晴: 震災前の身体健康指標を用いた中越地震後の心理的ストレスの予測因子の検討. 平成 21 年度厚生労働科学研究費補助金 (こころの健康科学研究事業) 「大規模災害や犯罪被害等による精神科疾患の実態把握と介入手法の開発に関する研究」総括・分担研究報告書 (研究代表者: 金吉晴). pp99-119, 2010.
- 10) 栗山健一, 曾雌崇弘, 金吉晴: 潜在的な恐怖記憶想起の時間生物学的特性および性差. 平成 21 年度厚生労働科学研究費補助金 (こころの健康科学研究事業) 「大規模災害や犯罪被害等による精神科疾患の実態把握と介入手法の開発に関する研究」総括・分担研究報告書 (研究代表者: 金吉晴). pp121-124, 2010.
- 11) 鈴木友理子, 深澤舞子, 金吉晴: PTSD 治療ガイドライン作成の予備的研究. 平成 21 年度厚生労働科学研究費補助金 (こころの健康科学研究事業) 「大規模災害や犯罪被害等による精神科疾患の実態把握と介入手法の開発に関する研究」総括・分担研究報告書 (研究代表者: 金吉晴). pp125-158, 2010.
- 12) 金吉晴: 大規模災害や犯罪被害等による精神科疾患の実態把握と介入手法の開発に関する研究. 平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (精神障害分野)) 「大規模災害や犯罪被害等による精神科疾患の実態把握と介入手法の開発に関する研究」総括・分担研究報告書 (研究代表者: 金吉晴). pp1-4, 2011.

- 13) 金吉晴 他：心的外傷後ストレス障害に対する持続エクスポージャー療法の無作為比較試験。平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業（精神障害分野））「大規模災害や犯罪被害等による精神科疾患の実態把握と介入手法の開発に関する研究」総括・分担研究報告書（研究代表者：金吉晴）。pp5-14, 2011.
- 14) 加茂登志子, 金吉晴 他：DV 被害を受けた母子へのフォローアップ研究。平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業（精神障害分野））「大規模災害や犯罪被害等による精神科疾患の実態把握と介入手法の開発に関する研究」総括・分担研究報告書（研究代表者：金吉晴）。pp29-54, 2011.
- 15) 松岡豊, 西大輔, 中島聡美, 金吉晴：交通外傷後の精神健康に関するコホート研究。平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業（精神障害分野））「大規模災害や犯罪被害等による精神科疾患の実態把握と介入手法の開発に関する研究」総括・分担研究報告書（研究代表者：金吉晴）。pp71-78, 2011.
- 16) 中島聡美, 加茂登志子, 鈴木友理子, 金吉晴 他：性暴力被害者の急性期心理ケアプログラムの構築に関する研究。平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業（精神障害分野））「大規模災害や犯罪被害等による精神科疾患の実態把握と介入手法の開発に関する研究」総括・分担研究報告書（研究代表者：金吉晴）。pp79-96, 2011.
- 17) 鈴木友理子, 深澤舞子, 中島聡美, 成澤知美, 金吉晴：災害精神保健医療マニュアル改訂版作成の取り組み。平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業（精神障害分野））「大規模災害や犯罪被害等による精神科疾患の実態把握と介入手法の開発に関する研究」総括・分担研究報告書（研究代表者：金吉晴）。pp97-130, 2011.
- 18) 栗山健一, 本間元康, 曾雌崇弘, 金吉晴：習慣的睡眠時刻前後の恐怖記憶特性における性差。平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業（精神障害分野））「大規模災害や犯罪被害等による精神科疾患の実態把握と介入手法の開発に関する研究」総括・分担研究報告書（研究代表者：金吉晴）。pp167-172, 2011.
- 19) 金吉晴：健康危機発生時における地域健康安全に係る効果的な精神保健医療体制の構築に関する研究。平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金（健康安全・危機管理対策総合研究事業）「健康危機発生時における地域健康安全に係る効果的な精神保健医療体制の構築に関する研究」総括・分担研究報告書（研究代表者：金吉晴）。pp1-4, 2011.
- 20) 鈴木友理子, 深澤舞子：WHO の mhGAP, AIMS, ATLAS の調査及び検討。厚生労働科学研究費補助金障害者対策総合研究事業「精神障害者への対応への国際比較に関する研究」平成 21 年度分担研究報告書（主任研究者：中根允文）。長崎。2010.3
- 21) 鈴木友理子：災害精神保健に関する研修体制の構築および効果評価研究の予備的検討。厚生労働科学研究費補助金（健康安全・危機管理対策総合研究事業）健康危機発生時における地域健康安全に係る効果的な精神保健医療体制の構築に関する研究。平成 22 年度分担研究報告書。2011.
- 22) 栗山健一：ショックな体験の直後に眠れなくなるのには意味がある。TMC ニュース第 4 号:10. Paper Scan 2011.1.17.

(5) 翻訳

- 1) 金吉晴：狂気の道徳化。濱中淑彦 監訳：中世の狂気，人文書院，東京，2010。（Muriel Laharie. La Fole au Moyen Age, Le Leopard d'Or, Paris, 1991）.

(6) その他

- 1) Sartorius N, Gabel W, Cleveland H-R, Stuart H, Akiyama T, Arboleda-Florez J, Baumann A, Gureje O, Jorge M. R, Kastrup M, Suzuki Y, Tasman A: WPA guidance on how to combat stigmatization of psychiatry and psychiatrists. World Psychiatric Association, 2010.

- 2) 金吉晴, 中島聡美: 化学兵器あるいは、生物兵器によるテロ事件が発生した場合の精神医療対応. 精神保健研究 55: 27-28, 2009.
- 3) 金吉晴, 中島聡美: 精神保健医療活動マニュアル. 精神保健研究 55: 29-30, 2009.
- 4) 金吉晴, 伊藤正哉: 第5章 神経症性障害, ストレス関連障害および身体表現性障害, 7. 外傷後ストレス障害. 今日の精神科治療ガイドライン 25 増刊号:168-169, 2010.
- 5) 金吉晴: 特集 認知行動療法と社会との接点. 精神神経学雑誌 112(9):867, 2010.
- 6) 金吉晴: 犯罪被害を伴った精神病体験の扱いについて. 精神神経学雑誌 112(9):868-871, 2010.
- 7) 金吉晴: こころのバリアフリーコーナー, 講演「知っておきたいトラウマ支援」(講演紹介). こころの健康だよりNo.28:4-5, 2010.
- 8) 深澤舞子, 鈴木友理子, 金吉晴: 都道府県及び政令指定都市を対象とした災害時精神保健活動に関するニーズ調査. 日本社会精神医学会雑誌 19:16-26, 2010. (資料論文)
- 9) 金吉晴: 怯える子ども(災害時 心のケア急性期の対応). 教育医事新聞, 2011.3.25
- 10) 松岡豊: オメガ3系脂肪酸などのサプリメントはうつ病に効果がありますか? こころのりんしょう a-la-carte 29(4):463, 2010.
- 11) 中島聡美, 白井明美, 小西聖子: 犯罪被害者のメンタルヘルス情報ページ. 精神保健研究 55: 31-34, 2009.
- 12) 鈴木友理子: 取材記事掲載: 岩手内陸地震 震源近く, 自殺多発: 被災後の数カ月間, うつ兆候や生活苦. 毎日新聞東京朝刊社会面, 2010.8.24.
- 13) 栗山健一: 記憶の回路を繋ぐ7つの習慣, PRESIDENT FAMILY 2010.06: 48-49, 2010.
- 14) 栗山健一: コメント・取材協力. やっぱりあった「時計遺伝子」のメカニズム 「体内時計」で人生が変わる. 「週刊ポスト」2010年9/24号, 2010.

B. 学会・研究会における発表

(1) 学会特別講演, 教育講演, シンポジウム, ワークショップ, パネルディスカッション等

- 1) Kim Y: The preliminary evaluation of efficacy of parent-child interaction therapy for Japanese mother and child victimized by domestic violence, 20th IFP World congress of Psychotherapy, Lutzern, 2010.6.18.
- 2) Kim Y: Implementation of prolonged exposure therapy for PTSD in Japan. 20th IFP World congress of Psychotherapy, Lutzern, 2010.6.19.
- 3) Nakajima S, Ito M, Shirai A, Konishi T, Kim Y: Complicated Grief as a Stress-Response Disorder: Cross-Cultural Perspectives on Diagnosis, Risk Factors, and Treatment, World Congress of Behavioral and Cognitive Therapies, Boston, 2010.6.5.
- 4) Kim Y: "The Value of Psychotherapy for Schizophrenia: The Japanese Experience". 37th Annual Convention & 6th Asia-Pacific Association of Psychotherapists. The Philippine Psychiatric Association, Cebu Island, Philippines, 2011.1.24-27.
- 5) Matsuoka Y, Nishi D, Yonemoto N, Hamazaki K, Hashimoto K, Hamazaki T: Omega-3 fatty acids for secondary prevention of posttraumatic stress disorder following accidental injury: an open-label pilot study. 9th Conference of the International Society for the Study of Fatty Acids and Lipids, Maastricht, 2010.5.29-6.2
- 6) Suzuki Y, Kato T, Sato R, Fujisawa D, Uehara K, Hashimoto N, Sawayama Y, Hayashi J, Kanba S, Otsuka K: Antistigma Program for Medical Residents: Adopting the Mental Health First Aid Program in Japan. World Psychiatric Association International Congress, Symposium Stigma and mental illness. Beijing, 2010.9.1-5.
- 7) Ito M, Greenberg L, Iwakabe S, Pascual-Leone A: A task analysis for self-soothing process in Emotion-Focused Therapy, 26th International Conference of Society for Exploration of

- Psychotherapy Integration, Florence, Italy, 2010.5.27-30. (Symposium)
- 8) 小林桜児, 菊池安希子, 堀越 勝, 金 吉晴, 加茂登志子 : シンポジウム 8 認知行動療法と社会との接点, 第 106 回日本精神神経学会学術総会, 広島, 2010.5.20-21.
 - 9) 中島聡美, 金 吉晴, 井上麻紀子, 中澤直子, 加茂登志子 : 産婦人科医療現場における性暴力被害者の診療の実態と急性期の心理的介入の検討. 第 9 回日本トラウマティック・ストレス学会シンポジウム「性暴力被害者の支援—最近の課題」, 神戸, 2010.3.7.
 - 10) 金 吉晴, 中島聡美 : 持続エクスポージャー法の原理と, 非定形 PTSD 症状への応用. 第 9 回日本トラウマティック・ストレス学会シンポジウム「トラウマ記憶へのエクスポージャー」, 神戸, 2010.3.7.
 - 11) 栗山健一, 曾雌崇弘, 本間元康, 金 吉晴 : 睡眠剥夺は高次皮質の活動減少により恐怖情動反応を減弱させる日本睡眠学会第 35 回定期学術集会, 名古屋, 2010.7.1. (ポスター), 2010.7.2 (口演).
 - 12) 本間元康, 曾雌崇弘, 金 吉晴, 栗山健一 : 右側背外側前頭前皮質活動は認知課題遂行中の自己覚醒能力を反映する: 機能的近赤外分光法を用いて. 日本睡眠学会第 35 回定期学術集会, 名古屋, 2010.7.2. (ポスター).
 - 13) 金 吉晴 : PTSD の持続エクスポージャー療法. 第 11 回認知行動療法研修会, 愛知, 2010.9.23.
 - 14) 金 吉晴 : 現在の精神科医が「てんかん」から学びたいこと. ワークショップ 2. 第 44 回日本てんかん学会, 岡山, 2010.10.15.
 - 15) 金 吉晴 : PTSD の病態と治療. 平成 22 年度新潟精神医学会, 新潟, 2010.10.23.
 - 16) 松岡 豊 : 魚油による心的外傷後ストレス障害予防への可能性. シンポジウム「脳栄養学・精神栄養学の最前線」第 64 回日本栄養・食糧学会大会, 徳島, 2010.5.21-23.
 - 17) 松岡 豊 : オメガ 3 系脂肪酸による心的外傷後ストレス障害の予防介入試験. 大塚賞受賞記念講演. 日本脂質栄養学会第 19 回大会, 愛知県, 2010.9.3.
 - 18) 松岡 豊 : 魚油による PTSD 予防への挑戦. 第 11 回八ヶ岳シンポジウム. 長野, 2010.9.26.
 - 19) 松岡 豊 : 日本総合病院精神医学会における「論文投稿および学会発表におけるプライバシー保護に関する倫理指針」. 倫理検討委員会セミナー, 第 51 回日本児童青年精神医学会総会, 群馬, 2010.10.29.
 - 20) 松岡 豊 : 臨床疑問設定と RCT・研究費取得「後期研修医合同研修会 : 若手が臨床研究を進めるには (司会: 秋山 剛)」。東京精神医学会第 91 回学術集会 / 第 5 回関東甲信越地区精神科後期研修医合同研修会. 東京, 2011.2.19.
 - 21) 中島聡美 : 日本の犯罪被害者支援の現状と課題. 第 9 回日本トラウマティック・ストレス学会教育講演, 神戸, 2010.3.6.
 - 22) 中島聡美 : 性暴力およびドメスティック・バイオレンス被害者の精神科受療の実態と精神科医療機関の果たすべき役割. シンポジウム 3 女性のトラウマに対する外来診療でのアプローチ. 第 10 回日本外来精神医療学会, 東京, 2010.7.25.
 - 23) 鈴木友理子, 秋山 剛 : 世界精神医学会アンチスティグマ・タスクフォースの活動の動向. 第 106 回日本精神神経学会, シンポジウム 31 精神科医の社会への関わり—診察室の外で精神科医に求められていること, 広島, 2010.5.19-22.
 - 24) 鈴木友理子 : 医学領域におけるトランスレーショナル研究や実施研究の状況 : 精神・神経医学領域において. 日本評価学会第 11 回全国大会 シンポジウム「成果志向型評価アプローチの新たな進化」, 兵庫県, 2010.11.28.
 - 25) 栗山健一 : 睡眠中と覚醒中の学習効果の質的差異—睡眠中の神経可塑性が学習に与える影響—. 日本睡眠学会, 第 35 回定期学術集会シンポジウム, 名古屋, 2010.7.1
 - 26) 栗山健一 : 睡眠と記憶・認知機能(S-8-2). 第 32 回日本生物学的精神医学会 シンポジウム 8, 福岡, 2010.10.8.
 - 27) 栗山健一 : 記憶から見た身体. 立教大学 SFR ミニシンポジウム 幻想の身体—自分の身体は本当に自分のものか? (パネリスト), 東京, 2010.12.5.
 - 28) 松村健太 : WS050 記憶心理学と臨床心理学のコラボレーションに向けて(2)—PTSD を巡る諸問題—

- 記憶心理学から見た PTSD の予防・治療方略. 日本心理学会第 74 回大会, 大阪, 2010.9.21.
- 29) 本間元康: 回避行動における同調現象. 第 74 回日本心理学会ワークショップ「神経心理学の新しい展望-社会的認知への仮説検証的アプローチ-」, 大阪, 2010.9.21.
- 30) 本間元康: 触知覚から見た身体. 立教大学 SFR ミニシンポジウム 幻想の身体-自分の身体は本当に自分のものか? (パネリスト), 東京, 2010.12.5.

(2) 一般演題

- 1) Ito M, Nakajima S, Shirai A, Konishi T, Kim Y, Shear K: Complicated Grief among General Japanese Population: Validity and Reliability of Brief Grief Questionnaire, World Congress of Behavioral and Cognitive Therapies, Boston, 2010.6.5.
- 2) Suzuki Y, Fukasawa M, Kim Y, Komagata K, Matsuda H, Someya T: Mental health status and associated socioeconomic factors among community residents: 1 year after Niigata Chuetsu-oki earthquake in Japan. The 13th international congress of International Federation of Psychiatric Epidemiology. Symposium, Kaohsing, Taiwan, 2011.3.30-4.2.
- 3) Fukasawa M, Suzuki Y, Kim Y, Komagata K, Matsuda H, Someya T: Social networks and its relationships with mental health one year after the Niigata Chuetsu-oki Earthquake. The 13th international congress of International Federation of Psychiatric Epidemiology. Poster presentation, Kaohsing, Taiwan, 2011.3.30-4.2.
- 4) Matsuoka Y, Nishi D, Yonemoto N, Hamazaki K, Matsumura K, Hashimoto K, Hamazaki T: Potential role of BDNF in the omega-3 fatty acid supplementation to prevent posttraumatic distress. 69th Annual Scientific Meeting of the American Psychosomatic Society, San Antonio, USA, 2010.3.9-12.
- 5) Matsumura K, Matsuoka Y: Cardiovascular activities during mental stress among fish eaters. 69th Annual Scientific Meeting of the American Psychosomatic Society, San Antonio, USA, 2010.3.9-12.
- 6) Ito M, Greenberg L: Intensive Case Analysis of Self-Soothing Process in Psychotherapy, 26th International Conference of Society for Exploration of Psychotherapy Integration, Florence, Italy, 2010.5.27-30. (Poster).
- 7) Ito M, Greenberg L, Iwakabe S, Pascual-Leone A: Compassionate Emotion Regulation: A task analytic approach to studying the process of self-soothing in therapy session, World Congress of Behavioral and Cognitive Therapies, Boston, 2010.6.5.
- 8) 松岡 豊, 西 大輔, 中島聡美, 金 吉晴: 事故後 PTSD の有病率が各国で異なる理由についての考察—乳児死亡率との相関—. 第 106 回日本精神神経学会総会, 広島, 2010.5.20-22.
- 9) 本間元康, 島崎みゆき, 小山さより, 金 吉晴, 栗山健一: 反応抑制の学習は睡眠ではなく概日変動に依存する. 第 17 回日本時間生物学会学術大会 東京, 2010.11.21.ポスター.
- 10) 栗山健一, 本間元康, 三島和夫, 金 吉晴: 習慣的睡眠時刻前後の恐怖記憶特性における性差. 第 17 回日本時間生物学会学術大会, 東京, 2010.11.21.ポスター.
- 11) 中島聡美, 中澤直子, 加茂登志子, 金 吉晴: 産婦人科医療現場における性暴力被害者の診療の実態. 第 39 回日本女性心身医学会学術集会, 埼玉, 2010.8.7.
- 12) 鈴木友理子, 深澤舞子, 中島聡美, 成澤知美, 浅野敬子, 金 吉晴: デルフィ法を用いた災害時の精神保健活動についてのガイドラインの改訂: 特に災害時こころのケアの直接支援のあり方について. 第 30 回社会精神医学会, 奈良, 2011.3.4-5.
- 13) 深澤舞子, 鈴木友理子, 中島聡美, 成澤知美, 浅野敬子, 金 吉晴: 日本における災害時の精神保健活動についてのガイドラインの作成とヨーロッパにおいて作成された TENTS ガイドラインとの比較. 第 30 回社会精神医学会, 奈良, 2011.3.4-5.

- 14) 西 大輔, 上原里程, 近藤真木, 松岡 豊: Resilience Scale 日本語版の信頼性と妥当性. 第 21 回日本疫学会学術総会, 北海道, 2011/1/21-22.
- 15) 柳 朋歌, 小西聖子, 中島聡美, 白井明美: 犯罪被害者の受ける二次被害の質的分析. 第 9 回日本トラウマティック・ストレス学会, 神戸, 2010.3.7. (ポスター).
- 16) 鈴木友理子, 深澤舞子, 駒形規左枝, 松田ひろし, 染矢俊幸: 中越沖地震 1 年後の地域住民の精神健康と社会経済的要因の検討. 第 69 回日本公衆衛生学会総会. 一般演題(ポスター), 東京, 2010.10.27-29.
- 17) 深澤舞子, 鈴木友理子, 駒形規左枝, 松田ひろし, 染矢俊幸: 中越沖地震 1 年後の住民のソーシャルネットワークの記述および精神健康度との関係. 第 69 回日本公衆衛生学会総会. 一般演題 (ポスター), 東京, 2010.10.27-29.
- 18) 深澤舞子, 鈴木友理子, 駒形規左枝, 松田ひろし, 染矢俊幸: 中越沖地震 1 年後の住民のソーシャルネットワークの記述および精神健康度との関係. 第 69 回日本公衆衛生学会, 東京, 2010.10. 29.
- 19) 本間元康, 小山慎一, 長田佳久, 栗山健一: 顔認知は理想方向にずれている. 第 8 回日本認知心理学会, 福岡, 2010.5.30.
- 20) 井田孝之, 板坂優希, 宮崎慎平, 小川充洋, 山越憲一, 田中志信, 野川雅道, 松村健太, 山越康弘, 廣瀬 元, 山越健弘: 多波長型光電脈波利用新規アルコールイグニッションインターロック装置開発に向けた基礎的検討. 日本生体医工学会北陸支部大会, 石川, 2010.12.11.

(3) 研究報告会

- 1) 金 吉晴: 遺体処理に関わる惨事ストレスの治療例. 第 7 回トラウマ治療研究会, 東京, 2011.2.4.
- 2) 金 吉晴: 健康危機発生時における地域健康安全に係る効果的な精神保健医療体制の構築に関する研究. 健康安全・危機管理対策総合研究事業研究報告会. 埼玉, 2011.2.21.
- 3) 中島聡美, 白井明美, 真木佐知子, 石井良子, 永岑光恵, 辰野文理, 小西聖子, 金 吉晴: 犯罪被害者遺族の精神健康とその回復に関連する因子の検討. 平成 21 年度国立精神・神経センター精神保健研究所研究報告会, 東京, 2010.3.15.
- 4) 中島聡美, 伊藤正哉, 石丸徑一郎, 白井明美, 小西聖子, 金 吉晴: 遷延性悲嘆障害の実態と危険因子に関する研究. 明治安田こころの健康財団 2009 年度研究助成成果報告会, 東京, 2010.7.24.
- 5) 松岡恵子, 小谷 泉, 山里道彦, 金 吉晴: 外傷性脳損傷者の自殺問題のとりえ方～インタビュー談話からの分析～. ヒューマンコミュニケーション基礎研究会(HCS), 東京, 2010.8.27-28.
- 6) 本間元康, 金 吉晴, 栗山健一: 作業記憶課題遂行中の自己覚醒能力: 機能的近赤外分光法を用いて. 第 13 回光脳機能イメージング研究会, 東京. 2010.7.24.
- 7) 栗山健一: 高次記憶と睡眠. 第 8 回睡眠学研究会, 秋田, 2011.2.12.

(4) その他

- 1) 松岡 豊: 日本脂質栄養学会第 19 回大会において大塚賞を受賞. 2010.9.3.
- 2) 松岡 豊: 第 23 回日本サイコオンコロジー学会総会において学会賞を受賞. 2010.9.24.
- 3) 松村健太: 平成 22 年度日本生体医工学会北陸支部大会研究奨励賞受賞. 受賞論文名: 多波長型光電脈波利用新規アルコールイグニッションインターロック装置開発に向けた基礎的検討. 石川, 2010.12.11.
- 4) 本間元康: 第 17 回日本時間生物学会優秀ポスター賞 「反応抑制の学習は睡眠ではなく概日変動に依存する」. 第 17 回日本時間生物学会学術大会, 東京, 2010.11.21.

C. 講演

- 1) Suzuki Y: Postnatal depression and associated parenting indicators among Vietnamese women. Nhan Dan Gia Dinh Hospital, Ho Chi Minh City, Vietnam. 2010.8.18.
- 2) Suzuki Y: Disaster mental health in Japan. TELL collaboration and disaster training, Tokyo,

- 2010.10.19.
- 3) Suzuki Y: Teaching modules in four countries (JP, UK, AUS, USA) Epidemiologic research in psychiatry. JICA Partnership Program Capacity Building Toward Evidence-Based Medicine, Fukushima, 2010.11.22.
 - 4) 金 吉晴: PTSD の病態と治療. 東京大学大学院医学系研究科, 東京, 2010.7.13.
 - 5) 金 吉晴: PTSD の病態と治療. 日本精神神経学会精神科専門医障害教育研修会, 神奈川, 2010.7.17.
 - 6) 金 吉晴: 知っておきたいトラウマ支援. H22 年度メンタルヘルス講座 I. 富山県民共生センター, 富山, 2010.9.7.
 - 7) 金 吉晴: 災害時の精神保健医療活動について. H22 年度精神保健福祉現任者研修会. 富山県民共生センター, 富山, 2010.9.7.
 - 8) 金 吉晴: PTSD の持続エクスポージャー療法. 第 11 回認知療法研修会. ウィンクあいち, 愛知, 2010.9.23.
 - 9) 金 吉晴: PTSD: 記憶と意識の病理. 第 11 回八ヶ岳シンポジウム. 蓼科三井の森セミナーハウス ケセラセラ, 長野, 2010.9.26.
 - 10) 金 吉晴: PTSD: 診断と治療に関する最近の知見. 東京精神医学会主催第 5 回専門医制度障害教育研修会, 東京, 2010.11.13.
 - 11) 鈴木友理子, 金 吉晴: 災害時の支援・こころのケア: 総論・組織的対応. 平成 22 年度自然災害等精神医療対応研修. 東京, 2011.1.21.
 - 12) 鈴木友理子, 金 吉晴: 災害時の支援・こころのケア: 初期対応. 平成 22 年度自然災害等精神医療対応研修. 東京, 2011.1.21.
 - 13) 金 吉晴: 「災害時やその後の身体・心のヘルスケア」. ニューージーランド地震被災者等のケアに係る「ヘルスケア対応緊急研修会」, 富山, 2011.3.10.
 - 14) 松岡 豊: 講師, MINI および評価尺度. 「自殺対策のための戦略研究」. 新規参加者研修会, 東京, 2010.4.3.
 - 15) 松岡 豊: 魚を食べてこころを元気に. 武蔵野大学平成 22 年度前期生涯学習講座, 三鷹, 2010.8.4.
 - 16) 松岡 豊: 臨床研究を行う人が知っておかなければならない倫理原則. 国立国際医療研究センター/ 必須化対応の認定対象講習会「臨床研究の実務と倫理」, 東京, 2010.8.27.
 - 17) 松岡 豊: 講師, 青魚を食べてこころを元気に. 高輪の会, 東京, 2010.10.23.
 - 18) 松岡 豊: ω 3 系脂肪酸—あまり知られていない精神健康への影響. 浜松児童精神薬理研究会, 静岡, 2010.11.26.
 - 19) 中島聡美: 複雑性悲嘆の概念と治療. 上智大学 日本グリーフケア研究所公開講座, 上智大学日本グリーフケア研究所, 兵庫, 2010.7.16.
 - 20) 中島聡美: 性暴力の被害者への支援のあり方. 犯罪被害者支援ハートフルサポート in 岡崎, 社団法人サポートセンターあいち, 愛知, 2010.11.17.
 - 21) 中島聡美: 犯罪被害者のこころのケア. 犯罪被害者支援啓発講演会, いばらき被害者支援センター, 茨城, 2011.1.22.
 - 22) 鈴木友理子: 生涯を通じた健康づくり: 成人期② (メンタルヘルス). 福島県立医科大公衆衛生学講義, 福島, 2010.5.28.
 - 23) 鈴木友理子: 公衆衛生学. 山形大学医学部医学科, 公衆衛生学講義, 山形, 2010.6.29.
 - 24) 鈴木友理子: 地域における災害後のこころのケア. 平成 22 年度災害時こころのケア専門研修会, 岩手, 2010.7.9.
 - 25) 鈴木友理子: メンタルヘルス・ファーストエイド: わが国での展開. 東京大学医学部医学科精神神経科メンタルヘルスリサーチコース, 東京, 2010.7.31.
 - 26) 鈴木友理子: 災害時の支援・こころのケア. 宮崎県臨床心理士会, 宮崎, 2010.11.14.

- 27) 鈴木友理子：日本における災害時の精神保健の疫学. 中国四川大地震復興支援こころのケア人材育成プロジェクト. 平成 22 年度中華人民共和国国別研修「(災害) 精神保健」, 兵庫県, 2010.12.2.
- 28) 鈴木友理子, 深澤舞子：新潟県中越沖地震 被災者こころと身体健康調査結果. 新潟県中越沖地震 3 年後調査結果報告会, 新潟, 2010.12.8.
- 29) 鈴木友理子：災害時のコミュニケーションの留意点. 平成 22 年度緊急災害対策派遣隊 (TEC-FORCE) 研修. 国土交通大学校. 東京, 2011.1.13.
- 30) 鈴木友理子：災害時のこころのケア活動における役割分担と連携. 平成 22 年度災害時こころのケア従事者養成研修会. 高知, 2011.1.26.

D. 学会活動

(1) 学会役員

- 1) Kim Y: World Psychiatric Association, Committee of psychopathology.
- 2) 金 吉晴：日本トラウマティック・ストレス学会, 常任理事.
- 3) 金 吉晴：日本精神神経学会, ガイドライン委員.
- 4) 金 吉晴：自殺予防学会, 理事.
- 5) 中島聡美：日本トラウマティック・ストレス学会, 理事.
- 6) 中島聡美：日本被害者学会, 理事. 企画委員
- 7) 鈴木友理子：日本精神神経学会, アンチスティグマ委員.
- 8) 栗山健一：日本時間生物学会, 評議員.

(2) 座長

- 1) Kim. Y (Chair): PL4-Japanese culture and its influence on children and their families. 20th IFP World congress of Psychotherapy, June16-19, 2010, Lutzern, 2010.6.18
- 2) Kim. Y (Chair): G09 Paper presentations, psychotraumatology, Businessraum 1. 20th IFP World Congress of Psychotherapy, Luzern, 2010.6.19.
- 3) Ito M, Greenberg, L, Iwakabe S, Goldman, R, Pascual-Leone A.: Self-soothing in Emotion-Focused Therapy, 26th International Conference of Society for Exploration of Psychotherapy Integration, Florence, Italy, 2010.5.27-30.
- 4) 金 吉晴: シンポジウム 8 認知行動療法と社会との接点, 第 106 回日本精神神経学会学術総会, 広島, 2010.5.20-21.
- 5) 金 吉晴：一般演題 (講演) 42 2-H-28~2-H-32 神経症性障害・PTSD. 第 106 回日本精神神経学会学術総会, 広島, 2010.5.20-21.
- 6) 金 吉晴：大規模災害や犯罪被害者等による精神科疾患の実態把握と介入手法の開発に関する研究. 厚生労働科学研究障害者対策総合研究成果発表会, 東京, 2011.1.27.
- 7) 鈴木友理子：第 69 回日本公衆衛生学会総会. 一般演題 (ポスター). 第 10 分科会 精神保健福祉, 東京, 2010.10.29.

(3) 編集委員等

- 1) Kim Y: Cognitive Neuropsychiatry, editorial board.
- 2) Kim Y: Psychopathology, editorial board.
- 3) Kim Y: Psychiatry and Clinical Neuroscience, field editor.
- 4) 金 吉晴：日本トラウマティック・ストレス学会, 編集委員長.
- 5) 金 吉晴：日本精神神経学会, 編集委員.
- 6) 松岡 豊：日本総合病院精神医学会学会誌「総合病院精神医学」編集副委員長.
- 7) 松岡 豊：日本サイコオンコロジー学会, ニューズレター編集委員.

E. 研修**(1) 研修企画**

- 1) 金 吉晴 : PTSD 医療研修, 国立精神・神経医療研究センター, 東京, 2010.7.22.
- 2) 金 吉晴 : 第 1 回うつ病認知行動療法研修. 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所, 東京, 2010.8.23-24.
- 3) 金 吉晴 : 平成 22 年度 PTSD 認知行動療法研修. 独立行政法人国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所, 東京, 2010.10.4-7.
- 4) 金 吉晴 : 企画委員長. PTSD 基本技能研修 (厚生労働省こころの健康づくり補助金事業). 東京, 2010.12.14-15.
- 5) 金 吉晴 : 主催. 国立精神・神経医療研究センター第 2 回うつ病認知行動療法研修. 東京, 2010.12.21-22.
- 6) 金 吉晴 : 第 3 回うつ病認知行動療法に関する技術研修. 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所, 東京, 2011.2.14-15.
- 7) 中島聡美 : 第 5 回犯罪被害者メンタルケア研修, 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所, 東京, 2011.1.17-19.

(2) 研修会講師

- 1) Nakajima S : Trauma and PTSD & Some Solutions. The Asian Postgraduate Course on Victimology and Victim Assistance. World Society of Victimology and the Tokiwa International Victimology Institute, Mito, Ibaraki, 2010.8.10.
- 2) 金 吉晴 : PTSD 医療研修, 国立精神・神経医療研究センター, 東京, 2010.7.22.
- 3) 金 吉晴 : うつ病概論. 第 1 回うつ病認知行動療法研修, 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所, 東京, 2010.8.23.
- 4) 金 吉晴 : 平成 22 年度 PTSD 認知行動療法研修. 独立行政法人国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所, 東京, 2010.10.4-7.
- 5) 金 吉晴 : PTSD の治療法と介入技法. JICA 研修, 兵庫, 2010.12.7
- 6) 金 吉晴 : ト라우マの概念と診断/PTSD 治療. PTSD 基本技能研修 (厚生労働省こころの健康づくり補助金事業), 東京, 2010.12.14.
- 7) 金 吉晴 : 精神療法のコミュニケーションスキル. 国立精神・神経医療研究センター第 2 回うつ病認知行動療法研修. 東京, 2010.12.21-22.
- 8) 金 吉晴 : 犯罪被害者メンタルケア研修. PTSD の治療. 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所, 東京, 2011.1.19.
- 9) 金 吉晴 : H22 年度厚生労働省こころの健康づくり補助金事業による PTSD 研修事業の講習会. 自然災害時のメンタルケアの基本方針. アルカディア市ヶ谷, 東京, 2011.1.21.
- 10) 金 吉晴 : CBT の治療効果とエビデンス. 第 3 回うつ病認知行動療法に関する技術研修. 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所, 東京, 2011.2.14.
- 11) 松岡 豊 : 研究倫理の基礎. 国立精神・神経センター2010 年度臨床研究研修制度 入門講座・倫理講座, 東京, 2010.7.30.
- 12) 松岡 豊 : 臨床研究論文の書き方. 国立精神・神経センター2010 年度臨床研究研修制度 実践講座, 東京, 2010.11.24.
- 13) 中島聡美 : 社会的援助と法的制度. 第 1 回 PTSD 医療研修. 平成 22 年度精神保健に関する技術研修, 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所, 東京, 2010.7.22.
- 14) 中島聡美 : 性暴力被害者の心理と支援. いばらき被害者支援センター平成 22 年度第 12 期被害者支援活動員養成講座, 茨城, 2010.8.4.

- 15) 中島聡美：犯罪被害者の心理と対応. 平成 22 年度ストーカー・配偶者暴力対策専科，関東管区警察大学校，東京，2010.10.12.
- 16) 中島聡美，伊藤正哉：犯罪被害者の心理と対応. 平成 22 年度ストーカー・配偶者暴力対策専科，関東管区警察大学校，東京，2010.10.12.
- 17) 中島聡美：犯罪被害者及び遺族への心理的ケア. 平成 22 年度被害者支援専科，警察大学校，東京，2010.10.25.
- 18) 中島聡美：犯罪被害者と PTSD. 平成 22 年度精神保健福祉専門研修 I，さいたま市こころの健康センター・埼玉県精神保健福祉センター，埼玉，2010.10.26.
- 19) 中島聡美：性暴力被害者のこころのケア. 平成 22 年度性暴力被害者のこころのケア研修会，岩手県精神保健福祉センター，岩手，2010.11.19.
- 20) 中島聡美：犯罪被害者の心理と治療・支援. 第 5 回犯罪被害者メンタルケア研修，国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所，東京，2011.1.17.
- 21) 小西聖子，中島聡美：犯罪被害者治療の実際. 第 5 回犯罪被害者メンタルケア研修，国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所，東京，2011.1.19.
- 22) 中島聡美：性暴力被害による精神的影響. 内閣府男女共同参画等研修，内閣府男女共同参画室，東京，2011.3.2.
- 23) 鈴木友理子，澤 大輔，佐藤玲子，加藤隆弘，橋本直樹，上原久美，神先 真：うつや自殺念慮/企図のある人に関するメンタルヘルスファーストエイドプログラム. 自殺予防学会ワークショップ，東京，2010.9.10.
- 24) 鈴木友理子：災害精神保健：行政の役割. JICA 四川大地震復興支援—こころのケア人材育成プロジェクト. 甘肅省天水市，2010.9.18.
- 25) 鈴木友理子：災害時こころのケアのあり方. JICA 四川大地震復興支援—こころのケア人材育成プロジェクト，甘肅省天水市，2010.9.19.
- 26) 鈴木友理子：女性の心理的問題：行政およびワーカーがすべきこと. JICA 四川大地震復興支援—こころのケア人材育成プロジェクト. 甘肅省天水市，2010.9.20.
- 27) 鈴木友理子：精神保健. 平成 22 年度短期研修 健康危機管理研修（実務編），埼玉，2010.10.7.
- 28) 白井明美：平成 22 年度厚生労働省こころの健康づくり補助金事業 PTSD 研修講師. 東京，2010.12.15.

F. その他

- 1) 金 吉晴：心的外傷後ストレス障害. 精神疾病論. 東京大学大学院医学系研究科精神保健学分野，東京，2009.5.14.
- 2) 金 吉晴：宮崎県口蹄疫に関するこころと身体のケア担当者会議，厚生労働省専門家派遣. 宮崎県庁および宮崎県精神保健福祉センター，宮崎，2010.7.12.
- 3) 金 吉晴：厚生労働省 WEB「みんなのメンタルヘルス総合サイト」「こころもメンテしよう」作成協力. 2010.9.
- 4) 金 吉晴：厚生労働省「HIV 遺族実態調査検討会」座長，2010.
- 5) 金 吉晴：第 1 回「原爆体験者等健康意識調査報告会」等に関する検討会. 厚生労働省，東京，2010.12.28.
- 6) 金 吉晴：国立精神・神経医療研究センター HP「東北地方太平洋沖地震メンタルヘルス情報サイト」開設，2011.3.14.
- 7) 栗山健一：M3.com 学会レポート ストレス後の急性不眠，恐怖反応消去の適応的意義？
<http://www.m3.com/academy/report/article/122527/>，2010.7.7 掲載.
- 8) 栗山健一：コメント【テストの科学】. 所さんの目がテン. 日本テレビ，2011. 1.15.放送

7. 精神薬理研究部

I. 研究部の概要

精神薬理研究部では、当センター中期目標における位置づけを明確化し研究を進めている。具体的には、わが国において重要な政策課題となっているうつ病と自殺予防に焦点を当て、精神薬理学をバックボーンとする研究手法を用い、政策立案に必須となる臨床疫学研究を実施するとともに、精神神経疾患の診断・評価法、治療介入法の研究開発を行っている。研究成果は、患者、健常成人、実験動物、培養細胞等を対象とした生物学的研究から得られた知見をベッドサイド、ひいては日常臨床へと相互にトランスレーションするための基盤となる。

精神薬理研究部には精神薬理研究室と気分障害研究室の2室が所属している。平成22年度の常勤研究員は部長の山田光彦と精神薬理研究室長の斎藤顕宜の2名であり、気分障害研究室は山田が兼任した。また、自殺予防総合対策センター適応障害研究室の稲垣正俊室長、大槻露華研究員、TMC情報管理・解析部生物統計解析室の米本直裕室長（当部併任）と密接に連携し研究を進めた。平成22年度終了時の流動研究員は、高橋 弘、岩井孝志の2名、科研費研究員は、山田美佐、外来研究員は、小高真美（精神・神経科学振興財団）であった。客員研究員は、白川修一郎、亀井淳三（星薬科大学薬物治療学教室教授）、長田賢一（聖マリアンナ医科大学神経精神科学教室講師）、林 直樹（都立松沢病院精神科部長）、岡 淳一郎（東京理科大学薬学部薬理学研究室教授）であった。研究生は、遠藤 香、杉山 梓、田島美幸、高原 円、中井亜弓、西岡玄太郎、廣瀬倫孝、渡辺恭江、実習生は、牧野祐哉であった。科研費研究助手は、越阪部勝江、櫻井恭子、松谷真由美、村松浩美であった。

II. 研究活動

1) 精神薬理研究室による基盤的創薬研究プロジェクト

グルタミン酸仮説、デルタ受容体仮説による病態モデル研究、行動薬理評価バッテリーの開発と非臨床試験への応用、新規抗うつ薬シーズの探索研究等を実施した。（山田光彦、斎藤顕宜、山田美佐、高橋 弘、岩井孝志、杉山 梓、牧野祐哉）

2) 気分障害研究室による臨床研究プロジェクト

一般診療科におけるうつ病治療モデルの確立のための研究（山田光彦、斎藤顕宜、小高真美）、うつ病の最適薬物治療戦略確立のための大型無作為化比較試験（2,000症例規模の実践的多施設共同無作為化比較試験：SUN◎D）（山田光彦、米本直裕）、うつ病の難治化を克服するための研究等を実施した。（山田光彦、斎藤顕宜）

3) J-MISP groupによる自殺予防研究プロジェクト

複合的自殺対策プログラムの自殺企図予防効果に関する地域介入研究（212万人規模の多施設共同非無作為化地域介入比較研究：NOCOMIT-J）、自殺企図の再発防止に対する複合的ケースマネジメントの効果（914名の自殺企図者を対象の多施設共同無作為化比較試験：ACTION-J）、ソーシャルワーカーに必要なスキルと研修プログラム研究：態度尺度研究等を実施した。（山田光彦、米本直裕、小高真美）

4) JGIDA groupによるゲノム医学を活用した精神疾患に対する個別化治療法の開発

薬剤に対する反応性・副作用に関連した遺伝子多型を同定し、精神疾患医療における個別化医療の実現、画期的治療薬開発そして発症脆弱性遺伝子解明を目指す研究を行った。（山田光彦）

III. 社会的活動に関する評価

1) 市民社会に対する一般的な貢献

- ・市民講座、保健所、地方自治体等における講演会、マスメディア等にて普及啓発（山田光彦、小高真美）
- ・平成22年度東京都福祉保健局・病院経営本部専門性向上研修：薬剤師「精神科領域の治療薬の薬理」。東京、2010.11.29。（山田光彦）
- ・第9回JMCAシンポジウム「うつと自殺問題を考えるーヘルスコミュニケーターの課題とは」NPO法人日本メディカルライター協会。東京、2010.11.25。（山田光彦）

2) 専門教育面における貢献

- ・日本精神神経薬理学会認定医・指導医・治験登録医、日本臨床薬理学会認定医として、昭和大学、星薬科

大学において精神医学の卒前卒後教育活動を実施 (山田光彦)

- ・東京理科大学において精神薬理学の卒前卒後教育活動を実施 (斉藤顕宜)
- ・ルーテル大学において精神保健の卒前卒後教育活動を実施 (小高真美)
- 3) 保健医療行政・政策に関連する研究・調査, 委員会等への貢献
- ・厚生労働省大臣官房厚生科学課戦略研究成果報告会. 東京, 2010.9. 6. (山田光彦)
- ・第 60 回厚生科学審議会科学技術部会. 東京, 2010.10. 15. (山田光彦)
- ・自殺予防総合対策センターと連携し内閣府及び厚労省の事業に貢献 (山田光彦)

IV. 研究業績

A. 刊行物

(1) 原著論文

- 1) Kodaka M, Tanaka S, Takahara M, Inamoto A, Shirakawa S, Inagaki M, Kato N, Yamada M: Misalignments of rest-activity rhythms in inpatients with schizophrenia. *Psychiatry and Clinical Neurosciences* 64(1): 88-94, 2010.
- 2) Kodaka M, Poštuvan V, Inagaki M, Yamada M: A systematic review of scales that measure attitudes toward suicide. *International Journal of Social Psychiatry* [Epub ahead of print], 2010.
- 3) Kobayashi H, Ujike H, Iwata N, Inada T, Yamada M, Sekine Y, Uchimura N, Iyo M, Ozaki N, Itokawa M, Sora I: The adenosine A2A receptor is associated with methamphetamine dependence/psychosis in the Japanese population. *Behavioral and Brain Functions* 6(50): 2-7, 2010.
- 4) Tsunoka T, Kishi T, Kitajima T, Okochi T, Okumura T, Yamanouchi Y, Kinoshita Y, Kawashima K, Naitoh H, Inada T, Ujike H, Yamada M, Uchimura N, Sora I, Iyo M, Ozaki N, Iwata N: Association analysis of GRM2 and HTR2A with methamphetamine-induced psychosis and schizophrenia in the Japanese population. *Prog Neuropsychopharmacol Biol Psychiatry*. 34(4): 639-644, 2010.
- 5) Kishi T, Kitajima T, Tsunoka T, Okumura T, Okochi T, Kawashima K, Inada T, Ujike H, Yamada M, Uchimura N, Sora I, Iyo M, Ozaki N, Iwata N: PROKR2 is associated with methamphetamine dependence in the Japanese population. *Prog Neuropsychopharmacol Biol Psychiatry*. 34(6): 1033-1036, 2010.
- 6) Ohtsuki T, Inagaki M, Oikawa Y, Saitoh A, Kurosawa M, Muramatsu K, Yamada M: Multiple barriers against successful care provision for depressed patients in general internal medicine in a Japanese rural hospital: a cross-sectional study. *BMC Psychiatry* 10: 30, 2010.
- 7) Yamada M, Shida Y, Takahashi K, Yamada M: Induction of the transcription factor Math2 and its target gene Prg1 after chronic treatment with selective serotonin reuptake inhibitors, sertraline and fluoxetine, in rat brain. *J Mental Health* 55:103-109, 2010.
- 8) Kishi T, Fukuo Y, Okochi T, Kitajima T, Kawashima K, Naitoh H, Ujike H, Inada T, Yamada M, Uchimura N, Sora I, Iyo M, Ozaki N, Iwata N: Serotonin 6 receptor gene is associated with methamphetamine-induced psychosis in a Japanese population. *Drug and Alcohol Dependence* 113(1): 1-7, 2011.
- 9) Takahashi K, Murasawa H, Yamaguchi K, Yamada M, Nakatani A, Yoshida M, Iwai T, Inagaki M, Yamada M, Saitoh A: Riluzole rapidly attenuates hyperemotional responses in olfactory bulbectomized rats, an animal model of depression. *Behavioural Brain Research* 216 : 46-52, 2011.
- 10) Saitoh A, Sugiyama A, Nemoto T, Fujii H, Wada K, Oka J, Nagase H, Yamada M: The novel δ opioid receptor agonist KNT-127 produces antidepressant-like and antinociceptive effects in mice without producing convulsions. *Behav Brain Res*. in press, 2011.
- 11) Hayashi N, Igarashi M, Imai A, Osawa Y, Utsumi K, Ishikawa Y, Tokunaga T, Ishimoto K, Harima H, Tatebayashi Y, Kumagai N, Nozu M, Ishii H, Okazaki Y: Psychiatric disorders and clinical correlates of suicidal patients admitted to a psychiatric hospital in Tokyo. *BMC Psychiatry* 10: 109, 2010.
- 12) Yamada M, Shida Y, Takahashi K, Yamada M: セルトラリン及びフルオキサセチンの慢性投与による転写因子 Math2 及びそのターゲット遺伝子 Prg1 のラット脳内発現誘導について: 精神保健研究 55: 103-109, 2010.

- 13) 小高真美, 福島喜代子, 岡田澄恵, 山田素朋子, 平野みぎわ, 島津屋賢子: 自殺危機初期介入スキル研究会「自殺危機初期介入スキルワークショップの開発とその効果に関する予備的研究」. 自殺予防と危機介入(31): 33-42, 2011.
- 14) 熊谷直樹, 向山晴子, 小高真美, 渡部恵子, 谷口禮二, 森泉旬子, 野津眞: 「障害福祉サービスなどにおける精神障害者の自殺と対策の課題—ある大都市近郊地域での事業所調査から」. 精神医学 52(12): 1193-1202, 2011.

(2) 総説

- 1) 稲垣正俊, 山田光彦, 神庭重信: 精神医学 Update-最新研究動向: うつ病・自殺対策における精神医学の役割. 別冊医学のあゆみ: 61-70, 2010.
- 2) 大槻露華, 稲垣正俊, 山田光彦: 大規模臨床研究を利用した遺伝子解析研究の意義と限界. 分子精神医学 10 (4): 291-298, 2010.
- 3) 中川敦夫, 山田光彦: うつ病治療における大規模臨床研究の意義と課題. 分子精神医学 10 (4): 262-268, 2010.
- 4) 米本直裕, 稲垣正俊, 山田光彦: 12 の抗うつ薬はどれも同じか?—マルチプルトリートメントメタアナリシスが開く新しいエビデンス—. 臨床精神薬理 13(10), 1975(147)-1986(158), 2010.
- 5) 山田光彦: 大規模臨床研究の意義と限界—特集に寄せて—. 分子精神医学 10 (4): 261, 2010.
- 6) 山田光彦, 稲垣正俊: わが国における自殺予防に関する政策. 臨床精神医学 39 (11): 1387-1393, 2010.
- 7) 山田光彦: 抗うつ薬の開発. こころの科学 in press, 2011.
- 8) 稲垣正俊: うつ病対策と自殺対策. 日本精神科病院協会雑誌 29(3): 40-44, 2010.
- 9) 稲垣正俊, 大槻露華: 精神保健・自殺問題の実践を科学する. 公衆衛生 74(9): 790(64)-794(68), 2010.
- 10) 稲垣正俊: 適応障害. 精神科治療学 25: 170-171, 2010.
- 11) 稲垣正俊: にせの薬が効く?—プラセボとはなにか. こころの科学 156(3): 89-93, 2011.
- 12) 稲垣正俊: 身体科と精神科との連携によるうつ病・自殺ハイリスク者の支援. 精神神経学雑誌 113(1): 94-101, 2011.

(3) 著書

- 1) 山田光彦, 斎藤顕宜: 精神科治療薬ハンドブック改訂6版. 上島国利編, 中外医学社, pp53-66, 200-232, 255-273, 293-346, 東京, 2010.
- 2) 山田光彦: 「精神科処方ノート(分担執筆)」第4版. 上島国利編, 中外医学社, 東京, pp252-259, 2010.
- 3) 加藤正明, 保崎秀夫, 三浦四郎衛, 大塚俊男, 浅井昌弘, 編集 飯森眞喜雄, 内山真, 大野裕, 鹿島晴雄, 濱田秀伯, 宮川香織, 山田光彦: 精神科ポケット辞典新訂版(第5刷). 弘文堂, 東京, 2010.
- 4) 山田光彦(分担執筆) 山口徹, 北原光夫, 福井次矢編: 自殺の予防, 今日の治療指針(2011年度版), 医学書院, 東京, 2011.

(4) 研究報告書

- 1) 山田光彦: 自殺対策のための複合的介入法の開発に関する研究(総括研究報告書). 平成22年度厚生労働省科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業). 研究代表者
- 2) 山田光彦: うつ病の最適治療ストラテジーを確立するための大規模多施設共同研究(総括研究報告書). 平成22年度厚生労働省科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業). 研究分担者
- 3) 山田光彦: 精神・神経・筋分野における治験・臨床研究の推進のための基盤整備に関する研究(総括研究報告書). 平成22年度厚生労働省科学研究費補助金.(医療技術実用化総合研究事業). 研究分担者

(5) その他

- 1) Sugiyama A, Saitoh A, Nemoto T, Fujii H, Oka J, Yamada M, Nagase H : KNT-127, a newly synthesized opioid-delta receptor agonist, produced antidepressant-like and antinociceptive effects, without epileptogenic effect in mice. *J Pharmacol Sci* 115 Suppl: pp71, 2011.
- 2) 吉野淳一, 石井千賀子, 久保恭子, 岩本喜久子, 小高真美, 辻井弘美, 木村睦, 遠藤勇司: 自死・自殺のあと遺された家族のたどるグリーフ・プロセスを理解するために(会議録). *家族療法研究* 27(1) : 67, 2010.

B. 学会・研究会における発表

(1) 学会特別講演, 教育講演, シンポジウム, ワークショップ, パネルディスカッション等

- 1) 小高真美, 稲垣正俊, Vita Poštuvan, 山田光彦: ソーシャルワーカーの個人的・職業的な経験と自殺に対する態度の関連.第 34 回日本自殺予防学会総会, 東京, 2010.9.9-11.
- 2) 山田光彦: 根拠に基づいた精神保健対策の実現と自殺予防. 第 38 回北陸公衆衛生学会特別講演, 富山, 2010.10.2.
- 3) 杉山 梓, 斎藤顕宜, 根本 徹, 藤井秀明, 長瀬 博, 山田光彦, 岡 淳一郎: 新規オピオイド δ 受容体作動薬 KNT127 のマウスを用いた鎮痛作用・抗うつ様作用の検討.第 4 回先端分子薬理研究会, 東京, 2010.11.20.
- 4) 竹島 正, 高橋祥友, 松本俊彦, 川野健治, 稲垣正俊 : (シンポジウム) 「自殺予防と精神保健医療の役割」身体科と精神科との連携によるうつ病・自殺ハイリスク者の支援. 第 106 回日本精神神経学会学術総会, 広島, 2010.5.21.
- 5) 仲秋秀太郎, 小川朝生, 稲垣正俊, 柏木雄次郎: サイコオンコロジーの今日的課題を「神経心理学」から考える. 第 23 回日本サイコオンコロジー学会 第 10 回日本認知療法学会 合同大会, 愛知, 2010. 9. 25.
- 6) 山田美佐 : 「うつ病の治癒メカニズムの分子薬理学的研究」. トランスレーショナル・メディカルセンター 若手育成カンファレンス, 東京, 2010.5.7.
- 7) 福島喜代子, 小高真美, 岡田澄恵, 山田素朋子, 平野みぎわ, 島津屋賢子: 自殺危機初期介入スキルワークショップ「講師養成研修会」の実施方法についての研究, 第 34 回日本自殺予防学会総会, 東京, 2010.9.9-11.
- 8) 大隅貴美子, 津金麻実子, 石上磨里, 永井康雄, 岩井孝志, 岡 淳一郎, 木村英雄 : Polysulfide activates TRP channels and increases intracellular Ca²⁺ in astrocytes. *neuro2010*, 神戸, 2010.9.2-4.

(2) 一般演題

- 1) Poštuvan V, Kodaka M, Inagaki M, Yamada M: Attitudes toward suicide -How do we measure them? The 13th European Symposium on Suicide and Suicidal Behaviour, Rome, 2010.9.1-4.
- 2) Sugiyama A, Saitoh A, Nemoto T, Fujii H, Oka J, Nagase H, Yamada M: The novel delta-opioid receptor agonist KNT-127 produces antidepressant-like and antinociceptive effects in mice without producing convulsions. 第 84 回日本薬理学会年会, 横浜, 2011.3.22-24.
- 3) 稲垣正俊, 大槻露華, 小高真美, 酒井ルミ, 山田光彦 : (ポスター) 「気分障害」内科等の一般身体科医師のうつ病に対する態度. 第 106 回日本精神神経学会学術総会, 広島, 2010.5.20-22.
- 4) 稲垣正俊, 大槻露華, 斎藤顕宜, 及川雄悦, 黒澤美枝, 村松公美子, 山田光彦 : (ポスター) 「気分障害」一般病院の内科外来におけるうつ病有病率と主治医によるうつ病認識率.第 106 回日本精神神経学会学術総会, 広島, 2010.5.20-22.

- 5) 稲垣正俊, 大槻露華, 斎藤顕宜, 及川雄悦, 黒澤美枝, 山田光彦: (ポスター)一般病院内科外来における睡眠薬/抗不安薬処方に関連する要因の探索: うつ病診断に注目した検討. 第7回日本うつ病学会総会, 石川, 2010.6.11-12.
- 6) 杉山 梓, 斎藤顕宜, 根本 徹, 藤井秀明, 長瀬 博, 山田光彦, 岡 淳一郎: 新規オピオイドδ受容体作動薬 KNT127 のマウスを用いた鎮痛作用・抗うつ様作用の検討. 第4回先端分子薬理研究会, 東京, 2010.11.20.
- 7) 山田光彦, 稲垣正俊, 米本直裕: 自殺ハイリスク者を対象とする臨床試験での研究倫理とリスクマネジメント. 第31回日本臨床薬理学会年会, 京都, 2010.12.1-3.
- 8) 平 幸恵, 千田文枝, 岩淵恵美, 菅原恵美子, 及川雄悦, 稲垣正俊, 大槻露華: 臨床検査技師が施行するうつの心理検査. 平成22年度地域医療研究会「秋季集会」, 岩手, 2010.11.20.

(3) 研究報告会

- 1) 斎藤顕宜, 高橋弘, 稲垣正俊, 山田美佐, 岩井孝志, 山田光彦: うつ病のグルタミン酸仮説 ～モデル動物を用いた検討～. 第6回若手カンファレンス, 東京, 2010.11.5.
- 2) 斎藤顕宜, 稲垣正俊, 山田美佐, 高橋 弘, 岩井孝志, 杉山 梓, 牧野祐哉, 岡 淳一郎, 山田光彦: グルタミン酸神経調節薬 (リルゾール) のうつ病治療効果の作用機序の検討. 平成22年度精神・神経疾患研究開発費気分障害研究班合同報告会, 東京, 2010.12.2.
- 3) 大槻露華, 山田光彦: 大規模臨床研究を利用したうつ病遺伝子解析の意義と限界. 平成22年度精神・神経疾患研究開発費気分障害研究班合同報告会, 東京, 2010.12.2.

C. 講演

- 1) 山田光彦: 大うつ病の薬物療法の組み立て方-今日のエビデンスから明日のエビデンスへ-. 第16回(社)日本精神神経科診療所協会総会・学術研究会ランチョンセミナー, 神奈川, 2010.6.19.
- 2) 山田光彦: 根拠に基づいた精神保健対策の実現と自殺予防. 第38回北陸公衆衛生学会, 富山, 2010.10.2.
- 3) 稲垣正俊: 一般医療機関におけるうつ病へのアプローチ～身体疾患とうつ病・自殺の関係. 岩手県精神保健福祉センター主催 平成22年度自殺対策講演会, 岩手, 2010.5.28.
- 4) 稲垣正俊: 平成22年度「配偶者からの暴力被害者支援関係職員研修会」(自殺とDV)「自殺予防について」. 岩手県精神保健福祉センター, 岩手, 2010.7.6.
- 5) 稲垣正俊: 「うつ病・自殺予防対策の視点とそのための行動」. 自殺対策関係者研修会, 山形, 2010.9.28
- 6) 稲垣正俊: 「地域でできる自殺予防」～うつ病の早期発見とその対応～. 自殺・うつ対策医療従事者専門研修会, 大分, 2010.10.30.
- 7) 稲垣正俊: 自殺対策に係る地域の取組の重要性とその対策. 市町自殺対策主管課長・担当者等連絡会議, 広島, 2010.11.5.
- 8) 稲垣正俊: 自殺予防活動の計画・実施に必要な戦略. 自殺予防対策研修会, 福岡, 2010.11.12.
- 9) 稲垣正俊: 地域でできる自殺予防対策～かかりつけ医と連携したうつ病の早期発見とその対応. 自殺予防対策研修会, 大分, 2010.11.13.
- 10) 稲垣正俊: 一般医療機関におけるうつ病へのアプローチ～身体疾患とうつ病の関係～. 医療保健関係者のためのうつ・自殺対策講演会, 岩手, 2010.11.17.
- 11) 稲垣正俊: うつ病についての基礎知識～身体疾患とうつ病の関係～. 平成22年度保健推進員等研修会, 岩手, 2010.11.18.
- 12) 稲垣正俊: 一般医療機関におけるうつ病へのアプローチ～身体疾患とうつ病・自殺の関係～. 平成22年度一関地域保健医療等関係者研修会, 岩手, 2010.11.24.
- 13) 稲垣正俊: 一般医療機関におけるうつ病へのアプローチ. 平成22年度自殺対策にかかる看護職研修会, 岩手, 2010.12.4.

- 14) 稲垣正俊：実効的な自殺対策事業を考える～エビデンス、モニタリング、評価システム～. 平成 22 年度自殺対策企画研修会, 愛知, 2010.12.9.
- 15) 稲垣正俊：うつ病診療と自殺予防. 東久留米市医師会, 東京, 2011.1.14
- 16) 稲垣正俊：うつ病を中心とした「心の病」について等. 寝たきり予防講習会, 千葉, 2011.1.17.
- 17) 稲垣正俊：うつ病についての基礎知識～身体疾患とうつ病の関係～. 平成 22 年度花巻地区民生委員児童委員研修会, 岩手, 2011.1.19.
- 18) 稲垣正俊：一般医療機関におけるうつ病へのアプローチ. 平成 22 年度二戸地区うつ・自殺予防対策かかりつけ医等関係者研修会, 岩手, 2011.2.14.
- 19) 稲垣正俊：平成 22 年度第 3 回自殺対策企画研修会 報告会での助言及び講評, 愛知, 2011.3.7.

D. 学会活動（学会主催，学会役員，座長，編集委員等）

(1) 学会役員

- 1) 山田光彦：日本薬理学会 評議員
- 2) 山田光彦：日本臨床精神神経薬理学会 評議員
- 3) 山田光彦：日本うつ病学会 評議員
- 4) 山田光彦：日本神経精神薬理学会 評議員
- 5) 山田光彦：Mayo Neuroscience Forum 地区幹事
- 6) 山田光彦：躁うつ病の薬理生化学的研究懇話会 幹事
- 7) 山田光彦：Japanese Genetics Initiative for Drug Abuse: JGIDA group 幹事
- 8) 斎藤顕宜：日本薬理学会 評議員

(2) 座長

- 1) 山田光彦：「大うつ病の薬物療法の組み立て方；今日のエビデンスから明日のエビデンスへ」座長, 第 16 回 (社) 日本精神神経科診療所協会総会, 横浜, 2010.6.19.
- 2) 山田光彦：「統計調査」座長, 第 34 回日本自殺予防学会, 東京, 2010.9.11.
- 3) 山田光彦：「抗うつ薬 (SSRI)」座長, 第 20 回日本臨床精神神経薬理学会/第 40 回日本神経精神薬理学会合同年会, 仙台, 2010.9.16.

(3) 学会誌編集委員等

- 1) 山田光彦：分子精神医学 編集同人
- 2) 山田光彦：日本神経精神薬理学会 広報委員
- 3) 山田光彦：日本生物学的精神医学会 広報委員
- 4) 山田光彦：日本臨床薬理学会 認定医
- 5) 山田光彦：日本臨床精神神経薬理学会 認定医
- 6) 山田光彦：日本臨床精神神経薬理学会 指導医
- 7) 山田光彦：日本臨床精神神経薬理学会 治験登録医
- 8) 山田光彦, 稲垣正俊：日本精神神経学会 専門医

E. 研修

(1) 研修企画

- 1) 川野健治, 松本俊彦, 稲垣正俊, 竹島 正：第 1 回心理職自殺予防研修. 東京, 2010.7.5-6.
- 2) 竹島 正, 松本俊彦, 川野健治, 稲垣正俊：第 4 回自殺総合対策企画研修. 東京, 2010.8.25-27.
- 3) 稲垣正俊, 竹島 正, 松本俊彦, 川野健治：第 1 回精神科医療従事者自殺予防研修, 東京, 2010.9.14-15.
- 4) 松本俊彦, 竹島 正, 川野健治, 稲垣正俊：第 1 回自殺予防のための自傷行為とパーソナリティ障害の理解と対応研修. 東京, 2010.11.8-9.
- 5) 竹島 正, 松本俊彦, 川野健治, 稲垣正俊：第 2 回精神科医療従事者自殺予防研修. 岡山, 2010.11.30-12.

(2) 研修会講師

- 1) 稲垣正俊：精神科診断と薬物療法の理解. 第1回心理職自殺予防研修. 東京, 2010.7.5.
- 2) 稲垣正俊：自殺と精神疾患. 第1回精神科医療従事者自殺予防研修, 東京, 2010.9.14.
- 3) 稲垣正俊：自殺と精神疾患. 第2回精神科医療従事者自殺予防研修. 岡山, 2010.11.30.

F. その他

- 1) 竹島 正, 川野健治, 稲垣正俊, 立森久照, 勝又陽太郎, 赤澤正人, 廣川聖子, 山内貴史：第2回メディアカンファレンスー薬物療法をめぐってー. 東京, 2010. 9. 27.

8. 社会精神保健研究部

I. 研究部の概要

社会精神保健研究部は昭和27年の国立精神衛生研究所創立時の5部の1つとしてスタートし、昭和61年の国立精神・神経センター統合の際に3研究室を有する社会精神保健部となり、平成22年に独立行政法人国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所社会精神保健研究部となった。

当研究部では、すべての国民が質の高い精神科医療をどの医療機関でも受けることができるように、医療機関の評価と医療の質の均てん化に関する多施設臨床研究を、高度専門医療センターにおける研究として進めている。具体的には、研究に関心のある臨床家が参画して、保健医療サービス研究の手法を用いて、身体疾患と精神疾患との融合領域研究、管理研究（医療の質に関する研究）および政策研究を実施している。社会精神保健研究部の所掌事項は「精神疾患と精神保健に関する社会文化的要因との関係」に関する調査及び研究を行うことである。

当研究部には、社会福祉研究室（野田寿恵 室長：平成19年4月着任）、社会文化研究室（伊藤弘人 部長併任）、家族・地域研究室（堀口寿広 室長）がある。また流動研究員（池野 敬：平成22年4月着任）および外来研究員（奥村泰之：平成21年9月着任）が当研究部に配属され、研究に従事してきた。なお臨床での問題意識からの多施設臨床研究を実施すべく、精神科・循環器科・内科医療に従事する専門家等が当研究部の研究に参画している（安齋達彦、五十嵐涼子、市倉加奈子、内山直樹、川畑俊貴、桑原和江、小山達也、佐藤 洋、清水沙友里、末安民生、杉山直也、西田淳志、平田豊明、福内友子、藤田純一、松岡志帆、三澤史斉、峯山智佳、安野史彦）。

II. 研究活動

1) 身体疾患と精神疾患に関する研究

- 循環器疾患：国立循環器病研究センター、久留米大学、日本医科大学、京都府立医科大学、名古屋大学、東京女子医科大学、早稲田大学、日本循環器心身医学会の専門家とともに、循環器疾患と精神疾患に関する研究計画の策定及び研究の実施（奥村泰之、桑原和江、横山広行、安野史彦、内山直尚、水野杏一、夜久 均、木村宏之、志賀 剛、鈴木 豪、鈴木伸一、笠貫 宏、伊藤弘人）
- 糖尿病：国立国際医療研究センター及び広島大学の専門家とともに、糖尿病と精神疾患に関する研究の実施（奥村泰之、野田光彦、峯山智佳、杉山雄大、佐伯俊成、高石美樹、伊藤弘人）
- 一般急性期病院における、向精神薬処方に関する研究、急性医薬品中毒患者に関する研究（清水沙友里、奥村泰之、伏見清秀、石川光一、松田晋哉、伊藤弘人）
- 身体疾患と精神疾患の外来患者の自己負担額に関する研究、病欠による疾病費用に関する研究（奥村泰之、伊藤弘人）
- 慢性疾患における多剤併用と副作用発現との関連に係る疫学調査の手法に関する研究、既存リソースの特徴の分析（池野 敬、石黒智恵子、内山直樹、奥村泰之、清水沙友里、福内友子、伊藤弘人）
- 統合失調症患者におけるQT間隔延長のリスク因子の解析（池野 敬、福内友子、伊藤弘人）

2) 薬剤処方・行動制限の最適化に関する研究（医療の質に関する研究）

- 精神科医療の質に関する国際的プラットフォームの開発（伊藤弘人）
- 日本フィンランド共同 隔離・身体拘束研究の実施・分析（野田寿恵、杉山直也、長谷川利夫、三宅美智、末安民生、伊藤弘人）
- eCODO センターシステムの開発（eCODO: 行動制限最適化データベースソフト）（野田寿恵、杉山直也、平田豊明、山下典生、伊藤弘人）
- 行動制限最小化看護研修 効果検討調査（野田寿恵、吉浜文洋、伊藤弘人）
- 精神科救急・急性期病棟の建築的空間構成の現状分析（渡部美根、野田寿恵、筧 淳夫、伊藤弘人）

- 隔離室使用時人的投入量調査の実施 (泉田信行, 野田寿恵, 杉山直也, 伊藤弘人)
- 統合失調症患者における再入院に関わる因子の検討 (内山直樹, 池野 敬, 伊藤弘人)

3) 政策研究 (自殺予防対策研究等)

- 自殺のハイリスク者の実態解明及び自殺予防に関する研究 (有賀 徹, 奥村泰之, 河西千秋, 川野健治, 佐伯俊成, 伊藤弘人)
- 精神障害者の喫煙の影響に関する研究 (奥村泰之, 小林未果, 伊藤弘人)
- うつ病の疾病費用に関する研究 (奥村泰之, 樋口輝彦, 伊藤弘人)

4) 家族・地域研究 (政策研究)

- 全国の地方公共団体から障害福祉施策における独自の取り組みについて調査を実施 (堀口寿広)
- 複数の地方公共団体の協力を得て、地域住民を対象としたソーシャルキャピタルの測定を実施 (堀口寿広)

Ⅲ. 社会的活動

1) 市民社会に対する一般的な貢献

- ・ 三鷹市子ども家庭支援ネットワーク加盟機関に対する助言 (堀口寿広)
- ・ 弁護人からの依頼により刑事司法精神鑑定の実施された被告人の鑑定結果に対する解説 (堀口寿広)

2) 専門教育面における貢献

- ・ 第3回精神科医療評価・均てん化研修 (野田寿恵, 伊藤弘人)
- ・ 千葉県指定知的障害者移動介護従業者養成研修課程講師 (堀口寿広)
- ・ 日本精神科病院協会研修会講師 (伊藤弘人)
- ・ 東京大学医学部医学科・防衛医科大学学生実習 (伊藤弘人)
- ・ 行動制限最小化看護研修会 (野田寿恵)

3) 保健医療行政政策に関連する研究・調査, 委員会等への貢献

- ・ 厚生労働省「今後の精神保健医療福祉のあり方に関する検討会」構成員 (伊藤弘人)
- ・ 厚生労働省「精神科医療に関する研究会」副座長 (伊藤弘人)

Ⅳ. 研究業績

A. 刊行物

(1) 原著論文

- 1) Kobayashi M, Ito H, Okumura Y, Mayahara K, Matsumoto Y, Hirakawa J: Hospital readmission and first-time admitted patients with schizophrenia: Smoking patients had higher hospital readmission rate than non-smoking patients. *International Journal of Psychiatry in Medicine* 40(3): 247-257, 2010.
- 2) Sawamura K, Ito H, Koyama A, Tajima M, Higuchi T: The effect of an educational leaflet on depressive patients' attitudes toward treatment. *Psychiatry Research* 177: 184-187, 2010.
- 3) Ito H: Changes in the remuneration system for psychiatric care in Japan. *Die Psychiatrie* 2011(8): 16-22, 2011.
- 4) Okumura Y, Higuchi T: Cost of depression among adults in Japan. *The Primary Care Companion for CNS Disorders* 13(3): e1-e9, 2011.
- 5) Okumura Y, Sakamoto S: Depression treatment preferences among Japanese undergraduates: using conjoint analysis. *International Journal of Social Psychiatry*. in press.

- 6) Okumura Y, Sakamoto S: Statistical power and effect sizes of depression research in Japan. *Psychiatry and Clinical Neurosciences*. in press.
- 7) 川島大輔, 川野健治, 伊藤弘人: 日本語版 Suicide Intervention Response Inventory (SIRI) 作成の試み. *精神医学* 52(6): 543-551, 2010.
- 8) 川島大輔, 川野健治, 小山達也, 伊藤弘人: 自死遺族の精神的健康に影響を及ぼす要因の検討. *精神保健研究*(56), 55-63, 2010.
- 9) 杉山直也, 野田寿恵, 川畑俊貴, 平田豊明, 伊藤弘人: 精神科救急病棟における行動制限一覽性台帳の臨床活用. *精神医学* 52(7): 661-669, 2010.
- 10) 泉田信行, 野田寿恵, 杉山直也, 伊藤弘人: 精神科急性期治療導入時の資源投入量に関する調査・検討. *精神医学* 52: 773-782, 2010.
- 11) 野田寿恵, 杉山直也, 松本佳子, 辻脇邦彦, 長谷川利夫, 伊藤弘人: 抑制手法への臨床姿勢質問票日本語版を用いた実態調査. *精神医学* 53: 65-72, 2011.
- 12) 松岡志帆, 奥村泰之, 市倉加奈子, 小林未果, 鈴木伸一, 伊藤弘人, 野田 崇, 横山広行, 鎌倉史郎, 野々木 宏: 心不全患者の終末期に対する心臓専門医と看護師の認識: ICD 認定施設の全国調査. *日本心臓病学会誌*. 印刷中.
- 13) 横田美根, 筧 淳夫, 野田寿恵, 杉山直也, 伊藤弘人: 精神科救急病棟の空間構成と隔離・身体拘束との関連. *精神医学* 53: 239-246, 2011.
- 14) 堀口寿広, 昆 かおり, 秋山千枝子: 広汎性発達障害の認知特性がある保護者に向けた医療機関における配慮. *臨床精神医学* 39(9): 1117-1125, 2010.
- 15) 田代信久, 堀口寿広: 試行的実施事業によるスクールソーシャルワーカーの活動報告—スクールソーシャルワーカーの活用に向けて—. *小児保健研究* 69(6): 823-829, 2010.

(2) 総説

- 1) Thornicroft G, Alem A, Dos Santos RA, Barley E, Drake RE, Gregorio G, Hanlon C, Ito H, Latimer E, Law A, Mari J, McGeorge J, Padmavati R, Razzouk D, Semrau M, Setoya Y, Thara R, Wondimagegn D. WPA guidance on steps, obstacles and mistakes to avoid in the implementation of community mental health care. *World Psychiatry* 9: 67-77, 2010.
- 2) Spaeth-Rublee B, Pincus HA, Huynh PT, Brown B, Rosen A, Durbin J, Goldbloom D, Lin E, Wiebe P, Griffiths H, Gaebel W, Zielasek J, Janssen B, Sommerlad K, Brogan C, Rogan M, Daly I, Ito H, Spronken P, Tromp J, Witte G, de Beer J, Chaplow D, McGeorge P, Silvestri F, Ruud T, Coia D, Cheng JJ, Adams N, Everett A, Parks J, Stuart P, Pincus H, Thompson K, Carroll C. Measuring quality of mental health care: a review of initiatives and programs in selected countries. *Can J Psychiatry* 55: 539-548, 2010.
- 3) Ito H, Setoya Y, Suzuki Y: Lessons learned in developing community mental health care in East and South East Asia. *World Psychiatry* (in press).
- 4) 伊藤弘人: 包括病棟での新規抗精神病薬使用と医療経済. *日本精神科病院協会雑誌* 30(3): 6-9, 2011.
- 5) 秋山千枝子, 堀口寿広: 幼児後期における発達・行動異常. *小児科* 51 (11): 1487-1491, 2010.

(3) 著書

- 1) 伊藤弘人: 自殺未遂者および自殺者遺族等へのケアに関する研究. 樋口輝彦, 高橋清久 監修: こころの健康と病気. 財団法人 精神・神経科学振興財団, 東京, pp59-66, 2010.
- 2) 野田寿恵: 4 医療カウンセリングの理論と実践, 統合失調症. 松原達哉 編集代表, 日本カウンセリング学会 編集協力: カウンセリング実践ハンドブック. 丸善株式会社, 東京, pp418-419, 2011.

(4) 研究報告書

- 1) 伊藤弘人, 三宅康史, 河西千秋, 松本俊彦, 川野健治, 野田光彦, 佐伯俊成, 横山広行, 安野史彦, 水野杏一, 内村直尚, 夜久均, 志賀剛, 山崎力, 鈴木伸一, 奥村泰之: 平成22年度厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業(精神障害分野))「自殺のハイリスク者の実態解明及び自殺予防に関する研究(研究代表者:伊藤弘人)」総括・分担研究報告書. 2011.
- 2) 伊藤弘人, 藤崎清道, 和田圭司, 河田晃伸, 江草賢治, 田中尚美: 平成22年度厚生労働省精神・神経疾患研究開発費「経営戦略に係る研究(主任研究者:伊藤弘人)」総括研究報告書. 2011.
- 3) 樋口輝彦, 稲垣中, 川上純一, 松田公子, 伏見清秀, 伊藤弘人: 平成22年度厚生労働科学研究費補助金(医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業)「慢性疾患における多剤併用と副作用発現との関連に係る疫学調査の手法に関する研究」総括・分担研究報告書. 2011.
- 4) 伊藤弘人, 朝日俊雄, 安齋達彦, 飯塚香織, 石田正人, 泉田信行, 今井佐知子, 奥村泰之, 小澤篤嗣, 柿島有子, 笕淳夫, 亀岡里美, 嘉山一壽, 北内力, 木村尚人, 木葉三奈, 坂田睦, 佐藤さやか, 修多羅巧和, 末安民生, 杉浦寛奈, 杉山直也, 多田野謙一, 樽谷精一郎, 辻脇邦彦, 富田敦, 戸村美名子, 仲野栄, 永岡知生, 西田淳志, 野田寿恵, 野田幸裕, 長谷川利夫, 畠山卓也, 平田豊明, 藤田純一, 松本佳子, 三澤史斎, 三宅美智, 宮本真巳, 森裕, 谷中昭一, 山内勇人, 山口時雄, 山下典生, 横田成史, 横田美根, 横森いづみ, 吉浜文洋: 平成22年度精神・神経疾患研究開発費「地域中心の精神保健医療福祉」を推進するための精神科救急及び急性期医療のあり方に関する研究(主任研究者:伊藤順一郎)」総括・分担研究報告書. 2011.
- 5) 中根允文, 伊藤弘人, 岡崎裕士, 川口貞親, 佐々木一, 白石弘巳, 新福尚隆, 鈴木満, 鈴木友理子, 竹島正, 中根秀之, 西田敦志: 平成22年度厚生労働科学研究費補助金(障害保健福祉総合研究事業)「精神障害者への対応への国際比較に関する研究(主任研究者:中根允文)」総括・分担研究報告書. 2011.

(5) 翻訳

- 1) 吉浜文洋, 杉山直也, 野田寿恵: 精神保健領域における隔離・身体拘束最小化—使用防止のためのコア戦略—邦訳にあたって. 精神科看護 37(6)(通巻213号): 52-56, 2010. (Kevin Ann Huckshorn: Reducing seclusion & restraint use in mental health settings, Core strategies for prevention. Journal of Psychosocial Nursing 42(9): 22-33, 2004)
- 2) 吉浜文洋, 杉山直也, 野田寿恵: 精神保健領域における隔離・身体拘束最小化—使用防止のためのコア戦略—第一部. 精神科看護 37(7)(通巻214号): 54-57, 2010. (Kevin Ann Huckshorn: Reducing seclusion & restraint use in mental health settings, Core strategies for prevention. Journal of Psychosocial Nursing 42(9): 22-33, 2004)
- 3) 杉山直也, 野田寿恵, 吉浜文洋: 精神保健領域における隔離・身体拘束最小化—使用防止のためのコア戦略—第二部. 精神科看護 37(7)(通巻215号): 49-53, 2010. (Kevin Ann Huckshorn: Reducing seclusion & restraint use in mental health settings, Core strategies for prevention. Journal of Psychosocial Nursing 42(9): 22-33, 2004)
- 4) 野田寿恵, 吉浜文洋, 杉山直也: 精神保健領域における隔離・身体拘束最小化—使用防止のためのコア戦略—第三部. 精神科看護 37(9)(通巻216号): 65-71, 2010. (Kevin Ann Huckshorn: Reducing seclusion & restraint use in mental health settings, Core strategies for prevention. Journal of Psychosocial Nursing 42(9): 22-33, 2004)

(6) その他

- 1) 伊藤弘人: キャッチメントエリアの意識の醸成と精神科医療の質の向上のために. PSYCHIATRIST14: 34-46, 2010.

- 2) 伊藤弘人：医療経済と診療報酬. 日本社会精神医学会雑誌 19(1), 143-144, 2010.
- 3) 伊藤弘人：これからの精神科病院への期待. 日本精神科病院協会雑誌 29(9) : 10-17, 2010.
- 4) 伊藤弘人：精神保健福祉法. 日本医療・病院管理学会 学術情報委員会 編：医療・病院管理用語事典 新版. 市ヶ谷出版社, 東京, 127, 2011.
- 5) 伊藤弘人：循環器疾患における末期医療に関する提言. 循環器病の診断と治療に関するガイドライン (2008-2009年度合同研究班報告).
- 6) 伊藤弘人：身体疾患に伴ううつ病. *Current Therapy* 29(3) : 67, 2011.
- 7) 伊藤弘人：新たな精神保健医療福祉に向けた取り組み. レフル7 : 7-8, 2011.
- 8) 高田修治, 野田寿恵, 野中浩幸：連載企画 “劇団” 行動制限プレゼンツ, 開放観察について考えてみよう, 第 5 回日本における開放観察の問題点. *精神科看護* 38(1) : 65-69, 2011.
- 9) 堀口寿広, 秋山千枝子：「こども相談室」方式による相談の費用と効果の検討. 第 57 回日本小児保健学会講演集 : 238, 2010.
- 10) 堀口寿広：保育および教育における相談活動の実施状況の年次変化. 第 57 回日本小児保健学会講演集 : 262, 2010.
- 11) 秋山千枝子, 堀口寿広, 橋本創一：保護者の「育てにくさ」と 1 歳半健診との関係. 第 57 回日本小児保健学会講演集 : 165, 2010.
- 12) 大塚ゆり子, 新後閑周二, 石川尉子, 下田恵子, 野崎佳枝, 渡邊直幸, 土屋正己, 秋山千枝子, 橋本創一, 堀口寿広：「育てにくさ」に寄り添うために—第 5 報—. 第 57 回日本小児保健学会講演集 : 165, 2010.
- 13) 桑原和江：循環器領域における性差医療に関するガイドライン. *Circulation Journal* vol.74 Supplement II 2010.

B. 学会・研究会における発表

(1) 学会特別講演, 教育講演, シンポジウム, ワークショップ, パネルディスカッション等

- 1) 伊藤弘人：精神科医療の将来性について. 社団法人日本精神科病院協会関東地区全体会シンポジウム, 東京, 2010.10.29.
- 2) 野田寿恵：行動制限最小化の現状を考える—隔離・身体拘束施行量調査から—. 第 25 回東京精神科病院協会学会, 東京, 2010.10.6.
- 3) 堀口寿広：地域相談ネットワークによる障害者の権利擁護の可能性. シンポジウム 共生社会に向けた地域相談ネットワーク作り, 東京, 2010.11.14.

(2) 一般演題

- 1) Sailas E, Putkonen H, Noda T, Lindberg N, Ito H, Joffe G: Staff attitudes towards schizophrenia, containment methods, ward atmosphere, and the use of seclusion and restraint. the 2nd Biennial Schizophrenia International Research Conference, Firenze, 2010.4.10-14.
- 2) 坂田 睦, 野田幸裕, 藤田純一, 西田淳志, 三澤史斉, 野田寿恵, 伊藤弘人：散剤処方による抗精神病薬投与量・投与剤数への影響. 第 106 回 日本精神神経学会学術総会, 広島, 2010.5.20.
- 3) 池野 敬, 奥村泰之, 桑原和江, 伊藤弘人：循環器, 糖尿病及びがんの専門医が有する精神疾患への態度と治療の相違 — 精神科病床を有する一般病院における全国調査 — . 第 48 回日本医療・病院管理学会, 広島, 2010.10.15.
- 4) 内山直樹, 池野 敬, 伊藤弘人, 栗原竜也, 木内祐二, 馬屋原 健, 松本善郎, 平川淳一：統合失調症患者における抗精神病薬と再入院の関連性. 第 48 回日本医療・病院管理学会, 広島, 2010.10.15.
- 5) 清水沙友里, 伊藤弘人, 伏見清秀：DPC データを用いた, 循環器疾患入院患者の精神疾患併発に関する分析. 第 48 回日本医療・病院管理学会, 広島, 2010.10.16.

- 6) 小島居 望, 石田重信, 山崎将史, 川口満希, 大内田昌直, 土生川光成, 今泉 勉, 伊藤弘人, 内村直尚: 循環器疾患における睡眠障害およびうつ症状に関する観察研究 (ポスター発表). 第 23 回日本総合病院精神医学会総会, 栃木, 2010.11.25-27.
- 7) 丸山恭子, 野田寿恵, 伊藤弘人, 久保田みち子, 大柄昭子, 等々力信子, 森田宏子, 小宅比佐子: 行動制限最適化データベースソフト「eCODO」を導入後の隔離・身体拘束の実態と効果. 第 64 回 国立病院総合医学会, 福岡, 2010.11.27.
- 8) 伊藤弘人: 地域精神医療・介護 1. 第 30 回日本社会精神医学会, 奈良, 2011.3.4.

(3) 研究報告会

- 1) 伊藤弘人, 野田寿恵: 分担研究の全体像について. 厚生労働省精神・神経疾患研究委託費「「地域中心の精神保健医療福祉」を推進するための精神科救急及び急性期医療のあり方に関する研究 (主任研究者: 伊藤順一郎)」平成 22 年度研究報告会, 東京, 2010.12.2.
- 2) 吉浜文洋, 三宅美智, 末安民生, Maarit Kinnunen, 野田寿恵, 伊藤弘人: 隔離施行時の看護ケアー日本とフィンランドの比較ー. 厚生労働省精神・神経疾患研究委託費「「地域中心の精神保健医療福祉」を推進するための精神科救急及び急性期医療のあり方に関する研究 (主任研究者: 伊藤順一郎)」平成 22 年度研究報告会, 東京, 2010.12.2.
- 3) 吉浜文洋, 三宅美智, 末安民生, 野田寿恵, 伊藤弘人: 隔離開始時の看護判断に関するインタビュー調査. 厚生労働省精神・神経疾患研究委託費「「地域中心の精神保健医療福祉」を推進するための精神科救急及び急性期医療のあり方に関する研究 (主任研究者: 伊藤順一郎)」平成 22 年度研究報告会, 東京, 2010.12.2.
- 4) 仲野 栄, 吉浜文洋, 柿島有子, 木葉三奈, 野田寿恵, 伊藤弘人: 行動制限最小化看護研修受講前後における隔離・身体拘束施行量. 厚生労働省精神・神経疾患研究委託費「「地域中心の精神保健医療福祉」を推進するための精神科救急及び急性期医療のあり方に関する研究 (主任研究者: 伊藤順一郎)」平成 22 年度研究報告会, 東京, 2010.12.2.
- 5) 杉山直也, 吉浜文洋, 野田寿恵, 伊藤弘人: 精神保健領域における隔離・身体拘束最小一使用防止のためのコア戦略ー. 厚生労働省精神・神経疾患研究委託費「「地域中心の精神保健医療福祉」を推進するための精神科救急及び急性期医療のあり方に関する研究 (主任研究者: 伊藤順一郎)」平成 22 年度研究報告会, 東京, 2010.12.2.
- 6) 杉山直也, Eila Sailas, 野田寿恵, 伊藤弘人: Visual Analogue Scale for Seclusion and Restraint (VAS for S/R) を用いた隔離・身体拘束施行患者の危険性評価. 厚生労働省精神・神経疾患研究委託費「「地域中心の精神保健医療福祉」を推進するための精神科救急及び急性期医療のあり方に関する研究 (主任研究者: 伊藤順一郎)」平成 22 年度研究報告会, 東京, 2010.12.2.
- 7) 野田寿恵, 杉山直也, 伊藤弘人: 隔離・身体拘束施行時間と患者特性の関連. 厚生労働省精神・神経疾患研究委託費「「地域中心の精神保健医療福祉」を推進するための精神科救急及び急性期医療のあり方に関する研究 (主任研究者: 伊藤順一郎)」平成 22 年度研究報告会, 東京, 2010.12.2.
- 8) 野田寿恵, 杉山直也, 平田豊明, 安齋達彦, 伊藤弘人: 「eCODO」センターシステムの開発. 厚生労働省精神・神経疾患研究委託費「「地域中心の精神保健医療福祉」を推進するための精神科救急及び急性期医療のあり方に関する研究 (主任研究者: 伊藤順一郎)」平成 22 年度研究報告会, 東京, 2010.12.2.
- 9) 坂田 睦, 野田幸裕, 野田寿恵, 伊藤弘人: 散剤処方による抗精神病薬投与量, 投与剤数への影響. 厚生労働省精神・神経疾患研究委託費「「地域中心の精神保健医療福祉」を推進するための精神科救急及び急性期医療のあり方に関する研究 (主任研究者: 伊藤順一郎)」平成 22 年度研究報告会, 東京, 2010.12.2.
- 10) 野田寿恵: フィンランド日本. 精神科急性期医療における隔離身体拘束. 第 17 回ヘルスリサーチフォーラム, 東京, 2010.11.6.

C. 講演

- 1) Ichikura K, Matsuoka S, Okumura Y, Kobayashi M, Suzuki S, Kuwahara K, Ito H, Noda T, Yokoyama H, Kamakura S, Nonogi H: Cardiologists' beliefs about psychosocial problems for patients with implantable cardioverter defibrillators: A national survey. International journal of behavioral medicine, Washington, 2010.8.4.
- 2) Toshie Noda: Ward characteristics of SAKURA in Finland and Japan & duration of seclusion/restraint in Japan. SAKURA seminar at Helsinki University Central Hospital. Helsinki, 2010.8.1.
- 3) Toshie Noda: General health care system & challenge to change psychiatric care in Japan. SAKURA seminar at Helsinki University Central Hospital. Helsinki, 2010.8.16.
- 4) 伊藤弘人: 対人保健における精神保健の考え方. 国立保健医療科学院平成 22 年度専門課程, 埼玉, 2010.6.30.
- 5) 伊藤弘人: 精神医療の機能分担と連携～精神科連携パスの展望～. 総研フォーラム精神保健医療福祉改革セミナー, 東京, 2010.8.21.
- 6) 伊藤弘人: クリニカルパスに関して. 日本精神科病院協会 第 30 回通信教育上級コース, 神奈川, 2010.10.4.
- 7) 伊藤弘人: 向精神薬および精神科に関連する医療安全. 平成 22 年度専門課程教育計画, 埼玉, 2011.1.13.
- 8) 伊藤弘人: クリニカルパスに関して. 通信教育「第 30 回上級コース」スクリーニング, 大阪, 2011.1.21.
- 9) 伊藤弘人: 精神科医療の今後の展望. The 2nd Janssen Medical Management Seminar 2010 in Fukuoka, 福岡, 2010.12.4.
- 10) 伊藤弘人: 日本における精神科医療の質の評価. 日本行動療法学会第 36 回大会大会企画シンポジウム 3, 愛知, 2010.12.6.
- 11) 伊藤弘人: 向精神薬および精神科に関連する医療安全. 平成 22 年度専門課程教育計画, 埼玉, 2011.1.13.
- 12) 伊藤弘人: クリニカルパスに関して. 通信教育「第 30 回上級コース」スクリーニング, 大阪, 2011.1.21.
- 13) 伊藤弘人: クリニカルパスに関して. 日本精神科病院協会 第 30 回通信教育上級コース, 大分, 2011.2.25.
- 14) 野田寿恵: 「eCODO (行動制限最適化データベースソフト)». 第 17 回精神科看護管理者研究会, 松山, 2010.2.6.
- 15) 堀口寿広: 地域相談ネットワークによる障害者の権利擁護の可能性. 北海道地域再生推進コンソーシアム 地域社会雇用創造事業「インターンシップ」就労希望コース (釧路一), 北海道, 2010.6.21.
- 16) 堀口寿広, 秋山千枝子: 「こども相談室」方式による相談の費用と効果の検討. 第 57 回日本小児保健学会, 新潟, 2010.9.18.
- 17) 堀口寿広: 保育および教育における相談活動の実施状況の年次変化. 第 57 回日本小児保健学会, 新潟, 2010.9.18.
- 18) 秋山千枝子, 堀口寿広, 橋本創一: 保護者の「育てにくさ」と 1 歳半健診との関係. 第 57 回日本小児保健学会, 新潟, 2010.9.17.
- 19) 大塚ゆり子, 新後閑周二, 石川尉子, 下田恵子, 野崎佳枝, 渡邊直幸, 土屋正己, 秋山千枝子, 橋本創一, 堀口寿広: 「育てにくさ」に寄り添うために—第 5 報—. 第 57 回日本小児保健学会, 新潟, 2010.9.17.
- 20) 堀口寿広: わかりづらい障害 発達障害とは?. 社会福祉法人コメント主催 第 9 回コメント友の会学習会, 東京, 2011.1.29.
- 21) 奥村泰之: データ解析環境 R 入門. 日本大学大学院国文学専攻 総合科目「フリーソフトウェアを用いた言語研究入門」, 東京, 2010.9.25, 10.2.

- 22) 奥村泰之, 相澤裕紀, 伊藤慎也: データ解析環境 R 中級編: 統計的検定の基礎. 社会言語科学会 2010年度冬期講習会, 東京, 2010.12.18.

E. 研修

(1) 研修企画

- 1) 伊藤弘人: 精神科医による精神障害者の身体管理. 平成 22 年度国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所第 4 回精神科医療評価・均てん化研修, 東京, 2010.6.14.
- 2) 伊藤弘人: 精神保健福祉の現状と今後の方向性—精神科病院を中心に—. POTA全国研修会, 神奈川, 2010.9.4.
- 3) 伊藤弘人: 精神科地域連携クリティカルパスモデル開発ワークショップ. 長野, 2011.2.15-16.
- 4) 野田寿恵: 行動制限最適化データベースソフト「eCODO」に関する説明. 松沢病院研修会, 東京, 2010.4.16.
- 5) 野田寿恵: 医療の質 行動制限・薬剤処方最適化とチーム医療 —行動制限調査研究から最適化を考える—. 平成 22 年度国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所第 4 回精神科医療評価・均てん化研修, 東京, 2010.6.14.
- 6) 野田寿恵: 海外の行動制限の現状. 平成 22 年度 行動制限最小化看護研修会Ⅱ, 社団法人日本精神科看護技術協会, 京都, 2010.9.26.

(2) 研修会講師

- 1) 野田寿恵: 「行動制限最適化データソフト【eCODO】」に関する説明. 都立松沢病院研修会, 東京, 2010.4.16.
- 2) 野田寿恵: 疾病と治療. 神奈川県立保健福祉大学 ゲストスピーカー, 神奈川, 2010.12.10.
- 3) 野田寿恵: 疾病と治療. 神奈川県立保健福祉大学 ゲストスピーカー, 神奈川, 2010.12.17.
- 4) 野田寿恵: 疾病と治療. 神奈川県立保健福祉大学 ゲストスピーカー, 神奈川, 2010.12.24.
- 5) 堀口寿広: 障害・疾病の理解. 千葉県指定知的障害者移動介護従業者養成研修, 千葉, 2010.6.20.
- 6) 堀口寿広: 障害・疾病の理解. 柏市指定知的障害者移動介護従業者養成研修, 千葉, 2010.11.7.
- 7) 堀口寿広: 障害・疾病の理解. 千葉県指定知的障害者移動介護従業者養成研修, 千葉, 2010.11.13.
- 8) 堀口寿広: 障害・疾病の理解. 千葉県知的障害者移動介護従業者養成研修, 千葉, 2011.2.6.

F. その他

- 1) 伊藤弘人: 日本精神科病院協会アドバイザーボード委員
- 2) 伊藤弘人: 今後の精神科医療の動向. 一般公開ホームページ「精神科医療情報総合サイト e-らぼ〜る, 2010.
- 3) 伊藤弘人: 私ならこうする「循環器疾患とうつ病」. うつと不安の情報誌「D-Plus」13号, 2011.
- 4) 野田寿恵: 隔離・拘束使用防止のための介入技術“Six Core Strategies”の紹介およびデータ利用について. 一般公開ホームページ「精神科医療情報総合サイト e-らぼ〜る, 2011.

9. 精神生理研究部

I. 研究部の概要

研究部および研究室の研究目的

精神生理研究部では、睡眠、意識、認知、感情、意欲等の精神活動を脳科学的にとらえ、その制御メカニズムを明らかにし、これら生理機能の調節障害に基づく各種の睡眠・覚醒障害、気分障害、認知症、神経症・心身症などの病態と治療法を解明することを目的としている。そのために、精神生理学、時間生物学、分子生物学、神経内分泌学、脳機能画像技術などの手法を用いて、学際的な研究を進めている。

部長1名、室長2名に加え、流動研究員2名、外来研究員1名（厚生労働科学研究リサーチレジデント）、科研費研究員3名、協力研究員9名が研究に携わった。これら研究員と国立精神・神経医療研究センター内外の研究・治療協力施設の客員研究員および協力研究者との連携のもとに研究を進めている。

研究者の構成

部長：三島和夫。精神機能研究室長：肥田昌子。臨床病態研究室長：守口善也。流動研究員：榎本みのり、北村真吾。外来研究員：村上裕樹（厚生労働科学研究リサーチレジデント）。科研費研究員：渡邊真紀子、野崎健太郎、片寄泰子。協力研究員：阿部又一郎、梶達彦、関口夏奈子、宗澤岳史、渋井佳代、古田光、草薙宏明、三益亜美、田村美由紀。併任研究員：亀井雄一（センター病院）、塚田恵鯉子（同）、早川達郎（国立国際医療センター）。客員研究員：樋口重和（九州大学）、筒井孝子（国立保健医療科学院）、井上雄一（財：神経研究所）、内山真（日本大学）、兼板佳孝（日本大学）、遠藤拓郎（スリープクリニック調布）、大川匡子（滋賀医科大学）、松浦雅人（東京医科歯科大学）、海老澤尚（東京警察病院）、山寺博史（杏林大学）、田ヶ谷浩邦（北里大学）、白川美也子（昭和大学）、本多真（東京都医学研究機構）、上田泰己（理化学研究所）。

II. 研究活動

精神生理研究部では、厚生労働科学研究費、文部科学省科学研究費等の公的研究費を中心とした競争的研究資金をもとに、下記のような研究に取り組んでいる。研究課題は睡眠覚醒障害、気分障害、生体リズム障害の病態生理に関する基盤的研究から、精神疾患に関わる情動・認知障害のメカニズムの脳科学的解明研究とその臨床応用、臨床疫学等をもとにした医療行政研究、新規診断法・新規治療法の開発と医療現場への展開をめざしたトランスレーショナル研究まで幅広い分野にわたり、国立精神・神経医療研究センター内外の共同研究者との連携のもとに長期的展望をもって進めている。研究成果を国内、国際学会に発表し、刊行物として発刊した。以下に主たる研究課題を列記する。

1. 睡眠障害患者の QOL を改善するための科学的根拠に基づいた診断治療技術の開発（厚生労働科学研究費補助金 障害者対策総合研究事業）
睡眠障害の臨床転帰が向上しない主因である QOL 障害の臨床特徴と病態生理を解明し、診断精度の高い睡眠障害用 QOL 評価尺度を開発するとともに、現行の薬物療法の問題点を検証し QOL 改善に資する効果的な不眠治療プログラムの作成を目的とした。（主任研究者：三島和夫、分担研究者：守口善也、肥田昌子）
2. 睡眠障害治療薬の臨床試験及び評価方法のあり方に関する研究（厚生労働科学研究費補助金 医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業）
睡眠薬の開発と臨床試験を支援するため、日米 EU 医薬品規制調和国際会議ガイドライン、米国医薬食品局及び欧州医薬品審査庁の見解と同局から発出された既存の臨床評価ガイドラインも精査し、米国国立衛生研究所の臨床試験登録データベース、公表論文等も活用することで、新たに「睡眠薬の臨床評価方法に関するガイドライン」を策定した。（主任研究者：三島和夫）

3. 1歳からの広汎性発達障害の出現とその発達的变化：地域ベースの横断的および縦断的研究（厚生労働科学研究費補助金 障害者対策総合研究事業）
学童期における睡眠問題の実態を把握するため、全国10地域の小中学校に在籍する小中学生の保護者25,779名を対象として睡眠習慣および睡眠障害に関する質問紙調査を行った。（分担研究者：三島和夫）
4. 高齢者に対する向精神薬の使用実態と適切な使用方法の確立に関する研究（厚生労働科学研究費補助金 長寿科学総合研究事業）
約33万人分の診療報酬データを用いて、2005年～2009年の5年間の向精神薬の処方率とその経年的変化、向精神薬の転倒骨折罹患に対するリスクを評価した。（主任研究者：三島和夫）
5. 健康づくりのための休養や睡眠の在り方に関する研究（厚生労働科学研究費補助金 循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業）
健康づくりのための休養や睡眠の在り方についての指針の改定や、健康づくりのための休養、睡眠に関する正しい知識の普及啓発のため、各種の縦断的疫学調査等を行い、休養指針と睡眠指針を基盤とした休養・睡眠の自己調節プログラムを開発した。（分担研究者：三島和夫）
6. リアルタイムfMRIによる脳機能画像を用いた、ストレス関連疾患の治療法に関する研究（厚生労働科学研究費補助金 障害者対策総合研究事業）
脳機能画像を用いたニューロフィードバックシステムを用いて、不安障害等での情動コントロールを目的としたトレーニングシステムの構築を目指した。通常のfMRI撮像により不安・恐怖などに関わる脳内のネットワークのデータを採取し、さらにリアルタイムで脳活動情報をフィードバックするシステムのプログラム作成した。（主任研究者：守口善也）
7. 睡眠障害・生体リズム障害の新規治療薬候補物質の探索（厚生労働科学研究費補助金 創薬基盤推進研究事業）
複雑な生命現象をつかさどる遺伝子群の発現制御に重要な役割を担うタンパク質間の相互作用を標的として構築された低分子化合物ライブラリーをスクリーニングし、睡眠障害・生体リズム障害の病態生理の背景に存在する生物時計機能に作用する候補物質を探索した。（主任研究者：肥田昌子）
8. 睡眠・覚醒リズム障害の迅速かつ高精度な病態診断システムの開発（文部科学省科学研究費補助金 基盤研究（B））
健常被験者を対象として、隔離実験により精密に生物時計周期 τ を決定し、各被験者から樹立した初代培養細胞における概日リポーター遺伝子発光リズム周期との間に正の相関を示していることを確認した。末梢細胞における時計遺伝子発現リズム測定は、個人の生物時計 *in vitro* 評価法として有用であることが示唆された。（主任研究者：三島和夫、分担研究者：肥田昌子）
9. 身体疾患を持つ高齢者における睡眠障害及び睡眠医療の実態調査（文部科学省科学研究費補助金若手（B））
全国43病院の急性期病棟539名の患者を対象に睡眠障害スクリーニング調査を行った。小型活動量計の睡眠覚醒判定アルゴリズムを作成し調査に供した。調査の結果、身体疾患をもつ高齢患者の62.7%に不眠症、6.9%に重度の眠気、12.8%にその他の睡眠障害が認められた。睡眠の問題のない患者はわずか13.8%であった。（主任研究者：榎本みのり）

10. 脳機能画像解析と生体生理指標の同時計測による心身相関メカニズム解明（文部科学省科学研究費補助金 基盤研究（C））
 機能的磁気共鳴画像(fMRI)を用いて、電氣的疼痛刺激時の海馬の脳活動が、刺激前の予期不安による修飾を受け、さらにその痛み増幅のネットワークが、慢性的な身体化傾向と関連することを示し、疼痛性障害をはじめとした心身症等の症状のメカニズムの一端を明らかにした。（分担研究者：守口善也）
11. 躁うつ病における Wnt シグナル系と生物時計システム（文部科学省科学研究費補助金若手（B））
 健常成人被験者から樹立した初代線維芽培養細胞に概日リポーター遺伝子を導入し、培養細胞中における概日リポーター遺伝子発光リズムを測定した。Wnt シグナル系の選択的阻害化合物の投与により、培養細胞中のリポーター遺伝子発光リズムが阻害されたことから、Wnt シグナル系が時計遺伝子発現リズム形成に関わることが示唆された。（主任研究者：肥田昌子）
12. ヒト網膜のメラノプシンの遺伝子多型およびその機能的役割の解明（文部科学省科学研究費補助金 挑戦的萌芽研究）
 色覚異常のない健常若年者に対して、白色蛍光灯を用いた室内照明下での薄明視と明所視における瞳孔面積を測定し、被験者のメラノプシン遺伝子多型間で比較を行った。その結果、光に対する瞳孔反応は照度によって異なり、メラノプシン遺伝子多型が瞳孔調節反応に影響を及ぼしている可能性が示唆された。（分担研究者：肥田昌子）
13. 光の生理心理作用の脳内機序と健康リスクへの適応（文部科学省科学研究費補助金 基盤研究（B））
 光に対する生体反応の個体差の生理的基盤を明らかにするため、健常若年成人を対象として網膜の耳側と鼻側に LED 光を照射した結果、赤色光と青色光に共通してメラトニン抑制量では差がみられず瞳孔の縮瞳量で有意な差がみられたことから、錐体の密度分布を反映した結果と考えられた。また網膜の耳側的一部分で青色光が赤色光に比べて縮瞳が有意に大きく、この違いはメラノプシンの密度分布を反映している可能性が示唆された。（分担研究者：北村真吾）
14. 睡眠医療における医療機関連携ガイドラインの有効性検証に関する研究（開発費（委託費））
 2005年～2009年の5年間の日本国内における睡眠薬の処方率とその経年的変化を調査した。この5年間で睡眠薬の推定処方率および1日あたりの処方力価は増加していること、睡眠薬処方患者の27.3%が長期化していることを明らかにした。（主任研究者：三島和夫）
15. 体[睡眠・リズム]とこころの恒常性維持及び破綻機構の遺伝子環境相互作用に関する研究（脳科学研究戦略推進プログラム）
 健常被験者の皮膚繊維芽細胞に時計遺伝子リポーターアルシフェラーゼ遺伝子を導入し、時計遺伝子の発現プロファイルをリアルタイム測定するシステム（末梢時計診断システム）を確立した。光同調時における時計遺伝子転写発現制御にかかわるシグナルパスウェイを明らかにするため、概日時計リポーター遺伝子マウスの培養切片を用いて、明暗サイクル同調時の中枢および末梢時計遺伝子の発現リズム特性を検討した。さらに、健常者を対象として睡眠負債時の不快な情動誘発刺激に対する過剰反応とその脳内責任領域を明らかにするための脳機能画像研究を行った。（担当責任者：三島和夫）
16. 向精神薬の処方実態に関する国内外の比較研究（厚生労働科学研究費補助金（特別研究事業））
 大規模診療報酬データから、日本国内における向精神薬の処方実態を明らかにした。安全性に優れた治療ストラテジーや長期処方を回避するための減薬方法を含め、適正使用に関するガイドラインを整

備する必要を示した。(分担研究者：三島和夫)

Ⅲ. 社会的活動に関する評価

1) 市民社会に対する一般的な貢献

各研究員は、都民・市民のための公開講座、講演会などにおいて睡眠と健康づくり、睡眠障害および関連する健康問題などについての普及啓発に努めた。NHK テレビ、民放テレビ、ラジオ、新聞、雑誌等のメディアを通して、睡眠習慣および睡眠問題の重要性について普及啓発活動を行った。

2) 専門教育面における貢献

各研究員は、国内各地の学術集会、研究会、談話会、医師会講演会などで睡眠障害、気分障害、認知症の睡眠行動障害等の治療と予防について講演した。また、東京医科歯科大学、滋賀医科大学、早稲田大学、秋田大学など教育機関の非常勤講師として学生教育の援助を行った。また、日本睡眠学会、日本時間生物学会、日本生物学的精神医学会、不眠研究会、睡眠学研究会、関東睡眠障害懇話会、日本生理人類学会などにおける理事、評議員、世話人としての活動を通じて睡眠障害診療従事者の研究及び教育のサポートを行った。国際老年精神医学会、米国睡眠学会、ヨーロッパ睡眠学会、国際時間生物学会等、等において講演者、シンポジスト、オーガナイザーとして研究成果を発表し、各国の第一線の研究者達と意見交換を行った。

3) 保健医療行政・政策に関連する研究・調査、委員会等への貢献

三島和夫は、国民健康・栄養調査企画解析検討会構成員として、同調査の項目策定と調査実行に関わった。厚生労働省の要介護者の継続的評価分析支援事業の調査項目策定および新規要介護認定の項目策定及び要介護認定調査員指導者研修に関わった。厚労省薬事・食品衛生審議会において専門協議委員、参考人として複数の新薬の審査にたずさわった。

4) その他

研究員は、国立精神・神経医療研究センター病院において睡眠障害専門外来を開設し、専門的診療を行った。複数の新規睡眠薬の臨床治験に関わった。複数の企業から要請された治療薬剤および診断機器の安全性、有効性、機能向上に関する受託研究に関わった。

Ⅳ. 研究業績

A. 刊行物

(1) 原著論文

- 1) Moriguchi Y, Negreira A, Weierich M, Dautoff R, Dickerson B, Barrett LF: Differential hemodynamic response in affective circuitry with aging: An fMRI study of novelty, valence, and arousal. *J Cogn Neurosci* 23: 1-15, 2010.
- 2) Kaji T, Mishima K, Kitamura S, Enomoto M, Nagase Y, Li L, Kaneita Y, Ohida T, Nishikawa T, Uchiyama M: Relationship between late-life depression and life stressors: Large-scale cross-sectional study of a representative sample of the Japanese general population. *Psychiatry Clin Neurosci* 64: 426-34, 2010.
- 3) Aritake-Okada S, Higuchi S, Suzuki H, Kuriyama K, Enomoto M, Soshi T, Kitamura S, Watanabe M, Hida A, Matsuura M, Uchiyama M, Mishima K: Diurnal fluctuations in subjective sleep time in humans. *Neurosci Res* 68, 225-31, 2010.
- 4) Kitamura S, Hida A, Watanabe M, Enomoto M, Aritake-Okada S, Moriguchi Y, Kamei Y, Mishima K: Evening preference is related to the incidence of depressive states independent of sleep-wake conditions. *Chronobiol Int* 27: 1797-812, 2010.

- 5) Kuriyama K, Mishima K, Soshi T, Honma M, Kim Y: Effects of sex differences and regulation of the sleep-wake cycle on aversive memory encoding. *Neurosci Res* 27: 2011 (in press).
- 6) Abe Y, Mishima K, Kaneita Y, Li L, Ohida T, Nishikawa T, Uchiyama M: Stress coping behaviors and sleep hygiene practices in a sample of Japanese adults with insomnia. *Sleep and Biological Rhythms* 9:35-45, 2011.
- 7) Igarashi T, Komaki G, Lane RD, Moriguchi Y, Nishimura H, Arakawa H, Gondo M, Terasawa Y, Sullivan CV, Maeda M The reliability and validity of the Japanese version of the Levels of Emotional Awareness Scale (LEAS-J). *Biopsychosoc Med* 5:2, 2011.
- 8) 駒田陽子, 塩見利明, 三島和夫, 井上雄一: 運転免許保有者の居眠り運転に関連する要因についての検討. *日本公衆衛生雑誌* 57(12): 1066-74, 2010.

(2) 総説

- 1) 三島和夫: 【特集/睡眠を科学する】生体時計の老化 —睡眠・覚醒リズムの加齢変化の背景因子—. *ANTI-AGING MEDICINE* 6: 26-31, 2010.
- 2) 三島和夫: 睡眠と国民の健康. *精神科治療学* 25: 547-51, 2010.
- 3) 宗澤岳史, 三島和夫: 【特集2: 認知行動療法】不眠症に対する認知行動療法. *精神保健研究* 55: 71-8, 2009.
- 4) 三島和夫: 高照度光療法の理論と実際—冬期うつ病と睡眠・覚醒リズム障害. *日本医事新報* 4489: 74-5, 2010.
- 5) 三島和夫: メラトニン・メラトニン受容体アゴニストが生物時間に及ぼす影響. *睡眠医療 増刊号* 4: 184-94, 2010.
- 6) 三島和夫: 【特集: 睡眠学の発展を目指して】2.睡眠医歯薬学の発展に向けて 1) 精神科学の立場から. *睡眠医療* 4: 226-31, 2010.
- 7) 三島和夫: 【特集: 高齢者の睡眠障害をめぐって】睡眠の制御メカニズムとその加齢変化. *老年精神医学雑誌* 21: 939-49, 2010.
- 8) 三島和夫: 認知症の睡眠問題. *老年期認知症研究会誌(別冊)* 17: 109-13, 2010.
- 9) 三島和夫: 生活習慣病の治療と予防における睡眠医療のあり方. *医学のあゆみ* 236: 5-10, 2011.
- 10) 三島和夫: 高齢者の睡眠とその障害. *治療* 93(2): 205-11, 2011.
- 11) 三島和夫, 中林哲夫: 睡眠薬の臨床評価方法のあり方について. *臨床精神薬理* 14(3): 445-52, 2011.
- 12) 三島和夫: 日本における向精神薬の処方実態 —ベンゾジアゼピン系薬物を中心に. *医学のあゆみ* 236: 968-74, 2011.
- 13) 榎本みのり, 三島和夫: 季節とうつ病. *カレントセラピー* 29(3): 8-12, 2011.
- 14) 榎本みのり, 三島和夫: 睡眠障害をもつ患者のケアと専門医との医療連携. *PROGRESS IN MEDICINE* 30: 1527-31, 2010.
- 15) 守口善也: Neuroimaging の新展開; アレキシサイミアの脳画像研究. *心身医学* 51:141-150, 2011.

(3) 著書

- 1) 三島和夫: 睡眠障害. 田村 晃, 松谷雅生, 清水輝夫 編: 改訂第3版 *EBM に基づく脳神経疾患の基本的治療指針*. (株)メジカルレビュー社, 東京, pp613-8, 2010.
- 2) 三島和夫: 不眠症の病態生理学的特徴. 大川匡子, 三島和夫, 宗澤岳史 編: *不眠の医療と心理援助*. 金剛出版, 東京, pp34-45, 2010.
- 3) 宗澤岳史, 三島和夫: CBT-I を用いた睡眠薬の減薬・中止. 大川匡子, 三島和夫, 宗澤岳史 編: *不眠の医療と心理援助*. 金剛出版, 東京, pp166-74, 2010.
- 4) 三島和夫: メラトニンによる睡眠・生体リズムの調節. 太陽紫外線防御研究委員会 編: *からだど光の事典*. 朝倉書店, 東京, pp324-31, 2010.

- 5) 三島和夫：人工光環境が人睡眠・リズムへ及ぼす影響。太陽紫外線防御研究委員会 編：からだと光の事典。朝倉書店，東京，pp345-8，2010。
- 6) 三島和夫：概日リズム睡眠障害と眠気。井上雄一，林 光緒 編：眠気の科学—そのメカニズムとその対応—。朝倉書店，東京，pp158-72，2011。
- 7) 三島和夫：解説 不眠症。泉 孝英 編：今日の診療のために ガイドライン外来診療 2011。東京，日経BP マーケティング，pp376-80，2011。
- 8) 守口善也：7.心身症。福田正人，鹿島晴雄 編：前頭葉でわかる精神疾患の臨床。中山書店，東京，pp150-60，2010。

(4) 研究報告書

- 1) 研究分担者；兼板佳孝，三島和夫，研究協力者；池田真紀：日本人のストレス対処行動および余暇の過ごし方についての疫学研究。厚生労働科学研究費補助金 循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業「健康づくりのための休養や睡眠の在り方に関する研究」平成 22 年度 総括・分担研究報告書：pp67-80，2011。
- 2) 研究分担者；兼板佳孝，三島和夫：健康づくりのための休養指針（案）と休養実践のための啓発プログラム作成。厚生労働科学研究費補助金 循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業「健康づくりのための休養や睡眠の在り方に関する研究」平成 22 年度 総括・分担研究報告書：pp 93-103，2011。
- 3) 研究分担者；兼板佳孝，赤柴恒人，中路重之，内山 真，内村直尚，三島和夫，研究協力者；宗澤岳史，大井田 隆：休養指針案に必要となる休養と主観的健康感の関連についての疫学調査。厚生労働科学研究費補助金 循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業「健康づくりのための休養や睡眠の在り方に関する研究」平成 20 年度～平成 22 年度 総合研究報告書：pp16-33，2011。
- 4) 研究分担者；三島和夫，内山 真，兼板佳孝，研究協力者；有竹清夏，大井田 隆：非薬物的睡眠調節法と日中の過剰な眠気の関連性についての疫学的検討。厚生労働科学研究費補助金 循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業「健康づくりのための休養や睡眠の在り方に関する研究」平成 20 年度～平成 22 年度 総合研究報告書：pp89-105，2011。
- 5) 研究分担者；兼板佳孝，三島和夫，研究協力者；大津忠弘，有竹清夏，宗澤岳史：休養や睡眠の在り方と主観的健康感との関連性についての全国調査。厚生労働科学研究費補助金 循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業「健康づくりのための休養や睡眠の在り方に関する研究」平成 20 年度～平成 22 年度 総合研究報告書：pp117-34，2011。
- 6) 研究分担者；兼板佳孝，三島和夫：健康づくりのための休養指針（案）と休養実践のための啓発プログラム作成。厚生労働科学研究費補助金 循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業「健康づくりのための休養や睡眠の在り方に関する研究」平成 20 年度～平成 22 年度 総合研究報告書：pp179-86，2011。
- 7) 主任研究者；兼板佳孝，三島和夫，研究協力者；池田真紀：日本人のストレス対処行動および余暇の過ごし方についての疫学研究。厚生労働科学研究費補助金 循環器疾患・糖尿病等生活習慣病対策総合研究事業「健康づくりのための休養や睡眠の在り方に関する研究」平成 20 年度～平成 22 年度 総合研究報告書：pp165-78，2011。
- 8) 主任研究者；竹島 正，分担研究者；伊藤純一郎，稲垣真澄，川野健治，鈴木友理子，立森久照，三島和夫，村田美穂，和田 清，協力研究者：有竹清夏，井上祐紀，今村扶美，榎本みのり，小川雅代，加我牧子，亀井雄一，北村真吾，近藤あゆみ，嶋根卓也，鈴木浩太，堤 敦朗，長沼洋一，中村雅治，肥田昌子，深澤舞子，古澤嘉彦，堀内明子，丸山泰弘，三砂ちづる，守口善也，吉田光爾，渡辺真紀子：精神・神経疾患に関わる大規模コホートスタディの構築に関する研究。国立精神・神経医療研究センター精神・神経疾患研究開発費「精神・神経疾患に関わる大規模コホートスタディの構築に関する研究」平成 22 年度 総括・分担研究報告書（平成 21 年度～平成 22 年度）：

- pp1-8, 2011.
- 9) 分担研究者；三島和夫，研究協力者；渡辺真紀子，有竹清夏，榎本みのり，北村真吾，肥田昌子，堀内明子，守口善也：睡眠障害に係る大規模コホートスタディの構築に関する研究. 国立精神・神経医療研究センター精神・神経疾患研究開発費「精神・神経疾患に関わる大規模コホートスタディの構築に関する研究」平成22年度 総括・分担研究報告書(平成21年度～平成22年度)：pp19-20, 2011.
 - 10) 分担研究者；立森久照，研究協力者；長沼洋一，伊藤純一郎，川野健治，鈴木友理子，三島和夫，和田 清，小川雅代，嶋根卓也，亀井雄一：精神・神経疾患に係る大規模コホートスタディの実施計画の検討. 国立精神・神経医療研究センター精神・神経疾患研究開発費「精神・神経疾患に関わる大規模コホートスタディの構築に関する研究」平成22年度 総括・分担研究報告書(平成21年度～平成22年度)：pp43-5, 2011.
 - 11) 分担研究者；三島和夫，研究協力者；榎本みのり，北村真吾，筒井孝子，兼板佳孝：我が国の受療患者における催眠・鎮静系薬物の服用実態と問題点 ー適正な投与ガイドライン策定に向けての課題抽出ー. 厚生労働省精神・神経疾患研究委託費 20 委-4 「睡眠医療における医療機関連携ガイドラインの有効性検証に関する研究」平成20年度～平成22年度 総括研究報告書：79-87, 2011.
 - 12) 主任研究者；肥田昌子：睡眠障害・生体リズム障害の新規治療薬候補物質の探索. 厚生労働科学研究費補助金 創薬基盤推進研究事業「睡眠障害・生体リズム障害の新規治療薬候補物質の探索」平成22年度 総括研究報告書：pp1-13, 2011.
 - 13) 主任研究者；三島和夫：睡眠障害治療薬の臨床試験及び評価方法のあり方に関する研究. 厚生労働科学研究費補助金 医薬品医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業「睡眠障害治療薬の臨床試験及び評価方法のあり方に関する研究」平成22年度 総括・分担研究報告書：pp1-33, 2011.
 - 14) 主任研究者；三島和夫，分担研究者；井上雄一，内村直尚，本多 真，肥田昌子，守口善也：睡眠障害患者の QOL を改善するための科学的根拠に基づいた診断治療技術の開発. 厚生労働科学研究費補助金 障害者対策総合研究事業「睡眠障害患者の QOL を改善するための科学的根拠に基づいた診断治療技術の開発」平成22年度 総括・分担研究報告書：pp1-23, 2011.
 - 15) 分担研究者；肥田昌子，協力研究者；渡邊真紀子，北村真吾，榎本みのり，野崎健太郎，片寄泰子：睡眠障害患者の QOL を改善するための科学的根拠に基づいた診断治療技術の開発. 厚生労働科学研究費補助金 障害者対策総合研究事業「睡眠障害患者の QOL を改善するための科学的根拠に基づいた診断治療技術の開発」平成22年度 総括・分担研究報告書：pp43-9, 2011.
 - 16) 分担研究者；守口善也，研究協力者；寺澤悠理，大場健太郎，北村真吾，村上裕樹，金山裕介，三島和夫：不眠症の QOL 評価に関する脳機能画像研究. 厚生労働科学研究費補助金 障害者対策総合研究事業「睡眠障害患者の QOL を改善するための科学的根拠に基づいた診断治療技術の開発」平成22年度 総括・分担研究報告書：pp51-88, 2011.
 - 17) 主任研究者；三島和夫：高齢者に対する向精神薬の使用実態と適切な使用方法の確立に関する研究. 厚生労働科学研究費補助金 長寿科学総合研究事業「高齢者に対する向精神薬の使用実態と適切な使用方法の確立に関する研究」平成22年度 総括・分担研究報告書：pp1-16, 2011.
 - 18) 分担研究者；三島和夫，研究協力者；榎本みのり，北村真吾，片寄泰子，草薙宏明，阿部俊一郎，古田 光，阿部又一郎，筒井孝子，大冢賀政昭，兼板佳孝，大井田 隆：日本における向精神薬の処方実態に関する経年的調査. 厚生労働科学研究費補助金 長寿科学総合研究事業「高齢者に対する向精神薬の使用実態と適切な使用方法の確立に関する研究」平成22年度 総括・分担研究報告書：pp17-65, 2011.
 - 19) 分担研究者；三島和夫，研究協力者；片寄泰子，榎本みのり，北村真吾：日本における向精神薬の処方実態に関する経年的調査 2. 厚生労働科学研究費補助金 長寿科学総合研究事業「高齢者対

- する向精神薬の使用実態と適切な使用方法の確立に関する研究」平成22年度 総括・分担研究報告書：pp67-87, 2011.
- 20) 分担研究者；筒井孝子，三島和夫，研究協力者；榎本みのり，北村真吾，片寄泰子：日本における睡眠薬の長期服用の実態に関する縦断調査。厚生労働科学研究費補助金 長寿科学総合研究事業「高齢者に対する向精神薬の使用実態と適切な使用方法の確立に関する研究」平成22年度 総括・分担研究報告書：pp89-112, 2011.
- 21) 分担研究者；三島和夫，研究協力者；北村真吾，榎本みのり，片寄泰子：向精神薬の長期服用がもたらす転倒骨折リスクに関する薬剤疫学調査。厚生労働科学研究費補助金 長寿科学総合研究事業「高齢者に対する向精神薬の使用実態と適切な使用方法の確立に関する研究」平成22年度 総括・分担研究報告書：pp113-38, 2011.
- 22) 主任研究者；兼板佳孝，三島和夫，研究協力者；草薙宏明，榎本みのり，北村真吾，筒井孝子，大冢賀政昭：生活習慣病罹患患者における睡眠薬の使用実態にかんする調査。厚生労働科学研究費補助金 長寿科学総合研究事業「高齢者に対する向精神薬の使用実態と適切な使用方法の確立に関する研究」平成22年度 総括・分担研究報告書：pp139-68, 2011.
- 23) 分担研究者；三島和夫，研究協力者；阿部俊一郎，草薙宏明，榎本みのり，筒井孝子，大冢賀政昭，兼板佳孝，加藤倫紀，穂積 慧，善本正樹，三島由美子：長期投与中の抗精神病薬から認知症高齢者を離脱させる手法の開発に関する多施設共同研究－薬物離脱後の睡眠覚醒状態及び随伴精神行動障害の転帰の検討－。厚生労働科学研究費補助金 長寿科学総合研究事業「高齢者に対する向精神薬の使用実態と適切な使用方法の確立に関する研究」平成22年度 総括・分担研究報告書：pp169-76, 2011.
- 24) 主任研究者；三島和夫，分担研究者；兼板佳孝，筒井孝子，研究協力者；草薙宏明，榎本みのり，北村真吾，大冢賀政昭：高齢者に対する向精神薬の使用実態と適切な使用方法の確立に関する研究。厚生労働科学研究費補助金 長寿科学総合研究事業「高齢者に対する向精神薬の使用実態と適切な使用方法の確立に関する研究」平成20～22年度総合研究報告書：pp1-28, 2011.
- 25) 分担研究者；三島和夫，研究協力者；榎本みのり，北村真吾，片寄泰子，草薙宏明，阿部俊一郎，古田 光，阿部又一郎，筒井孝子，大冢賀政昭，兼板佳孝，大井田 隆：日本における向精神薬の処方実態に関する経年的調査。高齢者に対する向精神薬の使用実態と適切な使用方法の確立に関する研究。厚生労働科学研究費補助金 長寿科学総合研究事業「高齢者に対する向精神薬の使用実態と適切な使用方法の確立に関する研究」平成20～22年度総合研究報告書：pp29-72, 2011.
- 26) 分担研究者；筒井孝子，三島和夫，研究協力者；榎本みのり，北村真吾，片寄泰子：日本における睡眠薬の長期服用の実態に関する縦断調査。高齢者に対する向精神薬の使用実態と適切な使用方法の確立に関する研究。厚生労働科学研究費補助金 長寿科学総合研究事業「高齢者に対する向精神薬の使用実態と適切な使用方法の確立に関する研究」平成20～22年度総合研究報告書：pp73-95, 2011.
- 27) 分担研究者；三島和夫，研究協力者；北村真吾，榎本みのり，片寄泰子：向精神薬の長期服用がもたらす転倒骨折リスクに関する薬剤疫学調査。高齢者に対する向精神薬の使用実態と適切な使用方法の確立に関する研究。厚生労働科学研究費補助金 長寿科学総合研究事業「高齢者に対する向精神薬の使用実態と適切な使用方法の確立に関する研究」平成20～22年度総合研究報告書：pp97-113, 2011.
- 28) 主任研究者；兼板佳孝，三島和夫，研究協力者；草薙宏明，榎本みのり，北村真吾，筒井孝子，大冢賀政昭：生活習慣病罹患患者における睡眠薬の使用実態に関する調査。高齢者に対する向精神薬の使用実態と適切な使用方法の確立に関する研究。厚生労働科学研究費補助金 長寿科学総合研究事業「高齢者に対する向精神薬の使用実態と適切な使用方法の確立に関する研究」平成20～22年度総合研究報告書：pp115-42, 2011.

- 29) 分担研究者；三島和夫，研究協力者；榎本みのり，榎本みのり，遠藤拓朗，末永和栄，三浦直樹，中野泰志，向當さや香，田口勇次郎，有竹清夏，樋口重和：新しい携帯型活動量記録計とその睡眠/覚醒判定アルゴリズムの開発－睡眠・覚醒，行動障害，向精神薬の影響の評価手法の開発－。高齢者に対する向精神薬の使用実態と適切な使用方法の確立に関する研究。厚生労働科学研究費補助金 長寿科学総合研究事業「高齢者に対する向精神薬の使用実態と適切な使用方法の確立に関する研究」平成 20～22 年度総合研究報告書：pp143-64，2011.
- 30) 分担研究者；兼板佳孝，三島和夫，研究協力者；有竹清夏：日本における睡眠薬の使用実態とその問題点にかんする調査。高齢者に対する向精神薬の使用実態と適切な使用方法の確立に関する研究。厚生労働科学研究費補助金 長寿科学総合研究事業「高齢者に対する向精神薬の使用実態と適切な使用方法の確立に関する研究」平成 20～22 年度総合研究報告書：pp165-88，2011.
- 31) 分担研究者；筒井孝子，三島和夫，研究協力者；有竹清夏，大冢賀政昭：高齢者における精神行動障害ならびに睡眠障害の実態把握と対処課題の抽出。高齢者に対する向精神薬の使用実態と適切な使用方法の確立に関する研究。厚生労働科学研究費補助金 長寿科学総合研究事業「高齢者に対する向精神薬の使用実態と適切な使用方法の確立に関する研究」平成 20～22 年度総合研究報告書：pp189-220，2011.
- 32) 分担研究者；三島和夫，研究協力者；阿部俊一郎，草薙宏明，榎本みのり，筒井孝子，大冢賀政昭，兼板佳孝，加藤倫紀，穂積 慧，善本正樹，三島由美子：長期投与中の抗精神病薬から認知症高齢者を離脱させる手法の開発に関する多施設共同研究－薬物離脱後の睡眠覚醒状態及び随伴精神行動障害の転帰の検討－。高齢者に対する向精神薬の使用実態と適切な使用方法の確立に関する研究。厚生労働科学研究費補助金 長寿科学総合研究事業「高齢者に対する向精神薬の使用実態と適切な使用方法の確立に関する研究」平成 20～22 年度総合研究報告書：pp221-8，2011.
- 33) 分担研究者；三島和夫，研究協力者；北村真吾，榎本みのり，小山智典，神尾陽子：発達障害児における睡眠習慣・睡眠障害に関する研究。厚生労働科学研究費補助金 障害者対策総合研究事業精神障害分野「1 歳からの広汎性発達障害の出現とその発達の変化：地域ベースの横断的および縦断的研究」平成 22 年度 総括・分担研究報告書：pp183-202，2011.
- 34) 主任研究者；守口善也：リアルタイム fMRI による脳機能画像を用いた，ストレス関連疾患の治療法に関する研究。厚生労働科学研究費補助金 障害者対策総合研究事業「リアルタイム fMRI による脳機能画像を用いた，ストレス関連疾患の治療法に関する研究」平成 22 年度 総括研究報告書：pp1-38，2011.
- (5) その他
- 1) 三島和夫：高齢者に多い病気－「睡眠障害と不眠症」．ふれあいの輪 24：pp17-9，2010.
 - 2) 三島和夫：新・名医の最新医療 高齢者の不眠症 名医のセカンドオピニオン．週刊朝日 7月9日増大号，p132，2010.
 - 3) 三島和夫：名医のセカンドオピニオン－誤解多い薬物治療 医師と患者の理解必要－．新「名医」の最新治療 2011 その病気はこうやって治せ！ 週刊朝日増刊号：pp120-1，2010.
 - 4) 三島和夫：こころのセルフメンテ「光を浴びよう」．笑顔 41(12)：pp14-5，2010.
 - 5) 三島和夫：心と体 診療室「冬のみ表れる季節性鬱病」．日経ビジネス 11月1日号：p60，2010.
 - 6) 三島和夫：私たちにとって眠りとは何か．こころの元気プラス 41(12)：pp12-5，2010.
 - 7) 三島和夫：【医療】睡眠薬 使いやすく進化－危険減少 症状に応じ多様に－．朝日新聞：12月23日号，p26，2010.
 - 8) 三島和夫：不眠症の認知行動療法．Sound Sleep Pharma：2011.
 - 9) 三島和夫：睡眠．おはよう 21 22(5)：80-7，2011.
 - 10) 片寄泰子，三島和夫：健康づくり Q&A．健康づくり：p1，2011.
 - 11) 阿部又一郎：【書評】脳を休める 脳科学と睡眠の新しい常識．睡眠医療 4：320-1，2010.

- 12) 阿部又一郎 : エドワール・ザリフィアンへのオマージュ. 精神医学 52 : 1131-5, 2010.

B. 学会・研究会における発表

- (1) 学会特別講演, 教育講演, シンポジウム, ワークショップ, パネルディスカッション等
- 1) Mishima K : 【Symposium】 Sleep and society—People with sleep and circadian maladaptation to modern life style —. Max Planck Institute & National Center of Neurology and Psychiatry Joint Symposium, Tokyo, 2010.10.13.
 - 2) Moriguchi Y: Mentalizing in alexithymia. Berlin Alexithymia Conference 2010, Berlin, Germany, 2010.11.8-9.
 - 3) Enomoto M : 【Workshop】 Clinical application of newly developed waist-worn actigraphy to advance effective sleep medicine for hospitalized patients. 29th International congress of clinical neurophysiology, Kobe, 2010.10.28-11.1.
 - 4) 三島和夫 : 【シンポジウム】 睡眠障害: その分子メカニズムの解明と治療法の開発「ヒトの睡眠・生物時計の調節機構とその障害」. 第40回慶應ニューロサイエンス研究会, 東京, 2010.5.29.
 - 5) 三島和夫 : 【特別講演】 うつの不眠はうつ症状でよいのか?—残遺不眠の意味するもの—. 大阪 睡眠を考える会, 大阪, 2010.6.3.
 - 6) 三島和夫 : 【教育講演】 不眠症を3つの障害の視点から診る—リズム異常, ホメオスタシス障害, 過覚醒—. 桑名医師会講演会, 三重, 2010.6.24.
 - 7) 三島和夫 : 【教育セミナー(医師向け)】 概日リズム睡眠障害の時間生物学的背景について. 日本睡眠学会第35回定期学術集会, 愛知, 2010.7.1-2.
 - 8) 三島和夫 : 【市民公開シンポジウム】 生活習慣病の治療と予防における睡眠医療のあり方. 日本睡眠学会第35回定期学術集会, 愛知, 2010.7.1-2.
 - 9) 三島和夫 : 【シンポジウム】 日本国内における睡眠薬処方現状と今後の睡眠薬の臨床試験における課題. 日本睡眠学会第35回定期学術集会, 愛知, 2010.7.1-2.
 - 10) 三島和夫 : 【教育講演】 うつの不眠はうつ症状, では済まされない—精神科医のための睡眠学—. 第10回日本外来精神医療学会, 東京, 2010.7.24-25.
 - 11) 三島和夫 : 【セミナー】 研究成果を臨床に展開する. 生物リズム夏の学校, 千葉, 2010.8.7-8.
 - 12) 三島和夫 : 【ランチョンセミナー】 メラトニン—生物時計—睡眠調節, そして心身の健康との関わり. Neuro 2010, 兵庫, 2010.9.2-4.
 - 13) 三島和夫 : 【ランチョンセミナー】 睡眠障害と生物時計との関わり—不眠症を概日リズムの視点から診る—. 第2回 ISMSJ 学術集会, 東京, 2010.9.3-5.
 - 14) 三島和夫 : 【シンポジウム】 『睡眠研究の動向』 概日リズム睡眠障害の病態生理研究の動向. 第32回日本生物学的精神医学会, 福岡, 2010.10.7-9.
 - 15) 三島和夫 : 【特別講演】 不眠症の真の改善をめざして—ロゼレムを如何に活用するか—. ロゼレム錠新発売記念講演会—新しい不眠症治療へ—, 神奈川, 2010.10.26.
 - 16) 三島和夫 : 【講演】 ロゼレムを臨床で活用するために. 天竜医師会セミナー, 静岡, 2010.11.26.
 - 17) 三島和夫 : 【記念講演】 概日リズム睡眠障害の病態生理と治療—ヒト生物時計障害の高精度診断技法の開発をめざして—. 日本生理学会第243回東京談話会, 埼玉, 2010.12.4.
 - 18) 三島和夫 : 【講演】. 安房医師会学術講演会, 千葉, 2010.12.13.
 - 19) 三島和夫 : 【特別講演】. ロゼレム TV/PC 講演会, 東京, 2010.12.16.
 - 20) 三島和夫 : 【特別講演】 不眠症の真の改善をめざして—ロゼレムを如何に活用するか—. 24時間社会への処方箋—今求められる生活習慣病治療—, 東京, 2011.1.25.
 - 21) 三島和夫 : 睡眠薬臨床評価ガイドラインについて. レギュラトリーサイエンス学会, 東京, 2011.2.10.

- 22) 三島和夫：【特別講演】ロゼレムを臨床で活用するために。磐周医師会磐田市医師会合同学術講演会，静岡，2011.2.23.
- 23) 守口善也：【シンポジウム】Neuroimaging の新展開 アレキシサイミアの脳画像研究. 第 51 回日本心身医学会総会ならびに学術講演会，宮城，2010.6.26-27.
- 24) 守口善也：【シンポジウム】アレキシサイミアと感情認知の脳機能画像解析－社会性の観点から. 第 15 回認知神経科学会学術集会，島根，2010.7.17-18.
- 25) 守口善也：【シンポジウム】自己・他者の心の理解の脳科学と心身医学. 第 11 回日本心身健康科学会学術集会，東京，2010.9.18.
- 26) 守口善也：【一般公開特別講演】社会神経科学と心身医学. 早稲田大学 応用脳科学研究所（重点領域研究機構）「脳と心の科学の社会還元」－総合人間科学に基づく応用脳科学－，東京，2010.10.23.
- 27) 肥田昌子，三島和夫：【シンポジウム】生体時計から時間医学への展開 ヒト生物時計機能の生理および分子レベルでの評価. Neuro 2010，兵庫，2010.9.2-4.
- 28) 肥田昌子，三島和夫：【シンポジウム】概日リズム睡眠障害の診断法の確立に向けて. 第 17 回日本時間生物学会学術大会，東京，2010.11.20-21.
- 29) 榎本みのり：眠りと休養. 第 7 回 心身健康アドバイザー講習会，東京，2011.2.20.
- 30) 野崎健太郎：【シンポジウム】うつと不眠を考える－不眠はうつ病の症状？合併症状？残遺不眠を見過ごすな！！～うつ病の再燃を防止せよ～. 日本行動療法学会第 36 回大会，愛知，2010.12.4-6.

(2) 一般演題

- 1) Moriguchi Y, Lane R, LaBar K, Gondo M, Hida A, Mishima K, Hanakawa T, Honda M, Komaki G: Neural basis for neuroticism and emotional sensitivity to subtle changes of facial expression. 16th Annual Meeting of the Organization for Human Brain Mapping, Barcelona, 2010.6.6-10.
- 2) Hida A, Watanabe M, Kitamura S, Kato M, Aritake S, Enomoto M, Moriguchi Y, Mishima K: Association of circadian gene polymorphisms with sleep characteristics in Japanese population. Sleep 2010, 24th Annual Meeting of Associated Professional Sleep Societies, San Antonio TX, 2010.6.5-9.
- 3) Kitamura S, Hida A, Watanabe M, Enomoto M, Aritake-Okada S, Moriguchi Y, Kamei Y, Mishima K: Evening preference relates to the incidence of depressive state independently of sleep-wake conditions. Sleep 2010, 24th Annual Meeting of Associated Professional Sleep Societies, San Antonio TX, 2010.6.5-9.
- 4) Enomoto M, Kitamura S, Aritake-Okada S, Watanabe M, Hida A, Moriguchi Y, Kusanagi H, Kaneita Y, Tsutsui T, Mishima K: Five-year trends of sedative-hypnotics use in Japan. Sleep 2010, 24th Annual Meeting of Associated Professional Sleep Societies, San Antonio TX, 2010.6.5-9.
- 5) Hida A, Watanabe M, Kato M, Kitamura S, Enomoto M, Moriguchi Y, Kamei Y, Kadotani H, Uchiyama M, Inoue Y, Takahashi K, Mishima K: Association study of circadian gene polymorphisms with circadian sleep disorders in Japanese population. 20th Congress of the European Sleep Research Society, Lisbon, Portugal, 2010.9.14-18.
- 6) Enomoto M, Kitamura S, Aritake-Okada S, Watanabe M, Hida A, Moriguchi Y, Kusanagi H, Kaneita Y, Tsutsui T, Mishima K: Trends in prescription of hypnotics in Japan, 2005-2009. 20th Congress of the European Sleep Research Society, Lisbon, Portugal, 2010.9.14-18.
- 7) 肥田昌子，渡邊真紀子，加藤美恵，北村真吾，榎本みのり，有竹清夏，守口善也，亀井雄一，角谷寛，内山 真，井上雄一，海老澤 尚，高橋清久，三島和夫：【ポスター発表】概日リズム睡眠障害と時計遺伝子多型の関連解析. 日本睡眠学会第 35 回定期学術集会，愛知，2010.7.1-2.

- 8) 肥田昌子, 渡邊真紀子, 加藤美恵, 北村真吾, 榎本みのり, 亀井雄一, 角谷 寛, 内山 真, 井上雄一, 三島和夫:【ポスター発表】概日リズム睡眠障害および睡眠特性と時計遺伝子多型の関連解析. 第17回日本時間生物学会学術大会, 東京, 2010.11.20-21.
- 9) 榎本みのり, 北村真吾, 有竹清夏, 肥田昌子, 守口善也, 草薙宏明, 兼板佳孝, 筒井孝子, 三島和夫:【ポスター発表】日本における5年間の睡眠薬の処方実態. 日本睡眠学会第35回定期学術集会, 愛知, 2010.7.1-2.
- 10) 榎本みのり, 岡田(有竹)清夏, 樋口重和, 肥田昌子, 北村真吾, 三島和夫:【ポスター発表】メラトニン分泌開始時刻(DLMO)と入眠潜時の関係. 第17回日本時間生物学会学術大会, 東京, 2010.11.20-21.
- 11) 北村真吾, 榎本みのり, 亀井雄一, 小山智典, 黒田美保, 稲田尚子, 神尾陽子, 三島和夫:【口演・ポスター発表】地域在住の2歳児における睡眠習慣及び睡眠障害に関する調査. 日本睡眠学会第35回定期学術集会, 愛知, 2010.7.1-2.
- 12) 北村真吾, 肥田昌子, 榎本みのり, 渡邊真紀子, 野崎健太郎, 村上裕樹, 守口善也, 岡田(有竹)清夏, 樋口重和, 三島和夫:【一般口演】日周指向性による睡眠恒常性維持機構への修飾. 日本生理人類学会第63回大会, 千葉, 2010.10.30-31.
- 13) 北村真吾, 肥田昌子, 渡邊真紀子, 榎本みのり, 野崎健太郎, 村上裕樹, 守口善也, 岡田(有竹)清夏, 樋口重和, 三島和夫:【ポスター発表】生体リズムの個人特性と睡眠恒常性維持反応との関連. 第17回日本時間生物学会学術大会, 東京, 2010.11.20-21.
- 14) 渡邊真紀子, 肥田昌子, 加藤美恵, 北村真吾, 有竹清夏, 榎本みのり, 守口善也, 三島和夫:【ポスター発表】末梢循環血細胞, 毛根細胞における末梢時計リズム特性解析. 日本睡眠学会第35回定期学術集会, 愛知, 2010.7.1-2.
- 15) 渡邊真紀子, 肥田昌子, 加藤美恵, 北村真吾, 榎本みのり, 野崎健太郎, 村上裕樹, 守口善也, 三島和夫:【ポスター発表】抹消白血球, 毛包細胞における抹消時計リズム特性解析. 第17回日本時間生物学会学術大会, 東京, 2010.11.20-21.
- 16) 岡田(有竹)清夏, 筒井孝子, 大塚賀政昭, 榎本みのり, 北村真吾, 渡邊真紀子, 守口善也, 肥田昌子, 三島和夫:【口演・ポスター発表】在宅および施設高齢者における精神行動障害ならびに睡眠障害の実態と対処課題の抽出. 日本睡眠学会第35回定期学術集会, 愛知, 2010.7.1-2.
- 17) 田村美由紀, 樋口重和, 肥田昌子, 有竹清夏, 榎本みのり, 北村真吾, 渡邊真紀子, 守口善也, 三島和夫:【ポスター発表】睡眠負債による表情認知機能の変化. Neuro 2010, 兵庫, 2010.9.2-4.
- 18) 栗山健一, 本間元康, 三島和夫, 金 吉晴:【ポスター発表】習慣的睡眠時刻前後の恐怖記憶特性における性差. 第17回日本時間生物学会学術大会, 東京, 2010.11.20-21.
- 19) 樋口重和, 肥田昌子, 金城陽平, 福田知美, 三島和夫:【ポスター発表】ヒトのメラノプシン遺伝子の一塩基多型と瞳孔の光調節反応の関係. 第17回日本時間生物学会学術大会, 東京, 2010.11.20-21.
- 20) 村上裕樹, 守口善也, 肥田昌子, 三島和夫:【ポスター発表】メタ認知方略を用いた感情制御における神経基盤. 脳と心のメカニズム 第11回冬のワークショップ, 北海道, 2011.1.11-13.

(3) 研究報告会

- 1) 三島和夫:厚生労働科学研究「障害者対策総合研究事業」第1回QOL研究班会議, 東京, 2010.4.29.
- 2) 三島和夫:厚生労働科学研究「障害者対策総合研究事業」第2回QOL研究班会議, 東京, 2010.9.30.
- 3) 三島和夫, 石郷岡 純, 井上雄一, 大川匡子, 大熊誠太郎, 清水徹男, 中林哲夫, 平田幸一, 本多 真, 荒木康弘, 南 亮介, 一丸勝彦, 木下玲子, 北村真吾, 榎本みのり: 医薬品医療機器レギュラトリーサイエンス総合研究事業 睡眠障害治療薬の臨床試験及び評価方法のあり方に関する研究 第一回班会議, 東京, 2010.5.27.

- 4) 功刀 浩, 三島和夫, 稲垣真澄 (松田芳樹), 矢田俊彦:「活力ある暮らし」班. 文部科学省「脳科学研究戦略推進プログラム」課題 E キックオフ会議, 東京, 2010.10.19.
- 5) 三島和夫: 文部科学省「脳科学研究戦略推進プログラム」成果報告会, 全体会議, 京都, 2010.11.30-12.1.
- 6) 守口善也, 村上裕樹, 肥田昌子, 小牧 元, 三島和夫:【口頭発表】アレキシサイミアと他者理解に関する脳機能画像研究. 平成 22 年度 精神保健研究所 研究報告会, 東京 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所, 2011.5.23.
- 7) 榎本みのり, 有竹清夏, 樋口重和, 肥田昌子, 北村真吾, 三島和夫:メラトニン分泌開始時刻 (DLMO) と入眠潜時の関係. 第 26 回不眠研究会, 東京, 2010.12.4.
- 8) 榎本みのり, 北村真吾, 片寄泰子, 野崎健太郎, 村上裕樹, 守口善也, 肥田昌子, 三島和夫:【ポスター発表】日本における 5 年間の睡眠薬の処方実態. 平成 22 年度 精神保健研究所 研究報告会, 東京 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所, 2011.5.23.
- 9) 北村真吾, 肥田昌子, 渡邊真紀子, 榎本みのり, 野崎健太郎, 村上裕樹, 守口善也, 三島和夫:【ポスター発表】概日リズム睡眠障害における生体機能リズム特性. 平成 22 年度 精神保健研究所 研究報告会, 東京 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所, 2011.5.23.

C. 講演

- 1) 三島和夫:【一般向け講演】パパ・ママ十分に眠れていますか?～大人のための睡眠講座～. 平成 22 年度 こころの健康作り講座, 東京, 2010.9.21.
- 2) 三島和夫:【研修講師】高齢者の睡眠障害—スクリーニングと専門医紹介のポイント—. 平成 22 年度 日本医師会認定産業医研修会 こころの健康かかりつけ医研修—かかりつけ医 (産業医) 心の健康対応力向上研修—, 広島, 2010.9.26.
- 3) 三島和夫:【一般向け講演】睡眠と健康 眠りのメカニズムを知って眠り上手に. 健康づくり講演会, 東京, 2010.12.24.
- 4) 三島和夫:【一般向け講演】生活習慣病と睡眠の関係について～注意すべき睡眠障害と睡眠習慣～. 第 10 回狛江市民健康講座, 東京, 2011.2.26.

D. 学会活動 (学会主催, 学会役員, 座長, 編集委員等)

(1) 学会主催

- 1) 三島和夫: 第 17 回日本時間生物学会学術大会大会長, 東京, 2010.11.20-21.

(2) 学会役員

- 1) 三島和夫: 日本睡眠学会理事
日本時間生物学会理事
日本生物学的精神医学会評議員
- 2) 肥田昌子: 日本時間生物学会評議員

研究会役員

- 1) 三島和夫: 関東睡眠懇話会世話人
精神科臨床睡眠懇話会世話人
- 2) 守口善也: 関東脳核医学研究会世話人

学会員

- 1) 三島和夫 : 日本精神神経学会
日本生物学的精神医学会
日本老年精神医学会
日本人類遺伝学会
日本精神・行動遺伝医学学会
日本うつ病学会
Sleep Research Society
Society for Research on Biological Rhythms
- 2) 守口善也 : American Psychosomatic Society
日本心身医学会
- 3) 肥田昌子 : Society for Research on Biological Rhythms
American Academy of Sleep Medicine
日本睡眠学会

(3) 座長

- 1) 三島和夫 : シンポジウム【司会】精神疾患に併存する睡眠障害の診断と治療. 第106回日本精神神経学会学術集会, 広島, 2010.5.20-22.
- 2) 三島和夫 : 【座長】睡眠薬の開発と臨床試験のあり方について—現状と今後の課題—. 日本睡眠学会第35回定期学術集会, 愛知, 2010.7.1-2.
- 3) 三島和夫 : 【座長】トランスレーショナル研究・実用化研究の推進をめざして. 第17回日本時間生物学会学術大会, 東京, 2010.11.20-21.
- 4) 三島和夫 : 【司会】うつと不眠を考える—不眠はうつ病の症状? 合併症状?—. 日本行動療法学会第36回大会, 愛知, 2010.12.4-6.
- 5) 三島和夫 : シンポジウム【座長】. 第6回関東睡眠懇話会, 東京, 2011.2.26.

(4) 学会誌編集委員等

- 1) 三島和夫 : Frontiers in Sleep and Chronobiology 編集委員
- 2) 守口善也 : American Psychosomatic Society Program Committee 編集委員

E. 研修

(1) 研修企画

- 1) 三島和夫 : 第一回不眠症認知行動療法研修会, 国立精神・神経医療研究センター, 東京, 2010.8.19-20.

(2) 研修会講師

- 1) 三島和夫 : 不眠症の病態生理の理解, 第一回不眠症認知行動療法研修会, 国立精神・神経医療研究センター, 東京, 2010.8.19-20.

10. 知的障害研究部

I. 研究部の概要

平成 22 年 4 月 1 日の独立行政法人化とともに部の名称が、知的障害研究部に変わり、知的障害など発達障害に関する研究を進めた。すなわち、精神遅滞（知的障害）、学習障害、注意欠如・多動性障害（ADHD）や自閉症スペクトラムなどの発達障害とその近縁状態の発生要因解明、診断法開発、治療法策定、予防対策に関する研究を幅広く行った。発達障害児・者はその障害の発生時期や原因、年齢、重症度、養育環境によりまったく異なった症状を示し、多彩な課題を抱えている。上記の問題解決のために当研究部では、臨床例の解析に加えて、調査研究や実験動物を用いた基礎的研究など多面的アプローチを駆使している。部の英語名は独法化後も引き続き **Department of Developmental Disorders** と表記していることから、発達障害全般について、神経病態から理解して診断・治療・対策・処遇までの広い守備範囲をターゲットとした研究を進めている。

独法化とともに室の構成に変更があり、診断研究室と治療研究室の二室に加えて、発達障害支援研究室が新たに設けられることとなった。平成 22 年度の常勤研究員は部長の稲垣真澄、診断研究室長井上祐紀、治療研究室長軍司敦子の 3 名で、発達障害支援研究室長は部長併任となった。稲垣は主として小児神経学、発達障害医学、神経生理学の立場から、井上は精神医学とくに児童精神科医の立場から、軍司は神経生理学、教育学の立場から研究に加わった。稲垣と井上はセンター病院小児神経科と児童精神科でそれぞれ外来を行っており、病院診療部のスタッフとともに臨床研究の充実のため活動を展開した。

22 年度の流動研究員は加地雄一、後藤隆章、松田芳樹でスタートした。松田は 9 月より知的障害研究部科研費研究員に異動し、加地は 10 月 1 日付けで青山学院大学助教に採用されたため、退職となった。23 年 3 月に崎原ことえが知的障害研究部科研費研究員から流動研究員に異動した。併任研究員は山崎広子（国立国際医療センター国府台病院眼科医長）と中川栄二（センター病院小児神経科医長）の二人が務めた。客員研究員は秋山千枝子、宇野 彰、木実谷哲史、小池敏英、小枝達也、昆かおり、杉田克生、鈴木義之、田中敦士、中村 俊、難波栄二、細川 徹、林 隆の計 13 名が発達障害に関する研究を相互協力して実施した。協力研究員は中村雅子、矢田部清美であった。研究生として小久保奈緒美、小林朋佳、北 洋輔、佐久間隆介、鈴木浩太、古島わかなの 6 名が常勤研究者と共に研究を進めた。なお、研究助手として大橋啓子、中村紀子、刑部仁美、吉川朋子が研究活動を支えた。

II. 研究活動

1) 発達障害児の認知機能評価に基づく認知発達障害の解明と個別支援方法の体系化

乳幼児期からの高次脳機能の発達とその障害について神経生理学的・神経心理学的アプローチにより研究を進めている。特に発達障害児の視・聴覚認知機能に関する研究を推進し、精神遅滞、自閉症、学習障害、ADHD など発達障害児・者に適用してその有用性を報告している。今後は、臨床例を多面的に検討していく予定である。これらはいずれも、発達障害児の認知機能障害を考慮した指導法開発のための研究として展開している。（稲垣、井上、軍司、矢田部、山崎、古島、小久保、精神・神経疾患研究開発費、厚生労働科学研究）

2) 発達障害児の行動異常モデルにおける研究

Bronx waltzer (bv) マウスの中枢神経系病態解明はとくに ADHD、自閉性障害など発達障害の病態研究、治療研究につながるものと考えている。bv マウスにみられる不安様行動や恐怖体験が脳内 GABA 機能の異常として解析できるか注目し、発達障害の不安症状の解明と治療法開発に向けた基盤研究を行った。（稲垣、井上、松田、刑部、厚生労働科学研究、精神・神経疾患研究開発費）

3) 学習障害に関する研究

学習障害児の臨床的研究から視・聴覚情報処理機構の解明に焦点をあてながら、リハビリテーションアプローチの重要性について指摘している。特異的発達障害とくに、発達性読み書き障害や算数障害の診断治療ガイドラインを日本で初めて提案し、ワーキングメモリ機能に焦点をあてた病態解明研究を進めた。(稲垣, 軍司, 矢田部, 後藤, 小林, 山崎, 細川, 北, 小枝, 林, 杉田, 加地. 精神・神経疾患研究開発費, 科学研究費基盤研究 B, 厚生労働科学研究)

4) 自閉症の病態に関する研究

自閉症の脳機能の検討と早期診断法の確立をはかるため、前頭葉機能、言語意味理解の特徴につき行動学的・臨床神経生理学的研究を進めた。また、小児行動の二次元尺度化に基づく発達支援策の有効性定量評価に関する研究では、ソーシャルスキルトレーニングの効果判定に応用した。研究班の研究分担者の協力により、ADHD や知的障害例の各種療育による行動変化を客観的に評価し得た。顔認知に関する神経生理学的研究を進め、健常児と自閉症児の自他識別時における前頭部脳血流変化や周波数応答に注目した解析を論文・学会発表した。(稲垣, 軍司, 井上, 後藤, 北, 佐久間, 崎原, 林, 小池. 厚生労働科学研究, 文部科学省新学術領域研究)

5) ADHD に関する研究

ADHD に伴う反抗挑戦性障害などの破壊的行動障害の中枢神経系病態解明のため、表情刺激に対する脳血流変化を近赤外線スペクトログラフィー (NIRS) により検討し、反応性の違いを見出した。今後、研究を発展させていく予定である。(稲垣, 井上, 軍司, 崎原. 厚生労働科学研究, 精神・神経疾患研究開発費)

6) 小児副腎白質ジストロフィー症 (ALD) に関する研究

前部長の加我が厚生労働科学研究難治性疾患対策研究事業：運動失調症に関する調査研究の研究分担者であったことから、進行性代謝性変性疾患の一つである小児型 ALD に対する骨髄移植 (造血幹細胞移植) 療法時期決定と治療後評価のための研究を本年度も協力した。(稲垣, 加我, 軍司, 崎原, 後藤, 中村 (雅). 厚生労働科学研究)

7) 発達障害児の保護者のメンタルヘルスに関する研究

発達障害児の親にうつ病などのメンタルヘルスの問題があるのかを明らかにするため、調査紙による研究を行った (稲垣, 井上, 小林, 加我. 厚生労働科学研究)

8) 精神・神経疾患の大規模コホートスタディの構築に関する研究

先行するパースコホート研究のフォローアップ調査を行った。豊かな出産体験が母親の養育行動や就学期の小児の行動にどのような影響をもたらすのかについて明らかにしていく予定である。(稲垣, 井上, 鈴木, 精神・神経疾患研究開発費)

III. 社会的活動

1) 市民社会に対する一般的貢献

常勤研究者は各種講演などの場を通じて、研究成果を社会に還元している。常勤・非常勤の研究者全員が発達障害児・者とその家族に対しセンター病院小児神経科、児童精神科において濃厚な診療を行って日常的サポートを提供している。

2) 専門教育面における貢献

稲垣, 軍司を中心に病院小児神経科レジデントなど若手医師への臨床、研究指導を日常的に行っ

ている。井上は病院小児神経科レジデントを指導し、病棟症例の神経生理学的研究を継続した。毎週火曜夕方にレジデント対象の神経生理学セミナーを部内で行い、軍司が主に実習を担当し、稲垣は電気生理学的所見判読のアドバイスも行った。また講演会や各種セミナー、講義などにより医師、看護師、保健師、福祉関係専門職、言語聴覚士、学校教員の教育に貢献している。稲垣は日本小児科学会専門医試験委員として、また軍司は二級臨床検査士資格認定試験の試験委員として、神経生理部門について検査技師に対する専門知識の普及・向上に貢献した。軍司は東京学芸大学特別支援教育専攻科で、後藤は白梅学園大学での学生講義も担当した。国立精神・神経医療研究センター小児神経セミナーでは、全国から集まった小児神経科医に対して稲垣が発達障害の診断と治療の講義を行った。

3) 精神保健研究所の研修の主催

発達障害者支援法の成立に伴う専門家養成のため、医学課程研修を年に二回企画・実施し、好評を得た。

4) 保健医療行政・政策に関連する研究・調査、委員会等への貢献

稲垣は、環境省の子どもの健康と環境に関する全国調査（エコチル調査）の計画策定に関わり、内閣府食品安全委員会「ヒト発達障害と農薬に関する情報収集調査」事業の検討委員としても報告書作成に関わった。厚生労働省平成 22 年度こころの健康づくり対策事業の中で、思春期精神保健研修事業企画委員会委員として、研修内容に関する企画に携わった。稲垣は加我所長とともに日本障害者スポーツ協会専門委員会医学委員として、知的障害者のスポーツを通じての社会参加に貢献している。稲垣は道路交通法施行細則に基づく免許の保留などの用件に関し、専門的知識を有する医師として千葉県公安委員会に認定され活動している。

5) センター内における臨床的活動

全員が病院に併任としてセンター内の臨床的活動に関わり、知的障害、学習障害、ADHD、自閉症など発達障害の診療に定期的に携わっている。

IV. 研究業績

A. 刊行物

(1) 原著論文

- 1) Inoue Y, Inagaki M, Gunji A, Furushima W, Okada H, Sasaki H, Omori T, Takeichi H, Kaga M: Altered effect of preceding response execution on inhibitory processing in children with AD/HD: an ERP study. *Int J Psychophysiol* 77: 118-25, 2010.
- 2) Sakuma H, Shimizu Y, Saito Y, Sugai K, Inagaki M, Kaga M, Sasaki M: Electrophysiological evidence of cerebral dysfunction in childhood opsoclonus-myoclonus syndrome. *Mov Disord.* 25: 940-5, 2010.
- 3) Kita Y, Gunji A, Sakihara K, Inagaki M, Kaga M, Nakagawa E, Hosokawa T: Scanning strategies do not modulate face identification: Eye-tracking and near-infrared spectroscopy study. *PLoS ONE* <http://dx.plos.org/10.1371/journal.pone.0011050>
- 4) Suzuki K, Shinoda H: Error-related components and impulsivity related by speed and accuracy trade-off. *Human Cognitive Neurophysiology* 3: 26-37, 2010.
- 5) Matsuda Y, Inoue Y, Izumi H, Kaga M, Inagaki M, Goto Y: Fewer GABAergic interneurons, heightened anxiety and decreased high-frequency electroencephalogram components in Bronx waltzer mice, a model of hereditary deafness. *Brain Res.* 2011 1373:202-210.

- 6) Kita Y, Gunji A, Inoue Y, Goto T, Sakihara K, Kaga M, Inagaki M, Hosokawa T: Self-face recognition in children with autism spectrum disorders: A near-infrared spectroscopy study. *Brain Dev* Dec 17, 2010. [Epub ahead of print]
- 7) Mizuno T, Nakagawa E, Sakuma H, Saito Y, Komaki H, Sugai K, Sasaki M, Takahashi A, Otsuki T, Sakihara K, Inagaki M. Multiple band frequency analysis in a child of mediantemporal lobe ganglioglioma. *Childs Nerv Syst* 27: 479-483, 2011.
- 8) Yonekawa T, Saito Y, Sakuma H, Sugai K, Shimizu Y, Inagaki M, Sasaki M: Augmented startle responses in opsoclonus-myoclonus syndrome. *Brain Dev* 33: 335-338, 2011.
- 9) 小林朋佳, 稲垣真澄, 軍司敦子, 矢田部清美, 加我牧子, 後藤隆章, 小池敏英, 若宮英司, 小枝達也: 学童におけるひらがな音読の発達の変化: ひらがな単音, 単語, 単文速読課題を用いて. *脳と発達* 42: 15-21, 2010.
- 10) 北 洋輔, 小林朋佳, 小池敏英, 小枝達也, 若宮英司, 細川 徹, 加我牧子, 稲垣真澄: 読み書きにつまずきを示す小児の臨床症状とひらがな音読能力の関連—発達性読み書き障害診断における症状チェックリストの有用性. *脳と発達* 42: 437-442, 2010.
- 11) 北 洋輔, 軍司敦子, 佐久間隆介, 後藤隆章, 稲垣真澄, 加我牧子, 小池敏英, 細川 徹: 自閉症スペクトラム障害のある児に対する *Social Skill Training* の客観的評価. *精神保健研究* 56: 81-87, 2010.
- 12) 成川敦子, 後藤隆章, 小池敏英, 稲垣真澄: LD 児の論理的思考の特徴に関する研究—算数文章題による検討—. *LD 研究* 19: 281-289, 2010.
- 13) 竹下絵里, 中川栄二, 新井麻子, 斎藤義朗, 小牧宏文, 須貝研司, 佐々木征行, 高橋章夫, 大槻泰介, 井上祐紀, 稲垣真澄, 加我牧子: 小児の難治性てんかんの外科治療による行動障害の改善: 子どもの行動チェックリストによる検討. *てんかん研究*, 28: 401-408, 2011.

(2) 総説

- 1) 稲垣真澄, 加我牧子: 知的障害児の医学的診断検査ガイドライン. *精神保健研究* 50: 43-46, 2009.
- 2) 稲垣真澄, 後藤隆章: 14. 精神 学習障害. *小児科診療* 73: 808-810, 2010.
- 3) 稲垣真澄, 相原正男: AD/HD の神経科学—抑制系と報酬系に焦点をあてて—. *脳と発達* 42: 224-226, 2010.
- 4) 加地雄一: 指差しから見た1歳児の社会的認知能力. *東京立正大学紀要* 38: 58-67, 2010.
- 5) 山崎広子, 矢田部清美, 稲垣真澄: 発達性読み書き障害とその眼科的異常. *神経眼科* 27: 125-138, 2010.
- 6) 北 洋輔, 細川 徹: 自閉症スペクトラム障害(ASD)における感情—非定型発達脳での感情発達に及ぼす社会的経験の役割—. *心理学評論* 53: 140-150, 2010.

(3) 著書

- 1) Inagaki M: Attention deficit/hyperactivity disorders of children with epilepsy. *Neuropsychiatric Issues in Epilepsy, John Libbey Eurotext*, 85-91, 2010.
- 2) Gunji A, Takeichi H, Inoue Y, Okada H, Omori T, Inagaki M, Kaga M: Single one-minute trial assessment of speech processing in school age children. *Proceedings of the Auditory Research Meeting, the Acoustical Society of Japan*, 40: 857-861, 2010.
- 3) 稲垣真澄: IV小児神経, 神経内科, 精神神経科の問題 2 学習障害とその対策. *水頭症・二分脊椎ハンドブック* 257-262, 2010.
- 4) 稲垣真澄, 崎原ことえ: 2章 神経生理学的検査からみる発達 事象関連電位からみた小児の発達特性. *小児科臨床ピクシス* 19 ここまでわかった小児の発達. 中山書店 110-113, 2010.

- 5) 古島わかな: Case20 行動異常をきたした Addison 病の 10 歳男児. イメージからせまる小児神経疾患一症例から学ぶ 診断・治療プロセス. 診断と治療社 41-42, 2010.
- 6) 井上祐紀, 稲垣真澄, 神尾陽子: III 精神疾患と注意障害 9.ADHD, 広汎性発達障害と注意障害. 専門医のための精神科臨床リュミエール 10 注意障害. 中山書店 164-172, 2010.
- 7) 稲垣真澄: 特異的発達障害診断・治療のための実践ガイドライン わかりやすい診断手順と支援の実際. 診断と治療社 2010.
- 8) 小久保奈緒美: 第 7 章 障害のある子どもの精神保健 2.慢性疾患. 宮本信也・小野里美帆編著, 保育にいかす精神保健, 健帛社, 2010.

(4) 研究報告書

- 1) 稲垣真澄: 顔認知障害の病態生理の解明とその治療法の開発. 新学術領域研究 文科省科研費補助金新学術研究「学際的研究による顔認知メカニズムの解明」(領域代表者: 柿木隆介) 第 2 回領域班会議抄録集. pp19, 2010.
- 2) 加我牧子, 稲垣真澄, 軍司敦子, 崎原ことえ, 中村雅子: 小児副腎白質ジストロフィー(ALD) 兄弟受診例の臨床特徴の解析. 平成22年度厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患克服研究事業「運動失調症の病態解明と治療法開発に関する研究班」(主任研究者: 西澤正豊) 班会議プログラム抄録集. pp.57, 2011.
- 3) 稲垣真澄: 総括研究報告. 厚生労働科学研究補助金障害者対策総合研究事業(H20-障害-一般-009)「小児行動の二次元尺度化に基づく発達支援策の有効性定量評価に関する研究(研究代表者: 稲垣真澄)」平成 22 年度総括・分担研究報告書. pp1-5, 2011.
- 4) 軍司敦子: ソーシャルスキルトレーニングにおける援助行動学習に関する客観的評価—事象関連電位 P300 の検討—. 厚生労働科学研究補助金障害者対策総合研究事業(H20-障害-一般-009)「小児行動の二次元尺度化に基づく発達支援策の有効性定量評価に関する研究(研究代表者: 稲垣真澄)」平成 22 年度総括・分担研究報告書. pp7-28, 2011.
- 5) 稲垣真澄: 総合研究報告. 小児行動の二次元尺度化に基づく発達支援策の有効性定量評価に関する研究. 厚生労働科学研究補助金障害者対策総合研究事業(H20-障害-一般-009)「小児行動の二次元尺度化に基づく発達支援策の有効性定量評価に関する研究(研究代表者: 稲垣真澄)」平成 22 年度総合研究報告書. pp1-7, 2011.
- 6) 軍司敦子: 社会性行動評価の基準行動作成を目的とした発達障害児における治療的介入の客観的評価指標の提案: 二次元尺度による行動学的分析と顔認知の生理学的分析. 厚生労働科学研究補助金障害者対策総合研究事業(H20-障害-一般-009)「小児行動の二次元尺度化に基づく発達支援策の有効性定量評価に関する研究(研究代表者: 稲垣真澄)」平成 22 年度総合研究報告書. pp9-26, 2011.
- 7) 稲垣真澄, 小林朋佳, 軍司敦子, 矢田部清美, 加我牧子, 後藤隆章: 学童におけるひらがな音読の発達的变化: ひらがな単音, 単語, 単文速読課題を用いて. 読み書き障害児の認知神経科学的特性に基づいた支援法開発に関する研究. 科学研究費補助金 基盤研究(B), 研究成果報告書. pp13-24, 2011.
- 8) 後藤隆章, 稲垣真澄: 発達性読み書き障害児における漢字と平仮名の読み書き障害様相の関連性について. 読み書き障害児の認知神経科学的特性に基づいた支援法開発に関する研究. 科学研究費補助金 基盤研究(B), 研究成果報告書. pp39-46, 2011.
- 9) 後藤隆章, 稲垣真澄: 発達性読み書き障害(Dyslexia)児に対する漢字の読み書き介入効果 —認知神経心理学的読み書きモデルを用いた介入効果メカニズムの解明—. 読み書き障害児の認知神経科学的特性に基づいた支援法開発に関する研究. 科学研究費補助金 基盤研究(B), 研究成果報告書. pp47-61, 2011.

- 10) 矢田部清美, 稲垣真澄, 後藤隆章, 加我牧子: 認知神経心理学的モデルに基づいた小学生用漢字単語課題の開発. 読み書き障害児の認知神経科学的特性に基づいた支援法開発に関する研究. 科学研究費補助金 基盤研究(B), 研究成果報告書. pp25-38, 2011.

(5) 翻訳

- 1) 井上勝夫, 井上祐紀(翻訳協力): 発達障害事典. 著者: パスカル・J・アカルド, 編: バーバラ・Y・ホイットマン, 監修: 上林靖子, 加我牧子. 明石書店, 2011.1.15 出版.

(6) その他

- 1) Inagaki M, Yamazaki H, Kobayashi T, Kita Y, Yatabe K, Gunji A, Kaga M: Magnocellular VEP in dyslexics. *Clinical Neurophysiology* 121: S27, 2010.
- 2) Gunji A, Kita Y, Sakihara K, Inoue Y, Kaga M, Inagaki M: Facial cognition in autistic children. *Clinical Neurophysiology* 121: S57, 2010.
- 3) Yamazaki H, Kita Y, Yatabe K, Inagaki M: Time frequency analysis of VEPs elicited by low spatial frequency and high reversal rate stimuli using complex demodulation method. *Clinical Neurophysiology* 121: S102, 2010.
- 4) Yatabe K, Inagaki M, Suzuki K, Kaga M, Watanabe K: Hand-actions implied in hand-written Chinese radicals in the human motor system. *Clinical Neurophysiology* 121: S196, 2010.
- 5) Sakihara K, Gunji A, Kita Y, Furushima W, Inoue Y, Inagaki M, Kaga M: Event-related oscillations to structural encoding of face in children with pervasive developmental disorders. *Clinical Neurophysiology* 121: S266, 2010.
- 6) Kita Y, Gunji A, Inoue Y, Goto T, Inagaki M, Kaga M, Hosokawa T: A hemodynamic study of self-face recognition in autism spectrum disorder (ASD): Relation with ASD severities and self-consciousness. *Clinical Neurophysiology* 121: S266, 2010.
- 7) Kaga M, Inagaki M, Gunji A, Nakamura M: Auditory perception in Landau-Kleffner syndrome. *Clinical Neurophysiology* 121: S35, 2010.
- 8) Inagaki M, Kobayashi T, Kaga M, Kamio Y: Problems of reading and writing in elementary school children: Part I. Nationwide study in Japan. Abstracts from the second Excellence in Paediatrics Conference, 108, 2010.
- 9) Kobayashi T, Inagaki M, Kaga M, Tanaka Y, Kamio Y: Problems of reading and writing in elementary school children: Part II. Relationship with ADHD rating scale. Abstracts from the second Excellence in Paediatrics Conference, 108, 2010.
- 10) Kaga M, Inagaki M, Ohta R: Incidence of Landau-Kleffner syndrome (LKS) in Japan. Abstracts from the second Excellence in Paediatrics Conference, 70, 2010.
- 11) 稲垣真澄: II 障害別クラス分け 5. 知的障害者のクラス分け. 2009 障害者スポーツクラス分けマニュアル, 12-13.
- 12) 稲垣真澄: 日本発達障害学会第 45 回大会 学会企画シンポジウム「発達障害」をめぐる研究と用語・概念に関する動向. 日本発達障害学会第 45 回研究大会—共生社会を生きる—発表論文集 32-33, 2010.
- 13) 稲垣真澄: 第 40 回日本臨床神経生理学会学術大会 サテライトシンポジウム 第 21 回小児脳機能研究会基調講演「発達障害のバイオマーカー: 臨床の現場から」. *臨床神経生理学* 38: 314, 2010.
- 14) 稲垣真澄: (2) 医師・専門家相談. 平成 22 年度板橋区特別支援学級(情緒)の教育～実践報告～, pp24.

- 15) 加地雄一, 後藤隆章, 矢田部清美, 加我牧子, 稲垣真澄: 発達性 Dyslexia 児と ADHD 児における漢字の書字障害特性に関する研究—書字エラー分析による検討—. 認知神経科学 12: 118, 2010.
- 16) 鋤柄小百合, 後藤隆章, 矢田部清美, 開道貴信, 廣實真弓, 中川栄二, 須貝研二, 大槻泰介, 佐々木征行, 稲垣真澄: てんかん術後に仮名に強い失読を生じた一男児例. 認知神経科学 12: 117, 2010.
- 17) 中村雅子, 山崎広子, 稲垣真澄, 加我君孝: 一酸化炭素中毒により視空間認知障害を認めた小児の1症例—漢字の読み書き指導法について—. 認知神経科学 12: 117, 2010.
- 18) 田中真理, 滝吉美知香, 斎藤維斗, 横田晋務, 李熙馥, 北 洋輔, 黒田麻由美, 佐藤健太郎: 自己理解・他者理解のためのグループワーク. KOBAYASHIKEN, 仙台. 2010.
- 19) 崎原ことえ, 軍司敦子, 井上祐紀, 北 洋輔, 加我牧子, 稲垣真澄: 広汎性発達障害児における顔識別時の事象関連オシレーション. 臨床神経生理学 38: 345, 2010.
- 20) 後藤隆章, 北 洋輔, 小池敏英, 稲垣真澄: 音韻処理中の前頭前野脳血流変化: Optical encephalography を用いた定型発達児の検討. 臨床神経生理学 38: 315, 2010.
- 21) 平井真洋, 軍司敦子, 北 洋輔, 井上祐紀, 柿木隆介, 稲垣真澄: バイオロジカルモーション知覚処理に関連した神経活動の計測. 臨床神経生理学 38: 362, 2010.
- 22) 本田涼子, 高橋章夫, 金子 裕, 開道貴信, 大槻泰介, 福村 忍, 比屋根真彦, 岡崎哲也, 石山昭彦, 鋤柄小百合, 中川栄二, 須貝研司, 佐々木征行, 稲垣真澄: 言語優位半球の同定を行った軽度精神遅滞を有する難聴てんかん小児例. 臨床神経生理学 38: 343, 2010.
- 23) 米川貴博, 中川栄二, 鋤柄小百合, 石山昭彦, 佐久間啓, 斎藤義朗, 小牧宏文, 須貝研司, 佐々木征行, 稲垣真澄, 中田安浩, 佐藤典子: Septo-optic dysplasia 例の VEP, NIRS, 拡散テンソル画像を用いた視覚伝導の検討. 臨床神経生理学 38: 342, 2010.

B. 学会・研究会における発表

(1) 学会特別講演, 教育講演, シンポジウム, ワークショップ, パネルディスカッション等

- 1) Inagaki M, Yamazaki H, Kobayashi T, Kita Y, Yatabe K, Gunji A, Kaga M: Magnocellular VEP in dyslexics. 29th International Congress of Clinical Neurophysiology, Kobe, Japan. October 28-November 1, 2010.
- 2) Gunji A, Kita Y, Sakihara K, Inoue Y, Kaga M, Inagaki M: Facial cognition in autistic children (Symposium 38: Face perception). The 29th International Congress of Clinical Neurophysiology (ICCN), Kobe, October 28-November 1, 2010.
- 3) Kaga M, Inagaki M, Gunji A, Nakamura M: Auditory perception in Landau-Kleffner syndrome. 29th International Congress of Clinical Neurophysiology, Kobe, Japan. October 28-November 1, 2010.
- 4) 稲垣真澄: 特異的発達障害とくに発達性読み書き障害の診断・治療ガイドラインのご紹介. 第52回日本小児神経学会総会モーニング教育セミナー, 福岡, 2010.5.21.
- 5) 加我牧子, 稲垣真澄, 軍司敦子: 発達障害の認知機能評価. 第15回認知神経科学会学術集会教育講演IV, 松江, 2010.7.17-18.
- 6) 稲垣真澄: 医療分野(医学研究)からの話題提供(2008年と2009年). 日本発達障害学会第45回大会 学会企画シンポジウム「発達障害」をめぐる研究と用語・概念に関する動向, 神奈川, 2010.9.5.
- 7) 稲垣真澄: 発達障害児における顔認知の異質性: 神経生理学的知見から. 第3回社会感情神経科学研究会(J-SANS2010), 東京, 2010.9.25.
- 8) 井上祐紀: AD/HD 児における事象関連電位の異常と薬物療法による効果. シンポジウム2「ADHDの薬物療法と生理学的指標によるその評価(日本臨床神経生理学会との合同シンポジウム)」, 第20

回日本臨床精神神経薬理学会・第40回日本神経精神薬理学会合同年会, 宮城, 2010.9.15.

- 9) 北 洋輔: 自閉症スペクトラム障害児の自己顔認知: NIRS と眼球運動測定を用いて. 第28回日本生理心理学会 シンポジウム「顔認知に関わる生理心理学的知見から社会性認知を探る」, 茨城, 2010.5.15.
- 10) 後藤隆章, 北 洋輔, 小池敏英, 稲垣真澄: 音韻処理中の前頭前野脳血流変化: Optical encephalographyを用いた定型発達児の検討. 第40回日本臨床神経生理学会学術大会 サテライトシンポジウム 第21回小児脳機能研究会, 兵庫, 2010.11.2.

(2) 一般演題

- 1) Inagaki M, Kobayashi T, Kaga M, Kamio Y: Problems of reading and writing in elementary school children: Part I. Nationwide study in Japan. Excellence in Paediatrics, London, December 2-4, 2010.
- 2) Gunji A, Inoue Y, Kita Y, Sakihara K, Kaga M, Inagaki M: Discrimination of one's own face and familiar face in children with Pervasive Developmental Disorders (PDD): an event related potential (ERP) study. The 11th International Child Neurology Congress, Cairo, Egypt, May 1-7, 2010.
- 3) Kaji Y, Inagaki M: The effects of handwriting action on memory for novel Japanese kanji character. 8th Tsukuba International Conference on Memory, Tsukuba, Japan, March 29-31, 2010.
- 4) Kita Y, Gunji A, Goto T, Sakuma R, Koike T, Hosokawa T, Inagaki M, Kaga M: Intervention Effects of Social-Skill Training for Children with Autism Spectrum Disorders: Quantitative Behavioral Assessments with Two-Dimensional Motion Capture System. The 11th International Child Neurology Congress, Cairo, Egypt, May 1-7, 2010.
- 5) Inoue Y, Gunji A, Sakihara K, Kita Y, Inagaki M: Disorder-specific effect of preceding response execution on inhibitory processing in children with attention-deficit hyperactivity disorder: an ERP study. 18th Biennial Meeting of the International Society for Developmental Neuroscience: Portugal, June 6-9, 2010.
- 6) Yatabe K, Inagaki M, Suzuki K, Watanabe K, Kaga M: Motion Perception of Explicit and Implicit Hand Action Associated with Writing Letters. The 50th annual meeting of the Society for Psychophysiological Research, Marriott Downtown Waterfront, Portland, Oregon, USA, September 29 - October 3, 2010
- 7) Yamazaki H, Kita Y, Yatabe K, Inagaki M: Time frequency analysis of VEPs elicited by low spatial frequency and high reversal rate stimuli using complex demodulation method. 29th International Congress of Clinical Neurophysiology, Kobe, Japan, October 28-November 1, 2010.
- 8) Yatabe K, Inagaki M, Suzuki K, Kaga M, Watanabe K: Hand-actions implied in hand-written Chinese radicals in the human motor system. 29th International Congress of Clinical Neurophysiology, Kobe, Japan, October 28-November 1, 2010.
- 9) Sakihara K, Gunji A, Kita Y, Furushima W, Inoue Y, Inagaki M, Kaga M: Event-related oscillations to structural encoding of face in children with pervasive developmental disorders. 29th International Congress of Clinical Neurophysiology, Kobe, Japan, October 28-November 1, 2010.
- 10) Kita Y, Gunji A, Inoue Y, Goto T, Inagaki M, Kaga M, Hosokawa T: A hemodynamic study of self-face recognition in autism spectrum disorder (ASD): Relation with ASD severities and self-consciousness. 29th International Congress of Clinical Neurophysiology, Kobe,

- Japan, October28-November1, 2010.
- 11) Inoue K, Aoyagi N, Inoue Y, Itoh Y, Inoue Y, Matsuda Y, Inagaki M, Inoue T, Goto Y, Kohsaka S, Akazawa C: Sox10 BAC transgenic mouse modeling a complex neurocristopathy, PCWH. The American Society of Human Genetics 60th Annual Meeting. Washington DC, November 2–6, 2010.
 - 12) Kobayashi T, Inagaki M, Kaga M, Tanaka Y, Kamio Y: Problems of reading and writing in elementary school children: Part II. Relationship with ADHD rating scale. Excellence in Paediatrics, London, 2-4 December, 2010.
 - 13) Kaga M, Inagaki M, Ohta R: Incidence of Landau-Kleffner syndrome (LKS) in Japan. Excellence in Paediatrics, London, December 2-4, 2010.
 - 14) Gunji A, Takeichi H, Inoue Y, Okada H, Omori T, Inagaki M, Kaga M: Single one-minute trial assessment of speech processing in school age children. 日本音響学会聴覚研究会, 福岡, 2010.12.10-11.
 - 15) 井上祐紀, 崎原ことえ, 小沢浩, 木実谷哲史, 篠田晴男, 稲垣真澄: AD/HD 児に併存する抑うつ・不安症状に関連する脳血流病態の特徴. 第 52 回日本小児神経学会総会, 福岡, 2010.5.21.
 - 16) 山崎広子, 北 洋輔, 矢田部清美, 小林朋佳, 加我牧子, 稲垣真澄: 発達性読み書き障害児の大細胞系機能評価と読字書字症状との関連: 低空間周波数サイン様縦縞刺激 VEP による検討. 第 52 回日本小児神経学会総会, 福岡, 2010.5.21.
 - 17) 小林朋佳, 稲垣真澄, 井上祐紀, 崎原ことえ, 後藤隆章, 矢田部清美, 小沢 浩, 木実谷哲史, 加我牧子: 発達障害児にみられる学習障害の特徴: 臨床症状と音読課題の検討. 第 52 回日本小児神経学会総会, 福岡, 2010.5.20.
 - 18) 林 隆, 木戸久美子, 稲垣真澄: 二次元尺度を用いた行動解析による ADHD 児に対する感覚統合訓練の有効性の評価. 第 52 回日本小児神経学会総会, 福岡, 2010.5.21.
 - 19) 加地雄一, 後藤隆章, 矢田部清美, 加我牧子, 稲垣真澄: 発達性 Dyslexia 児と ADHD 児における漢字の書字障害特性に関する研究—書字エラー分析による検討—. 第 15 回認知神経科学学会学術集会, 松江, 2010.7.17-18.
 - 20) 鋤柄小百合, 後藤隆章, 矢田部清美, 開道貴信, 廣實真弓, 中川栄二, 須貝研二, 大槻泰介, 佐々木征行, 稲垣真澄: てんかん術後に仮名に強い失読を生じた一男児例. 第 15 回認知神経科学学会学術集会, 島根, 2010.7.17-18.
 - 21) 中村雅子, 山崎広子, 稲垣真澄, 加我君孝: 一酸化炭素中毒により視空間認知障害を認めた小児の 1 症例—漢字の読み書き指導法について—. 第 15 回認知神経科学学会学術集会, 島根, 2010.7.17-18.
 - 22) 稲垣真澄: 自己顔・他者顔認知における脳波律動と脳血流変動. 平成 22 年度「包括型脳科学研究推進支援ネットワーク」夏のワークショップ, 北海道, 2010.7.27-30.
 - 23) 軍司敦子, 崎原ことえ, 北 洋輔, 井上祐紀, 加我牧子, 稲垣真澄: 広汎性発達障害児における顔識別と既知性の関連: ERP を用いて. 平成 22 年度「包括型脳科学研究推進支援ネットワーク」夏のワークショップ, 北海道, 2010.7.27-30.
 - 24) 久保由美子, 長尾秀夫, 稲垣真澄: 読字障害のある子どもの早期発見と支援—小・中学生の事例を通して—. 日本特殊教育学会第 48 回大会, 長崎, 2010.9.18-20.
 - 25) 松田芳樹, 泉仁美, 井上祐紀, 加我牧子, 稲垣真澄, 後藤雄一: マウス不安状態に関連する皮質高周波活動の電気生理学的解析. 第 33 回日本神経科学学会, 兵庫, 2010.9.2-4.
 - 26) 松田芳樹, 泉仁美, 井上祐紀, 加我牧子, 稲垣真澄, 後藤雄一: マウスは不安亢進と大脳皮質抑制系異常を呈する. 第 40 回日本神経精神薬理学会, 宮城, 2010.9.17.
 - 27) 後藤隆章, 加地雄一, 矢田部清美, 稲垣真澄: 発達性 dyslexia 児における漢字の読み困難と平仮名読み特性との関連について. 日本特殊教育学会第 48 回大会, 長崎, 2010.9.18-20.

- 28) 米川貴博, 中川栄二, 竹下絵里, 佐久間啓, 斎藤義朗, 小牧宏文, 須貝研司, 佐々木征行, 開道貴信, 金子 裕, 高橋章夫, 大槻泰介, 井上祐紀, 稲垣真澄, 加我牧子: 難治性てんかんに対する脳梁離断術が小児の注意機能, 行動障害に及ぼす効果. 第 44 回日本てんかん学会, 岡山, 2010.10.14-15.
- 29) 青天目信, 中川栄二, 佐久間啓, 斎藤義朗, 小牧宏文, 須貝研司, 佐々木征行, 井上祐紀, 稲垣真澄, 大沼悌一: 発作増悪に伴い著名な記憶障害を呈した Bilateral parasagittal parieto-occipital polymicrogyria の一例. 第 44 回日本てんかん学会, 岡山, 2010.10.14-15.
- 30) 崎原ことえ, 軍司敦子, 井上祐紀, 北 洋輔, 加我牧子, 稲垣真澄: 広汎性発達障害児における顔識別時の事象関連オシレーション. 第 40 回日本臨床神経生理学会学術大会, 兵庫, 2010.11.1-2.
- 31) 平井真洋, 軍司敦子, 北 洋輔, 井上祐紀, 柿木隆介, 稲垣真澄: バイオロジカルモーション知覚処理に関連した神経活動の計測. 第 40 回日本臨床神経生理学会学術大会, 兵庫, 2010.11.1-2.
- 32) 本田涼子, 高橋章夫, 金子 裕, 開道貴信, 大槻泰介, 福村 忍, 比屋根真彦, 岡崎哲也, 石山昭彦, 鋤柄小百合, 中川栄二, 須貝研司, 佐々木征行, 稲垣真澄: 言語優位半球の同定を行った軽度精神遅滞を有する難知てんかん小児例. 第 40 回日本臨床神経生理学会学術大会, 兵庫, 2010.11.1-2.
- 33) 米川貴博, 中川栄二, 鋤柄小百合, 石山昭彦, 佐久間啓, 斎藤義朗, 小牧宏文, 須貝研司, 佐々木征行, 稲垣真澄, 中田安浩, 佐藤典子: Septo-optic dysplasia 例の VEP, NIRS, 拡散テンソル画像を用いた視覚伝導の検討. 第 40 回日本臨床神経生理学会学術大会, 兵庫, 2010.11.1-2.
- 34) 伊藤亨子, 青柳直子, 井上由起子, 松田芳樹, 稲垣真澄, 高坂新一, 井上高良, 赤澤智宏, 井上健: 変異型 Sox10BAC トランスジェニックマウスによる複合型神経堤症候群 PCWH のモデル動物の作成. 第 55 回日本人類遺伝学会, 埼玉, 2010.10.27-30.
- 35) 鈴木浩太, 篠田晴男: フランカー課題における系列効果とエラー関連陰性電位. 第 40 回日本臨床神経生理学会学術大会, 兵庫, 2010 年 11 月 2 日

(3) 研究報告会

- 1) 稲垣真澄: 顔認知障害の病態生理の解明とその治療法の開発. 新学術領域研究 文科省科研費補助金新学術研究「学際的研究による顔認知メカニズムの解明」(領域代表者: 柿木隆介) 第 2 回領域班会議, 沖縄, 2010.12.23-24.
- 2) 稲垣真澄: 座長. セッション 3, A03 班「顔認知障害の病態生理の解明とその治療法の開発」. 新学術領域研究 文科省科研費補助金新学術研究「学際的研究による顔認知メカニズムの解明」(領域代表者: 柿木隆介) 第 2 回領域班会議, 沖縄, 2010.12.23.
- 3) 加我牧子, 稲垣真澄, 軍司敦子, 崎原ことえ, 中村雅子: 小児副腎白質ジストロフィー(ALD) 兄弟受診例の臨床特徴の解析. 平成22年度厚生労働科学研究費補助金 難治性疾患克服研究事業「運動失調症の病態解明と治療法開発に関する研究班」(主任研究者: 西澤正豊) 班会議, 東京, 2011.1.13-14.
- 4) 稲垣真澄: 小児行動の二次元尺度化に基づく発達支援策の有効性定量評価に関する研究. 厚生労働科学研究費研究成果等普及啓発事業 障害者対策総合研究成果発表会, 新宿, 2011.2.7.
- 5) 崎原ことえ: 第 46 回(2010 年) 財団法人 明治安田こころの健康財団 研究助成「テーマ: 広汎性発達障害児の神経基盤の解明. 副題: ミラーニューロンシステムと運動巧緻性発達の観点から」
- 6) 軍司敦子, 後藤隆章, 佐久間隆介, 北 洋輔, 加地雄一: 広汎性発達障害児の援助行動に関する客観的評価法の検討: 行動と脳機能の解析. 平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金 障害者対策総合研究事業(身体・知的等障害分野)「小児行動の二次元尺度化に基づく発達支援策の有効性定量評価に関する研究」第 5 回研究班会議(研究代表者 稲垣真澄). 山口, 2010.4.17.
- 7) 北 洋輔, 稲垣真澄, 細川徹: Autism Spectrum Disorders 児の対人距離に関する研究動向. 平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金 障害者対策総合研究事業(身体・知的等障害分野)「小児行動の二次元尺度化に基づく発達支援策の有効性定量評価に関する研究」第 5 回研究班会議(研

- 究代表者 稲垣真澄). 山口, 2010.4.17.
- 8) 稲垣真澄:第一部「脳科学の進歩と発達障害への支援の展開」はじめに. 厚生労働科学研究費 障害者対策総合研究事業「小児行動の二次元尺度化に基づく発達支援策の有効性定量評価に関する研究」班主催 発達障害公開セミナー in 山口「しっちよる、発達障害? 支援って何したらええん? 脳科学の進歩と教育実践への応用」. 山口, 2010.10.17.
 - 9) 軍司敦子, 後藤隆章, 佐久間隆介, 北洋輔, 加地雄一, 稲垣真澄:広汎性発達障害児の援助行動に関する客観的評価法の検討:行動と脳機能の解析. 厚生労働科学研究費補助金 障害者対策総合研究事業(身体・知的等障害分野)「小児行動の二次元尺度化に基づく発達支援策の有効性定量評価に関する研究」(研究代表者:稲垣真澄), 平成 22 年度第 2 回班会議, 山口, 2010.10.16.
 - 10) 軍司敦子. ソーシャルスキルトレーニング(SST)は、こども達のここを変える! 厚生労働科学研究費 障害者対策総合研究事業「小児行動の二次元尺度化に基づく発達支援策の有効性定量評価に関する研究」班主催 発達障害公開セミナー in 山口「しっちよる、発達障害? 支援って何したらええん? 脳科学の進歩と教育実践への応用」. 山口, 2010.10.17.
 - 11) 軍司敦子, 稲垣真澄:聴性の社会性認知に関わる脳機能発達の検討. 発達障害の神経科学的基盤の解明と治療法開発に関する研究班(主任研究者:稲垣真澄). 精神・神経疾患研究開発費平成 22 年度合同シンポジウム, 小平市, 2010.11.20.
 - 12) 井上祐紀, 軍司敦子, 北洋輔, 稲垣真澄, 小沢浩, 木実谷哲史:AD/HD に伴う破壊的行動障害の中樞神経病態の解明. 精神・神経疾患研究開発費 22-6, 平成 22 年度 第 2 回研究班会議, 小平, 東京, 2010.11.19-20.
 - 13) 後藤隆章, 北洋輔, 小池敏英, 稲垣真澄:特異的発達障害(読み書き障害)の神経科学的病態解明—音韻処理課題中の脳血流応答特性に関する研究—. 精神・神経疾患研究開発費 22-6, 平成 22 年度 第 2 回研究班会議, 小平, 東京, 2010.11.19-20.
 - 14) 北洋輔:PDD を有する非行少年の危険・保護因子の解明とエビデンスに基づいた評価・介入法の提案—教育・心理学領域と神経心理・神経生理学領域の融合研究. 東北大学国際高等研究教育院 第 1 回博士研究教育院生研究成果発表会, 仙台, 2011.2.28. — 3.1.
 - 15) 北洋輔:自閉症スペクトラム障害児の自己顔認知. 第 2 回 Human Movement 研究会, 池袋, 2011.3.4.

C. 講演

- 1) 稲垣真澄:知的障害の医療. 国立障害者リハビリテーションセンター 自立支援局秩父学園附属保護指導職員養成所講義, 2010.6.17.
- 2) 稲垣真澄:発達障害の医学的理解～医療ができること, 学校ができること～. H22 年度あきる野市教育相談研修会 あきる野市教育委員会講演, 東京, 2010.7.22.
- 3) 稲垣真澄:特異的発達障害～発達性読み書き障害の診断と治療・介入. 第 28 回香川発達神経研究会・学術講演会, 香川, 高松, 2011.3.5.
- 4) 井上祐紀:こころの発達とメンタルヘルス. 東京都立日野台高等学校講演会 2010.6.12.
- 5) 井上祐紀:発達障害と子どもの脳機能～そして子どもの育ちについて～. 玉川大学教育学部 公衆衛生学特別講義, 玉川大学, 東京, 2010.6.28.
- 6) 井上祐紀:臨床精神医学の視点から～子どもの発達障害と攻撃性をどうとらえるか～. 第1回メディアカンファレンス・発達障害と知的障害と触法行為～その理解と支援のあり方～, 全国町村会館, 東京, 2010.6.28.
- 7) 井上祐紀:医療と特別支援教育との連携. 日野市特別支援学級担任会 講演, 日野市立教育センター, 日野市, 2010.10.7.

- 8) 井上祐紀: 発達障害の理解と支援. 平成 22 年度小平市市民活動公募助成事業, 小平, 2011.1.22.
- 9) 井上祐紀: 思春期の発達障害とメンタルヘルス. 子どもの心の診療拠点病院機構推進事業, 鳥取, 2011.1.23.
- 10) 井上祐紀: 発達障害の理解と支援. 平成 22 年度小平市市民活動公募助成事業 精神障がい者を支援する市民講座, 小平市元気村, 小平, 2011.1.23.
- 11) 井上祐紀: 思春期の発達障害とメンタルヘルス. 子どもの心の診療拠点病院機構推進事業医師・医療従事者向け講演会, 鳥取県立倉吉未来中心, 倉吉, 2011.1.23

D. 学会活動 (学会主催, 学会役員, 座長, 編集委員)

(1) 学会役員

- 1) 稲垣真澄: 日本小児神経学会評議員
- 2) 稲垣真澄: 日本臨床神経生理学会評議員
- 3) 稲垣真澄: 小児脳機能研究会世話人 事務局
- 4) 稲垣真澄: 日本てんかん学会 てんかん専門医指導医.

(2) 座長

- 1) 稲垣真澄: 第 21 回小児脳機能研究会 基調講演「発達障害のバイオマーカー: 臨床の現場から」. 第 40 回日本臨床神経生理学会学術大会 サテライトシンポジウム, 神戸, 2010.11.2.
- 2) 勝二博亮, 軍司敦子 (企画・司会). シンポジウム「顔認知に関わる生理心理学的知見から社会性認知を探る」. 第 28 回日本生理心理学会, 水戸, 2010.5.15-16.

(3) 編集委員等

- 1) 稲垣真澄: 発達障害研究 常任編集委員
- 2) 稲垣真澄: 日本小児神経学会機関誌「脳と発達」編集委員
- 3) 稲垣真澄: 日本小児神経学会機関誌「Brain & Development」編集委員
- 4) 軍司敦子: 二級臨床検査士資格認定試験 試験委員(平成 22 年度).

E. 研修

(1) 研修企画

- 第 9 回発達障害支援のための医学研修 2010.7.7-8.
 第 10 回発達障害支援のための医学研修 2011.2.9-10.

F. その他

- 1) 稲垣真澄: 発達障害児の医療教育相談. 板橋区立下赤塚小学校. 2010.8.26.
- 2) 崎原ことえ: ヒトニューロメカニズム. 神経研究所 モデル動物開発部セミナー, 2010.5.14.
- 3) 後藤隆章: 特別支援教育巡回相談, 青梅市立青梅第三中学校, 2010.6.7
- 4) 後藤隆章: 特別支援教育の実践と教材. 平成 22 年度ボランティアの資質向上に関する三市・学芸大連携講座, 白梅学園大学, 2010.10.6.
- 5) 後藤隆章: 東京都立小平特別支援学校武蔵分教室校内研修会. 国立精神・神経医療研究センター病院内武蔵分教室, 2010.10.27.
- 6) 後藤隆章: 特別支援教育巡回相談. 青梅市立今井小学校, 2011.1.28.
- 7) 後藤隆章: 小平市立小平第一中学校 「生徒理解のための研修会」講師 2011.2.17.

11. 社会復帰研究部

I. 研究部の概要

社会復帰研究部は、生物・心理・社会的観点から精神疾患や精神障害を多面的に捉え、施策としても導入可能な精神保健医療福祉のサービスプログラムのモデルを呈示し、その効果に関する実証研究を推進することを、目的の第一としている。また非精神病圏のメンタルヘルスに対する対策のニーズが急増していることとともない統合失調症のみならず、摂食障害、あるいは社会的ひきこもりなども研究対象としてきた。近年は、地域中心の精神保健医療福祉のシステムモデル作りが当部の大きな研究課題となっている。

具体的には、重症精神障害者の地域生活支援を可能にするための訪問を主体とした包括型地域生活支援プログラム（ACT）のモデル作り及び普及のための研究、精神障害者の一般就労と職場適応を支援するためのモデルプログラム（IPS）の開発、わが国の現状にあった障害者ケアマネジメントの普及と定着のための研究、精神科救急・急性期病棟での退院促進のためのケアマネジメントの導入の研究等に精力を注いできた。本年度は、専門疾病センターの「地域精神科モデル医療センター」の運営にコミットし、小平地区の活動も充実してきている。

【部の構成】

部長：伊藤順一郎

精神保健相談研究室長：瀬戸屋雄太郎（～1月24日）

援助技術研究室長：吉田光爾

併任研究員：安西信雄（国立精神・神経医療研究センター病院副院長）

坂田増弘（国立精神・神経医療研究センター病院第3医療観察科医長）

佐竹直子（国立国際医療研究センター国府台病院医師）

樽谷精一郎（国立国際医療研究センター国府台病院医師）

客員研究員：大嶋 巖（日本社会事業大学社会福祉学部教授）

西尾雅明（東北福祉大学総合福祉学部教授）

稲垣 中（慶應義塾大学大学院准教授）

瀬戸屋雄太郎（1月25日～）（世界保健機関精神保健薬物依存部 Technical Officer）

流動研究員：英 一也，高原優美子

外来研究員：前田恵子，佐藤さやか

協力研究員：堀内健太郎，香田真希子，贄川信幸，小川雅代，久永文恵，高橋 誠

研 究 生：小泉智恵，浪久 悠

Ⅱ. 研究活動

1) 精神障害者の退院促進と地域生活支援のための多職種によるサービス提供のあり方とその効果に関する研究（伊藤順一郎，瀬戸屋雄太郎，大嶋 巖，西尾雅明，吉田光爾，園 環樹，英 一也，高原優美子 他）

現在、我が国における精神科医療保健福祉は、病院から地域へ、という改革期にある。本研究班では、今後の望ましい地域精神医療の機能分化を明らかにするために、地域で重度の精神障害者を支えるサービスである ACT，精神科訪問看護，精神科デイケアについて、その対象者像，提供しているケア内容，そしてアウトカムを明らかにした。

2) 「地域中心の精神保健医療福祉」を推進するための精神科救急及び急性期医療のあり方に関する研究（伊藤順一郎，瀬戸屋雄太郎，吉田光爾，佐藤さやか，高原優美子，前田恵子 他）

今後、精神科病床を削減していくためには、長期在院患者の退院促進だけでなく、新規入院患者の長期在院化、いわゆる **New Long Stay** 化を予防するための取り組みが必要である。本研究班では、その取り組みの一つとして、精神科救急・急性期病棟におけるケアマネジメントに焦点を当て、入院早期から地域生活を視野に入れたケアマネジメントモデルを構築し、その効果評価を実施した。

3) 精神障害者の認知機能障害を向上させるための「認知機能リハビリテーション」に用いるコンピュータソフト「Cogpack」の開発とこれを用いた「認知機能リハビリテーション」効果検討に関する研究（伊藤順一郎、佐藤さやか 他）

近年、統合失調症における認知機能障害の改善に対して認知機能リハビリテーションの効果が期待されている。本研究では、神経心理学的変数および賃金や就労期間などの就労関連指標をアウトカムとし、統合失調症患者に対する認知機能リハビリテーションの効果検討を実施した。本研究の結果から、認知機能リハビリテーションは統合失調症をもつ人の言語性記憶、作業記憶、処理速度に良い影響をもたらすことが示唆された。賃金や就労期間などの就労関連指標については当センターを含む全国11病院でデータ収集中であり、平成23年7月に最後のデータ収集を予定している。今後認知機能リハビリテーションが就労に与える影響について検討を行っていく。

4) 専門疾病センター（地域精神科モデル医療センター）

我が国における地域中心の精神科医療のモデル構築を目的として、多職種アウトリーチサービスや就労支援までを視野にいたれた医療型デイケアを中心とした地域支援を実施する。平成22年度はスタッフの確保や備品などの整備、研修等を行った。平成23年度からは厚生労働科研費「地域生活中心」を推進する、地域精神科医療モデル作りとその効果検証に関する研究」が採択されており、本センターを拠点に研究活動も展開する予定である。

Ⅲ. 社会的活動

1) 市民社会に対する一般的な貢献

伊藤、瀬戸屋、吉田は、地域における講演会などに講師として可能な限り参加した。

英は、千葉県市川市の障害者自立支援法下区分認定審査会委員を務め、また「ひきこもりの相談支援体制に関する担当者会議」の開催に参画した。

2) 専門教育面における貢献

伊藤、瀬戸屋、吉田は、各都道府県の精神保健福祉センター、福祉局等で行われる研修事業のうち、包括型地域生活支援プログラム（ACT）、心理教育、デイ・ケア、ホームヘルプ、家族支援、解決志向的面接技法等のワークショップ、講演等に可能な限り協力した。

吉田は、日本社会事業大学にて非常勤講師として「精神保健学」の授業を担当した。

高原は、学校法人文教大学学園文教大学にて非常勤講師として「精神科リハビリテーション学」、「就労支援サービス」の授業を担当した。

佐藤は、青山学院女子短期大学にて非常勤講師として「臨床心理学」を担当した。また日本社会事業大学専門職にて「SST」を担当した。

3) 精研の研修の主催と協力

伊藤は、本年度、第8回ACT研修の主任・講師、第2回アウトリーチによる地域ケアマネジメント並びに訪問型生活訓練研修の主任・講師、第8回摂食障害治療研修の講師を務めた。

瀬戸屋は、第8回ACT研修の副主任を務めた。

吉田は、第2回アウトリーチによる地域ケアマネジメント並びに訪問型生活訓練研修の副主任・講師を務めた。

4) 保健医療行政・政策に関する研究・調査、委員会等への貢献

伊藤は、独立行政法人高齢・障害者雇用支援機構、外部評価委員会職業リハビリテーション専門部会委員、こころの健康政策会議構想会議の委員を務めた。

高原は、平成23年1月から春日部市自立支援協議会委員を務めた。

5) センター内における臨床的活動

伊藤は、地域精神科モデル医療センターのセンター長として、当センターの急性期病棟、在宅医療支援室と連携し、センター内での地域精神科リハビリテーションのシステム作りに関与している。また国立国際医療研究センター国府台病院精神科で、毎週 1~1.5 ポイント外来診療に従事している。

IV. 研究業績

A. 刊行物

(1) 原著論文

- 1) Setoya Y, Saito K, Kasahara M, Watanabe K, Kodaira M, Usami M : Evaluating outcomes of the child and adolescent psychiatric unit: a prospective study. *International Journal of Mental Health Systems* 5:7, 2011
- 2) Ng C, Setoya Y, Koyama A, Takeshima T : The ongoing development of community mental health services in Japan: utilizing strengths and opportunities. *Australas Psychiatry* 18(1): 57-62, 2010.
- 3) Thornicroft G, Alem A, Antunes Dos Santos R, Barley E, Drake RE, Gregorio G, Hanlon C, Ito H, Latimer E, Law A, Mari J, McGeorge P, Padmavati R, Razzouk D, Semrau M, Setoya Y, Thara R, Wondimagegn D : WPA guidance on steps, obstacles and mistakes to avoid in the implementation of community mental health care. *World Psychiatry* 9:67-77, 2010
- 4) 伊藤順一郎 : 包括的生活支援プログラム (ACT) による予後改善. *精神医学* 53(2) : 161-168, 2011.
- 5) 英 一也, 伊藤順一郎, ACT-J プロジェクト臨床チーム : 拒薬への対応に関する一考察. *精神障害とリハビリテーション* 14(1) : 97-100, 2010.
- 6) 瀬戸屋 希, 萱間真美, 角田 秋, 立森久照, 船越明子, 伊藤順一郎 : 精神科訪問看護における家族ケアの実施状況と、家族ケアに関連する利用者の特徴. *日本社会精神医学会雑誌* 20(1) : 17-25, 2011.

(2) 総説

- 1) 伊藤順一郎, 山本啓太, 堀内 亮, 青木和貴, 田島瑛子, 小河原麻衣, 宮地麻美 : 家族支援ネットワーク : それぞれの現場における考え方と実践. 入院という状況での家族支援, *精神科臨床サービス* 10(3) : 331-336, 2010.
- 2) 伊藤順一郎 : 白衣を捨てよ, 町へ出よう. 〈第 1 回〉アウトリーチサービスによる支援 : 家族支援も視野に入れて(1), *精神科臨床サービス* 10(3) : 413-416, 2010.
- 3) 伊藤順一郎 他 : 家族支援ネットワーク : それぞれの現場における考え方と実践. 訪問による家族支援の新たな方向性. *精神科臨床サービス* 10(3) : 327-330, 2010.
- 4) 伊藤順一郎 : 白衣を捨てよ, 町へ出よう. 〈第 2 回〉アウトリーチサービスによる支援 : 家族支援も視野に入れて(2), *精神科臨床サービス* 10(4) : 549-554, 2010.
- 5) 伊藤順一郎 : 白衣を捨てよ, 町へ出よう. 〈第 3 回〉ストレングスモデルという関わり, *精神科臨床サービス* 11(1) : 142-148, 2011.
- 6) 福井里江, 伊藤順一郎 : 家族の力, 他人の力「家族だから」「他人だから」できること. 家族支援において家族の力を活かすとは?, *臨床作業療法* 7(3) : 188-192, 2010.
- 7) 香月富士日, 小西瑞穂, 伊藤順一郎, 福井里江, 賛川信幸, 二宮史織, 森山亜希子, 大嶋 巖 : ある病院の家族心理教育導入初期の 2 年間の関わりー心理教育普及ガイドラインおよびツールキットを用いてのコンサルテーションー. *家族療法研究* 27(2) : 43-53, 2010.
- 8) 福田正人, 萱間真美, 西田淳志, 田尾有樹子, 高木俊介, 渡邊博幸, 伊藤順一郎 : 総論 : アウトリーチの理念・基本的な考え方を知る, こころの健康を守る政策として求められるアウトリーチ. *精神科臨床サービス* 11(1) : 16-23, 2011.
- 9) 吉田光爾 : 福祉サービスにおけるアウトリーチ. *精神科臨床サービス* 11(1) : 42-46, 2011.

- 10) 吉田光爾, 伊藤順一郎: ACT とアウトリーチ. 精神科 18(1): 46-54, 2011.
- 11) 英 一也, 伊藤順一郎: 訪問による家族支援の新たな方向性, 特集「家族のリカバリーをどう支援するか」. 精神科臨床サービス 10(3): 327-330, 2010.
- 12) 小佐々典靖, 大嶋 巖, 香田真希子, 新井山克徳, 伊藤友里, 高原優美子, 佐藤久夫: 障害者自立支援法下における就労移行支援事業の現状と課題—全国調査から. リハビリテーション研究 №143: 25-30, 2010.
- 13) 佐藤さやか, 伊藤明美: 日常生活技能が低下している統合失調症. Schizophrenia Frontier 11: 34-38, 2011.

(3) 著 書

- 1) 伊藤順一郎, 園 環樹: ACT は患者の社会参加にとってどの程度有効か?. 上島国利 三村将 中込和幸 平島奈津子 編: 統合失調症, EBM 精神疾患の治療 2011-2012. 中外医学社, 東京, pp52-56, 2011.
- 2) 瀬戸屋雄太郎: 心理学的側面からアプローチする検査. 萱間真美, 野田文隆 編: 精神看護学. 南江堂, 東京, pp190-195, 2010.
- 3) 瀬戸屋雄太郎: オーストラリアにおける精神医療改革. 松原三郎, 佐々木一 編: 世界における精神医療改革. 中山書店, 東京, pp147-164, 2010.

(4) 研究報告書

- 1) 伊藤順一郎, 瀬戸屋雄太郎, 吉田光爾, 宇佐美政英, 井上喜久江, 英 一也, 園 環樹: ひきこもりを呈する青年の地域生活支援プログラムに関する研究—縦断研究結果(中間報告)—. 平成 21 年度厚生労働科学研究費補助金(こころの健康科学研究事業)「思春期のひきこもりをもたらす精神科疾患の実態把握と精神医学的治療・援助システムの構築に関する研究(研究代表者: 齋藤万比古)」研究報告書. pp15-27, 2010.
- 2) 伊藤順一郎, 吉田光爾, 瀬戸屋雄太郎, 宇佐美政英, 井上喜久江, 英 一也: ひきこもりを呈する青年の地域生活支援プログラムに関する研究—縦断研究結果—. 平成 19~21 年度厚生労働科学研究費補助金(こころの健康科学研究事業)「思春期のひきこもりをもたらす精神科疾患の実態把握と精神医学的治療・援助システムの構築に関する研究(研究代表者: 齋藤万比古)」総合研究報告書. pp23-29, 2010.
- 3) 伊藤順一郎, 萱間真美, 大嶋 巖, 西尾雅明, 瀬戸屋雄太郎, 瀬戸屋 希: 精神障害者の退院促進と地域生活支援のための多職種によるサービス提供のあり方とその効果に関する研究. 平成 20~22 年度厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業)。「精神障害者の退院促進と地域生活支援のための多職種によるサービス提供のあり方とその効果に関する研究(研究代表者: 伊藤順一郎)」平成 20~22 年度 総合研究報告書. pp3-12, 2011.
- 4) 伊藤順一郎, 吉田統子, 坂田増弘, 市川 亮, 岩脇真理子, 伊藤孝子, 高橋久美, 稲森晃一, 岡佑美, 根岸典子, 上代陽子, 山村 彰, 岩佐 純, 経澤利子, 佐藤さやか: 国立精神・神経医療研究センター病院における就労支援の実践報告. 平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業)「精神障害者の認知機能障害を向上させるための「認知機能リハビリテーション」に用いるコンピュータソフト「Cogpack」の開発とこれを用いた「認知機能リハビリテーション」効果検討に関する研究(主任研究者: 池淵恵美)」研究報告書. pp32-38, 2011.
- 5) 瀬戸屋雄太郎, 佐竹直子, 高原優美子, 前田恵子, 高橋 誠, 佐藤さやか, 吉田光爾, 伊藤順一郎: 精神科救急・急性期病棟におけるケアマネジメントのあり方に関する研究. 精神・神経疾患研究開発費 20 委-8「『地域中心の精神保健医療福祉』を推進するための精神科救急及び急性期医療のあり方に関する研究(主任研究者: 伊藤順一郎)」平成 20~22 年度総括研究報告書. pp149-165, 2011.

- 6) 瀬戸屋雄太郎, 吉田光爾, 瀬戸屋 希, 英 一也, 高原優美子, 高橋 誠, 園 環樹, 角田 秋, 大嶋 巖, 萱間真美, 伊藤順一郎: ACT・訪問看護・デイケアの特徴について—1年後追跡調査—. 平成 20~22 年度厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業)「精神障害者の退院促進と地域生活支援のための多職種によるサービス提供のあり方とその効果に関する研究 (研究代表者: 伊藤順一郎)」平成 20~22 年度 総合研究報告書. pp16-35, 2011.
- 7) 平田豊明, 瀬戸屋雄太郎, 園 環樹, 高原優美子, 高橋 誠: 精神科急性期病棟群退棟患者の転帰と在宅ケアプログラム等の利用状況に関する研究. 精神・神経疾患研究開発費 20 委-8「『地域中心の精神保健医療福祉』を推進するための精神科救急及び急性期医療のあり方に関する研究 (主任研究者: 伊藤順一郎)」平成 20~22 年度 総括研究報告書. pp207-226, 2011.
- 8) 佐竹直子, 瀬戸屋雄太郎, 佐藤さやか, 前田恵子, 高原優美子, 高橋 誠, 伊藤順一郎: 精神科急性期ケアマネジメントモデルの概要. 精神・神経疾患研究開発費 20 委-8「『地域中心の精神保健医療福祉』を推進するための精神科救急及び急性期医療のあり方に関する研究 (主任研究者: 伊藤順一郎)」平成 20~22 年度 総括研究報告書. pp143-147, 2011.
- 9) 吉田光爾, 深谷 裕, 瀬戸屋雄太郎, 伊藤順一郎, 英 一也, 園 環樹, 小川雅代: 障害者ケアマネジメント・フィデリティ尺度を用いた障害者ケアマネジメント活動の実態把握と同尺度の有用性の検討に関する研究. 平成 21 年度厚生労働科学研究費補助金 (障害保健福祉総合研究事業)「障害者ケアマネジメントのモニタリングおよびプログラム評価の方法論に関する研究 (研究代表者: 坂本洋一)」研究報告書. pp57-123, 2010.
- 10) 吉田光爾, 伊藤順一郎, 瀬戸屋雄太郎, 瀬戸屋 希, 英 一也, 高原優美子, 角田 秋, 園 環樹, 萱間真美, 大嶋 巖: ACT・訪問看護・デイケアの機能分化について—利用者に対するサービスの実態調査よりケア内容のプロセス調査. 平成 20~22 年度厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業)「精神障害者の退院促進と地域生活支援のための多職種によるサービス提供のあり方とその効果に関する研究 (研究代表者: 伊藤順一郎)」平成 20~22 年度 総合研究報告書. pp38-68, 2011.
- 11) 吉田光爾, 磯谷悠子, 桶田昌平, 山田 創, 西川里美, 野口正行, 大嶋 巖, 西尾雅明, 内田有彦, 栗山康弘: 地域精神保健危機介入モデルにおける Assertive Community Treatment の役割等の検討に関する研究. 精神・神経疾患研究開発費 20 委-8「『地域中心の精神保健医療福祉』を推進するための精神科救急及び急性期医療のあり方に関する研究 (主任研究者: 伊藤順一郎)」平成 20~22 年度 総括研究報告書. pp229-243, 2011.
- 12) 吉田光爾: 訪問型生活訓練事業の人材育成と支援内容の評価・モニタリングに関する調査研究事業, 平成 21 年度厚生労働省 (障害者保健福祉推進事業) 調査研究報告書 (実施主体: 特定非営利活動法人 ほっとハート). pp1-49, 2010.
- 13) 大嶋 巖, 吉田光爾, 英 一也, 小川雅代, 深谷 裕, 高原優美子, 瀬戸屋雄太郎: 障害者ケアマネジメント・フィデリティ尺度の妥当性の検証. 平成 21 年度厚生労働科学研究費補助金 (障害保健福祉総合研究事業)「障害者ケアマネジメントのモニタリングおよびプログラム評価の方法論に関する研究 (研究代表者: 坂本洋一)」総括・分担研究報告書, pp37-56, 2010.
- 14) 英 一也, 久永文恵, 伊藤順一郎: 訪問型家族支援に関する研究—ACT-J の事例を通して—. 平成 21 年度厚生労働省精神・神経委託費「統合失調症の治療の標準化と普及に関する研究 (主任研究者: 塚田和美)」研究報告書. pp239-244, 2010.
- 15) 英 一也, 吉田光爾, 小川雅代, 伊藤順一郎: 障害者ケアマネジメントにおける三障害の異同に関する研究. 平成 21 年度厚生労働科学研究費補助金 (障害保健福祉総合研究事業)「障害者ケアマネジメントのモニタリングおよびプログラム評価の方法論に関する研究 (研究代表者: 坂本洋一)」研究報告書. pp9-16, 2010.

- 16) 目良宣子, 英一也, 伊藤順一郎: ひきこもりを呈する青年への地域支援システムに関する研究—和歌山県田辺市モデルが都市型の地域に活用できるか—. 平成 21 年度厚生労働科学研究費補助金 (こころの健康科学研究事業) 「思春期のひきこもりをもたらす精神科疾患の実態把握と精神医学的治療・援助システムの構築に関する研究 (研究代表者: 齋藤万比古)」研究報告書. pp28-37, 2010.
- 17) 高原優美子, 瀬戸屋雄太郎, 吉田光爾, 前田恵子, 佐藤さやか, 高橋 誠, 佐竹直子, 伊藤順一郎: 急性期ケアマネジメントモデル導入前後比較による精神科救急・急性期病棟スタッフの患者に対する支援姿勢の研究. 精神・神経疾患研究開発費 20 委-8 「『地域中心の精神保健医療福祉』を推進するための精神科救急及び急性期医療のあり方に関する研究 (主任研究者: 伊藤順一郎)」平成 20~22 年度 総括研究報告書. pp167-176, 2011.
- 18) 佐藤さやか: 「認知機能リハビリテーション」に用いるコンピュータソフト「Cogpack」の開発とこれを用いた「認知機能リハビリテーション」の実施および Brief Assessment of Cognition in Schizophrenia 日本版等の神経心理検査をアウトカムとする「認知機能リハビリテーション」の効果検討に関する研究. 平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究推進事業) 研究報告書. pp25-30, 2011.
- 19) 安西信雄, 大島真弓, 高島智昭, 石塚裕大, 水野由紀子, 岩崎さやか, 菊池安希子, 佐藤さやか: 国立精神・神経医療研究センター病院におけるコンピュータソフト「Cogpack」を用いた認知機能リハビリテーションの効果検討. 平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業) 「精神障害者の認知機能障害を向上させるための「認知機能リハビリテーション」に用いるコンピュータソフト「Cogpack」の開発とこれを用いた「認知機能リハビリテーション」効果検討に関する研究 (主任研究者: 池淵恵美)」研究報告書. pp27-31, 2011.
- 20) 坂田増弘, 安西信雄, 石川正憲, 伊藤明美, 富沢明美, 等々力信子, 岡 佑美, 上代陽子, 前田恵子, 佐藤さやか, 平林直次, 伊藤順一郎: 危機予防・急性期対応の訪問型地域ケア・モデルの開発に関する研究 II. 精神・神経疾患研究開発費 20 委-8 「『地域中心の精神保健医療福祉』を推進するための精神科救急及び急性期医療のあり方に関する研究 (主任研究者: 伊藤順一郎)」平成 20~22 年度 総括研究報告書. pp199-203, 2011.

(5) その他

- 1) 伊藤順一郎: コメント「松下論文」を読んで. 神戸松蔭こころのケア・センター臨床心理学研究 (第 5 号), pp105-107, 2010.
- 2) 伊藤順一郎: 統合失調症 薬を上手に利用して. しんぶん赤旗 (2010.10.30 掲載), 2010.
- 3) 英一也, 久永文恵, 伊藤順一郎: 訪問型家族支援による家族のリカバリーと当事者の自立に関する研究 —ACT-J の事例を通して—. 家族療法研究 27(1): 35, 2010.

B. 学会・研究会における発表

(1) 学会特別講演, 教育講演, シンポジウム, ワークショップ, パネルディスカッション等

- 1) Setoya Y: Assertive Community Treatment in Japan - Experience from Asia -. International Conference on Schizophrenia IV. Chennai, Oct 22-24, 2010.
- 2) 伊藤順一郎, 瀬戸屋雄太郎: 日本の ACT ; 各地で行われている ACT の成果の現状. 第 106 回日本精神神経学会学術総会, 広島, 2010.5.22.
- 3) 伊藤順一郎: 家族による, 家族自身のリカバリー・トーク: 私たちは何を体験したか? 心理教育, セルフヘルプを家族 (当事者) の側から語る (その 3). 第 27 回日本家族研究・家族療法学会自主シンポジウム, 福島, 2010.6.5.
- 4) 伊藤順一郎: ACT (包括型地域生活支援プログラム): 日本における「地域生活中心の精神保健医療福祉」システムづくりの展望. 第 64 回東北精神神経学会, 青森, 2010.9.26.

- 5) 伊藤順一郎, 福井里江, 遊佐安一郎: 家族による, 家族自身のリカバリー・トーク: 私たちは何を体験したか? 心理教育, セルフヘルプを家族(当事者)の側から語る(その4). 第18回日本精神障害者リハビリテーション学会 自主シンポジウム5, 北海道, 2010.10.23.
- 6) 伊藤順一郎: 精神障害者リハビリテーションと地域再生. 第18回日本精神障害者リハビリテーション学会, 北海道, 2010.10.23.
- 7) 瀬戸屋雄太郎: 日本のACTの概観: フィデリティ調査などから見えていること. 第106回日本精神神経学会学術総会, 広島, 2010.5.20-22.
- 8) 吉田光爾, 遠藤紫乃, 松尾明子, 佐原和紀, 武田牧子: 福祉職によるアウトリーチサービス～訪問型生活訓練の現在～. 第18回日本精神障害者リハビリテーション学会 自主シンポジウム2, 北海道, 2010.10.23-24.

(2) 一般演題

- 1) Setoya Y, Yoshida K, Setoya N, Hanafusa K, Takahara Y, Tsunoda A, Kayama M, Oshima I, Ito J: Community Mental Health Service in Japan Comparing Service Profiles of Assertive Community Treatment, Psychiatric Visiting Nurse and Psychiatric Day Care. World Psychiatric Association International Congress 2010, Beijing, Sep 1-5, 2010.
- 2) Setoya Y, Satake N, Takahara Y, Maeda K, Sato S, Takahashi M, Ito J: Nine months follow up study of the inpatients admitted to psychiatric emergency unit in Japan. 20th World Congress of Social Psychiatry, Marrakech, Oct 23-27, 2010.
- 3) Yoshida K, Setoya Y, Hanafusa K, Takahara Y, Ito J, Setoya N, Tsunoda A, Kayama M, Oshima I: The service description of Assertive Community Treatment program in Japan. World Psychiatric Association International Congress 2010, Beijing, Sep 1-5, 2010.
- 4) Takahara Y, Setoya Y, Maeda K, Sato S, Takahashi M, Satake N, Ito J: Survey of Staff Members of the Psychiatric Emergency Unit about Introduction of Care Management. World Psychiatric Association International Congress 2010, Beijing, Sep 1-5, 2010.
- 5) 贅川信幸, 香月富士日, 大嶋 巖, 福井里江, 伊藤順一郎, 塚田和美: 統合失調症の家族心理教育実施促進のためのコンサルテーションのプロセス. 第18回日本精神障害者リハビリテーション学会, 北海道, 2010.10.23-24.
- 6) 吉田光爾, 大嶋 巖, 志水田鶴子, 道明章乃, 贅川信幸, 福井里江, 小佐々典靖, 高原優美子, 大島千帆, 平岡公一: 福祉分野における横断的なアウトカム指標研究・主観的 QOL 尺度の作成と信頼性・妥当性の検討. 第58回日本社会福祉学会, 愛知, 2010.10.9-10.
- 7) 吉田光爾, 高橋 誠, 安田 正: 障害者自立支援法における生活訓練事業の人材育成の課題～全国実態調査の結果から～. 第18回日本精神障害者リハビリテーション学会, 北海道, 2010.10.23-24.
- 8) 吉田光爾, 瀬戸屋雄太郎, 英一也, 高原優美子, 香田真希子, 伊藤順一郎, 小川雅代: 精神科外来患者に対する PSW によるインテンシブなケアマネジメント支援. 第18回日本精神障害者リハビリテーション学会, 北海道, 2010.10.23-24.
- 9) 英一也, 久永文恵, 伊藤順一郎: 訪問型家族支援に関する研究—ACT-J の事例を通して—. 第27回日本家族研究・家族療法学会, 福島, 2010. 6. 4
- 10) 英一也, 吉田光爾, 小川雅代, 伊藤順一郎: 障害者ケアマネジメントにおける三障害の異同に関する研究～精神科領域の特性を中心に～. 第18回日本精神障害者リハビリテーション学会, 北海道, 2010.10.23-24.
- 11) 高原優美子, 吉田光爾, 大嶋 巖, 小佐々典靖, 道明章乃, 贅川信幸, 福井里江, 平岡公一, 小澤 温: 障害者の就労に関する意識の分析—障害者就労支援事業における利用者アンケート調査—. 第58回日本社会福祉学会, 愛知, 2010.10.9-10.

- 12) 高原優美子, 瀬戸屋雄太郎, 前田恵子, 佐藤さやか, 高橋 誠, 安田 正, 佐竹直子, 伊藤順一郎: 精神科救急・急性期病棟等における専門職種間の意識について. 第18回日本精神障害者リハビリテーション学会, 北海道, 2010.10.23-24.
- 13) 小佐々典靖, 高原優美子, 上村勇夫: 障害者自立支援法下における就労移行支援事業の現状と効果的な支援についてー「効果的援助要素」の実施状況と全国の就労移行実績からー. 第38回職業リハビリテーション学会, 神奈川, 2010.8.26.
- 14) 小佐々典靖, 大嶋 巖, 植村英晴, 高原優美子, 佐藤久夫: 障害者就労移行支援事業の形成的プログラム評価と利用者の希望を実現する効果的なプログラムモデルへの再構築ー円環的対話による評価アプローチ法(CD-TEP法)の適用ー. 第58回日本社会福祉学会, 愛知, 2010.10.9-10.

(3) 研究報告会

- 1) 瀬戸屋雄太郎, 佐竹直子, 高原優美子, 高橋 誠, 佐藤さやか, 前田恵子, 吉田光爾, 伊藤順一郎: 精神科急性期病棟群におけるケアマネジメントモデルの効果評価ーモデル導入前後比較よりー. 精神・神経疾患研究開発費 20 委-8「『地域中心の精神保健医療福祉』を推進するための精神科救急及び急性期医療のあり方に関する研究」合同研究報告会, 2010.12.2.
- 2) 吉田光爾: 地域精神保健危機介入モデルにおける Assertive Community Treatment の役割等の検討に関する研究. 精神・神経疾患研究開発費 20 委-8「『地域中心の精神保健医療福祉』を推進するための精神科救急及び急性期医療のあり方に関する研究」合同研究報告会, 2010.12.2.

C. 講演

- 1) 伊藤順一郎: 発達障害について・相談員のためのワークショップ. NPO 法人 CLIP・あこーん 電話相談室学習会, 横浜, 2010.5.8.
- 2) 伊藤順一郎: 統合失調症治療の現場から. 大家連精神保健福祉講座, 大阪, 2010.7.1.
- 3) 伊藤順一郎: 地域社会中心の精神保健医療福祉の具体化. 葛飾区精神障害者家族会, 東京, 2010.7.16.
- 4) 伊藤順一郎: 精神科アウトリーチの将来と問題点 (ACT) について. 日本精神科病院協会, 東京, 2010.7.23.
- 5) 伊藤順一郎: より良い統合失調症治療について当事者・家族・医師とともに考えるセミナー. メディアセミナー「統合失調症患者さん・家族の実態調査」結果発表, 東京, 2010.8.3.
- 6) 伊藤順一郎: 親亡き後の自立に向けて. 館林邑楽精神障がい者家族会, 群馬, 2010.9.9.
- 7) 伊藤順一郎: あなたのもっている, 生活力, 生きる力は, こんなにも素敵ですーストレスモデルによるケースマネジメント入門. リカバリー全国フォーラム 2010, 千葉, 2010.9.10.
- 8) 伊藤順一郎: 精神保健医療福祉システムとリカバリーー私たちはこんな精神保健医療福祉システムを望んでいるー. リカバリー全国フォーラム 2010, 千葉, 2010.9.11.
- 9) 伊藤順一郎: (総合司会) 市川エリアの精神保健において地域連携や治療レベルの充実を目的とする. 第3回精神保健地域支援 FORUM in 市川, 千葉, 2010.10.7.
- 10) 伊藤順一郎: 白衣を捨てよ, 町へ出ようー多職種アウトリーチチームのすすめー. 平成 22 年度精神障害者リハビリテーションフォーラムー地域定着に向けてー, 沖縄, 2010.11.5.
- 11) 伊藤順一郎: ACT のない地域でも, 今, できること. オアシス家族会, 千葉, 2010.11.25.
- 12) 伊藤順一郎: ACT の活動の中で見えてくること. これからの地域社会の中での精神科治療と支援, 杉並家族会, 東京, 2010.12.4.
- 13) 伊藤順一郎: 「こころの病気」理解と予防. 鶴見区こころの病気理解講演会, 神奈川, 2010.12.10.
- 14) 伊藤順一郎: とともに支えあう地域づくりをめざして. 精神保健福祉を考えるつどい, 小平市地域精神保健福祉業務連絡会, 東京, 2010.12.11.

- 15) 伊藤順一郎：白衣を捨てよ，町へ出ようー多職種アウトリーチチームのすすめー．旭中央病院講演会，千葉，2011.2.8.
- 16) 伊藤順一郎：統合失調症の病気について知る．統合失調症の初期家族講座，千葉，2010.2.19.
- 17) 伊藤順一郎：ACT 総論：白衣を捨てよ，町に出よう．精神障害者の地域生活を支えるシステムづくりについて学ぶ，所沢蒼空会，埼玉，2011.2.21.
- 18) 伊藤順一郎：統合失調症の病気について知る．統合失調症の初期家族講座，山形，2011.3.4.
- 19) 瀬戸屋雄太郎：ケアの必要性が高い人たちへの支援，質の高いサービス提供を考えるには～ACT プログラムや各地でのトピックス紹介～．埼玉県春日部保健所精神保健福祉関係者連絡会，埼玉，2010.6.21.
- 20) 瀬戸屋雄太郎：日本の精神保健のこれからー地域活動支援事業による ACTー．特定非営利活動法人ソテリア，東京，2010.7.31.
- 21) 瀬戸屋雄太郎：精神科救急病棟と地域の連携ー急性期ケアマネジメントモデルー．第4回静岡県精神科救急医療研究会，静岡，2010.10.2.
- 22) 瀬戸屋雄太郎：精神障害の理解と地域生活支援．社会福祉法人えのき会，千葉，2010.10.31.
- 23) 吉田光爾：H19 年度～H21 年度訪問型生活訓練モデル事業について．特定非営利活動法人ほととハート，千葉，2010.5.28.
- 24) 吉田光爾：生きがいを喪失した若者たち～ひきこもりの視点から考える～．平成 22 年度心の健康づくり講演会，富山，2010.6.12.
- 25) 吉田光爾：青少年のこころの問題に対する地域支援．「守る・支える・青少年育成事業」講演会，広島，2010.7.15-16.
- 26) 吉田光爾：精神疾患の基礎．平成 22 年度精神福祉ボランティア講座，社会福祉法人小金井市社会福祉協議会，東京，2010.10.1.
- 27) 英 一也：ACT の活動について．秦野市精神障害者家族会「のぞみ会」講演会，神奈川，2010.5.10.
- 28) 英 一也：ひきこもっている人々へのアプローチ～アウトリーチを中心に～．NPO 法人 KHJ 千葉県なの花会月例会講演，千葉，2011.1.15.

D. 学会活動（学会主催，学会役員，座長，編集委員等）

(1) 学会役員

- 1) 伊藤順一郎：日本精神障害者リハビリテーション学会 常任理事
日本統合失調症学会 評議員
日本家族研究・家族療法学会 評議員

(2) 座長

- 1) 伊藤順一郎：ACT. 第 18 回日本精神障害者リハビリテーション学会，北海道，2010.10.24.
- 2) 伊藤順一郎：シンポジウム「心理教育のブレイクスルー～心理教育を実践するうえで生じた壁を乗り越えよう～」オーガナイザー．心理教育・家族教室ネットワーク第14回研究集会，東京，2011.2.25.
- 3) 伊藤順一郎：シンポジウム「リカバリー：人と人との関係性の再構築」座長．第 17 回日本行動医学会・学術総会，東京，2011.3.11.

(3) 学会誌編集委員等

- 1) 伊藤順一郎：日本家族研究・家族療法学会 編集委員
心理教育・家族教室ネットワーク 運営委員
リハビリテーション研究 編集委員
- 2) 吉田光爾：日本精神障害者リハビリテーション学会 査読委員
- 3) 佐藤さやか：日本精神障害者リハビリテーション学会 査読委員

E. 研修

(1) 研修企画

- 1) 伊藤順一郎, 吉田光爾: 平成 22 年度精神保健に関する技術研修. 第 2 回アウトリーチによる地域ケアマネジメント並びに訪問型生活訓練研修, 東京, 2010.10.19-22.
- 2) 伊藤順一郎, 瀬戸屋雄太郎: 平成 22 年度精神保健に関する技術研修. 第 8 回 ACT 研修, 東京, 2011.2.1-4.

(2) 研修会講師

- 1) 伊藤順一郎: ストレングス・モデルをケアマネジメントの中核にすえる. ACT 研修会「ACT の実現に向けて—その理念・支援技術・運営を学ぶ—», 埼玉, 2010.5.17.
- 2) 伊藤順一郎: ACT-K における事例検討と「ストレングスモデル」について. たかぎクリニック職員研修会, 京都, 2010.6.8.
- 3) 伊藤順一郎: 重度精神障害者を地域で支える ACT スタッフのための臨床技術向上と地域支援体制作りに関する研修. ACTIPS 研修, 千葉, 2010.6.11.
- 4) 伊藤順一郎: ACT による支援の実際. ACT 研修会「ACT の実現に向けて—その理念・支援技術・運営を学ぶ—», 埼玉, 2010.6.17.
- 5) 伊藤順一郎: ストレングスモデルのケースマネジメント. スキルアップ研修会, 北海道, 2010.6.19.
- 6) 伊藤順一郎: ACT における精神科医の役割. ACT 研修会「ACT の実現に向けて—その理念・支援技術・運営を学ぶ—», 埼玉, 2010.7.12.
- 7) 伊藤順一郎: 精神障害者の社会復帰及び精神障害者福祉. 平成 22 年度精神保健指定医研修会, 東京, 2010.7.29.
- 8) 伊藤順一郎: ACT を経営面から考える. ACT 研修会「ACT の実現に向けて—その理念・支援技術・運営を学ぶ—», 埼玉, 2010.8.9.
- 9) 伊藤順一郎: 心理教育的グループ. 第 8 回摂食障害治療研修, 精神保健研究所, 東京, 2010.9.2.
- 10) 伊藤順一郎: ACT-K における事例検討と「ストレングスモデル」について. たかぎクリニック職員研修会, 京都, 2010.9.14.
- 11) 伊藤順一郎: 訪問サービスを地域で展開するために (グループディスカッション). 第 2 回アウトリーチによる地域ケアマネジメント並びに訪問型生活訓練研修, 精神保健研究所, 東京, 2010.10.19.
- 12) 伊藤順一郎: “岐阜にアクトを” 訪問医療・訪問福祉で当事者・家族支援を. 第 33 回岐阜県精神保健福祉会研修会 (県家族大会), 岐阜, 2010.10.30.
- 13) 伊藤順一郎: 統合失調症を中心とした家族心理教育に関する知識および介入技術の向上. 標準版家族心理教育研修会 in 福岡, 福岡, 2010.11.13-14.
- 14) 伊藤順一郎: 未治療・治療中断者の支援. 第 2 回 ACT 全国研修会, ACT 全国ネットワーク, 京都, 2010.11.27-28.
- 15) 伊藤順一郎: ストレングスアセスメント. 精神障害者・知的障害者の地域生活支援のための研修会, 千葉, 2010.12.3.
- 16) 伊藤順一郎: リカバリーと生活力の向上. 精神障害者・知的障害者の地域生活支援のための研究会, 千葉, 2010.12.4.
- 17) 伊藤順一郎: ACT-K における事例検討と「ストレングスモデル」について. たかぎクリニック職員研修会, 京都, 2010.12.14.
- 18) 伊藤順一郎: 精神障害者の社会復帰及び精神障害者福祉. 第 45 回精神保健指定医研修会, 東京, 2010.12.18.
- 19) 伊藤順一郎: 「ひきこもり」の理解と相談対応について. 市川市職員向け研修, 千葉, 2011.1.13.
- 20) 伊藤順一郎: ACT における家族支援. 相模原市精神障害者家族会研修, 神奈川, 2011.1.15.

- 21) 伊藤順一郎：ACT のひきこもり支援における可能性。思春期精神保健研修「ひきこもり対策研修」，東京，2011.1.24.
- 22) 伊藤順一郎：ストレングスモデル。第 8 回 ACT 研修，精神保健研究所，東京，2011.2.1.
- 23) 伊藤順一郎：ACT とは何か～その理念と実践～。精神障がい者の地域生活支援を考える研修会，山形，2011.3.3.
- 24) 瀬戸屋雄太郎：日本における精神保健医療福祉の現状。第 29 回作業療法研修会，広島，2010.7.11.
- 25) 瀬戸屋雄太郎：ACT プログラムの標準モデルへの適合度。第 2 回 ACT 全国研修会，ACT 全国ネットワーク，京都，2010.11.27-28.
- 26) 吉田光爾：ひきこもりの支援について。平成 22 年度相談援助者研修会，富山，2010.6.12.
- 27) 吉田光爾：訪問活動のニーズと実際。第 2 回アウトリーチによる地域ケアマネジメント並びに訪問型生活訓練研修，精神保健研究所，東京，2010.10.19.
- 28) 吉田光爾：データから見た生活訓練。精神障害者・知的障害者の地域生活支援のための研究会，千葉，2010.12.3.
- 29) 吉田光爾：地域精神保健システムとの関連。第 8 回 ACT 研修，精神保健研究所，東京，2011.2.1.
- 30) 英一也：ACT-J における家族支援。第 8 回 ACT 研修，精神保健研究所，千葉，2011.2.2.
- 31) 英一也：精神障害者の“生活のしにくさ”とは－精神障害者の地域生活－。東京都江戸川保健所主催居宅介護事業者研修会，東京，2011.2.15.
- 32) 英一也：利用者中心のプランニング（精神障害者への対応についてと事例検討）。東京都江戸川保健所主催居宅介護事業者研修会，東京，2011.2.18.
- 33) 佐藤さやか：認知行動療法と地域生活スキル。第 2 回アウトリーチによる地域ケアマネジメント並びに訪問型生活訓練研修，精神保健研究所，東京，2010.10.19.
- 34) 佐藤さやか：認知行動療法のいろは。第 8 回 ACT 研修，精神保健研究所，東京，2011.2.3.

12. 司法精神医学研究部

I. 研究部の概要

司法医学研究部は、平成15年7月10日「心神喪失等の状態で重大な他害行為を行った者の医療及び観察等に関する法律」の成立に伴い、同年10月に第11番目の研究部として新たに設置された。研究部は制度運用研究室、専門医療・社会復帰研究室、精神鑑定室の3室より構成されている。新たな制度の運用状況を客観的に評価すること、専門施設における治療技術を開発すること、精神鑑定における諸問題を研究することなどを目的としている。

平成22年度(平成22年4月～23年3月)の人員構成は、部長：吉川和男(平成22年7月31日退職)、岡田幸之(平成23年1月1日昇任)、精神鑑定室長：岡田幸之(平成23年1月1日以降は部長併任)、制度運用室長：菊池安希子、専門医療・社会復帰研究室長：安藤久美子、成人精神保健研究部認知機能研究室長(司法精神医学研究部併任)：福井裕輝、任期付研究員：高橋洋子(平成22年11月30日退職)、西中宏吏、小松容子である。なお、併任研究員として独立行政法人国立精神・神経医療研究センター病院医師の野田隆政、同病院臨床心理技術者の今村扶美、朝波千尋、岩崎さやか、客員研究員として東京大学総括プロジェクト機構特任助教：牧野貴樹、東京医科歯科大学准教授：美濃由紀子、協力研究員として京都医療少年院法務技官：川田良作、研究生として中央大学大学院心理学専攻：王劍婷、大塚淑子、石塚聖堂、武蔵野大学大学院人間社会文化・研究科人間社会専攻：浅野敬子、ハートクリニック町田心理室臨床心理士：大島郁葉、広島大学大学院総合科学研究科：増井啓太を迎えて研究に臨んだ。

社会的活動としては、裁判所、検察庁から精神鑑定を嘱託され、また、法務省、警察庁、大学等の関係機関からの要請により専門教育に対する講師を務めた。

II. 研究活動

1) 心神喪失者等医療観察法制度における専門的医療の向上に関する研究

医療観察法制度における専門的医療の向上とそのための課題を的確に把握することは、厚生労働行政にとって極めて重要な課題である。本研究は、精神保健研究所司法精神医学研究部を中心に、医療観察制度に関わる種々の機関からの情報を統合的に収集管理し、専門的な見地からの評価と分析を加え、その結果を関係機関に定期的にフィードバックすることによって、専門的医療の向上を図ると同時に、施行5年後(平成22年)の制度改正の必要性を根拠づけるための客観的なデータを集積、提供することを目的として行われた。今年度は医療観察法施行5年目であり、本研究の最終年度となった。データ収集にあたっては、全国の医療観察法指定入院医療と指定通院機関の協力により、その臨床情報から、対象者の基礎情報(氏名、住所等の個人を特定する情報を除く)、治療期間や治療内容、退院に際しての住居の確保、社会復帰における連携状況等に関する情報などのほか、精神保健福祉法による入院や、通院処遇中の問題行動の有無に関しても詳細な情報を収集し、解析した。指定入院医療機関の病床数を十分確保すること、地域社会における受け皿を確保するという同法の専門的治療の現状と問題点をデータを用いて明らかにすることができた。(岡田、吉川、安藤、福井、菊池)

2) 刑事責任能力の評価に関する研究

司法精神鑑定の公平性の実現は長年にわたる懸案事項である。岡田らは、この刑事責任能力の評価・判定方法について精神医学と法学の両側面から、その標準化をはかるべく研究を行っている。本年度は、厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業)「医療観察法鑑定入院制度の適正化に関する研究(代表者：五十嵐禎人)」の分担研究班「他害行為を行った者の責任能力鑑定に関する研究(分担研究者：岡田幸之)」において前年度までの成果物である「刑事責任能力に関する鑑定書作成の手引き18～20年度総括版(ver4.0)」についてその利用者等の精神科医から意見を聴取して、次年度以降に予定している改定のための情報を整理した。(岡田、安藤)

3) 重度精神障害者に対する医療観察法指定入院・通院医療機関において実施する治療プログラムの開発に関する研究

心神喪失等の状態で重大な他害行為を行った者の医療及び観察等に関する法律（以下、医療観察法）の指定入院医療機関にて実施可能な他害行為防止のための治療プログラムを引き続き開発した。

平成 17～18 年に開発したノーマライゼーションに基づく「認知行動療法導入プログラム（疾患教育の後に実施する集団プログラム）」を引き続き実施し、効果測定に関するデータを収集するとともに、研修等を通じて他機関への普及をはかった。また、認知行動療法の効果のモニタリングに有用な自記式病識尺度の信頼性・妥当性を検討するためのデータ収集を行った。

重度精神障害者の再他害行為防止にむけて、世界 17 ヶ国の刑務所ならびに司法精神科において、標準的に実施されている一般的他害行為防止プログラムについての調査を通して、本邦で実施する上で必要な要素を抽出し、医療観察法指定入院医療機関において提供可能なプログラム（名称：武蔵思考スキル強化プログラム）を開発し、試行を続けている。その結果、被害者への共感性に関係が深いとされる「視点取得」において、および問題解決能力に有意な改善が見られるという予備的結果が得られた。今後は、同プログラムを改訂し、効果検討を実施する予定である。また、同様のプログラムを、精神障害受刑者にも実施し、効果測定のための予備的データを収集している。（菊池）

4) 触法精神障害者に対する脳機能画像データの有効性に関する検討

世界における研究の進捗状況を概観し、適切な検査項目について検討を行った。質問紙として、衝動性、攻撃性、共感性、道徳観念その他を選択した。必要なものは、日本語訳を行い、バックトランスレーションを施行することで信頼性を確認した。心理検査は、一般的な検査に加え、前頭前皮質、扁桃体などの機能的障害を特異的に検出する種々の検査を決定した。画像検査については、MRI、SPECT、PET など各種検査機器を用いて、どのように実施するのか具体的な検討を行った。その上で、研究計画を国立精神・神経医療研究センターの倫理委員会に申請し、承認を得、研究を遂行中である。

以上の各種検査項目の中で、医療観察法の精神鑑定を行う上で必要と思われたものについて、予備的に検査を実施した。その結果、患者に大きな負担をかけることなく実施できることが確認できた。今後は、センター病院の医療観察法病棟にて上記検査を実施し、さらにその有効性に関する検討を行う予定である。（福井、西中）

5) 司法精神科医療における患者の積極的な治療・リハビリテーションへの参加に関する研究

司法精神科医療は、医療観察法による強制医療の側面を持っているが、今日の精神保健サービスにおいては、患者が積極的あるいは能動的に治療・リハビリテーションに参加することが望まれている。本研究では、英国マンチェスター大学の Lovell, Karina 教授と Baker, A. John 講師との共同研究で、本年度は、日本における司法精神科医療サービスにおける、患者の治療・リハビリテーションへの参加の程度についての調査を行った。（小松）

Ⅲ. 社会的活動に関する評価

1) 市民社会に対する一般的な貢献

岡田幸之、吉川和男、安藤久美子、福井裕輝は、裁判所、検察庁の依頼による刑事司法鑑定および心神喪失者等医療観察法の鑑定を行い、市民社会に貢献した。

安藤久美子は警視庁の依頼により、人質立てこもり事件等における支援活動員を務め、市民社会に貢献した。

高橋洋子、西中宏史は、鑑定助手として心理検査を担当し、一般的な検査に加え、前頭前皮質、扁桃体などの機能的障害を特異的に検出する種々の検査を施行した。

2) 専門教育面における貢献

岡田幸之は、科学警察研究所において、捜査担当者を対象とした「犯罪者プロファイリング課程研修講義：精神鑑定・精神医学概論」を担当し、捜査実務家の養成に貢献した。

岡田幸之は、法務総合研究所において、検察官を対象として「刑事責任能力」に関する講義を担当し、司法実務につく法律家の養成に貢献した。

岡田幸之は、司法研修所において、裁判官を対象として「精神鑑定」に関する講義を担当し、司法実務につく法律家の養成に貢献した。

岡田幸之は、東京医科歯科大学において、非常勤講師を務め、司法精神医療に携わる看護師の養成に後見した。

安藤久美子は、関東管区警察学校において、全国の警察機関に所属する上級カウンセラーを対象に「精神医学的からみた非行少年の特性」について講義を行い、警察所属の少年カウンセラーの養成に貢献した。

安藤久美子は、法務総合研究所において、新任検事を対象として「精神鑑定」に関する講義を担当し、司法実務につく法律家の養成に貢献した。

安藤久美子は、認定産業医の資格のもと、司法研修所において新任検事を対象とした「メンタルヘルス」に関する講義を担当し、司法実務につく法律家の健康教育等に貢献した。

菊池安希子は、法務省心神喪失者等医療観察法制度導入研修や、医療観察法指定入院医療機関の開棟前研修において、「統合失調症の認知行動療法」ならびに「他害行為防止の認知行動療法」についての講義を行い、地域処遇実務につく社会復帰調整官と指定入院医療機関スタッフの養成に貢献した。

福井裕輝は、京都医療少年院において、法務教官を対象に司法精神医学の近年の知見について研修等を行い、知識の啓蒙を行った。

福井裕輝は、京都大学医学部において非常勤講師を務め、司法精神医学に関する専門的知識の啓蒙を行った。

小松容子は、日本看護科学学会で「看護研究者育成のグローバルスタンダード」に関するワークショップを担当し、英国における看護研究者の育成に関する知見を提供し、看護研究者の育成に貢献した。

3) 精研の研修の主催と協力

岡田幸之、吉川和男、安藤久美子、福井裕輝、菊池安希子は、国立精神・神経医療研究センター平成22年度第5回司法精神医学研修にて講義を行った。

安藤久美子は、国立精神・神経医療研究センター平成22年度発達障害支援研修にて講義を行った。

菊池安希子は、国立精神・神経医療研究センター病院精神科レジデント初期セミナーおよび中期セミナーにて統合失調症の認知行動療法についての講義を行った。

菊池安希子は、国立精神・神経医療研究センター病院看護部院内教育精神専門研修において統合失調症の認知行動療法についての講義を行った。

高橋洋子、小松容子、西中宏史は、国立精神・神経医療研究センター平成22年度第5回司法精神医学研修開催を援助した。

4) 保健医療行政・政策に関連する研究・調査、委員会等への貢献

岡田幸之、吉川和男、安藤久美子、福井裕輝、菊池安希子は、厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「心神喪失者等医療観察法制度における専門的医療の向上に関する研究」の運用にあたり有用な基礎的情報を提供に貢献した。

5) センター内における臨床的活動

岡田幸之、吉川和男、安藤久美子は、病院第一病棟部精神科医師を併任し、臨床的活動を行った。

岡田幸之は、医療観察法病棟（8病棟、9病棟）運営会議に出席し、臨床的活動を行った。

岡田幸之は、医療観察法鑑定入院（5階北病棟）に、鑑定医として協力した。

菊池安希子は、病院臨床心理技術者を併任し、臨床的活動を行った。

高橋洋子は、病院臨床心理技術者を併任し、臨床現場で心理検査を用いた調査を行った。

小松容子は、病院看護部看護師を併任し、臨床場面のケアに関する聞き取り調査を行った。

6) その他

小松容子は、雑誌「精神看護」医学書院のモニター役として、雑誌内容の評価及び意見を提供し、専門雑誌による情報普及に関する質の向上に貢献した。

IV. 研究業績

A. 刊行物

(1)原著論文

- 1) 菊池安希子：協働する見立て：ケース・フォーミュレーション（平成22年度日本ブリーフサイコセラピー学会研究奨励賞受賞論文）．ブリースサイコセラピー研究 18(2)：89-101, 2009.（2010 発行）

(2)総説

- 1) 岡田幸之, 安藤久美子, 五十嵐禎人, 黒田治, 樽矢敏広, 野田隆政, 平田豊明, 平林直次, 松本俊彦：刑事責任能力に関する精神鑑定書作成の手引き（第4版）．精神保健研究 22(55):65-68, 2010.
- 2) 岡田幸之, 安藤久美子：自閉症スペクトラム障害にみられる特徴と反社会的行動.精神科治療学 25(12)：1653-1660, 2010.
- 3) 吉川和男：わが国の責任能力判定の行方. 司法精神医学 5(1)：48-54, 2010.
- 4) 安藤久美子, 岡田幸之：家族病理の視点からみた司法精神鑑定. 家族療法研究 27(3)：242-247, 2010.
- 5) 菊池安希子：統合失調症の認知行動療法：エビデンス, 認知モデル, 実践. 精神保健研究 22(55)：79-88, 2010.
- 6) 菊池安希子：認知機能障害としての統合失調症, 認知矯正療法と認知行動療法の役割. こころのりんしょう a'・la・carte29(2)：227-232, 2010.
- 7) 菊池安希子：幻覚・妄想の認知行動療法. 精神看護 13(6)：44-51, 2010.
- 8) 菊池安希子：触法行為を伴った精神病体験の扱いについて. 精神神経学雑誌 112(9)：872-786, 2010.
- 9) 菊池安希子, 岩崎さやか, 美濃由紀子：暴力という問題解決をやめるための介入「思考スキル強化プログラム」. 精神看護 14(1)：28-36, 2010.
- 10) 福井裕輝：脳と責任能力：フィリップ・ピネルが語ること. 日本生物学的精神医学会誌 21(2)：127-132, 2010.
- 11) 大島郁葉, 石垣琢磨, 福井裕輝：若年うつ病の認知行動療法. 精神科 17(6)：573-580, 2010.
- 12) 大島郁葉, 福井裕輝：非社会性パーソナリティ障害. 今日の精神科治療ガイドライン. 精神科治療学 25(289)：226-227, 2010.

(3)著書

- 1) 安藤久美子, 岡田幸之：法律をめぐる様々な問題「医療事故」「うつ病患者の自殺」「家族への情報提供」「病名告知と自殺」「診療録の開示」「診断書の記載」「児童虐待の通報」「診察拒否」. 清水将之監修：青春期精神医学. 診断と治療社, 東京, pp280-290, 2010.
- 2) 福井裕輝：パーソナリティ障害. 福田 正人, 鹿島 晴雄編：専門医のための精神科臨床リュミエール 21, 中山書店, 東京, pp186-197, 2010.
- 3) 菊池安希子：(8)セクシュアル・ハラスメント. 危機への心理支援学. 遠見書房, 東京, pp105-106, 2010.
- 4) 菊池安希子：医療観察法. 松原達哉編：カウンセリング実践ハンドブック. 丸善, 東京, pp590-591,2010.

- 5) 菊池安希子：実践例7幻覚・妄想のCBT. 中島美鈴, 奥村泰之編：集団認知行動療法実践マニュアル. 星和書店, 東京, pp111-114, 2011.
- 6) 菊池安希子：集団認知行動療法でつまずきがちな点と打開策3. 中島美鈴, 奥村泰之編：集団認知行動療法実践マニュアル. 星和書店, 東京, pp146, 2011.
- 7) 中谷陽二, 五十嵐禎人, 椎名明大, 安藤久美子, 岡田幸之, 黒田治, 田口寿子, 藤崎美久, 勝田聡, 鈴木正利, 原口正, 吉澤雅弘：日本司法精神医学会裁判員制度プロジェクト委員会編；だれでもわかる精神医学用語集—裁判員制度のために—. 民事法研究会, 東京, 2010.

(4) 研究報告書

- 1) 岡田幸之：厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業（精神障害分野））心神喪失者等医療観察法制度における専門的医療の向上に関する研究（H20—こころ—011）. 平成22年度 総括・分担研究報告書. 2011.
- 2) 岡田幸之：厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業（精神障害分野））心神喪失者等医療観察法制度における専門的医療の向上に関する研究（H20—こころ—011）. 平成20～22年度総括研究報告書, 2011.
- 3) 安藤久美子：平成22年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業（精神障害分野））心神喪失者等医療観察法制度における専門的医療の向上のためのモニタリングに関する研究（研究代表者：岡田幸之）. 分担研究報告書「指定通院医療機関におけるモニタリングに関する研究1—全国の通院対象者の実態—」 pp21-32, 2011.
- 4) 安藤久美子：平成22年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業（精神障害分野））心神喪失者等医療観察法制度における専門的医療の向上のためのモニタリングに関する研究（研究代表者：岡田幸之）. 分担研究報告書「指定通院医療機関におけるモニタリングに関する研究2—通院処遇中の問題行動の分析—」 pp33-41, 2011.
- 5) 福井裕輝：平成22年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業（精神障害分野））心神喪失者等医療観察法制度における専門的医療の向上のためのモニタリングに関する研究（研究代表者：岡田幸之）. 分担研究報告書「指定入院医療機関における脳機能画像データ等の有効性に関する検討」. pp95-96, 2011.
- 6) 菊池安希子：平成22年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業（精神障害分野））心神喪失者等医療観察法制度における専門的医療の向上のためのモニタリングに関する研究（研究代表者：岡田幸之）. 分担研究報告書「指定入院医療機関におけるモニタリングに関する研究」. pp7-19, 2011.

(5) その他

- 1) Komatsu Y, Lovell K, Baker J: An exploration of patient choice in forensic mental health care: the views of mental health nurses and patients in Japan. Role Expansion of Nurses and Improvement of Professional Status. 2nd Japan China Korea Nursing Conference 104-105, 2010.
- 2) 菊池安希子：Richard P. Bentall, Madness Explained : Psychosis and Human Nature. Penguin Global, 2004（書評）. 精神療法36(6) : 819-820, 2010.
- 3) 菊池安希子, 岩崎さやか, 水野由紀子, 美濃由紀子, 朝波千尋, 樽矢敏広, 安藤久美子, 平林直次, 吉川和男：医療観察法病棟における一般的他害行為防止プログラムの試行(2). 司法精神医学5(1) : 131, 2010.
- 4) 小松容子：3人の仲間から聞いたアラブの国のメンタルヘルス. 精神看護14(1) : 73-80, 2010.
- 5) 小松容子：（書評）「こころの医療宅配便」高木俊介著. 文藝春秋社. 2010.3. JAMHP NEWS 38 : 11-12, 2010.

- 6) 美濃由紀子, 安藤久美子, 岡田幸之, 菊池安希子, 佐野雅隆, 吉川和男: 医療観察法制度における通院処遇期間中の精神保健福祉法による入院併用の実態—指定通院医療機関のモニタリング調査3年目の結果から—。司法精神医学5(1): 118, 2010.

B. 学会・研究会における発表

(1) 学会特別講演, 教育講演, シンポジウム, ワークショップ, パネルディスカッション等

- 1) 岡田幸之: 法廷で説明する—説明の内容—何を説明するか—. 精神医学研修コース 3. 裁判員制度における精神鑑定実務. 第106回日本精神神経学会学術総会, 広島, 2010. 5. 21.
- 2) 岡田幸之, 菊池安希子, 安藤久美子: ワークショップ「触法行為をおこなった精神障害者に対する居住者支援サービス」. 東京, 2010. 7. 29.
- 3) 岡田幸之: 考え方の整理. 第2回医療観察法入院部門合同班会議, 東京, 2010. 11. 14.
- 4) 岡田幸之: 統合失調症圏の精神鑑定. 第2回刑事精神鑑定ワークショップ, 東京, 2010. 11. 20.
- 5) 岡田幸之: 事例検討3 心神喪失もしくは心神耗弱例. 肥前司法精神医学研修会, 沖縄, 2010. 12. 11.
- 6) 吉川和男, 安藤久美子, 福井裕輝, 西中宏吏, 美濃由紀子, 佐野雅隆, 川田良作: 医療観察法制度の分析と今後の課題—モニタリング研究の結果より—. シンポジウム 32. 医療観察法の存続は可能か—見直しの年を迎えて—第106回日本精神神経学会学術総会, 広島, 2010. 5. 22.
- 7) 安藤久美子: 法廷で説明する—説明の内容—どのように説明するか—. 精神医学研修コース 3. 裁判員制度における精神鑑定実務. 第106回日本精神神経学会学術総会, 広島, 2010. 5. 21.
- 8) 安藤久美子: 家族臨床から「事件」を観る. シンポジウム. 日本家族研究・家族療法学会第27回福島大会, 福島, 2010. 6. 4.
- 9) 安藤久美子: 精神鑑定からみえてくるもの. シンポジウム「触法発達障害者の犯罪と矯正・支援を考える」, 東京, 2010. 8. 8.
- 10) 安藤久美子: 海外における薬物療法. 第2回医療観察法入院部門合同班会議, 東京, 2010. 11. 14.
- 11) 菊池安希子: 触法行為を伴った精神病体験の扱いについて. シンポジウム 8. 「認知行動療法と社会との接点」第106回日本精神神経学会学術総会, 広島, 2010. 5. 20.
- 12) 菊池安希子: 催眠の新たな可能性. シンポジウム I 「催眠技法の異文化間の伝達」. 日本臨床催眠学会第12回大会, 鹿児島, 2010. 10. 10.
- 13) 菊池安希子: 統合失調症のフェーズ別認知行動療法. シンポジウム 4 「早期精神病への心理社会的アプローチ」. 第14回日本精神保健・予防学会学術集会, 東京, 2010. 12. 12.
- 14) 牧本清子, 山本愛子, 近藤暁子, 小松容子, 南裕子, 田中美恵子: ワークショップ「看護研究者育成の質の保証のグローバルスタンダードについて」. 第30回日本看護科学学会学術集会, 札幌, 2010. 12. 3-4.

(2) 一般演題

- 1) Fukui H, Nishinaka H, Yoshikawa K: White matter changes in violent schizophrenia: a diffusion tensor imaging study. ECNS 2010 7th Annual ECNS/ISNIP/Conference/First Joint Meeting of ECNS/ISBET/ISNIP, Istanbul-Turkey, 2010.9.14-18.
- 2) Kikuchi AT, Asanami C, Iwasaki S, Yoshikawa K: Insight, depression and self-esteem in forensic patients with schizophrenia spectrum disorders in Japan. 6TH World Congress of Behavioral and Cognitive Therapies, Boston, Massachusetts, 2010.6.2-5.
- 3) Komatsu Y: An exploration of patient choice in forensic mental health care: the views of mental health nurses and patients in Japan. 2nd Japan China Korea Nursing Conference, Tokyo, 2010.11.20-22.
- 4) 安藤久美子, 菊池安希子, 佐野雅隆, 金子英俊, 岡田幸之: 医療観察法における通院処遇対象者の実態と通院処遇中の問題行動に関する分析. 第47回日本犯罪学会総会, 東京, 2010.11.27.

- 5) 菊池安希子：幻覚・妄想の外在化の工夫について．日本ブリーフサイコセラピー学会第 20 回長崎大会，長崎，2010.8.26-28.
- 6) 小松容子，Brian K, Diarmuid F：司法精神介護に必要な臨床実践能力に関するアンケート調査．第 41 回日本精神看護学会，宮崎，2010.7.22-23.
- 7) 西中宏吏，福井裕輝：TBSS を用いた前脳における白質神経繊維束の接続性の評価についての研究．第 26 回ライフサポート学会，大阪，2010.9.19.
- 8) 西中宏吏，宮田淳，川田良作，福井裕輝：触法精神障害者を対象とした統合失調症と暴力に関する研究—tract-based spatial statistics による検討—. 第 32 回日本生物学的精神医学会，福岡，2010.10.7-9.
- 9) 西中宏吏，大塚淑子，石塚聖堂，福井裕輝：「触法精神障害者における脳構造異常と認知機能異常との関連：CANTAB を用いた検討」.第 6 回京都法精神医学研究会，京都，2011.2.5.
- 10) 美濃由紀子，安藤久美子，牧野貴樹，岡田幸之，佐野雅隆，菊池安希子，吉川和男：医療観察法制度における通院処遇期間中の精神保健福祉法による入院併用の実態—指定通院医療機関のモニタリング調査 4 年目の結果から—. 第 6 回日本司法精神医学会大会，東京，2010.6.4.
- 11) 石塚聖堂，福井裕輝，山科満，長谷川眞理子：ドメスティック・バイオレンスにより重大事件に至った事例に関する調査研究．第 6 回京都法精神医学研究会，京都，2011.2.5.
- 12) 王剣亭，大宮宗一郎，富田拓郎，吉川和男：Multisystemic therapy を用いたリスク家庭への介入事例．日本家族研究・家族療学会第 27 回福島大会，福島，2010.6.4.
- 13) 大塚淑子，西中宏吏，福井裕輝：虐待によるトラウマと社会行動障害—神経心理学的検査を用いた検討—. 第 32 回日本生物学的精神医学会，福岡，2020.10.7-9.
- 14) 大塚淑子，西中宏吏，下田僚，福井裕輝：「子供の心的トラウマと Moral Judgment との関連について」.第 6 回京都法精神医学研究会，京都，2011.2.5.
- 15) 大貫雅也，福長一義，福井裕輝，舟久保昭夫，福井康裕，中嶋章夫，戸畑裕志，大瀧純一：NIRS を用いたニューロフィードバック手法の検討．第 26 回ライフサポート学会，大阪，2010.9.19.
- 16) 大島郁葉，福井裕輝：性犯罪者における衝動性のコントロールに焦点をおいた認知行動療法の試み：スキーマ療法の視点からの検討．第 6 回京都法精神医学研究会，京都，2011.2.5.

(3) 研究報告会

- 1) 岡田幸之：第 2 回医療観察法入院部門合同班会議，東京，2010.11.13.
- 2) 岡田幸之：平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「医療観察法鑑定入院制度の適正化に関する研究」（研究代表者：五十嵐禎人）第 2 回班会議，東京，2010.11.19.
- 3) 岡田幸之，安藤久美子，福井裕輝，菊池安希子，西中宏吏：平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「心神喪失者等医療観察法制度における専門的医療の向上に関する研究」第 2 回研究者会議，東京，2010.11.19.
- 4) 岡田幸之：平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「医療観察法鑑定入院制度の適正化に関する研究」（研究代表者：五十嵐禎人）第 3 回研究会議，東京，2011.1.22.
- 5) 岡田幸之：心神喪失者等医療観察法制度における専門的医療の向上に関する研究．障害者対策総合（精神分野）研究成果発表会，厚生労働科学研究費研究成果等普及啓発事業，東京，2011.1.27.
- 6) 岡田幸之：平成 22 年度厚生労働省科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「モニタリング研究の分析結果の評価に関する研究」（研究分担者：松原三郎）第 5 回通院医療等研究会，東京，2011.1.29.
- 7) 岡田幸之，安藤久美子：精神科医・弁護士合同精神鑑定検討委員会．八重洲ホール，東京，2011.1.30.
- 8) 吉川和男，安藤久美子，福井裕輝，菊池安希子，西中宏吏：平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「心神喪失者等医療観察法制度における専門的医療の向上に関する研究」第 1 回研究者会議，東京，2010.6.18.

- 9) 安藤久美子：平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「医療観察法における医療の質の向上に関する研究」（研究代表者：中島豊爾）分担研究「通院医療モデルの構築に関する研究」（研究分担者：岩成秀夫）第 1 回研究会議，東京，2010.7.3.
- 10) 安藤久美子：平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「医療観察法における医療の質の向上に関する研究」（研究代表者：中島豊爾）分担研究「通院医療モデルの構築に関する研究」（研究分担者：岩成秀夫）通院処遇ワークショップ「より良い通院処遇のために」，茨城，2010.9.18.
- 11) 安藤久美子：平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「医療観察法における医療の質の向上に関する研究」（研究代表者：中島豊爾）分担研究「通院医療モデルの構築に関する研究」（研究分担者：岩成秀夫）第 2 回研究会議，東京，2010.10.16
- 12) 安藤久美子：性犯罪者の薬物療法. 第 2 回医療観察法入院部門合同研究会議(司会)，アットビジネスセンター，東京,2010.11.14.
- 13) 安藤久美子：平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「医療観察法における医療の質の向上に関する研究」（研究代表者：中島豊爾）分担研究「通院医療モデルの構築に関する研究」（研究分担者：岩成秀夫）通院処遇ワークショップ in 大阪（司会），大阪研修センター，大阪，2010.11.20.
- 14) 安藤久美子：指定通院医療モニタリング研究—施行 5 年目までの状況—. 第 5 回通院医療等研究会，東京，2011.1.29.
- 15) 安藤久美子：平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「医療観察法における医療の質の向上に関する研究」（研究代表者：中島豊爾）分担研究「通院医療モデルの構築に関する研究」（研究分担者：岩成秀夫）第 3 回研究会議，東京，2011.1.29.
- 16) 菊池安希子：平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「医療観察法における医療の質の向上に関する研究」（研究代表者：中島豊爾）分担研究「通院医療モデルの構築に関する研究」（研究分担者：岩成秀夫）第 1 回研究会議，東京，2010.7.3.
- 17) 菊池安希子：平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「医療観察法における医療の質の向上に関する研究」（研究代表者：中島豊爾）分担研究「通院医療モデルの構築に関する研究」（研究分担者：岩成秀夫）通院処遇ワークショップ「より良い通院処遇のために」，茨城，2010.9.18.
- 18) 菊池安希子：平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「医療観察法における医療の質の向上に関する研究」（研究代表者：中島豊爾）分担研究「通院医療モデルの構築に関する研究」（研究分担者：岩成秀夫）第 2 回研究会議，東京，2010.10.16
- 19) 菊池安希子，：平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「医療観察法における医療の質の向上に関する研究」（研究代表者：中島豊爾）分担研究「通院医療モデルの構築に関する研究」（研究分担者：岩成秀夫）通院処遇ワークショップ「より良い通院処遇のために」，大阪，2010.11.20.
- 20) 菊池安希子：平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「医療観察法における医療の質の向上に関する研究」（研究代表者：中島豊爾）分担研究「通院医療モデルの構築に関する研究」（研究分担者：岩成秀夫）第 3 回研究会議，東京，2011.1.29.

C. 講演

- 1) 岡田幸之：精神鑑定とは何か. オムニバス心理講座—犯罪学のいま—. 武蔵野大学構内，東京，2010.6.26.
- 2) 岡田幸之：司法精神医学の視点から. メディアカンファレンス. 全国町村会館，東京，2010.6.28.
- 3) 岡田幸之：責任能力を巡る諸問題. 平成 22 年度刑事実務研究会. 司法研修所，埼玉，2007.7.6.

- 4) 岡田幸之：刑事訴訟における難解な法律概念（責任能力）について．刑事法研究会，最高裁判所，東京，2010.7.30.
- 5) 岡田幸之：責任能力を巡る諸問題．平成22年度特別研究会，司法研修所，和光市，2010.9.30.
- 6) 岡田幸之：精神鑑定と責任能力について．第3回長崎司法精神医学研究会，長崎，2010.11.5.
- 7) 岡田幸之：裁判員裁判における手続き運営上の諸問題（2）．平成22年度刑事実務研究会（第2回），2010.11.8.
- 8) 岡田幸之：精神鑑定について．札幌地方裁判所刑事鑑定研究会，札幌，2011.1.6.
- 9) 岡田幸之：裁判員制度における精神鑑定実務．東京地方裁判所刑事鑑定研究会，東京，2011.1.12.
- 10) 吉川和男：司法面接におけるMST（マルチシステムミックセラピー）の活用．全国家庭裁判所調査官研究協議会平成21年度全国研究集会，名古屋，2010.5.15.
- 11) 吉川和男：司法精神医学．平成22年度医学部医学科授業，東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科，東京，2010.6.11.
- 12) 吉川和男：わが国の司法精神医学の課題．第7回東海臨床精神医学フォーラム，東海大学医学部付属病院，神奈川，2010.6.14.
- 1) 安藤久美子，吉川和男：非行少年の特性－児童精神医学の視点から－．秋田大学大学院精神科学講座セミナー，秋田，2010.4.23.
- 2) 安藤久美子，吉川和男：医療観察法の通院処遇の実態と課題－モニタリング研究の分析から－．秋田県司法精神医学研究会，秋田，2010.4.24.
- 3) 安藤久美子：責任能力を巡る諸問題「裁判員制度における精神鑑定実務－説明の手法－」．平成22年度刑事実務研究会．司法研究所，埼玉，2007.7.6.
- 4) 安藤久美子：責任能力を巡る諸問題．平成22年度特別研究会，司法研修所，和光市，2010.9.30,10.1.
- 5) 安藤久美子：精神遅滞の刑事責任能力鑑定．司法精神医学会第2回精神鑑定ワークショップ（講師），学術総合センター，東京,2010.11.21.
- 6) 安藤久美子：被害少年の心理と特性．警察大学校，東京，2011.2.2.
- 7) 福井裕輝：社会的逸脱行動と脳機能．第51回日本児童青年精神医学会総会，群馬，2010.10.29.
- 8) 福井裕輝：性犯罪加害者の処遇について～認知行動療法の観点から～．中部地区における非行臨床に関する研究会，愛知，2011.1.29.
- 9) 菊池安希子：統合失調症の認知行動療法．富山精神科医療学術講演会，富山，2010.5.28.
- 10) 菊池安希子：精神病への認知行動療法（CBT）について．東京，2010.12.21.
- 11) 菊池安希子：ブリーフサイコセラピー的幻覚・妄想の認知行動療法．日本ブリーフサイコセラピー学会第8回地方大会，金沢，2011.2.26.
- 12) 菊池安希子：幻覚・妄想の認知行動療法について．専門科目精神医学演習I，筑波大学，茨城，2011.2.28.

D. 学会活動（学会主催，学会役員，座長，編集委員）

(1) 学会役員

- 1) 岡田幸之：日本社会精神医学会 理事
- 2) 岡田幸之：日本司法精神医学会 評議員
- 3) 岡田幸之：日本犯罪学会 評議員
- 4) 岡田幸之：日本犯罪学会 監事
- 5) 安藤久美子：日本社会精神医学会 理事
- 6) 安藤久美子：日本司法精神医学会 評議員
- 7) 菊池安希子：日本司法精神医学会 評議員
- 8) 菊池安希子：日本ブリーフサイコセラピー学会 常任理事（倫理会則委員会担当）
- 9) 菊池安希子：日本EMDR学会 理事（倫理資格委員会担当）

(2) 座長

- 1) 岡田幸之：精神医学研修コース 3. 裁判員制度における精神鑑定実務. 第 106 回日本精神神経学会学術総会, 広島, 2010.5.21.
- 2) 岡田幸之：一般演題「治療-2」. 第 6 回日本司法精神医学会大会, 東京, 2010.6.4.
- 3) 吉川和男：教育講演 13「医療観察法について」. 第 106 回日本精神神経学会学術総会, 広島, 2010.5.21.
- 4) 吉川和男：一般演題「司法鑑定」. 第 6 回日本司法精神医学会大会, 東京, 2010.6.4.
- 5) 安藤久美子：精神医学研修コース 3. 裁判員制度における精神鑑定実務. 第 106 回日本精神神経学会学術総会, 広島, 2010.5.21.
- 6) 安藤久美子：発達障害シンポジウム. 東京, 2010.10.20.
- 7) 菊池安希子：非行少年に対する更正プログラムの研究—傷つき体験への EMDR 活用の可能性—. 日本 EMDR 学会第 5 回学術大会, 神戸, 2010.5.14.
- 8) 菊池安希子：(通訳) 特別講演 2, EMDR と解離：解離のスクリーニングと認識. 日本 EMDR 学会第 5 回学術大会, 神戸, 2010.5.14.
- 9) 菊池安希子：(通訳) 特別ワークショップ「うつ病治療と催眠」. 日本臨床催眠学会第 12 回大会, 鹿児島, 2010.10.9.

(3) 学会誌編集委員等

- 1) 岡田幸之：日本司法精神医学会 編集委員長
- 2) 岡田幸之：日本犯罪学会 編集委員
- 3) 岡田幸之：日本司法精神医学会 研修・教育企画拡大委員
- 4) 岡田幸之：日本司法精神医学会 裁判員制度プロジェクト委員
- 5) 岡田幸之：日本司法精神医学会 精神鑑定委員
- 6) 岡田幸之：American Academy of Psychiatry and the Law International Committee
- 7) 吉川和男：英国 Criminal Behaviour and Mental Health 誌編集委員
- 8) 吉川和男：日本犯罪学会 編集委員
- 9) 安藤久美子：日本司法精神医学会 編集委員長補佐
- 10) 菊池安希子：日本司法精神医学会 編集委員長補佐

E. 研修

(1) 研修会企画

- 1) 岡田幸之, 吉川和男, 安藤久美子, 福井裕輝, 菊池安希子, 小松容子, 西中宏吏, : 精神鑑定. 平成 22 年度第 5 回司法精神医学研修, 東京, 2010.7.13-15.

(2) 研修会講師

- 1) 岡田幸之：責任能力と治療反応性. 医療観察法開棟床前研修. 鳥取医療センター, 鳥取, 2010.4.2.
- 2) 岡田幸之：ICF 評価項目シュミレーション, 指定入院医療機関におけるリスクマネジメント. 指定入院医療機関従事者病棟研修. 山梨県立北病院, 山梨, 2010.7.7.
- 3) 岡田幸之：精神鑑定. 平成22年度第5回司法精神医学研修, 東京, 2010.7.13.
- 4) 岡田幸之：精神鑑定の基礎知識. 第 132 回検事一般研修. 法務総合研究所, 東京, 2010.7.21.
- 5) 岡田幸之：広汎性発達障害. 第 120 回中央検事研究 (1), 法務総合研究所, 東京, 2010.8.23,24.
- 6) 岡田幸之：医療観察法における精神鑑定の実際と審判員の業務. 精神保健判定医等要請研修会, 大阪, 2010.8.28.
- 7) 岡田幸之：広汎性発達障害. 第 120 回中央検事研究 (2), 法務総合研究所, 東京, 2010.9.7-9.
- 8) 岡田幸之：医療観察法における精神鑑定の実際と審判員の業務. 精神保健判定医等要請研修会, 東京, 2010.9.11.

- 9) 岡田幸之：医療観察法における精神鑑定の実際と審判員の業務。平成22年度精神保健判定医等養成研修会，福岡，2010.10.1.
- 10) 岡田幸之：リスクアセスメント。任用研修課程高等科第42回研修，東京，2010.10.29.
- 11) 岡田幸之：精神鑑定の基礎知識。第133回検事一般研修，東京，2010.11.25.
- 12) 岡田幸之：刑事精神鑑定総論－心理的要素における7つの着眼点をめぐって。肥前司法精神医学研修会，沖縄，2010.12.11.
- 13) 岡田幸之：司法精神医学概論。鑑定技術職員養成科第57期研修，千葉，2011.1.25.
- 14) 岡田幸之：刑事精神鑑定の基本手法～事例を通して（統合失調症事例）。第3回肥前司法精神医学研修会，佐賀，2011.2.8.
- 15) 岡田幸之：リスクアセスメント。調査鑑定特別科第4回研修，東京，2011.3.10.
- 16) 吉川和男：医療観察法症例検討会。秋田県司法精神医学研究会，秋田，2010.4.24.
- 17) 吉川和男：医療観察制度の実状と課題。第36回保護局関係職員管理研究科研修（講師），法務総合研究所，東京，2010.6.11.
- 18) 吉川和男：精神障害者の暴力・歴史 リスクアセスメント HCR-20 システム。鹿児島県立始良病院医療観察法病棟全体研修，鹿児島，2010.6.25.
- 19) 吉川和男：司法精神医学概論。平成22年度第5回司法精神医学研修，東京，2010.7.13.
- 20) 吉川和男：法と制度に関する概論。平成22年度第5回司法精神医学研修，東京，2010.7.13.
- 21) 吉川和男：HCR-20（暴力のリスク・アセスメント）ワークショップ(1)(2)(3)(4)。平成22年度第5回司法精神医学研修，東京，2010.7.14.
- 22) 安藤久美子：ケースカンファレンス。愛光女子学園，東京，2010.4.20.
- 23) 安藤久美子：医療観察法症例検討会。秋田県司法精神医学研究会，秋田，2010.4.24.
- 24) 安藤久美子：医療観察法－処遇の概要と対象者の特性－。平成22年度第5回司法精神医学研修，東京，2010.7.16.
- 25) 安藤久美子：指定討論。第5回自閉症療育研修，郡山，2010.7.27
- 26) 安藤久美子：ケースカンファレンス。愛光女子学園，東京，2010.8.11.
- 27) 安藤久美子：広汎性発達障害。第120回中央検事研究（1），法務総合研究所，東京，2010.8.23, 24.
- 28) 安藤久美子：広汎性発達障害。第120回中央検事研究（2），法務総合研究所。東京，2010.9.7, 8.
- 29) 安藤久美子：ケースカンファレンス。愛光女子学園，東京，2010.9.22.
- 30) 安藤久美子：アリピピゾール IM デポ注射剤治験に関する研究会及び意見聴取。Aripiprazole IMD Investigator Meeting，兵庫，2010.10.2.
- 31) 安藤久美子：ストーカー・配偶者暴力対策専科。関東管区警察学校専科教養，東京，2010.10.13.
- 32) 安藤久美子：ケースカンファレンス。愛光女子学園，東京，2010.11.9.
- 33) 安藤久美子：ケースカンファレンス。愛光女子学園，東京，2011.1.5.
- 34) 安藤久美子：精神鑑定の基礎。平成22年度新任検事研修，千葉，2011.1.13.
- 35) 安藤久美子：発達障害と司法精神医学の関わり。第10回発達障害支援のための医学研修，東京，2011.2.10.
- 36) 福井裕輝：触法精神障害者の認知神経科学。平成22年度第5回司法精神医学研修，東京，2010.7.16.
- 37) 福井裕輝：ストーカー・配偶者暴力対策専科。関東管区警察学校専科教養，東京，2010.10.14.
- 38) 福井裕輝：子どもを対象とした暴力的性犯罪の出所者に対する面談要領，面談する際の留意点等について。担当責任者研修会，警察庁，東京，2011.3.2.
- 39) 菊池安希子：認知行動療法（1）。医療観察法開床前研修。鳥取医療センター，鳥取，2010.4.6.

- 40) 菊池安希子:統合失調症の認知行動療法入門. 国立精神・神経医療研究センター医局研究会(講師), 国立精神・神経医療研究センター病院, 東京, 2010.5.18.
- 41) 菊池安希子:統合失調症の認知行動療法入門. 国立精神・神経医療研究センター精神科レジデント初期セミナー, 国立精神・神経医療研究センター病院, 東京, 2010.5.24.
- 42) 菊池安希子:HCR-20(暴力のリスクの評価スケジュール)の運用に関する研修. 播磨社会復帰促進センター, 兵庫, 2010.6.28-29.
- 43) 菊池安希子:統合失調症に対する認知行動療法. 院内研究第1回統合失調症に対する認知行動療法について. 東京都立松沢病院, 東京, 2010.7.6.
- 44) 菊池安希子:統合失調症に対する認知行動療法. 院内研究第2回幻聴に対する認知行動療法的アプローチについて. 東京都立松沢病院, 東京, 2010.7.12.
- 45) 菊池安希子:触法精神障害者に対する認知行動療法(1)(2)(3)(4). 平成22年度第5回司法精神医学研修, 東京, 2010.7.15.
- 46) 菊池安希子:統合失調症の認知行動療法入門. 統合失調症の認知行動療法研修会. 三重県, 2010.9.6.
- 47) 菊池安希子:司法精神医学③認知行動療法. 第3回社会復帰調査官初任研修, 2010.10.12
- 48) 菊池安希子:事例検討「身体的特徴からいじめ被害体験のある非行少年に対して実施したEMDR」. EMDR東京スタディグループ事例検討会, 東京, 2010.10.23.
- 49) 菊池安希子, 岩崎さやか:認知行動療法. 第2回ACT全国研修会, 京都, 2010.11.27-28.
- 50) 菊池安希子:統合失調症の認知行動療法. 行政職員地域援助研修・中級(後期). 東京, 2011.1.18.
- 51) 菊池安希子:ケースカンファレンス. EMDR東京スタディ・グループ, 東京, 2011.1.22.
- 52) 菊池安希子:統合失調症の認知行動療法概論・演習. 茨城県立友部病院医療観察法病棟全体研修, 茨城, 2011.1.27.

13. 自殺予防総合対策センター

I. 自殺予防総合対策センターの概要

わが国の自殺による死亡者数は平成10年に3万人を超え、以後もその水準で推移している。わが国は世界でも自殺死亡率の高い国のひとつであり、自殺未遂や自殺の問題で深刻な影響を受ける人々を含めると、自殺対策はわが国の直面する大きな課題である。

自殺対策の目的は、自殺を防止し、あわせて自殺者の親族等に対する支援を充実し、もって国民が健康で生きがいを持って暮らすことのできる社会の実現に寄与することである（自殺対策基本法）。自殺予防総合対策センターは、自殺予防に向けての政府の総合的な対策を支援するために平成18年10月1日に国立精神・神経センター精神保健研究所の内部組織として設置された。

自殺予防総合対策センターは、センター長のもとに、自殺実態分析室、自殺予防対策支援研究室、適応障害研究室の3研究室を置き、下記の業務を行っている（自殺予防総合対策センター設置要綱）。

- (1) 自殺予防対策に関する情報の収集及び発信に関すること。
- (2) 自殺予防対策支援ネットワークの構築に関すること。
- (3) 自殺の実態分析等に関すること。
- (4) 自殺の背景となる精神疾患等の調査・研究に関すること。
- (5) 自殺予防対策等の研修に関すること。
- (6) 自殺未遂者のケアの調査・研究に関すること。
- (7) 自殺遺族等のケアの調査・研究に関すること。

センター長：竹島 正（精神保健計画部長の併任）、自殺実態分析室長（5/16より副センター長併任）：松本俊彦、自殺予防対策支援研究室長：川野健治、適応障害研究室長：稲垣正俊、非常勤研究員（6/1より）：大槻露華、勝又太陽郎、川島大輔、山内貴史、非常勤職員：滝澤さなえ（4/23より）、八重樫弘子、研究費雇上：長島弥生、増田久重。

II. 研究活動

1) 心理学的剖検データベースを活用した自殺の原因分析に関する研究

本研究は、平成22年度厚生労働科学研究費補助金（障害者総合対策研究事業）「自殺の原因分析に基づく効果的な自殺防止対策の確立に関する研究（主任研究者：加我牧子）」によるものであり、今年度は、厚生労働科学研究費補助金（こころの健康科学研究事業）「心理学的剖検データベースを活用した自殺の原因分析に関する研究」によって開発された「自殺予防と遺族支援のための基礎調査」を引き続き実施し、横浜市、滋賀県、東京都内在住の自殺既遂者の遺族を対象とした調査面接を行った。そのうえで、自殺既遂事例の集積ともに、事例内における自殺既遂の類型分析を行い、先行研究の知見を確認した。さらに、今年度の分析では、若年女性の自殺既遂者は、生前に自殺関連行動を繰り返していた者が多く、若年女性を中心とする生存自殺未遂者と特徴が類似している、という新たな知見が明らかになり、若年女性の自殺予防のためには、比較的致死性の低い自傷行為に対する危機介入が重要な意義を持つ可能性が示唆された（松本、勝又、竹島）。

2) 地域における自死遺族への支援に関する研究

本研究は、平成22年度厚生労働科学研究費補助金こころの健康科学研究事業「自殺のハイリスク者の実態解明及び自殺予防に関する研究（主任研究者 伊藤弘人）」によるものであり、自殺対策基本法に鑑み、地域での遺族へのケアという複合的な課題を検討することを目的としている。本年度は以下の課題に取り組んだ。①厚生労働研究の成果であるガイドライン「自死遺族を支えるために」について、課題把握のために当事者および有識者を対象としたヒアリングを行った。②地域での自死遺族支援の評価プログラム作成にむけて、情報収集およびモニター調査を実施した。自死遺族支援における自助・支援グループの定義について、当事者からは慎重な記載が求められていることが明らかになった。また、地域での自死遺族支援の評価の多元性、支援の断続性という特徴、およびステークホルダー間の調整の困難さが明らかになったため、行政における自死遺族支援に関する評価方法について提案をまとめた（川野、川島）。

3) 一般診療科と精神科の連携によるうつ病患者/自殺ハイリスク者の発見と支援に関する研究

うつ病患者/自殺ハイリスク者に対するうつ病/自殺に対する予防法・介入法を開発することを目的とし、医学的観点からうつ病/自殺の病態解明、医療モデルによる予防・介入法の開発を目指し研究を開始した。先行して研究がなされている欧米の知見によると、一般地域住民、一般診療科医師、一般診療科医師と精神科の連携、精神科での治療のそれぞれのレベルで様々な障害が認められている。そこで、かかりつけ医機能を有する一般病院内科外来におけるうつ病有病率と医師のうつ病認識率、治療導入率についての調査研究を行った。更に、一般診療科医師のうつ病診療に関わる態度を調査した。これらの結果に基づき、一般診療科において実施可能なうつ病ケアモデルの検討を行った（稲垣、大槻）。

4) 薬物依存者・アルコール依存者の自殺の実態解明と自殺予防に関する研究

本研究は、平成22年度厚生労働科学研究費補助金こころの健康科学研究事業「自殺のハイリスク者の実態解明及び自殺予防に関する研究（主任研究者 伊藤弘人）」によるものであり、今年度は、7箇所依存症専門医療機関に受診したアルコール・薬物使用障害患者1,419名と、5箇所の一般精神科医療機関に受診しうつ病性障害患者917名を対象として、自記式調査票による調査を行った。その結果、物質使用障害患者は全体としてはうつ病性障害患者よりもうつおよび自殺傾向が軽症であったが、薬物乱用を伴う者、あるいは女性の場合には、うつ病性障害患者よりもはるかに深刻な自殺傾向が認められた。また、物質使用障害患者においては、若年者と女性、薬物乱用を伴うこと、うつ傾向が著明であることが自殺ハイリスク群の特徴であり、自殺企図時にアルコールや薬物を摂取した状態の者が多く、幻聴などの精神病症状を呈していた者も少なくないことも明らかにされた。さらに、うつ病性障害患者においても、アルコールや薬物はその自殺リスクに一定の影響を与える可能性が示唆され、ふだん飲酒習慣を持たなくとも、突然、周囲が心配するような過量飲酒エピソードを呈する患者は、自殺リスクが高い可能性が推測された（松本）。

5) 自殺対策取組状況調査

全国の都道府県・政令指定都市における自殺対策の取組状況および自殺対策連絡協議会の活動状況等を把握し、国および自治体における自殺対策の推進に役立てるため、全国の都道府県・政令指定都市の自殺対策主管課を対象に「都道府県・政令指定市における自殺対策取組状況に関する調査」（以下、自殺対策調査という）と「都道府県・政令指定市における自死遺族支援への取組状況に関する調査」（以下、遺族支援調査という）の2つの質問紙調査を実施した。調査は平成22年4月～5月に行われ、回答数は両調査とも66（有効回答100.0%）であった。自殺対策調査の結果、自治体における取組は広がりを見せているものの、啓発等、事業として実施しやすいものに偏る傾向があり、ハイリスク者対策等の取組を充実させる必要があると考えられた。遺族支援調査の結果、平成22年4月の時点で、ほとんどの都道府県に（公的機関/民間の）自助・支援グループが存在することが確認された。先行する自治体や民間の自助グループの経験を生かし、実質的な自死遺族支援のメニュー作りに取り組むことが重要である（竹島、川野、大槻）。

6) 自殺関連行動とネット上の情報との関連についての検討

インターネット上には自殺に予防的に作用する可能性のある情報と自殺行動を促進させる可能性のある情報が得られる。しかし、その実態は不明で、自殺関連行動との因果関係も明らかとなっていない。そこで、インターネット上の自殺に関連する情報にアクセスする人の割合や、アクセスする人の特性についての実態調査を行った（稲垣、竹島）。

Ⅲ. 社会的活動

1) 市民社会に対する一般的な貢献

自殺予防総合対策センターホームページ「いきる」の運営、自殺予防メディアカンファレンス等を通して、市民社会への自殺対策充実のための情報発信を行った。相談窓口の連携をテーマに自殺対策ネットワーク協議会を開催した(2010.7.27)。また、「いきるを支える 精神保健と社会的取り組み 相談窓口連携の手引き」を刊行し、都道府県・政令指定都市の自殺対策主管課、全国の精神保健福祉センター、保健所等に配布した。

竹島正は、全国精神保健福祉連絡協議会の副会長としてその活動を支援した。また、「支援付き住宅推進会議」発起人、「こころの健康政策構想会議」提言起草委員会副座長、NPO 法人「自立支援センターふるさと

の会」の苦情解決第三者委員会委員、「こころのバリアフリー研究会」の委員を務めた。

松本俊彦は、中学校・高校での生徒向け薬物乱用防止講演会、一般市民を対象とする自殺予防に関する啓発的な講演会の講師をつとめた。また、各地で養護教諭を対象にした高校生等の自傷行為の実態と理解のための講演会の講師を務めた。

川野健治は、一般市民を対象とする自殺予防に関する啓発的な講演会の講師を務めた。また、自死遺族支援団体やいのちの電話の主催する研修会等で講師を務めた。

2) 専門教育面における貢献

松本俊彦は、厚生労働省管轄、法務省（矯正局・保護局）管轄、地方自治体、教育委員会が主催する各種研修会、東京都学校保健会で講師を務めるとともに、精神保健福祉センター・保健所、養護教諭のグループが主催する事例検討会において助言者を務め、地域における実務家の業務を支援した。また、公立大学法人横浜市立大学非常勤講師として、医学領域の専門家養成に貢献した。さらに、自傷行為に関する海外の専門書を翻訳・刊行し、国内の研究者・実務家に有益な海外の研究知見を紹介した。

川野健治は、地方自治体、教育委員会、臨床心理士会、保健所長会、社会福祉協議会等で自殺対策に関連するテーマで講師を務めた。また、東京大学の非常勤講師として、心理学の専門家養成に貢献した。

稲垣正俊は、自殺対策のための各種研修の実施・支援を行い自殺対策のための専門家養成に貢献した。

3) 精研の研修の主催と協力

竹島正は、第4回自殺総合対策企画研修（2010.8.25-27）の主任、第1回心理職自殺予防研修（2010.7.5-6）、第1回自殺予防のための自傷行為とパーソナリティ障害の理解と対応研修の副主任（2010.11.8-9）、第2回精神科医療従事者自殺予防研修（2010.11.30-12.1）の副主任を務めた。また、精神保健計画研究部長として、第47回精神保健指導課程（2010.6.30-7.2）の主任を務めた。

松本俊彦は、第1回自殺予防のための自傷行為とパーソナリティ障害の理解と対応研修（2010.11.8-9）の主任、第47回精神保健指導課程（2010.6.30-7.2）、第1回心理職自殺予防研修（2010.7.5-6）、第4回自殺総合対策企画研修（2010.8.25-27）、第1回精神科医療従事者自殺予防研修（2010.9.14-15）、第2回精神科医療従事者自殺予防研修（2010.11.30-12.1）の副主任を務めた。また、薬物依存臨床医師研修の講師を務めた。

川野健治は、第1回心理職自殺予防研修（2010.7.5-6）の主任、第47回精神保健指導課程（2010.6.30-7.2）、第4回自殺総合対策企画研修（2010.8.25-27）、第1回精神科医療従事者自殺予防研修（2010.9.14-15）、第1回自殺予防のための自傷行為とパーソナリティ障害の理解と対応研修（2010.11.8-9）、第2回精神科医療従事者自殺予防研修（2010.11.30-12.1）の副主任を務め、また各々で講師を担当した。

稲垣正俊は、第1回精神科医療従事者自殺予防研修（2010.9.14-15）の主任を務め、第1回心理職自殺予防研修（2010.7.5-6）、第4回自殺総合対策企画研修（2010.8.25-27）、第1回自殺予防のための自傷行為とパーソナリティ障害の理解と対応研修（2010.11.8-9）、第2回精神科医療従事者自殺予防研修（2010.11.30-12.1）の副主任を務めた。

4) 保健医療行政・政策に関連する研究・調査、委員会等への貢献

自殺対策推進室、厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部精神・障害保健課等と連携して、精神保健的観点からの自殺対策の推進のための提案および協力を行った。また、平成22年版自殺対策白書（内閣府）の作成に協力した。全国精神保健福祉センター長会等の協力をもとに自殺対策研究協議会（2010.8.25-26）を開催した。

竹島正は、内閣府本府政策参与（非常勤）、内閣府自殺対策推進会議オブザーバー、厚生労働省平成22年度自殺防止対策事業評価委員長、「メンタルヘルス総合情報サイト」の運営委員、厚生労働省平成22年度地域自殺対策推進事業評価委員会委員、精神保健福祉士試験委員、富山県自殺対策推進協議会アドバイザー、墨田区保健衛生協議会こころの健康・自殺予防対策分科会委員、新潟県自殺予防対策検討会委員、船橋市自殺対策連絡会議委員を務めた。また、アジア・パシフィック・コミュニティ・メンタルヘルス・プロジェクトに参

画して、アジア地域に適した地域精神保健の推進の共同研究を行った。さらに、2002年からの日豪保健福祉協力に基づく共同研究を発展させて、2010年9月から5年間の「メンタルヘルスプログラムにおける協力関係に関する覚書」(MEMORANDUM OF UNDERSTANDING 2010 COOPERATION IN MENTAL HEALTH PROGRAMS AS BETWEEN NCNP and THE UNIVERSITY OF MELBOURNE)の締結に導くなど、メルボルン大学との共同研究を行った。

松本俊彦は、法務省保護局「薬物事犯者に対する保護観察に関する検討会」、薬物乱用防止戦略加速化プランワーキングチーム・内閣府大臣有識者ヒアリング参考人、第6回自殺・うつ病等対策プロジェクトチーム 向精神薬の処方に関する有識者からのヒアリング参考人、厚生労働省過量服薬対策ワーキングチーム検討委員、内閣府共生社会政策「スペインにおける青少年の薬物乱用対策に関する企画分析」企画分析委員、文部科学省スポーツ・青少年局「薬物乱用防止広報啓発活動推進協力者会議」委員、世田谷区自殺対策連絡協議会会長を務めた。また、東京地方裁判所登録精神保健判定医として心神喪失者等医療観察法の審判・鑑定に従事した。

川野健治は、内閣府「自死遺族支援研修等事業実施検討会」の構成員として、専門的見地から意見を述べ、報告書作成に協力した。

稲垣正俊は、「自殺対策のための戦略研究」の実施支援を財団法人精神・神経科学振興財団とともに行った。

IV. 研究業績

A. 刊行物

(1) 原著論文

- 1) Ohtsuki T, Inagaki M, Oikawa Y, Saitoh A, Kurosawa M, Muramatsu K, Yamada M: Multiple barriers against successful care provision for depressed patients in general internal medicine in a Japanese rural hospital: a cross-sectional study. *BMC Psychiatry* 10: 30, 2010.
- 2) Kodaka M, Postuvan V, Inagaki M, Yamada M: A systematic review of scales that measure attitudes toward suicide. *International Journal of Social Psychiatry* [Epub ahead of print], 2010.
- 3) Katsumata Y, Matsumoto T, Kitani M, Akazawa M, Hirokawa S, Takeshima T: School problems and suicide in Japanese young people. *Psychiatry and Clinical Neurosciences*, The Japanese Society of Psychiatry and Neurology: 64(2), 214-215, 2010.
- 4) Sudo A, Yamauchi T: Risk cognition and risk behaviors concerning sexual victimization in female undergraduates. *Pers Individ Dif* 49: 13-18, 2010.
- 5) Chee Ng, Setoya Y, Koyama A, Takeshima T: The ongoing development of community mental health services in Japan: utilizing strength and opportunities. *Australasian Psychiatry*: 18(1): 57-61, 2010.
- 6) Saito M, Iwata N, Kawakami N, Matsuyama Y; World Mental Health Japan 2002–2003 Collaborators, Ono Y, Nakane Y, Nakamura Y, Tachimori H, Uda H, Nakane H, Watanabe M, Naganuma Y, Furukawa TA, Hata Y, Kobayashi M, Miyake Y, Takeshima T, Kikkawa T: Evaluation of the DSM-IV and ICD-10 criteria for depressive disorders in a community population in Japan using item response theory. *Int J Methods Psychiatr Res*. 19(4):211-22. 2010.
- 7) Yoshimasu K, Kawakami N, Ono Y, Nakane Y, Nakamura Y, Kobayashi M, Fukao A, Oorui M, Horiguchi I, Yamamoto Y, Tachimori H, Takeshima T, Naganuma Y, Iwata N, Uda H, Nakane H, Watanabe M, Funayama K, Furukawa TA, Hata Y, Ahiko T, Kikkawa T. Epidemiological aspects of intermittent explosive disorder in Japan: prevalence and psychosocial comorbidity: findings from the World Mental Health Japan Survey 2002-2006." *Psychiatry Research* 186(2-3): 384-389, 2011.
- 8) Mitsui T, Hirayama K, Aoki S, Nishikawa K, Uchida K, Matsumoto T, Kabuta T, Wada K. Identification of a novel chemical potentiator and inhibitors of UCH-L1 by in silico drug screening. *Neurochem Int*56(5): 679-86, 2010.

- 9) Takahashi K, Murasawa H, Yamaguchi K, Yamada M, Nakatani A, Yoshida M, Iwai T, Inagaki M, Yamada M, Saitoh A: Riluzole rapidly attenuates hyperemotional responses in olfactory bulbectomized rats, an animal model of depression. Behavioural Brain Research 216 : 46-52, 2011.
- 10) Kodaka M, Tanaka S, Takahara M, Inamoto A, Shirakawa S, Inagaki M, Kato N, Yamada M: Misalignments of rest-activity rhythms in inpatients with schizophrenia. Psychiatry and Clinical Neurosciences 64(1): 88-94, 2010.
- 11) 松本俊彦, 松下幸生, 奥平謙一, 成瀬暢也, 長 徹二, 武藤岳夫, 芦沢 健, 小沼杏坪, 森田展彰, 猪野亜朗: 物質使用障害患者における乱用物質による自殺リスクの比較—アルコール、アンフェタミン類、鎮静剤・催眠剤・抗不安薬使用障害患者の検討から—。日本アルコール・薬物医学会誌 45 (6): 530-542, 2010.
- 12) 赤澤正人, 松本俊彦, 勝又陽太郎, 木谷雅彦, 廣川聖子, 高橋祥友, 平山正実, 亀山晶子, 竹島 正 : アルコール関連問題を抱えた自殺既遂者の心理社会的特徴: 心理学的剖検を用いた検討。日本アルコール・薬物医学会雑誌 45 (2): 104-118, 2010.
- 13) 赤澤正人, 松本俊彦, 勝又陽太郎, 木谷雅彦, 廣川聖子, 高橋祥友, 川上憲人, 渡辺直樹, 平山正実, 竹島 正 : 死亡 1 年前にアルコール関連問題を呈した自殺既遂者の心理社会的特徴。精神医学 52(6) : 561-572.
- 14) 赤澤正人, 松本俊彦, 勝又陽太郎, 木谷雅彦, 廣川聖子, 高橋祥友, 川上憲人, 渡部直樹, 平山正実, 亀山晶子, 横山由香里, 竹島 正 : 死亡時の就労状況からみた自殺既遂者の心理社会的類型について—心理学的剖検を用いた検討—。日本公衆衛生雑誌 57(7) , 550-560, 2010.
- 15) 亀山晶子, 松本俊彦, 赤澤正人, 勝又陽太郎, 木谷雅彦, 廣川聖子, 竹島 正 : 負債を抱えた中高年自殺既遂者の心理社会的特徴。精神医学 52 (9): 903-907, 2010.
- 16) 赤澤正人, 松本俊彦, 立森久照, 竹島 正 : アルコール関連問題を抱えた人の自殺関連事象の実態と精神的健康への関連要因。精神神経学雑誌 112(8), 720-733, 2010.
- 17) 小林桜児, 松本俊彦, 千葉泰彦, 今村扶美, 森田展彰, 和田 清 : 少年鑑別所入所者を対象とした日本語版 SOCRATES (Stages of Change Readiness and Treatment Eagerness Scale) の因子構造と妥当性の検討。日本アルコール・薬物医学会誌 45 (5): 437-451, 2010.
- 18) 今村扶美, 松本俊彦, 小林桜児, 平林直次, 和田 清 : 国立精神・神経医療研究センター病院における物質使用障害治療プログラムの開発と効果測定。日本アルコール・薬物医学会誌 45 (5): 452-463, 2010.
- 19) 砂谷有里, 松本俊彦 : ウェブサイト開設による自傷行為への影響—「自傷サイト」を開設した自傷者の語りにもとづく検討—。精神科治療学 26 (2): 241-250, 2011.
- 20) 川島大輔 : 死生学における質的研究の展開と意義—死の心理学研究を中心に。質的心理学フォーラム 2, 70-80, 2010.
- 21) 川島大輔, 川野健治, 伊藤弘人 : 日本語版 Suicide Intervention Response Inventory (SIRI) 作成の試み。精神医学 52(6) : 543-551, 2010.
- 22) 川島大輔, 川野健治, 小山達也, 伊藤弘人 : 自死遺族の精神的健康に影響を及ぼす要因の検討。精神保健研究 56, 55-63, 2010.
- 23) 荘島幸子, 川島大輔, 川野健治 : 死・自殺のイメージスキーマ。精神保健研究 56, 65-79, 2010.
- 24) 川島大輔, 荘島幸子, 川野健治 : 生徒の自傷・自殺への教師の対応困難感についての探索的検討。自殺予防と危機介入 31, 51-57, 2011.
- 25) 河野稔明, 白石弘巳, 立森久照, 竹島 正 : 「精神保健医療福祉の改革ビジョン」における「退院率」の定義に関する注意点。精神医学 52(6): 583-589, 2010.
- 26) 河野稔明, 竹島 正, 小山明日香, 立森久照, 長沼洋一 : 「精神保健福祉資料」に係る電子調査票の開発。日本精神科病院協会雑誌 29(9): 874-878, 2010.
- 27) 小山明日香, 立森久照, 河野稔明, 竹島 正 : 精神病床長期在院患者の転院・死亡を考慮した退院状況の指標の検討。日本公衆衛雑誌 58(1):40-46. 2011.

- 28) 松本俊彦, 千葉泰彦, 今村扶美, 小林桜児, 和田 清: 少年鑑別所における自習ワークブックを用いた薬物再乱用防止プログラムの試み～重症度による介入効果の相違に関する検討. 精神医学 52 (12): 1161-1171, 2010.
- 29) 今村扶美, 松本俊彦, 藤岡淳子, 森田展彰, 岩崎さやか, 朝波千尋, 壁屋康洋, 久保田圭子, 平林直次: 重大な他害行為に及んだ精神障害者に対する「内省プログラム」の開発と効果測定. 司法精神医学 5(1): 2-15, 2010.

(2) 総説

- 1) 竹島 正: 精神保健医療福祉と自殺対策. 日本精神科病院協会雑誌 29(3): 10-15, 2010.
- 2) 竹島 正: 精神保健と地域づくりのつながり 自殺予防を糸口に. 公衆衛生 74(11): 950-954, 2010.
- 3) 竹島 正, 的場由木: 公衆衛生の精神保健活動の課題—地域づくりにむけて. 公衆衛生 74(12): 1034-1037, 2010.
- 4) 竹島 正: 活動の始まりの頃—サバイバーの系譜. こころの健康 25(2): 29-34, 2010.
- 5) 竹島 正: 自殺予防と精神保健医療の役割. 精神神経学雑誌 113(1): 68-69, 2011.
- 6) 竹島 正: 自殺対策における自殺とは何か. 精神神経学雑誌 113(1): 70-73, 2011.
- 7) 竹島 正, 宇田英典, 眞崎直子: 地域のメンタルヘルスの問題はどのように変わっているのですか?. 公衆衛生 75(4): 321-325, 2011.
- 8) 石倉文信, 禧久孝一, 桑原 寛, 竹島 正, 吉野比呂子, 岩井英典, 斉藤幸光: (パネルディスカッション) 「異業種間でのハイリスク者を包括的に支援するためのネットワークを構築する意義と各業種の役割」. 日本司法書士会連合会, 2010.
- 9) 赤澤正人, 竹島 正: 自殺と自殺予防対策の現状—働き盛りの人の自殺を中心に—. 地方公務員 安全と健康フォーラム 75: 9-12, 2010.
- 10) 赤澤正人, 竹島 正, 松本俊彦, 江口のぞみ: 自殺の心理学的剖検からみたこれからの自殺対策. 保健の科学 52(7), 441-446, 2010.
- 11) 廣川聖子, 竹島 正: こころの健康問題に栄養士ができること. 食生活 104(6): 36-42, 2010.
- 12) 松本俊彦: 地域保健従事者のための精神保健の基礎知識: 自殺問題から明らかになる精神科医療・精神医学の課題. 公衆衛生 74(4): 325-329, 2010.
- 13) 松本俊彦: アルコール・薬物の乱用・依存と自殺予防. 日本精神科病院協会雑誌 29(3): 251-257, 2010.
- 14) 松本俊彦: 地域保健従事者のための精神保健の基礎知識: 自殺問題から明らかになる地域保健の課題 1. 公衆衛生 74 (5): 419-422, 2010.
- 15) 松本俊彦: 自傷と自殺～「死にたいくらい」のつらさを生き延びる子どもたちの隠された傷. 月刊少年育成 650 (5): 16-21, 2010.
- 16) 松本俊彦: 青年期の自殺とその予防—自傷行為に注目して—. ストレス科学 24 (4): 229-238, 2010.
- 17) 松本俊彦: アルコール・薬物使用障害の心理社会的治療. 医学のあゆみ 233 (12): 1143-1147, 2010.
- 18) 松本俊彦: 子どもの自傷行為への対応. 心とからだの健康 14 (9): 14-19, 2010.
- 19) 松本俊彦: 第7章 成人のパーソナリティおよび行動の障害 コラム「自傷行為のパーソナリティ障害の兆候か」. 精神科治療学 25 増刊号 今日精神科治療ガイドライン, 246, 2010.
- 20) 松本俊彦: リストカットを超えて～「故意に自分の健康を害する行為」をどう捉えるか～. 青年期精神療法 7 (1): 4-14, 2010.
- 21) 松本俊彦: 覚せい剤依存症の精神療法—患者と家族に対する初回面接の工夫—. 臨床精神医学 39 (12): 1583-1587, 2010.
- 22) 松本俊彦: 職場における自殺予防～アルコール問題と自殺. 産業精神保健 18 (4): 296-300, 2010.
- 23) 松本俊彦: 自殺総合対策における精神科医療の課題—総合的な精神保健的対策を目指して—. 精神神経学雑誌 113 (1): 81-85, 2011.

- 24) 松本俊彦:薬物臨床の最前線 SMARPPが丸ごとわかる! 第2回 スマーブ始動! —せりがや病院での試み。季刊Be! 102号 2011. 3: 68-73, 2011.
- 25) 松本俊彦: 覚せい剤依存症の精神療法—患者と家族に対する初回面接の工夫—。財団法人麻薬・覚せい剤乱用防止センターNEWS LETTER 2011. 2・第84号: 2-5, 2011.
- 26) 松本俊彦: 7. アルコールとうつ病、自殺。日本アルコール関連問題学会雑誌特別号: S12-S13, 2011.
- 27) 今村扶美, 松本俊彦: 医療観察法病棟における薬物依存症治療。こころのりんしょう *à-la-carte* 29(1): 91-96, 2010.
- 28) 川野健治: 地域保健従事者のための精神保健の基礎知識 自殺問題から明らかになる地域保健の課題(2)。公衆衛生 74: 509-512, 2010.
- 29) 川野健治: 自殺で遺された家族。精神科臨床サービス 10: 401-403, 2010.
- 30) 川野健治: 自死遺族が人生の主体者として復帰するために。月刊福祉 93: 46-47, 2010.
- 31) 川野健治: 自死遺族の精神保健的問題。精神神経学雑誌 113(1): 81-93, 2011.
- 32) 川野健治: ロボットが人を癒す?—フェイクが人を癒すとき。こころの科学 156(3): 94-98.
- 33) 川野健治: 秘密、もしくは立ちあがる主体のために。質的心理学フォーラム 2: 5-10, 2010.
- 34) 稲垣正俊: うつ病対策と自殺対策。日本精神科病院協会雑誌 29(3): 40-44, 2010.
- 35) 稲垣正俊, 大槻露華: 精神保健・自殺問題の実践を科学する。公衆衛生 74(9): 790(64)-794(68), 2010.
- 36) 稲垣正俊: 適応障害。精神科治療学 25: 170-171, 2010.
- 37) 稲垣正俊, 山田光彦, 神庭重信: 精神医学 Update—最新研究動向: うつ病・自殺対策における精神医学の役割。別冊医学のあゆみ: 61-70, 2010.
- 38) 稲垣正俊: にせの薬が効く?—プラセボとはなにか。こころの科学 156(3): 89-93, 2011.
- 39) 稲垣正俊: 身体科と精神科との連携によるうつ病・自殺ハイリスク者の支援。精神神経学雑誌 113(1): 94-101, 2011.
- 40) 米本直裕, 稲垣正俊, 山田光彦: 12 の抗うつ薬はどれも同じか?—マルチプルトリートメントメタアナリシスが開く新しいエビデンス—。臨床精神薬理 13(10): 1975(147)-1984(156), 2010.
- 41) 大槻露華, 稲垣正俊, 山田光彦: 大規模臨床研究を利用した遺伝子解析研究の意義と限界。分子精神医学 10 (4): 291-298, 2010.
- 42) 山田光彦, 稲垣正俊: わが国における自殺予防に関する政策。臨床精神医学 39 (11): 1387-1393, 2010.
- 43) 勝又陽太郎: 若年自殺既遂者の心理社会的特徴と予防対策。日本社会精神医学会雑誌, 19(1): 58-62, 2010.
- 44) 勝又陽太郎, 竹島 正: 心理学的剖検。臨床精神医学 39(11): 1425-1429, 2010.
- 45) 勝又陽太郎: 学校で出会ううそ こころの科学 156: 85-88, 2011.
- 46) 川島大輔, 川野健治: 自殺の危機介入スキル尺度〔日本語版 SIRI〕。臨床精神医学, 39 巻増刊号: 851-858, 2010.
- 47) 浅井智久, 山内貴史, 杉森絵里子, 坂東奈緒子, 丹野義彦: 統合失調型パーソナリティと統合失調症の連続性。心理学評論 53(2): 240-261, 2010.
- 48) 竹島 正: 啓発とは何か。精神医学 52(6): 530-531, 2010.
- 49) 竹島 正, 立森久照, 河野稔明, 小山明日香, 長沼洋一: 「精神保健医療福祉の改革ビジョン」の成果に関する研究。こころの健康と病気—こころの健康増進方策、病気の原因解明とその対策がここまで発展しています—, 財団法人 精神・神経科学振興財団, 3-13, 2010.
- 50) 竹島 正: 家族会とともに取り組む。精神科 17(3): 281-286, 2010.
- 51) 竹島 正, 立森久照, 河野稔明, 佐々木一: 今の精神科医の人数で、統合失調症患者のケアができるのか—今後の精神科医療に向けて—。こころのりんしょう *à-la-carte* 29(2): 263-267, 2010.
- 52) 長沼洋一, 立森久照, 竹島 正: 精神保健の疫学研究の現状と課題。公衆衛生 74(10): 870-873, 2010.
- 53) 河野稔明, 竹島 正: 精神科病院における行動制限の状況とその背景。心と社会 42(1): 68-76, 2011.

- 54) 松本俊彦：薬物依存臨床における司法的問題への対応. こころのりんしょう *à-la-carte* 29(1): 113-119, 2010.
- 55) 松本俊彦：アディクションー精神科医が「否認」する「否認の病」. 精神科治療学 25 (5): 565-571, 2010.
- 56) 松本俊彦：DSM-5における摂食障害. 精神科治療学 25: 1071-1075, 2010.
- 57) 松本俊彦：DSM-5における物質関連障害. 精神科治療学 25: 1077-1081, 2010.
- 58) 松本俊彦, 小林桜児：精神作用物質使用障害の心理社会的治療：再乱用防止のための認知行動療法を中心に. 精神神経学雑誌 112 (7): 672-676, 2010.
- 59) 松本俊彦：薬物依存症～精神科医療関係者の「否認」する「否認の病」, 財団法人麻薬・覚せい剤乱用防止センターNEWS LETTER 2010.8・第83号: 2-5, 2010.
- 60) 松本俊彦：アルコール・薬物依存症と摂食障害との併存例をめぐって. 精神神経学雑誌 112 (8): 766-773, 2010.
- 61) 松本俊彦：第2章 精神作用物質使用による精神および行動の障害 4. 覚せい依存の心理社会的治療. 精神科治療学 25 増刊号「今日の精神科治療ガイドライン」, 68-71, 2010.
- 62) 松本俊彦：物質依存症-治療戦略に役立つ生活歴、現病歴、家族関係. 精神科治療学 25 (11): 1489-1496, 2010.
- 63) 松本俊彦：薬物臨床の最前線 SMARPP が丸ごとわかる！第1回 スマーブ誕生前夜-マトリックス・モデルとの出会い. 季刊 Be! 101 号 2010.12: 74-78, 2010.

(3) 著書

- 1) 竹島 正：ストレスとこころの病気. 六訂版 家庭医学大全科, 法研, pp772-773. 2010.
- 2) 立森久照, 竹島 正：平成21年度自殺対策強化のための基礎資料. 精神保健福祉白書2011年版 岐路に立つ精神保健医療福祉-新たな構築を目指して. 精神保健福祉白書編集委員会=編集：中央法規出版, 東京, pp33, 2010.
- 3) 松本俊彦：自傷と自殺. 齋藤万比古(総編集) 松本英夫・傅田健三(責任編集)：子どもの心の診療シリーズ 4 子どもの不安障害と抑うつ. 中山書店, 東京, pp206-224, 2010.
- 4) 松本俊彦：3. Q: リスカーが来院したとき、自殺企図をほのめかしたとき. 清水将之監修 高宮静男・渡邊直樹編集：内科医、小児科医、若手精神科医のための青春期精神医学. 診断と治療社, 東京, pp249-253, 2010.
- 5) 松本俊彦：アディクションとしての自傷行為～「故意に自分の健康を害する」行動の精神病理. 星和書店, 東京, 2011.
- 6) 松本俊彦：V. 自殺プロセスの各段階での自殺予防 [自殺予防を念頭に置いた精神科治療] 6. 薬物乱用・依存. 張 賢徳編集: 専門医のための精神科臨床リュミエール 29 自殺予防の基本戦略. 中山書店, 東京, pp89-95, 2011.
- 7) 松本俊彦 (監修)：こころの科学 156 (2011年3月号) 特別企画「うその心理学」, 日本評論社, 東京, 2011.
- 8) 川野健治：高齢者心理臨床における発達心理学的視点. 三宅篤子・佐竹真次編：思春期・成人期の社会適応. ミネルヴァ書房, 京都, pp95-104, 2011.
- 9) 川島大輔, 川野健治：遺族ケア. 張賢徳編：精神科臨床リュミエール 29 「自殺予防の基本戦略」. 中山書店, 東京, pp219-225, 2011.
- 10) 川野健治：ケア場面における高齢者のコミュニケーションとマテリアル. 山本登志哉・高木光太郎編：ディスコミュニケーションの心理学. 東京大学出版会, 東京, pp99-114. 2011.
- 11) 川野健治：自殺での遺された人々と心理学の課題. 日本心理学会編：心理学ワールド. 新曜社, 東京, pp139-144, 2011.
- 12) 勝又陽太郎：ライフサイクルに応じた自殺対策. 精神保健福祉白書編集委員会編: 精神保健福祉白書 2011年版. 中央法規出版, pp32, 2010.

- 13) 松本俊彦：VII章 思春期における心の問題—薬物乱用。日野原重明，宮岡 等監修，飯田順三編集：脳とこころのプライマリケア 4。株式会社シナジー，東京，pp448-458,2010。
- 14) 松本俊彦：精神科医療 薬物依存。精神保健福祉白書編集委員会精神保健福祉白書 2011 年版 岐路に立つ精神保健福祉医療—新たな構築をめざして。中央法規出版，東京，pp153,2010。
- 15) 松本俊彦：マトリックスモデルとは何か？ 治療プログラムの可能性と限界。龍谷大学矯正・保護研究センター編：龍谷大学矯正・保護研究センター研究年報 No. 7。龍谷大学矯正・保護研究センター，京都，pp63-75, 2010。
- 16) 松本俊彦，小林桜児，今村扶美：薬物・アルコール依存症からの回復支援ワークブック。金剛出版，東京，2011。
- 17) 渋井哲也，松本俊彦（監修）：薬物依存 第1巻 乱用と依存。汐文社，東京，2011。
- 18) 渋井哲也，松本俊彦（監修）：薬物依存 第2巻 身近にひそむ危険。汐文社，東京，2011。
- 19) 渋井哲也，松本俊彦（監修）：薬物依存 第3巻 対処と取り組み。汐文社，東京，2011。

(4) 研究報告書

- 1) 竹島 正，大類真嗣，廣川聖子，立森久照，森 隆夫，秋田宏弥，川野健治：自殺の心理学的剖検の実施に関する研究—精神医療の場で経験している自殺ならびに自殺予防に役立っていると考えられる取組みについての調査—。平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「自殺の原因分析に基づく効果的な自殺防止対策の確立に関する研究（研究代表者：加我牧子）」総括・分担研究報告書，pp13-20, 2011。
- 2) 松本俊彦，千葉泰彦，今村扶美，小林桜児：少年施設入所者における被害体験と精神医学的問題に関する研究—被害体験と自殺行動の関連に注目して—。平成 21 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「大規模災害や犯罪被害等による精神科疾患の実態と介入方法の開発に関する研究（主任 金 吉晴）」分担研究報告書，pp65-79, 2010。
- 3) 松本俊彦，赤澤正人，竹島 正，白川教人，藤田利治，勝又陽太郎，廣川聖子，亀山晶子，横山由香里：自殺既遂者の心理社会的特徴に関する研究 (1) 対象の属性に関する全国自殺既遂者・パイロット研究対象者との比較。平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「自殺の原因分析に基づく効果的な自殺防止対策の確立に関する研究（研究代表者：加我牧子）」総括・分担研究報告書，pp21-28, 2011。
- 4) 松本俊彦，亀山晶子，勝又陽太郎，赤澤正人，廣川聖子，横山由香里，白川教人，竹島 正：自殺既遂者の心理社会的特徴に関する研究 (2) 性差からみた検討。平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「自殺の原因分析に基づく効果的な自殺防止対策の確立に関する研究（研究代表者：加我牧子）」総括・分担研究報告書，pp29-35, 2011。
- 5) 松本俊彦，赤澤正人，勝又陽太郎，廣川聖子，亀山晶子，横山由香里，白川教人，竹島 正：自殺既遂者の心理社会的特徴に関する研究 (3) 労働者の主たる役割別からみた検討。平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「自殺の原因分析に基づく効果的な自殺防止対策の確立に関する研究（研究代表者：加我牧子）」総括・分担研究報告書，pp37-45, 2011。
- 6) 松本俊彦，勝又陽太郎，赤澤正人，廣川聖子，亀山晶子，横山由香里，白川教人，竹島 正：自殺既遂者の心理社会的特徴に関する研究 (4) 自殺関連行動の経験の有無による自殺既遂者の特徴の分析。平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「自殺の原因分析に基づく効果的な自殺防止対策の確立に関する研究（研究代表者：加我牧子）」総括・分担研究報告書，pp47-53, 2011。
- 7) 松本俊彦，廣川聖子，勝又陽太郎，赤澤正人，亀山晶子，横山由香里，白川教人，竹島 正：自殺既遂者の心理社会的特徴に関する研究 (5) 精神科治療の有無から見た検討。平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「自殺の原因分析に基づく効果的な自殺防止対策の確立に関する研究（研究代表者：加我牧子）」総括・分担研究報告書，pp55-68, 2011。

- 8) 竹島 正：精神・神経疾患に係る大規模コホートスタディの構築に関する研究。平成 21 年度厚生労働省精神・神経疾患研究委託費報告集，pp565-567, 2009.
- 9) 竹島 正：精神・神経疾患に係る大規模コホートスタディの構築に関する研究。平成 22 年度国立精神・神経医療研究センター精神・神経疾患研究開発費「精神・神経疾患に係る大規模コホートスタディの構築に関する研究（主任研究者：竹島 正）」総括・分担研究報告書(平成 21 年度～22 年度)，pp7-6, 2011.
- 10) 竹島 正：精神保健医療福祉体系の改革に関する研究。平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「精神保健医療福祉体系の改革に関する研究（研究代表者：竹島 正）」総括・分担研究報告書，pp1-8, 2011.
- 11) 竹島 正，趙 香花，河野稔明，小山明日香，立森久照，長沼洋一，廣川聖子：「改革ビジョン」の進捗状況のモニタリングと評価に関する研究－「精神保健医療福祉の改革ビジョン」前期におけるマクロ実態の変化－。平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「精神保健医療福祉体系の改革に関する研究（研究代表者：竹島 正）」総括・分担研究報告書，pp9-27, 2011.
- 12) 竹島 正，河野稔明，長沼洋一，小山明日香，趙 香花，廣川聖子，立森久照：「改革ビジョン」の進捗状況のモニタリングと評価に関する研究－「精神保健福祉資料」に係る電子調査票の利用状況と回答時期の変化－。平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「精神保健医療福祉体系の改革に関する研究（研究代表者：竹島 正）」総括・分担研究報告書，pp29-34, 2011.
- 13) 竹島 正，小山明日香，河野稔明，立森久照，長沼洋一：「改革ビジョン」の進捗状況のモニタリングと評価に関する研究－「かえる・かわる 精神保健医療福祉の改革ビジョン研究ページ」の運用について－。平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「精神保健医療福祉体系の改革に関する研究（研究代表者：竹島 正）」総括・分担研究報告書，pp35-39, 2011.
- 14) 竹島 正，立森久照，松本俊彦，川野健治，稲垣正俊，樋口輝彦：「改革ビジョン」の進捗状況のモニタリングと評価に関する研究－メディアカンファレンスの実施報告－。平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「精神保健医療福祉体系の改革に関する研究（研究代表者：竹島 正）」総括・分担研究報告書，pp41-45, 2011.
- 15) 竹島 正，河野稔明，立森久照：既存の統計資料を用いた機能分化の現状分析と将来予測。平成 21 年度厚生労働科学研究費補助金（こころの健康科学研究事業）「精神科病院の機能分化に関する実態の分析と方法論の開発に関する研究（研究代表者：山内慶太）」総括・分担研究報告書，pp89-108, 2010.
- 16) 竹島 正，島田達洋，尾島俊之，野田龍也，山本智一，入野 康，山下俊幸，小高 晃，小泉典章，稲垣 中，小口芳世，椎名明大，小山明日香，猪飼紗恵子，瀬戸秀文，吉住 昭：医療観察法導入後における触法精神障害者への精神保健福祉法による対応に関する研究 その 2 医療観察法導入後における精神保健福祉法第 25 条に基づく検察官通報の現状に関する研究。平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「重大な他害行為をおこした精神障害者の適切な処遇及び社会復帰の推進に関する研究（研究代表者：平林直次）」総括・分担報告書，pp93-99, 2011.
- 17) 竹島 正，三井敏子，金田一正史，小泉典章，高岡道雄，小山明日香，吉住 昭：医療観察法導入後における触法精神障害者への精神保健福祉法による対応に関する研究 その 3 精神保健福祉法第 26 条による通報となった者の実態把握。平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「重大な他害行為をおこした精神障害者の適切な処遇および社会復帰の推進に関する研究（研究代表者：平林直次）」総括・分担報告書，pp93-99, 2011.
- 18) 白石弘巳，竹島 正，趙 香花，長沼洋一，堀井茂男，野口正行，河野稔明，立森久照：精神障害者等のニーズ把握及び権利擁護にあたる民間団体の育成に関する研究－医療保護入院患者の保護者に関する研究－。平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金（障害者対策総合研究事業）「精神保健医療福祉体系の改革に関する研究（研究代表者：竹島 正）」総括・分担研究報告書，pp115-127, 2011.
- 19) 山中朋子，反町吉秀，勝山和明，和田陽市，宇田英典，竹島 正：平成 21 年度地域保健総合推進事業（全国保健所長会協力事業）「保健所における自殺対策の推進に関する研究」報告書，日本公衆衛生協会，2010.

- 20) 宇田英典, 高岡道雄, 東海林文男, 加納紅代, 岸本益実, 竹島 正:平成 21 年度厚生労働科学研究費補助金(健康安全・危機管理対策総合研究事業)「健康危機発生時における行政機関相互の適切な連携体制及び活動内容に関する研究(研究代表者:多田羅浩三)精神保健分野」報告書, pp341-400, 2010.
- 21) 伊藤弘人, 西田淳志, 水野雅文, 鈴木友理子, 杉浦寛奈, 野田寿恵, 藤本美智, 竹島 正, 趙 香花:海外における精神科入院医療制度について.平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業)「精神障害者への対応への国際比較に関する研究(主任研究者:中根允文)」総括・分担研究報告書, pp11-21, 2011.
- 22) 宇田英典, 高岡道雄, 石丸泰隆, 加納紅代, 本屋敷美奈, 竹島 正, 工藤一恵:健康危機発生時における行政機関相互の適切な連携体制及び活動内容に関する研究(精神保健分野).平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金(健康安全・危機管理対策総合研究事業)「健康危機発生時における行政機関相互の適切な連携体制及び活動内容に関する研究(研究代表者:多田羅浩三)」報告書, pp731-734, 2011.
- 23) 宇田英典, 高岡道雄, 石丸泰隆, 加納紅代, 本屋敷美奈, 竹島 正, 工藤一恵:精神保健分野における保健所の危機管理体制に関するガイドライン.平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金(健康安全・危機管理対策総合研究事業)「健康危機発生時における行政機関相互の適切な連携体制及び活動内容に関する研究(研究代表者:多田羅浩三)」報告書 別冊(マニュアル, ガイドライン, 手引き), pp209-292, 2011.
- 24) 立森久照, 河野稔明, 長沼洋一, 小山明日香, 趙 香花, 廣川聖子, 竹島 正:精神保健医療福祉体系の改革のモニタリングの詳細分析.平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業)「精神保健医療福祉体系の改革に関する研究(研究代表者:竹島 正)」総括・分担研究報告書, pp47-61, 2011.
- 25) 趙 香花, 竹島 正:欧米を主とした諸外国の精神保健医療福祉政策の調査, 評価—東アジア諸国の精神保健対策における欧米の影響と独自性—.平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業)「精神障害者への対応への国際比較に関する研究(主任研究者:中根允文)」総括・分担研究報告書, pp28-41, 2011.
- 26) 松本俊彦:求められる薬物乱用防止教育とは? ~「ダメ, ゼッタイ」だけではダメ~.内閣府 平成 21 年度インターネットによる「青少年の薬物乱用に関する調査」報告書, 内閣府, 東京, pp59-67, 2010.
- 27) 松本俊彦:薬物依存症に対する認知行動療法プログラムの開発と効果に関する研究.平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金障害者対策総合研究事業(精神障害分野)「薬物依存症に対する認知行動療法プログラムの開発と効果に関する研究(研究代表者:松本俊彦)」総括・分担研究報告書, pp1-6, 2011.
- 28) 松本俊彦, 今村扶美, 小林桜児, 和田清, 尾崎士朗, 今村洋子:司法関連施設における認知行動療法プログラムの開発と効果に関する研究.平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金障害者対策総合研究事業(精神障害分野)「薬物依存症に対する認知行動療法プログラムの開発と効果に関する研究(研究代表者:松本俊彦)」総括・分担研究報告書, pp85-99, 2011.
- 29) 松本俊彦, 近藤あゆみ, 高橋郁絵, 栗坪千明, 白川裕一郎, 矢澤祐史:民間回復施設における認知行動療法治療プログラムの開発と効果に関する研究.平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金障害者対策総合研究事業(精神障害分野)「薬物依存症に対する認知行動療法プログラムの開発と効果に関する研究(研究代表者:松本俊彦)」総括・分担研究報告書, pp101-115, 2011.
- 30) 松本俊彦, 千葉泰彦, 今村扶美, 小林桜児, 高野 歩:少年施設入所者における被虐待体験と精神医学的問題に関する研究, 平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金障害者対策総合研究事業(精神障害分野)「大規模災害や犯罪被害等による精神科疾患の実態と介入方法の開発に関する研究(研究代表者:金吉晴)」総合研究報告書, pp79-93, 2010.
- 31) 松本俊彦, 千葉泰彦, 今村扶美, 小林桜児, 高野 歩:少年施設入所者における被虐待体験と精神医学的問題に関する研究, 平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金障害者対策総合研究事業(精神障害分野)「大規模災害や犯罪被害等による精神科疾患の実態と介入方法の開発に関する研究(研究代表者:金吉晴)」総括・分担研究報告書, pp55-69, 2010.

- 32) 松本俊彦：若年薬物乱用者支援のためにわが国に求められるもの。内閣府編 平成 22 年度「スペインにおける青少年の薬物乱用対策に関する企画分析報告書」, pp63-37, 2011.
- 33) 松本俊彦, 尾崎 茂, 小林桜児, 和田 清：全国の精神科医療施設における薬物関連疾患の実態調査。平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業「薬物乱用・依存等の実態把握と再乱用母子のための社会資源等の現状と課題に関する研究（研究代表者 和田 清）」分担研究報告書, pp89-115, 2011.
- 34) 松本俊彦, 今村扶美, 小林桜児, 千葉泰彦：司法関連施設における少年用薬物乱用薬物再乱用防止教育ツールによる移入とその普及に関する研究。平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業「薬物乱用・依存等の実態把握と再乱用母子のための社会資源等の現状と課題に関する研究（研究代表者 和田 清）」分担研究報告書, pp215-226, 2011.
- 35) 松本俊彦, 嶋根卓也, 和田 清：向精神薬乱用と依存。平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金（障害保健福祉総合研究研究事業）「様々な依存症における医療・福祉の回復プログラムの策定に関する研究（研究代表者 宮岡 等）」, 総合分担研究報告書, pp100-114, 2011.
- 36) 宮岡 等, 田辺 等, 石川 達, 松本俊彦, 後藤 恵, 伊波真理雄, 樋口 進, 真栄里仁, 神村栄一, 岡崎直人, 岩崎正人, 稲村 厚, 田中克俊, 佐藤 拓, 河本泰信, 森山成彬, 赤木健利, 西村直之：病的ギャンブリング（いわゆるギャンブル依存症）の概念の検討と各関連機関の適切な連携に関する研究, 平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金（障害保健福祉総合研究研究事業）「様々な依存症における医療・福祉の回復プログラムの策定に関する研究（研究代表者 宮岡 等）」, 総合分担研究報告書, pp115-143, 2011.
- 37) 田中克俊, 田辺 等, 石川 達, 松本俊彦, 後藤 恵, 伊波真理雄, 樋口 進, 岩崎正人, 稲村 厚, 佐藤 拓, 河本泰信, 森山成彬, 赤木健利, 西村直之：厚生労働科学研究費補助金（障害保健福祉総合研究研究事業）「いわゆるギャンブル依存症の実態と地域ケアの促進」, 平成19～21年度 総合分担研究報告書, 2010.
- 38) 小林桜児, 松本俊彦, 今村扶美, 根岸典子, 若林朝子, 和田清：専門外来における認知行動療法プログラムの開発と効果に関する研究。平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金障害者対策総合研究事業（精神障害分野）「薬物依存症に対する認知行動療法プログラムの開発と効果に関する研究（研究代表者：松本俊彦）」総括・分担研究報告書, pp7-19, 2011.
- 39) 今村扶美, 松本俊彦, 小林桜児, 平林直次, 和田清：医療観察法における物質使用障害治療プログラムの開発と効果に関する研究。平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金障害者対策総合研究事業（精神障害分野）「薬物依存症に対する認知行動療法プログラムの開発と効果に関する研究（研究代表者：松本俊彦）」総括・分担研究報告書, pp73-84, 2011.

(5) 翻訳

- 1) 松本俊彦（監訳）, 今村扶美, 勝又陽太郎, 木谷雅彦, 赤澤正人, 廣川聖子, 菅原靖子（訳）：ダグラス・ジェイコブズ, バレント・ウォルシュ, モイラ・マックデイト, シャロン・ピジョン著「学校における自傷予防～『自傷のサイン』プログラム実施マニュアル」. 金剛出版, 東京, 2010. (Jacobs D, Walsh B, McDade M, Pigeon S: Signs of self-injury: ACT to prevent self-injury high school implementation guide and resources, Screening for Mental Health, Inc. and The Bridge of Central MA, 2007.)
- 2) 黒沢香, 原島雅之（監訳）, 川野健治（訳）：パーソナリティの心理学 第一章 パーソナリティ入門. 培風館, 東京, 2010. (Mishel S, Shoda Y, Ayduk O: Introduction to personality: Toward an integrative science of the person Mishel S, Shoda Y, Ayduk O: Introduction to personality: Toward an integrative science of the person, eight edition.)
- 3) 津田彰, 山崎久美子（監訳）丹野義彦, 山内貴史（共訳）：心理療法の諸システム [第6版] 多理論統合的分析 第 10 章認知療法. 金子書房, 東京, 2010.(Prochaska JO, Norcross JC: Systems of psychotherapy: a transtheoretical analysis. pp311-350, 2007.)

- 4) 勝又陽太郎, 福原俊太郎, 川西智也: 日常の援助場面における精神分析的アプローチ—地域精神保健の現場で働く援助者のための入門書. 自殺予防総合対策センターブックレット No.7, 東京, 2010.
(Victorian Association of Psychoanalytic Psychotherapists: Psychoanalytic approaches to common clinical situations : an introduction for clinicians and managers in public mental health settings. Richmond, 2008.)

(6) その他

- 1) 竹島 正: (書評) プライマリ・ケア医による自殺予防と危機管理—あなたの患者を守るために—. 日本社会精神医学会雑誌 19(1), 127, 2010.
- 2) 竹島 正: 精神衛生と精神保健. 土居健郎先生追悼文集—心だけは永遠—, 56-57, 2010.
- 3) 竹島 正: 日本社会精神医学会. 精神医学 52(6): 607-608, 2010.
- 4) 竹島 正, 脇 節子, 勝又浜子, 梅原和恵, 梶本まどか, 新塘久美子: (座談会) 自殺予防と保健師活動. 公衆衛生情報 40(7): 6-18. 東京, 2010.
- 5) 高橋祥友, 竹島 正: 特集 1 過労自殺 法律家と精神科医の対話—特集企画にあたって—. Depression Frontier 12: 7, 2010.
- 6) 廣川聖子, 竹島 正: 統合失調症 Q&A. こころのりんしょう *à-la-carte* 29(2): 190, 2010.
- 7) 松本俊彦: 薬物依存 Q&A 集 Q8 薬物の使用方法はいろいろあるようですが、流行りがあるのでしょうか? こころのりんしょう *à-la-carte* 29(1): 14, 2010.
- 8) 松本俊彦: 薬物依存 Q&A 集 Q36 覚せい剤にはいろいろな摂取の仕方があると効きましたが、「あぶり」と静脈注射の違いは何ですか? 摂取の仕方によって作用は異なるのですか? こころのりんしょう *à-la-carte* 29(1): 42, 2010.
- 9) 松本俊彦: 薬物依存 Q&A 集 Q37 覚せい剤にダイエット効果があると聞きましたが、本当でしょうか? こころのりんしょう *à-la-carte* 29(1): 43, 2010.
- 10) 松本俊彦: 薬物依存 Q&A 集 Q44 患者が違法薬物を摂取した場合、医師は警察に通報する義務があるのでしょうか? あるいは、通報すると守秘義務違反になりませんか? こころのりんしょう *à-la-carte* 29(1): 50, 2010.
- 11) 松本俊彦: 薬物依存 Q&A 集 Q45 身近な人が麻薬や覚せい剤を使用しているとわかった場合、どのように対処したらよいのでしょうか? こころのりんしょう *à-la-carte* 29(1): 51, 2010.
- 12) 松本俊彦: 薬物依存 Q&A 集 Q47 薬物依存症の治療を受けるところを教えてください. こころのりんしょう *à-la-carte* 29(1): 53, 2010.
- 13) 松本俊彦: 薬物依存 Q&A 集 Q49 アルコール依存になる人と、薬物依存になる人と、違いはありますか? こころのりんしょう *à-la-carte* 29(1): 55, 2010.
- 14) 松本俊彦: てらぺいあ〜精神療法のコスト. 精神療法 36(2): 198, 2010.
- 15) 松本俊彦: 薬物依存症の理解と援助. 全国薬物依存症患者家族連合会「あまびき」2010年春号 30: 2-18, 2010.
- 16) 松本俊彦: インタビュー 薬物乱用・自殺の防止に薬剤師ができること. 調剤と情報 16(10): 3-5, 2010.
- 17) 松本俊彦: 自傷の背景とプロセス. 東京大学大学院教育学研究科附属心理教育相談室年報 第5号, 東京大学大学院教育学研究科附属心理教育相談室, 4-28, 2010.
- 18) 松本俊彦: もっと知りたい! このテーマ—向精神薬依存と過量服用自殺の背景. 暮らしと健康 2010年11月号, 44-46, 2010.
- 19) 松本俊彦: 質疑応答 自傷行為の現状と対応. 日本医事新報 No.4511: 82-83, 2010.
- 20) 松本俊彦: アディクションと自殺. 社団法人座編 陽だまりの庭II, ぶどう書房, 奈良, 23-27, 2011.
- 21) 松本俊彦, 嶋根卓也: 薬局薬剤師を情報源とする向精神薬の乱用・依存の実態把握に関する研究. 埼玉県薬剤師会雑誌 36(12), 37-38, 2010.

- 22) 和田清, 松本俊彦, 宮永耕, 近藤あゆみ: 座談会 薬物依存の本質は何か? どう対応すべきなのか?. ころのりんしょう *à-la-carte* 29(1): 61-71, 2010.
- 23) 加藤久喜, 松本俊彦, 伊藤知章, 上山達也, 織田信生, 竹島正: 座談会 自殺対策とメディア—自殺対策の充実が成熟社会の醸成につながる. 公衆衛生情報 39(10) 2010年1月号: 2-10, 2010.
- 24) 船橋幹男, 松本俊彦, 白川教人, 木村弥生, 野宮富子, 村中峯子: 座談会 市町村における自殺対策 前編. Monthly 保健センター 2010年4月号: 8-11, 2010.
- 25) 赤澤正人, 松本俊彦, 立森久照, 竹島正: ~断酒会員対象のアンケート~自殺予防の支援と介入を. メディカルトリビューン 43(12): 31, 2010.
- 26) 木村弥生, 白川教人, 野宮富子, 船橋幹男, 松本俊彦, 村中峯子: 座談会 市町村における自殺対策 後編. Monthly 保健センター2010年5月号: 4-5, 2010.
- 27) 赤澤正人, 稲垣正俊, 川野健治, 松本俊彦, 竹島正: 自殺対策の基礎知識—地域や職場で自殺対策に取り組むために—. 精神保健研究 55: 5-7, 2010.
- 28) 勝又陽太郎, 助川柁雄, 大場義貴, 竹島正: ライフステージに応じたこころの相談・支援ガイドライン. 精神保健研究 55: 13-15, 2010.
- 29) 勝又陽太郎: 自殺予防対策の発展に向けて—心理学的剖検の実践. 週刊医学界新聞 2906: 6, 2010.
- 30) 木谷雅彦, 勝又陽太郎, 稲垣正俊, 川野健治, 松本俊彦, 竹島正: 自殺予防総合対策センター ホームページ「いきる」. 精神保健研究 55: 9-12, 2010.

B. 学会・研究会における発表

(1) 学会特別講演, 教育講演, シンポジウム, ワークショップ, パネルディスカッション等

- 1) Takeshima T: The Challenge of Suicide Prevention: How Can we Improve Our Efforts?. 4th Asia Pacific Regional Conference of the International Association for Suicide Prevention 2010, Brisbane, 2010.11.19.
- 2) 竹島正, 高橋祥友, 松本俊彦, 川野健治, 稲垣正俊: (シンポジウム)「自殺予防と精神保健医療の役割」自殺対策における自殺とは何か. 第106回日本精神神経学会学術総会, 広島, 2010. 5. 21.
- 3) 竹島正: (指定発言者) 自殺予防! 精神科看護師の果たす役割は. 日本精神科病院協会主催 学術教育研修会「看護部門」, 山形, 2010. 6. 24.
- 4) 山田和浩, 久田 恵, 松本俊彦, 桑原 寛, 柳田邦男, 竹島正 (企画及び座長): いきるを支える鎌倉・逗子・葉山. 普及啓発講演会シンポジウム, 神奈川, 2010.9.23.
- 5) 竹島正 (企画及び座長): シンポジウム「うつと生きる」. 「うつ病を知る日」東京会場. 東京, 2010. 10. 2.
- 6) 久保真一, 松下幸生, 樋口 進, 森田展彰, 松本俊彦, 竹島正 (座長): 3 学会合同シンポジウム4「自傷・自殺とアルコール・薬物問題—精神科と法医学の立場から—». 平成 22 年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会, 福岡, 2010. 10. 7.
- 7) 竹島正, 松下武志, 世良守行: (パネルディスカッション)アルコール依存症への偏見解消のために. 第 32 回関東ブロック断酒研修会, 東京, 2011.2.11.
- 8) 松本俊彦: 自殺総合対策における精神科医療の課題~総合的な精神保健的対策を目指して~. シンポジウム 18「自殺予防と精神保健医療の役割」自殺対策における自殺とは何か. 第 106 回日本精神神経学会学術総会, 広島, 2010. 5. 21.
- 9) 松本俊彦: アルコール・薬物依存症と摂食障害との併存例をめぐって. シンポジウム 26「精神障害が併存するアルコール依存症の病態と治療」. 第 106 回日本精神神経学会学術総会, 広島, 2010. 5. 21.
- 10) 松本俊彦: 自傷行為の理解と援助~アディクションと自殺のあいだ. 第 32 回日本アルコール関連問題学会 専門講座Ⅱ, 兵庫, 2010.7.16.
- 11) 松本俊彦: 職場における自殺予防~アルコール問題と自殺. 第 17 回日本産業精神保健学会 教育講演, 石川, 2010.7.17.

- 12) 松本俊彦：若者のサブカルチャーと自殺. 第34回日本自殺予防学会総会 シンポジウムⅢ「減らない自殺—社会・文化的な視点から考える」, 大妻女子大学, 東京, 2010.9.11.
- 13) 松本俊彦：教育講演Ⅳ 摂食障害とリストカット. 第14回日本摂食障害学会総会, 政策大学院大学, 東京, 2010.10.3.
- 14) 宮田久嗣, 松本俊彦：3学会合同シンポジウム1「“物質”と“物質によらない”嗜癖行動の共通点と差異：問題提起」. 平成22年度アルコール・薬物関連学会合同学術総会, 福岡, 2010.10.7.
- 15) 松本俊彦：3学会合同シンポジウム4「物質使用障害と自傷・自殺～最近の研究から」. 平成22年度アルコール・薬物関連学会合同学術総会, 福岡, 2010.10.7.
- 16) 松本俊彦：公開講座「自殺予防と精神科救急」. 第18回日本精神科救急学会, 大阪, 2010.10.15.
- 17) 松本俊彦：基調講演「自殺予防に関する課題で見えてきたもの」. 人間福祉学会第11回大会, 岐阜, 2010.11.20.
- 18) 松本俊彦：嗜癖問題と自傷・自殺. シンポジウム「自殺予防と嗜癖」, 第21回日本嗜癖行動学会, 岡山, 2010.11.21.
- 19) 松本俊彦：ワークショップ19 薬物依存症の認知行動療法～マニュアルとワークブックにもとづく統合的外来治療プログラム. 第36回日本行動療法学会, 愛知, 2010.12.4.
- 20) 尾崎 茂, 小林桜児, 松本俊彦, 和田 清：医療施設からみた最近の特徴. シンポジウムⅥ「薬物依存と現代社会—医療モデルの必要性—」, 第30回日本社会精神医学会, 奈良, 2011.3.4.
- 21) 松本俊彦：認知行動療法を取り入れた包括的外来治療プログラムの必要性. シンポジウムⅥ「薬物依存と現代社会—医療モデルの必要性—」, 第30回日本社会精神医学会, 奈良, 2011.3.4.
- 22) 松本俊彦：自傷行為とその背景. シンポジウム「思春期にみられる精神・行動における最近の変化」 関東子ども精神保健学会第8回学術集会, 東京都立小児総合医療センター, 東京, 2011.3.13.
- 23) 川野健治：自死遺族の精神保健的問題. シンポジウム18「自殺予防と精神保健医療の役割」自殺対策における自殺とは何か. 第106回日本精神神経学会学術総会, 広島, 2010.5.21.
- 24) 川野健治：質的研究をいかに継承するか?：生と死に関するナラティブへのトライアングレーション. 第7回日本質的心理学会大会, 茨城, 2010.11.27.
- 25) 川野健治：「質的心理学フォーラム」から更なる対話への深潭. 第7回日本質的心理学会大会, 茨城, 2010.11.28.
- 26) 石黒広昭, サトウタツヤ, 高橋登, 川野健治, (座長)文野洋：(シンポジウム)文化心理学は個の発達をいかにとらえるのか?国内研究交流委員会シンポジウム. 第22回日本発達心理学会大会, 東京, 2011.3.27.
- 27) 小高真美, 稲垣正俊, Vita Poštuvan, 山田光彦：ソーシャルワーカーの個人的・職業的な経験と自殺に対する態度の関連. 第34回日本自殺予防学会総会, 東京, 2010.9.9-11.
- 28) 仲秋秀太郎, 小川朝生, 稲垣正俊, 柏木雄次郎：サイコオンコロジーの今日的課題を「神経心理学」から考える. 第23回日本サイコオンロジー学会 第10回日本認知療法学会 合同大会, 愛知, 2010.9.25.
- 29) 勝又陽太郎：心理学的剖検における自死遺族との出会い. 日本心理臨床学会第29回秋季大会, 仙台, 2010.9.3.
- 30) 勝又陽太郎：心理学的剖検の実践から考える自殺の実態分析と自殺予防対策. 第34回日本自殺予防学会 シンポジウムⅠ「根拠ある自殺予防対策の推進のために—若手研究者の提言—」, 東京, 2010.9.9.
- 31) 川島大輔：自死遺族の意味再構成と宗教的物語. ワークショップ「宗教心理学的研究の展開(8)—死生の意味するもの：生と死を見つめる宗教心理学」, 日本心理学会第74回大会, 大阪, 2010.9.21.
- 32) 川島大輔：明るい天空や天気の話りに, 遺されたものはどんな意味を見出しているのか—自死遺族の話りに着目して. シンポジウム「質的研究をいかに継承するか?—生と死に関するナラティブへのトライアングレーション」, 日本質的心理学会第7回大会発表論文集, 茨城, 2010.11.27.
- 33) 山内貴史：被害観念の喚起と維持に関する認知・感情要因. 日本心理学会第74回大会小講演, 大阪, 2010.9.22.

(2) 一般演題

- 1) Kawano K: Secondary wounding experiences in the bereaved of suicide. International society of Behavioral and Developmental psychology, 21st Biennial Congress, Zambia, 2010.7.
- 2) Kawano K, Kawashima D, Syojima S: Community resident's attitude to suicide and suicide prevention in Japan. 4th Asia Pacific regional Conference of the international association for suicide prevention, Brisbane, 2010.11.
- 3) 小山明日香, 立森久照, 長沼洋一, 河野稔明, 竹島 正: 精神科新規入院患者の動態－「精神保健福祉資料 (630 調査)」データを用いた解析. 第 106 回日本精神神経学会学術総会, 広島, 2010. 5. 21.
- 4) 山内貴史, 竹島 正: 死亡診断書(検死検案書)の改訂が人口動態の自殺死亡統計に及ぼした影響. 第 34 回日本自殺予防学会総会 一般演題V 統計調査, 東京, 2010. 9. 11.
- 5) 松本俊彦: 少年施設における自習ワークブックによる再乱用防止プログラムの開発とその効果. 国立精神・神経医療研究センター主催 平成 22 年度三施設合同研究発表会, 国立精神・神経医療研究センター, 2010. 5. 25.
- 6) 小林桜児, 松本俊彦, 千葉泰彦, 今村扶美, 森田展彰, 和田 清: 少年鑑別所入所者を対象とした日本語版 SOCRATES の因子構造と妥当性の検討. 平成 22 年度アルコール・薬物関連学会合同学術総会, 福岡, 2010.10.8.
- 7) 今村扶美, 松本俊彦, 小林桜児, 和田清: 医療観察法指定入院医療機関における「物質使用障害治療プログラム」の開発とその効果. 平成 22 年度アルコール・薬物関連学会合同学術総会, 福岡, 2010.10.8.
- 8) 田中紀子, 矢澤祐史, 松本俊彦: 奈良ダルクによる新しいとりくみ: Recovery Dynamics Program 導入による効果観察. 平成 22 年度アルコール・薬物関連学会合同学術総会, 福岡, 2010.10.8.
- 9) 深井美里, 兼城佳弘, 松本俊彦, 石川雅久, 井上英和, 大竹智英, 塚本哲司, 関口隆一, 杉山 一: 精神科救急情報センターにおける自殺防止の取り組み. 第 18 回日本精神科救急学会, 大阪, 2010.10.15.
- 10) 矢澤祐史, 岸本年史, 松本俊彦, 川口由起子: 米アミティにおける治療共同体プログラムが依存症回復におよぼす影響について. 第 30 回日本社会精神医学会, 奈良, 2011. 3. 4.
- 11) 田中紀子, 岸本年史, 松本俊彦, 川口由起子: 依存症からの回復支援における介入プログラムの導入. 第 30 回日本社会精神医学会, 奈良, 2011. 3. 4.
- 12) 川野健治, 荘島幸子, 川島大輔, 下川昭夫: 中学校における自殺予防教育の可能性 (1) 教師の困難感からみた自殺予防教育の課題. 日本心理学会第 74 回大会, 大阪, 2010.9.21.
- 13) 川島大輔, 荘島幸子, 下川昭夫, 川野健治: 中学校における自殺予防教育の可能性 (2) 生徒の自傷・自殺に関する経験と学校風土が教師の困難感に及ぼす影響. 日本心理学会第 74 回大会, 大阪, 2010.9.21.
- 14) 荘島幸子, 川島大輔, 下川昭夫, 川野健治: 教師—生徒間におけるコミュニケーションの困難—教師が授業で扱いたいと感じる話題とその原因の分析から. 日本心理学会第 74 回大会, 大阪, 2010.9.21.
- 15) 川島大輔, 荘島幸子, 川野健治: 学校における自殺予防の可能性—文献検討を通じた自殺予防プログラムの提案. 日本質的心理学会第 7 回大会, 茨城, 2010.11.27.
- 16) 稲垣正俊, 大槻露華, 斎藤顕宜, 及川雄悦, 黒澤美枝, 村松公美子, 山田光彦: (ポスター)「気分障害」一般病院の内科外来におけるうつ病有病率と主治医によるうつ病認識率. 第 106 回日本精神神経学会学術総会, 広島, 2010.5.20-22.
- 17) 稲垣正俊, 大槻露華, 小高真美, 酒井ルミ, 山田光彦: (ポスター)「気分障害」内科等の一般身体科医師のうつ病に対する態度. 第 106 回日本精神神経学会学術総会, 広島, 2010.5.20-22.
- 18) 稲垣正俊, 大槻露華, 斎藤顕宜, 及川雄悦, 黒澤美枝, 山田光彦: (ポスター)一般病院内科外来における睡眠薬/抗不安薬処方に関連する要因の探索: うつ病診断に注目した検討. 第 7 回日本うつ病学会総会, 石川, 2010.6.11-12.

- 19) 平 幸恵, 千田文枝, 岩淵恵美, 菅原恵美子, 及川雄悦, 稲垣正俊, 大槻露華: 臨床検査技師が施行するうつ心の心理検査. 平成22年度地域医療研究会「秋季集会」, 岩手, 2010.11.20.
- 20) 山田光彦, 稲垣正俊, 米本直裕: 自殺ハイリスク者を対象とする臨床試験での研究倫理とリスクマネージメント. 第31回日本臨床薬理学会年会, 京都, 2010.12.1-3.

(3) 研究報告会

- 1) 竹島 正: 平成22年度精神・神経疾患研究開発費「精神・神経疾患に係る大規模コホートスタディの構築に関する研究(主任研究者 竹島 正)」第1回班会議. 東京, 2010.5.31.
- 2) 竹島 正: 「改革ビジョン」の進捗状況のモニタリングと評価に関する研究. 平成22年度厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業)「精神保健医療福祉体系に関する研究(研究代表者: 竹島 正)」第1回研究班会議. 東京, 2010.6.10.
- 3) 竹島 正: 自殺の心理学的剖検の実施に関する研究. 平成22年度厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業)「自殺の原因分析に基づく効果的な自殺防止対策の確立に関する研究(研究代表者: 加我牧子)」第1回研究班会議. 東京, 2010.6.16.
- 4) 竹島 正: 欧米を主とした諸外国の精神保健医療福祉政策の調査・評価. 平成22年度厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業)「精神障害者への対応への国際比較に関する研究」第1回研究班会議. 東京, 2010.7.3.
- 5) 竹島 正: 既存の統計資料を用いた機能分化の現状分析と将来予測. 平成22年度厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業)「精神科病院の機能分化に関する実態の分析と方法論の開発に関する研究(研究代表者: 山内慶太)」第1回班会議. 東京, 2010.9.10.
- 6) 竹島 正: 早期介入の精神保健システムにおける位置づけの検討. 平成22年度厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業)精神病初回発症例の疫学研究および早期支援・早期治療法の開発と効果検証に関する臨床研究(主任研究者: 岡崎佑士)第1回班会議. 東京, 2010.10.11.
- 7) 竹島 正: 平成22年度精神・神経疾患研究開発費「精神・神経疾患に係る大規模コホートスタディの構築に関する研究(主任研究者 竹島 正)」研究報告会. 東京, 2010.12.2.
- 8) 竹島 正: 平成22年度精神・神経疾患研究開発費「精神・神経疾患に係る大規模コホートスタディの構築に関する研究(主任研究者 竹島 正)」第2回班会議. 東京, 2010.12.2.
- 9) 竹島 正: 自殺の心理学的剖検の実施に関する研究. 平成22年度厚生労働科学研究費補助金 障害者対策総合研究事業「自殺の原因分析に基づく効果的な自殺防止対策の確立に関する研究(代表研究者: 加我牧子)」第2回班会議. 東京, 2011.1.6.
- 10) 竹島 正: 「改革ビジョン」の進捗状況のモニタリングと評価に関する研究. 平成22年度厚生労働科学研究費補助金 障害者対策総合研究事業「精神保健医療福祉体系の改革に関する研究(代表研究者: 竹島 正)」第2回班会議. 東京, 2011.1.13.
- 11) 竹島 正: 精神保健医療福祉体系の改革に関する研究. 厚生労働科学研究費研究成果等普及啓発事業 障害者対策総合(精神分野)研究成果発表会. 東京, 2011.1.27.
- 12) 立森久照, 河野稔明, 長沼洋一, 小山明日香, 趙 香花, 廣川聖子, 竹島 正: 統合失調症および認知症の在院患者数の概況. 平成22年度国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所研究報告会, 東京, 2011.5.23.
- 13) 赤澤正人, 立森久照, 松本俊彦, 竹島 正: 断酒会と共同したアルコール依存症患者のメンタルヘルス支援についての検討 - 自殺予防の観点に着目して -. 平成22年度国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所研究報告会, 東京, 2011.5.23.
- 14) 趙 香花, 長沼洋一, 堀井茂男, 野口正行, 河野稔明, 立森久照, 白石弘巳, 竹島 正: 医療保護入院患者の保護者に関する研究. 平成22年度国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所研究報告会, 東京, 2011.5.23.

- 15) 山内貴史, 竹島 正: 明治11年から明治31年のわが国における自殺死亡の推移. 平成22年度国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所研究報告会, 東京, 2011.5.23.
- 16) 稲垣正俊, 大槻露華, 小高真美, 石蔵文信, 渡辺洋一郎, 酒井ルミ, 山田光彦, 竹島 正: 一般身体科医のうつ病に対する態度. 平成22年度国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所研究報告会, 東京, 2011.5.23.
- 17) 齋藤顕宜, 高橋弘, 稲垣正俊, 山田美佐, 岩井孝志, 山田光彦: うつ病のグルタミン酸仮説 ～モデル動物を用いた検討～. 第6回若手カンファレンス, 東京, 2010.11.5.
- 18) 齋藤顕宜, 稲垣正俊, 山田美佐, 高橋弘, 岩井孝志, 杉山梓, 牧野祐哉, 岡淳一郎, 山田光彦: グルタミン酸神経調節薬(リルズール)のうつ病治療効果の作用機序の検討. 平成22年度精神・神経疾患研究開発費気分障害研究班合同報告会, 東京, 2010.12.2.
- 19) 大槻露華, 山田光彦: 大規模臨床研究を利用したうつ病遺伝子解析の意義と限界. 平成22年度精神・神経疾患研究開発費気分障害研究班合同報告会, 東京, 2010.12.2.

(4)その他

- 1) Takeshima T: Asia Pacific Community Mental Health Development Project ; Building Partnerships In Community Mental Health. International Conference-CUM-Workshop, New Delhi, 2011.2.17-19.
- 2) 竹島 正: 第1回こころの健康政策構想会議. 東京, 2010.4.3.
- 3) 竹島 正: 第2回こころの健康政策構想会議. 東京, 2010.4.10.
- 4) 竹島 正: 第3回こころの健康政策構想会議. 東京, 2010.4.17.
- 5) 竹島 正: 第4回こころの健康政策構想会議. 東京, 2010.4.24.
- 6) 竹島 正: 第5回こころの健康政策構想会議. 東京, 2010.5.1-2.
- 7) 竹島 正: 「支援付き住宅」推進会議. 東京, 2010.5.7.
- 8) 竹島 正: 第6回こころの健康政策構想会議. 東京, 2010.5.8.
- 9) 竹島 正: ふるさとの会事例検討会. 東京, 2010.5.12.
- 10) 竹島 正: 第7回こころの健康政策構想会議. 東京, 2010.5.15.
- 11) 竹島 正: 第8回こころの健康政策構想会議. 東京, 2010.5.23.
- 12) 竹島 正: 金融庁多重債務者対応のマニュアル改訂会議. 東京, 2010.5.26.
- 13) 竹島 正: ふるさとの会事例検討会. 東京, 2010.5.27.
- 14) 竹島 正: 第25回「ふるさとの会」三晃荘第三者委員会. 東京, 2010.6.12.
- 15) 竹島 正: 第2回総合的精神保健福祉政策検討委員会. 東京, 2010.6.17.
- 16) 竹島 正: 第13回精神保健福祉士試験委員会. 東京, 2010.6.18.
- 17) 竹島 正: 第10回自殺対策推進会議. 東京, 2010.6.22.
- 18) 竹島 正: 練馬区精神障害者家族交流会. 東京, 2010.6.25.
- 19) 竹島 正: 日本自殺予防学会大会運営委員会. 東京, 2010.6.26.
- 20) 竹島 正: 「こころに平和を实行委員会」第7回総会. 東京, 2010.6.27.
- 21) 竹島 正, 立森久照, 松本俊彦, 赤澤正人, 廣川聖子, 勝又陽太郎, 川島大輔, 山内貴史: 第1回メディアカンファレンス. 東京, 2010.6.28.
- 22) 竹島 正: 平成22年度墨田区保健衛生協議会「こころの健康・自殺予防対策分科会(第1回)». 東京, 2010.6.29.
- 23) 竹島 正: メンタルヘルス総合サイト運営委員会. 東京, 2010.6.29.
- 24) 竹島 正: 日本精神神経学会「精神保健に関する委員会」. 東京, 2010.7.3.
- 25) 竹島 正: 支援付き住宅意見交換会. 東京, 2010.7.5.
- 26) 竹島 正: 心の健康政策構想会議拡大起草委員会. 東京, 2010.7.11.
- 27) 竹島 正: 健康危機発生時における行政機関相互の適切な連携体制及び活動内容に関する研究(精神分野). 平成22年度厚生労働科学研究費補助事業「健康安全・危機管理対策総合研究事業」1回分担事業班会議,

- 東京, 2010.7.14.
- 28) 竹島 正: 精神保健福祉士試験委員会. 東京, 2010.7.16.
 - 29) 竹島 正: 立川麦の会定例会. 東京, 2010.7.17.
 - 30) 竹島 正: 自殺対策ネットワーク協議会, 東京, 2010.7.27.
 - 31) 竹島 正: 平成 22 年度墨田区保健衛生協議会「こころの健康・自殺予防対策分科会(第 2 回)」。東京, 2010.7.28.
 - 32) 竹島 正, 立森久照: 平成 22 年度(第 47 回)全国精神保健福祉センター長会意見交換会, 東京, 2010.7.29.
 - 33) 竹島 正: 安全で健康に生きるためのプログラム, 東京, 2010.7.31.
 - 34) 竹島 正: 第 34 回日本自殺予防学会総会運営委員会, 東京, 2010.7.31.
 - 35) 竹島 正: 第 34 回日本自殺予防学会運営委員会, 東京, 2010.8.23.
 - 36) 竹島 正: 全国精神保健福祉連絡協議会常務理事会, 東京, 2010.8.24.
 - 37) 竹島 正: 大人も子どもも共に安全で健康に生きるためのプログラム 2010. 埼玉, 2010.8.21-22.
 - 38) 竹島 正, 松本俊彦, 川野健治, 稲垣正俊: 自殺対策研究協議会, 東京, 2010.8.25-26.
 - 39) 竹島 正: 平成 22 年度墨田区保健衛生協議会「こころの健康・自殺予防対策分科会(第 3 回)」。東京, 2010.8.31.
 - 40) 竹島 正: 自殺予防対策検討会. 新潟, 2010.9.6.
 - 41) 竹島 正: 日本自殺予防学会第 2010 年度 1 回理事・評議員会. 東京, 2010.9.10.
 - 42) 竹島 正: 自殺対策国民会議. 東京, 2010.9.10.
 - 43) 竹島 正: 酒井明夫, 竹島 正: (対談)「～生きる～障がい当事者の絵画活動について」自殺防止セミナー「生きる」, 岩手, 2010.9.16.
 - 44) 竹島 正: 日本社会精神医学会常任理事会. 東京, 2010.9.25.
 - 45) 竹島 正, 川野健治, 稲垣正俊, 立森久照, 勝又陽太郎, 赤澤正人, 廣川聖子, 山内貴史: 第 2 回メディアカンファレンス—薬物療法をめぐって—. 東京, 2010.9.27.
 - 46) 竹島 正: 平成 22 年度墨田区保健衛生協議会「こころの健康・自殺予防対策分科会(第 4 回)」。東京, 2010.9.29.
 - 47) 竹島 正: ふるさとの会事例検討会. 東京, 2010.9.30.
 - 48) 竹島 正, 小山明日香: 平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業)「医療観察法導入後における触法精神障害者への精神保健福祉法による対応に関する研究(分担研究者: 吉住 昭)」第 1 回班会議, 東京, 2010.10.1.
 - 49) 竹島 正: 精神保健と社会的取組の相談窓口の連携のための調査企画委員会. 東京, 2010.10.14.
 - 50) 竹島 正, 赤澤正人, 山内貴史: メディアカンファレンス, 愛知, 2010.10.22.
 - 51) 竹島 正: 平成 22 年度全国精神保健福祉連絡協議会理事会・総会. 沖縄, 2010.10.28.
 - 52) 竹島 正: 第 58 回精神保健福祉全国大会. 沖縄, 2010.10.29.
 - 53) 竹島 正: 第 2 回自殺予防対策検討会. 新潟, 2010.11.4.
 - 54) 竹島 正, 松本俊彦, 川野健治, 赤澤正人, 勝又陽太郎, 川島大輔, 大槻露華: 第 3 回メディアカンファレンス. 東京, 2010.12.14.
 - 55) 竹島 正: Yahoo 意見交換会. 東京, 2010.12.15.
 - 56) 竹島 正, 松本俊彦, 川野健治, 稲垣正俊: 平成 22 年度国立精神・神経医療研究センター自殺予防研修会. 東京, 2010.12.17.
 - 57) 竹島 正: 日本社会精神医学会常任理事会. 東京, 2010.12.18.
 - 58) 竹島 正: 第 3 回自殺予防対策検討会. 新潟, 2010.12.20.
 - 59) 竹島 正: 平成 22 年度厚生労働科学研究費補助事業「健康安全・危機管理対策総合研究事業」3 回分担事業班会議, 東京, 2011.1.6.
 - 60) 竹島 正: 船橋市役所自殺対策庁内連絡会議. 千葉, 2011.1.7.
 - 61) 竹島 正: 安心ネットづくり促進協議会 調査検証作業部会. 東京, 2011.1.31.

- 62) 竹島 正, 松本俊彦, 川野健治, 大槻露華, 勝又陽太郎, 川島大輔, 赤澤正人, 吉野比呂子: 第4回メディアカンファレンス. 東京, 2011.2.15.
- 63) 勝又陽太郎, 廣川聖子: 自殺対策の取り組み. 自治労衛生医療評議会 地域保健・精神保健セミナー分科会, 東京, 2010.12.12.
- 64) 竹島 正: 精神保健に関する委員会. 日本精神神経学会, 東京, 2011.3.6.
- 65) 竹島 正, 立森久照: メンタルヘルス総合情報サイト調査・研究事業企画委員会. 東京, 2011.3.9.
- 66) 竹島 正: 自殺防止対策事業評価委員会. 東京, 2011.3.23.
- 67) 竹島 正, 川野健治: 被災者支援のための情報収集. 青森・岩手, 2011.3.30-4.2.
- 68) 川野健治: (助言者) 相談マニュアル作成に関する会議. 愛知, 2010.8.9.
- 69) 川野健治: 第1回我が国及び諸外国における自殺対策関連施策と自殺統計等に関する調査検討会. 東京, 2010.12.15.
- 70) 川野健治: 第1回こころの健康づくりネットワーク会議検討部会. 愛知, 2010.12.16.
- 71) 川野健治: 第2回こころの健康づくりネットワーク会議検討部会. 愛知, 2011.1.13.
- 72) 川野健治: 平成22年度院内自殺の予防と事後対応に関する検討会 DVD 製作ワーキンググループ. 岩手, 2011.1.20.
- 73) 川野健治: 第3回こころの健康づくりネットワーク会議検討部会. 愛知, 2011.1.27.
- 74) 川野健治: 岡崎市保健所 第2回こころの健康づくりネットワーク会議検討部会. 愛知, 2011.1.13.
- 75) 勝又陽太郎: 東京都自殺相談ダイヤル相談員グループ研修会スーパーバイザー, NPO 法人メンタルケア協議会, 東京, 2010.11.21.
- 76) 山内貴史: 情報・システム研究機構 統計数理研究所「自殺の時空間集積性についての検討研究」平成22年度研究会議, 東京, 2010.10.20.

C. 講演

- 1) Kenji Kawano: Situation and policy direction for suicidal survivors in Japan. The 7th. Seoul Suicide Prevention Forum, Seoul, 2010. 5. 7.
- 2) Kawashima D: Programs for Suicide Prevention in Japan. International symposium of Korea association for suicide prevention, Seoul, 2010.9.10.
- 3) 竹島 正: 自殺対策から自殺予防へー地域における対策のあり方を考える. 第4回熊本精神医学会セミナー, 熊本, 2010.7.9.
- 4) 竹島 正: 自殺予防対策 わたしたちができる「生きるための支援」. ゲートキーパー養成講座, 東京, 2010. 8. 31.
- 5) 竹島 正: 「自殺予防と地域づくり」. 自殺対策シンポジウムひろしま, 広島, 2010. 9. 4.
- 6) 竹島 正: 「自殺予防と地域づくり」. 自殺対策シンポジウム in とくしま, 徳島, 2010. 9. 5.
- 7) 竹島 正: 「地域づくりと自殺予防」. 自殺防止セミナーー生きるー, 岩手, 2010. 9. 16.
- 8) 竹島 正: 自殺予防と地域づくり. 平成22年度自殺対策フォーラム, 鳥取, 2010. 11. 7.
- 9) 竹島 正: 自殺とこころの健康問題の理解ーメディアカンファレンスの試み. 平成22年度自殺対策メディアカンファレンス, 北海道, 2010. 11. 12.
- 10) 竹島 正: 地域における自殺予防対策. 自殺対策連絡会議, 千葉, 2010. 12. 7.
- 11) 竹島 正: 精神保健福祉論ー変遷と今後ー. 平成22年度大阪市精神保健福祉相談員資格取得講習会, 大阪, 2010. 12. 9.
- 12) 竹島 正: わが国の自殺防止活動について. ネットワーク大学コンソーシアム岐阜共同授業平成22年度後学期科目「人間福祉学」, 岐阜, 2011. 1. 12.
- 13) 竹島 正: これからのこころの医療. 第1回地域からこころの医療を考える会, 大阪, 2011. 1. 22.
- 14) 竹島 正: 自殺の現状と自殺予防のための地域づくり. 自殺予防講演会, 三重, 2011. 1. 30.

- 15) 竹島 正: 自殺とは何か～社会構造的視点から見た自殺について～/地域における自殺予防. ゲートキーパー養成講座. 東京, 2011. 3. 11.
- 16) 松本俊彦: 自殺予防のために精神科医療には何ができるか? 医療法人社団翠会 行橋記念病院主催 院内講演会, 福岡, 2010. 4. 16.
- 17) 松本俊彦: 地域で出会うメンタルヘルス問題. こころの健康政策構想会議起草委員会主催 第3回こころの健康政策構想会議, 東京, 2010. 4. 17.
- 18) 松本俊彦: 自傷と自殺. 横浜湘南精神界懇話会主催 横浜湘南精神界懇話会, 神奈川, 2010. 4. 17.
- 19) 松本俊彦: 自傷行為のアセスメントと対応. 埼玉県養護教員会主催 埼玉県養護教員会総会, 埼玉会館, 埼玉, 2010.5.26.
- 20) 松本俊彦: 薬物依存の援助から考えたこと. NPO 法人全国薬物依存症者家族連合会主催 やっかれん 2010 年度総会 & 第7回フォーラム, ウィルあいち, 愛知, 2010. 5. 29.
- 21) 松本俊彦: 子どもの自殺予防のために学校でできること. 埼玉県教育委員会主催 平成 22 年度高等学校生徒指導担当者研究協議会, さいたま市文化センター, 埼玉, 2010. 6. 2.
- 22) 松本俊彦: 教職員のメンタルヘルス～うつ、自殺予防の観点から. 厚木市教育委員会・厚木児童思春期精神保健ネットワーク推進委員会 第30回ミニワークショップ, 厚木市総合福祉会館, 神奈川, 2010. 6. 10.
- 23) 松本俊彦: 自傷行為の理解と援助. 日本産業衛生学会地方会主催 第78回職場ストレス研究会, 明倫ホール, 愛知, 2010.7.14.
- 24) 松本俊彦: 向精神薬乱用と自殺. 厚生労働省主催 第6回自殺うつ等対策プロジェクトチーム会議, 厚生労働省, 東京, 2010. 7. 27.
- 25) 松本俊彦: アルコールとうつ、自殺. 独立行政法人国立病院機構久里浜アルコール症センター主催 平成 22 年度アルコール問題の早期発見早期介入実際講座, 独立行政法人国立病院機構久里浜アルコール症センター, 神奈川, 2010. 7. 30.
- 26) 松本俊彦: 自傷行為の真実～なぜ若者たちは自身を傷つけるのか. 三鷹市・憲法を祈念する三鷹市民の会主催 平成 22 年度第1回三鷹市憲法講座, 三鷹駅前コミュニティセンター, 東京, 2010. 7. 31.
- 27) 松本俊彦: 自傷行為の理解と援助. 福岡市医師会主催 福岡市学校精神保健協議会講演会, 福岡市医師会館, 福岡, 2010. 8. 3.
- 28) 松本俊彦: アルコール依存症と自殺問題. 社団法人全日本断酒連盟主催 平成 22 年度全断連東京セミナー, 私学会館アルカディア市ヶ谷, 東京, 2010. 8. 21.
- 29) 松本俊彦: 自傷行為、薬物依存の青年たち～関わり方を中心に～. 財団法人明治安田こころの健康財団主催 2010 年度児童思春期講座 2 現代の思春期を考える……～変わりゆく病態をどう理解し接近するか～, 財団法人明治安田こころの健康財団, 東京, 2010. 9. 5.
- 30) 松本俊彦: 精神科医の立場から. 武蔵野主催 市民こころの健康支援事業 第8回テーマ講座 自殺対策講座「『生きること』を支援する～司法書士、メンタルヘルスの視点から～」, 武蔵野スイングホール, 東京, 2010. 9.10.
- 31) 松本俊彦: 職場で進める自殺防止対策の基本的な考え方～職場のメンタルヘルスケア～. 特別社団法人日本精神科看護技術協会主催 自殺予防対策セミナー, 品川キャナルビル, 東京, 2010. 9.11.
- 32) 松本俊彦: シンポジウム「いきるを支える」. いきるを支える 鎌倉・逗子・葉山実行委員会・社団法人神奈川県精神保健福祉協会・鎌倉市・逗子市・葉山町・神奈川県等主催 自殺対策普及講演会 いきるを支える 鎌倉・逗子・葉山, 鎌倉芸術館, 神奈川, 2010.9.23.
- 33) 松本俊彦: 自殺予防のために精神科医療ができること. ファイザー株式会社主催 地域アドヒアランス講演会—ジェイゾロフト発売4周年祈念講演会—, ホテルブエナビスタ, 長野, 2010.9.24.
- 34) 松本俊彦: 薬物依存の理解と援助. 厚生労働省医薬食品局監視指導・麻薬対策課主催 平成 22 年度中国四国地区薬物中毒対策連絡会議 相談従事者講習会, ピュアリティまきび, 岡山, 2010.9.28.

- 35) 松本俊彦：アルコールとうつ，自殺．一般社団法人うつ病の予防・治療日本委員会主催 「うつ病を知る日」東京会場，東京コンファレンススクエア・エムプラス，東京，2010.10.2.
- 36) 松本俊彦：薬物依存と認知行動療法プログラムの有効性．東京都中部総合精神保健福祉センター主催 シンポジウム「若年者の薬物乱用の現状と乱用防止への新しい取り組み」，東京都中部総合精神保健福祉センター，東京，2010.10.13.
- 37) 松本俊彦：薬物依存の理解と援助．厚生労働省医薬食品局監視指導・麻薬対策課主催 平成 22 年度近畿地区薬物中毒対策連絡会議 相談従事者講習会，ホテル平安会館，2010.10.19.
- 38) 松本俊彦：自傷と自殺．福井メンタルヘルスフォーラム・グラクソ・スミスクライン主催 第7回福井メンタルヘルスフォーラム 特別講演，ホテルフジタ福井，福井，2010.10.21.
- 39) 松本俊彦：孤独、孤立、自死．社団法人埼玉県断酒新生会主催 第10回市民公開セミナー 基調講演，埼玉県民活動センター，埼玉，2010.10.31.
- 40) 松本俊彦：新しい薬物依存症の治療～SMARPP～．大塚製薬主催 ドパミンシステム勉強会，ホテルSCAPES，神奈川，2010.11.12.
- 41) 松本俊彦：特別講演 自傷と自殺．横浜不安・抑うつ研究会・明治製菓株式会社主催 第14回横浜不安・抑うつ研究会，神奈川，2010.11.18.
- 42) 松本俊彦：薬物依存の理解と援助．NPO 法人岐阜ダルク主催 薬物乱用防止フォーラム，岐阜，2010.11.23.
- 43) 松本俊彦：依存症家族教室 Q&A．東京都多摩総合精神保健福祉センター主催 依存症家族教室，東京，2010.11.25.
- 44) 松本俊彦：第7分科会 自死と多重債務問題 基調講演．第30全国クレサラ・ヤミ金被害者交流集会 in 岐阜，岐阜，2010.11.27.
- 45) 松本俊彦：アディクションとその支援．大阪市こころの健康センター主催 平成 22 年度精神保健福祉相談員資格取得講習会，大阪，2010.12.6.
- 46) 松本俊彦：第1分科会基調講演「アルコール問題と自殺」．関東信越ブロック精神保健福祉センター連絡協議会主催 平成 22 年度関東信越ブロック精神保健福祉センター連絡協議会，東京，2010.12.9.
- 47) 松本俊彦：若者の飲酒の背景にあるもの～「故意に自分の健康を害する」症候群．若者の飲酒を考えるフォーラム実行委員会主催 第17回若者の飲酒を考えるフォーラム，神奈川，2010.12.12.
- 48) 松本俊彦：自傷と自殺～「故意に自分の健康を害する」症候群～．関西大学社会学部主催 心理学特別講演会，大阪，2010.12.20.
- 49) 松本俊彦：リストカットをする思春期の理解と支援～関わるすべての支援者のために～．広島県小児科医会主催 第60回広島県小児科医会総会 招待講演，広島，2011.1.16.
- 50) 松本俊彦：わが国の自殺の実態および自殺予防対策について．神奈川県労働安全衛生協会主催 厚生労働省委託事業「自殺予防セミナー」，神奈川，2011.1.17.
- 51) 松本俊彦：自傷行為の理解と援助～若者の自殺予防のために～．社会福祉法人栃木いのちの電話主催 公開講座，栃木，2011.1.22.
- 52) 松本俊彦：地域で取り組む自殺対策～身近なところから気づきつながり支え合うために～．平成 22 年度神奈川県鎌倉保健福祉事務所サービス連携調整会議 地域精神保健福祉部会，神奈川，2011.1.24.
- 53) 松本俊彦：児童・生徒の自殺予防について．茨城県教育委員会主催 平成 22 年度第 2 回生徒指導教員連絡協議会，茨城，2011.1.31.
- 54) 松本俊彦：医療に関わる自殺対策～自殺対策の基礎知識．NPO 法人全国自死遺族支援総合支援センター主催 ワークショップ「医療者と考える自死遺族支援」，東京，2011.2.6.
- 55) 松本俊彦：うつとアルコールと自殺について．四日市市保健所主催 平成 22 年度アルコール講習会，四日市市総合会館，三重，2011.2.20.
- 56) 松本俊彦：アルコールとうつ．世田谷区世田谷保健所主催 平成 22 年度世田谷区依存症セミナー，三軒茶屋キャロットタワー5階，東京，2011.2.22.

- 57) 松本俊彦:自殺対策のこれから～自殺多発地域の対策～. 神奈川県厚木保健福祉事務所主催 宮ヶ瀬地域自殺対策検討会, 神奈川県厚木合同庁舎, 2011.2.25.
- 58) 松本俊彦:気づこう心の SOS～子どもの心を育てる保護者の役割とは～. 羽生市教育委員会主催 保護者対象講演会, 羽生市産業文化ホール, 2011.2.27.
- 59) 川野健治:自殺対策と関係機関の連携. 豊橋市自殺予防対策協議会, 愛知, 2010. 5. 28.
- 60) 川野健治:学校における児童・生徒の自殺予防について. 平成22年度尾北学校保健会総会記念講演, 愛知, 2010.6.9.
- 61) 川野健治:知ろう・気づこう・心のサイン. 川越市自殺対策 気づき・つながり・見守り出前講座, 埼玉, 2010.6.16.
- 62) 川野健治:自死・自殺対策予防—私たち臨床心理士ができること. 東京臨床心理士会第18回大会分科会, 東京, 2010.6.20.
- 63) 川野健治:自死をめぐる私たちのこころ. 大和・生と死を考える会 定例会, 神奈川, 2010.6.26.
- 64) 川野健治:学校・家庭・地域で取り組む問題行動への対応. 平成22年度夏季集中講座生活指導C, 東京, 2010.8.5.
- 65) 川野健治:(シンポジウム)働きざかりのいのちを守ろう. 相模原市自殺対策シンポジウム, 神奈川, 2010.9.4.
- 66) 川野健治:市町村だからできるこんなとりくみ 自殺対策のいろいろ～日常業務でできること・強化基金を活用してできること. 第2回地域自殺対策担当者会議(市町村職員), 神奈川, 2010.11.4.
- 67) 川野健治:自殺に傾いた人を支えるために:相談担当者のための指針から. 小諸市主催講演会, 長野, 2010.11.24.
- 68) 川野健治:職場におけるメンタルヘルス不調者への対応～不調者への「配慮」を中心に. 平成22年度第3回精神保健講習会, 東京, 2011.1. 5.
- 69) 川野健治:地域における自殺対策の取組について. 平成22年度茅ヶ崎保健福祉事務所地域精神保健福祉連絡協議会, 神奈川, 2011.2.14.
- 70) 川野健治:わが国の自殺の現状と気づいて欲しい自殺のサイン. 自殺予防対策フォーラム, 千葉, 2011.2.19.
- 71) 川野健治:思春期の心の問題とその対応. 平成22年度高等学校生徒指導連絡協議会(第2回), 千葉, 2011.2.25.
- 72) 川野健治:(シンポジウム)共に生きる社会に向けて～遺族の視点から考える自殺対策, 青森, 2011.2.26.
- 73) 稲垣正俊:一般医療機関におけるうつ病へのアプローチ～身体疾患とうつ病・自殺の関係. 岩手県精神保健福祉センター主催 平成22年度自殺対策講演会, 岩手, 2010. 5. 28.
- 74) 稲垣正俊:自殺対策に係る地域の取組の重要性とその対策. 市町自殺対策主管課長・担当者等連絡会議, 広島, 2010.11.5.
- 75) 稲垣正俊:一般医療機関におけるうつ病へのアプローチ～身体疾患とうつ病の関係～. 医療保健関係者のためのうつ・自殺対策講演会, 岩手, 2010.11.17.
- 76) 稲垣正俊:うつ病診療と自殺予防. 東久留米市医師会, 東京, 2011.1.14.
- 77) 稲垣正俊:うつ病を中心とした「心の病」について等. 寝たきり予防講習会, 千葉, 2011.1.17.
- 78) 勝又陽太郎:高齢者のうつ病の理解と対応. 新潟県精神保健福祉協会新潟こころのケアセンター, 新潟県十日町市, 2010.11.17.
- 79) 勝又陽太郎:全国的な自殺の状況と取り組みについて. 2011 自治労地域保健・精神保健セミナー, 全日本自治団体労働組合, 東京, 2010.12.12.
- 80) 勝又陽太郎:自殺の実態と先進地の取り組みについて. 平成22年度前橋地域自殺対策ネットワーク会議, 群馬県前橋市役所, 2011.2.8.
- 81) 勝又陽太郎:心のサインに気付く、繋げる自殺予防の基礎知識(小児・若年者の場合). 第9回市民フォーラム, 西多摩医師会, 東京都羽村市, 2011.2.18.

D. 学会活動

(1) 学会役員

- 1) Takeshima T : International Advisory Council, Asia Australia Mental Health
- 2) 竹島 正 : 日本社会精神医学会常任理事 (総務企画委員長)
- 3) 竹島 正 : 日本精神衛生学会理事
- 4) 竹島 正 : 日本自殺予防学会理事
- 5) 竹島 正 : 日本精神保健福祉政策学会理事
- 6) 竹島 正 : 日本公衆衛生学会査読委員
- 7) 竹島 正 : 日本精神神経学会「精神科医療政策委員会」委員
- 8) 竹島 正 : 日本精神神経学会「精神保健に関する委員会」委員
- 9) 竹島 正 : 第34回日本自殺予防学会運営委員会委員
- 10) 松本俊彦 : 日本青年期精神療法学会理事
- 11) 松本俊彦 : 日本アルコール精神医学会理事
- 12) 松本俊彦 : 日本司法精神医学会評議員
- 13) 松本俊彦 : 日本アルコール・薬物医学会評議員
- 14) 松本俊彦 : 日本精神科救急学会評議員
- 15) 松本俊彦 : 日本社会精神医学会学術委員
- 16) 川野健治 : 日本パーソナリティ心理学会常任理事
- 17) 川野健治 : 日本社会精神医学会理事
- 18) 川野健治 : 日本質的心理学会理事
- 19) 稲垣正俊 : 日本生物学的精神医学会評議員

(2) 座長

- 1) 立森久照, 勝又陽太郎, 井上 颯, 森川すいめい, 末木 新, 高橋祥友, 竹島 正(企画および座長) : 根拠ある自殺予防対策推進のために—若手研究書の提言—. 第34回日本自殺予防学会総会シンポジウムI, 東京, 2010.9.9.
- 2) 竹島 正(座長), 大塚耕太郎, 穎原浩司, 杉浦加代子, 森 祐美子, 角田玉青, 増井恒夫, 宮川治美, 小島秀幹, 中村 順 : 第34回日本自殺予防学会総会一般演題. 東京, 2010.9.11.
- 3) 吉田銀一郎, 上岡陽江, 木下 浩, 大野 裕, 竹島 正(座長), 松本俊彦(座長) : (シンポジウム)今後の自殺対策に向けて. 自殺対策推進のための関連学会等の意見交換会, 東京, 2011.3.1.
- 4) 岸本年史, 竹島 正(座長) : 統合失調症—過去・現在・未来—. 日本社会精神医学会, 奈良, 2011.3.4.
- 5) 金 吉晴, 松本俊彦 : シンポジウム8 (司会) 認知行動療法と社会との接点. 第106回日本精神神経学会学術総会, 広島, 2010.5.20.
- 6) 宮田久嗣, 松本俊彦 : 3学会合同シンポジウム1「多様な嗜癖行動を物質依存の立場から考える」, 平成22年度アルコール・薬物関連学会合同学術総会, 小倉, 2010.10.7.
- 7) 松本俊彦, 竹島 正 : 3学会合同シンポジウム4「自傷、自殺とアルコール・薬物問題—精神科と法医学の立場から」, 平成22年度アルコール・薬物関連学会合同学術総会, 小倉, 2010.10.7.
- 8) 和田 清・松本俊彦 : シンポジウムVI「薬物依存と現代社会—医療モデルの必要性—」, 第30回日本社会精神医学会, 奈良, 2011.3.4.

(3) 学会誌編集委員等

- 1) 松本俊彦 : 日本精神衛生学会編集委員
- 2) 松本俊彦 : 星和書店「精神科治療学」編集委員
- 3) 川野健治 : 日本質的心理学会機関誌「質的心理学フォーラム」副編集委員長

E. 研修

(1) 研修企画

- 1) 竹島 正, 立森久照, 松本俊彦, 川野健治: 第47回精神保健指導課程研修. 東京, 2010.6.30-7.2.
- 2) 川野健治, 松本俊彦, 稲垣正俊, 竹島 正: 第1回心理職自殺予防研修. 東京, 2010.7.5-6.
- 3) 竹島 正, 松本俊彦, 川野健治, 稲垣正俊: 第4回自殺総合対策企画研修, 東京, 2010.8.25-27.
- 4) 稲垣正俊, 竹島 正, 松本俊彦, 川野健治: 第1回精神科医療従事者自殺予防研修, 東京, 2010.9.14-15.
- 5) 松本俊彦, 竹島 正, 川野健治, 稲垣正俊: 第1回自殺予防のための自傷行為とパーソナリティ障害の理解と対応研修. 東京, 2010. 11. 8- 9.
- 6) 竹島 正, 松本俊彦, 川野健治, 稲垣正俊: 第2回精神科医療従事者自殺予防研修. 岡山, 2010.11. 30-12. 1.

(2) 研修会講師

- 1) 竹島 正: 自殺対策から自殺予防へ. 愛知県精神保健福祉センター主催 平成22年度第1回自殺対策企画研修会, 愛知, 2010.5.13.
- 2) 竹島 正: 自殺予防対策. 日本精神科看護技術協会京都研修センター主催 うつ病看護I研修会, 京都, 2010.6.4.
- 3) 竹島 正: 自殺予防—精神医療への期待—. 日本精神科病院協会主催 学術教育研修会「看護部門」, 山形, 2010.6.24.
- 4) 竹島 正: 全庁で自殺に取り組むために. 平成22年度自殺総合対策事業「庁内推進体制強化事業」庁内研修会, 新潟, 2010.7.8.
- 5) 竹島 正: 地域づくりとこころの健康対策. 平成22年度島根県市町村保健師等研修会, 島根, 2010. 7. 23.
- 6) 竹島 正: わが国の自殺者の現状と課題からみた行政視点. 自殺予防対策緊急強化事業 岡崎市職員トップ研修, 愛知, 2010.8.12.
- 7) 竹島 正: 自殺対策の考え方. 平成22年度地域自殺対策研修会, 宮城, 2010.8.20.
- 8) 竹島 正: グループワーク「地域活動の中で、どのように自殺対策をすすめていくか」. 平成22年度地域自殺対策研修会第3回, 宮城, 2010.9.17.
- 9) 竹島 正: 自殺対策と市町村保健活動. 平成22年度地域自殺対策研修会第3回, 宮城, 2010.9.17.
- 10) 竹島 正: 「自殺の現状と対策の意義」～何故、今自殺対策か!～. 蟹江町職員研修会, 愛知, 2010.10.22.
- 11) 竹島 正: 自殺対策を地域で考える. 「自殺防止対策地域連絡会」及び「自殺防止対策研修会」, 石川, 2010.11.5.
- 12) 竹島 正: 自殺の現状を知る. 平成22年度試行研修「自殺対策～大切な人を守るためにできること～」, 東京, 2010.12.3.
- 13) 竹島 正: 自殺対策の視点. 平成22年度地域自殺対策研修会, 山形, 2010.12.16.
- 14) 竹島 正: 精神保健福祉法第24条, 第25条, 26条通報の運用実態について. 第35回全国精神保健福祉業務研修会 in 品川宿, 東京, 2011.2.11.
- 15) 竹島 正: 自殺対策のこれから—大綱改正に向けて—. 自殺対策官民合同研修会 in 但馬, 兵庫, 2011.3.19.
- 16) 松本俊彦: 医療観察法における物質乱用・依存の治療. 財団法人精神・神経科学振興財団主催 平成21年度指定入院医療機関従事者病棟研修会, 鳥取, 2010. 4. 7.
- 17) 松本俊彦: 医療観察法における自傷・自殺のケア. 財団法人精神・神経科学振興財団主催 平成21年度指定入院医療機関従事者病棟研修会, 鳥取, 2010. 4. 7.
- 18) 松本俊彦: 自傷行為をする児童・生徒への対応について. 特定非営利活動法人神奈川県スクールカウンセラー協会主催 平成22年度第1回研修会, 横浜市市民活動支援センター, 神奈川, 2010. 5. 8.
- 19) 松本俊彦: 自傷行為の理解と援助. 北海道情緒障害研究会主催 研修会, ちえりあ, 北海道, 2010. 5. 9.
- 20) 松本俊彦: 新しいアルコール・薬物依存症の治療. 医療法人資生会八事病院主催 院内職員研修, 医療法人資生会八事病院, 愛知, 2010. 5. 31.

- 21) 松本俊彦：地域における自殺対策. 福島県県中保健福祉事務所主催 平成 22 年度自殺対策関係機関職員企画・ネットワーク研修会, 須賀川市文化センター, 福島, 2010. 6. 11.
- 22) 松本俊彦：自殺の実態・地方自治体の施策について. 横浜市こころの健康相談センター主催 自殺対策「基礎研修」, 横浜市健康福祉センター, 神奈川, 2010. 6. 14.
- 23) 松本俊彦：様々なアディクション. 東京都精神保健福祉センター主催 平成 22 年度精神保健福祉研修 (前期)「アディクションを識る」, 豊島区民センター, 東京, 2010.6.30.
- 24) 松本俊彦：薬物乱用の害と周囲が注意すべきこと. 社団法人日本音楽事業者協会主催 違法薬物乱用対策研修会, 津田ホール, 東京, 2010.7.7.
- 25) 松本俊彦：アルコールとうつ, 自殺. 福島県精神保健福祉センター主催 平成 22 年度精神保健福祉関係職員研修, 福島県庁, 福島, 2010.7.9.
- 26) 松本俊彦：我が国の自殺の実態及び自殺予防対策について. 神奈川県精神保健福祉センター主催 平成 22 年度自殺対策基礎研修, 神奈川県総合医療会館, 神奈川, 2010.7.12.
- 27) 松本俊彦：自殺をめぐる最近の動向とその対策. 東京都多摩精神保健福祉センター主催 平成 22 年度自殺対策研修, 東京都多摩総合精神保健福祉センター, 東京, 2010. 7. 23.
- 28) 松本俊彦：教育現場の危機管理対応. 横須賀市教育委員会主催 教職員対象特別支援研修会, 横須賀市立横須賀総合高等学校, 神奈川, 2010. 7. 30.
- 29) 松本俊彦：自殺予告事例への対応. 埼玉県・さいたま市主催 埼玉県自殺対策市町村・保健所合同職員研修/さいたま市自殺予防対策研修 2, WithYou さいたま, 埼玉, 2010. 8. 2.
- 30) 松本俊彦：自傷行為の理解と援助. 東京都多摩総合精神保健福祉センター主催 平成 22 年度教育関係者研修, 東京自治会館, 東京, 2010. 8. 6.
- 31) 松本俊彦：青少年における薬物乱用の現状と対策. 長崎県長崎こども・女性・障害者支援センター主催 平成 22 年度アルコール・薬物関連問題研修会, 長崎県長崎看護協会ながさき看護センター, 長崎, 2010. 8. 20.
- 32) 松本俊彦：地域医療/地域精神医療と自殺予防. 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所主催 第 4 回自殺総合対策企画研修, 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所, 東京, 2010. 8. 26.
- 33) 松本俊彦：アルコール・薬物問題と自殺. 秋田県精神保健福祉センター主催 平成 22 年度アルコール・薬物関連問題研修会, 秋田県総合保健センター, 秋田, 2010. 8. 30.
- 34) 松本俊彦：中高年男性のうつ, 自殺とアルコール関連問題. 熊本県精神保健福祉センター主催 平成 22 年自殺対策研修・アルコール・薬物問題研修, 熊本市男女共同参画センターはあもにい, 熊本, 2010. 9. 3.
- 35) 松本俊彦：薬物関連精神障害の臨床における司法的問題. 精神保健研究所薬物依存研究部主催 第 24 回薬物依存臨床医師研修会, 精神保健研究所, 東京, 2010. 9. 8.
- 36) 松本俊彦：思春期にみられる精神疾患について～自傷行為の理解と援助. 東京都教職員研修センター主催 職員研修, 東京都教育相談センター, 東京, 2010.9.17.
- 37) 松本俊彦：子どもの自傷行為. 社会福祉法人恩賜財団母子愛育会主催「子どもの心の診療医」研修会, 全社協 灘尾ホール, 東京, 2010.9.26.
- 38) 松本俊彦：自傷行為の理解と援助～若者たちの心の闇に迫る. 東京学校保健会主催 養護教諭研修会, 東京都教職員研修センター, 東京, 2010.10.14.
- 39) 松本俊彦：精神保健観察における自殺予防. 法務省保護局主催 平成 22 年度社会復帰調整官初任者研修会, 法務省保護局, 東京, 2010. 10. 18.
- 40) 松本俊彦：自傷行為と過量服薬に対する理解と対応. 独立行政法人国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所主催 第 1 回自殺予防のための自傷行為とパーソナリティ障害の理解と対応研修, 独立行政法人国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所, 2010. 11.8.
- 41) 松本俊彦：自傷行為の理解と援助～『故意に自分の健康を害する』若者たち. 香川県精神保健福祉センター主催 平成 22 年度思春期精神保健研修会, 香川県立文書館, 香川, 2010.11.5.

- 42) 松本俊彦：地域における自殺予防の取り組み。東京都多摩立川保健所主催 平成22年度ゲートキーパー指導者要請研修会，東京都多摩立川保健所，東京，2010.11.10.
- 43) 松本俊彦：自傷行為の正しい理解と対応。岐阜県教育委員会主催 平成22年度第5回教育相談実践研修会，岐阜，2010.11.29.
- 44) 松本俊彦：小講義 薬物依存の現状と対策。第48回全国学生相談研修会，東京，2010.11.30.
- 45) 松本俊彦：地域における支援困難家族について。横須賀市こども育成部主催 保健福祉医療従事者研修会，神奈川，2010.12.7.
- 46) 松本俊彦：自殺予防について考える～私たちにできることは？～。東京都多摩小平保健所主催 平成22年度自殺対策「ゲートキーパー養成研修会」，東京，2010.12.8.
- 47) 松本俊彦：依存症と自殺予防～アルコール問題を中心に～。栃木県東健康福祉センター主催 平成22年度自殺予防普及啓発研修会，栃木，2010.12.10.
- 48) 松本俊彦：矯正施設における自殺・自傷への対応。法務省矯正研修所主催 任用研修課程高等科第42回研修，東京，2010.12.22.
- 49) 松本俊彦：物質使用障害と自傷、自殺。平成22年度独立行政法人国立病院機構肥前精神医療センター主催 アルコール・薬物関連研修会，佐賀，2011.1.21.
- 50) 松本俊彦：子どもの自殺予防のために学校にできること。埼玉県教育委員会主催 明るく安心して学べる学校作り研修会，埼玉，2011.1.28.
- 51) 松本俊彦：日本の自殺の現状。特定非営利活動法人メンタルケア協議会主催 東京都自殺防止のための電話相談技能研修，東京，2011.1.30.
- 52) 松本俊彦：薬物・アルコール依存を持った人への対応。特定非営利活動法人メンタルケア協議会主催 東京都自殺防止のための電話相談技能研修，東京，2011.1.30.
- 53) 松本俊彦：自殺の現状と対策について。杉並区杉並保健所主催 平成22年度自殺対策研修「気付き・見守り・つなげる PartⅢ～ゲートキーパー養成研修～」，東京，2011.2.2.
- 54) 松本俊彦：自殺の現状と対策について。社団法人栃木県精神障害者援護会（やしお会）主催 平成22年度第3回メンタルヘルス研修会，栃木，2011.2.4.
- 55) 松本俊彦：なぜ自殺未遂者対策が必要か。厚生労働省主催・日本精神科救急学会共催 平成22年度自殺未遂者ケア研修，大阪，2011.2.5.
- 56) 松本俊彦：自傷行為の理解と対応。神奈川県大和保健福祉事務所主催 大和市内養護教諭研修会，神奈川，2011.2.8.
- 57) 松本俊彦：依存症と自殺について。大阪司法書士会主催 自死予防研修会 基調講演，大阪，2011.2.13.
- 58) 松本俊彦：子どもの自死を察知するために養護教諭として気をつけること。神奈川県教職員組合主催 神奈川県養護教諭研修会，神奈川県教育会館，神奈川，2011.2.22.
- 59) 松本俊彦：自殺の現状と住みやすい社会をめざして。荒川区主催 自殺対策ゲートキーパー研修，サンパール荒川，東京，2011.3.2.
- 60) 松本俊彦：自傷行為と自殺。尼崎市保健所主催 第3回自殺対策研修会，尼崎市立すこやか多目的ホール，大阪，2011.3.8.
- 61) 松本俊彦：精神鑑定事例。法務省矯正研修所主催 調査鑑別特別科第4回研修，法務省矯正研修所，東京，2011.3.9.
- 62) 松本俊彦：自傷行為とパーソナリティ障害への対応について。公立大学法人横浜市立大学医学部精神医学講座主催 レジデント研修会，公立大学法人横浜市立大学附属市民総合医療センター，神奈川，2011.3.10.
- 63) 川野健治：思春期の自殺について－基本的理解と対応－。さいたま市教育委員会主催 平成22年度教育相談アドバイザー研修会，埼玉，2010.5.11.
- 64) 川野健治：自死遺族を支えるために－現状の理解と支援の基本。自死遺族支援関係者研修会，静岡，2010.6.22.

- 65) 川野健治：自死遺族のケア。平成22年度日本臨床心理士会定例職能研修会Ⅰ（香川），香川，2010.7.11.
- 66) 川野健治：相談担当者のための自殺に傾いた人を支えるために。平成22年度自殺予防対策事業「相談支援者のスキルアップ研修」，愛知，2010.8.16.
- 67) 川野健治：思春期の自殺について。平成22年度「第3回さわやか相談員研修会」，埼玉，2010.8.20.
- 68) 川野健治：自殺未遂者のための基礎理解。大分県委託研修 自殺対策専門研修，大分，2010.8.21.
- 69) 川野健治：自殺予防におけるハイリスク群の理解と地域での支援。平成22年度自殺対策専門研修，大分，2010.8.22.
- 70) 川野健治：自殺対策の概要・自殺念慮者の心理と対応。平成22年度川崎市自殺対策相談支援基礎研修，神奈川，2010.10.5.
- 71) 川野健治：地域における自殺予防対策－自死遺族支援から－。地域指導者養成研修会，岐阜，2010.10.8.
- 72) 川野健治：地域と学校における自殺予防・自殺対策。平成22年度石川県臨床心理士会会員研修会，石川，2010.11.7.
- 73) 川野健治：自殺の実態と現状、自殺対策における社会福祉士の役割。こころサポーター養成研修，神奈川，2011.1.15.
- 74) 川野健治：自殺の現状と対策について～市職員としてできること～。上尾市自殺予防研修会，埼玉，2011.1.25.
- 75) 川野健治：自殺企図者への対応について。平成22年度ゲートキーパー養成研修会，栃木，2011.1.31.
- 76) 川野健治，川島大輔：自殺対策～つながる支援に向けて～。特別区職員研究所主催 平成22年度試行研修，東京，2011.2.8.
- 77) 川野健治：自殺予防学の基礎。財団法人日本医療機能評価機構主催 平成22年度院内自殺の予防と事後対応のための研修会，東京，2011.3.11-12.
- 78) 稲垣正俊：精神科診断と薬物療法の理解。第1回心理職自殺予防研修。東京，2010.7.5.
- 79) 稲垣正俊：平成22年度「配偶者からの暴力被害者支援関係職員研修会」（自殺とDV）「自殺予防について」。岩手県精神保健福祉センター，岩手，2010.7.6.
- 80) 稲垣正俊：自殺と精神疾患。第1回精神科医療従事者自殺予防研修，東京，2010.9.14.
- 81) 稲垣正俊：うつ病・自殺予防対策の視点とそのための行動。自殺対策関係者研修会，山形，2010.9.28.
- 82) 稲垣正俊：「地域でできる自殺予防」～うつ病の早期発見とその対応～。自殺・うつ対策医療従事者専門研修会，大分，2010.10.30.
- 83) 稲垣正俊：自殺予防活動の計画・実施に必要な戦略。自殺予防対策研修会，福岡，2010.11.12.
- 84) 稲垣正俊：地域でできる自殺予防対策～かかりつけ医と連携したうつ病の早期発見とその対応。自殺予防対策研修会，大分，2010.11.13.
- 85) 稲垣正俊：うつ病についての基礎知識～身体疾患とうつ病の関係～。平成22年度保健推進員等研修会，岩手，2010.11.18.
- 86) 稲垣正俊：一般医療機関におけるうつ病へのアプローチ～身体疾患とうつ病・自殺の関係～。平成22年度一関地域保健医療等関係者研修会，岩手，2010.11.24.
- 87) 稲垣正俊：自殺と精神疾患。第2回精神科医療従事者自殺予防研修。岡山，2010.11.30.
- 88) 稲垣正俊：一般医療機関におけるうつ病へのアプローチ。平成22年度自殺対策にかかる看護職研修会，岩手，2010.12.4.
- 89) 稲垣正俊：実効的な自殺対策事業を考える～エビデンス、モニタリング、評価システム～。平成22年度自殺対策企画研修会，愛知，2010.12.9.
- 90) 稲垣正俊：うつ病についての基礎知識～身体疾患とうつ病の関係～。平成22年度花巻地区民生委員児童委員研修会，岩手，2011.1.19.
- 91) 稲垣正俊：一般医療機関におけるうつ病へのアプローチ。平成22年度二戸地区うつ・自殺予防対策かかりつけ医等関係者研修会，岩手，2011.2.14.

- 92) 稲垣正俊：平成22年度第3回自殺対策企画研修会 報告会での助言及び講評，愛知，2011.3.7.
- 93) 勝又陽太郎：パーソナリティ障害の地域支援体制—オーストラリアでの取組例を参考に。第1回自殺予防のための自傷行為とパーソナリティ障害の理解と対応研修，国立精神・神経医療研究センター，東京，2010.11.9.
- 94) 勝又陽太郎：心理学的剖検からみる自殺予防。平成22年度新潟PTSD（外傷後ストレス障害）対策専門研修会，新潟県精神保健福祉協会こころのケアセンター，新潟県長岡市，2011.1.15.
- 95) 勝又陽太郎：窓口での気づきが命を救う。平成22年度職員向け自殺予防対策研修会，埼玉県狭山市保健センター，埼玉県狭山市，2011.1.26.
- 96) 勝又陽太郎：自殺予防の介入ポイントと自死遺族への支援について，平成22年度南魚沼地区協会保健師職能研修会，南魚沼市立ゆきぐに大和病院，新潟県南魚沼市，2011.3.8.
- 97) 川島大輔：自死遺族支援について。平成22年度自死遺族支援研修，神奈川，2010.7.23.

F. その他

- 1) 新潟県自殺予防対策検討会：新潟県自殺予防対策検討会報告書—新潟県の自殺者数減少に向けた取組みについて—。2010.
- 2) 「あいち自殺対策地域白書」作成委員会：あいち自殺対策地域白書～地域力強化を目指して～。2010.

Ⅲ 研 修 実 績

平成 2 2 年度研修報告

研究所事務室

精神保健研究所における研修は、国、地方公共団体、精神保健福祉法第 19 条の規定による指定病院等において精神保健の業務に従事する医師、保健師、看護師、作業療法士、臨床心理業務に従事する者、精神科ソーシャルワーカー等を対象に、精神保健技術者として必要な資質の向上を図ることを目的として、精神保健各般にわたり必要な知識及び技術の研修を行うものである。平成 22 年度には、精神科医療評価・均てん化研修、発達障害早期総合支援研修、精神保健指導課程研修、心理職自殺予防研修、発達障害支援医学研修（2 回）、司法精神医学研修、PTSD 医療研修、自殺総合対策企画研修、摂食障害治療研修、薬物依存臨床医師研修、薬物依存臨床看護等研修、精神科医療従事者自殺予防研修（2 回）、発達障害精神医療研修、アウトリーチによる地域ケアマネジメント並びに訪問型生活訓練研修、自殺予防のための自傷行為とパーソナリティ障害の理解と対応研修、摂食障害看護研修、犯罪被害者メンタルケア研修、ACT 研修、の計 20 回の研修を合計 1,015 名に対して実施した。

《精神科医療評価・均てん化研修》

平成22年6月14日から6月15日まで、第4回精神科医療評価・均てん化研修を実施し、「精神疾患治療を担う精神科救急・急性期医療施設をとりまく現状を理解し、精神科医療の質を高めるための専門的知識および技能を修得すること」を主題に、精神科救急・急性期医療施設において精神科診療に従事している医師、看護師等39名に対して研修を行った。

課程主任：伊藤 弘人 課程副主任：野田 寿恵

6月14日(月)

精神保健医療福祉の動向	川島 邦裕
抗精神病薬の定期処方と臨時処方	藤田 純一
精神科救急における医療の質的向上の取り組み	平田 豊明
<u>医療の質：行動制限の最適化とチーム医療</u>	
隔離・身体拘束最小化のためのコア戦略	杉山 直也
行動制限調査研究から最適化を考える	野田 寿恵
行動制限最小化認定看護師の活動	浅川 佳則
eCODO イーコード（行動制限最適化データベースソフト）の使用経験から	富田敦
総合討論	等々力 信子

6月15日(火)

臨床研究	中林 哲夫
国立精神・神経医療研究センター病院における院内感染対策	平井 久美子
精神科医療における院内感染対策：インフルエンザとノロウイルスを中心に	山内 勇人
<u>精神科医による精神障害者の身体管理</u>	
抗精神病薬と糖尿病	三澤 史斉
精神障害者の糖尿病	峯山 智佳
精神障害者の循環器疾患	鈴木 豪
精神障害者の消化器系疾患	大和 滋
精神障害者の外科系疾患	三山 健司

講師名簿

伊藤 弘人	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所社会精神保健研究部部长
野田 寿恵	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所社会精神保健研究部室長
川島 邦裕	厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部精神・障害保健課課長補佐
藤田 純一	神奈川県立こども医療センター医長
平田 豊明	静岡県立こころの医療センター院長
杉山 直也	財団法人復康会沼津中央病院副院長

Ⅲ 研 修 実 績

浅川 佳則	医療法人長尾会ねや川サナトリウム室長
富田 敦	財団法人復康会沼津中央病院病棟看護係長
等々力 信子	国立精神・神経医療研究センター病院看護師長
中林 哲夫	国立精神・神経医療研究センター病院治験管理室室長
平井 久美子	国立精神・神経医療研究センター病院感染管理看護師
山内 勇人	松山記念病院医師
三澤 史斉	山梨県立北病院医師
峯山 智佳	国立国際医療研究センター国府台病院医師
鈴木 豪	東京女子医科大学循環器内科学医師
大和 滋	国立精神・神経医療研究センター病院総合内科部長
三山 健司	国立精神・神経医療研究センター病院総合外科部長

《発達障害早期総合支援研修》

平成22年6月23日から6月25日まで、第5回発達障害早期総合支援研修を実施し、「発達障害支援における早期発見の意義とその方法、地域における早期からの発達発見・支援の実際」を主題に、各自治体において、乳幼児健診に携わる医師および保健師で、発達障害支援について責任的立場にある者72名に対して研修を行った。 課程主任：神尾 陽子 課程副主任：井口 英子

6月23日(水)

発達障害者支援事業について	日詰 正文
発達障害における早期発見と早期介入の意義：ライフステージの観点から	神尾 陽子
育児支援という観点からみた早期介入の意義：発達支援シートの導入	安達 潤
地域における早期介入の実際：児童精神科クリニックと地域の連携	中島 洋子

6月24日(木)

乳幼児期の発達チェックポイント	神尾 陽子
乳幼児の対人コミュニケーション行動アセスメント実習Ⅰ	稲田 尚子
乳幼児の対人コミュニケーション行動アセスメント実習Ⅱ	黒田 美保
親の気づきのために：子どもの特性を親に伝える	辻井 弘美
地域における早期療育の実際：療育センターの役割	本田 秀夫

6月25日(金)

自治体における乳幼児健診を活用した早期発見・早期支援システムづくり	瀬野 勝久
自治体でのハイリスク児スクリーニングの実際	神尾 陽子
ペアレント・トレーニングの実際	辻井 正次

講師名簿

神尾 陽子	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所児童・思春期精神保健研究部部長
日詰 正文	厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部精神・障害保健課発達障害対策専門官
安達 潤	北海道教育大学旭川校 教育発達専攻教授
中島 洋子	まな星クリニック 児童精神科医 院長
稲田 尚子	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所児童・思春期精神保健研究部外来研究員
黒田 美保	東海学院大学人間関係学部准教授
辻井 弘美	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所児童・思春期精神保健研究部流動研究員
本田 秀夫	横浜市西部地域療育センターセンター長
瀬野 勝久	舞鶴市福祉部子ども支援課主査
辻井 正次	中京大学大学院社会学研究科教授

《精神保健指導課程研修》

平成22年6月30日から7月2日まで、第47回精神保健指導課程研修を実施し、「精神保健医療福祉の改革、自殺予防対策の普及等、精神保健福祉行政の課題に取り組むための、地域精神保健福祉活動の新たな視点を提供する。」を主題に、都道府県（指定都市）等の精神保健福祉担当部署において精神保健福祉行政に携わっている者、医師、精神保健福祉士、保健師等26名に対して研修を行った。
 課程主任：竹島 正 課程副主任：松本 俊彦・立森 久照

6月30日(水)

精神保健福祉行政 林 修一郎
 施策と評価 船崎 初美／吉田 一郎／埴 和徳／山谷 清志

7月1日(木)

困窮者のメンタルヘルス問題 森川 すいめい／池田 亜衣／的場 由木
 ひきこもり 井出 宏／大場 義貴／近藤 直司

7月2日(金)

措置入院の問題 金子 和夫／金田一 正史／吉住 昭
 こころの健康政策のあり方 岡崎 祐士

講師名簿

竹島 正 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所精神保健計画研究部部長
 立森 久照 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所精神保健計画研究部室長
 川野 健治 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所精神保健計画研究部室長
 松本 俊彦 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所精神保健計画研究部室長
 林 修一郎 厚生労働省社会援護局障害保健福祉部精神・障害保健課課長補佐
 船崎 初美 愛知県障害福祉課こころの健康推進室理事
 吉田 一郎 東京都福祉保健局障害者施策推進部精神保健・医療課係長
 埴 和徳 宇都宮保護観察所社会復帰調整官
 山谷 清志 同志社大学 教授
 森川 すいめい 久里浜アルコール症センター/ぼとむあっぷ研究会医師
 池田 亜衣 東京都北区社会福祉協議会権利擁護センター主事
 的場 由木 特定非営利活動法人自立支援センターふるさとの会保健師
 井出 宏 萌の会 会長
 大場 義貴 聖隷クリストファー大学准教授
 近藤 直司 山梨県精神保健福祉センター所長
 金子 和夫 京都府精神保健福祉総合センター副会長
 金田一 正史 千葉県健康福祉部障害福祉課精神保健福祉推進室副主幹
 吉住 昭 国立病院機構花巻病院院長
 岡崎 祐士 東京都立松沢病院院長

《心理職自殺予防研修》

平成22年7月5日から7月6日まで、第1回心理職自殺予防研修を実施し、「自殺のアセスメントと基本的対応、関連する精神科診断、薬物療法の知識、ソーシャルワーク等の基礎知識の習得」を主題に、精神科医療機関等で働く心理職等、60名に対して研修を行った。

課程主任：川野 健治 課程副主任：竹島 正・松本 俊彦・稲垣 正俊

7月5日(月)

自殺関連行動の理解と対応の基礎	松本 俊彦
精神科診断と薬物療法の理解	稲垣 正俊
病院内での自殺対策(postvention 中心)	川野 健治
CP と自殺予防(集団討議)	

霜山 孝子・武地 美保子・中村 原子・花村 温子・福田 由利・長嶋 あけみ

7月6日(火)

心理療法(CBT)と自殺念慮	遊佐 安一郎
ソーシャルワーク	伊東 秀幸
総括	川野 健治

講師名簿

竹島 正	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所自殺予防総合対策センター
松本 俊彦	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所自殺予防総合対策センター
川野 健治	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所自殺予防総合対策センター
稲垣 正俊	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所自殺予防総合対策センター
霜山 孝子	駿河台日本大学病院心理士
武地 美保子	医療法人財団厚生協会大泉病院 心理士
中村 原子	東京女子医科大学東医療センター 心理士
花村 温子	埼玉社会保険病院医療保健専門委員
福田 由利	医療法人社団八葉会大石記念病院心理士
長嶋 あけみ	東京大学ハラスメント相談所 相談員
遊佐 安一郎	長谷川メンタルヘルス研究所 所長
伊東 秀幸	田園調布学園大学 人間福祉学部 教授

《発達障害支援医学研修》

平成 22 年 7 月 7 日から 7 月 8 日まで、第 9 回発達障害支援医学研修を実施し、「発達障害の診断・治療と支援の実際」を主題に、病院、保健所、発達障害支援センター等に勤務し発達障害に関心を有する医師、特に指導について責任的立場にある者 41 名に対して研修を行った。

課程主任：稲垣 真澄 課程副主任：井上 祐紀・軍司 敦子

7月7日(水)

厚生労働省における発達障害支援施策	日詰 正文
発達障害に対する治療・支援の考え方	齋藤 万比古
アスペルガー症候群の理解と対応	市川 宏伸
発達障害者の社会参加・就労支援と余暇支援	梅永 雄二
途切れのない支援システムの構築－三重県における現状と今後の課題	中村 みゆき

7月8日(木)

自閉症のコミュニケーション指導：PECS を使用して分かったこと・学んだこと	山根 希代子
外来で役立つ ASD 児の診かた	林 隆
特別支援教育の現状と ICF 活用の可能性	西牧 謙吾
発達障害のある人の弁護：連携の実際と医師に望むこと	西村 武彦
特異的発達障害の診断・治療ガイドラインの紹介	稲垣 真澄

講師名簿

稲垣 真澄	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所知的障害研究部部長
井上 祐紀	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所知的障害研究部室長
軍司 敦子	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所知的障害研究部室長
日詰 正文	厚生労働省社会・援護局 障害保健福祉部課長
齋藤 万比古	国立国際医療研究センター国府台病院部長
市川 宏伸	東京都立小児総合医療センター顧問
梅永 雄二	宇都宮大学 教育学部教授
中村 みゆき	三重県立小児（こども）心療センター あすなろ学園室長
山根 希代子	社会福祉法人 広島市社会福祉事業団所長
林 隆	山口県立大学 看護栄養学部教授
西牧 謙吾	独立行政法人国立特別支援教育総合研究所上席総括研究員
西村 武彦	道央法律事務所北海道障害者人権ネット事務局事務局長

《司法精神医学研修》

平成22年7月13日から7月16日まで、第5回司法精神医学研修を実施し、「重大な他害行為を行った精神障害者に対する介入を適切に行うことができる技能の修得」を主題に、指定医療機関や行刑施設、地域(保健所等)において精神医療に従事している医師、臨床心理技術者、看護師、精神保健福祉士等48名に対して研修を行った。 課程主任:吉川 和男

7月13日(火)

司法精神医学概論	吉川 和男
法と制度に関する概論	吉川 和男
精神鑑定	岡田 幸之
司法精神医療・福祉におけるソーシャルワーカーの役割	三澤 孝夫

7月14日(水)

HCR-20(暴力のリスク・アセスメント)ワークショップ(1)(2)(3)(4)	吉川 和男
------------------------------------------	-------

7月15日(木)

触法精神障害者に対する認知行動療法(1)(2)(3)(4)	菊池 安希子・朝波 千尋
-------------------------------	--------------

7月16日(金)

触法精神障害者に対する内省プログラム	今村 扶美
医療観察法病棟におけるセキュリティーについて	佐藤 功
司法精神看護の実際と課題	山口 しげ子
医療観察法—処遇の概要と対象者の特性—	安藤 久美子
触法精神障害者の認知神経科学	福井 裕輝

講師名簿

吉川 和男	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所司法精神医学研究部部長
岡田 幸之	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所司法精神医学研究部室長
安藤 久美子	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所司法精神医学研究部室長
菊池 安希子	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所司法精神医学研究部室長
福井 裕輝	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所司法精神医学研究部室長
三澤 孝夫	国立精神・神経医療研究センター病院精神保健福祉士
朝波 千尋	国立精神・神経医療研究センター病院臨床心理技術者
岩崎 さやか	国立精神・神経医療研究センター病院臨床心理技術者
今村 扶美	国立精神・神経医療研究センター病院臨床心理技術者
佐藤 功	国立精神・神経医療研究センター病院副看護師長
山口 しげ子	国立精神・神経医療研究センター病院看護師長

《PTSD医療研修》

平成 22 年 7 月 22 日，第 1 回 PTSD 医療研修を実施し，「PTSD についての医療知識の研修」を主題に，精神科等の医師，病医院で勤務し医師と共同で治療に当たる医療従事者 32 名に対して研修を行った。
 課程主任：金 吉晴

7月22日(木)

PTSD の概念と病態	金 吉晴・中島 聡美
PTSD の症状評価と診断	金 吉晴・中島 聡美
PTSD の治療	金 吉晴・中島 聡美
社会的援助と法的制度	金 吉晴・中島 聡美

講師名簿

金 吉晴	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所成人精神保健研究部部長
中島 聡美	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所成人精神保健研究部室長

《自殺総合対策企画研修》

平成22年8月25日から8月27日まで、第4回自殺総合対策企画研修を実施し、「地方自治体における自殺対策の計画づくりの企画立案能力の向上」を主題に、都道府県（指定都市）等の精神保健福祉行政でキーパーソンの役割を担う中堅者または指導者101名に対して研修を行った。

課程主任：竹島 正 課程副主任：松本 俊彦・川野 健治・稲垣 正俊

8月25日(水)

自殺対策の視点 竹島 正
自殺対策の基礎知識 高橋 祥友

シンポジウム「国の自殺対策はどう進むか」

シンポジスト：齊藤 馨／中谷 祐貴子／櫻井 秀和

自殺対策研究協議会「地域における自殺の実態把握の試み」（自由参加）

（自殺予防総合対策センター／全国精神保健福祉センター長会主催）座長：松本 俊彦・松本 晃明

報告：山田 美緒／畑 哲信／塚本 哲司

8月26日(木)

「地域保健活動と自殺予防」座長：宇田 英典・桑原 寛

シンポジスト：眞崎 直子／中山 裕子／生水 裕美／宇田 英典

「地域医療/地域精神医療と自殺予防」座長：松本 俊彦・辻本 哲士

シンポジスト：松本 俊彦／辻本 哲士／山口 和浩／河内 ゆかり

自殺対策研究協議会「啓発・事業のあり方を考える」（自由参加）

（自殺予防総合対策センター／全国精神保健福祉センター長会主催）座長：稲垣 正俊・小泉 典章

報告：小泉 典章／稲垣 正俊／竹島 正

8月27日(金)

「地域連携」座長：川野 健治・秋田 宏弥

シンポジスト：秋田 宏弥／山本 繁樹／上岡 陽江／荒木 守／奥田 浩二

「人材育成」座長：川野 健治・白川 教人

シンポジスト：川野 健治／白川 教人／三宅 康史／大塚 耕太郎

講師名簿

竹島 正 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所自殺予防総合対策センター
松本 俊彦 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所自殺予防総合対策センター
川野 健治 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所自殺予防総合対策センター室長
稲垣 正俊 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所自殺予防総合対策センター室長
高橋 祥友 防衛医科大学校 防衛医学研究センター教授
大塚 俊弘 長崎県こども・女性・障害者支援センター所長

齊藤 馨	内閣府自殺対策推進室企画官
中谷 祐貴子	厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部精神・障害保健課課長補佐
櫻井 秀和	金融庁総務企画局企画課調整官
宇田 英典	鹿児島県始良保健所所長
桑原 寛	神奈川県精神保健福祉センター所長
眞崎 直子	日本赤十字広島看護大学地域看護学領域准教授
中山 裕子	向島保健センター保健師
生水 裕美	野洲市市民部市民生活相談室主査
辻本 哲士	滋賀県精神保健福祉センター所長
山口 和浩	横浜カメラiahospital 自死遺族支援ネットワークRe代表
河内 ゆかり	京都市こころの健康増進センター係長
秋田 宏弥	明生病院副院長
山本 繁樹	立川市南部西ふじみ地域包括支援センターセンター長
上岡 陽江	ダルク女性ハウス主宰者
荒木 守	全日本断酒連盟理事
奥田 浩二	市川市福祉部福祉事務所主幹
白川 教人	横浜市こころの健康相談センター所長
三宅 康史	昭和大学医学部救急医学講座准教授
大塚 耕太郎	岩手医科大学神経精神科学講座講師

《摂食障害治療研修》

平成22年8月31日から9月3日まで、第8回摂食障害治療研修を実施し、「摂食障害の病態と治療に関する最新の知見」を主題に、病院、保健所、精神保健福祉センター等に勤務し、摂食障害に関心を有する医師、臨床心理士、精神保健福祉士、保健師41名に対して研修を行った。

課程主任：小牧 元 課程副主任：安藤 哲也

8月31日(火)

摂食障害病態・治療概論	小牧 元
精神障害・パーソナリティ障害を合併する摂食障害	永田 利彦
セルフヘルプ	武田 綾

9月1日(水)

小児の摂食障害	宇佐美 政英
症例検討	石川 俊男・田村 奈穂
家族療法的介入	中村 伸一

9月2日(木)

身体的合併症・身体的管理	鈴木(堀田) 真理
心理教育的グループ	伊藤 順一郎・小原 千郷
摂食障害とアルコール・薬物などのアディクション	鈴木 健二

9月3日(金)

入院治療	瀧井 正人
認知行動療法	切池 信夫

講師名簿

小牧 元	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所心身医学研究部部長
安藤 哲也	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所心身医学研究部室長
永田 利彦	大阪市立大学大学院医学研究科神経精神医学准教授
武田 綾	NPO 法人のびの会相談室
宇佐美 政英	国立国際医療研究センター国府台病院児童精神科医師
石川 俊男	国立国際医療研究センター国府台病院心療内科部長
中村 伸一	中村心理療法研究室室長
鈴木 真理	政策研究大学院大学保健管理センター教授
伊藤 順一郎	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所社会復帰研究部部長
小原 千郷	東京女子医科大学附属女性生涯健康センター臨床心理士
鈴木 健二	鈴木メンタルクリニック院長
瀧井 正人	九州大学病院心療内科講師
切池 信夫	大阪市立大学神経精神医学教授

《薬物依存臨床医師研修》

《薬物依存臨床看護等研修》

平成 22 年 9 月 7 日から 9 月 10 日まで、第 24 回薬物依存臨床医師研修ならびに第 12 回薬物依存臨床看護等研修を実施し、「薬物依存症概念の理解と薬物依存症に対する臨床的対応の普及」を主題に、精神科病院、精神保健福祉センター等に勤務する医師 15 名、看護師等 34 名に対して研修を行った。

課程主任：和田 清 課程副主任：松本 俊彦・船田 正彦

9月7日(火)

「薬物依存に関する基礎知識」と「わが国の薬物乱用・依存の現状と課題」	和田 清
行動薬理学からみた薬物依存（精神依存，身体依存）	船田 正彦
有機溶剤乱用・依存の現状と臨床	和田 清

9月8日(水)

ベンゾジアゼピン系薬物の基礎と臨床	石郷岡 純一
薬物依存症者に対する心理療法	森田 展彰
薬物関連精神障害者の司法的問題とその対応	松本 俊彦
覚せい剤依存・精神病の臨床	小沼 杏坪

9月9日(木)

精神保健福祉センターにおける薬物依存への取り組み	五十嵐 雅美
<u>【埼玉県立精神医療センターへ移動】病棟見学</u>	
医療施設における薬物依存の治療（医師）	成瀬 暢也
医療施設における薬物依存の治療(看護)	井浦 澄子

9月10日(金)

地域における薬物依存の治療：ダルクと治療共同体について	和田 清一
薬物依存からの回復者による自助活動・ダルクの取り組み	栗坪千明・栃原晋太郎
大麻によって発現する動物の異常行動	三島 健一
覚せい剤精神疾患の生物学的病態	曾良 一郎

講師名簿

和田 清	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部部長
船田 正彦	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部室長
石郷岡 純	東京女子医科大学医学部精神医学講座教授
森田 展彰	筑波大学大学院人間総合科学研究科講師
松本 俊彦	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部室長
小沼 杏坪	医療法人せのがわ KONUMA 記念広島薬物依存研究所所長
五十嵐 雅美	東京都多摩総合精神保健福祉センター広報援助課相談係長
成瀬 暢也	埼玉県立精神医療センター副病院長

《精神科医療従事者自殺予防研修》

平成22年9月14日から9月15日まで、第1回精神科医療従事者自殺予防研修を実施し、「精神科医療における自殺予防の取組の充実」を主題に、医師を含む医療従事者74名に対して研修を行った。

課程主任：稲垣 正俊 課程副主任：竹島 正・松本 俊彦・川野 健治

9月14日(火)

我が国の自殺及び自殺対策の実態	竹島 正
自殺と精神疾患	稲垣 正俊
自傷行為・過量服薬を繰り返す患者への対応	松本 俊彦
チーム医療：精神科医師と心理士等との連携	川野 健治

9月15日(水)

アルコール・薬物依存症の自殺予防	松本 俊彦
精神科病院における自殺のリスクとその予防	森 隆夫
指定発言：太田 順一郎／野口 正行	
事例から学ぶこと	佐藤 智幸
<u>精神科医療における自殺とその予防</u>	全体司会：稲垣 正俊

スモールグループディスカッション

(精神科医療における自殺予防の役割とその具体例／各受講者の自殺要望の観点／その他)

講師名簿

竹島 正	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所自殺予防総合対策センター
稲垣 正俊	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所自殺予防総合対策センター室長
松本 俊彦	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所自殺予防総合対策センター
川野 健治	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所自殺予防総合対策センター室長
森 隆夫	あいせい紀年病院理事長
太田 順一郎	岡山市こころの健康センター所長
野口 正行	岡山県精神保健福祉センター副参事
佐藤 智幸	上山病院看護師

《発達障害精神医療研修》

平成22年9月29日から10月1日まで、第3回発達障害精神医療研修を実施し、「未診断の発達障害を抱える青年・成人患者の鑑別診断と処遇法に関する幅広い臨床ニーズに対応する最新の知見」を主題に、各自治体において、精神医療の中核となる機関（精神科病院、総合病院精神科、精神保健福祉センター等）に勤務する精神科医39名に対して研修を行った。

課程主任：神尾 陽子 課程副主任：井口 英子

9月29日(水)

発達障害者支援事業について	日詰 正文
成人期の発達障害の臨床的問題について	神尾 陽子
発達障害とパーソナリティ	奥寺 崇
重ね着症候群：精神科診療における鑑別の視点	内海 健

9月30日(木)

広汎性発達障害成人の脳画像研究からわかること	山末 英典
広汎性発達障害児・者の認知研究からわかること	神尾 陽子
発達障害成人の疫学	土屋 政雄
発達障害成人の鑑別診断について	飯田 順三
発達障害を有する成人女性の臨床的諸問題	笠原 麻里

10月1日(金)

精神科医療現場での広汎性発達障害の触法例	井口 英子
ひきこもり事例にみられる高機能広汎性発達障害の特徴	近藤 直司
成人期の広汎性発達障害の診断と告知	内山 登紀夫

講師名簿

神尾 陽子	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所児童・思春期精神保健研究部部長
日詰 正文	厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部精神・障害保健課 発達障害対策専門官
奥寺 崇	クリニックおくでら院長
内海 健	東京芸術大学保健管理センター准教授
山末 英典	東京大学脳神経医学専攻臨床神経精神医学講座准教授
土屋 政雄	労働安全衛生総合研究所研究員
飯田 順三	奈良県立医科大学精神医学講座教授
笠原 麻里	国立成育医療研究センターこころの診療部医長
井口 英子	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所児童・思春期精神保健研究部
近藤 直司	山梨県立精神保健福祉センター所長
内山 登紀夫	福島大学人間発達文化学類教授

《アウトリーチによる地域ケアマネジメント並びに訪問型生活訓練研修》

平成22年10月19日から10月22日まで、第2回アウトリーチによる地域ケアマネジメント並びに訪問型生活訓練研修を実施し、「アウトリーチによる地域ケアマネジメント並びに訪問型生活訓練のスキル向上プログラム」を主題に、障害者自立支援法における社会福祉サービスの事業者、医療機関、市町村等に属する医療・社会福祉従事者62名に対して研修を行った。

課程主任：伊藤 順一郎

10月19日(火)

オリエンテーション	吉田 光爾
障害者自立支援法の中での生活訓練の位置づけ	武田 牧子
訪問型サービスを地域で展開するために（グループディスカッション）	伊藤 順一郎

10月20日(水)

障害を持つ人のリカバリーとは	久永 文恵
ストレングスモデルのケアプラン作り	佐藤 光正

10月21日(木)

訪問活動のニーズと実際	遠藤 紫乃・吉田 光一
ケアプランを地域で作るために	松尾 明子・遠藤 紫乃
認知行動療法と地域生活スキル	佐藤 さやか

10月22日(金)

訪問型生活訓練事業の運営の実際～市川市・鶴岡市形の実践～	松尾 明子・佐原 和紀
------------------------------	-------------

講師名簿

伊藤 順一郎	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所社会復帰研究部部长
吉田 光爾	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所社会復帰研究部室長
武田 牧子	社会福祉法人南高愛隣会 東京事務所所長
久永 文恵	特定非営利活動法人地域精神保健福祉機構・COMHBO
佐藤 光正	駒澤大学文学部社会学科社会福祉学専攻准教授
遠藤 紫乃	特定非営利活動法人ほっとハート 生活訓練事業らいふ管理者
松尾 明子	基幹形支援センターえくる相談支援専門員
佐藤 さやか	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所社会復帰研究部
佐原 和紀	精神障害者地域生活支援センター翔（はばたき）相談支援専門員

《自殺予防のための自傷行為とパーソナリティ障害の理解と対応研修》

平成 22 年 11 月 8 日から 11 月 9 日まで、第 1 回自殺予防のための自傷行為とパーソナリティ障害の理解と対応研修を実施し、「自傷を繰り返す者、あるいは、パーソナリティ障害を抱える者に対する陰性感情を克服し、その自殺リスクの高さを理解したうえで、適切な対応ができるようになること」を主題に、医療機関、自治体における相談業務従事者等 99 名に対して研修を行った。

課程主任：松本 俊彦 課程副主任：竹島 正・川野 健治・稲垣 正俊

11月8日(月)

オリエンテーション	松本 俊彦
効果測定について	川島 大輔
自殺予防のためのパーソナリティ障害の理解と対応	林 直樹
自傷行為・過量服薬の理解と対応	松本 俊彦
パーソナリティ障害に併存する摂食障害の理解と対応	鈴木 健二
事例検討～パーソナリティ障害の援助	小林 桜児・大嶋 栄子
(自由参加) 若者の自傷予防プログラム DVD 視聴	松本 俊彦

11月9日(火)

境界性パーソナリティ障害に対する弁証法的行動療法	遊佐 安一郎
地域における女性の境界性パーソナリティ障害の支援	上岡 陽江
パーソナリティ障害の地域支援体制：オーストラリアでの取組例を参考に	勝又 陽太郎
質疑応答	松本 俊彦

講師名簿

竹島 正	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所自殺予防総合対策センター
松本 俊彦	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所自殺予防総合対策センター
川島 大輔	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所自殺予防総合対策センター研究員
林 直樹	東京都立松沢病院部長
鈴木 健二	鈴木メンタルクリニック院長
小林 桜児	国立精神・神経医療研究センター病院医師
大嶋 栄子	NPO法人リカバリー代表
遊佐 安一郎	長谷川メンタルヘルス研究所所長
上岡 陽江	ダルク女性ハウス代表
勝又 陽太郎	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所自殺予防総合対策センター

《精神科医療従事者自殺予防研修》

平成22年11月30日から12月1日まで、第2回精神科医療従事者自殺予防研修を実施し、「精神科医療における自殺予防の取組の充実」を主題に、医師を含む医療従事者75名に対して研修を行った。

課程主任：竹島 正 課程副主任：松本 俊彦・川野 健治・稲垣 正俊

11月30日(火)

オリエンテーション

竹島 正／堀井 茂男／野口 正行／岩本 真弓

竹島 正・堀井 茂男－我が国の自殺及び自殺対策の実態

稲垣 正俊・藤田 健三－自殺と精神疾患

シンポジウム：自傷行為・過量服薬を繰り返す患者への対応

野崎 哲／矢敷 朝代／和田 健／山田 妃沙子

司会：太田 順一郎／實金 健

川野 健治・野口 正行－チーム医療：精神科医師と心理士等との連携

12月1日(水)

アルコール・薬物依存症の自殺予防

司会 柳田 公佑・河本 泰信

精神科病院における自殺のリスクとその予防

司会 森 隆夫・竹島 正

(司会)

事例から学ぶこと

佐藤 智幸－

スモールグループディスカッション：精神科医療における自殺とその予防 全体司会：稲垣 正俊

佐藤 智幸／藤田 健三／太田 順一郎／野口 正行／竹島 正／川野 健治

講師名簿

竹島 正 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所自殺予防総合対策センター

松本 俊彦 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所自殺予防総合対策センター

川野 健治 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所自殺予防総合対策センター室長

稲垣 正俊 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所自殺予防総合対策センター室長

堀井 茂男 財団法人慈圭会 慈圭病院院長

野口 正行 岡山県精神保健福祉センター副参事

岩本 真弓 岡山市こころの健康センター係長

藤田 健三 岡山県精神保健福祉センター所長

野崎 哲 岡山済生会総合病院救急科医長

矢敷 朝代 岡山市立市民病院救急担当看護部長

Ⅲ 研 修 実 績

和田 健 広島市民病院精神科部長
山田 妃沙子 関西医科大学医学部精神神経学講座精神保健福祉士
太田 順一郎 岡山市こころの健康センター所長
實金 健 総合病院岡山赤十字病院救命救急センターセンター長
柳田 公佑 ゆうクリニック院長
河本 泰信 岡山県精神科医療センター院長補佐
森 隆夫 あいせい紀年病院理事長
佐藤 智幸 上山病院看護部看護師

《犯罪被害者メンタルケア研修》

平成23年1月17日から1月19日まで、第5回犯罪被害者メンタルケア研修を実施し、「犯罪被害者・遺族の心理についての基本的な知識、および臨床現場での適切な治療対応」を主題に、精神科医療機関、精神保健福祉センター、保健所、犯罪被害者支援関連機関に勤務する医療・臨床心理従事者等29名に対して研修を行った。 課程主任：金 吉晴 課程副主任：中島 聡美

1月17日(月)

犯罪被害者等基本法および基本計画における精神医療の役割	河原 誉子
警察による犯罪被害者支援	白野 邦昌
犯罪被害者と刑事司法	柑本 美和
犯罪被害者の心理（精神疾患を中心に）	中島 聡美

1月18日(火)

犯罪被害者の声：犯罪被害者・遺族そして精神科医として	高橋 幸夫
犯罪被害者遺族の心理	白井 明美
DV被害者への対応	加茂 登志子
子どもの被害者への対応	白川 美也子

1月19日(水)

PTSDの治療	金 吉晴
犯罪被害者への治療対応	小西 聖子
犯罪被害者の事例提示	小西 聖子・中島 聡美
犯罪被害者治療の実際	小西 聖子・中島 聡美

講師名簿

金 吉晴	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所成人精神保健研究部部长
中島 聡美	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所成人精神保健研究部室
河原 誉子	内閣府犯罪被害者等施策推進室参事官
白野 邦昌	警察庁長官官房給与厚生課犯罪被害者支援室課長補佐
柑本 美和	東海大学大学院実務法学研究科准教授
高橋 幸夫	医療法人東浩会石川病院精神科医局部長
白井 明美	国際医療福祉大学大学院 医療福祉学研究科講師
加茂 登志子	東京女子医大女性生涯健康センター所長
白川 美也子	昭和大学医学部精神医学講座特任助教
小西 聖子	武蔵野大学人間関係学部教授

《ACT研修》

平成23年2月1日から2月4日まで、第8回ACT研修を実施し、「包括型地域生活支援プログラム（ACT）の定着のためのプログラム」を主題に、精神科医療機関、精神保健福祉センター、保健所、市町村、社会復帰施設等に勤務する医療従事者、48名に対して研修を行った。

課程主任：伊藤 順一郎 課程副主任：瀬戸屋 雄太郎

2月1日(火)

はじめに～ACTとは～	三品 桂子
リカバリー	久永 文恵
ストレングスモデル	伊藤 順一郎
地域精神保健システムとの関連	吉田 光爾

2月2日(水)

就労支援	香田 真希子・樺島 さおり
家族支援	英 一也・久永 文恵
ACT支援の実態：当事者・家族より	上田 昌広
精神科医の役割	佐竹 直子

2月3日(木)

ケアプランの作成	佐藤 光正
立ち上げ支援	梁田 英麿
認知行動療法のいろは	佐藤 さやか
グループワーク	香田 真希子

2月4日(金)

シンポジウム 全国のACTの取り組み－立ち上げ・チーム 運営司会：伊藤順一郎・久永文恵
 山田 創／内田 有彦／志井田 美幸／櫻井 孝二
 伊藤 順一郎・久永 文恵－クロージングセッション

講師名簿

伊藤 順一郎 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所社会復帰研究部部長
 吉田 光爾 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所社会復帰研究部室長
 英 一也 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所社会復帰研究部研究員
 佐藤 さやか 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所社会復帰研究部研究員
 三品 桂子 花園大学社会福祉学部臨床心理学科（NPO法人京都メンタルケアアクション理事長）教授
 久永 文恵 特定非営利活動法人地域精神保健福祉機構・コンボリハビリテーションカウンセラー
 香田 真希子 特定非営利活動法人地域精神保健福祉機構・コンボ作業療法士
 樺島 さおり 特定非営利活動法人リカバリーサポートセンターACTIPS 訪問看護ステーションACT-J 精神保健福祉士

上田 昌広 特定非営利活動法人リハビリサポートセンターACTIPS 訪問看護ステーションACTJ 精神保健福祉士
佐竹 直子 国立国際医療研究センター国府台病院 精神科医師
佐藤 光正 駒澤大学文学部社会学科社会福祉学専攻准教
梁田 英麿 東北福祉大学せんだんホスピタル S-ACT 精神保健福祉士
山田 創 ぴあクリニック精神保健福祉士
内田 有彦 こころクリニックせいわ院長
志井田 美幸 社会福祉法人町にくらす会理事長
櫻井 孝二 総合病院国保旭中央病院精神保健福祉士

《発達障害支援医学研修》

平成 23 年 2 月 9 日から 2 月 10 日まで、第 10 回発達障害支援医学研修を実施し、「発達障害児に対する医学的介入と社会心理学的支援の実際」を主題に、病院、保健所、発達障害支援センター等に勤務し、発達障害に関心を有する医師、特に指導について責任的立場にある者 26 名に対して研修を行った。
 課程主任：稲垣 真澄 課程副主任：井上 祐紀・軍司 敦子

2月9日(水)

厚生労働省における発達障害支援施策について	日詰 正文
不登校・ひきこもりの子どもへの支援	山崎 透
発達障害治療への CBT（認知行動療法）の可能性	加茂 登志子
地域における発達障害児支援システムの構築（親支援とサポーター養成）	相原 正男
成人 ADHD の診断と治療	宮尾 益知

2月10日(木)

特異的発達障害：学習障害の診断と支援	小枝 達也
自閉症児に対する応用行動分析（ABA）の有効性	小笠原 恵
発達障害の二次障害：児童思春期にみられるサインと対応	清田 晃生
発達障害と司法精神医学の関わり	安藤 久美子

講師名簿

稲垣 真澄	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所知的障害研究部部長
井上 祐紀	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所知的障害研究部室長
軍司 敦子	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所知的障害研究部室長
日詰 正文	厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部発達障害対策専門官
山崎 透	静岡県立こども病院こどもと家族のこころの診療センターセンター長
加茂 登志子	東京女子医科大学附属女性生涯健康センター所長
相原 正男	山梨大学大学院医学工学総合研究部教授
宮尾 益知	独立行政法人国立成育医療研究センター病院発達心理科医長
小枝 達也	国立大学法人鳥取大学 地域学部教授
小笠原 恵	東京学芸大学教育学部准教授
清田 晃生	大分大学医学部小児科医師
安藤 久美子	国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所司法精神医学研究部室長

研修の推移

国立精神衛生研究所			
	36年6月～		54年度～
研 修 課 程	<ul style="list-style-type: none"> ・医学科研修 ・心理学科研修 ・社会福祉学科研修 ・精神衛生指導科研修 	→	<ul style="list-style-type: none"> ・医学課程研修 ・心理学課程研修 ・社会福祉学課程研修 ・精神衛生指導課程研修 ・精神科^テイ^ケ課程研修
			<ul style="list-style-type: none"> ・医学課程研修 ・心理学課程研修 ・社会福祉学課程研修 ・精神衛生指導課程研修 ・精神科^テイ^ケ課程研修

国立精神・神経センター精神保健研究所						
	61年度		62年度～	18年度～	20年度	
研 修 課 程	<ul style="list-style-type: none"> ・医学課程研修 ・心理学課程研修 ・社会福祉学課程研修 ・精神衛生指導課程研修 ・精神科^テイ^ケ課程研修 	→	<ul style="list-style-type: none"> ・医学課程研修 ・心理学課程研修 ・社会福祉学課程研修 ・精神保健指導過程研修 ・精神科^テイ^ケ課程研修 	<ul style="list-style-type: none"> ・精神保健指導過程研修 ・精神科^テイ^ケ課程研修 ・発達障害支援課程研修 ・摂食障害治療課程研修 ・社会復帰リハビリテーション研修 ・ACT研修 ・薬物依存臨床課程研修 ・児童思春期精神医学研修 ・司法精神医学課程研修 ・犯罪被害者メンタルケア研修 	<ul style="list-style-type: none"> ・自殺総合対策企画研修 ・地域自殺対策支援研修 ・心理職等自殺対策研修 ・自殺対策相談支援研修 ・精神保健指導課程研修 ・精神科医療評価・均てん化研修 ・発達障害早期総合支援研修 ・発達障害支援医学研修 ・発達障害精神医療研修 ・摂食障害治療研修 ・摂食障害看護研修 ・社会復帰リハビリテーション研修 ・薬物依存臨床看護研修 ・薬物依存臨床医師研修 ・PTSD精神療法研修 ・犯罪被害者メンタルケア研修 ・司法精神医学研修 ・ACT研修 	<ul style="list-style-type: none"> ・自殺総合対策企画研修 ・地域自殺対策支援研修 ・心理職等自殺対策研修 ・自殺対策相談支援研修 ・精神保健指導課程研修 ・精神科医療評価・均てん化研修 ・発達障害早期総合支援研修 ・発達障害支援医学研修 ・発達障害精神医療研修 ・摂食障害治療研修 ・摂食障害看護研修 ・社会復帰リハビリテーション研修 ・薬物依存臨床看護研修 ・薬物依存臨床医師研修 ・PTSD精神療法研修 ・犯罪被害者メンタルケア研修 ・司法精神医学研修 ・ACT研修 ・アウトリーチによる地域ケアマネジメント並びに訪問型生活訓練研修

独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所	
22年度	
研 修 課 程	<ul style="list-style-type: none"> ・精神科医療評価・均てん化研修 ・発達障害早期総合支援研修 ・精神保健指導課程研修 ・心理職自殺予防研修 ・発達障害支援医学研修 ・司法精神医学研修 ・PTSD医療研修 ・自殺総合対策企画研修 ・摂食障害治療研修 ・薬物依存臨床医師研修 ・薬物依存臨床看護等研修 ・精神科医療従事者自殺予防研修 ・発達障害精神医療研修 ・アウトリーチによる地域ケアマネジメント並びに訪問型生活訓練研修 ・薬物依存臨床医師研修 ・薬物依存臨床看護等研修 ・自殺予防のための自傷行為とパーソナリティ障害の理解と対応研修 ・摂食障害看護研修 ・犯罪被害者メンタルケア研修 ・ACT研修 ・発達障害支援医学研修

Ⅲ 研修実績

平成22年度精神保健に関する技術研修課程

課程名	定員	受講者数	実施日	主任		会場	受講料
				主任	副主任		
(第4回) 精神科医療評価 ・均てん化研修	30	39 (NCNP参加者0人)	H22.6.14 ～H22.6.15 (2日間)	伊藤 弘人 野田 寿恵		小平市	¥15,000
(第5回) 発達障害 早期総合 支援研修	50	72 (NCNP参加者0人)	H22.6.23 ～H22.6.25 (3日間)	神尾 陽子 井口 英子		小平市	無料
(第47回) 精神保健指導 課程研修	60	26 (NCNP参加者0人)	H22.6.30 ～H22.7.2 (3日間)	竹島 正 松本 俊彦 立森 久照		小平市	¥30,000
(第1回) 心理職 自殺予防研修	60	60 (NCNP参加者0人)	H22.7.6 (1日)	川野 健治 竹島 正 松本 俊彦 稲垣 正俊		小平市	無料
(第9回) 発達障害支援 医学研修	60	41 (NCNP参加者0人)	H22.7.7 ～H22.7.8 (2日間)	稲垣 真澄 井上 祐紀 軍司 敦子		小平市	無料
(第5回) 司法精神医学研修	70	48 (NCNP参加者2人)	H22.7.13 ～H22.7.16 (4日間)	吉川 和男		小平市	¥10,000
(第1回) PTSD 医療研修	30	32 (NCNP参加者0人)	H22.7.22 (1日)	金 吉晴		小平市	¥7,000
(第4回) 自殺総合対策 企画研修	100	101 (NCNP参加者0人)	H22.8.25 ～H22.8.27 (3日間)	竹島 正 松本 俊彦 川野 健治 稲垣 正俊		小平市	¥15,000
(第8回) 摂食障害治療研修	40	41 (NCNP参加者0人)	H22.8.31 ～H22.9.3 (4日間)	小牧 元 安藤 哲也		小平市	¥24,000
(第24回) 薬物依存臨床医師研修 (第12回) 薬物依存臨床看護等研修	30 40	15 34 (NCNP参加者0人)	H22.9.7 ～H22.9.10 (4日間)	和田 清 松本 俊彦 船田 正彦		小平市	¥24,000
(第1回) 精神科 医療従事者 自殺予防研修	80	74 (NCNP参加者1人)	H22.9.14 ～H22.9.15 (2日間)	稲垣 正俊 竹島 正 松本 俊彦 川野 健治		小平市	無料
(第3回) 発達障害 精神医療研修	70	39 (NCNP参加者0人)	H22.9.29 ～H22.10.1 (3日間)	神尾 陽子 井口 英子		小平市	無料
(第2回) アウトリーチによる地域ケアマネジメント並び に訪問型生活訓練研修	50	62 (NCNP参加者0人)	H22.10.19 ～H22.10.22 (4日間)	伊藤 順一郎		小平市	¥20,000
(第1回) 自殺予防のための 自傷行為と パーソナリティ障害の 理解と対応研修	60	99 (NCNP参加者0人)	H22.11.8 ～H22.11.9 (2日間)	松本 俊彦 竹島 正 川野 健治 稲垣 正俊		小平市	無料
(第7回) 摂食障害看護研修	30	54 (NCNP参加者0人)	H22.11.10 ～H22.11.12 (3日間)	小牧 元 安藤 哲也		小平市	¥18,000
(第2回) 精神科 医療従事者 自殺予防研修	80	75 (NCNP参加者0人)	H22.11.30 ～H22.12.1 (2日間)	竹島 正 松本 俊彦 川野 健治 稲垣 正俊		岡山県	無料
(第5回) 犯罪被害者 メンタルケア研修	30	29 (NCNP参加者3人)	H23.1.17 ～H23.1.19 (3日間)	金 吉晴 中島 聡美		小平市	¥15,000
(第8回) ACT研修	40	48 (NCNP参加者2人)	H23.2.1 ～H23.2.4 (4日間)	伊藤 順一郎 瀬戸屋雄太郎		小平市	¥20,000
(第10回) 発達障害支援 医学研修	60	26 (NCNP参加者0人)	H23.2.9 ～H23.2.10 (2日間)	稲垣 真澄 井上 祐紀 軍司 敦子		小平市	無料

参加者計

1,015

精神保健研究所年報 第24号

平成22年度精神保健に関する技術研修課程実施計画表

当センターの
受付期間

研修期間

課程名	定員	願 書 受 付 期 間												研 修 期 間			主任 副主任	会 場	受講料
		22年 3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	23年 1月	2月	3月					
(第4回) 精神科医療評価 ・均てん化研修	30		5(月) 6(木)		14(月) 15(火)												伊藤 弘人 野田 寿恵	小平市	¥15,000
(第5回) 発達障害早期総合支援研修	50		12(月) 7(金)		23(水) 25(金)												神尾 陽子 井口 英子	小平市	無料
(第17回) 精神保健指導課程研修	60		19(月) 14(金)		30(水) 2(金)												竹島 正 松本 俊彦 立森 久照	小平市	¥30,000
(第9回) 発達障害支援医学研修	60		6(木) 25(火)		7(水) 8(木)												稲垣 真澄 井上 祐紀 軍司 敦子	小平市	無料
(第5回) 司法精神医学研修	70		10(月) 28(金)		13(火) 16(金)												吉川 和男	小平市	¥10,000
(第1回) PTSD医療研修	30		10(月) 25(火)		22(水)												金 吉晴	小平市	¥7,000
(第4回) 自殺総合対策企画研修	100				18(金) 8(木)		25(水) 27(金)										竹島 正 松本 俊彦 川野 健治 稲垣 正俊	小平市	¥15,000
(第8回) 摂食障害治療研修	40			7(月) 30(水)			31(金) 3(金)										小牧 元 安藤 哲也	小平市	¥24,000
(第24回) 薬物依存臨床医師研修 (第12回) 薬物依存臨床看護等研修	30 40				21(月) 9(金)		7(火) 10(金)										和田 清 松本 俊彦 船田 正彦	小平市	¥24,000
(第3回) 発達障害精神医療研修	70				26(月) 13(金)		29(水) 1日(金)										神尾 陽子 井口 英子	小平市	無料
(第2回) アウトリーチによる地域ケアマネジメント並びに訪問型生活訓練研修	50				22(水) 20(金)		19(火) 22(金)										伊藤 順一郎	小平市	¥20,000
(第23回) 薬物依存臨床医師研修 (第10回) 薬物依存臨床看護等研修	40				13(月) 31(金)		29(火) 2(金)										和田 清 尾崎 茂 船田 正彦	小平市	
(第7回) 摂食障害看護研修	30					6(月) 24(金)		10(水) 12(金)									小牧 元 安藤 哲也	小平市	¥18,000
(第5回) 犯罪被害者メンタルケア研修	30						25(月) 19(金)					17(月) 19(水)					金 吉晴 中島 聡美	小平市	¥15,000
(第8回) ACT研修	40						1(月) 30(火)					1(火) 4(金)					伊藤 順一郎 瀬戸屋雄太郎	小平市	¥20,000
(第10回) 発達障害支援医学研修	60										1(水) 24(金)		9(水) 10(木)				稲垣 真澄 井上 祐紀 軍司 敦子	小平市	無料

…今回追加した研修

会場：小平市…国立精神・神経医療研究センター研究所3号館及び研究所本館

H22 情報発信セグメント 運営費交付金	80,450千円
・自殺ネットワーク会議開催経費	2,230千円
・情報発信	18,718千円
・※認知行動療法研修	10,804千円
・パーソナリティ障害専門研修	10,804千円
・心理職等精神保健医療研修	17,747千円
・自殺解析調査経費	20,146千円

Ⅳ. 平成 22 年度 精神保健研究所研究報告会抄録

平成 22 年度 国立精神・神経医療研究センター
精神保健研究所 研究報告会

会期：平成 23 年 5 月 23 日(月)

会場：国立精神・神経医療研究センター 研究所 3 号館セミナー室
研究所 3 号館ホール

日程：

	9:00～	9:10	開会の辞 挨拶
【セッションⅠ】	9:10～	9:35	演題 1 知的障害研究部
	9:35～	10:00	演題 2 精神生理研究部
	10:00～	10:25	演題 3 児童・思春期精神保健研究部
休憩	10:25～	10:35	
【セッションⅡ】	10:35～	11:00	演題 4 精神薬理研究部
	11:00～	11:25	演題 5 社会復帰研究部
	11:25～	11:50	演題 6 成人精神保健研究部
	11:50～	12:00	写真撮影・連絡
	12:00～	13:00	昼食
【セッションⅢ】	13:00～	14:30	ポスター発表 (1 演題：3 分発表、1 分質疑)
【セッションⅣ】	14:30～	14:55	演題 7 司法精神医学研究部
	14:55～	15:20	演題 8 精神保健計画研究部
	15:20～	15:45	演題 9 自殺予防総合対策センター
休憩	15:45～	15:55	
【セッションⅤ】	15:55～	16:20	演題 10 心身医学研究部
	16:20～	16:45	演題 11 社会精神保健研究部
	16:45～	17:10	演題 12 薬物依存研究部

〈 後片付け・評価検討 〉

表彰式	18:00～	18:20	
	18:20～	18:30	閉会の辞

平成 23 年度 精神保健研究所リサーチ委員会
伊藤順一郎 堀口寿広 太田英伸 中島聡美 高橋秀俊 勝又陽太郎

平成22年度 精神保健研究所 研究報告会 プログラム

平成23年5月23日(月)

- 9:00-9:10 開会の辞
ご挨拶
- リサーチ委員会
精神保健研究所 所長 加我牧子
企画戦略室長 藤崎清道
- 《口頭発表》
- 9:10-9:35 知的障害研究部 座長 和田 清
0-1: ソーシャルスキルトレーニング (SST) における他者認知プロセスの
客観的評価: 事象関連脳電位 P300 の検討
○軍司敦子, 後藤隆章, 佐久間隆介, 小久保奈緒美, 加地雄一,
北 洋輔, 稲垣真澄 知的障害研究部
- 9:35-10:00 精神生理研究部 座長 稲垣真澄
0-2: アレキシサイミアと他者理解に関する脳機能画像研究
○守口善也¹⁾, 村上裕樹¹⁾, 肥田昌子¹⁾, 小牧元²⁾, 三島和夫¹⁾
1) 精神生理研究部 2) 心身医学研究部
- 10:00-10:25 児童・思春期精神保健研究部 座長 三島和夫
0-3: 広汎性発達障害児童にみられる合併精神障害 - 学校ベースでの検討 -
○井口英子, 森脇愛子, 稲田尚子, 神尾陽子 児童・思春期精神保健研究部
- 10:25-10:35 休憩
- 10:35-11:00 精神薬理研究部 座長 神尾陽子
0-4: 新規に合成された選択的 δ オピオイド受容体作動薬 KNT127 は痙攣作用を誘発す
ることなく抗うつ様作用と鎮痛作用を示す
○斎藤顕宜¹⁾, 杉山梓^{1,2)}, 根本 徹³⁾, 藤井秀明³⁾, 岡淳一郎²⁾,
長瀬博³⁾, 山田光彦¹⁾
1) 精神薬理研究部 2) 東京理科大学薬学部薬理学教室
3) 北里大学薬学部生命薬化学研究室
- 11:00-11:25 社会復帰研究部 座長 山田光彦
0-5: ACT・訪問看護・デイケアのサービス比較研究
- 1年後追跡調査を通じて -
瀬戸屋雄太郎¹⁾, ○吉田光爾¹⁾, 英一也¹⁾, 高原優美子¹⁾, 高橋誠¹⁾,
園環樹¹⁾, 萱間真美²⁾, 伊藤順一郎¹⁾
1) 社会復帰研究部 2) 聖路加看護大学 看護学部
- 11:25-11:50 成人精神保健研究部 座長 伊藤順一郎
0-6: ヒトの恐怖出来事記憶の想起特性
- PTSD 発症予防策としての睡眠強制剥奪の有効性の検討 -
○栗山健一, 曾雌崇弘, 金吉晴 成人精神保健研究部
- 11:50-12:00 写真撮影・連絡
- 12:00-13:00 昼食

《口頭発表》

14:30-14:55

司法精神医学研究部

座長 金 吉晴

0-7: 医療観察法における指定通院医療モニタリング研究—法施行5年間の状況—

○安藤久美子¹⁾, 岩成秀夫²⁾, 松原三郎³⁾, 岡田幸之¹⁾

1) 司法精神医学研究部 2) 神奈川県立精神医療センター,
3) 医療法人財団松原愛育会松原病院

14:55-15:20

精神保健計画研究部

座長 岡田幸之

0-8: 統合失調症および認知症の在院患者数の概況

○立森久照, 河野稔明, 長沼洋一, 小山明日香, 趙香花, 廣川聖子, 竹島正
精神保健計画研究部

15:20-14:45

自殺予防総合対策センター

座長 竹島 正

0-9: 一般身体科医のうつ病に対する態度

○稲垣正俊^{1) 2)}, 大槻露華¹⁾, 小高真美²⁾, 石藏文信³⁾, 渡辺洋一郎⁴⁾,
酒井ルミ⁵⁾, 山田光彦²⁾, 竹島正¹⁾

1) 自殺予防総合対策センター 2) 精神薬理研究部
3) 大阪大学医学部 4) 社団法人大阪精神科診療所
5) 兵庫県立精神保健福祉センター

15:45-15:55

休憩

15:55-16:20

心身医学研究部

座長 竹島 正

0-10: EMA および携帯情報端末による食事日記を用いた健常群における食行動関連
要因に関する検討

○菊地裕絵¹⁾, 吉内一浩²⁾, 稲田修士²⁾, 赤林朗²⁾, 山本義春³⁾,
小牧 元¹⁾

1) 心身医学研究部 2) 東京大学大学院医学系研究科ストレス防御心身医学
3) 東京大学大学院教育学研究科身体教育学コース

16:20-16:45

社会精神保健研究部

座長 小牧 元

0-11: 千葉県障害者条例の施行にともなう相談活動の変化

○堀口寿広¹⁾ 佐藤彰一²⁾ 高梨憲司³⁾

1) 社会精神保健研究部 2) 法政大学大学院法務研究科
3) 社会福祉法人愛光

16:45-17:10

薬物依存研究部

座長 伊藤弘人

0-12: 合成カンナビノイドの薬物依存性および細胞毒性評価

○舩田正彦, 富山健一, 青尾直也, 和田 清

薬物依存研究部

〈 後片付け・評価検討 〉

18:00-18:20

表彰式

18:20-18:30

閉会の辞

リサーチ委員会

《ポスター発表》

口演3分 質疑1分

13:00-14:30

知的障害研究部

座長 吉田光爾

P-1: 発達障害支援医学研修の参加者による地域伝達効果についての検討

(揭示のみ) ○井上祐紀, 軍司敦子, 稲垣真澄 知的障害研究部

P-2: Developmental Dyslexia 児に対する漢字の読み書き介入効果

— 認知神経心理学的読み書きモデルを用いた介入効果メカニズムの解明—

(揭示のみ) ○後藤隆章¹⁾, 小林朋佳¹⁾, 矢田部清美¹⁾, 小池敏英²⁾, 稲垣真澄¹⁾

1) 知的障害研究部 2) 東京学芸大学特別支援科学講座

P-3: マウス不安病態に関連する皮質高周波活動の電気生理学的解析

○松田芳樹 泉仁美 井上祐紀 加我牧子 稲垣真澄 知的障害研究部

精神生理研究部

座長 高橋秀俊

P-4: 日本における5年間の睡眠薬の処方実態

○榎本みのり, 北村真吾, 片寄泰子, 野崎健太郎, 村上裕樹, 守口善也, 肥田昌子

三島和夫 精神生理研究部

P-5: 概日リズム睡眠障害における生体機能リズム特性

○北村真吾, 肥田昌子, 渡邊真紀子, 榎本みのり, 野崎健太郎, 村上裕樹,

守口善也, 三島和夫 精神生理研究部

児童・思春期精神保健部

座長 福井裕輝

P-6: 自閉症スペクトラム障害における非定型な脳血流反応 —近赤外線分光法による検討—

(揭示のみ) ○片桐正敏¹⁾, 山崎貴男²⁾, 飛松省三²⁾, 神尾陽子¹⁾

1) 児童・思春期精神保健研究部 2) 九州大学大学院医学研究院 臨床神経生理

P-7: 通常学級に在籍する一般児童・生徒における自閉症的行動特徴の分布と

発達精神医学的ニーズとの関連

森脇愛子 小山智典 ○神尾陽子 児童・思春期精神保健研究部

精神薬理研究部

座長 安藤哲也

P-8: ベンゾジアゼピン系抗不安薬と異なる薬理作用を示す薬物 SYK-01 はラットに

おいて強い抗不安様作用を示した

○杉山梓^{1,2)}, 斎藤顕宜¹⁾, 山田美佐¹⁾, 稲垣正俊¹⁾, 高橋弘¹⁾, 岩井孝志¹⁾,牧野祐哉^{1,2)}, 岡淳一郎²⁾, 山田光彦¹⁾ 1) 精神薬理研究部 2) 東京理科大学薬学部薬理学教室

P-9: 単離アストロサイトにおける Ndr2 のグルコシルコイドによる発現誘導機構の解明

高橋弘, 斎藤顕宜, 山田美佐, ○岩井孝志, 山田光彦 精神薬理研究部

社会復帰研究部

座長 中島聡美

P-10: 急性期ケアマネジメントモデル導入前後のスタッフの変化

○高原優美子¹⁾, 瀬戸屋雄太郎¹⁾, 前田恵子¹⁾, 佐藤さやか¹⁾, 高橋誠¹⁾,佐竹直子²⁾, 伊藤友里¹⁾, 伊藤順一郎¹⁾

1) 社会復帰研究部 2) 国立国際医療研究センター国府台病院

P-11: 障害者ケアマネジメントにおける三障害の異同に関する研究

(揭示のみ) ○英 一也, 吉田 光爾, 小川 雅代, 伊藤 順一郎 社会復帰研究部

成人精神保健研究部

座長 野田寿恵

P-12: 日本版複雑性悲嘆スクリーニング尺度の信頼性と妥当性: 一般成人を対象とした検討

○伊藤正哉¹⁾, 中島聡美¹⁾, 藤澤大介²⁾, 宮下光令³⁾, 金吉晴¹⁾

1) 成人精神保健研究部 2) 国立がん研究センター東病院 臨床開発センター 精神瘍学開発部

3) 東北大学大学院 医学系研究科 保健学専攻 緩和ケア看護学分野

P-13: Cardiovascular Activities during Mental Stress among Fish Eaters

(揭示のみ) ○Kenta Matsumura¹⁾, Hiroko Noguchi²⁾, Takehiro Yamakoshi³⁾, Yutaka Matsuoka¹⁾

1) Department of Adult Mental Health 2) Musashino University 3) Kanazawa University

司法精神医学研究部

座長 船田正彦

P-14 : 患者参加型ケア「患者によるケアの選択」に関する質的研究

医療観察法病棟の入院患者と看護師の視点

○小松容子^{1) 2)}, Lovell, Karina²⁾, Baker, John²⁾

1) 司法精神医学研究部 2) The University of Manchester

P-15 : 触法精神障害者を対象とした統合失調症と暴力の効果に関する白質神経構造異常について

○西中宏史¹⁾, 宮田淳²⁾, 福井裕輝¹⁾ 1) 司法精神医学研究部 2) 京都大学医学研究科精神医学教室

精神保健計画研究部

座長 鈴木友理子

P-16 : 断酒会と共同したアルコール依存症患者のメンタルヘルス支援についての検討

- 自殺予防の観点に着目して -

○赤澤正人¹⁾, 立森久照¹⁾, 松本俊彦^{2) 3)}, 竹島正^{1) 2)}

1) 精神保健計画研究部 2) 自殺予防総合対策センター 3) 薬物依存研究部

P-17 : 医療保護入院患者の保護者に関する研究

○趙 香花¹⁾, 長沼洋一¹⁾, 堀井茂男²⁾, 野口正行³⁾, 河野稔明¹⁾

立森久照¹⁾, 白石弘巳⁴⁾, 竹島 正¹⁾

1) 精神保健計画研究部 2) 岡山県精神科病院協会/慈圭病院 3) 岡山県精神保健福祉センター

4) 東洋大学ライフデザイン学部生活支援学科

自殺予防総合対策センター

座長 菊池安希子

P-18 : 日本語版 SIRI の短縮版作成の試み

(**掲示のみ**) ○川島大輔, 川野健治 自殺予防総合対策センター

P-19 : 明治 11 年から明治 31 年のわが国における自殺死亡の推移

○山内貴史, 竹島 正 自殺予防総合対策センター

心身医学研究部

座長 松岡 豊

P-20 : 機能画像を使った、体形の不満と自尊感情に関する研究

○兒玉直樹¹⁾, 守口善也²⁾, 安藤哲也¹⁾, 菊地裕絵¹⁾, 小牧 元¹⁾

1) 心身医学研究部 2) 精神生理研究部

P-21 : 中学生の摂食障害傾向地域調査

(**掲示のみ**) ○長谷部智子¹⁾, 西村大樹²⁾, 東條光彦³⁾, 立森久照⁴⁾, 前田基成⁵⁾,

菊地裕絵¹⁾, 安藤哲也¹⁾, 小牧 元¹⁾

1) 心身医学研究部 2) 岡山県立精神科医療センター 3) 岡山大学大学院教育学研究科

4) 精神保健計画研究部 5) 女子美術大学芸術学部

社会精神保健研究部

座長 川野健治

P-22 : 循環器系薬剤と向精神薬による薬物相互作用の整理

○池野敬, 福内友子, 伊藤弘人 社会精神保健研究部

P-23 : 精神疾患, 悪性新生物, 心疾患と脳血管疾患による病欠日数の比較

○奥村泰之, 伊藤弘人 社会精神保健研究部

薬物依存研究部

座長 太田英伸

P-24 : HIV 感染予防に対するメサドン維持療法(MMT)の有効性に関する研究の傾向について : 文献レビュー

○小堀栄子, 嶋根卓也, 和田 清 薬物依存研究部

P-25 : クラブユーザーにおける MDMA 等のクラブドラッグ乱用実態に関する研究

○嶋根卓也¹⁾, 日高 庸晴²⁾, 和田 清¹⁾

1) 薬物依存研究部 2) 宝塚大学看護学部

P-26 : 合成カンナビノイド誘導体の細胞毒性発現機構の解明

○富山健一, 船田正彦, 和田 清 薬物依存研究部

知的障害研究部

O-1

ソーシャルスキルトレーニング (SST) における
他者認知プロセスの客観的評価：事象関連脳電位 P300 の検討
○軍司敦子, 後藤隆章, 佐久間隆介, 小久保奈緒美, 加地雄一, 北 洋輔, 稲垣真澄
知的障害研究部

【背景と目的】ソーシャルスキルトレーニング (SST) では、構造化された環境における少人数の作業やレクリエーションへの参加を通じて、コミュニケーションスキルの獲得やその定着化を目指した指導を行う。その効果は、環境調整や応用行動分析の視点から示される一方で、行動特徴や認知機能変化についての報告は少ない。本研究では、広汎性発達障害 (PDD) 児に対して、通常獲得が困難とされるコミュニケーション行動の一つ「援助行動」を標的とした SST を実施し、援助行動発現に至った相手 (指導員) の顔に対する脳機能変化について、非侵襲的脳機能検査 (Event Related Potential: ERP) を用いて検討した。

【方法】対象は、当センター病院小児神経科受診中の PDD 男児 2 名 (SST 開始時の年齢がそれぞれ 6:11, 8:00) である。病棟 1 号館 2 階の集団面談室にて約 3 時間の枠組み (SST : 2 時間, 保護者との話し合い : 30 分) を週に 2-3 セッションのペースで、計 10 セッション施行した。第 1, 2 セッションでは、1) 指導員 と児各 1 名のペアで工作活動などを行い、指導員は援助を必要とする状況で社会的手がかりを児に段階的に提示した。次に、2) 援助行動を学習する SST を 6 セッション実施し、第 9, 10 セッションでは 1) と同質の活動を行った。開始 1 ヶ月前と直前、全セッション終了後の 3 時点で、指導員の顔 (学習顔) と未知女性顔を視覚刺激として、頭頂部から脳波を記録し、ERP の P300 成分を算出した。

【結果】二名とも SST による介入後に、介入前よりも社会的手がかりの少ない段階で援助行動が出現した。P300 成分の振幅は、SST 開始の 1 ヶ月前と開始直前では、指導員の顔と未知顔で相違はなかったが、SST 終了後では二名とも、未知顔よりも指導員の顔に対する反応が増大した。

【まとめ】弁別や注意を反映する P300 成分は一般に、未知顔よりも既知顔に対する振幅が高いとされている (Gunji et al., 2009)。対象児にみられた P300 の変化は、SST を通じ状況理解から援助行動に結びつける学習を重ねることによって、ペアである指導員の顔に注目する機会が増え、次第に既知顔と認知されるようになったことが一因と考えられた。これらは他者認知における脳の学習プロセスが可視化できた可能性も示している。非侵襲的脳機能の検討により、PDD 児のコミュニケーション障害における範囲や程度を客観的に定量化できることが示唆され、本研究によって得られた個々のエビデンスの集積は、治療的介入による般化を予測する資料として、今後活用が期待される。

精神生理研究部

O-2

アレキシサイミアと他者理解に関する脳機能画像研究
○守口善也¹⁾, 村上裕樹¹⁾, 肥田昌子¹⁾, 小牧元²⁾, 三島和夫¹⁾

1)精神生理研究部 2)心身医学研究部

自己の感情認知に関する障害として「失感情症 (アレキシサイミア)」と呼ばれる臨床的な概念が注目を集めており、心身症や様々な精神疾患の病態に深く関わっているのではないかとこの観点から研究が進められている。このアレキシサイミアは、「自己を理解する」という人間にとって根本的な認知機能に関わっているのだが、実は、自己のみならず、他者の心の理解や共感性といったことに関しても機能が低下していることが示唆されていた。特に、他者の心を理解し、社会性を保つことが困難である自閉症やアスペルガー症候群 (自閉症スペクトラム) においてもアレキシサイミアが深く関わっていることが知られ、自己と他者の心の理解が繋がっていることを示唆している。自己の失感情症は「他者の理解」とどのようにつながるのかというテーマに関する脳機能画像研究を行った。

方法) 質問紙 (TAS-20) 及び構造化面接 (SIBIQ) によって評価された、アレキシサイミアの高い群 (n=16) と低い群 (n=14) の右利き成人に対して、1) 三角形のアニメーション動画による他者の心の理解 (こころの理論) 課題 2) 身体的な痛みを受けている人の写真を観察して痛みを評価する (痛みへの共感) 課題 3) 物体をつかもうとする目的的な手の動きの動画観察 (ミラーニューロン) 課題 を行い、機能的磁気共鳴画像 (fMRI) によって、課題中の脳血流変化を測定し、さらに共感性に関わる質問紙 (IRI) などに回答してもらった。

結果) 1) 三角形のアニメーション動画に対しては、内側前頭前野の活動がアレキシサイミア群で低下しており、さらに同部位の活動は、「視点を取得する」能力の質問紙スコアと相関していた。2) 痛みを受けている画像を観察するだけで、自分が実際に身体的痛みを受けている際の pain network が活動することが認められ、その中でも特に、アレキシサイミア群では情動制御に関わる認知的領域 (背側前帯状回や背外側前頭前野など) の活動低下と、体性感覚や情動に関わる領域 (後部島皮質、腹側前帯状回) の活動上昇が認められた。3) 他者の手の動きを観察するだけで活動する、運動関連領域 (前運動野、頭頂葉) の脳活動は、アレキシサイミア群で亢進していることが認められた。

結語) 以上から、アレキシサイミア群での、他者のこころの理解に関する脳内ネットワークの中でも認知的なコンポーネントの機能低下と、より原始的・自動的な sensorimotor 関連のネットワークへの依存の構造が明らかになった。従来の研究成果とも統合し、他者理解とアレキシサイミアがどのように関連するのかに関する考察と、今後の研究の方向性の検討を行う。

児童・思春期精神保健研究部

O-3

広汎性発達障害児童にみられる合併精神障害 —学校ベースでの検討—

○井口英子, 森脇愛子, 稲田尚子, 神尾陽子
児童・思春期精神保健研究部

【目的】広汎性発達障害(PDD)の有病率は、近年では1%程度がそれ以上と報告されており増加傾向にある。しかし、高機能PDD者は未診断のまま成長することが多く、青年・成人期に至ってから、合併精神症状による機能障害を生じた際に、初めて医療機関を受診しPDD診断を受けるケースが多い。そのため、臨床群ではない高機能PDD児童の実態については把握が難しく、併存障害の有無について調査した研究は少ない。本研究では地域の児童母集団における高機能PDD児童を対象に、PDD以外の他の発達障害を含む情緒や行動などの精神障害の合併について調査したので報告する。

【対象と方法】対象は、東京都小平市の公立小学校通常学級に在籍している児童(n=775)で、自閉症的対人特徴についての教師回答の質問紙による2段階スクリーニングを経てPDDの可能性があると判断された児56名のうち、診断面接に同意した22名である。そのうち、児と親に対する半構造化面接(ADI-R, PARS, PDD-AS)と行動観察(ADOS)によりDSM-IV-TRに基づきPDDと診断された児は7名(6~12歳、男:女=4:3)であり、その内1名は医療機関で既診断であった。PDD診断基準に合致しなかった児は15名(6~11歳、男:女=11:4)であり、両群の年齢と性別比に有意差はなかった。2名の児童精神科医により、K-SADS-PLを用いた半構造化面接を児と親に対し並行して行い、その結果を総合してDSM-IVに基づき精神障害の診断を行った。評価した診断カテゴリーは、注意欠陥/多動性障害、反抗挑戦性障害、行為障害、パニック障害、分離不安障害、回避性障害/社会恐怖、広場恐怖と特定の恐怖症、過剰不安障害/全般性不安障害、強迫性障害、うつ病性障害、躁病、チック障害、排泄障害である。両群について、診断基準に合致した精神障害の有無、数と種類について調べた。

【結果と考察】PDD児童7名中5名(71.4%)、非PDD児童15名中4名(26.7%)に精神障害が認められ、その頻度には有意な群間差が認められた(χ^2 検定, $p<.05$)。精神障害の数は、両群とも1つのみの児が多かったが、3つ以上を有する児も少数存在した。精神障害の種類としては両群ともADHDが多く、それぞれ4名が有していた。PDD児童は非PDD児童に比し、ADHD合併のオッズ比は3.67であった。

【まとめ】PDD児童は、スクリーニング陽性であったがPDD診断基準に合致しなかった児童に比べ、精神障害を合併する率が高かった。精神障害の種類としては、両群ともADHDが多く認められたが、その合併率はPDD児童の方が高かった。

精神薬理研究部

O-4

新規に合成された選択的 δ オピオイド受容体作動薬 KNT127 は 痙攣作用を誘発することなく抗うつ様作用と鎮痛作用を示す

○斎藤顕宜¹⁾, 杉山梓^{1,2)}, 根本 徹³⁾, 藤井秀明³⁾, 岡淳一郎²⁾,
長瀬 博³⁾, 山田光彦¹⁾

1)精神薬理研究部 2)東京理科大学薬学部薬理学教室 3)北里大学薬学部生命薬化学研究室

【背景・目的】 δ オピオイド受容体(DOR)作動薬は、動物モデルにおいて抗うつ様作用や鎮痛作用が報告されており、新規治療薬開発のためのリード化合物として注目されている。しかし、代表的なDOR作動薬であるSNC80には痙攣誘発作用が認められ、その臨床開発が制限されてきた。最近我々は、DOR受容体に対する優れた親和性と高い選択性を示す化合物(KNT127)の合成に成功した。しかし、KNT127の*in vivo*における詳細な薬理作用は明らかにされていない。そこで本研究では、KNT127の抗うつ様作用、鎮痛作用および痙攣誘発作用についてマウスを用いて検討した。

【方法】動物はICR系雄性マウス5~6週齢を用いた。抗うつ様作用の評価は強制水泳試験を用い、鎮痛作用の評価は酢酸ライジング試験を用いた。なお、被験薬物は試験開始30分前、拮抗薬は被験薬物処置の30分前に皮下に処置した。また、被験薬物処置後20分間の痙攣誘発作用を評価した。

【結果・考察】強制水泳試験の結果、KNT127は用量依存性的かつ有意にマウスの無動時間を短縮し、水泳行動を増加させた。KNT127(1 mg/kg)で認められたこれらの効果は、イミプラミン(6 mg/kg)と同程度であった。また酢酸ライジング試験の結果、KNT127は用量依存性的かつ有意(3 mg/kg)にライジング反応を抑制した。KNT127で認められたこれらの効果は共に、DOR拮抗薬であるナルトリンドール(1 mg/kg)の処置により拮抗された。KNT127の自発運動活性に及ぼす影響について検討した結果、KNT127(1 mg/kg)は、マウスの自発運動量に影響を与えないことを確認した。さらに、KNT127は100 mg/kgまで処置しても痙攣を示さなかった。以上のことから、新規化合物KNT127は、痙攣を誘発させることなく抗うつ様作用および鎮痛作用を示すことが確認され、より副作用の少ない抗うつ薬もしくは鎮痛薬開発のためのリード化合物となる可能性が示唆された。

ACT・訪問看護・デイケアのサービス比較研究

-1年後追跡調査を通じて-

瀬戸屋雄太郎¹⁾, ○吉田光爾¹⁾, 英 一也¹⁾, 高原優美子¹⁾, 高橋 誠¹⁾,
園環樹¹⁾, 萱間真美²⁾, 伊藤順一郎¹⁾

1)社会復帰研究部 2)聖路加看護大学 看護学部

【背景と目的】近年、「入院医療中心から地域生活中心へ」という精神保健医療福祉施策の元で精神障害者への支援が地域へと移行しつつあり、今後医療と生活支援が密接に結びついて提供できる効果的なサービスモデルの確立・普及は急務である。医療と生活支援の両方が提供されるサービスとして、精神科訪問看護および精神科デイケア等がある。また、包括型地域生活支援プログラム (Assertive Community Treatment: ACT) もいくつかの地域でサービスが始まっている。本研究では、これらのサービスの、対象者・業務内容の相違、効果、ケア内容について縦断的に調査し、我が国における今後の地域精神保健の機能分化やシステム作りに寄与することを目的とする。

【方法】ACT7施設、訪問看護21施設、デイケア10施設を対象に、施設調査、全利用者調査、および以下に関する追跡調査を原則として2008年11月から実施した。

アウトカム調査

調査内容は、スタッフ配置、サービス提供回数、全利用者の性、年齢、診断、および過去の入院歴、過去1カ月に退院した統合失調症/双極性障害を持つ利用者各施設最大10名の基本属性、機能レベル (GAF)、社会行動 (SBS) の状況等である。追跡調査は半年ごとに実施し、半年間の入院歴、就労歴、サービス利用歴、GAF、SBS等を実施した。

プロセス調査

対象者に提供されたケア内容についてサービスコード票を用いて以下の手順で調査した。

本調査のコード票とは、スタッフが直接コンタクト (訪問、面談、ケア会議等の連絡調整等) 毎に行った支援を記述する調査票である。コンタクトで行われた内容を、「支援領域」と、「支援のレベルの類型」の組み合わせを用いて網羅的に記述する。各支援機関でいずれかの1ヶ月間のコンタクトについて調査を実施した。

【結果および考察】平成23年1月現在、1年後フォローのデータを回収中である。3月時点までにデータを解析し、当日結果を報告する。

ヒトの恐怖出来事記憶の想起特性

—PTSD 発症予防策としての睡眠強制剥奪の有効性の検討—

○栗山健一, 曾雌崇弘, 金 吉晴

成人精神保健研究部

恐怖な出来事の記憶は、感情惹起の乏しい出来事の記憶より強く記憶され、長い間想起されやすいことが知られている。特に自身や親族、親友などの生命が危険にさらされた出来事の記憶は、外傷記憶として過剰に記憶され、PTSD (Posttraumatic stress disorder) を発症する原因となる。我々はPTSDの発症イベントの一つである、自動車事故をシミュレートした動画刺激を記憶刺激、文脈的つながりを持つ自動車運転静止画を想起刺激とし、健康成人の恐怖出来事記憶の文脈想起を調べた。想起指標として出来事想起、情動想起、皮膚電気抵抗による恐怖条件付け生理反応を暴露当日と2日後、9日後に定量評価したところ、恐怖の有無にかかわらず、出来事の文脈想起は徐々に不正確になる一方で、情動-文脈記憶は事故体験に特異的に、長期的かつ正確に想起された。さらに、生理的ストレス反応は、恐怖情動想起との関連が乏しかった。

これは恐怖出来事記憶の強化の際に、出来事-文脈記憶と感情-文脈記憶、そして文脈-条件付け生理反応が各々異なる長期記憶化処理を経ることを示唆し、恐怖体験は印象的なシーンのみ断片的に思い出せるものの文脈は思い出せず、漠然とした恐怖感情が惹起される状態になると考えられる。

また、長期記憶化処理は睡眠中の神経可塑性が強く関与することが知られており、強制睡眠剥奪が恐怖出来事記憶の長期記憶化へ与える影響を検討するため、記憶課題当日の全睡眠を剥奪された睡眠剥奪群の想起指標を対照群と比較評価した。

暴露当日の睡眠を剥奪すると、交通事故の体験に直接関連のある文脈情報に対してのみ恐怖情動を伴い想起されるものの、類似の文脈情報には恐怖が般化せず、さらに文脈による恐怖情動想起には生理的反応が伴わない。睡眠をとった場合は対照的に、交通事故に類似の文脈情報にも同様の恐怖感情を伴い想起され、さらに生理反応は暴露日より強化された。交通事故体験当日の睡眠剥奪は、こうした恐怖般化および恐怖条件付け生理反応を抑制する作用を持っており、これは睡眠が剥奪されることにより長期記憶化処理が正常に遂行されないためと考えられる。つまり意図的にトラウマ暴露当日の睡眠を剥奪することで、PTSDの発症を予防できる可能性が強く示唆される。また、強いストレスを受けると2次性の不眠症が高い頻度で発症し、外傷体験直後に不眠症状を併発する率は極めて高い。急性ストレス性不眠は睡眠剥奪と類似の作用を持つと推測され、PTSDの発症率を低下させる適応的戦略である可能性が示唆される。

司法精神医学研究部

O-7

医療観察法における指定通院医療モニタリング研究 ―法施行 5 年間の状況―

○安藤久美子¹⁾, 岩成秀夫²⁾, 松原三郎³⁾, 岡田幸之¹⁾

1)司法精神医学研究部,2)神奈川県立精神医療センター,3)医療法人財団松原愛育会松原病院

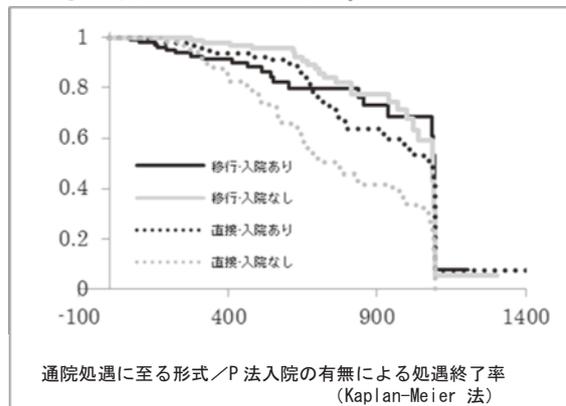
【目的】「心神喪失等の状態で重大な他害行為を行った者の医療及び観察等に関する法律（以下、医療観察法）」による通院医療の実態を明らかにすることは、本法制度における専門的医療の向上にとって極めて重要な課題である。本研究では、全国の指定通院医療機関に通院処遇となった対象者の静態情報等を収集し、評価・分析することにより、同制度の運用および医療状況を把握し、地域医療における実態と課題を明らかにすることを目的とした。

【方法】調査対象は全国の指定通院医療機関のうち、本研究への協力が得られた 158 施設で通院処遇を受けている 444 例である。調査期間は医療観察法が施行された H17 年 7 月 15 日から H22 年 12 月 31 日とし、前述の指定通院医療機関に調査票を郵送し、担当スタッフに記載を依頼した。

【結果】調査対象者の内訳は男性 72%、女性 28%、平均年齢は 43.4±13.2SD 歳であった。対象行為では傷害 36%が最も多く、放火 27%、殺人 25%と続いていた。診断分類では統合失調症圏が 76%、感情障害圏が 10%であり、5 年間を通して大きな変化はなかったが、本年はじめて移行通院者数（267 例：60%）が直接通院者数（177 例：40%）を上回った。

処遇状況については、精神保健福祉法による入院を併用しているケースが 49.5%(220 例)を占めていたが、Kaplan-Meier 法を用いた生存曲線の比較では、精神保健福祉法による入院の有無では処遇期間に有意差は認められず、通院処遇に至る形式（直接通院/移行通院）の両群間の比較において直接通院の方がより処遇期間が短くなることが示された（ $p<0.05$ ）。さらに通院処遇が終了するまで期間が正規分布するという仮説のもと日数分布の尤度を最大にするパラメータを算出す

ると、平均通院日数は 936.4±334.2SD 日（31.2 ヶ月）と推定され、処遇ガイドラインで推奨されている 3 年よりも短くなることが示された。



通院処遇に至る形式/P法入院の有無による処遇終了率 (Kaplan-Meier 法)

【考察】本法施行当初から継続して通院事例をモニタリング調査しているのは本研究のみであり、本法の実態を明らかにする上でも非常に有用である。通院処遇期間の推定では 3 年以内に処遇終了となる結果が示されたが、自殺や再入院等の特殊事例の多くは処遇開始から 1 年以内に転帰を迎えていたことから、適宜、精神保健福祉法による入院医療等も導入しながら、医療と精神保健観察の両面から支援を行っていく必要があると思われた。

精神保健計画研究部

O-8

統合失調症および認知症の在院患者数の概況

○立森久照, 河野稔明, 長沼洋一, 小山明日香, 趙香花, 廣川聖子, 竹島 正

精神保健計画研究部

【背景と目的】2004 年 9 月に公表された「精神保健医療福祉の改革ビジョン」が 2009 年 9 月にその中間点を迎えることを踏まえ、その後 5 年の重点施策群の策定に向けて、精神保健医療福祉の更なる改革の具体像を提示することを目的として、2008 年 4 月から「今後の精神保健医療福祉のあり方等に関する検討会」において検討を開始した。2009 年 9 月に公表された「今後の精神保健医療福祉のあり方等に関する検討会報告書」では、今後の数値目標についてこれまでに掲げられていた平均残存率および退院率（1 年以上群）のそれは引き続き掲げるとした上で新たな 2 つの数値目標を設定することとした。それらは統合失調症による入院患者数（精神保健福祉資料でいうところの在院患者数）と認知症に関する目標値である。前者については今後 5 年間でその人数を約 15 万人（2005 年比で 4.6 万人減）にするとの目標値が設定された。

【対象と方法】厚生労働省社会・援護局障害保健福祉部精神・障害保健課が、都道府県・政令指定都市の精神保健福祉主管部（局）長に文書依頼を行い収集した全国の精神科医療施設などの状況についての資料を許可を得て二次的に分析した。このデータはわが国の精神病床を有する病院（以下、精神科病院）の悉皆調査により得られたものである。本研究では 2009 年追加調査データおよび 2006 年と 2003 年調査のデータを使用した。

【結果】2009 年の精神科病院等の在院患者総数は 311,270 人であり、2006 年比で 9,038 人の減であった。2003 年から 2006 年の 3 年間で 8,788 人の減であったことから在院患者数の減少は全体としては同程度と言える。一方で同期間の統合失調症等のそれは 192,329 人から 182,125 人と 10,204 人の減少であった。2003 年から 2006 年の 3 年間で 8,606 人の減であったことから統合失調症等の在院患者数の減少はやや加速をしている。認知症については本調査と追加調査で診断分類が異なるため直接の比較はできないが 2009 年から 2006 年の間も増加していると考えられた。都道府県別に比較した際に認知症、統合失調症等ともに人口 10 万対在院患者数が多いのは日本の周辺部、特に南部に集中しているという特徴は 2009 年時点でも変化はない。

【結論】2009 年 9 月公表の「今後の精神保健医療福祉のあり方等に関する検討会報告書」では数値目標に統合失調症による在院患者数を今後 5 年間で約 15 万人（2005 年比で 4.6 万人減）にすることが追加された。昨年度報告書で課題として挙げた精神保健改革の最新の進捗状況が速やかに把握できるようにするために、今回の調査から追加調査を実施した。それにより明らかとなった 2009 年現在の状況から数値目標の達成に向けて統合失調症による在院患者数の減少は近年より加速をしていたが、目標の達成には一層の加速が必要であることが明らかとなった。

自殺予防総合対策センター

O-9

一般身体科医のうつ病に対する態度

○稲垣正俊¹⁾²⁾, 大槻露華¹⁾, 小高真美²⁾, 石蔵文信³⁾, 渡辺洋一郎⁴⁾,
酒井ルミ⁵⁾, 山田光彦²⁾, 竹島 正¹⁾1)自殺予防総合対策センター, 2)精神薬理研究部, 3)大阪大学医学部,
4)社団法人大阪精神科診療所, 5)兵庫県立精神保健福祉センター

【背景】身体科診療場面ではうつ病の有病率が高いにもかかわらず、多くは適切な治療に結びついていない。身体科医がうつ病の発見および治療への導入を担うためには適切な教育介入が必要だが、効果が検証された介入プログラムはない。本研究では、今後の教育介入プログラム作成に必須の情報である身体科医のうつ病に対する態度を調査した。

【方法】一般医・精神科医ネットワーク会員 210 名およびかかりつけ医うつ病対応力向上研修会参加者 241 名を対象とし、Depression Attitude Questionnaire (20 項目の自記式尺度) を用いてうつ病に対する態度を調査した。各項目のスコアを記述するとともに、因子分析により要約を記述し、補足的に対象者の背景の特徴と態度との関連解析、参照として収集した同会員および同研修会に参加・同席した 21 名の精神科医の態度との比較を行った。

【結果】身体科医 187 名から回答を得た。身体科医の平均年齢は 53.7±10.4 歳、78.1%が男性であった。多くは内科系の診療科を専門としていた。身体科医の多くが同意した項目は「過去 5 年間に、私は、うつ病症状のある患者数の増加を目の当たりにしてきた」、「看護師は、うつ病患者の支援に役立つ人となりうる」、「(あなたの日々の臨床において) うつ病患者と共に取り組むのは重いことだ」、「もし、うつ病患者が抗うつ薬を必要とするなら、一般診療科医よりも精神科医が診るほうが良い」、「うつ病患者に対する精神療法は、専門家に任せるべきだ」であった。逆に、「うつ病患者のニーズを扱うことは気楽なことだ」に同意する身体科医はいなかった。多くの身体科医は「一般診療科で遭遇するうつ病の大部分は、薬物療法なしに改善する」、「うつ病になるということはスタミナに乏しい人々が人生の困難に対処する方法だ」、「一般診療科の治療に反応しないうつ病患者に提供されるべきことは少しもない」に同意しなかった。因子分析から得られた第 1 因子「うつ病は精神科医によって治療されるべき」という考えに身体科医だけでなく予備的に調査した精神科医も同意していた。身体科医は精神科医より第 2 因子「うつ病やその治療に関する悲観的な考え」を持っていた。また、高齢であるほど第 3 因子「うつ病の病因や病態に関する先入観」を強く持っていた。また、今回の各項目のスコアおよび因子構造とその要約スコアは、英国の General Practitioner を対象とした態度とは大きく異なっていた。

【考察】うつ病は精神科医によって治療されるべきという考えは、各専門医が自分の専門領域の疾患を治療するという我が国の医療制度を反映していると考えられる。一般身体科医がうつ病を発見し適切な治療に導入することを目指して開発された海外の教育介入プログラムは我が国の医療制度の中では適応できないかもしれない。まずは我が国の医療制度の中で身体科医が担うべき役割を決定し、その上で各身体科医がその役割を認識する必要があるだろう。

心身医学研究部

O-10

EMA および携帯情報端末による食事日記を用いた

健常群における食行動関連要因に関する検討

○菊地裕絵¹⁾, 吉内一浩²⁾, 稲田修士²⁾, 赤林朗²⁾, 山本義春³⁾, 小牧 元¹⁾

1)心身医学研究部 2)東京大学大学院医学系研究科ストレス防御心身医学

3)東京大学大学院教育学研究科身体教育学コース

【背景および目的】食行動は健康関連行動の重要な一要素であり、様々な疾患の治療において介入の対象となるばかりでなく、健康な人に対する健康教育においても重要な対象となる。食行動には心理社会的因子が影響することがこれまでに示唆されているが、先行研究の多くは、実験環境下の研究や、想起に基づく横断調査であり、十分な生態学的妥当性を持つ結果は得られていない。近年、携帯型コンピュータを電子日記として用いることで想起によるバイアスを避けることが可能な ecological momentary assessment (EMA)法という手法が提唱され、主に自覚症状の評価に適用されてきている。演者らは食事記録についても、日常生活下で簡便かつ正確に記録・評価が可能な写真付きデータベースを備えた携帯情報端末を用いた食事日記を開発した (Fukuo W, et al, 2009)。本研究は、EMA および携帯情報端末を用いた食事日記により、健常群における日常生活下での食事摂取と心理社会的因子の関連について検討することを目的とした。

【対象と方法】対象は 20 名の健康な学生 (平均年齢 23.6±4.2 歳) で、1 週間、腕時計型コンピュータを装着し、食事の直前および直後を含む一日数回、心理的ストレス、気分状態 (抑うつ気分および不安)、場所や同伴者等の環境要因についての記録を行った。また、携帯情報端末を用いた食事日記を携帯し、摂取したすべての飲食物を入力した。この食事日記システムにより、摂取エネルギー量が自動的に計算され記録された。マルチレベル解析により、摂取エネルギー量と食直前の心理的因子および環境要因の関連について、食事の種別をコントロールあるいは層別化して検定した。

【結果】夕食時のみ、食直前の抑うつ気分と摂取エネルギー量の間に負の関連が認められた ($p=0.045$)。また、外食時は外食以外に比較して摂取エネルギー量が有意に多かった ($p=0.049$)。

【考察】健常群の実際の日常生活下で、摂取エネルギー量と心理的因子・環境要因に有意な関連のあることが生態学的妥当性および栄養学的な正確性をもって示され、これらの要因が摂取エネルギー量に影響を与える可能性が示唆された。

千葉県障害者条例の施行にともなう相談活動の変化

○堀口寿広¹⁾, 佐藤彰一¹⁾, 高梨憲司¹⁾

1)社会精神保健研究部 2)法政大学大学院法務研究科 3)社会福祉法人愛光

【目的】わが国では現在、国連の障害者権利条約への批准に向けて準備が進んでいる。平成 19 年に障害者の権利擁護について条例を施行した千葉県を対象地域として、条例施行前後の相談件数を調査し、相談における「障害があることを理由とした差別」の頻度を収集するとともに障害者の権利擁護を目的とした法制度の可能性を検討することを目的とした。

【方法】平成 19 年から 21 年の各年 10 月から 12 月にかけて、官公庁や学校、医療福祉施設をふくむ各種相談機関（平成 19 年度 3,308 箇所、20 年度 6,065 箇所、21 年度 6,015 箇所）を対象として、①相談の体制、②相談件数（全ての相談件数と「障害があることを理由とした差別」に関連した相談件数）、③相談マニュアルの準備状況、④条例の認知度をたずねる郵送法アンケート調査を実施し、年次変化を得た。なお、各年度の調査の実施に当たり、国立精神・神経センター倫理委員会の承認を得た。

【結果】各種相談機関からの回答として、①・②平成 19 年度の調査では 1,281 箇所（回答率 38.7%）、20 年度は 1,574 箇所（26.0%）、21 年度は 1,573 箇所（26.2%）の回答があった。年間の全ての相談件数は、回答の数値を合計して平成 18 年度（のべ）679,480 万件、19 年度 912,602 件、20 年度 634,392 件あった。相談件数の多寡に地域の都市化の時期が関連していることがわかった。「障害があることを理由とした差別」に関連した相談件数は、18 年度（のべ）512 件（各機関で全ての相談に占める割合は平均で 0.4%）、19 年度 1,765 件（1.4%）、20 年度 1,770 件（1.2%）あった。回答した機関のうち 3 回の調査に回答した 119 箇所における 3 年間の相談件数の増加率は、全ての相談は 1.06（中央値）、「障害があることを理由とした差別」に関連した相談は 1.00 であった。③マニュアルの準備状況は、19 年度の調査では 50.8%、20 年度の調査では 52.7%、21 年度の調査では 55.4%で「用意していない」であった。④条例の認知度は、19 年度の調査では 61.0%、20 年度は 48.4%、21 年度は 46.6%であった。

【考察】条例の施行前後 3 年間で相談件数が急増する事態はみられなかった。相談の指針となるマニュアルの準備と、条例の認知度を高める取り組みが必要と考えた。障害者の権利擁護を目的とした法制度を導入して、地域の相談ネットワークに権利擁護の機能を担わせることは可能であると考えた。千葉県に続き、同様の条例を施行した自治体および制定を目指した取り組みを実施している自治体が複数あるが、本研究を参考にした調査が実施され障害者の権利擁護のあり方の研究が進むことが期待される。

【付記】本研究は平成 19 年度 - 21 年度厚生労働科学研究費補助金（障害保健福祉総合研究事業）により実施した。

合成カンナビノイドの薬物依存性および細胞毒性評価

○船田正彦, 富山健一, 青尾直也, 和田 清

薬物依存研究部

【はじめに】違法ドラッグとして、大麻と類似の作用を示す合成カンナビノイドの乱用拡大が問題になっている。現在までに、50 種類以上の合成カンナビノイドが流通しており、依存性及び毒性を効率良く評価するためのシステム構築は急務である。本研究では、合成カンナビノイドである CP-55,940 について、依存性および細胞毒性の発現について評価を行い、その発現メカニズムを解析するとともに評価システムの妥当性について検討した。

【方法】行動解析実験には、ICR 系雄性マウス(20 - 25g)を使用した。精神依存性：薬物の精神依存性は、conditioned place preference(CPP)法により評価した。CP-55,940 投与による条件付けを 6 日間行ない、条件付け終了 24 時間後に、CPP 試験を行った。薬物弁別試験：FR10 スケジュールによって CP-55,940 と溶媒で訓練を行ない、CP-55,940 の弁別課題を獲得した動物を使用した。CP-55,940 弁別獲得動物において、大麻の精神活性成分であるデルタ 9-テトラヒドロカンナビノール(THC)および合成カンナビノイドの般化試験を行った。身体依存性：CP-55,940 (1 mg/kg, s.c.)慢性処置は 1 日 2 回 5 日間とした。6 日目にカンナビノイド受容体拮抗薬である AM251 を投与し、誘発される退薬症候の観察を行なった。また、退薬症候の観察終了後、大脳皮質を分画し、高速液体クロマトグラフ法により、組織内モノアミンの定量を行った。細胞毒性の評価：神経芽細胞腫由来 NG108-15 細胞を用いて評価した。

【結果】CP-55,940 の条件付けにより、CPP が発現し精神依存の形成が認められた。これらの効果は、カンナビノイド CB1 受容体拮抗薬である AM251 およびドパミン受容体拮抗薬の併用により抑制された。薬物弁別実験では、CP-55,940 弁別獲得動物において、THC で般化が認められた。CP-55,940 慢性投与動物では、AM251 投与により跳躍行動や身震い等の退薬症候が発現し、身体依存の形成が確認された。また、退薬症候発現時に大脳皮質におけるノルアドレナリン量を測定したところ、有意な増加が確認された。NG108-15 細胞に CP-55,940 を処置したところ、2 時間後に濃度依存的に生存細胞率が減少し、細胞毒性の発現が確認された。

【考察】CP-55,940 の慢性処置により、精神依存及び身体依存が形成されることが明らかになった。精神依存の形成においては脳内ドパミン神経系が重要であり、一方、身体依存形成においては脳内ノルアドレナリン神経系が重要であると考えられる。また、薬物弁別試験は、合成カンナビノイドの薬理作用について、その類似性を推測することに適していることが確認できた。培養細胞による毒性解析では、迅速な評価が可能であった。本評価システムは、合成カンナビノイド乱用による薬物依存形成と毒性発現の予測に有用であると考えられる。

知的障害研究部

P-1

発達障害支援医学研修の参加者による地域伝達効果についての検討

○井上祐紀, 軍司敦子, 稲垣真澄

知的障害研究部

【背景】当センターでは全国の都道府県における小児科・小児神経科医等を対象とした発達障害支援医学研修を2005年以降行っており、参加者が地域において発達障害に関する情報や技能を支援者・当事者に伝達できるようになることを研修の目標と位置づけている。本研究では過去の研修の参加者に対するアンケート調査を行い、参加者が研修にて習得した内容に関する地域伝達についての自己評価、および地域に伝達できる参加者の要因について検討を行った。

【対象・方法】平成19年から平成22年にかけて開催された第3回～第9回発達障害支援医学研修の全参加者314名（重複参加者は1名として）を対象として質問紙を発送した。調査に用いた質問紙には参加者の属性（年齢・性別・専門の診療科・医師歴・発達障害医療経験年数・勤務先）および研修内容に関する情報の地域伝達効果についての項目が含まれた。

【結果】発送された314通のうち140通が回収された（回収率44.5%）。うち有効回答数139名分の質問紙データの解析を行った。調査対象となった参加者の性別の内訳は男性71名（51.1%）、女性68名（48.9%）。参加者の診療科については小児神経科42名（30.2%）、小児科38名（27.3%）、精神科37名（26.6%）、児童精神科9名（6.5%）、その他（内科等他の診療科・行政職など）13名（9.4%）が含まれていた。講義内容を地域の専門職の方々に伝達し共有することが出来たかという問いに対しては、55.4%の参加者が「大いにあった」か「少しあった」と回答しており、44.6%の参加者が「特になし」か「わからない」と回答していた。この“地域伝達効果”に寄与する要因について検討したところ、参加者の年齢が50歳代の場合、または発達障害医療経験年数が5～10年の者では地域伝達効果を報告する者の度数は期待値よりも高かった。医師歴については5～15年までの参加者が地域伝達効果を報告する度数は期待値よりも有意に小さく、25年以上の者では期待値よりも高かった。また、「地域に伝達するという観点から研修に不足していた内容」という自由記載の間に対しては、地域における支援の実際や他職種との連携についての講義を望む回答が目立った。

【考察】これまでの研修の参加者の過半数がなんらかの地域伝達効果があるものと回答していた。今後は、より効率的に地域に対する情報伝達効果を高めるという観点から、参加者の年齢や医師としてのキャリアが重要な要因となりうることが示唆された。また、参加者のニーズがより実践的な情報・技法の習得を志向していることを本研修に反映させていくことも重要と考えられた。

知的障害研究部

P-2

Developmental Dyslexia 児に対する漢字の読み書き介入効果

— 認知神経心理学的読み書きモデルを用いた介入効果メカニズムの解明 —

○後藤隆章¹⁾, 小林朋佳²⁾, 矢田部清美¹⁾, 小池敏英²⁾, 稲垣真澄¹⁾

1)知的障害研究部 2)東京学芸大学 特別支援科学講座

【背景と目的】発達性読み書き障害(Developmental Dyslexia :DD)は、知的障害がないにもかかわらず、読み書きの習得や使用に著しい困難を示す発達障害の一つであり、具体的な支援法の開発が急務である。日本語の読み書き支援法に関しては認知神経心理学的アプローチの有効性が指摘されているが、そのほとんどが成人Dyslexiaを対象とした検討であり、小児期DDに関する介入研究は少なく、効果のメカニズムについても十分に明らかとなっていない。我々は漢字の読み書きにつまずきを持つDD児を対象とした介入を行い、その効果を認知神経心理学的読み書きモデルに基づいて検討したので報告する。

【対象と方法】当センター病院に受診するDD児8名(小学3年生～中学1年生)を対象とした。保護者および対象児に対して研究実施に関する説明を行い、参加と発表に関する同意を得た。DD児の読み書き障害の程度、語彙処理能力、音韻処理能力、認知処理能力(特にワーキングメモリ)について事前評価を行った。漢字読み書きの介入法は「読み」に対する介入法(タイプA)、「書き」に対する介入法(タイプB)とした。前者は音韻性ワーキングメモリに困難を示すDD児を対象とし、イラストを用いて学習する内容のイメージを高める働きかけを行った後、漢字と読みの学習を行うもので、後者は音韻性ワーキングメモリに困難を示さないDD児を対象とし、漢字を構成している部分の中から既知の情報を見つけ出し、言語化させる学習を書字行為に加えた。介入期間は約1か月とし、その効果は介入直前直後と実施1か月後(保持期間後)の3時点で評価した。

【結果】タイプA介入を受けたDD児4名全員が介入後に漢字読みの正答率が増加した。うち1名は、その後の保持期間での正答率が減少した。タイプB介入を受けたDD児4名全員が介入後に漢字書字正答率が増加した。うち1名は、その後の保持期間で正答率が減少した。保持期間で正答率が減少したDD児2名は、共通して語彙処理に関連する課題の成績が低かった。

【考察】DD児に対する介入効果を検討する際には、従来の認知神経心理学的モデルにワーキングメモリを組み込んだモデルが有効であることが確認できた。介入効果が保持されなかった事例は語彙処理能力の弱さを伴っており、読み書きの定着に語彙処理能力が影響している可能性がある。したがって語彙の増加や活用を狙う介入も併せて行う必要があると思われる。今後は、検討例数の増加を図り、特異的発達障害児への介入指導システムの確立を目指したい。

知的障害研究部

P-3

マウス不安病態に関連する皮質高周波活動の電気生理学的解析

○松田芳樹, 泉 仁美, 井上祐紀, 加我牧子, 稲垣真澄

知的障害研究部

【背景と目的】常染色体劣性遺伝性難聴を呈する Bronx Waltzer (bv) マウスは、明暗探索試験および高架式十字迷路試験等の不安関連行動評価系で潜在的な不安亢進が確認されており、情動面において不安表出の強い phenotype を有するものと考えられる (Matsuda et al., 2011)。また、同群の大脳皮質では、パルブアルブミン含有 GABA 作動性 interneuron の発現が著しく低下していることから、不安亢進の背景に脳内抑制系の異常が関与している可能性がある。本研究では、潜在性不安を有する bv マウスと、薬理的に不安を惹起させたモデル動物を用いて、不安状態に関わる大脳皮質の高周波活動の動態について検証した。

【対象と方法】3~6ヶ月齢の bv マウス (homo: *bv/bv*; n=5) と control マウス (+/+; n=5) を対象とした。アパチン麻酔下にて、左頭頂葉皮質表面に脳波記録用のステンレス製ネジ電極を留置し、その対側帯状回皮質内にマルチユニット活動を記録するための可変式神経発火記録電極を刺入する手術を施行した。回復期間後、両マウス群の広帯域脳波および神経発火のマルチユニット活動を記録した。高周波活動は広帯域脳波に 80-500Hz のバンドパスフィルターを適用して抽出した。なお、control マウスには神経活動の記録中に不安惹起物質コレシストキニン (CCK-8S) 30 μ g/kg を腹腔内投与し、その前後の神経活動の変化について検討した。また、bv マウス群および CCK-8S の投与を受けた control 群について、神経活動測定期間のうち、10分間における行動上の Freezing 割合を算出した。

【結果】bv マウス群の頭頂葉皮質では、高 γ 帯域を含む高周波のパワー値が control 群に比べて有意に減弱していた。CCK-8S 30 μ g/kg の腹腔内投与を受けた control 群においても、同様に、投与前に比べて頭頂葉皮質における同帯域の脳波のパワー値が有意に低下していた。さらに、bv マウス群の帯状回皮質における自発性マルチユニット活動は control 群に比して持続的な活動の低下を示すとともに、control 群では CCK-8S の投与によりマルチユニット活動が一過性に低下した。bv マウス群は神経活動記録時の通常状態においても control 群に比べて Freezing 割合が有意に高く、control 群では CCK-8S の投与後に Freezing 割合は有意に上昇した。

【考察】潜在性の不安状態や薬理的に惹起された不安の発現時には、大脳皮質の高周波活動が著しく低下していた。高周波活動の一部は GABA 作動性 interneuron の活動を間接的に反映しているとの報告があることから、病的な不安状態は皮質抑制系の活動性の低下と関連がある可能性が示唆された。

精神生理研究部

P-4

日本における 5 年間の睡眠薬の処方実態

○榎本みのり, 北村真吾, 片寄泰子, 野崎健太郎, 村上裕樹,

守口善也, 肥田昌子, 三島和夫

精神生理研究部

【目的】複数の疫学研究により精神疾患や不眠症の日本人での有病率が明らかになっているが、日本人は向精神薬を服用することに対する心理的抵抗が強いと、有病率に比較して向精神薬の処方率が欧米諸国に比べて相対的に低いといわれている。しかし、日本では、質問紙による睡眠薬の服用頻度の疫学調査報告はあるが、診療報酬データを用いた向精神薬処方実態の報告はまだない。本研究では大規模診療報酬データを用いて日本における向精神薬、特に睡眠薬の処方率とその経年変化を明らかにすることを目的とした。

【対象と方法】加入者約 33 万人の複数の健保団体の大規模診療報酬データを利用し、2005 年~2009 年の各年 4 月 1 日~6 月 30 日の 3 ヶ月間に医療機関を受診し、「睡眠薬、抗うつ薬、抗不安薬、抗精神病薬のいずれかを処方された 20~74 歳の患者」を抽出して解析に供した。解析対象とした睡眠薬は、国内で処方可能な 22 剤とした。国勢調査の 5 最階級別人口動態データで調整し、国内全体での推定 3 ヶ月処方率 (以下、処方率) を算出した。1 日当たりの睡眠薬処方力価は、flunitrazepam 換算で算出した。さらに、2005 年に睡眠薬を服用した患者を対象に、5 年間の間で何年間睡眠薬を処方されていたかで群分けし、1 年ごとの平均処方力価を比較した。

【結果】いずれかの向精神薬の処方を受けた患者数は約 11,000~13,000 人 (各年、3 ヶ月間) であった。2005 年の日本における睡眠薬の 3 ヶ月処方率は 3.7%、処方率は経年的に増加していた。男女ともに加齢に伴って増加し、特に 65 歳以上の女性で経年的に顕著な増加がみられたが、平均処方力価では、経年変化はみられなかった。また、身体疾患数の増加に伴って処方率は増加し、睡眠薬処方患者の中では加齢に伴って身体疾患数を 5 個以上持っている患者が増加した。気分障害を有する患者は若年~中年期に多くみられた。男女ともに若年~中年期では約 60%が精神科、中高年期以降では約 80%が身体科を主な受診診療科としていた。複数年服用患者の解析では、5 年間毎年睡眠薬が処方されている患者は 27.3% (1,312/4,807 人) で、2005 年の処方力価は 1 年だけの処方患者に比べ、有意に高かった。

【まとめ】本調査により、日本における近年の睡眠薬の処方動向を明らかにした。若年~中年期では精神疾患を背景、50 代以降の中年~高齢期では身体疾患を背景とした睡眠薬の処方がされていると考えられた。2005 年以前からの処方継続患者も含めた、2005 年 4 月~6 月に睡眠薬を処方された患者を対象にすると約 4 分の 1 で処方が長期化し、処方力価が高くなることが推測された。今後の解析では、新規に睡眠薬を処方された患者を対象に長期処方の実態をさらに明らかにしていく予定である。

精神生理研究部

P-5

概日リズム睡眠障害における生体機能リズム特性

○北村真吾, 肥田昌子, 渡邊真紀子, 榎本みのり,
野崎健太郎, 村上裕樹, 守口善也, 三島和夫
精神生理研究部

【背景】およそあらゆる地球上の生物において、体温や血圧、各種のホルモン分泌など多くの生体機能は約24時間周期の概日リズムを示す。ヒトを含むほ乳類においては視床下部の前方にある視交叉上核 (SCN) がリズムを発振する中枢であり、このSCNで生み出される概日リズムの周期 (τ) は通常24時間とは異なるため、日々外界の24時間周期へと同調を図る必要がある。この概日リズム調整機構が障害されると睡眠障害をはじめとする様々な疾患につながる事が知られる。概日リズム睡眠障害の自由継続リズム型 (CRSD-FRT) は睡眠時刻が各日およそ1時間程度の後退を示す睡眠障害のひとつであり、病態生理については不明な点が多く残されている。本研究では、CRSD-FRTを対象に生体機能のリズム特性を健常者と比較した。

【方法】睡眠障害国際分類第二版に基づいて診断されたCRSD-FRT患者6名及び健常者13名を36時間コンスタントルーチン法 (CRs) 及び28時間強制脱同調プロトコル (FD) に導入した。FDの前後に行ったCRs中の体温 (底点位相)、血漿コルチゾール (頂点位相)、血漿メラトニン (分泌開始時刻) を用いて、FD前後での変動から各対象者の概日リズム周期を算出した。

【結果】CRSD-FRT患者は、中間型のクロノタイプを示す健常者と比較して有意に長い概日リズム周期を示した。一方、夜型のクロノタイプを示す健常者の一部は、CRSD-FRT患者に近い長さの概日リズム周期を示した。

【結論】本研究の結果から、内因性の生体リズム特性だけでなくその他の機能 (外界への同調機能や睡眠恒常性維持機能) についても、CRSD-FRT発症に対する重要性を有する可能性が示唆された。

児童・思春期精神保健研究部

P-6

自閉症スペクトラム障害における非定型な脳血流反応

—近赤外線分光法による検討—

○片桐正敏¹⁾, 山崎貴男²⁾, 飛松省三²⁾, 神尾陽子¹⁾

1) 児童・思春期精神保健研究部 2) 九州大学大学院医学研究院 臨床神経生理

【背景と目的】自閉症スペクトラム障害 (ASD) のある人たちは、familiarな声 (母親の声) への選好 (preference) が弱いことが知られている。このほか、ASD成人では聴覚情報処理は優れているものの、発話音の処理には困難を示すというERP研究の報告や、声を聞いている時の上側頭葉 (STS) の活動が定型発達者よりも低賦活というASD成人のfMRI研究の報告がある。人の声の処理は、言語発達だけでなく、情動やコミュニケーションなど複数の領域と関連し、社会的発達に重要であることから、ASDの子どもがどのように声を処理しているかを明らかにすることは、病態解明や早期治療に役立つと考えられる。本研究は、ASDのある子どもにおいても、成人同様に人の声を聞いているときに側頭聴覚領域において賦活が見られるのか、また声の処理が経験によって影響を受けるのかを明らかにすることを目的とした。

【対象と方法】参加者は言語や知的な遅れのないASD男児11名 (平均年齢8.6歳, 平均IQ 98.5) と年齢とIQを統制した男児11名 (平均年齢9歳, 平均IQ 109) で、全員右利きであった。刺激は、familiar voice (母親/父親), unfamiliar voice (見知らぬ女性/男性)、環境音の3種類であった。脳計測は、日立メディコ社製ETG-4000を用いて、両側の側頭部位を各22ch計測した。分析対象は、国際10-20法におけるT3, T4付近チャンネル左右言語野近傍のoxy-Hbとした。課題は40秒間の3種類いずれかの刺激を聞いた後、無音が40秒続き、またいずれかの音を40秒子どもに聞いてもらった。各音は3回ずつ全9回呈示した。刺激の順番はpseudo-randomであり、参加者間でカウンターバランスをとった。課題中は、机上の無声映画を見てもらった。

【結果】統制群でoxy-Hbが有意に賦活したチャンネルは、T3, T4付近に集中しており、特にfamiliar条件では左側頭葉T3付近、unfamiliar条件では右側頭葉T4領域であった。ASD群でoxy-Hbが有意に賦活したチャンネルは、環境音条件における左側頭葉の賦活のみであった。賦活した2chにおいて、ANOVAを実施したところ統制群において刺激の主効果が有意であった。下位検定の結果、左側頭葉においてunfamiliar voiceよりもfamiliar voiceにおいて、non-voiceよりもfamiliar voiceにおいて有意な賦活が認められた (それぞれ $p < .05$, $p < .01$)。

【考察】本研究の結果から、ASD成人での知見と同様のことが子どもにおいても確認できた。統制群では人の声を聞いている時に左右側頭葉におけるoxy-Hbの上昇がみられたのに対して、ASD群では見られなかった。特に統制群ではfamiliar voiceは左半球、unfamiliar voiceは右半球に賦活が見られたが、ASD群ではどちらの半球でも低賦活であり、non-voice条件にのみ左半球での賦活が認められた。この結果は、ASDはヒトの声に対して選択的に処理をしていないか、深い処理が行われていないことを示唆する。この側頭領域の側性化や専門化の発達不全はASDのある子どもたちの声への選好の欠如と絡み合っており、中核症状である社会的障害に影響を及ぼすと考えられる。

児童・思春期精神保健研究部

P-7

通常学級に在籍する一般児童・生徒における自閉症的行動特徴の分布と
発達精神医学的ニーズとの関連○森脇愛子, 小山智典, 神尾陽子
児童・思春期精神保健研究部

【背景と目的】特別支援教育(学校教育法一部改正,2006)によって、通常学級における自閉症スペクトラム障害(ASD)の子どもに対する、個々の特性とニーズに応じた適切な支援が広がっている。しかし近年、知的障害を伴わない高機能ASDや臨床閾下となるような軽症例でも、情緒や行動などの合併症状によって単独発症例より適応が悪くなる場合があることが指摘されており(Kanne,2009;神尾,2010)、教育的支援だけでは解決しない発達精神医学的ニーズがあると考えられる。

本研究は、通常学級に在籍する一般児童・生徒における自閉症的対人行動特徴の広がり、そこに併せて出現する発達精神医学的ニーズとの関連について検討することを目的とする。

【対象と方法】対象: 全国10都道府県219校の通常学級に在籍する小学1年生～中学3年生の児童・生徒87,548名を対象とした大規模調査を実施し、約3割の保護者の同意と質問紙への回答を得た。

質問紙: ①自閉症的行動特徴の把握のためにSRS(Social Responsiveness Scale: 対人応答性尺度)日本語版を、②発達精神医学的な問題とニーズの把握のためにSDQ(Strength and Difficulties Questionnaire: 子どもの強さと困難さアンケート)日本語版を使用した。

分析: 性別、学年、2つの質問紙のいずれかに欠損があった者は除外し、対象全体の28.6%にあたる25,075名(男児12762名、女児12313名)の有効回答について解析を行った。

【結果】①SRSスコアは、米国原版と同様に連続的な分布が確認され、Tスコアを基準とした得点も近似していた。また、分散分析の結果、SRSスコアに性別の影響が見られ、男女で分布と平均点に違いがあった(男児平均=34.1点、SD=19.1>女児平均30.9点、SD=17.2)。低学年ほど高得点の傾向はあるが、学年がSRSスコアに及ぼす影響はなかった。

②SRS標準化に基づくTスコアによって自閉症的行動特徴の程度を3群に分類し(ASD-Possible群、ASD-Probable群、ASD-Unlikely群)、それぞれ群別にSDQの5サブスケール(情緒、行為、多動・衝動性、仲間関係、向社会性)の困難さの程度と関連性を調べた。その結果、Possible群の男児81%・女児72%で、Probable群の男児35%・女児31%で臨床レベルの発達精神医学的ニーズがあり、SRSとSDQのスコアは相互に関連した(男児 $r=.68$ 、女児 $r=.63$ 、いずれも $p<.001$)。また、SDQのサブスケールのうち臨床レベルとなる数がUnlikely群・Probable群では1領域以下なのに対し、Possible群の平均は2.17領域と有意に多く、複数領域に問題が出現していた。

【考察】本研究によって自閉症的行動特徴は連続的に分布すること、またその程度が高い子どもほど、発達精神医学的ニーズを高率で、また複数領域にわたって併せ持っていることが明らかになった。ASD診断閾下となるような軽症の子どもにおいても半数以上が何らかの情緒や行動の問題を併発する可能性があり、教育的支援のみならず医療的ケアのニーズが高いことが示された。このことは、ASDを含む発達障害の支援と治療のために教育と医療の連携の必要性についての重要なエビデンスとなると考えられる。

精神薬理研究部

P-8

ベンゾジアゼピン系抗不安薬と異なる薬理作用を示す薬物SYK-01は

ラットにおいて強い抗不安様作用を示した

○杉山梓^{1,2}, 斎藤顕直¹, 山田美佐¹, 稲垣正俊¹, 高橋弘¹,
岩井孝志¹, 牧野祐哉^{1,2}, 岡淳一郎², 山田光彦¹

1)精神薬理研究部 2)東京理科大学薬学部薬理学教室

【背景・目的】現在、抗不安薬としてベンゾジアゼピン受容体作動薬が臨床で用いられている。しかし、ベンゾジアゼピン系抗不安薬には短期記憶への有害作用も報告されている。これまで我々は、ベンゾジアゼピン系抗不安薬とは異なる薬理作用を有する薬物SYK-01について研究を進めてきた。しかしながら、SYK-01の抗不安作用に対する評価系はまだ十分に確立されていない。そこで本研究では、高架式十字迷路試験を用いて薬物SYK-01の抗不安様作用を検討した。また、SYK-01の短期記憶への影響について明らかにするために、Y字型迷路試験を用いて、ジアゼパムとの比較を行った。

【方法】実験には、Wistar系雄性ラットを用いた。陽性対照薬物としてジアゼパムを用いた。SYK-01及びジアゼパムは0.5%カルボキシメチルセルロースに懸濁し、ゾンデを用いて経口投与した。高架式十字迷路試験は、ラットを高架式十字迷路上の中心部に置き、オープンアーム及びクローズドアームへの進入回数及び滞在時間についてビデオモニター上で5分間観察することにより行った。抗不安様効果は、オープンアームへの滞在時間および進入回数を指標として評価した。Y字型迷路試験は、ラットをY字型迷路のアーム先端部に置き、迷路内を8分間自由に探索させることにより行った。ラットが測定時間内に各アームに進入した総回数および連続して異なる3本のアームに進入した組合せの数から交替行動率を調べ、短期記憶の指標とした。

【結果・考察】高架式十字迷路試験の結果、SYK-01は投与60分後において用量依存的かつ有意にラットのオープンアームへの滞在時間および進入回数を増加させた。SYK-01(3 mg/kg)で認められたこれらの効果は、ジアゼパム(1 mg/kg)と同程度であった。Y字型迷路試験の結果、ジアゼパム(1 mg/kg)を投与したラットは、交替行動率を有意に低下させたのに対し、SYK-01(3 mg/kg)を投与したラットは、交替行動率に何ら影響を与えなかった。以上のことから、SYK-01の抗不安作用が高架式十字迷路試験により評価可能であることが示唆された。さらに、Y字型迷路試験の結果よりSYK-01はジアゼパムに比べ投与後の短期記憶への影響が少ないことが示唆され、より副作用の少ない抗不安薬開発のためのリード化合物となる可能性が示唆された。

単離アストロサイトにおける Ndr_g2 のグルコルチコイドによる
発現誘導機構の解明

○高橋弘, 齋藤顕宜, 山田美佐, 岩井孝志, 山田光彦
精神薬理研究部

【背景・目的】我々は、Ndr_g2 (N-Myc downstream regulated gene 2) 遺伝子が、ラット前頭葉皮質特異的に抗うつ薬投与及び電気けいれん負荷で共通して発現減少することを明らかにした。Ndr_g2 は、中枢神経系でグリア細胞の一つであるアストロサイト特異的に発現していることが報告されている。興味深いことに、Ndr_g2 はストレスホルモンであるグルコルチコイドの投与及び慢性ストレス負荷動物において発現上昇する。しかし、グルコルチコイドによる Ndr_g2 発現誘導のメカニズムに関しては明らかとなっていない。そこで本研究では、単離アストロサイトを用いてこの発現誘導機構を明らかにすることを目的とした。

【方法】Wistar 系のラット生後 1-3 日の大脳皮質からアストロサイトを単離・精製した。単離アストロサイトにグルコルチコイド受容体 (GR) の作用薬である dexamethasone (Dex) を処置して Ndr_g2 の発現変化を Real time PCR 法により検討した。また、GR 阻害剤である RU38486 を Dex 刺激 30 分前に、蛋白質合成阻害剤である cycloheximide を Dex 刺激 60 分前に処置して Dex 刺激 24 時間後の Ndr_g2 の発現変化を Real time PCR 法により検討した。次に、Ndr_g2 上流の断片化ベクターを作成した。断片化ベクターは、上流 1003、960、904、853、800、755、701、601、475 bp の 9 種類作成し、プロモーター解析を luciferase assay 法により検討した。

【結果・考察】単離アストロサイトにおいて、Ndr_g2 の発現は Dex の濃度依存的かつ時間依存的に上昇した。また、この発現上昇は、GR 阻害剤である RU38486 により完全に抑制された。一方で、蛋白質合成阻害剤である cycloheximide を処置したところ、Dex 誘発の Ndr_g2 mRNA 発現上昇は抑制された。この結果は、Dex 誘発 Ndr_g2 発現誘導が、GR の直接転写制御によるものではなくではなく、間接的に他の蛋白質を介していることを示唆している。次に、Ndr_g2 の上流の断片化ベクターを作成し、luciferase assay 法により転写領域の同定を行った。その結果、上流 700 bp 未満のベクターにおいて、Dex 誘発の Ndr_g2 の発現誘導が消失した。以上本研究により、グルコルチコイドは、GR を介して間接的に Ndr_g2 の上流 700 から 755 bp の領域で、その発現を制御していることが明らかとなった。

急性期ケアマネジメントモデル導入前後のスタッフの変化

○高原優美子¹⁾, 瀬戸屋雄太郎¹⁾, 前田恵子¹⁾, 佐藤さやか¹⁾, 高橋誠¹⁾,
佐竹直子²⁾, 伊藤友里¹⁾, 伊藤順一郎¹⁾

1)社会復帰研究部、2)国立国際医療研究センター国府台病院

【はじめに】日本の精神科の病棟においてケアマネジメントはまだ導入されておらず、ケアマネジメントの促進は今後の課題である。そのため、本研究では精神科救急・急性期病棟のスタッフに対してケアマネジメント教育を行い、一定期間ケアマネジメントを導入し、このケアマネジメント教育・導入の前後に病棟スタッフに対してアンケート調査を行いケアマネジメントに関する知識、姿勢、関わり方などを比較した。

【調査対象と方法】精神科救急・急性期等をもつ病棟の協力を得た 14 か所の病院の専門職を対象に 2009 年 10 月～1 月に、ケアマネジメント教育を主たる担当チームを集めて全体研修を実施し、さらに各病院スタッフに対して実地研修を行い、その後各病院内でケアマネジメントを導入した。具体的なケアマネジメントモデルは、入院時にスクリーニングを必ず実施し、該当者に対してストレングスモデルに基づいたケアマネジメントを行う。2009 年 8 月～10 月にベースライン調査、2010 年 5 月～10 月にケアマネジメント導入後調査として「精神科病棟におけるケアマネジメントについて」アンケートを配布し、回収した。分析にはソフト PASW Statistics 18 を使用して、ケアマネジメント導入前と導入後を基に、関わり方やストレングス志向性の関係を比較した。

【調査結果と考察】急性期ケアマネジメント介入前の対象者は 504 名、介入後の対象者は 547 名であり、年齢は導入前平均値 37.36(±0.461)、導入後平均値は 37.80(±0.432)であった。対象者のケアマネジメント実施経験がある者は導入前 94 名 (18.9%)、導入後 144 名 (26.3%) であり、全体として導入後の方が 7.4%高くなっていた。過去 1 年間のケアマネジメント実施回数は導入前の平均値 11.32(±2.001)だが、導入後の平均値 9.08(±1.782)と下がっていた。急性期ケアマネジメント導入後は、急性期ケアマネジメントの介入によりケアマネジメントに携わる関係者が増えたことと、ケアマネジメントを導入開始時期により携わる回数が少ない者が増えたと考えられる。詳しい分析内容・考察については当日報告する。

社会復帰研究部

P-11

障害者ケアマネジメントにおける三障害の異同に関する研究

○英 一也, 吉田光爾, 小川雅代, 伊藤順一郎
社会復帰研究部

【はじめに】「三障害合同」の施策のもとに、障害者ケアマネジメントは、原則として対象者の障害領域による区別なく実施されているが、それが妥当なのかとの疑問が臨床現場にない訳ではない。そこで、現場に即した障害者ケアマネジメントの構築に資することを目的に、臨床現場で実践に携わる専門家 180 名に自記式調査を実施し、障害者ケアマネジメントの内容を構成すると考えられる主な要素について、障害領域によって対応が異なるか否かを調査した。

【方法】全国各地の相談支援専門員に無記名による自記式調査を実施した。調査内容は、対象者が主に従事している障害領域を、①「主に身体障害」、②「主に知的障害」、③「主に精神障害」、④「合同で行っている」から選び、その上で、厚労科研の研究班にて作成した「障害者ケアマネジメント・フィデリティ尺度」の中の各項目について、三障害で対応に違いがあるかどうかを、①「対応に完全に違いがある」、②「対応に大きな違いがある」、③「対応に若干違いがある」、④「違いはあまりない」から選ぶようにした。その後、特に対応が難しいと思われる障害領域の1つを①「身体障害」、②「知的障害」、③「精神障害」から選ぶようにした。さらに、自由記述欄を設けて、障害領域によるこれらの異同を比較した。

【結果】有効回答率は 51%であった。「三障害で対応に違いがあるかどうか」への回答として、「完全な違い」と「大きな違い」の合計が全体の 20%を超えた項目は、「時間をかけたエンゲージメント」、「積極的なエンゲージメント」、「医療との連携」、「危機介入」の 4 項目であった。これらについて、「対応が特に難しいと思われる障害領域」としては「精神障害」が特に多かった。また、「契約に基づいた支援」、「サービスの密度」、「関わりの頻度」、「本人の参加」については、「対応が特に難しい障害領域」のみを回答した数が 20 を超え、「サービスの密度」と「関わりの頻度」では「精神障害」を、「契約に基づいた支援」と「本人の参加」では「知的障害」を当該領域とした。自由記述においてもこれらを裏付ける意見が多く見られた。

【考察】他の障害と異なって精神障害での対応が難しいとされた「時間をかけたエンゲージメント」、「積極的なエンゲージメント」、「医療との連携」、「危機介入」については、関係構築の難しさ、病状の不安定さ、危機介入時の病識の問題とそれを取り巻く法規への対応等の要因が背景として考えられた。一方、「契約に基づいた支援」と「本人の参加」については、知的障害領域での対応が特に難しく、同領域に特有の意思疎通の難しさが背景として考えられた。同様に、「サービスの密度」、「関わりの頻度」については、精神障害領域での対応が難しく、支援者と対象者の間の関係性が背景として考えられた。「三障害合同」による対応や評価をさらに充実させてゆくためには、これらの側面への配慮が検討課題であることが示唆された。

成人精神保健研究部

P-12

日本版複雑性悲嘆スクリーニング尺度の信頼性と妥当性
：一般成人を対象とした検討○伊藤正哉¹⁾, 中島聡美¹⁾, 藤澤大介²⁾, 宮下光令³⁾, 金吉晴¹⁾
1)成人精神保健研究部

2)国立がん研究センター東病院 臨床開発センター 精神腫瘍学開発部

3)東北大学大学院 医学系研究科 保健学専攻 緩和ケア看護学分野

【背景と目的】複雑性悲嘆は、それに苦しむ患者の心身の健康に悪影響を及ぼすことが報告され、DSM-V への診断基準の包含が検討されている。しかし、専門家の間においても複雑性悲嘆は広く認知されているとは言えず、これまでの精神医療において看過されてきた。本研究は、複雑性悲嘆のためのスクリーニング尺度である簡易悲嘆質問紙 (Brief Grief Questionnaire: BGQ) を翻訳し、日本人への適用可能性を検討することを目的とした。

【対象と方法】現著者による検討を含んだ逆翻訳の手続きを経て、BGQ が日本語に翻訳された。層化二段抽出法によって無作為に選ばれ、有効回答を示した 915 名(40 - 79)の日本人成人を分析対象とした。調査用紙にはデモグラフィック要因と BGQ(Shear et al., 2006)の他、全般的な精神症状の程度を測定するために K6(Furukawa et al., 2008)が含まれていた。

【結果】確認的因子分析を多母集団同時分析にて行ったところ、BGQ の単因子構造について十分な適合度が得られた。さらに、性別と年代で変数の測定に等値制約を置いた上でも十分な適合度が認められた。クロンバックのアルファ係数は十分な水準であった ($\alpha = .75$)。また、BGQ は全般的な精神症状の深刻さと低い相関関係にあった ($r = -.32, p < .01$)。

【考察】以上から、BGQ には一定の信頼性と妥当性が認められると判断できる。今後の研究では、構造化面接やより詳細な尺度による複雑性悲嘆の診断を標的として、BGQ の予測的妥当性を検討することを予定している。

成人精神保健研究部

P-13

Cardiovascular Activities during Mental Stress among Fish Eaters

○Kenta Matsumura¹⁾, Hiroko Noguchi²⁾, Takehiro Yamakoshi³⁾, Yutaka Matsuoka¹⁾

1)Department of Adult Mental Health, 2)Musashino University, 3)Kanazawa University

Objective: Human studies have shown that habitual fish consumption protects against coronary heart disease. Recent studies on cardiovascular function and hemodynamics have elucidated the mechanisms underlying this cardioprotective effect. For example, habitual fish consumption is associated with reduced resting heart rate. However, no study, to our knowledge, has examined the effect of frequent fish consumption on cardiovascular activities during mental stress. This is surprising considering that exaggerated cardiovascular responses during mental stress have been implicated in the pathogenesis of coronary heart disease. Accordingly, we examined whether the reduced cardiovascular activities observed in fish eaters during rest persist during acute mental stress.

Methods: Fish eaters (10 women and 2 men eating baked fish more than 3-4 times/week, $M = 21.4$, $SD = 3.7$ years, Japanese) and controls (11 women and 2 men eating fish less than 1-2 times/week, $M = 21.9$, $SD = 3.1$ years, Japanese) performed mental arithmetic (MA) and mirror-tracing (MT) tasks during which cardiovascular indices were measured. Measures included heart rate (HR), pre-ejection period (PEP), mean blood pressure (MBP), baroreflex sensitivity (BRS), and pulse wave velocity (PWV).

Results: A series of separate 2-way mixed-design ANOVAs with the factors group (fish eater and controls) and period (baselines, MA, MT) revealed that HR, BP, and PWV were significantly lower, and PEP and BRS were significantly higher in the fish eaters than in the controls during rest and while performing tasks. No significant interactions were observed.

Discussion: These findings clearly support the view that reduced cardiovascular activities during rest are also observed during mental stress in fish eaters, and that this is a characteristic of cardiovascular activity, rather than a response. Considering that elevated BP, HR, and PWV are cardiovascular risk factors, we recommended the practice of frequent fish consumption be adopted at a young age, rather than after symptoms of cardiovascular diseases appear, to the extent of choosing smaller and short-lived species that contain low toxic substances such as methylmercury, PCBs, and dioxins.

司法精神医学研究部

P-14

患者参加型ケア「患者によるケアの選択」に関する質的研究

医療観察法病棟の入院患者と看護師の視点

○小松容子¹⁾²⁾, Lovell Karina²⁾, Baker John²⁾

1)司法精神医学研究部 2)The University of Manchester

【背景と目的】精神科医療におけるサービスユーザー・ムーブメントの歴史の中で、「選択の機会がある」ことが、ノーマライゼーションのための重要な事柄のひとつとされている。精神保健サービスの質の向上のためにも、患者をエンパワーすることや、患者の意向を尊重することが重要であることは、グローバルな共通認識とされている。研究者たちは、精神保健サービスについての患者の視点や、ケア計画立案時の患者による選択についての精神科看護師の視点などの研究を行ってきた。しかし、精神科医療の中でも、司法精神科医療の分野においては、この患者の主体性を尊重したケアや、患者によるケアの選択に関する研究は殆どなされていない。しかしながら、司法精神科医療においても、これらについての関心はヨーロッパ圏を中心に徐々に高まってきている。日本における司法精神科医療でも、関心が寄せられつつあるが、患者自身、そして看護師自身の見解は明らかにされていない。そこで、本研究では、日本の司法精神科医療における患者によるケアの選択について、入院患者と看護師の見解を探索的に明らかにすることを目的とした。

【対象と方法】本研究では、日本で司法精神科医療を実施している病棟を選択し、その病棟で働く看護師および入院中の患者を研究対象とした。データ収集は半構造化面接を用いて行い、患者自身がケアの選択をすることについての見解や経験について自由に語ってもらった。面接内容は、録音し逐語録を作成した。データの分析は、4名の看護師と3名の患者の逐語録のデータをもとに、テーマごとに分類を行う質的分析を用いた。

【結果と考察】初期的分析の結果から、看護師は、患者自身がケアの中で選択を行うことについて重要なことだと考えており、このことは、信頼関係の構築に有利であると長所を見出していた。しかし、患者との考えの対立という短所も経験していた。入院患者は、選択の機会について好意的に感じている一方、自分で考えて選ぶことは面倒であるという見解もあった。また、患者自身が司法制度の中で劣勢の立場にあると認識し、服従的・受動的な姿勢も明らかとなった。全体として、患者による選択の機会は少ないが、しかし、患者による選択は大切なことだと看護師は認識しており、また、看護師および患者の双方が、患者自身による選択の利点を見出していることから、このような機会が増えていく可能性はあると考えられた。

司法精神医学研究部

P-15

触法精神障害者を対象とした統合失調症と
暴力の効果に関する白質神経構造異常について

○西中宏史¹⁾, 宮田 淳²⁾, 福井裕輝¹⁾

1)司法精神医学研究部 2)京都大学医学研究科精神医学教室

【背景と目的】平成 17 年 7 月に、「心神喪失等の状態で重大な他害行為を行った者の医療および観察等に関する法律」(医療観察法)が施行されて、まもなく 6 年が経過しようとしている。医療観察法の対象者のうち、8 割以上を統合失調症が占めている。統合失調症患者においては、わずかな白質異常が脳の多領域で確認されているにもかかわらず、暴力の既往のある統合失調症患者を対象に脳白質を調べた研究は、関心領域を前頭葉に定め、眼窩前頭前皮質での異常を報告したものが唯一存在するのみである (Hoptman et al., 2002)。本研究は、暴力のある統合失調症患者にみられる白質異常を、全脳レベルで明らかにすることを目的とした。

【対象と方法】重大な他害行為(殺人、放火、強盗、強姦、強制猥褻、傷害)を行なった統合失調症患者 14 名、重大な他害行為のない統合失調症患者 10 名、重大な他害行為を行なった統合失調症ではない者 11 名、健常者 12 名を対象に、拡散テンソル画像 (DTI) を撮像した。tract-based spatial statistics (TBSS; Smith et al., 2006)を用い、全脳における白質神経構造の指標である Fractional Anisotropy (FA)を調べ、各群で比較した。

【結果】暴力の有無にかかわらず統合失調症患者群と統合失調症でない群の比較(統合失調症の効果)では、前頭葉背外側領域で FA 値が低下していた ($P_{\text{uncorrected}} < 0.001$)。統合失調症の有無にかかわらず他害行為のある群と他害行為のない群の比較(暴力の効果)では、側頭葉領域で FA 値が低下していた ($P_{\text{uncorrected}} < 0.001$)。他害行為のある統合失調症患者群とその他 3 群の比較(統合失調症と暴力の効果の相互作用)では、前頭葉背外側領域で FA 値の低下が見られた。($P_{\text{uncorrected}} < 0.001$)。統合失調症の効果で低下していた領域と重複していた。この領域では、健常者群、統合失調症なし・暴力無し群、統合失調症あり・暴力無し群、統合失調症あり・暴力あり群の順で FA 値が低下していた。

【考察】暴力の効果の現れた領域は、他者の状態を推測する能力に関わる心の理論、eyes gazing、biological motion といった社会認知機能に重要な役割をはたす。これらの機能の低下が暴力のリスクを高めると考えられる。統合失調症の効果と統合失調症と暴力の相互作用が重複して、前頭葉背外側領域に現れた。前頭葉背外側領域は主に遂行機能やワーキングメモリの機能を担っている。統合失調症によっても生じる神経学的な病理(主に遂行機能)の重篤さによって、暴力のリスクが高まることが示唆される。

精神保健計画研究部

P-16

断酒会と共同したアルコール依存症患者のメンタルヘルス支援についての検討
- 自殺予防の観点に着目して -

○赤澤正人¹⁾, 立森久照¹⁾, 松本俊彦²⁾³⁾, 竹島 正¹⁾²⁾

1)精神保健計画研究部 2)自殺予防総合対策センター 3)薬物依存研究部

【背景と目的】アルコール依存症は、健康問題、経済・生活問題、家庭問題等を生じさせ、自殺との関連性も高い精神疾患であり、患者・家族の支援は社会的にも重要な課題である。アルコール専門医療の中で断酒を目的とした自助グループへの参加が推奨されているように、自助グループの活動は、患者の回復に大きな役割を果たしているといえる。本研究では、患者・家族のメンタルヘルス支援が必要な諸問題の一例に自殺予防を取り上げ、断酒会活動の実態把握のために行われた調査結果と、断酒会員対象の既報告(赤澤ら, 2010)とを合わせて、断酒会と共同した自殺予防の取組における留意点を検討することを目的とした。

【対象と方法】全日本断酒連盟に調査の協力を依頼し、全国 586 箇所の地域断酒会対象の組織調査および断酒会員対象の個別調査を実施した。組織調査票では、地域断酒会の代表者複数名による回答を依頼し、断酒会で経験した自殺と思われる死、自治体の自殺対策への参加状況や他組織団体との意見交換の状況等を尋ねた。断酒会員を対象にした個別調査票では、自殺関連行動の経験の有無とその時期、K10 質問票日本語版で精神的健康等を尋ねた。

【結果と考察】ここでは組織調査の主要な結果のみを記す。組織調査票は 276 か所の地域断酒会から回答が得られた(回答率 47.1%)。平成 20 年中に、地域を対象に酒害相談を行った断酒会は 140 か所 (50.7%) であり、断酒会員の自殺と思われる死を経験した断酒会は 38 か所 (13.8%) であった。そして、同年中における自治体の自殺対策に関する会議や研究会への参加状況を見ると、自殺対策に関する連絡協議会への委員として参加が 34 か所 (12.3%)、研究会への講師・シンポジストとしての参加が 30 か所 (10.9%) であった。同じく同年中、自殺対策に限らずに他の組織団体と意見交換を開催した実施状況では、精神科医療機関が 122 か所 (44.2%) と最も多く、次いで保健所が 109 か所 (39.5%)、精神保健福祉センターが 94 か所 (34.1%)、市町村が 70 か所 (25.4%) であった。

自殺対策への参加状況について、1 割程度の断酒会が参加しており、自殺対策に関して自治体と断酒会の連携が一部ではあるが構築されていた。1 年間という限られた期間で、会員の自殺と思われる死を 1 割強の断酒会が経験しており、個別調査における自殺関連行動の高い経験率と合わせて、断酒会内での自殺のポストベンションの必要性が示唆された。個別調査から、会員の中にはアルコール使用障害と気分障害や不安障害が併存していると考えられる者、あるいは家庭や健康問題を抱えている者がおり、既になされている断酒会と医療機関や相談支援機関との意見交換や連携を強化・継続していくことが重要であると考えられた。

医療保護入院患者の保護者に関する研究

○趙 香花¹⁾, 長沼洋一¹⁾, 堀井茂男²⁾ 野口正行³⁾ 河野稔明¹⁾,
立森久照¹⁾, 白石弘巳⁴⁾, 竹島 正¹⁾

1)精神保健計画研究部 2)岡山県精神科病院協会/慈主病院
3)岡山県精神保健福祉センター 4)東洋大学ライフデザイン学部生活支援学科

【背景と目的】わが国の精神科入院患者の約4割は、医療保護入院患者が占めており、精神科医療の中で重要な役割を担っている。医療保護入院では、精神保健福祉法20条～22条による保護者責任が義務づけられているが、保護義務の履行状況や、保護者および医療機関の経験している同制度の問題点は十分明らかにされていない。本研究の目的は、医療保護入院患者の保護者の状況と保護義務の履行状況、保護者および医療機関が経験している問題点を明らかにすることによって、制度の適正な運用の資料とすることである。

【対象と方法】岡山県の精神科病院24ヶ所のうち、本調査への協力を打診し、協力の承諾を得られた20の病院に、①対象病院の在院患者数や医療保護入院制度で経験した課題、②平成22年12月1日時点での医療保護入院患者全員の属性や保護者の状況、③保護者の属性、生活状況、保護義務の履行状況、④保護者が市町村長である場合の義務状況と課題、などに関する4種類の調査票を郵送した。各病院には、①②についての返答、および各病院に医療保護入院している患者の3分の1に該当する保護者宛て(約850名)に③④の郵送を依頼した。調査実施期間は、平成22年12月15日～平成23年2月4日である。

【結果と考察】平成23年1月21日時点で、15の病院から①②の回答が得られた。その結果、在院患者3,352名のうち、医療保護入院患者は約54%(1,809名)で、全国平均の40%よりやや高い割合を示していた。保護者の続柄別には、後见人・保佐人が6.3%、配偶者が18.9%、親が12.5%、兄弟姉妹が24.1%、子が27.2%、その他の親族が3.1%、市町村長が7.0%であった。また、③④については、平成23年1月21日時点で、370名から回答(回答率:43.5%)を得た。

保護者のことで医療機関が経験した問題としては、「保護者の住所地が海外または国内遠隔地であるため、実質的に保護義務を果たせない」、「保護者が患者の面会などのために来院しない」が最も多く、医療機関が保護者との連絡に困難を抱えていることが推察できた。また、保護者の選任に必要な法定期間が4週間であるにもかかわらず、長期間延長され(1ヶ月～3ヶ月)対応に困難を経験した医療機関も約5割あった。今後は、保護者からの調査票の回答を分析し、医療保護入院患者の診断名、入院期間、保護者の続柄、保護者の社会・経済的状況別による保護者義務の履行状況、および保護者支援についての検討を行う予定である。

日本語版SIRIの短縮版作成の試み

○川島大輔, 川野健治
自殺予防総合対策センター

【背景と目的】自殺予防研修の効果測定指標として開発されたSuicide Intervention Response Inventory (SIRI)の日本語版(SIRI-J)は、項目数が多く、回答者への負担が小さくないことから、改善の余地がある。そこで本研究ではSIRI-Jの短縮版(SIRI-JS)を作成する。まずSIRI-Jの計算式を確定したデータの再分析を行う。元の尺度が測定していた特性と齟齬のないように、因子分析の結果を利用して項目を抽出する。同時に抽出された項目の妥当性と信頼性を確認することでSIRI-JSを準備する(研究1)。次に自殺予防に関する研修の参加者を対象として、SIRI-JSの妥当性と信頼性を確認する(研究2)。

【研究1】対象 第1回自殺対策相談支援研修における研修参加者108名(男性24名,女性84名)を対象に、研修効果を測定する目的で質問紙調査を実施した。

方法 短縮版の作成にあたり、尺度の内容的妥当性を担保するため、元の尺度の中核を捉えた項目の抽出が重要であると判断した。そこで研修前後での各項目の得点を用いて探索的に因子分析を実施し、SIRI-Jの因子構造を確認した。そして因子構造をもとに短縮版の項目を選定し、SIRIの原著者から同意を得た。また作成した指標の妥当性と信頼性を確認した。

結果 因子分析と項目の吟味の結果、「変更」と「肯定」の2因子(各5項目)、そして危機介入に関する3つの単項目の合計13項目からなるSIRI-JSを作成した。「変更」と「肯定」の2因子については、内的一貫性による信頼性($\alpha=.70\sim.82$)、因子的妥当性を確認した。またSIRI-Jの下位尺度得点との相関係数の高さ($r=.78\sim.89$)から、縮約された尺度が原版の情報を十分反映していることを確認した。

【研究2】対象 第2回自殺対策相談支援研修の参加者75名を対象に質問紙調査を実施し、最終的に回答に不備のなかった73名(男性12名,女性61名)を分析の対象とした。

方法 SIRI-JS,自殺予防と遺族支援に関する基本的知識,自殺対応への自信,基本的属性等をたずねた。研修前後での基本的知識と自殺対応への自信の変化を測定し、研修の効果を確認した。その上で、SIRI-JS下位尺度の因子的妥当性および信頼性を再度確認した。下位尺度得点の研修前後での変化を測定し、研修の効果を測定しうる構成概念妥当性を確認した。

結果 SIRI-JSの因子構造の安定性と信頼性が確認された。同時に、正しい知識の習得を促し、自殺対応への自信を高めたことが確認された研修について、プレ・ポストの得点変化から、SIRI-JSでもその効果を測定できていることが確認された。

【結論】SIRI-JSは日本において自殺予防研修の効果を測定する上で有効な指標である。今後、様々な対象に対する多様なプログラムの研修効果を測定することを通じて、SIRI-JSによる知見の積み上げを行うことが望まれる。

自殺予防総合対策センター

P-19

明治 11 年から明治 31 年のわが国における自殺死亡の推移

○山内貴史, 竹島 正
自殺予防総合対策センター

【目的】平成 19 年に閣議決定された自殺総合対策大綱では、既存の政府統計および関係機関が保有する資料の利活用による自殺の実態調査を進めつつ、その成果に基づいた自殺対策の推進が求められている。本報告では、人口動態調査による自殺統計が公表され始めた明治 32 年以前のわが国の自殺死亡に係る政府統計について調査するとともに、それに基づいた自殺死亡の推移を明らかにすることを目的とした。

【方法】明治 32 年以前のわが国の自殺死亡に係る統計資料について、国立国会図書館等で閲覧・収集可能な文献の調査を行った。また、自殺死亡統計と対応する年次の日本人人口データも併せて収集し、各年次の自殺の粗死亡率（人口 10 万対）を算出した。

【結果および考察】自殺死亡のみを対象としたわが国の最も古い政府統計は、明治 11 年の内閣統計局編『日本帝国統計年鑑（中村隆英復刻版監修、原題「帝国統計年鑑」）』の「警察」の項に「自ら死セン人」として公表されたものと考えられた。本年鑑の自殺死亡数ならびに人口に係る統計を用い、明治 11 年から明治 31 年にかけての性別の自殺死亡数および自殺死亡率を算出した結果、死亡数については総数で 3,800~8,700、男性では 2,500~5,300、女性では 1,200~3,300 の範囲で推移し、死亡率については総数で 10~20、男性では 14~24、女性では 7~15 の範囲で推移していた。自殺死亡率は一貫して男性の方が女性よりも高かった。また、本報告で算出した自殺死亡率を昭和 53 年以降の警察統計と比較した結果、明治 23 年から 31 年にかけての全体の粗死亡率は平成 10 年の自殺死亡急増以前の死亡率と概ね同水準であることが示唆された。

【結論】明治 11 年から同 31 年の警察統計に基づくわが国の自殺死亡率は総数では 10~20 の範囲で推移しており、明治 23 年から 31 年では 17 以上と相対的に高率であった。

心身医学研究部

P-20

機能画像を使った、体形の不満と自尊感情に関する研究

○兒玉直樹¹⁾, 守口善也²⁾, 安藤哲也¹⁾, 菊地裕絵¹⁾, 小牧 元¹⁾

1) 心身医学研究部, 2) 精神生理研究部

【目的】自己の体形の評価のゆがみは摂食障害の中核的な病理である。一般に自己への評価は他者との比較によって決定されることが多いとされており、自己の体形への評価にも同様のことが考えられる。今回我々は脳機能画像を用いて、自分の体形を他者の体形と比較している時の脳活動を予備的に検討した。

【対象と方法】健常女性 8 名（年齢 21.4±0.3 歳, 身長 158±1.8 cm, 体重 47±1.8 kg, BMI 18.8±0.6 kg/m²）。「るいそう」「標準体形」「肥満」の 3 種類の女性の体形につき、それぞれ 12 方向の計 36 枚の画像をコンピュータグラフィックによって作成した。fMRI 撮像においては、各々の画像を被験者に提示する前に以下の 2 種類の教示画像のいずれかを 2.5 秒呈示し、その教示に従って体形画像を注視させた。1) 画面の女性の体重を推定させる (weight estimate task), 2) 画面の女性と自分の体形を比較させる (compare task)。各々の体形画像は各 5 秒ずつ、2 つの教示について提示し、その際の脳血流変化 (BOLD signal) を fMRI にて測定した。撮像には 1.5T MRI (Siemens) を用い、解析は SPM8 により行った。fMRI 撮影後に各々の提示画像をスキャナの中で見たときに推定した体重 (kg) と、自分と画面の女性を比較したときの不安感 (7 段階評価) との 2 点につき回答させた。また、現在の身長・体重、理想とする体重、ローゼンバーグ自尊感情尺度 (以下 RSES) の回答を得た。

【結果】心理テストでは、理想体重の BMI と RSES は正の相関 ($r_s=0.896, p<0.005$)、また、理想体重の BMI が低いほど、るいそうの画像と自分の体形を比較した時の不安感が高かった ($r_s=-0.824, p<0.05$)。この結果から、自己の理想体重が低い (やせ願望が大きい) ほど、自尊感情が低くなり、やせている他者との比較で不安になりうるということが明らかとなった。

fMRI の解析では、理想体重の BMI が低いほど、自分の体形とるいそうの画像を比較すると左扁桃、右前帯状回、後帯状回の活動が上昇し、また理想体重の BMI が低いほど、自分の体形と肥満の画像を比較すると腹側線条体の活動が上昇した (thresholded at $p < 0.005$ (uncorrected) including at least 50 contiguous voxels)。

【考察と結語】扁桃や前帯状回は不安や不快情動と関連し、後帯状回は自己イメージに関連する領域と言われる。理想体重が低い、つまりやせ願望が強いほど、やせている他者との比較を行うと不安になり、なおかつ自己イメージを強く意識することが今回の脳機能画像上で示唆される。また腹側線条体は報酬系に関与していると言われており、やせ願望が強いと、自分が他人よりもやせていると感じることが、より大きい報酬となっていると考えられる。

以上より、若年女性において、やせ願望が強いと、「自分より太っている他者との比較」は報酬となるために、他者との体形の比較をより頻回に行うと考えられるが、その一方で「自分よりやせている他者との比較による不安」とともに「自己の体形への意識」が体形に対する不満を生じさせ、自尊感情を低下させる一因となる可能性が示唆される。

中学生の摂食障害傾向地域調査

○長谷部智子¹⁾, 西村大樹²⁾, 東條光彦³⁾, 立森久照⁴⁾, 前田基成⁵⁾,
菊地裕絵¹⁾, 安藤哲也¹⁾, 小牧 元¹⁾

1)心身医学研究部, 2)岡山県立精神科医療センター, 3)岡山大学大学院 教育学研究科,
4)精神保健計画研究部, 5)女子美術大学芸術学部

【目的】近年摂食障害発症の低年齢化が指摘されている。そこで今回は地域の中学生の摂食障害傾向の実態を把握することを目的としてアンケート調査を行った。

【対象と方法】首都近郊・地方の2都市から、それぞれ地域内で偏りのないよう計36中学校の生徒(1~3年)5,977名(女3,008名, 男2,969名)を対象に、<1>摂食障害診断質問紙(EDE-Q 6.0)日本語版28項目、<2>摂食障害発症危険因子質問22項目、<3>日常ストレス関連項目、身長・体重を回答させた(自宅で記入、無記名、都市別回収率80.0%、73.5%)。EDE-Q6.0はER(食事制限)、EC(食事へのこだわり)、SC(体形へのこだわり)、WC(体重へのこだわり)の4つのSubscale、また全体を表すGlobal Score(GS)で構成される。Subscale、GS共に4点以上が臨床上有意味な摂食障害傾向とされる。尚、女生徒においてはGS4点以上を目的変数に、また男女生徒それぞれに不適切な代償行為(下剤もしくは嘔吐)を目的変数に、発症危険因子質問22項目、BMI、学年を説明変数としてロジスティック回帰分析を行った。

【結果】EDE-Qのサブスケール4.0点以上を示したものはER(女vs男:2.2% vs 0.5%)、EC(0.3% vs 0.1%)、SC(10.4% vs 0.8%)、WC(7.0% vs 0.8%)、摂食障害全体評価をあらわし、臨床的に有意に危険とされるGlobal Score4点以上は(1.9% vs 0.2%)であった。むちゃ食い(2回以上/28日)は(3.5% vs 1.3%)、不適切な代償行為(10.3% vs 5.8%)に関しては、下剤の不適切な使用(2回以上/28日)は(1.1% vs 0.7%)、自己誘発性嘔吐(2回以上/28日)は(1.4% vs 0.9%)、8時間以上の絶食(2回以上/28日)は(3.6% vs 2.6%)、過度の運動(2回以上/28日)は(6.8% vs 3.8%)であった。女性においてGlobal Score4点以上を目的変数としたロジスティック回帰分析では、「食事の時にカロリーが気になる」(OR 3.70, p<0.001)、「夜遅くまで起きていることが多い」(OR 1.83, p=.009)、「家族との食事は楽しくない」(OR 1.78, p<0.001)、「家族からもう少しやせたらと言われる」(OR 1.77, p<0.001)、「他の人と同じ位うまくしないと自分は劣った人間であることを意味する」(OR 1.60, p=0.007)の5項目が抽出された。また、不適切な代償行為(下剤もしくは嘔吐)を目的変数としたロジスティック回帰分析では、男女に共通して、「通学途中で痲漢にあったことがある」(OR 2.43, p<0.001; OR 2.08, p<0.001)が抽出され、排出行為と性的被害との関連が示唆された。

【結論】中学生徒における摂食障害傾向ならびに不適切な代償行為、それに関連する因子が明らかとなった。

循環器系薬剤と向精神薬による薬物相互作用の整理

○池野敬, 福内友子, 伊藤弘人
社会精神保健研究部

【目的】臨床では、薬剤を単独で投与するよりむしろ複数の薬剤を併用することが多く、併用薬剤における相加相乗効果や拮抗作用などを利用し、薬物治療の効果をより向上させることが可能である。ところが、生体内における薬物の吸収、分布、代謝、排泄の作用機序が解明されるにつれ、薬物の体内動態が併用薬物間に相互作用を示すことが明らかとなってきている。特に肝臓に多く存在しているチトクロム P450(CYP)は多くの薬物の代謝に関与していることが知られており、薬物の体内動態による影響を考慮しなければ、予期せぬ副作用を生じかねない。そこで、本研究では、CYPに関連する薬物相互作用を整理した。

【方法】抗うつ薬を含む向精神薬をはじめとした日本薬局方収載の医薬品に対し、多くの薬物の代謝に関与しているCYP 1A2, 2D6, 2C9, 2C19, 2E1 および 3A4 に着目し、MEDLINEより網羅的に調査した。MEDLINEによる調査の対象は、vitroおよびvivoについて研究結果が示されている文献である。次に、収集した薬物とCYPの関係性をまとめた結果を用い、Strain JJ(Heart Dis. 2001; 3(4): 248-62.)らによって報告された67の循環器系薬剤および66の向精神薬における64種類の循環器系薬剤と向精神薬の組み合わせを対象とし、CYPがかかわる薬物相互作用について検討した。

【結果】Strain JJらが報告した64種類の「循環器系薬剤」と「向精神薬」の組み合わせに関し、CYPのかかわる薬物相互作用について説明できた組み合わせは31種類あった。そのうち、CYP 3A4を阻害する薬物の併用による影響が最も多く、13種類の組み合わせについて説明できた。次いでCYP 3A4を誘導する薬物の併用によるものが6種類、CYP 2D6の阻害によるものが9種類あった。一方、CYPによる薬物への影響が説明できなかったものは、5種類であり、その特徴として、循環器系薬剤とLithiumとの組み合わせであった。他に、CYPアイソザイムの調査もしくは研究の報告がなかった薬物との組み合わせが28種類あった。

【考察】CYPには基質特異性の異なる多くの分子種があり、これら分子種に親和性が強く基質となる薬物、阻害薬物、誘導薬物が既に報告されている。本研究では、CYP 3A4ならびにCYP 2D6による薬物相互作用に関与している薬物が多かった。これは肝臓におけるCYP 3A4により多くの薬物が代謝を受けていることに反映していると推察される。実際、CYP 3A4は肝臓における全てのCYPアイソザイムの25-30%を占めると言われている。一方、CYP 2D6は肝臓において1-2%にすぎない。しかし、本研究では10種類の薬物の組み合わせに関与していることが考えられたことより、精神科領域の薬物を扱う際には、CYP 3A4と同程度にCYP 2D6による薬物への影響を考慮する必要があることが示唆された。また、循環器系薬剤とLithiumのように、腎臓で完全に排泄されるような薬物を併用した場合、腎機能に変化を与える薬物は、腎臓により排泄される薬物の排泄率を変える可能性があるため、副作用の発現の頻度が高くなる恐れがある。そのため、薬物動態の変動による薬物相互作用の影響のみを考慮するのではなく、排泄経路による影響も視野に入れ、薬物の投与設計を行うことが求められると考える。

社会精神保健研究部

P-23

精神疾患、悪性新生物、心疾患と脳血管疾患による病欠日数の比較

○奥村泰之, 伊藤弘人
社会精神保健研究部

【背景と目的】 大うつ病性障害による経済損失は1年間(2008年)で1兆2900億円に計上され、損失の85%は自殺や労働生産性の低下などの間接費用であることが示されている(Okumura, Higuchi: in press)。このような疾病費用の研究は、研究費等の限られたリソースを配分する際の資料となる。しかし、従来の疾病費用の研究は、(1) 間接費用の推計の際に多くの仮定を置いていること、(2) 疾病間の比較をしていないことなど課題が残されている。そこで、本研究では、精神疾患、悪性新生物、心疾患と脳血管疾患の病欠日数を比較することを目的とした。

【対象と方法】

<データ源> 2007年6月に実施された国民生活基礎調査のデータを用いた。

<研究法> 層化無作為抽出法により世帯を抽出し、全世帯員を抽出した横断研究である。

<評価項目> 過去1か月間に健康上の問題で動けなかった日数。

<独立変数> 現在、以下の疾患により通院しているか否か:(1) うつ病やその他のこころの病気、(2) 悪性新生物(がん)、(3) 狭心症・心筋梗塞、(4) 脳卒中(脳出血、脳梗塞等)。

<調整変数> 性別、年齢、居住地区の人口。

<統計解析> 第1に、分析対象を、(1) 20歳以上、(2) 諸項目の回答に欠損のない者に限定した。第2に、傾向スコア調整法により、疾患ごとに調整変数が類似の健常対照群を抽出した。第3に、各疾患の有無を独立変数とし、評価項目の平均値差と効果量を算出した。

【結果】 調査対象である287,807世帯から、229,753世帯に属する621,648名より回答を得た。適格基準に該当した430,629名を分析対象とした。通院者数は、精神疾患が6,628名(男性:39.1%,平均年齢:50.3歳)、悪性新生物が2,735名(男性:42.3%,平均年齢:63.2歳)、狭心症・心筋梗塞が8,299名(男性:71.6%,平均年齢:57.2歳)、脳卒中が5,832名(男性:70.9%,平均年齢:62.3歳)であった。疾患ごとの病欠日数の健常対照群との差異は、精神疾患において最も大きかった(g:0.69)。具体的な病欠日数の増分は、精神疾患が4.6日(g:0.69,95%CI 0.66-0.73)、悪性新生物が3.9日(g:0.59,95%CI 0.54-0.64)、狭心症・心筋梗塞が2.3日(g:0.38,95%CI 0.34-0.41)、脳卒中が4.7日(g:0.58,95%CI 0.54-0.62)であった。

【考察】 研究対象とした4疾患のうち、病欠日数の健常対照群との差異は、精神疾患において最も大きかった。この結果は、精神疾患への対策は、我が国の3大死因の疾患と同等に、社会的に重要であることを示唆する。

【関連する業績】 Okumura Y, Higuchi T: Cost of depression among adults in Japan. The Primary Care Companion for CNS Disorders. in press.

薬物依存研究部

P-24

HIV 感染予防に対するメサドン維持療法(MMT)の有効性に関する

研究の傾向について: 文献レビュー

○小堀栄子, 嶋根卓也, 和田 清
薬物依存研究部

【背景】1980年代にHIV感染が世界的に流行し、薬物注射使用者の間できわめて高い感染率が報告されるようになって以来、薬物治療においては薬物関連リスク行動の低減のみならず、HIV感染を予防することが求められてきた。

【目的】 HIV感染予防に対するメサドン維持療法(methadone maintenance therapy 以下、MMT)の有効性に関する研究の傾向について、HIVが流行し始めた80年代から現在までを対象として明らかにし、薬物注射使用者についての有効なHIV感染予防に関する今後の研究の方向性を考察する。

【方法】 PubMedを用いて関連文献を検索した。検索条件、検索式、検索実施日は次の通り。

検索条件: only items with abstracts, Humans, English, Japanese, Field: Title/Abstract

検索式: (("Methadone"[Mesh] OR "Buprenorphine"[Mesh]) AND "HIV Infections"[Mesh]) AND "prevention and control"[Subheading]

検索実施日: 2011年1月18日

【結果】 全部で209件の文献が抽出された。このうち、HIV感染予防に対するMMTの有効性とは直接的に関連しない文献を除外し、最終的に58件の文献を分析対象とした。最初の論文は1991年の出版であった。90年代前半(1991-95)が26件で全体の44%を占める。その後90年代後半(1996-2000)及び2000年代前半(2001-2005)は少なく、それぞれ9件(15.5%)、5件(8.6%)で、2000年代後半(2006-2010.1)になって18件(31.0%)と再び増える。90年代前半の文献はMMT受療者を対象に受療前後で薬物及びHIV感染リスク行動を比較してMMTの有効性を検証しようとする文献が多いのに対し、2000年代後半の文献は、治療方法がMMTのみの場合と、MMTと他のプログラムを組み合わせた場合を比較することでHIV感染予防に対する効果を論じる文献が多くを占める。

【考察】 HIV感染予防に対するMMTの有効性に関する研究は、MMTそのものの有効性を示す研究が蓄積されるに従い、現在ではMMTと他のプログラムの組み合わせによってより高い効果のある治療法を見出そうとする研究が増えている。

クラブユーザーにおける MDMA 等のクラブドラッグ乱用実態に関する研究

○嶋根卓也¹⁾, 日高庸晴²⁾, 和田 清¹⁾

1)薬物依存研究部, 2)宝塚大学看護学部

【背景】近年、MDMA(3,4-methylenedioxyamphetamine)等のクラブドラッグと呼ばれる薬物に関連する事件が相継ぎ、社会的な関心が高まっている。クラブドラッグとは、クラブ(*1)や野外での音楽イベント(レイブパーティ等)で使用されることが多いといわれる薬物の総称であり、MDMA、ケタミン(Ketamine)がその代表格である。わが国では、クラブドラッグによる急性中毒や薬物依存の症例が先行的に報告されている一方で、クラブ利用者層を対象とした薬物依存領域の疫学研究はこれまでに行われておらず、クラブドラッグの乱用実態や使用者属性などの疫学情報は依然として不明である。

【目的】クラブユーザーにおける MDMA 等の乱用経験や乱用者の特徴を把握すること。

【方法】対象は、研究への協力が得られた音楽イベントの来場者である。会場内にアンケートブースを設営し、ノートパソコンを用いた無記名の自記式 PC 調査(以下、PC 調査と表記)を行った。協力者には 500 円相当のドリンク券を渡した。重複回答を避けるために、入場時に手渡した参加券提出を調査参加の必要条件とすると同時に、PC 調査に参加回数を尋ねる項目を入れた。なお、PC 調査の実施は、事前トレーニングを受けた専門調査員が行った。平成 22 年 10 月~12 月に 3 回(2 店舗)のイベント(いずれの音楽ジャンルもレゲエ)で PC 調査を実施した。計 579 名に参加券を配布し、276 名から協力が得られた。重複回答および回答に不備のあった 19 名を除く 257 名(女性 46.3%、約 7 割が 20 歳代)を分析対象とした(有効回答率: 44.4%)。

【結果】対象者全体の 34.2%に何らかの薬物乱用経験がみられた。主な薬物の生涯経験率は、大麻 32.7%、MDMA 7.8%、覚せい剤 6.2%、コカイン 6.2%、ケタミン 3.1%であった。薬物乱用経験群は非経験群と比較して、男性($p<0.001$)、30 歳代の割合($p=0.002$)、クラブの利用頻度($p=0.006$)や、オールナイト利用率($p=0.013$)の割合が有意に高かった。また、クラブの利用目的を「新しい出会いを求めて($p=0.014$)」、「ナンパするため($p<0.001$)」、「お酒を飲むため($p=0.001$)」、「自分自身がパフォーマンスするため($p=0.06$)」という回答が有意に高かった。一方、最終学歴($p=0.361$)、好みの音楽ジャンル($p=0.799$)、利用クラブの規模($p=0.379$)には差がみられなかった。

【結論】以上の結果より、クラブユーザーにおけるクラブドラッグ乱用実態の一端が明らかとされ、クラブユーザーの中には、一般人口に比べてかなり高い割合で薬物乱用経験者が含まれる可能性が示唆され、クラブユーザーは薬物依存や急性中毒に対する予防介入の必要性の高い集団といえる。また、クラブ利用の頻度や目的と薬物乱用経験との間に関連がみられることから、クラブカルチャーとの親和性の高さが薬物使用に何らかの影響を与えている可能性が考えられる。

*1 クラブ: ナイトクラブその他設備を設けて客にダンスをさせ、かつ、客に飲食をさせる営業(風俗営業法第二条)

合成カンナビノイド誘導体の細胞毒性発現機構の解明

○ 富山健一, 船田正彦, 和田 清

薬物依存研究部

【背景】大麻の乱用が拡大しており、大きな社会問題となっている。大麻の中枢作用の発現における主要成分は、 Δ^9 -tetrahydrocannabinol であり、カンナビノイド(CB₁)受容体を介して作用が発現すると考えられている。一方、違法ドラッグとして流通が確認されている通称「スパイス」には、合成カンナビノイド誘導体が含まれており、その健康被害の発生が危惧されている。本研究では、培養細胞系を利用して合成カンナビノイド誘導体による細胞毒性の評価とその細胞死誘導メカニズムの解析を行った。

【方法】合成カンナビノイド誘導体 CP-55,940 による細胞毒性は、神経芽細胞腫由来 NG108-15 細胞を用いて、CytoTox-Glo™ Cytotoxicity Assay kit (Promega)のプロトコールに従って解析した。また、DNA 断片化の誘導および annexin-V 染色によるアポトーシスの有無、JC-1 によるミトコンドリア障害の誘導についても検討した。さらに、CP-55,940 処置による細胞毒性発現における細胞内カルシウム変動の影響について検討を行った。

【結果及び考察】培養細胞を用いて合成カンナビノイド誘導体の細胞毒性評価システムの構築を行い、迅速で高感度なスクリーニング法を確立した。CP-55,940 は処置 2 時間後から、濃度依存的に細胞毒性を誘発した。この細胞毒性は、CB₁受容体拮抗薬である AM251 の併用により抑制された。また、CP-55,940 処置 2 時間後には、核の凝縮、DNA 断片化、ミトコンドリア膜電位低下、caspase-3 の活性化などのアポトーシスの誘発が認められた。一方、CP-55,940 処置によって細胞内 Ca²⁺濃度の上昇が見られ、AM251 または N 型 Ca²⁺チャネル拮抗薬 ω-コノトキシンの併用によって、この細胞内 Ca²⁺上昇は有意に抑制された。同様に、CP-55,940 によるアポトーシスの誘導は、ω-コノトキシ及び caspase-3 活性阻害剤(Z-DEVD-FMK)によっても有意に抑制された。

以上の結果から、NG108-15 細胞において、CP-55,940 は CB₁受容体を介してアポトーシスによる細胞死を誘発することが明らかになった。また、アポトーシスによる細胞死の誘導に CB₁受容体を介した細胞内 Ca²⁺上昇が関与していることが示唆された。合成カンナビノイド誘導体 CP55,940 の乱用により、細胞毒性を伴う健康被害の発生が危惧された。

V 平成22年度委託および受託研究課題

	研究者氏名	主任, 代表 分担の別	研究課題名	研究費の区分	研究費 交付機関
精研 所長 室	加我牧子	研究代表者	自殺の原因分析に基づく効果的な 自殺防止対策の確立に関する研究	厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (精神障害分野))	厚生労働省
	加我牧子	研究分担者	運動失調症の病態解明と治療法開 発に関する研究	厚生労働科学研究費補助金 (難治性疾患克服研究事業)	厚生労働省
	加我牧子	研究分担者	小児行動の二次元尺度化に基づく 発達支援策の有効性定量評価に関 する研究	厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (身体・知的等障害分野))	厚生労働省
	加我牧子	研究分担者	読み書き障害児の認知神経科学的 特性に基づいた支援法開発に関す る研究	文部科学省科学研究費補助金 (基盤研究B)	文部科学省
精神 保健 計画 研究 部	竹島 正	研究代表者	「改革ビジョン」の進捗状況のモ ニタリングと評価に関する研究	厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (精神障害分野))	厚生労働省
	竹島 正	主任研究者	精神・神経疾患に係る大規模コ ホートスタディの構築に関する研 究	精神・神経疾患研究開発費	独立行政法 人 国立精 神・神経医 療研究セン ター
	竹島 正	研究分担者	自殺の心理学的剖検の実施に関す る研究	厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (精神障害分野))	厚生労働省
	竹島 正	研究分担者	既存の統計資料を用いた機能分化 の現状分析と将来予測	厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (精神障害分野))	厚生労働省
	竹島 正	研究分担者	欧米を主とした諸外国の精神保健 医療福祉政策の調査、評価	厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (身体・知的等障害分野))	厚生労働省
	竹島 正	研究分担者	早期介入の精神保健システムにお ける位置づけの検討	厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (精神障害分野))	厚生労働省
	立森久照	研究代表者	未成年者における精神障害に対す る知識・意識に関する研究	文部科学省科学研究費補助金 (若手研究B)	文部科学省
	立森久照	研究分担者	精神保健医療福祉体系の改革のモ ニタリングの詳細分析	厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (精神障害分野))	厚生労働省
	立森久照	分担研究者	精神・神経疾患に係る大規模コ ホート研究の実実施計画の検討	精神・神経疾患研究開発費	独立行政法 人 国立精 神・神経医 療研究セン ター
	立森久照	研究分担者	児童・思春期摂食障害に関する疫 学調査の実施基盤整備	厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (精神障害分野))	厚生労働省

	研究者氏名	主任, 代表 分担の別	研究課題名	研究費の区分	研究費 交付機関
	長沼洋一	研究代表者	学生支援における大学ソーシャル ワーカーの業務確立プロセスに関 する研究	文部科学省科学研究費補助金 (若手研究B)	文部科学省
	小山明日香	研究代表者	精神障害に対するライフステージ に応じた普及啓発の効果的な方法 の検討	文部科学省科学研究費補助金 (特別研究員奨励費)	文部科学省
	川島大輔	研究代表者	生涯発達における死の意味づけと 宗教	文部科学省科学研究費補助金 (研究成果公開促進費)	文部科学省
	荘島幸子	研究代表者	思春期・青年期の性的少数者と自 殺予防：学校における自己構築を 支えるモデルの構築	文部科学省科学研究費補助金 (特別研究員奨励費)	文部科学省
薬物 依存 研究 部	和田 清	主任研究者	アルコールを含めた物質依存に対 する病態解明及び心理社会的治療 法の開発に関する研究	精神・神経疾患研究開発費	独立行政法 人 国立精 神・神経医 療研究セン ター
	和田 清	研究代表者	薬物乱用・依存の実態把握と再乱 用防止のための社会資源等の現状 と課題に関する研究	厚生労働科学研究費補助金 (医薬品・医療機器等レギュラト リーサイエンス総合研究事業)	厚生労働省
	和田 清	研究分担者	飲酒・喫煙・薬物乱用に関する全 国中学生意識・実態調査(2010 年)	厚生労働科学研究費補助金 (医薬品・医療機器等レギュラト リーサイエンス総合研究事業)	厚生労働省
	和田 清	研究分担者	薬物乱用・依存者のHIV感染と行 動のモニタリングに関する研究	厚生労働科学研究費補助金 (エイズ対策研究事業)	厚生労働省
	松本俊彦	研究代表者	薬物依存症に対する認知行動療法 の開発とその効果に関する研	厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (精神障害分野))	厚生労働省
	松本俊彦	研究分担者	大規模災害や犯罪被害等による精 神科疾患の実態把握と介入手法の 開発に関する研究	厚生労働科学研究費補助金	厚生労働省
	松本俊彦	研究分担者	司法関連施設における少年用薬物 乱用防止教育ツールによる介入効 果とその普及に関する研究	厚生労働科学研究費補助金 (医薬品・医療機器等レギュラト リーサイエンス総合研究事業)	厚生労働省
	松本俊彦	研究分担者	自殺のハイリスク者の実態解明及 び自殺予防に関する研究	厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (精神障害分野))	厚生労働省
	松本俊彦	研究分担者	自殺の原因分析に基づく効果的な 自殺防止対策の確立に関する研究	厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (精神障害分野))	厚生労働省
	松本俊彦	研究分担者	様々な依存症における医療・福祉 の回復プログラムの策定に関する 研究	厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (精神障害分野))	厚生労働省

V 平成 22 年度委託および受託研究課題

	研究者氏名	主任, 代表 分担の別	研究課題名	研究費の区分	研究費 交付機関
	松本俊彦	分担研究者	「医療観察法」指定入院医療機関への入院患者を対象とした認知行動療法の開発と普及に関する研究	精神・神経疾患研究開発費	独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター
	松本俊彦	研究代表者	刑事収容施設における自習ワークブックを用いた覚せい剤依存離脱プログラムの開発とその効果に関する研究	2010年度社会安全研究財団一般研究助成	社会安全研究財団
	船田正彦	研究代表者	違法ドラッグの精神依存並びに精神障害の発症機序と乱用実態把握に関する研究	厚生労働科学研究費補助金 (医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業)	厚生労働省
	船田正彦	研究分担者	合成カンナビノイドの身体依存性および細胞毒性の評価	厚生労働科学研究費補助金 (医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業)	厚生労働省
	船田正彦	分担研究者	大麻成分の薬物依存性及び神経毒性に関する研究	精神・神経疾患研究開発費	独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター
	嶋根卓也	研究分担者	若年者向け薬物再乱用防止プログラムの開発に関する研究	厚生労働科学研究費補助金 (医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業)	厚生労働省
	嶋根卓也	研究分担者	クラブユーザーにおけるMDMA等のクラブドラッグ乱用実態に関する研究	厚生労働科学研究費補助金 (医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業)	厚生労働省
	嶋根卓也	研究分担者	大学新入生における薬物乱用実態に関する研究 (2010年)	厚生労働科学研究費補助金 (医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業)	厚生労働省
	富山健一	研究分担者	合成カンナビノイドの薬物弁別刺激特性：カンナビノイド受容体の役割	厚生労働科学研究費補助金 (医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業)	厚生労働省
	小堀栄子	研究代表者	在日タイ人の健康に関するフィールドワーク：社会階層の形成と格差の広がりの中で	文部科学省科学研究費補助金	文部科学省
心身 医学 研 究 部	小牧 元	研究代表者	全ゲノム相関解析に基づく摂食障害感受性遺伝子の同定と機能解析	文部科学省科学研究費補助金 (基盤研究B)	独立行政法人 日本学術振興会
	小牧 元	研究代表者	児童・思春期摂食障害に関する基盤的調査研究	厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (精神障害分野))	厚生労働省
	小牧 元	主任研究者	心身症の診断・治療ガイドラインの標準化とその検証に関する研究	精神・神経疾患研究開発費	独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター

	研究者氏名	主任, 代表 分担の別	研究課題名	研究費の区分	研究費 交付機関
	小牧 元	分担研究者	脳機能画像を用いた心身症発症メカニズムの解明研究	精神・神経疾患研究開発費	独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター
	小牧 元	分担研究者	体型への不満—脳機能画像を用いた検討	精神・神経疾患研究開発費	独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター
	小牧 元	研究分担者	脳機能画像解析と生体生理指標の同時計測による心身相関メカニズム解明	日本学術振興会科学研究費補助金 (基盤研究C)	独立行政法人 日本学術振興会
	安藤哲也	研究代表者	女性のやせと食行動異常を決定する環境・遺伝要因の研究	日本学術振興会科学研究費補助金 (基盤研究C)	独立行政法人 日本学術振興会
	安藤哲也	研究分担者	全ゲノム相関解析に基づく摂食障害感受性遺伝子の同定と機能解析	日本学術振興会科学研究費補助金 (基盤研究B)	独立行政法人 日本学術振興会
	安藤哲也	分担研究者	アトピー性皮膚炎における心身症診断・治療ガイドラインによる心身医学的診療の有用性について	精神・神経疾患研究開発費	独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター
	権藤元治	研究代表者	脳機能画像解析と生体生理指標の同時計測による心身相関メカニズム解明	日本学術振興会科学研究費補助金 (基盤研究C)	独立行政法人 日本学術振興会
児 童・ 思 春 期 精 神 保 健 研 究 部	神尾陽子	研究代表者	1歳からの広汎性発達障害の出現とその発達的变化：地域ベースの横断的および縦断的研究	厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (精神障害分野))	厚生労働省
	神尾陽子	主任研究者	精神科医療における発達精神医学的支援に関する研究	精神・神経疾患研究開発費	独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター
	神尾陽子	研究代表者	発達障害の子どもと家族への早期支援システムの社会実装	社会技術研究開発センター社会技術研究開発事業 (研究開発成果実装支援プログラム)	独立行政法人 科学技術振興機構
	神尾陽子	研究代表者	「特定不能の広汎性発達障害」の境界と異種性についての研究	文部科学省科学研究費補助金 (基盤研究C)	文部科学省
	神尾陽子	研究分担者	ガイドライン作成 (成人期注意欠陥・多動性障害の疫学, 診断, 治療法に関する研究)	厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (身体・知的等障害分野))	厚生労働省

V 平成22年度委託および受託研究課題

	研究者氏名	主任, 代表 分担の別	研究課題名	研究費の区分	研究費 交付機関
	神尾陽子	研究分担者	ライフステージに応じた多次元の鑑別指標の同定に関する研究	厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (精神障害分野))	厚生労働省
	小山智典	研究分担者	社会性の発達評価に関する研究	厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (精神障害分野))	厚生労働省
	小山智典	分担研究者	高機能広汎性発達障害に関する知識の普及啓発活動の有効性に関する研究	精神・神経疾患研究開発費	独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター
	井口英子	分担研究者	公的精神科医療機関における広汎性発達障害に対する診療の実践	精神・神経疾患研究開発費	独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター
	片桐正敏	研究代表者	自閉症のある人における注意機能の特性と社会性の認知メカニズムに関する研究	文部科学省科学研究費補助金 (研究活動スタート支援)	文部科学省
	稲田尚子	研究代表者	発達早期の幼児における対人コミュニケーション行動評価ツールの開発	明治安田こころの健康財団研究助成	明治安田こころの健康財団
	稲田尚子	研究分担者	自閉症児と定型発達児の比較研究: 社会性発達成立基盤-自己制御と共感	文部科学省科学研究費補助金 (挑戦的萌芽研究)	文部科学省
	稲田尚子	研究分担者	自閉症スペクトラムを対象とした感情コントロール促進プログラムの開発	文部科学省科学研究費補助金 (基盤研究C)	文部科学省
	稲田尚子	研究分担者	青年・成人期に初めて気づかれる自閉症スペクトラムの診断・評価のための直接観察ツールの開発	ファイザーヘルスリサーチ振興財団研究助成 (国内共同研究)	ファイザーヘルスリサーチ振興財団
成 人 精 神 健 康 保 健 研 究 部	金 吉晴	研究代表者	大規模災害や、犯罪被害等による精神科疾患の実態把握と介入手法の開発に関する研究	厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (精神障害分野))	厚生労働省
	金 吉晴	研究代表者	健康危機発生時における地域健康安全に係る効果的な健康保険医療体制の構築に関する研究	厚生労働科学研究費補助金 (健康安全・危機管理対策総合事業)	厚生労働省
	金 吉晴	共同研究者	「恐怖記憶制御の分子機構の理解に基づいたPTSDの根本的予防法・治療法の創出」内「PTSDのエクスポージャー療法に対する増強療法の開発」	戦略的創造研究推進事業 (CREST)	独立行政法人 科学技術振興機構
	金 吉晴	研究分担者	心的外傷後ストレス障害に対する持続エクスポージャー療法の研修システム	厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (精神障害分野))	厚生労働省

研究者氏名	主任, 代表 分担の別	研究課題名	研究費の区分	研究費 交付機関
金 吉晴	研究代表者	精神医療における認知行動療法の効果的な均てん化と技能評価に関する研究	精神・神経疾患研究開発費	独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター
金 吉晴	研究分担者	心的外傷後ストレス障害に対する持続エクスポージャー療法の無作為比較試験	厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (精神障害分野))	厚生労働省
松岡 豊	共同研究者	「恐怖記憶制御の分子機構の理解に基づいたPTSDの根本的予防法・治療法の創出」内「不飽和脂肪酸によるPTSD予防法の開発」	戦略的創造研究推進事業 (CREST)	独立行政法人 科学技術振興機構
松岡 豊	研究分担者	交通外傷後の精神健康に関するコホート研究	厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (精神障害分野))	厚生労働省
松岡 豊	研究分担者	「臨床研究に関する人材育成に関する研究」と「臨床研究ならびに医師主導治験の企画・計画に関する支援事業」	厚生労働科学研究費補助金 (医療技術実用化総合研究事業)	厚生労働省
中島聡美	研究代表者	複雑性悲嘆の認知行動療法の効果の検証およびインターネット治療のプログラムの開発	日本学術振興会科学研究費補助金 (基盤研究B)	独立行政法人 日本学術振興会
中島聡美	研究分担者	心的外傷後ストレス障害に対する持続エクスポージャー療法の無作為比較試験	厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (精神障害分野))	厚生労働省
中島聡美	研究分担者	性暴力被害者の急性期心理ケアプログラムの構築に関する研究	厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (精神障害分野))	厚生労働省
中島聡美	研究分担者	災害精神保健医療研修プログラムの開発	厚生労働科学研究費補助金 (健康安全・危機管理対策総合事業)	厚生労働省
中島聡美	研究分担者	犯罪被害者および災害被災者に対するインターネットを利用した急性期の心理ケアプログラムの開発	一般研究助成	財団法人 社会安全研究財団
鈴木友理子	研究分担者	オランダにおける強制治療および保護者制度のあり方に関する検討	厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (身体・知的等障害分野))	厚生労働省
鈴木友理子	研究分担者	自殺対策のための複合的介入法の開発に関する研究	厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (精神障害分野))	厚生労働省
鈴木友理子	研究分担者	災害精神保健に関する研修体制の構築および効果評価研究の予備的検討	厚生労働科学研究費補助金 (健康安全・危機管理対策総合事業)	厚生労働省
鈴木友理子	研究分担者	災害精神保健医療マニュアル改訂版作成の取り組み	厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (精神障害分野))	厚生労働省

V 平成22年度委託および受託研究課題

	研究者氏名	主任, 代表 分担の別	研究課題名	研究費の区分	研究費 交付機関
	栗山健一	研究代表者	睡眠中の作働記憶容量強化メカニ ズムの解明	文部科学省科学研究費補助金 (若手研究B)	文部科学省
	栗山健一	研究分担者	習慣的睡眠時刻前後の恐怖記憶特 性における性差	厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (精神障害分野))	厚生労働省
	松村健太	研究代表者	オメガ3脂肪酸の摂取が精神的ス トレス負荷時の心臓血管系反応に 与える影響	文部科学省科学研究費補助金 (若手研究B)	文部科学省
	松村健太	研究分担者	若年男子の心理社会ストレスを媒 介するアロスタティック負荷と血 管健康の横断縦断調査	日本学術振興会科学研究費補助金 (基盤研究B)	独立行政法 人 日本学 術振興会
	松村健太	研究代表者	精神的ストレス負荷時の心臓血管 系反応と動脈の硬さの関係	(財) 明治安田厚生事業団健康医 科学研究助成	財団法人 明治安田厚 生事業団
	本間元康	研究代表者	痛みの認識に基づく触知覚メカニ ズムの検討: 脳機能画像手法を用 いて	文部科学省科学研究費補助金 (若手研究B)	文部科学省
	本間元康	研究分担者	解離症状への臨床治療アプロー チ: 脳機能画像手法に基づく触知 覚メカニズムの検討	立教大学学術推進特別重点資金 (立教SFR)	学校法人 立教学院
	伊藤正哉	研究代表者	共感的自己なだめによる感情調整 プロセス: 課題分析に基づく心理 療法プロセス研究	日本学術振興会科学研究費補助金 (特別研究員奨励費)	独立行政法 人 日本学 術振興会
精 神 薬 理 研 究 部	山田光彦	研究代表者	自殺対策のための複合的介入法の 開発に関する研究	厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (精神障害分野))	厚生労働省
	山田光彦	研究分担者	うつ病の最適治療ストラテジーを 確立するための大規模多施設共同 研究	厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (精神障害分野))	厚生労働省
	山田光彦	研究分担者	精神・神経・筋分野における治 験・臨床研究の推進のための基盤 整備に関する研究	厚生労働科学研究費補助金 (医療技術実用化総合研究事業)	厚生労働省
	山田光彦	主任研究者	気分障害の病態解明と診断治療法 の開発に関する研究	精神・神経疾患研究開発費	独立行政法 人 国立精 神・神経医 療研究セン ター
	山田光彦	主任研究者	精神神経領域における大規模臨床 研究実施基盤の構築に関する検討	精神・神経疾患研究開発費	独立行政法 人 国立精 神・神経医 療研究セン ター
	山田光彦	研究代表者	抗うつ病の作用メカニズムにおけ るNotchシグナル伝達系の役割	文部科学省科学研究費補助金 (基盤研究C)	文部科学省

研究者氏名	主任, 代表 分担の別	研究課題名	研究費の区分	研究費 交付機関
山田光彦	研究分担者	うつ病の治癒機転に関連する転写因子MATH2の標的遺伝子の同定と分子機構の解明	文部科学省科学研究費補助金 (基盤研究C)	文部科学省
山田光彦	研究分担者	新規抗うつ薬結合蛋白質Dynamин-1過剰発現マウスの抗うつ薬投与後の行動解析	文部科学省科学研究費補助金 (基盤研究C)	文部科学省
山田光彦	研究代表者	内科外来を受診する高齢患者におけるうつ病の自然経過についての観察研究	(財) 三菱財団社会福祉研究助成	財団法人 三菱財団
斎藤顕宜	分担研究者	気分障害の病態解明と診断治療法の開発に関する研究	精神・神経疾患研究開発費	独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター
斎藤顕宜	研究分担者	抗うつ病の作用メカニズムにおけるNotchシグナル伝達系の役割	文部科学省科学研究費補助金 (基盤研究C)	文部科学省
斎藤顕宜	研究分担者	うつ病の治癒機転に関連する転写因子MATH2の標的遺伝子の同定と分子機構の解明	文部科学省科学研究費補助金 (基盤研究C)	文部科学省
斎藤顕宜	研究代表者	グルタミン酸神経調節薬による情動調節機序に関わる脳内ネットワークの解明	調査研究助成金	財団法人 精神・神経科学振興財団
斎藤顕宜	研究代表者	抗うつ薬の神経新生亢進作用におけるrho/rhotekin系の役割に関する検討	研究助成金	財団法人 薬理研究会
斎藤顕宜	研究代表者	新規オピオイドδ受容体作動薬を用いた鎮痛作用および抗うつ・抗不安作用の検討	研究助成金	公益財団法人 中富健康科学振興財団
米本直裕	研究分担者	うつ病の最適治療ストラテジーを確立するための大規模多施設共同研究	厚生労働省科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (精神障害分野))	厚生労働省
米本直裕	研究分担者	精神・神経・筋分野における治験・臨床研究の推進のための基盤整備に関する研究	厚生労働省科学研究費補助金 (医療技術実用化総合研究事業)	厚生労働省
米本直裕	研究分担者	急性心筋梗塞に対する病院前救護や遠隔医療等を含めた超急性期診療体制の構築に関する研究	厚生労働省科学研究費補助金 (循環器疾患等生活習慣病対策総合研究事業)	厚生労働省
米本直裕	研究分担者	我が国におけるチャイルド・デス・レビューに関する研究	厚生労働省科学研究費補助金 (政策科学推進研究事業)	厚生労働省
米本直裕	研究分担者	「周産期医療の質と安全の向上のための戦略研究」に関するフィージビリティ・スタディ	厚生労働省科学研究費補助金 (厚生労働科学特別研究事業)	厚生労働省

V 平成22年度委託および受託研究課題

	研究者氏名	主任, 代表 分担の別	研究課題名	研究費の区分	研究費 交付機関
	米本直裕	分担研究者	精神神経領域における大規模臨床 研究実施基盤の構築に関する検討	精神・神経疾患研究開発費	独立行政法 人 国立精 神・神経医 療研究セン ター
	米本直裕	研究代表者	根拠に基づいた自殺予防ガイドラ インの策定に関する研究	文部科学省科学研究費補助金 (若手研究B)	文部科学省
	山田美佐	研究代表者	うつ病の治癒機転に関連する転写 因子MATH2の標的遺伝子の同定と 分子機構の解明	文部科学省科学研究費補助金 (基盤研究C)	文部科学省
	山田美佐	研究分担者	抗うつ病の作用メカニズムにおけ るNotchシグナル伝達系の役割	文部科学省科学研究費補助金 (基盤研究C)	文部科学省
	山田美佐	研究分担者	神経新生とうつ病治療：末梢血因 子と内在性神経幹細胞活性化によ る新治療ストラテジー	文部科学省科学研究費補助金 (基盤研究C)	文部科学省
	高橋 弘	研究代表者	グルココルチノイドによる抗うつ 薬関連遺伝子Ndr2発現誘導のシ グナル解明	文部科学省科学研究費補助金 (若手研究B)	文部科学省
	高橋 弘	研究分担者	抗うつ病の作用メカニズムにおけ るNotchシグナル伝達系の役割	文部科学省科学研究費補助金 (基盤研究C)	文部科学省
	高橋 弘	研究分担者	うつ病の治癒機転に関連する転写 因子MATH2の標的遺伝子の同定と 分子機構の解明	文部科学省科学研究費補助金 (基盤研究C)	文部科学省
	岩井孝志	研究分担者	抗うつ病の作用メカニズムにおけ るNotchシグナル伝達系の役割	文部科学省科学研究費補助金 (基盤研究C)	文部科学省
	岩井孝志	研究分担者	うつ病の治癒機転に関連する転写 因子MATH2の標的遺伝子の同定と 分子機構の解明	文部科学省科学研究費補助金 (基盤研究C)	文部科学省
	小高真美	研究代表者	ソーシャルワーカーを対象とする 効果的な自殺対策研修の開発に関 する研究	文部科学省科学研究費補助金 (若手研究B)	文部科学省
社 会 精 神 保 健 研 究 部	伊藤弘人	研究代表者	自殺のハイリスク者の実態解明及 び自殺予防に関する研究	厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (精神障害分野))	厚生労働省
	伊藤弘人	研究分担者	健康日本21の中間評価, 糖尿病の 「今後の生活習慣病対策の推進に ついて(中間取りまとめ)」を踏 まえた今後の生活習慣病対策のた めのエビデンス構築に関する研究	厚生労働科学研究費補助金 (循環器疾患等生活習慣病対策総 合研究事業)	厚生労働省
	伊藤弘人	分担研究者	精神科急性期医療の最適化に関す る研究	精神・神経疾患研究開発費	厚生労働省
	伊藤弘人	研究分担者	医療経済・医療の質評価等の調査	厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (身体・知的等障害分野))	厚生労働省

	研究者氏名	主任, 代表 分担の別	研究課題名	研究費の区分	研究費 交付機関
	伊藤弘人	研究分担者	精神医療全般の医療政策立案なら びに精神科医療の評価に資する指 標の開発	厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (精神障害分野))	厚生労働省
	伊藤弘人	研究分担者	精神・神経領域の治験・臨床研究 における症状評価の課題検討	厚生労働科学研究費補助金 (医療技術実用化総合研究事業)	厚生労働省
	伊藤弘人	研究分担者	現在リソースの特徴の分析	厚生労働科学研究費補助金 (医薬品・医療機器等レギュラト リーサイエンス総合研究事業)	厚生労働省
	伊藤弘人	研究分担者	災害精神保健体制に関する行政評 価研究	厚生労働科学研究費補助金 (健康安全・危機管理対策総合研 究事業)	厚生労働省
	伊藤弘人	主任研究者	経営戦略企画に係る研究	精神・神経疾患研究開発費	厚生労働省
	伊藤弘人	研究分担者	早期介入の医療システムにおける 位置づけの検討	厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (精神障害分野))	厚生労働省
	伊藤弘人	検討委員	精神疾患の社会的コストの推計	障害者総合福祉推進事業	厚生労働省
	野田寿恵	研究分担者	疾病罹患による所得・健康損失に 関する研究	厚生労働科学研究費補助金 (政策科学総合研究事業)	厚生労働省
	堀口寿広	研究代表者	共生社会を実現するための地域づ くりを促進する要因の解明	厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (身体・知的等障害分野))	厚生労働省
精 神 理 研 究 部	三島和夫	研究代表者	睡眠障害患者のQOLを改善するた めの科学的根拠に基づいた診断治 療技術の開発	厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (精神障害分野))	厚生労働省
	三島和夫	研究代表者	睡眠障害治療薬の臨床試験及び評 価方法のあり方に関する研究	厚生労働科学研究費補助金 (医薬品・医療機器等レギュラト リーサイエンス総合研究事業)	厚生労働省
	三島和夫	研究分担者	1歳からの広汎性発達障害の出現 とその発達的变化：地域ベースの 横断的および縦断的研究	厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (精神障害分野))	厚生労働省
	三島和夫	研究代表者	高齢者に対する向精神薬の使用実 態と適切な使用方法の確立に関す る研究	厚生労働科学研究費補助金 (長寿科学総合研究事業)	厚生労働省
	三島和夫	研究分担者	健康づくりのための休養や睡眠の 在り方に関する研究	厚生労働科学研究費補助金 (循環器疾患・糖尿病等生活習慣 病対策総合研究事業)	厚生労働省
	三島和夫	研究分担者	向精神薬の処方実態に関する国内 外の研究比較	厚生労働科学研究費補助金 (特別研究事業)	厚生労働省
	三島和夫	研究代表者	睡眠・覚醒リズム障害の迅速かつ 高精度な病態診断システムの開発	文部科学省科学研究費補助金 (基盤研究B)	文部科学省

V 平成22年度委託および受託研究課題

	研究者氏名	主任, 代表 分担の別	研究課題名	研究費の区分	研究費 交付機関
	三島和夫	分担研究者	睡眠医療における医療機関連携ガイドラインの有効性検証に関する研究	精神・神経疾患研究開発費	独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター
	三島和夫	研究代表者	体[睡眠・リズム]とこころの恒常性維持及び破綻機構の遺伝子環境相互作用に関する研究	脳科学研究戦略推進プログラム	文部科学省
	守口善也	研究代表者	リアルタイムfMRIによる脳機能画像を用いた、ストレス関連疾患の治療法に関する研究	厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業(精神障害分野))	厚生労働省
	守口善也	研究分担者	睡眠障害患者のQOLを改善するための科学的根拠に基づいた診断治療技術の開発	厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業(精神障害分野))	厚生労働省
	守口善也	研究分担者	脳機能画像解析と生体生理指標の同時計測による心身相関メカニズム解明	文部科学省科学研究費補助金(基盤研究C)	文部科学省
	肥田昌子	研究代表者	睡眠障害・生体リズム障害の新規治療薬候補物質の探索	厚生労働科学研究費補助金(創薬基盤推進研究事業)	厚生労働省
	肥田昌子	研究分担者	睡眠障害患者のQOLを改善するための科学的根拠に基づいた診断治療技術の開発	厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業(精神障害分野))	厚生労働省
	肥田昌子	研究代表者	躁うつ病におけるWntシグナル系と生物時計システム	文部科学省科学研究費補助金(若手研究B)	文部科学省
	肥田昌子	研究分担者	ヒト網膜のメラノプシンの遺伝子多型およびその機能的役割の解明	文部科学省科学研究費補助金 挑戦的萌芽研究	文部科学省
	肥田昌子	研究分担者	睡眠・覚醒リズム障害の迅速かつ高精度な病態診断システムの開発	文部科学省科学研究費補助金(基盤研究B)	文部科学省
	北村真吾	研究分担者	光の生理心理作用の脳内機序と健康リスクへの適応	文部科学省科学研究費補助金(基盤研究B)	文部科学省
	榎本みのり	研究代表者	身体疾患を持つ高齢者における睡眠障害及び睡眠医療の実態調査	文部科学省科学研究費補助金(若手研究B)	文部科学省
知的 障害 研究 部	稲垣真澄	主任研究者	発達障害の神経科学的基盤の解明と治療法開発に関する研究	精神・神経疾患研究開発費	独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター
	稲垣真澄	研究代表者	小児行動の二次元尺度化に基づく発達支援策の有効性定量評価に関する研究	厚生労働科学研究費補助金(障害者対策総合研究事業(身体・知的等障害分野))	厚生労働省
	稲垣真澄	研究代表者	読み書き障害児の認知神経科学的特性に基づいた支援法開発に関する研究	文部科学省科学研究費補助金(基盤研究B)	文部科学省
	稲垣真澄	分担研究者	顔認知障害の病態生理の解明とその治療法の開発	文部科学省科学研究費補助金(新学術領域研究)	文部科学省

研究者氏名	主任, 代表 分担の別	研究課題名	研究費の区分	研究費 交付機関
稲垣真澄	分担研究者	精神・神経疾患に係る大規模コホートスタディの構築に関する研究	精神・神経疾患研究開発費	独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター
稲垣真澄	分担研究者	生涯に亘って心身の健康を支える脳の分子基盤, 環境要因, その失調の解明	「脳科学研究戦略推進プログラム」心身の健康を維持する脳の分子基盤と環境因子 (生涯健康脳) 課題E	文部科学省
稲垣真澄	研究分担者	1歳からの広汎性発達障害の出現とその発達的变化: 地域ベースの横断的および縦断的研究	厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (精神障害分野))	厚生労働省
井上祐紀	分担研究者	脳形成異常の成立機序の解明と治療法確立のための融合的研究	精神・神経疾患研究開発費	独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター
井上祐紀	研究分担者	学際的研究による顔認知メカニズムの解明	文部科学省科学研究費補助金 (新学術領域研究)	文部科学省
軍司敦子	研究分担者	小児行動の二次元尺度化に基づく発達支援策の有効性定量評価に関する研究	厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (身体・知的等障害分野))	厚生労働省
軍司敦子	研究分担者	顔認知障害の病態生理の解明とその治療法の開発	文部科学省科学研究費補助金 (新学術領域研究)	文部科学省
軍司敦子	研究分担者	特別支援教育における脳科学の活用に関する総合的研究	文部科学省科学研究費補助金 (基盤研究A)	文部科学省
軍司敦子	研究分担者	理解の認知神経動力学と特殊教育への展開	文部科学省科学研究費補助金 (基盤研究C)	文部科学省
軍司敦子	主任研究者	脳磁図を用いた発話時の聴覚フィードバック機構とヒト脳機能の研究	平成22年度自然科学研究機構生理学研究共同利用研究・生体磁気計測装置共同利用実験	自然科学研究機構生理学研究センター
矢田部清美	研究代表者	運動と認知の脳内統合モデルに基づいた巧緻運動困難な学習障害児への支援	文部科学省科学研究費補助金 (若手研究B)	文部科学省
矢田部清美	研究分担者	読み書き障害児の認知神経科学的特性に基づいた支援法開発	文部科学省科学研究費補助金 (基盤研究B)	文部科学省
後藤隆章	研究分担者	読み書き障害児の認知神経科学的特性に基づいた支援法開発	文部科学省科学研究費補助金 (基盤研究B)	文部科学省
後藤隆章	研究代表者	視覚性語彙形成による総合的読字支援プログラムの開発とその応用に関する研究	文部科学省科学研究費補助金 (若手研究B)	文部科学省
北 洋輔	研究代表者	PDDを有する非行少年の背景要因の解明と発達の支援システムの開発	文部科学省科学研究費補助金 (特別研究員奨励費)	文部科学省
北 洋輔	主任研究者	PDDを有する非行少年の背景要因の解明と発達の支援システムの開発 -神経心理学観点からの実証的検討をふまえて-	東北大学国際高等研究教育院・博士研究教育院生研究費	東北大学国際高等研究教育院

V 平成22年度委託および受託研究課題

	研究者氏名	主任, 代表 分担の別	研究課題名	研究費の区分	研究費 交付機関
社 会 復 帰 研 究 部	伊藤順一郎	研究代表者	精神障害者の退院促進と地域生活支援のための多職種によるサービス提供のあり方とその効果に関する研究	厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (身体・知的等障害分野))	厚生労働省
	伊藤順一郎	研究分担者	精神障害者の認知機能障害を向上させるための「認知機能リハビリテーション」に用いるコンピュータソフト「Cogpack」の開発とこれを用いた「認知機能リハビリテーション」効果検討に関する研究	厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (精神障害分野))	厚生労働省
	伊藤順一郎	主任研究者	「地域中心の精神保健医療福祉」を推進するための精神科救急及び急性期医療のあり方に関する研究	精神・神経疾患研究開発費	独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター
	伊藤順一郎	研究分担者	精神疾患の受療中断者や未治療者等を対象としたアウトリーチ（訪問支援）の支援内容等の実態把握に関する研究	厚生労働科学研究費補助金 特別研究事業	厚生労働省
	伊藤順一郎	センター長	地域精神科モデル医療センター	精神・神経疾患研究開発費 (専門疾病センター事業費)	独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター
	瀬戸屋雄太郎	研究分担者	精神障害者の退院促進と地域生活支援のための多職種によるサービス提供のあり方とその効果に関する研究	厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (身体・知的等障害分野))	厚生労働省
	瀬戸屋雄太郎	分担研究者	急性期病棟における医療ケアマネジメントのモデル作りに関する研究—プロセス評価・アウトカム評価の検討	精神・神経疾患研究開発費	独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター
	吉田光爾	分担研究者	地域精神保健危機介入モデルにおけるAssertive Community Treatmentの役割等の検討に関する研究	精神・神経疾患研究開発費	独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター
	前田恵子	研究代表者	精神科医療・福祉における訪問型サービスの質の管理	文部科学省科学研究費補助金 (特別研究員奨励費)	文部科学省
司 法 精 神 医 学 研 究 部	吉川和男	研究代表者	心神喪失者等医療観察法制度における専門的医療の向上に関する研究	厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (精神障害分野))	厚生労働省
	岡田幸之	研究代表者	心神喪失者等医療観察法制度における専門的医療の向上に関する研究	厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (精神障害分野))	厚生労働省

	研究者氏名	主任, 代表 分担の別	研究課題名	研究費の区分	研究費 交付機関
	岡田幸之	研究代表者	全国の地方裁判所の裁判員制度における精神鑑定の実態に関する調査研究	文部科学省科学研究費補助金 (基盤研究C)	文部科学省
	岡田幸之	研究分担者	心神喪失者等医療観察法制度における社会復帰要因の評価手法に関する研究	厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (精神障害分野))	厚生労働省
	岡田幸之	研究分担者	他害行為を行った者の責任能力鑑定に関する研究	厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (精神障害分野))	厚生労働省
	菊池安希子	研究代表者	触法精神障害者の再犯関連要因の調査と介入プログラムの開発	文部科学省科学研究費補助金 (基盤研究C)	文部科学省
	菊池安希子	研究分担者	医療観察法制度における治療プログラムの開発と妥当性に関する研究	厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (精神障害分野))	厚生労働省
	福井裕輝	研究代表者	限定された合理性に基づく意思決定の神経基盤の解明と触法精神障害者に対する応用	文部科学省科学研究費補助金 (基盤研究C)	文部科学省
	福井裕輝	研究分担者	医療観察法対象者の脳機能画像等による評価に関する研究	厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (精神障害分野))	厚生労働省
	安藤久美子	研究分担者	通院処遇中の問題行動に関する研究	厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (精神障害分野))	厚生労働省
	小松容子	研究代表者	医療観察法病棟におけるインボルブメント	文部科学省科学研究費補助金 (若手研究B)	文部科学省
自 予 総 対 セ タ	竹島 正	研究代表者	「改革ビジョン」の進捗状況のモニタリングと評価に関する研究	厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (精神障害分野))	厚生労働省
	竹島 正	主任研究者	精神・神経疾患に係る大規模コホートスタディの構築に関する研究	精神・神経疾患研究開発費	独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター
	竹島 正	研究分担者	自殺の心理学的剖検の実施に関する研究	厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (精神障害分野))	厚生労働省
	竹島 正	研究分担者	既存の統計資料を用いた機能分化の現状分析と将来予測	厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (精神障害分野))	厚生労働省
	竹島 正	研究分担者	欧米を主とした諸外国の精神保健医療福祉政策の調査、評価	厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (身体・知的等障害分野))	厚生労働省
	竹島 正	研究分担者	早期介入の精神保健システムにおける位置づけの検討	厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (精神障害分野))	厚生労働省

V 平成22年度委託および受託研究課題

研究者氏名	主任, 代表 分担の別	研究課題名	研究費の区分	研究費 交付機関
松本俊彦	分担研究者	「医療観察法」指定入院医療機関への入院患者を対象とした認知行動療法の開発と普及に関する研究	精神・神経疾患研究開発費	独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター
松本俊彦	研究分担者	司法関連施設における少年用薬物乱用防止教育ツールによる介入効果とその普及に関する研究	厚生労働科学研究費補助金 (医薬品・医療機器レギュラトリーサイエンス総合研究事業)	厚生労働省
松本俊彦	研究分担者	全国の精神科医療施設における薬物関連精神疾患の実態調査	厚生労働科学研究費補助金 (医薬品・医療機器レギュラトリーサイエンス総合研究事業)	厚生労働省
松本俊彦	研究分担者	自殺既遂者の心理社会的特徴に関する研究	厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (精神障害分野))	厚生労働省
松本俊彦	研究分担者	少年施設入所者における被虐待体験と精神医学的問題に関する研究	厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (精神障害分野))	厚生労働省
松本俊彦	研究分担者	薬物依存・アルコール依存者の自殺の実態解明および自殺予防に関する研究	厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (精神障害分野))	厚生労働省
松本俊彦	研究代表者	薬物依存症に対する認知行動療法プログラムの開発と効果に関する研究	厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (精神障害分野))	厚生労働省
松本俊彦	研究分担者	向精神薬乱用と依存	厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (精神障害分野))	厚生労働省
松本俊彦	研究代表者	刑事収容施設における自習ワークブックを用いた覚せい剤依存離脱プログラムの開発とその効果に関する研究	2010年度社会安全研究財団一般研究助成	財団法人 社会安全研究財団
川野健治	研究分担者	地域における自死遺族への支援	厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (精神障害分野))	厚生労働省
川野健治	研究代表者	若年層の自殺への態度に関する研究	文部科学省科学研究費補助金 (基盤研究C)	文部科学省
稲垣正俊	研究分担者	地域における自殺と関連する精神保健上の問題に関する実態把握の方法と活用の検討	厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (精神障害分野))	厚生労働省
稲垣正俊	研究分担者	一般身体診療科におけるうつ病の早期発見と治療への導入に関する研究分担	厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (精神障害分野))	厚生労働省
稲垣正俊	研究分担者	多施設共同研究における進捗運営管理とデータ管理について	厚生労働科学研究費補助金 (障害者対策総合研究事業 (精神障害分野))	厚生労働省

	研究者氏名	主任, 代表 分担の別	研究課題名	研究費の区分	研究費 交付機関
	稲垣正俊	分担研究者	わが国のうつ病治療システムにおけるコラボレーティブケアモデルについての検討	精神・神経疾患研究開発費	独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター
	稲垣正俊	分担研究者	自殺対策および精神神経領域におけるエビデンスを導く大規模多施設共同研究においてプロトコール、手順書、各種指針を遵守し実施するための体制の検討	精神・神経疾患研究開発費	独立行政法人 国立精神・神経医療研究センター
	川島大輔	研究代表者	生涯発達における死の意味づけと宗教	文部科学省科学研究費補助金 (研究成果公開促進費)	文部科学省

VI 平成22年度 精神保健研究所 取材一覧

取材日	取材元	取材対象		取材・撮影内容	番組名/掲載紙
H22.4.15	北海道新聞 報道本部	薬物依存研究部/ 自殺予防総合対策センター	松本俊彦	インタビュー	北海道新聞
H22.4.27	毎日新聞社会部	薬物依存研究部/ 自殺予防総合対策センター	松本俊彦	薬物と自殺問題	毎日新聞
H22.5.10	(株)日映企画	薬物依存研究部/ 自殺予防総合対策センター	松本俊彦	DVD作成のための撮影	東京都福祉保健局 企画[薬物乱用防止 講習会]DVD
H22.5.14	日経BP社	精神保健計画部/ 自殺予防総合対策センター	竹島 正	自殺の現状、最近の傾向、企業や地域での対応の課題など について	日経ビジネス
H22.5.12	毎日新聞社	精神保健計画部/ 自殺予防総合対策センター	竹島 正	2009年の自殺統計に関する分析	毎日新聞
H22.5.12	時事通信社	精神保健計画部/ 自殺予防総合対策センター	竹島 正	自殺統計について	
H22.5.13	朝日新聞社 科学医療グループ	所長	加我牧子	発達障害について	朝日新聞
H22.5.26	共同通信社	精神保健計画部/ 自殺予防総合対策センター	竹島 正	自殺のリスクが高い人への対応・研修について	加盟新聞社各紙
H22.6.9	朝日新聞社 科学医療グループ	薬物依存研究部/ 自殺予防総合対策センター	松本俊彦	「アルコール依存症と自殺」記事取材	朝日新聞
H22.6.28	NHK制作局第一制作センター 文化福祉番組	精神保健計画部/ 自殺予防総合対策センター	竹島 正	「自殺」関連番組の取材	クローズアップ 現代
H22.7.5,6	共同通信社	精神保健計画部/ 自殺予防総合対策センター	川野健治	心理職研修を取材	加盟地方紙
H22.7.6	(株)日刊現代	薬物依存研究部/ 自殺予防総合対策センター	松本俊彦	連載コラム「後悔しない治療法」の一つとして掲載	日刊ゲンダイ
H22.7.6	フリー(週刊朝日囑託)	薬物依存研究部/ 自殺予防総合対策センター	松本俊彦	インタビュー	週刊朝日
H22.7.7	NHKワールド	精神保健計画部/ 自殺予防総合対策センター	竹島 正	自殺問題についてのインタビュー	Asia Biz Forecasr
H22.7.16	共同通信社	精神保健計画研究部	荘島幸子	性同一障害をとりまく日本の現状について	
H22.7.13	共同通信社	自殺予防総合対策センター	松本俊彦 川野健治	境界性パーソナリティ障害と自殺予防について	加盟新聞社各紙
H22.7.22	北海道新聞 報道本部	精神保健計画研究部/ 自殺予防総合対策センター	竹島 正	自殺予防対策について	北海道新聞
H22.7.21	(株)じほう	薬物依存研究部/ 自殺予防総合対策センター	松本俊彦	「向精神薬などの過量摂取を背景とする自殺を防止する ために～薬局薬剤師ができること」インタビュー	「調剤と情報」 月刊誌
H22.7.21	毎日新聞社会部	薬物依存研究部/ 自殺予防総合対策センター	松本俊彦	インタビュー・写真撮影	毎日新聞
H22.7.27	毎日新聞社	薬物依存研究部	和田 清	薬物依存問題	毎日新聞紙上
H22.8.13	毎日新聞盛岡支局	成人精神保健研究部	鈴木友理子	2008年の岩手・宮城内陸地震での被害と自殺の関連性や他 の地震での自殺事例と被災者に対する心のケアの重要性な ど	毎日新聞
H22.8.12	NHK	司法精神医学研究部	福井裕輝	「性犯罪加害者の処遇制度を考える会」発足に向けた準備 段階での取り組みについて	ニュース
H22.8.19	NHK	薬物依存研究部/ 自殺予防総合対策センター	松本俊彦	インタビュー	
H22.8.30	日本医事新報社	社会復帰研究部	伊藤順一郎	ACTについて及び「統合失調症」の特徴について	日本医事新報
H22.8.27	(株)保健同人社編集部	薬物依存研究部/ 自殺予防総合対策センター	松本俊彦	インタビュー	暮らしと健康 11月号
H22.8.27	読売新聞東京本社社会部	薬物依存研究部/ 自殺予防総合対策センター	松本俊彦	「働きざかりのうつ・自殺」に関するインタビュー	
H22.9.6	日経BP社 日経ヘルス	心身医学研究部	菊地裕絵	心が体の凝りに及ぼす影響について	日経ヘルス

取材日	取材元	取材対象	取材・撮影内容	番組名/掲載紙	
H22. 8. 31	共同通信社	薬物依存研究部/ 自殺予防総合対策センター	松本俊彦	自殺予防週間に合わせた企画記事	共同通信加盟の 新聞各紙
H22. 8. 31	教育医事新聞社	所長	加我牧子	精神保健研究所便りについて	月刊「教育医事新聞」 立秋特別号
H22. 8. 31	教育医事新聞社	薬物依存研究部/ 自殺予防総合対策センター	松本俊彦	心理学的剖検データベースを活用した自殺の原因分析に関する研究について	月刊「教育医事新聞」 立秋特別号
H22. 9. 3	(株)じほう	精神薬理研究部	稲垣正俊	自殺対策における「富士モデル」の意義と制約、内閣府の地域自殺対策強化基金の意義と制約に関して	Japan Medicine誌
H22. 9. 3	朝日新聞 鳥取総局	社会復帰研究部	伊藤順一郎	A C T 研修の活動について	朝日新聞鳥取版
H22. 9. 21	北海道新聞社	薬物依存研究部/ 自殺予防総合対策センター	松本俊彦	「アルコールと薬物依存からみる自殺予防」に関するインタビュー	北海道新聞 朝刊掲載
H22. 9. 15	毎日新聞社会部	薬物依存研究部/ 自殺予防総合対策センター	松本俊彦	「向精神薬」に関するインタビュー	
H22. 9. 22	(株)キャリアブレインC B ニュース編集部	精神保健計画研究部/ 自殺予防総合対策センター	竹島 正	自殺予防総合対策センターの取り組みについてインタビュー	
H22. 10. 4	朝日新聞さいたま総局	児童・思春期精神保健研究部	神尾陽子	M-C H A T の有効性と早期発見の必要性などの取材	朝日新聞 朝刊埼玉版
H22. 10. 13	日本放送協会	薬物依存研究部/ 自殺予防総合対策センター	松本俊彦	「パーソナリティ障害と自殺のリスク」に関するインタビュー	N H K ニュース 「おはよう日本」
H22. 10. 25	赤旗編集局 (くらし家庭部)	社会復帰研究部	伊藤順一郎	総合失調症についてのインタビュー	しんぶん赤旗 (日刊紙)
H22. 10. 26	(株)ノンプロダクション	心身医学研究部	小牧 元	番組V T R 内インタビュー撮影	ザ・ベストハウス 123
H22. 11. 8	N H K 報道局 科学文化部	薬物依存研究部/ 自殺予防総合対策センター	松本俊彦	第1回自殺予防のための自傷行為とパーソナリティ障害の理解と対応研修	
H22. 11. 4	(株)医薬経済社	薬物依存研究部/ 自殺予防総合対策センター	松本俊彦	O T C 薬の乱用問題について	RISFAX 医薬経済
H22. 12. 22	(株)ニュートンプレス	心身医学研究部	小牧 元	ストレスが心身に与える影響についての記事作成のため	科学雑誌「NewTon」 2011年3月号
H22. 12. 24	(株)安寿	成人精神保健研究部	栗山健一	番組内で行う検証実験についての意見 (電話取材)	日本テレビ「所さんの 目がテン」
H23. 1. 6	(株)安寿	成人精神保健研究部	栗山健一	インタビュー	日本テレビ「所さんの 目がテン」
H23. 1. 16	報道特集プロデューサー	成人精神保健研究部	福井裕輝	性犯罪被害者の治療や処遇について、福井室長活動や研究内容について	TBSテレビ 「報道特集」
H23. 1. 11	テンプル大学フェロー	精神薬理研究部	山田光彦	日本における自殺予防対策の情報収集のため	ミニ ドキュメンタリー
H23. 1. 26	(株)NHKエデュケーショナル	精神保健計画研究部/ 自殺予防総合対策センター	川野健治	「いじめ被害を親などに相談できない心理」「いじめられた人間が自殺に至る心理のメカニズム」などをインタビュー	NHK教育「となりの 子育て/子どもの自殺 予防 (仮題)」
H23. 1. 24	CJ VISION (KBS)	精神保健計画研究部/ 自殺予防総合対策センター	川野健治	自殺予防総合対策センター紹介、センターの役割についてインタビュー	KBS (韓国) 21時M ニュース報道企画
H23. 1. 13	中国新聞社報道部	成人精神保健研究部	金 吉晴	昨年7月、症原豪雨被害者への心のケア調査結果について、専門家の客観的評価を得るため (電話取材)	中国新聞本紙
H23. 2. 16	(株)太平社	薬物依存研究部/ 自殺予防総合対策センター	松本俊彦	「未成年飲酒、その心理的背景」 (仮タイトル)	NEWS&REPORTS Vo1. 16No. 3
H23. 2. 28	NPO法人里親支援のアン プロジェクト	薬物依存研究部/ 自殺予防総合対策センター	松本俊彦	「思春期の自傷行為について」	子どもの虐待防止の レンジネット (HP)
H23. 2. 16	読売新聞東京本社 立川支局	精神薬理研究部	稲垣正俊	発達障害に関する取材	読売新聞
H23. 2. 21	東京新聞生活部	精神保健計画研究部	赤澤正人	自殺とアルコールの関係、その予防について	東京新聞生活 ・くらし面
H23. 2. 21	共同通信社	心身医学研究部	小牧 元	摂食障害に関する研究について	全国各地の新聞、 TV局
H23. 2. 22	オランダ大使館科学技術部	精神薬理研究部 自殺予防総合対策センター	山田光彦 稲垣正俊	日本におけるうつ病や自殺の現状と新規診断法開発に関して情報を収集	オランダ大使館 科学技術部ポ ート

VI 平成 22 年度精神保健研究所取材一覧

取材日	取材元	取材対象		取材・撮影内容	番組名/掲載紙
H23. 2. 25	NHK報道局 科学文化部	自殺予防総合対策センター	竹島 正	境界性パーソナリティー障害をめぐる自殺予防・対策について	NHK総合 「クロス'アップ 現代」
H23. 2. 25	NHK国際放送局多言語展開部	自殺予防総合対策センター	竹島 正	H23. 3. 3 (木) ラジオ・ジャパン「アングル〜日本の自殺予防の取り組み」にて、海外に日本の取り組みを紹介	ラジオ・ジャパン「アングル〜日本の自殺予防の取り組み」
H23. 3. 2	日本経済新聞社	自殺予防総合対策センター	竹島 正	自殺の現状等について	日本経済新聞
H23. 3. 4	一般社団法人共同通信社	成人精神保健研究部	金 吉晴	ニュージーランド地震の被災者に懸念される心の問題や周囲の対応法について	全国の地方新聞
H23. 3. 10	NHK富山放送局	成人精神保健研究部	金 吉晴	地震被災者の「心のケア」のポイントについて	NHKニュース
H23. 3. 18	産経新聞社	成人精神保健研究部	金 吉晴	東日本大震災に対する、トラウマ、心のケアについて	産経新聞
H23. 3. 18	(株) 教育医事新聞社	成人精神保健研究部	金 吉晴	東日本大震災時におけるトラウマが子どもにおよぼす影響について	教育医事新聞
H23. 3. 24	IBC岩手放送	成人精神保健研究部	金 吉晴	東日本震災の被災者向け番組で災害のPTSDについて	ラジオ放送ワイド ステーション
H23. 3. 25	産経新聞社	成人精神保健研究部	栗山健一	被災者の不眠症対策	産経新聞
H23. 3. 25	フリー (週刊朝日嘱託)	成人精神保健研究部	栗山健一	災害時の睡眠のケアについて	週刊朝日
H23. 3. 28	朝日新聞社社会グループ	成人精神保健研究部	金 吉晴	東日本大震災の避難所などでの心のケアの取り組みについて	朝日新聞
H23. 3. 25	毎日新聞社	成人精神保健研究部	栗山健一	東日本大震災における不眠について	毎日新聞

Ⅶ 平成22年度 公的機関を中心とした常勤研究者の社会貢献より抜粋

研究者名	役職	機関	職務内容
加 我 牧 子	所長	内閣府	内閣府本府政策参与
加 我 牧 子	所長	厚生労働省社会・援護局 障害保健福祉部	発達障害者施策検討委員会
加 我 牧 子	所長	厚生労働省年金局	障害年金の認定（知的障害等）に関する専門家会合 委員
加 我 牧 子	所長	独)国立特別支援教育総合研究所	運営委員
加 我 牧 子	所長	財)日本障害者スポーツ協会	専門委員会医学委員
加 我 牧 子	所長	財)精神・神経科学振興財団	「自殺対策のための複合的介入法の開発に関する研究」 運営委員
竹 島 正	自殺予防総合対策センター長 /精神保健計画研究部長	内閣府	内閣府本府政策参与
竹 島 正	自殺予防総合対策センター長 /精神保健計画研究部長	内閣府自殺対策推進会議	オブザーバー
竹 島 正	自殺予防総合対策センター長 /精神保健計画研究部長	厚生労働省社会・援護局 障害保健福祉部 精神・障害保健課	自殺防止対策事業評価委員
竹 島 正	自殺予防総合対策センター長 /精神保健計画研究部長	厚生労働省社会・援護局 障害保健福祉部精神・障害課	地域自殺対策推進事業評価委員会
竹 島 正	自殺予防総合対策センター長 /精神保健計画研究部長	新潟県	新潟県自殺予防対策検討委員会
竹 島 正	自殺予防総合対策センター長 /精神保健計画研究部長	富山県厚生部	アドバイザー
竹 島 正	自殺予防総合対策センター長 /精神保健計画研究部長	船橋市	自殺対策連絡会議委員
竹 島 正	自殺予防総合対策センター長 /精神保健計画研究部長	墨田区	保健衛生関係付属機関委員
竹 島 正	自殺予防総合対策センター長 /精神保健計画研究部長	全国精神保健福祉連絡協議会	副会長
竹 島 正	自殺予防総合対策センター長 /精神保健計画研究部長	全国精神保健福祉相談員会	全国精神保健福祉相談員会相談役
竹 島 正	自殺予防総合対策センター長 /精神保健計画研究部長	財)社会福祉振興・試験センター	精神保健福祉士試験委員
竹 島 正	自殺予防総合対策センター長 /精神保健計画研究部長	Asia Australia Mental Health	International Advisory Council
松 本 俊 彦	自殺予防総合対策センター副センター長 /薬物依存研究部室長	内閣府共生社会政策	企画分析会議委員
松 本 俊 彦	自殺予防総合対策センター副センター長 /薬物依存研究部室長	内閣府共生社会政策青少年担当	薬物乱用防止戦略加速化プランワーキングチーム 有 識者ヒアリング参考人
松 本 俊 彦	自殺予防総合対策センター副センター長 /薬物依存研究部室長	厚生労働省医薬食品局	薬物中毒対策連絡会議委員及び再乱用防止対策講習 会 講師
松 本 俊 彦	自殺予防総合対策センター副センター長 /薬物依存研究部室長	厚生労働省社会・援護局	過量服薬対策ワーキングチーム検討委員
松 本 俊 彦	自殺予防総合対策センター副センター長 /薬物依存研究部室長	厚生労働省精神・障害福祉課	自殺・うつ病等プロジェクトチーム 向精神薬の処 方に関する有識者からのヒアリング参考人
松 本 俊 彦	自殺予防総合対策センター副センター長 /薬物依存研究部室長	文部科学省スポーツ・青少年局	薬物乱用防止広報啓発活動推進協力者会議 協力者
松 本 俊 彦	自殺予防総合対策センター副センター長 /薬物依存研究部室長	法務省保護局	薬物事犯者に対する保護観察に関する検討会メン バー
松 本 俊 彦	自殺予防総合対策センター副センター長 /薬物依存研究部室長	東京都立多摩総合精神保健福祉センター	薬物・アルコール等相談事業助言者
松 本 俊 彦	自殺予防総合対策センター副センター長 /薬物依存研究部室長	東京都多摩立川保健所	相談員
松 本 俊 彦	自殺予防総合対策センター副センター長 /薬物依存研究部室長	東京地方裁判所	東京地方裁判所登録精神保健判定医

Ⅶ 平成 22 年度 公的機関を中心とした常勤研究者の社会貢献より抜粋

研究者名	役職	機関	職務内容
松本 俊彦	自殺予防総合対策センター副センター長 ／薬物依存研究部室長	公立大学法人横浜市立大学医学部	非常勤講師
松本 俊彦	自殺予防総合対策センター副センター長 ／薬物依存研究部室長	世田谷区	自殺対策連絡協議会会長
立森 久照	精神保健計画研究部室長	財)医療経済研究・社会保険福祉協会 医療 経済研究機構	精神医療サービス資源の再配置に関する研究委員会 委員
立森 久照	精神保健計画研究部室長	日本医療政策機構市民医療協議会	がん政策情報センタープロジェクト外部評価委員
川野 健治	自殺予防総合対策センター室長	内閣府	自死遺族支援研修等事業実施検討会構成員
和田 清	薬物依存研究部長	厚生労働省社会・援護局	地域依存症対策推進モデル事業の評価に関する検討 委員
和田 清	薬物依存研究部長	厚生労働省医薬食品局	講習会講師
和田 清	薬物依存研究部長	厚生労働省医薬食品局	薬物中毒対策連絡協議会委員及び再乱用防止対策講習 会 講師
和田 清	薬物依存研究部 部長	厚生労働省医薬食品局	依存性薬物検討会メンバー
和田 清	薬物依存研究部 部長	厚生労働省医薬食品局	脱法ドラッグ対策のあり方に関する検討会メンバー
和田 清	薬物依存研究部 部長	厚生労働省医薬食品局	薬物再乱用防止資料編集委員会委員
和田 清	薬物依存研究部 部長	法務省保護局	薬物事犯者に対する保護観察に関する検討会メン バー
和田 清	薬物依存研究部 部長	東京都	薬物情報評価委員会委員
和田 清	薬物依存研究部 部長	独立行政法人医薬品医療機器総合機構	専門委員
船田 正彦	薬物依存研究部室長	星薬科大学	客員講師
船田 正彦	薬物依存研究部 室長	東京都	脱法ドラッグ専門調査委員会委員
船田 正彦	薬物依存研究部 室長	小平市	自生違法植物監視委員会専門委員
嶋根 卓也	薬物依存研究部研究員	津田塾大学	非常勤講師
嶋根 卓也	薬物依存研究部研究員	社)全国高等学校PT連合会	薬物乱用防止パンフレット編集委員
嶋根 卓也	薬物依存研究部 研究員	(社) 埼玉県薬剤師会	職能委員会委員
嶋根 卓也	薬物依存研究部 研究員	国立障害者リハビリテーションセンター学 院	非常勤講師
小牧 元	心身医学研究部長	九州大学医学部	非常勤講師
小牧 元	心身医学研究部長	東京大学医学部	非常勤講師
小牧 元	心身医学研究部長	女子美術大学	非常勤講師
小牧 元	心身医学研究部長	財)精神・神経科学振興財団	選考委員会委員
小牧 元	心身医学研究部長	中央労働災害防止協会	心理相談専門研修講師
菊地 裕絵	心身医学研究部室長	共立女子大学 共立女子短期大学	非常勤講師
神尾 陽子	児童・思春期精神保健研究部長	厚生労働省雇用均等・児童家庭局	子どもの心の診療拠点病院の整備に関する有識者会 議構成員
神尾 陽子	児童・思春期精神保健研究部長	厚生労働省	発達障害情報センター運営委員
神尾 陽子	児童・思春期精神保健研究部長	第21期日本学術会議臨床医学委員会	臨床研究分科会委員
神尾 陽子	児童・思春期精神保健研究部長	第21期日本学術会議臨床医学委員会	脳とこころ分科会委員

精神保健研究所年報 第24号

研究者名	役職	機関	職務内容
神尾陽子	児童・思春期精神保健研究部長	社)環境情報科学センター	エコチル調査プロトコル等策定ワーキンググループ委員
神尾陽子	児童・思春期精神保健研究部長	北多摩北部地域保健医療協議会	児童・思春期専門分科会委員
神尾陽子	児童・思春期精神保健研究部長	小平市	特別支援教育専門家委員
神尾陽子	児童・思春期精神保健研究部長	山梨大学連携大学院	客員教授
神尾陽子	児童・思春期精神保健研究部長	社)日本自閉症協会	研究部会員
神尾陽子	児童・思春期精神保健研究部長	社会福祉法人 横浜博萌会 子どもの虹情報研修センター	日本虐待・思春期問題情報研修センター運営委員
小山智典	児童・思春期精神保健研究部室長	田園調布学園大学	非常勤講師
金吉晴	成人精神保健研究部長	厚生労働省健康局	原爆体験者等健康意識調査報告書等に関する検討委員
金吉晴	成人精神保健研究部長	宇宙航空研究開発機構 有人宇宙環境利用ミッション本部	有人サポート委員会専門委員
金吉晴	成人精神保健研究部長	京都大学医学部	非常勤講師
金吉晴	成人精神保健研究部長	東京大学大学院医学系研究科長	非常勤講師
金吉晴	成人精神保健研究部長	東京医科歯科大学	非常勤講師
金吉晴	成人精神保健研究部部長	東京女子医科大学神経精神科	客員教授
金吉晴	成人精神保健研究部長	財)友愛福祉財団	HIV遺族実態調査検討会委員
中島聡美	成人精神保健研究部室長	財)友愛福祉財団	HIV遺族実態調査検討会委員
鈴木友理子	成人精神保健研究部室長	山形大学医学部	非常勤講師
山田光彦	精神薬理研究部長	昭和大学	兼任講師
伊藤弘人	社会精神保健研究部長	社)日本精神科病院協会	アドバイザーーボード委員
三島和夫	精神生理研究部長	秋田大学医学部	非常勤講師
三島和夫	精神生理研究部長	東京医科歯科大学	非常勤講師
三島和夫	精神生理研究部長	宇宙航空研究開発機構 有人宇宙環境利用 ミッション本部	国際宇宙ステーション・きぼう利用推進委員会 宇宙医学シナリオワーキンググループ委員
稲垣真澄	知的障害研究部長	厚生労働省	思春期精神保健研修事業企画委員会委員
稲垣真澄	知的障害研究部長	環境省総合環境政策局環境保健部	エコチル調査企画評価委員
稲垣真澄	知的障害研究部長	千葉大学大学院医学研究院	客員教授
稲垣真澄	知的障害研究部長	財)日本障害者スポーツ協会	専門委員会医学委員
軍司敦子	知的障害研究部室長	東京学芸大学	非常勤講師
軍司敦子	知的障害研究部室長	一般社団法人 日本臨床検査同学院	主任試験委員
井上祐紀	知的障害研究部室長	社会福祉法人 日本心身障害児協会 島田療 育センター	臨床指導
伊藤順一郎	社会復帰研究部部長	独)高齢・障害者雇用支援機構	外部評価委員会 職業リハビリテーション専門部会 委員

Ⅶ 平成 22 年度 公的機関を中心とした常勤研究者の社会貢献より抜粋

研究者名	役職	機関	職務内容
吉 田 光 爾	社会復帰相談部室長	日本社会事業大学	非常勤講師
吉 川 和 男	司法精神医学研究部長	東京医科歯科大学	非常勤講師
吉 川 和 男	司法精神医学研究部長	社)日本精神科病院協会	司法精神医療等人材養成研修企画委員会委員
岡 田 幸 之	司法精神医学研究部室長→部長	最高裁判所事務総局刑事局 刑事法研究会	刑事法研究会助言者
岡 田 幸 之	司法精神医学研究部室長→部長	司法研修所 刑事実務研究会	講師/助言者
岡 田 幸 之	司法精神医学研究部室長→部長	東京保護観察所立川支部	助言者
岡 田 幸 之	司法精神医学研究部室長→部長	日本弁護士連合会 責任能力プロジェクトチーム	助言者
岡 田 幸 之	司法精神医学研究部室長→部長	東京医科歯科大学	非常勤講師
菊 池 安 希 子	司法精神医学研究部室長	筑波大学大学院人間総合科学研究科	非常勤講師
菊 池 安 希 子	司法精神医学研究部室長	首都大学東京人間健康科学研究科	非常勤講師
安 藤 久 美 子	司法精神医学研究部室長	警視庁刑事部	捜査支援活動員
福 井 裕 輝	成人精神保健研究部室長 /司法精神医学研究部室長	京都大学医学部	非常勤講師

精神保健研究所年報 No.24 (通号 No.57) 2011

平成 23 年 8 月 31 日発行

編集責任者

加我 牧子

編集委員

金 吉晴

川野 健治

立森 久照

発行所

独立行政法人

国立精神・神経医療研究センター

精神保健研究所

〒187-8553

東京都小平市小川東町 4-1-1

(非売品)

電話 042 (341) 2711

印刷：(株) 東京アート印刷所
